

第IV章 出土した遺物

第1節 出土遺物の取り扱いについて

本地点からは、コンテナ箱にして約750箱の遺物が出土している。これは調査時に必要と判断された出土状況などの記録以外に、遺物の取り上げは行わなかった瓦の細片、礎石や石垣などに使用された石やその後込めに使用された割石、壁土、漆喰、炭化物、火山灰あるいは取り上げる際に崩壊するような一部の遺物を除外した出土遺物の総量である。この中には、胎質別に陶磁器・土器類、人形・ミニチュア、瓦、金属製品、石製品、木製品、骨角製品、ガラス製品、自然遺物等が含まれ、ここでは自然遺物を除く遺物について上記分類を行い、記述を行うこととする。出土量の多い陶磁器・土器類はさらに遺構別に遺構番号降順に、人形・ミニチュア、金属製品、石製品については検索が容易になるように下位分類を行ったうえでそれぞれ記載した。

実測図は、出土遺物全てを行うことは量的に不可能であり、本報告では出土遺構ごとにその年代や性格などを代表すると考えられる遺物を中心に、完形率、希少性などを含めて図化選択の判断とした。

遺物観察表は、本編総ページ数の関係で、一部掲載できなかった陶磁器・土器類を含めて全て添付のCD-ROMにxlsファイルにて、保存・記録している。

遺物写真は、掲載遺物各個について写真撮影を行い、これを1280×850ピクセルでjpegに圧縮し、添付のCD-ROMに保存・記録している。

なお、一部の項目の出土状況の詳細、総括、成果は『研究編』として後述しているので参照されたい。

第2節 陶磁器・土器類(IV-1～102図)

SU1 (IV-1図)

1は瀬戸・美濃系(JC)、2～4は肥前系磁器(JB)である。1は染付端反形碗でJC-1-dに分類される。呉須の部分に細かな気泡が多くみられ、やや盛り上がる。高台内には銘がみられる。2は染付丸碗形の環でJB-6-aに分類される。胎土は灰白色を呈し、呉須の発色もやや黒ずんでいる。高台がやや内傾する。畳付には砂粒が多く付着する。3は染付丸碗の蓋でJB-00-aに分類される。4は白磁の戸車でJB-35に分類される。側面は丁寧に磨かれ、端部は面取りされる。なお穴が開いている面の一方は、焼成時に付着したと考えられる砂粒が一面にみられる。

5～10は陶器である。5、6は碗である。5は京都・信楽系の腰が張る碗でTD-1-mに分類される。外面は灰釉と鉄釉が上下に掛け分けられ、畳付以外は全て施釉される。6は瀬戸・美濃系の灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。腰が張り、口縁はやや内傾する。7～9は土瓶の蓋でTZ-00-

eに分類される。7、9には鉄釉が、8には灰釉が施釉される。なお7、8には受け部内側に輪状の溶着痕がみられる。10は瀬戸・美濃系二合半徳利でTC-10-cに分類される。灰釉は浸け掛けされる。胴部には溶着痕と点彫りで「久〇」の釘書きがみられる。

11～16は土器である。11～13は皿である。11は底裏に左回転糸切り痕があるものでDZ-2-bに、12、13は同じく底裏に左回転の糸切り痕がみられるが、内外面に透明釉が施釉されたものでDZ-2-hに分類される。12、13の口唇部には灯心痕がみられる。14は土師質の涼炉でDZ-49に分類される。胎土は緻密で、肌色を呈す。ロクロ成形で、外面は丁寧にナデ調整される。底部には足を3個有する。胴部下端に雲形の開口部が1ヶ所みられる。口縁部と底部内面にはススが付着する。15は硬質瓦質丸火鉢でDZ-31-dに分類される。外面は磨かれ、回転工具状のもので斜格子状の模様を全面に施される。口縁部内側にはススが付着する。16は塩壺蓋でDZ-00-dに分類される。胎土は橙褐色を呈し、外面には指圧痕が数ヶ所みられる。

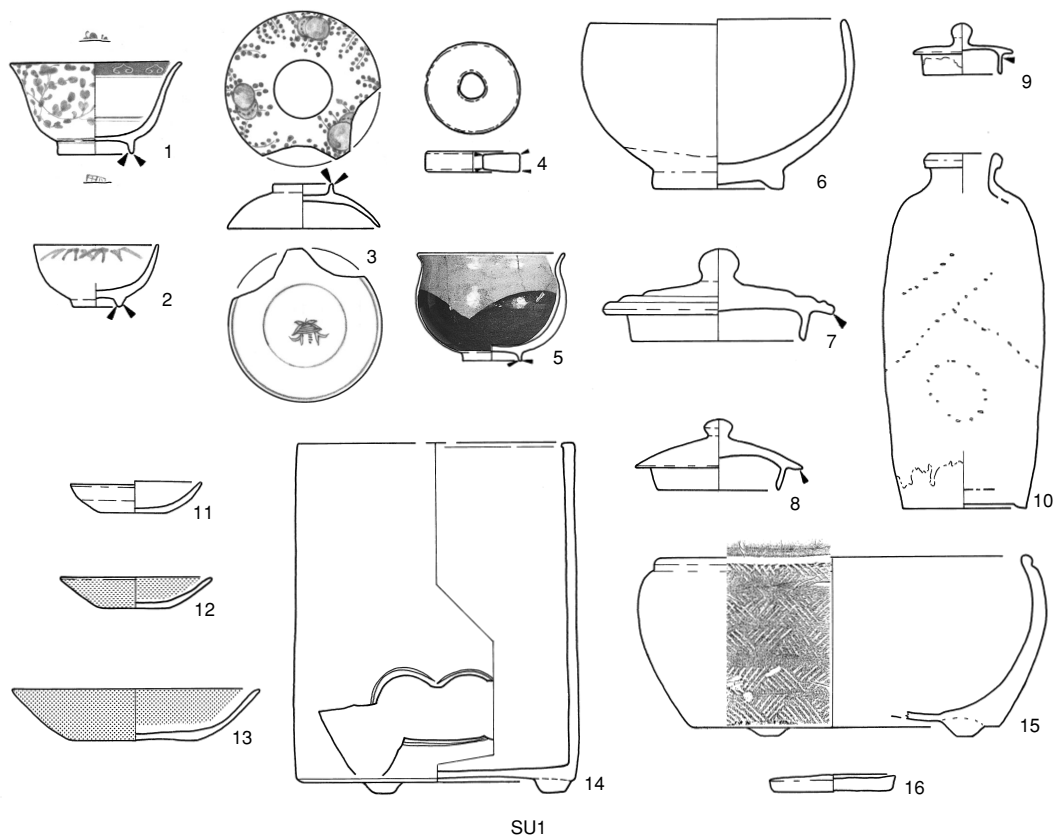
SU2 (IV-1・2図)

大半のものが被熱している。遺物の年代観から元禄16(1703)年の火災で被熱し、廃棄された遺物群と考えられる。

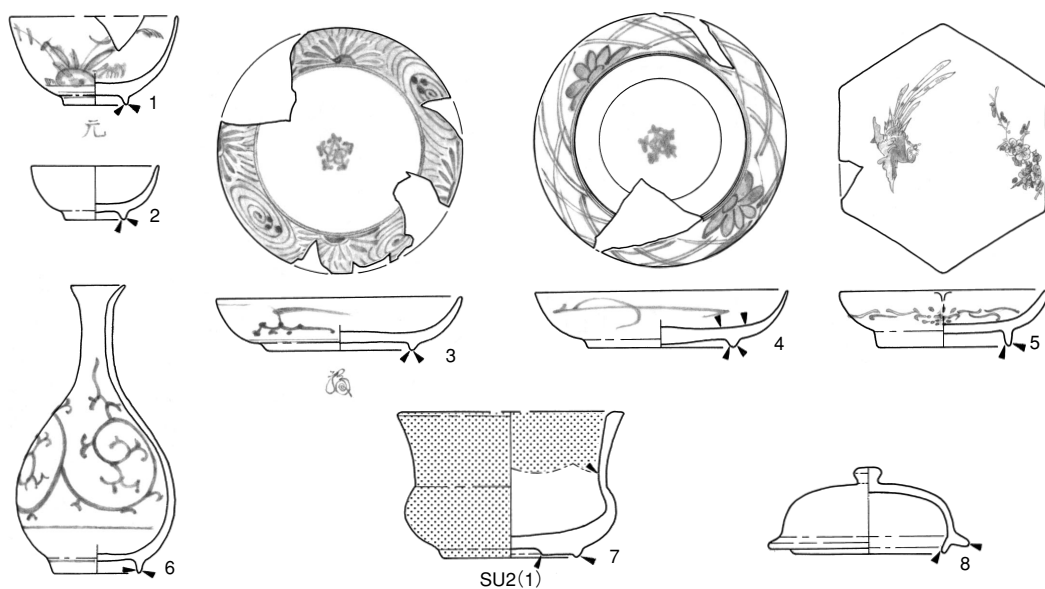
1～9はいずれも肥前系磁器(JB)である。1はくらわんか手の染付碗でJB-1-gに分類される。胎土は灰白色を呈し、呉須はやや黒ずむ。底部は厚い。高台内には「元」の銘がみられる。2は白磁の坏でJB-6-aに分類される。3～5は皿である。3はJB-2-eに分類される。絵付には手描き、墨弾き、コンニャク印判の3つの手法が用いられる。高台内に渦福銘がみられる。4は見込み蛇ノ目釉剥ぎされた染付皿でJB-2-mに分類される。釉剥ぎ部分全面に砂粒が付着する。絵付には手描きとコンニャク印判の手法が用いられる。5はいわゆる柿右衛門様式の色絵皿でJB-2-rに分類される。胎土は乳白色を呈す。体部は六角形を呈し、高台も貼付高台で六角形を呈する。内面には黒の細線と赤・緑・青・黄色を用いて鳳凰と梅枝が、裏文様には花唐草文の上絵付が施される。なお、同手の皿が本遺構から最小個体数で9個体確認されている。6はらつきょう形を呈す染付瓶でJB-10に分類される。口唇部は薄作りで、高台脇は面取りされる。なお、本遺構には6と同手別個体と思われる瓶がもう1個体あるが、その高台脇には面取りはみられない。7は青磁の香炉・火入れでJB-9-bに分類される。高台の露胎部分には鉄漿が施される。無釉の内面には輪状の溶着痕がみられる。8は白磁壺の蓋でJB-00-gに分類される。9は白磁壺でJB-15に分類される。8の身である可能性が高い。

10～14は陶器である。10は瀬戸・美濃系灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。畳付も含めて全体が施釉されるが、高台に砂粒などの付着物はみられない。11は黄色味を帯びた灰釉が施釉された瀬戸・美濃系片口鉢でTC-23-bに分類される。内面には直径1cmくらいの目跡が3個残る。被熱している。12は肥前系のいわゆる京焼風陶器の香炉・火入れでTB-9-bに分類される。無釉の内面と高台にはススが付着する。内面には輪状の溶着痕、高台内には2重の浅い沈線に「新」の刻印を有す。13は備前系瓶でTE-10-aに分類される。胴部には糸目がめぐるが、一部その上が窪んでいる。底部には浅い刻印を有す。14は甕でTZ-15に分類される。胎土は非常に緻密で、灰色を呈す。体部には内外面ともにロクロ目が顕著である。受け部と底部以外は全て施釉される。口縁下には幅広の外耳を2個有す。

第IV章 出土した遺物



SU1



SU2(1)

IV-1 図 SU1・SU2(1) 出土遺物

15は土師質角火鉢でDZ-31-eに分類される。胎土は橙褐色を呈し、内外面ともにナデ調整される。また外面には銀彩が施される。底部には二次的に被熱した痕跡が認められるほか、一部ススが付着する。

SK4 (IV-2 図)

1は高台断面形が三角形を呈する染付磁器皿でJB-2-cに分類される。高台高は高く、腰が張る。畳付には砂粒が付着する。全体的にやや大きめの貫入がみられる。高台内には一重枠の角福銘がみられる。

SU11 (IV-2～4 図)

3が肥前系磁器(JB)、他は全て瀬戸・美濃系磁器(JC)である。1、2は染付端反形碗でJC-1-dに分類される。2の口縁部の外反は極弱い。また呉須の発色はにぶい。3は染付鉢でJB-5-bに分類される。畳付の一部分に敲打痕状のものが確認される。高台内には線刻で「モ、セン」の釘書きがみられる。4は端反形碗の蓋でJC-00-bに分類される。呉須の発色は良好で、その中には小さな気泡が多数認められる。摘み内には銘を有す。

5～11は陶器である。5、6は碗である。5は京都・信楽系のいわゆる小杉茶碗でTD-1-dに分類される。高台内中央が小さく突出する。6は瀬戸・美濃系灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。高台内には直径3cm程度の輪状の溶着痕がみられ、畳付周辺にはススが付着する。7は柿釉が施釉された鍋でTZ-33-aに分類される。口縁部には紐状の把手が貼り付けられているが、欠損しているために確認できるのは1個のみである。底部には足が2個残る。8～11は瀬戸・美濃系の瓶である。8はいわゆる「ペコかん」徳利でTC-10-gに分類される。胴部2ヶ所及び無釉の底部中央に凹みがみられる。9は灰釉が施釉された二合半徳利でTC-10-cに分類される。胴部には点刻で「イ子」の釘書きがみられる。また胴部下端の無釉部分には「イ子や イ子や」の墨書があり、高台内にも「稲」の墨書がみられる。10は灰釉が施釉された五合徳利でTC-10-dに分類される。胴部には点刻で「一△」の釘書きがあり、口唇部には敲打痕がみられる。11は一升の灰釉徳利でTC-10-eに分類される。胴部には点刻で「○」に「天」の釘書きがあり、また胴部下端と底裏には墨書がみられる。

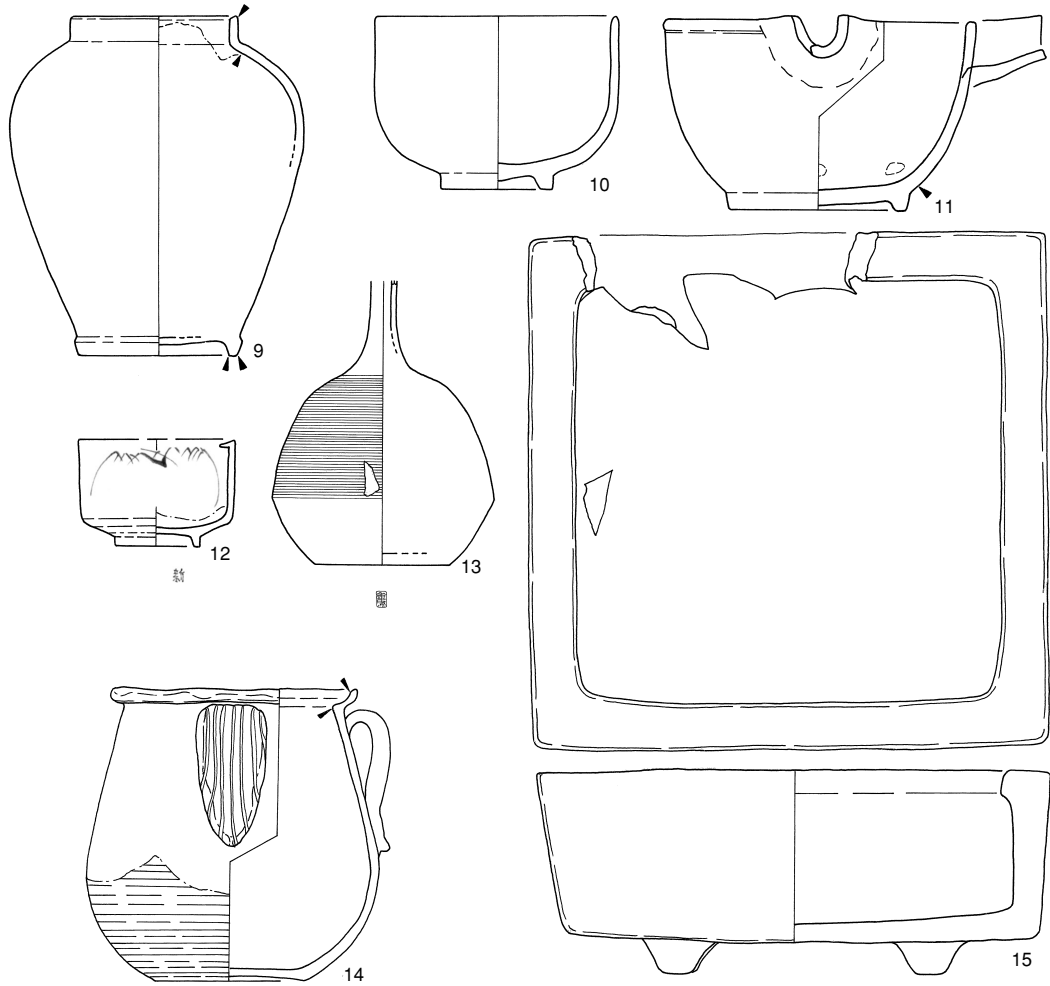
12～15は土器である。12は底裏には右回転糸切り痕がある皿でDZ-2-aに分類される。胎土は橙色を呈す。口縁部数ヶ所が指で押さえられ、緩やかな輪花状に成形される。見込みには墨で樹木のようなものが描かれている。13は土師質丸火鉢でDZ-31-aに分類される。外面はナデ調整されるが、底裏は縮緬状を呈す。底部には足を3個有するが、その周囲のみが強くナデられている。14はロクロ成形の塩壺でDZ-51-wに分類される。底部には左回転糸切り痕がみられる。15は土師質角火鉢でDZ-31-cに分類される。外面はナデ調整される。内面は被熱し、一部白色化している。

SK13 (IV-5 図)

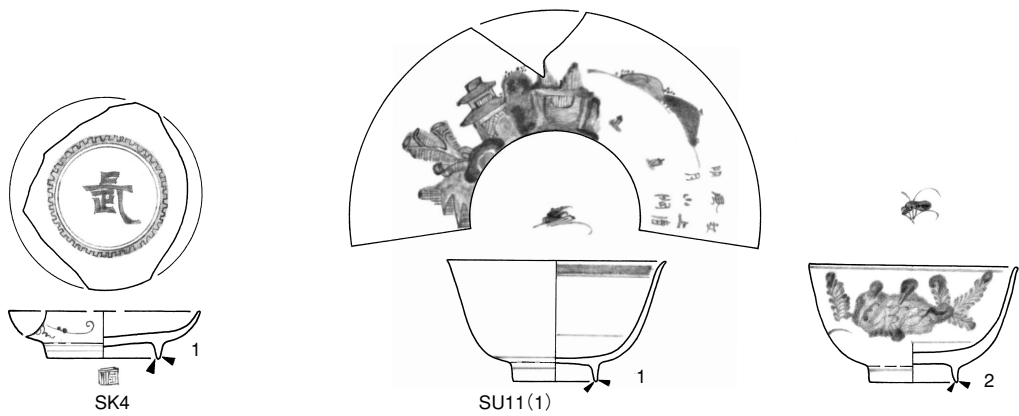
出土遺物の6、7割ほどが被熱している。遺物の年代観から元禄16(1703)年の火災で被熱したものと考えられる。

1、7は景德鎮窯系磁器(JA1)、2～6、10は肥前系磁器(JB)である。1～3は皿である。1、2は被熱している。1は青花皿でJA1-2に分類される。呉須の発色は非常に良い。高台内には砂粒

第IV章 出土した遺物



SU2(2)

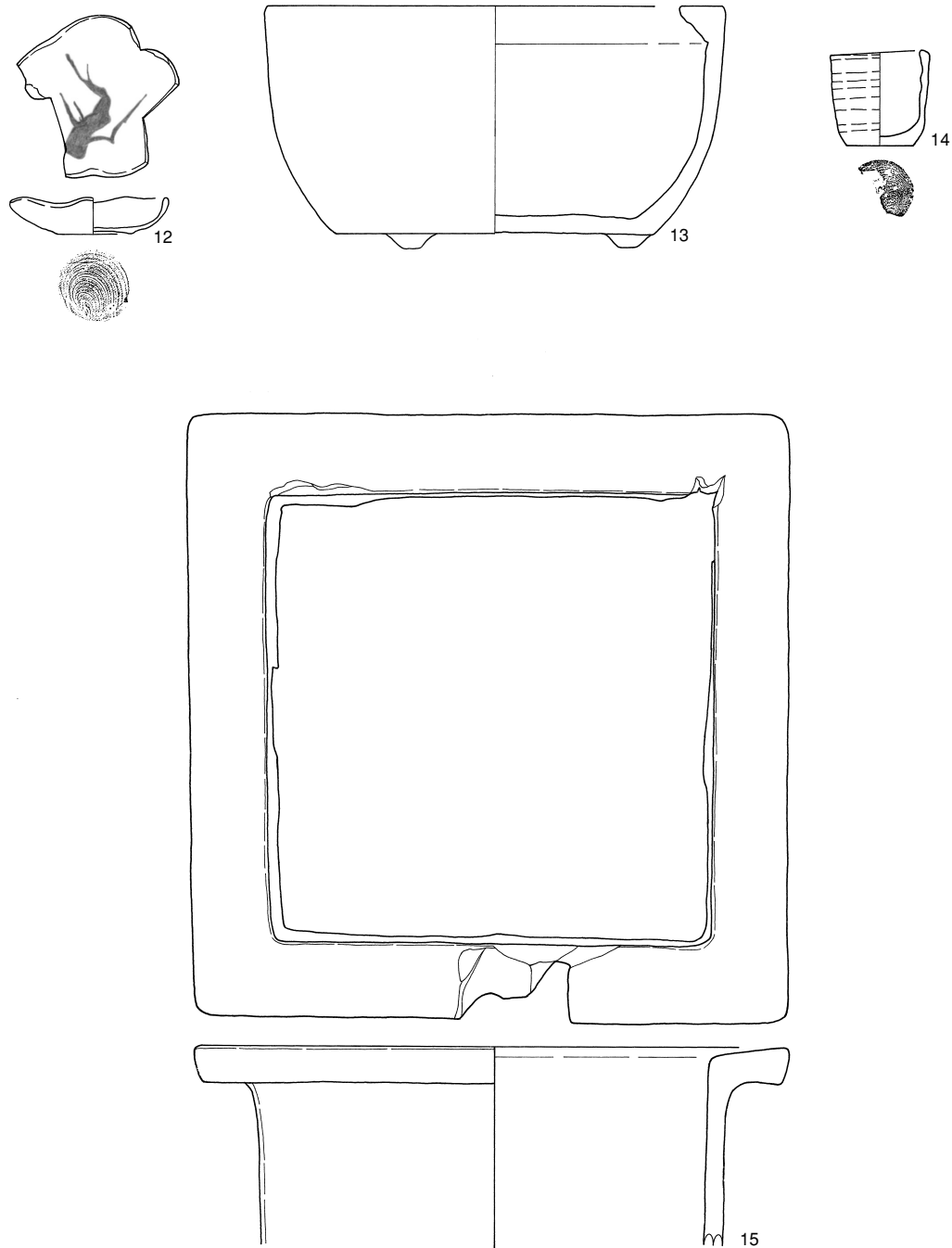


IV-2 図 SU2(2)・SK4・SU11(1) 出土遺物



IV-3 図 SU11 (2) 出土遺物

第IV章 出土した遺物



IV-4 図 SU11 (3) 出土遺物

が付着する。同手の皿が本遺構内に最小個体数で2個体確認されている。2は型打成形の青磁皿でJB-2-dに分類される。体部は楕円形を呈し、内面は細かな輪花状にされている。同手の皿が本遺構内に最小個体数で3個体確認されている。3は腰が張る白磁皿でJB-2-dに分類される。全体に器壁は薄く、口銹が施される。高台内には目跡が1個残る。4、10は白磁坏で、4はJB-6-a、10はJB-6に分類される。4の高台は高く、「ハ」の字に開き気味である。10は腰の張った丸碗形を呈するが、高台高が高く、高台径は口径に比して非常に小さい。被熱している。5は染付猪口でJB-7-bに分類される。被熱している。6は色絵の油壺でJB-12に分類される。胎土は灰白色を呈し、畳付には砂粒が付着する。被熱している。7は景德鎮窯系磁器の蓋でJA1-00に分類される。絵付は呉須と色絵具を併用して施されるが、それは蓋の内面にまで及ぶ。合子の蓋か？

8、9、11、12は陶器である。8、9は碗である。8は瀬戸・美濃系灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。畳付中央がわずかに窪み、底部は無釉である。9はTZ-1に分類される。胎土は比較的緻密で、黄白色を呈す。体部は直線的に開き、高台も外側に開き気味である。高台内中央はやや突出し、その周囲には縮れがみられる。高台以外は黄白色に濁った釉が施釉されたようであるが、被熱しているため判然としない。11は見込みに銹絵染付が施された京都・信楽系の皿でTD-2-cに分類される。高台断面はシャープな逆台形を呈し、畳付から高台内は無釉にされている。高台内中央には小さく浅い円形の削りがみられる。同手の皿が本遺構内に最小個体数で3個体あることが確認されている。12は灰釉に緑釉が流し掛けられた瀬戸・美濃系香炉・火入れてTC-9-aに分類される。口唇部の釉は拭き取られている。底部内面には直径4cmほどの輪状の溶着痕がみられる。被熱している。

13～16は土器である。13、14は底裏に左回転糸切り痕のある皿でDZ-2-bに分類される。ともに見込みはわずかに凹む。15は板作成形2ピースの塩壺で、「泉州麻生」の刻印を有す。DZ-51-iに分類される。底部の粘土塊は内側から外側に向かって押され、わずかに外側に飛び出ている。16は15の蓋でDZ-00-cに分類される。なお15、16は被熱している。

SK18 (IV-5～8図)

遺物群の様相より東大編年V a期に該当する遺構一括遺物である。磁器、陶器、土器の割合がほぼ1：1：1で構成されている。肥前系磁器 (JB) には碗、皿が多く、半球形碗 (1-f) やくらわんか手の碗 (1-g)、比較的上手の高台断面がU字状を呈する皿 (2-e) などがある。また磁器の碗、皿には、いわゆる揃い物が目立つのも本遺構の特徴である。陶器は碗と瓶が多い。碗には瀬戸・美濃系灰釉薄掛け碗 (TC-1-c) やいわゆる「御室碗」 (TC-1-d)、京都・信楽系半球形碗 (TD-1-b) や平碗 (TD-1-h) が多い。また瓶には瀬戸・美濃系の比較的ナデ肩の二合半徳利 (TC-10-a) や五合徳利 (TC-10-d) などが目立つ。土器 (DZ) は皿が7割近くを占める。

磁器 (1～27、29～33) いずれも肥前系磁器 (JB) である。1～8は染付碗である。1、6、7は、くらわんか手の碗でJB-1-gに分類される。いずれも胎土は灰白色を呈し、呉須の発色が悪い。また畳付には砂粒が付着する。1は手描きで一重網目文が染付された碗で、本遺構内に最小個体数で2個体確認されている。6の外面には二重網目文、内面には一重網目文が染付され、見込みには菊花文と思われるものがある。高台内には二重角枠に渦福銘がみられる。7は外面にコンニャク印判による文様が4単位めぐらされた碗で、本遺構内に最小個体数で2個体確認されている。2、

4はJB-1-eに分類される。2の体部は腰張り気味にほぼ垂直に立ち上がる。器壁は全体に薄作りである。外面には手描きの草花文がみられるが、呉須はやや滲じむ。4は底径が口径に比して小さく、高台も低い。コンニャク印判による絵付が施されるが、呉須は灰色味を帯びている。また口鏽も施される。高台内にはかなり崩れた「大明年製」銘がみられる。3、5は半球形薄手碗でJB-1-fに分類される。3はやや青味を帯びる。また高台内には二重角枠の渦福銘がみられる。8はJB-1-vに分類される。外面には手描きで梅樹文が描かれる。底部はかなり厚く、また畳付部分から高台脇にまで砂粒が密に付着する。高台内には「大明年製」銘がみられるが、その文字は崩れて一本線に近いものになっている。なお、8は本遺構内に最小個体数で2個体確認されている。9、19、20、23、24は坏である。23は白磁で、それ以外には染付が施される。9、20は丸碗形の坏でJB-6-a、19は端反形の坏でJB-6-b、23、24は半球形の坏でJB-6-fに分類される。10～16は皿である。14は青磁で、他は染付が施される。12、14はJB-2-fに、それ以外はJB-2-eに分類される。11の胎土は灰白色を呈し、器面も灰色味を帯びる。見込みにはコンニャク印判による五弁花文、側面には扇面文と唐草文が手描きされる。高台内にはかなり崩れた「大明年製」銘のほか、ハリ支え痕が1個残る。12、14は口縁が輪花に成形された深めの皿である。12の高台内には二重角枠の渦福銘がみられる。14は本遺構内に最小個体数で2個体確認されている。15は口径10cm前後と小振り、しかもやや浅い皿である。見込みにはコンニャク印判による五弁花文と花唐草文、高台内にはかなり崩れた「大明年製」銘がみられる。16は体部が八角形に型打成形された皿で、口鏽が施される。見込みの染付は型紙摺によるもので、全体的に呉須は滲じむ。高台内には「福」の行書体と思われる銘がみられる。17、18は鉢である。17はJB-5-b、18はJB-5に分類される。17の外面には凹凸がみられる。見込みにはコンニャク印判による五弁花文がみられる。呉須の発色は灰色味を帯び、畳付には砂粒が付着する。21、22はミニチュアの染付碗でJB-61に分類される。25は染付猪口でJB-7-bに分類される。見込みはわずかに浅く窪んでいる。高台内には「大明年製」銘がみられる。25は本遺構内には最小個体数で5個確認されている。26、29は染付蓋物である。26は体部が丸碗形を呈するものでJB-13-aに分類される。高台は低く、断面がシャープな三角形を呈す。高台内には浅い沈線が一周する。29は体部が筒形を呈するものでJB-13-bに分類される。底部には白い砂粒状のものが多く付着する。27は色絵の合子でJB-18-aに分類される。高台は円盤状を呈し、無釉にされている。30は蓋物の蓋でJB-00-fに分類される。31は染付油壺でJB-12に分類される。胎土は灰白色を呈し、呉須の発色は黒ずむ。畳付には砂粒が付着する。32は白磁の仏飯器でJB-8-cに分類される。碗形の体部はやや内傾して立ち上がる。釉は浸け掛けされ、脚部には無釉の部分がみられる。33は水滴でJB-19に分類される。断面形状は蒲鉾形を呈する。型作りで、表面には陽刻がみられ、その上には薄瑠璃釉が施釉される。この水滴は縦置きに焼成されたらしく、一方の側面が無釉にされ、部分的に砂粒が付着する。

陶器(28、34～51) 28は灰釉が施釉された京都・信楽系合子でTD-18-aに分類される。34～42は碗である。34は肥前系のいわゆる京焼風陶器碗でTB-1-bに分類される。畳付の幅が狭い。高台内には刻印を有するが、判読できない。35、37は瀬戸・美濃系のいわゆる御室碗でTC-1-dに分類される。ともに外面には染付が施される。35の胎土は比較的緻密で灰白色を呈し、器面には緑味を帯びた灰釉が施釉される。底部無釉である。37の胎土はやや粗く、白色を呈す。器

面には、やや黄色味を帯びた灰釉が施釉され、高台脇まで及ぶ。36は瀬戸・美濃系灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。口縁部がわずかに膨らむ。高台は無釉である。38は瀬戸・美濃系端反形碗でTC-1に分類される。高台は外側に「ハ」の字状に開き、畳付幅はやや広い。高台内は丁寧になでられアーチ状にされている。全体に黄色味を帯びた灰釉が施釉されるが、底部は無釉である。なお、畳付一面にススが付着する。39は京都・信楽系半筒形碗でTD-1-iに分類される。高台脇は面取りされ、高台内中央に小さい円形の浅い削り込みがみられる。体部には白土と鉄絵具で絵付が施される。見込みには目跡が3個残る。40は京都・信楽系の半球形碗でTD-1-bに分類される。器壁は薄く、高台断面はきれいな逆台形を呈す。体部には金・緑・青色を用いて、笹と梅の文様が上絵付される。なお39同様、高台内に小さい円形の浅い削り込みがみられる。41は京都・信楽系平碗でTD-1-hに分類される。畳付を除き、黄色味を帯びた灰釉が施釉される。42は京都・信楽系碗でTD-1-lに分類される。胎土は軟質で、橙褐色土を呈す。高台は蛇ノ目高台を呈す。高台内以外、幅広い畳付も含め施釉される。43は肥前系鉢でTB-5-aに分類される。見込みは蛇ノ目釉剥ぎされ、その部分には輪状の溶着痕がみられる。高台脇は小さく面取りされる。44は瀬戸・美濃系二耳壺でTC-15に分類される。被熱している。45は灰釉が施釉された瀬戸・美濃系片口鉢でTC-23-bに分類される。見込みには直径1cm前後の目跡が4個残る。46は堺挿鉢でTL-29に分類される。底部は輪高台状にされ、高台内には焼台の痕跡がみられる。挿目は9条1単位で施される。47～50は瀬戸・美濃系瓶である。47は二合半の灰釉徳利でTC-10-aに分類される。口唇部は鐔状に折り曲げられる。胴部はラッキョウ形を呈し、ベタ書きの釘書きが2ヶ所にみられる。48～50は五合徳利でTC-10-dに分類される。いずれも頸部が比較的長く、肩部には圈線が数条めぐる。器面には鉛色に近い灰釉が施釉され、うのふ釉が流し掛けられる。49以外は胴部にベタ書きの釘書きがみられる。なお48の先端には炭化した木栓が残り、中には酸化した物質が認められた。分析した結果、それは金属石鹼と呼ばれるものに近い物質であることが確認された(研究編参照)。51は志戸呂系の皿でTF-2に分類される。口唇部には灯心痕がみられる。

土器(52～66) 52～60は皿である。57～60には口縁部に灯心痕がみられる。52～54、56、57は底裏に左回転糸切り痕がある皿でDZ-2-bに分類される。52は胎土が均質ではなく、淡い肌色を呈する。全体的に器壁は厚い。体部はやや内湾し、底部脇が緩やかに括れる。見込みは凹凸が著しい。53は器高がやや低く、体部は直線的に立ち上がる。底部と体部の境には明確な稜がみられる。底部は被熱し、円形に赤色化している。また墨書で「中」とある。54は器壁が全体的に薄く、口縁部がわずかに内湾する。見込みは弱く盛り上がり、底部と体部の境の溝状の凹みが顕著である。56、57の体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに内湾している。57の体部内側には緩やかな凹凸がみられる。55は底裏に同心円状の沈線がみられる磨きかわらけでDZ-2-cに分類される。ただしミガキ調整されているのは外面のみで、内面はナデ調整される。58は底裏に右回転糸切り痕がある皿でDZ-2-aに分類される。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部全体が被熱し、円形に赤色化している。59、60はDZ-2に分類される。59は体部が直線的に立ち上がり、見込みの底部と体部の境の溝状の凹みが比較的顕著である。60も体部は直線的に立ち上がるが、口縁部はやや内湾する。底部脇は5mm幅ぐらいでケズリ・ナデ調整される。61、64は蓋である。61は土師質火消し壺の蓋でDZ-00-hに分類される。外面は横方向にケズリ

調整され、内面には墨書がみられる。64は塩壺の蓋でDZ-00-cに分類される。内面には細かい布目がみられる。62は土師質丸底ほうろくでDZ-47-aに分類される。体部はやや外側に開き気味に立ち上がり、器高は高い。底部と体部の境にはやや段がつく。内面は同心円状になでられるが、その中央は横方向になでられる。団子状の内耳を3個有する。内面と口縁部外側にススが付着する。63は土師質の風炉でDZ-31-hに分類される。胎土はにぶい橙色を呈し、口縁部にはU字状の大きなスリットを1ヶ所有する。底部には足が2個残る。内面はナデ、外面はミガキ調整されるが、口縁部とスリット部分は特に丁寧にミガキ調整されている。口縁部にはススとタール状のものが付着する。65、66は塩壺である。65は板作成形で、「大上々」の刻印を有する。DZ-51-sに分類される。胎土は橙褐色を呈し、金雲母を含む。内面にはやや粗い布目がみられる。底裏は雑になでられ、中央は窪む。66は板作成形2ピースの塩壺で「泉湊伊織」の刻印を有する。DZ-51-gに分類される。内面と口縁部外側にススが付着する。内面にはやや粗い布目痕が残る。また底部の粘土塊は外側から押され、底裏には指圧痕がある。

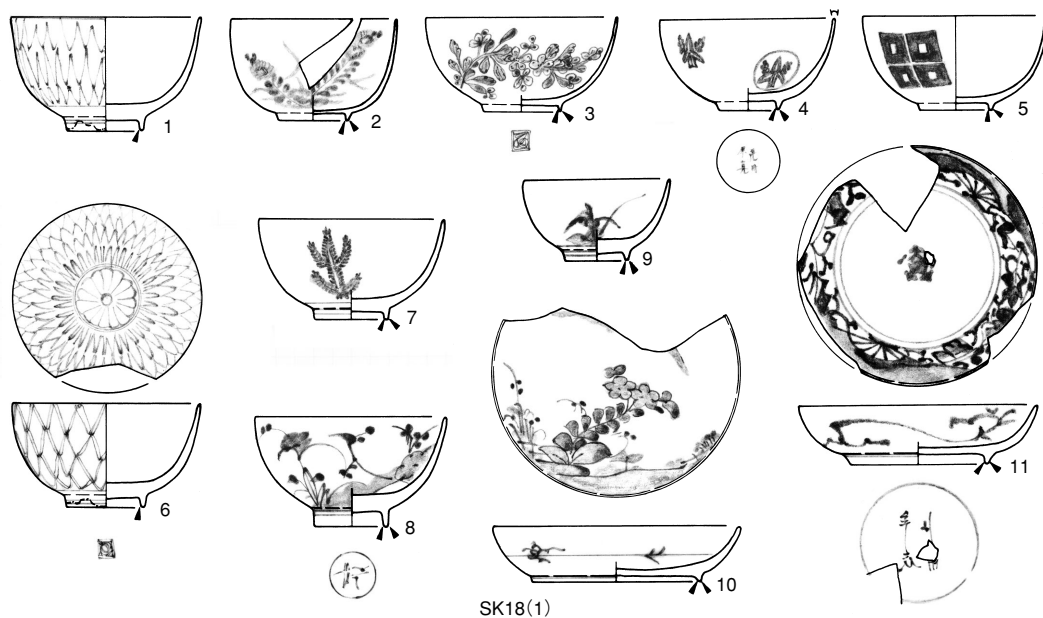
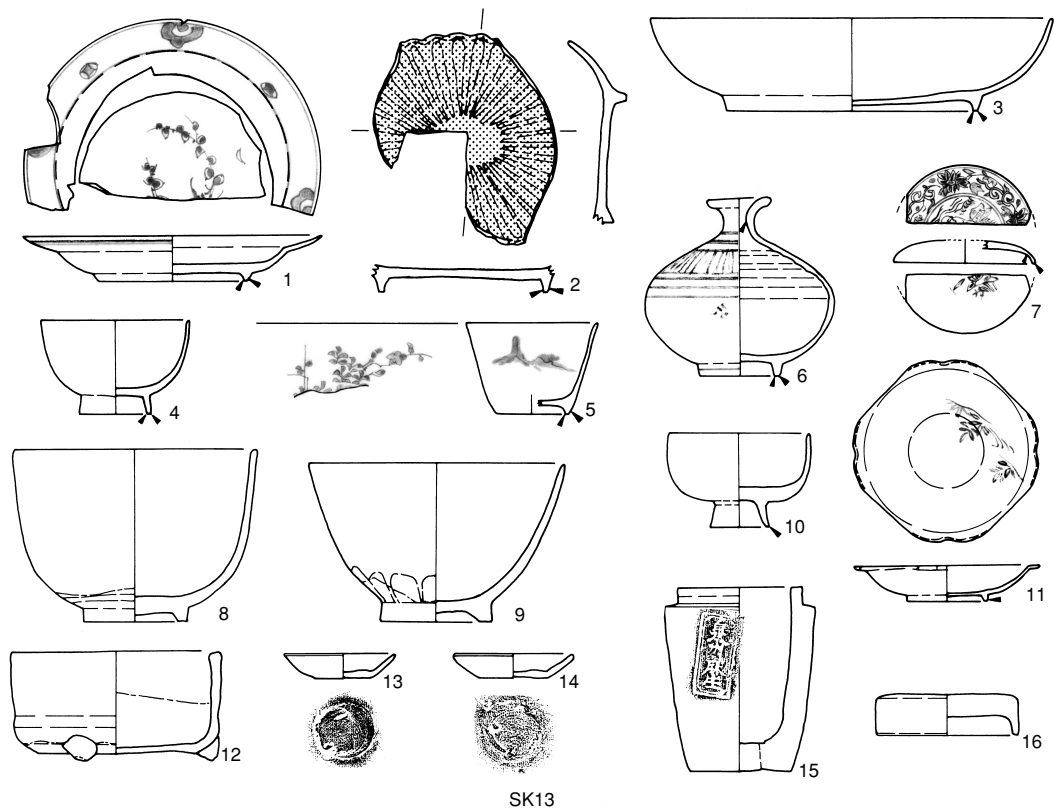
SU20 (IV-9・10 図)

東大編年V a期に該当する遺構一括遺物である。

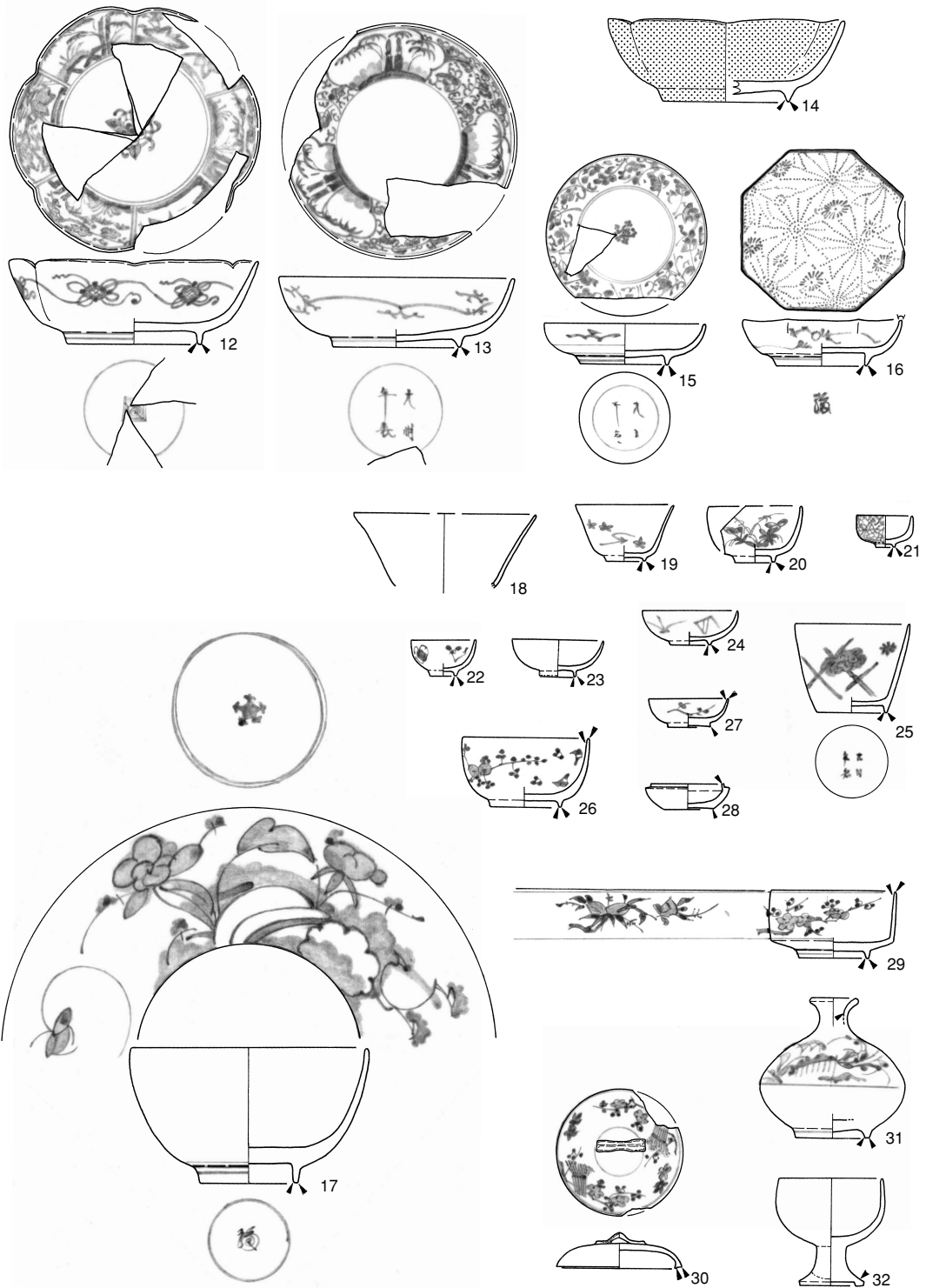
1～9は肥前系磁器(JB)である。1～3は染付碗である。1、2はJB-1-eに分類される。ともに呉須の発色は灰色味を帯びる。2の模様はコンニャク印判によるものである。畳付には白色細砂粒が付着する。3は半球形碗でJB-1-fに分類される。内外面に氷裂文がみられる。4～6は染付皿である。呉須の発色が灰色味を帯びる。4は見込み蛇ノ目釉剥ぎされた皿でJB-2-kに分類される。底部は無釉である。釉剥ぎ部分には細かい砂粒が多く付着する。5、6はJB-2-eに分類される。5は器壁がやや厚く、絵付も雑である。口鏽が施される。見込みにはコンニャク印判による五弁花文がみられる。高台内の銘は崩れていて判読できない。6は器壁が薄く、口縁部はわずかながらヒダ状に成形される。絵付は比較的丁寧に、見込みの五弁花文は手描きによるものである。高台内には「寿」の字の銘がみられる。7は染付油壺でJB-12に分類される。呉須はやや黒ずみ、畳付には砂粒が付着する。8は染付丸碗形蓋物でJB-13-aに分類される。高台内にはハリ支え痕5個と、二重角枠の渦福銘がみられる。9は染付鉢でJB-5-bに分類される。高台断面形は非常にシャープなU字状を呈すが、畳付幅は一定ではない。口縁部内側に四方襷文がめぐり、その下に松竹梅が三方に配されたものであったらしい。高台内には二重角枠の渦福銘がみられる。

10～15は陶器である。10～13は碗である。10は瀬戸・美濃系のいわゆる御室碗でTC-1-dに分類される。体部の相対する2ヶ所に染付が施されるが、呉須の発色が悪く模様が判然としない。底部無釉である。11は瀬戸・美濃系灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。底部無釉である。12は京都・信楽系半筒形碗でTD-1-iに分類される。外面には鏽絵染付の笹文がみられる。見込みには目跡が3個残る。13は京都・信楽系の色絵半球形碗でTD-1-bに分類される。色絵には緑、青、赤、金の4色が用いられる。14、15は堺系播鉢でTL-29に分類される。ともに口縁部には扇形の刻印を有す。14の外面にはヘラケズリ痕が残る。播目は13条1単位で施される。15の底部は輪高台状にされる。播目は14条1単位で施され、見込みにはクロスパターンによる播目がみられる。

16～26は土器である。16～20は皿である。16、17は底裏に右回転糸切り痕のある皿でDZ-2-aに分類される。胎土はともに肌色を呈す。16の見込みは膨らんでいるが、その中央はやや凹

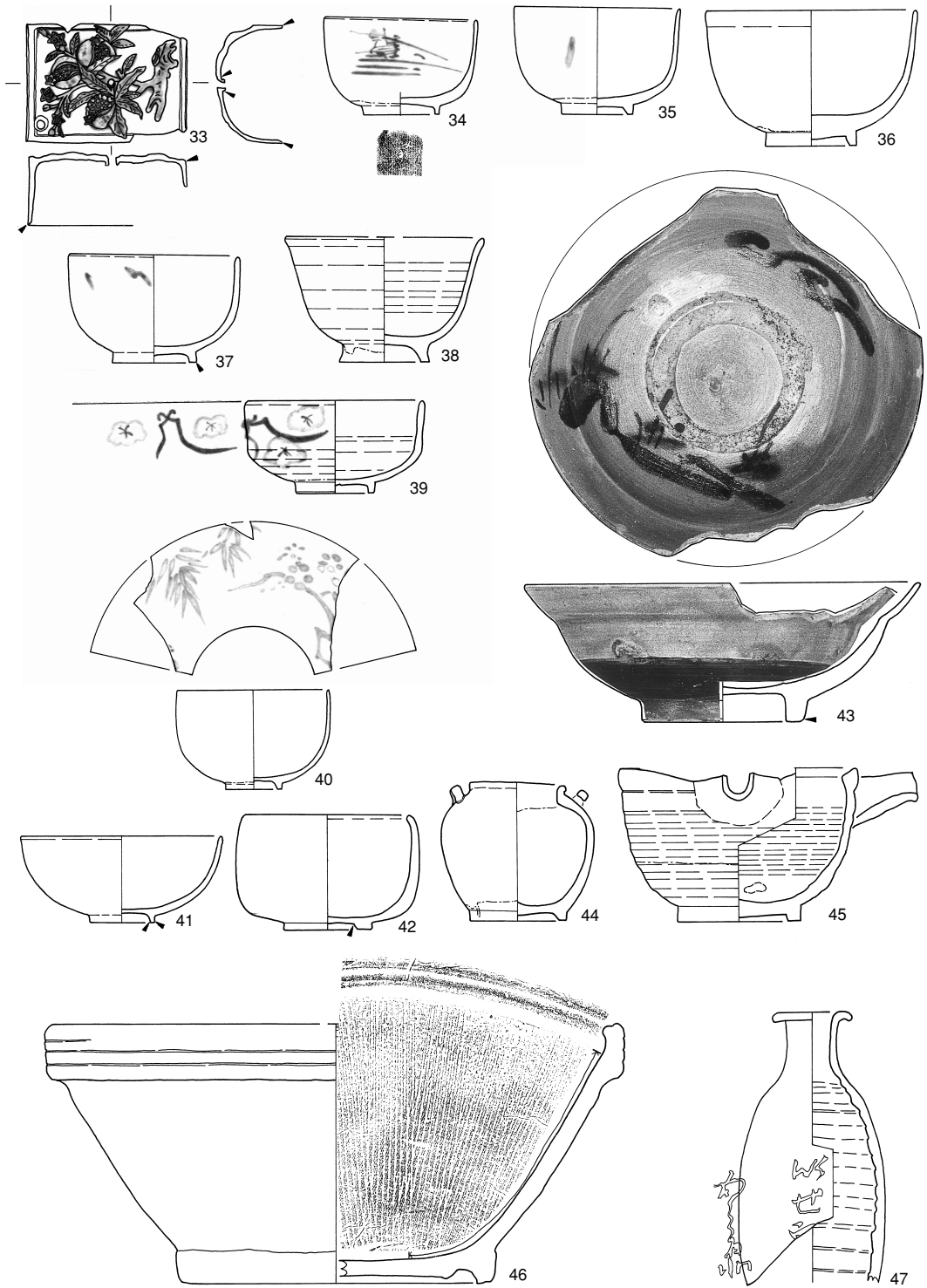


IV-5図 SK13・SK18(1)出土遺物



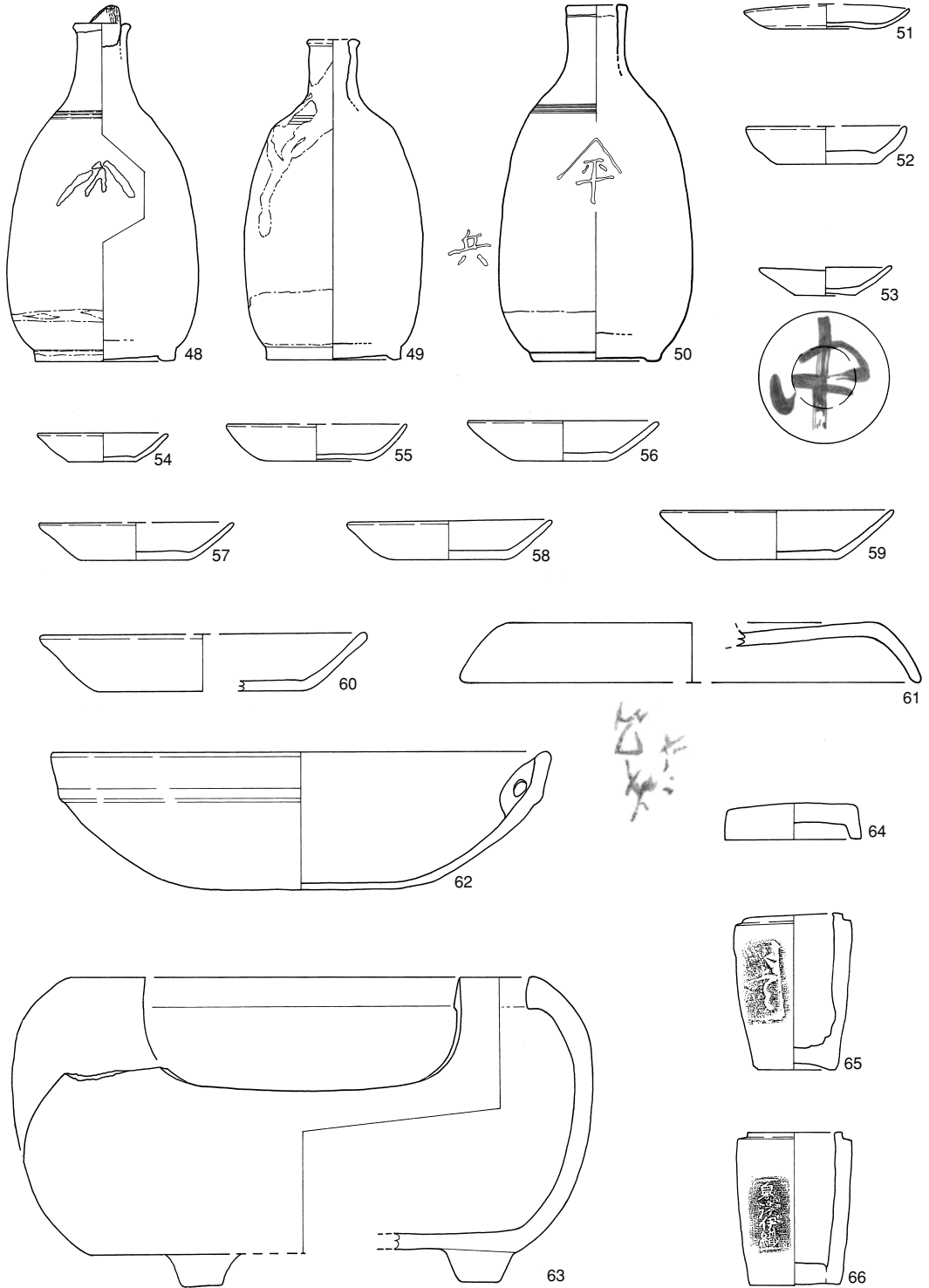
IV-6 図 SK18 (2) 出土遺物

第IV章 出土した遺物



IV-7 図 SK18 (3) 出土遺物

第IV章 出土した遺物



IV-8 図 SK18 (4) 出土遺物

む。17の体部は弱く括れ、口縁部はやや被厚する。外面は回転ナデ調整されるが、生乾きの時に縦方向になでられた痕跡もみられる。18～20は底裏に左回転糸切り痕のある皿でDZ-2-bに分類される。胎土はいずれにもぶい橙色を呈す。18の見込みはやや膨らみ、底部と体部の境の溝状の凹みが顕著である。見込み中央は凹む。底部には墨書がみられる。19の底部はやや突出している。口縁部全体に灯心痕が厚く残る。20の外面の回転ナデ調整はやや粗く、体部には弱い凹凸が残る。口縁部には1部分だけ灯心痕がみられる。21は土師質丸底ほうろくでDZ-47-aに分類される。胎土は橙褐色を呈し、底部内外面は煤けている。なお内面には○のついた刻印を有すが、その大部分は欠損している。22、23は土師質丸火鉢でDZ-31-aに分類される。22の内面はナデ調整、外面はミガキ調整される。口唇部には敲打痕がみられ、内面には底部から6cmほど上の位置にススのラインが一周する。23は内外面ともにナデ調整される。24は塩壺の蓋でDZ-00-cに分類される。表には径2.5cmの浅い圏線、裏にはやや粗い布目がみられる。25、26は塩壺である。25は「泉川麻玉」の刻印のあるものでDZ-51-mに、26は「泉湊伊織」の刻印のあるものでDZ-51-gに分類される。ともに板作成形2ピースで、底部には粘土塊が外側から詰められる。なお25の底裏には指頭痕と思われる凹みがみられる。

SK21 (IV-11 図)

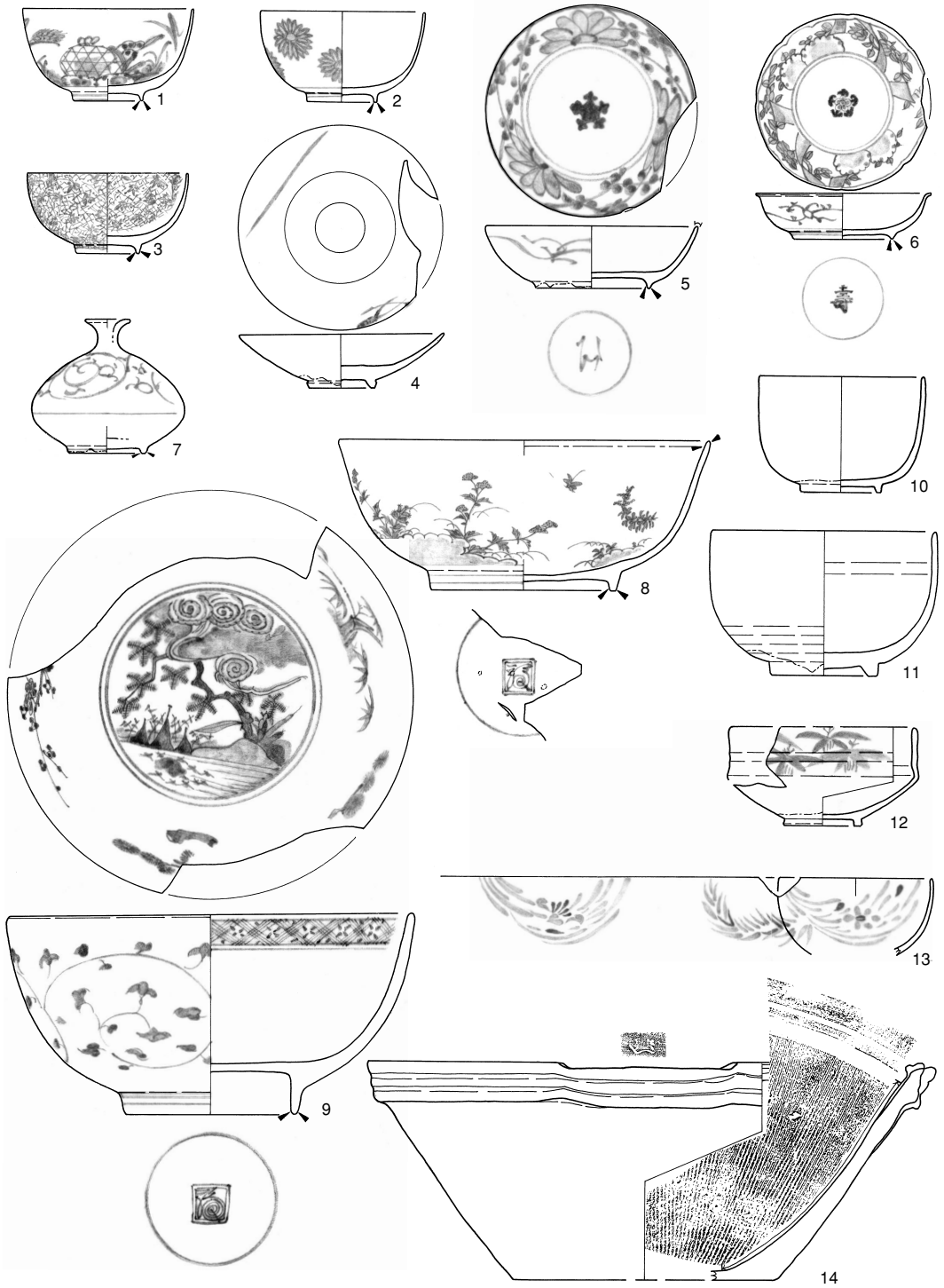
1～5は磁器である。4が瀬戸・美濃系磁器(JC)、それ以外は全て肥前系磁器(JB)である。1は染付碗でJB-1-eに分類される。破片の接合面と同じ部分に焼継ぎ痕跡が認められる。2は染付皿でJB-2-qに分類される。見込みには、線描とダミの濃淡による草花文と蝶の絵付が施される。3、4は蓋である。3は染付蓋物の蓋でJB-00-fに分類される。呉須の色はやや黒ずみ、摘みは橋状を呈す。4は染付端反形碗の蓋でJC-00-bに分類される。裏側には「道光年製」銘がみられる。5はやや腰の張る染付蓋物でJB-13に分類される。畳付にはわずかに白色砂粒が付着する。

6～8は陶器である。6は瀬戸・美濃系のいわゆる汁次でTC-27-bに分類される。外面には柿釉が施釉され、底部は無釉である。内面には薄く錆釉が施釉される。底裏に輪状の溶着痕がみられる。7は軟質施釉陶器の小鉢である。胎土はにぶい橙色を呈し、白い小石が多く含まれる。底裏および外面下半分ほどはロクロ成形後にケズリ調整され、底部を除く内外面に錆釉が施釉される。口縁部には表面にキザミが入る把手を1個有する。内面には白い付着物がみられる。TZ-5に分類される。8は灰釉が掛け掛けされた瀬戸・美濃系二合半徳利でTC-10-cに分類される。胴部中央には溶着痕が1ヶ所みられる。底部には「久○」、また高台脇には「久○たまり」(?)の墨書がみられる。胴部にも点刻で「久○」の釘書きがみられる。

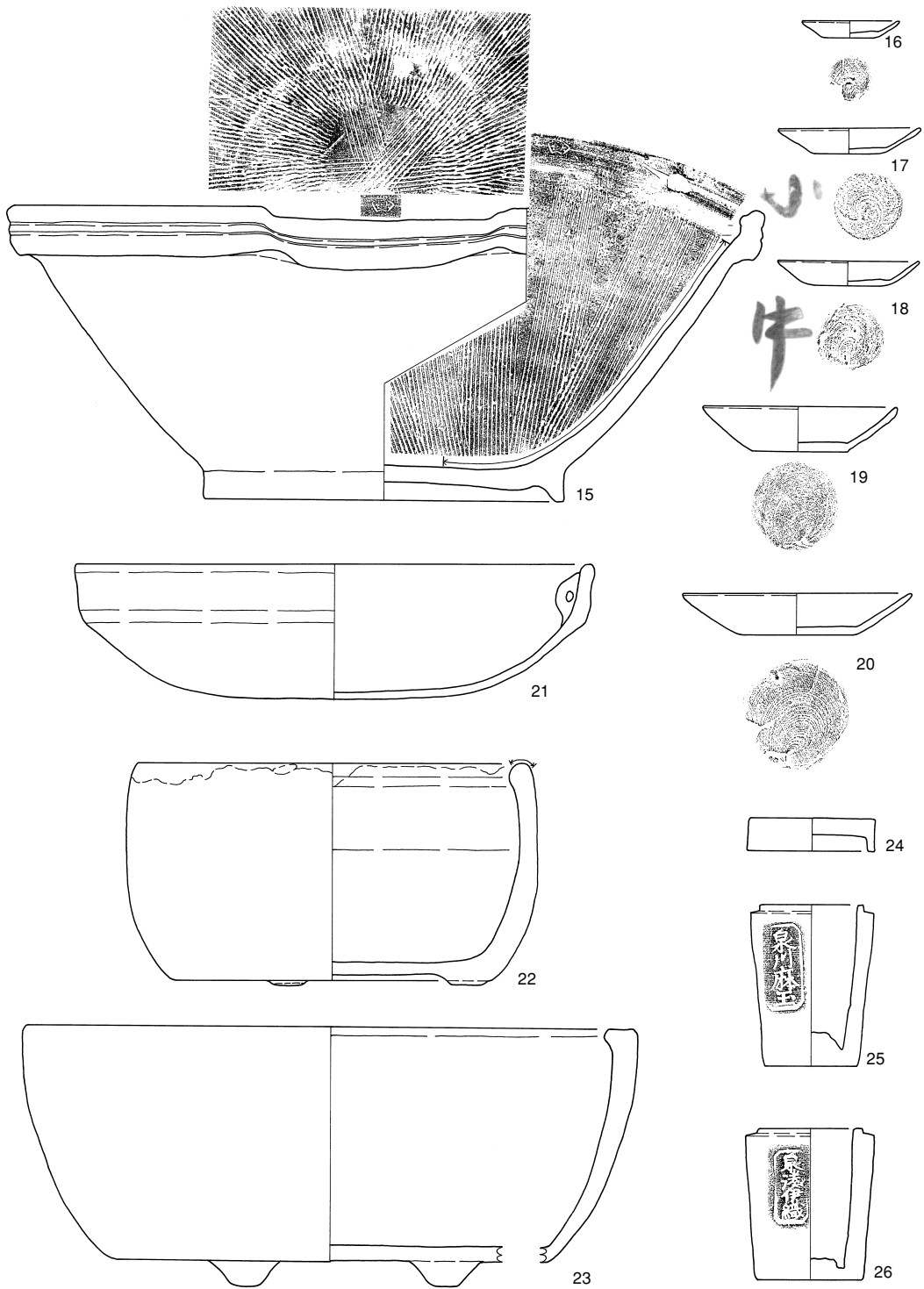
9、10は土器である。9は油受け皿でDZ-40-b、10は皿でDZ-2-hに分類される。胎土はともに橙褐色を呈し、表面に透明釉が施釉される。また底裏には左回転糸切り痕がみられる。9の受け部には浅いU字状のスリットが1ヶ所ある。10の口縁部にはわずかにススが付着する。

SK22 (IV-11 図)

1～3、5は肥前系磁器(JB)である。1～3、5は染付碗である。1はいわゆる小広東碗でJB-1-iに分類される。表面には粗い貫入が多く認められる。高台はシャープなU字状を呈す。2はくらか手の碗でJB-1-gに分類される。胎土は灰色味を帯び、釉は生掛けされる。高台内には銘らしきものがみられるが、欠損のため判読できない。3はいわゆる小丸碗でJB-1-jに分類される。見込



IV-9 図 SU20 (1) 出土遺物



IV-10 図 SU20 (2) 出土遺物

みには二重圏線内に環状松竹梅文がみられ、口縁部内側には四方禪文がめぐる。5は筒形碗でJB-1-1に分類される。胎土は灰色味を帯び、釉は生掛けされ呉須の発色も悪い。高台は低く、やや「ハ」の字状に開く。畳付の整形は雑で、白色の砂粒も付着する。見込みにはコンニャク印判による五弁花文がみられる。

4、6～8は陶器である。4、6、7は瀬戸・美濃系の碗である。4はいわゆる太白手の丸碗でTC-1-hに分類される。胎土はやや粗く、白色を呈す。器面には大きな貫入がみられる。呉須はにぶい淡青色を呈す。6は半球形碗でTC-1-mに分類される。高台脇は面取りされるが、畳付は丸味を帯びている。外面には鉄絵で木の枝のようなものがワンポイント施されるが、その大半が欠損しており全体の意匠は不明である。7は灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。口縁部がやや内湾する。畳付は局部的に面取りされる。8は常滑系の甕でTG-15に分類される。胎土は赤橙色で白い小石を多く含む。内面全体に黄白色の付着物がみられる。

9は塩壺でDZ-51-wに分類される。ロクロ成形で、底裏には左回転糸切り痕が残る。

SK23 (IV-12 図)

1、2は肥前系磁器 (JB) である。1は染付皿でJB-2-eに分類される。胎土は灰色味を帯び、呉須は黒ずむ。畳付には砂粒が付着する。見込みには引っ掻いたような細かなキズが顕著にみられる。2は青磁染付筒形碗でJB-1-1に分類される。高台は正円ではなく、畳付幅も均一ではない。口縁部内側には四方禪文、見込みには手描きで五弁花文が描かれている。

3は瀬戸・美濃系陶器の灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。腰が張り、口縁部はやや内湾する。

4は土師質丸火鉢でDZ-31-aに分類される。胎土は赤橙色を呈す。底裏を除く外面は、ケズリ調整後、丁寧にナゲ調整される。底部の足は全て欠損しているが、その痕跡は2ヶ所に確認できる。胴部と底裏には墨書がみられるが、欠損しているために完全には判読できない。底裏の墨書は「寶□」。

SU24 (IV-12 図)

1は京都・信楽系陶器の色絵半球形碗でTD-1-bに分類される。胎土はきめ細かく黄白色を呈し、表面には細かい貫入が認められる。畳付脇は面取りされる。外面には緑色で植物の葉のようなものと、赤色で「井」のようなものが上絵付される。また見込みには目跡が1個残るが、その目跡を隠すように青色の絵具で上絵付した痕跡がみられる。

2は底裏に左回転糸切り痕がある土器皿でDZ-2-bに分類される。胎土は橙褐色で、細かな石が多く含まれる。またその中に雲母も若干みられる。体部はやや外側に開き気味に立ち上がる。口縁部の一部分に灯心痕が付着する。

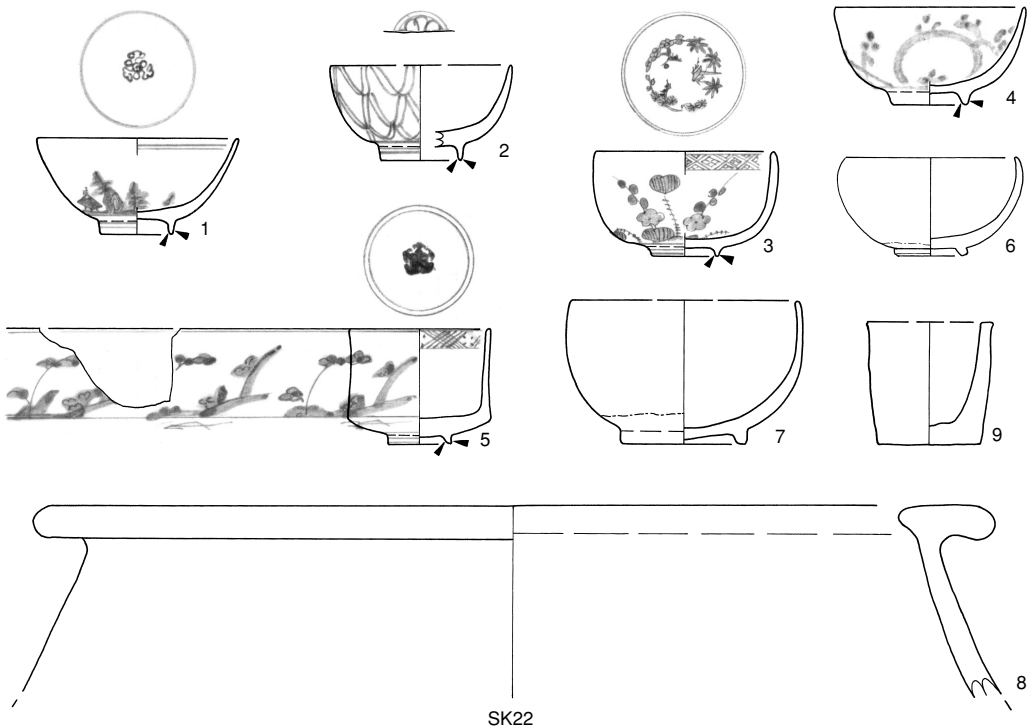
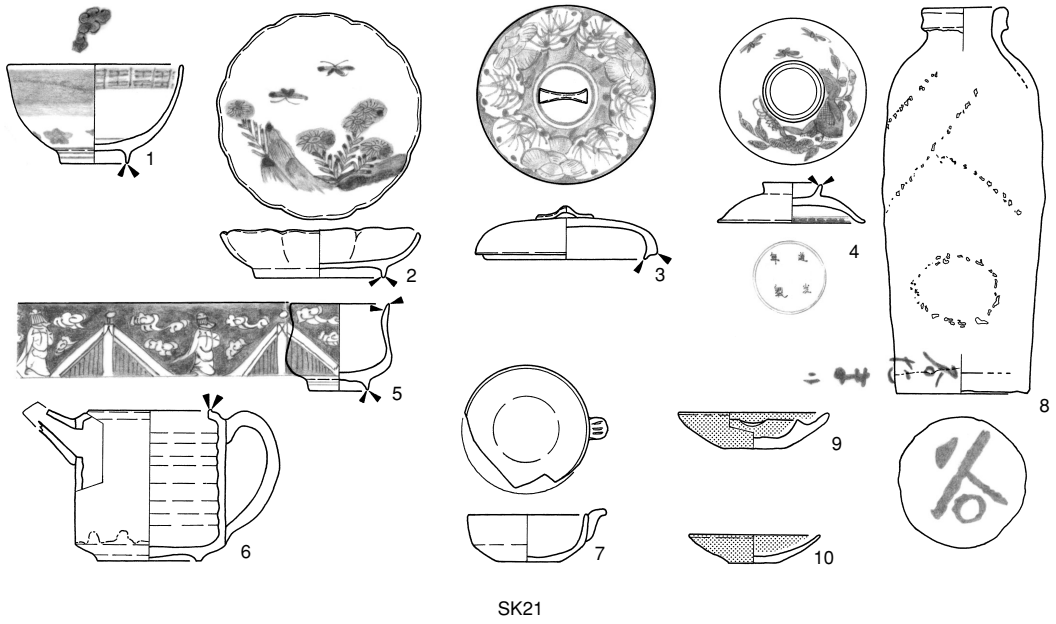
SK25 (IV-12 図)

1は京都・信楽系陶器の半筒形碗でTD-1-iに分類される。畳付はわずかに面取りされる。体部の屈曲する部分の稜はシャープである。外面に鉄絵がワンポイント施される。見込みは一部欠損しているが、目跡が2個残る。また高台内にはわずかに墨書の痕跡が残る。

SK26 (IV-12 図)

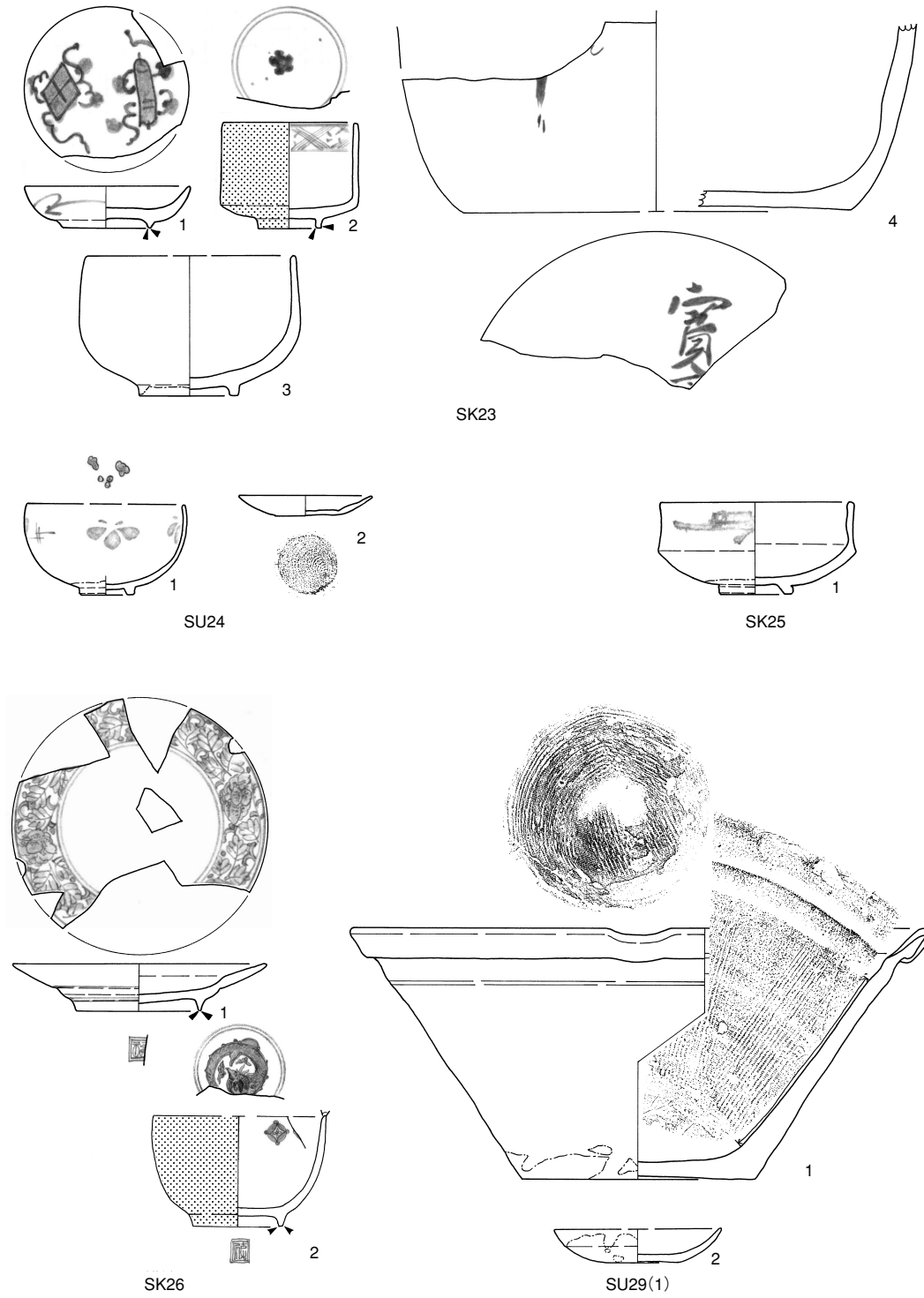
1、2ともに肥前系磁器 (JB) である。1は高台断面が三角形を呈する染付皿でJB-2-cに分類さ

第IV章 出土した遺物



IV-11 図 SK21・SK22 出土遺物

第IV章 出土した遺物



IV-12 図 SK23・SU24・SK25・SK26・SU29(1) 出土遺物

れる。体部は外側へ大きく開き、口縁部はわずかに鏝状を呈す。高台内には二重角枠内に「福」の銘がみられる。畳付には白い砂粒が付着する。2は青磁染付鉢でJB-5-bに分類される。口錆が施され、見込みには二重圏線の中に団龍文、口縁部内側には七宝文がともに精緻な筆使いで描かれている。高台内には二重角枠内に変形字の銘がみられる。

SU29 (IV-12・13 図)

1～3は陶器である。1は瀬戸・美濃系播鉢でTC-29に分類される。胎土は黄白色を呈し、全面に錆釉が施釉される。口縁部は外側に折り返され、体部に密着した縁帯を呈す。口縁部にはごく浅いU字状の注口を有する。底裏には右回転の糸切り痕と楕円形の砂目が4個残る。播目は18条1単位で、見込みには同心円に「二」の字を描くように施される。なお見込み付近の釉はかなり摩滅しており、使用頻度が窺われる。2は志戸呂系の皿でTF-2に分類される。胎土は赤褐色で白い砂粒がやや多く含まれている。内外面の口縁部付近のみ施釉される。見込みにはタール状のもの、口縁部にはススが付着する。灯明皿として使用されたものか。3は瀬戸・美濃系灰釉鉢でTC-5-iに分類される。内面には緑釉が流し掛けられ、見込みには数条の圏線と印花文がみられる。

4は土師質丸火鉢でDZ-31-aに分類される。胎土は橙褐色を呈す。底部には足を3個有す。口縁部から体部外面にかけて丁寧にミガキ調整される。ただし内外面とも底部周辺には指圧痕やケズリ調整の痕跡が残る。底部内側はわずかに煤けている。

SU34 (IV-13・14 図)

1、4～6は肥前系磁器 (JB) である。1は染付碗でJB-1-gに分類される。くらわんか手の碗で、胎土は灰色を呈し、器壁は厚い。内面には一重網目文、外面には二重網目文がみられるが、呉須の発色は悪く、やや黒ずむ。高台内には二重角枠の渦福銘を有するが、かなり崩れたものである。4は青磁の香炉・火入れでJB-9-cに分類される。底部には雲形に成形された足が3個と輪高台状の露胎部を有するが、露胎部には砂粒が付着する。胴部外面には陽刻で縦しのぎが、雲形の足の部分には陰刻で四方嚮が施される。底部内面には輪状の溶着痕がみられる。5、6は腰が張った染付皿でJB-2-eに分類される。ともに高台内には、一重圏線の中にかなり崩れた「大明年製」銘がみられる。5の胎土は白色である。絵付には線描、コンニャク印判、墨弾きと複数の手法が用いられる。畳付に白色の砂粒が付着する。6の胎土はやや灰色味を帯び、呉須の発色は黒ずむ。やや深めの皿で、底裏には高台を削り出した際のカンナ痕が残る。

2、3、7～15は陶器である。2、3、8は碗である。2は瀬戸・美濃系のいわゆる御室碗でTC-1-dに分類される。胎土は比較的緻密で乳白色を呈する。体部2ヶ所に呉須で山水文が絵付されるが、かなり崩れたものである。3は瀬戸・美濃系灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。胎土はやや粗く灰色を呈す。口縁部に敲打痕がみられることから、火入れに転用された可能性もある。8は肥前系のいわゆる京焼風陶器の平碗でTB-1-cに分類される。黄白色の緻密な胎土を有し、表面には細かい貫入が多くみられる。高台内には二重円圈の上に「柴」の刻印を有す。7は瀬戸・美濃系のいわゆる御深井皿でTC-2-eに分類される。胎土は比較的緻密で灰色を呈す。高台断面は幅広いU字状を呈す。畳付以外はやや青味がかかった灰釉が施釉され、見込みには呉須で梅と松葉の摺絵が施される。9は瀬戸・美濃系播鉢でTC-29に分類される。口縁部は折り返されておらず、口縁端部は角張っている。外面はケズリ調整されるが、底裏は未調整で右回転糸切り痕がみられる。また

底部内外面に四角い砂目が4個残る。播目は18条1単位で、見込みには半円と放射状の播目が3単位施される。10は爛鍋で、身がTZ-17、蓋がTZ-00-nに分類される。11は瀬戸・美濃系片鉢でTC-23-bに分類される。体部は丸碗形を呈し、ロクロ成形された注口を有する。口縁部はやや内傾する。底部以外には黄色味が帯びた灰釉が施釉される。見込みには直径約1cmの目跡が2個残る。被熱している。12は瀬戸・美濃系の二耳壺でTC-15に分類される。外面には、やや黄色味を帯びた灰釉が施釉される。口唇部端部の釉は拭われていることから、蓋付きであったと思われる。13は鉋状の摘みを有する蓋でTC-00-eに分類される。表面にはやや緑味を帯びた灰釉が施釉される。裏側には一部ススが付着する。14、15は瓶である。14は志戸呂系の瓶でTF-10に分類される。被熱しているが、頸部と肩部との境がやや凹み、最大径は肩部にある。高台脇はケズリ調整される。15は瀬戸・美濃系五合徳利でTC-10-dに分類される。口唇部は小さく折り返され、肩部には圏線が数条みられる。最大径は胴部中位にあり、釣鐘形を呈す。高台はやや深く削り込まれている。外面は鉛釉が施釉され、頸部から肩部にかけてうのふ釉が流し掛けられる。なお高台周辺の釉は拭き取られるが、畳付部分には溶着痕がみられる。また高台内中央は円形に鉛釉が拭き残される。胴部にはベタ書きの「い」の字の釘書きがみられる。

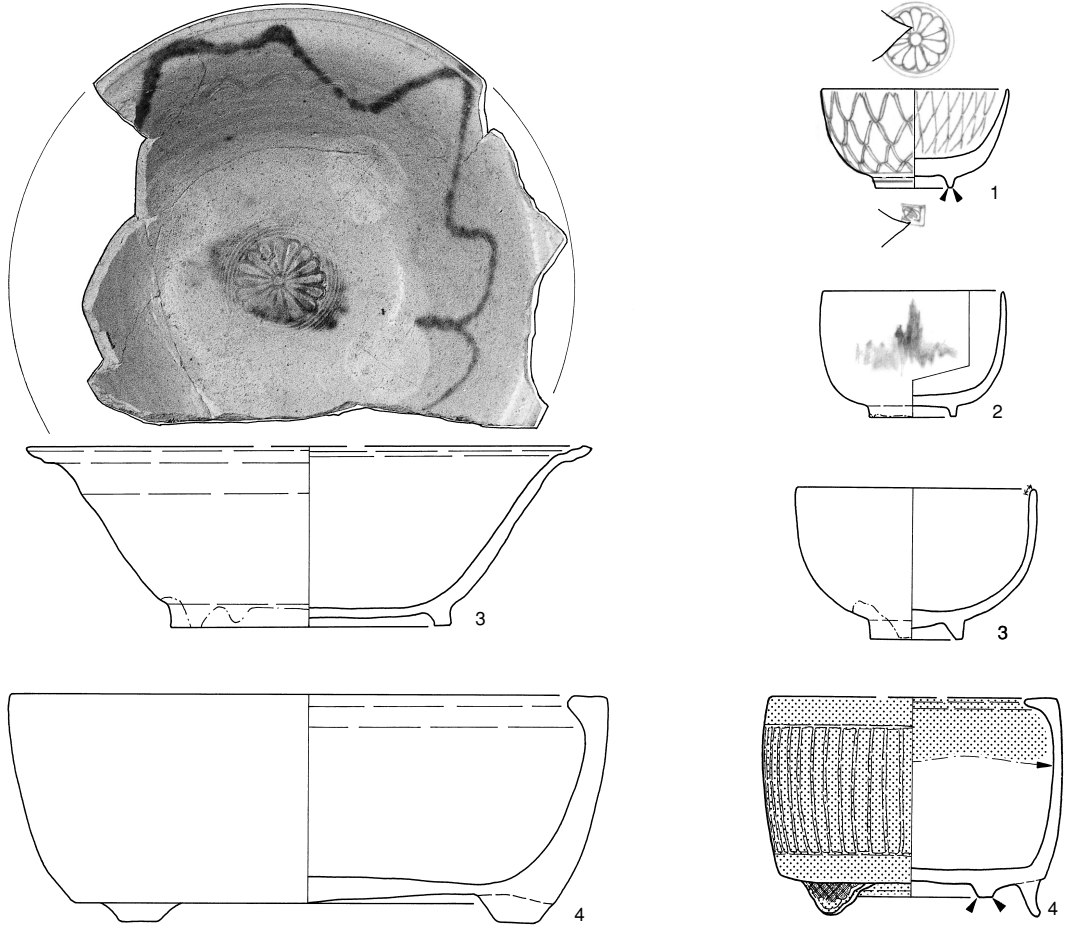
16、17は土器である。16は底裏に左回転系切り痕がある皿でDZ-2-bに分類される。胎土は橙褐色を呈す。見込みの底部と体部の境は浅い溝状に窪む。被熱している。17は瓦燈の蓋でDZ-45に分類される。胎土は橙褐色を呈し、外面に銀彩が施される。肩部上方に円孔が3個と、それに向かい合う形で1個穿孔される。頂部の油皿の口唇部は端部が小さく削られ、平らにされている。

SK36 (IV-14・15 図)

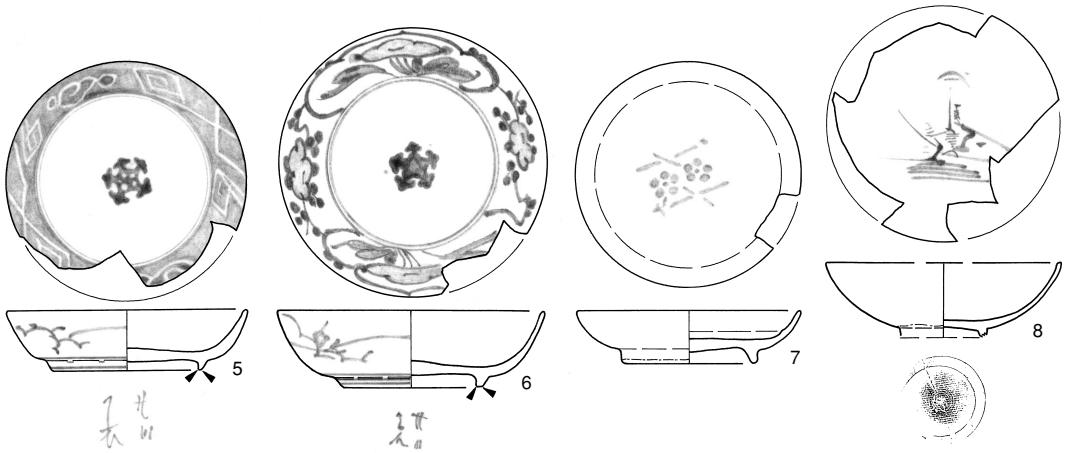
1、2は陶器である。1は肥前系灰釉皿でTB-2-eに分類される。皿の中央は非常に薄く作られ、見込み及び畳付には各々3個の胎土目が残る。2は瀬戸・美濃系端反碗でTC-1に分類される。底部は非常に厚く、高台内中央はわずかに突出している。全体に施釉されるが、幅広の畳付の釉は丁寧に拭き取られる。3、4は底裏に右回転系切り痕がある土器皿でDZ-2-aに分類される。胎土はともに肌色を呈するが、3の方は雲母や白い小石などがやや多い。3の口縁はわずかに外反する。見込み中央はわずかに窪む。外面にはススが付着する。4は体部外面に凹凸が残る。

SU38 (IV-15 図)

1は全面に灰釉が施釉された瀬戸・美濃系陶器の鉢でTC-5に分類される。胎土は比較的堅緻で、灰色味を帯びた白色を呈す。体部はやや外側へ開きながら低く立ち上がる。底部には足が3個と、円盤状のごく低い高台状のものを有する。この円盤状の部分には幅1cm弱の輪状の溶着痕がある。わずかに凹凸がある見込みには目跡が3個残る。2～6は土器皿である。2は底裏に左回転系切り痕があるものでDZ-2-bに分類される。胎土は橙褐色で小石が多く含まれる。体部は「ハ」の字状に開いて立ち上がる。口縁部はやや膨らみ、体部との境がわずかに括れる。口径に比して底径は小さく、底部と体部との境はシャープである。3～6は底裏に右回転系切り痕がある皿でDZ-2-aに分類される。いずれも胎土はにぶい橙色を呈し、2と比べると小石などはわずかにみられる程度である。5以外は全て口唇部にタールが付着し、特に3は口縁部全体に付着する。3の底部は薄い、体部との境の器壁は厚い。口縁は外反し、体部との境が括れる。4の体部は少し丸味を帯びて立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。なお体部は内外面ともに緩やかな凹凸が残る。底部内外面は



SU29(2)

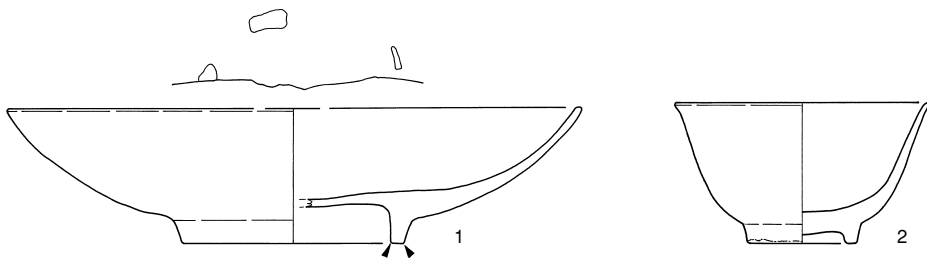


SU34(1)

IV-13 図 SU29(2)・SU34(1) 出土遺物



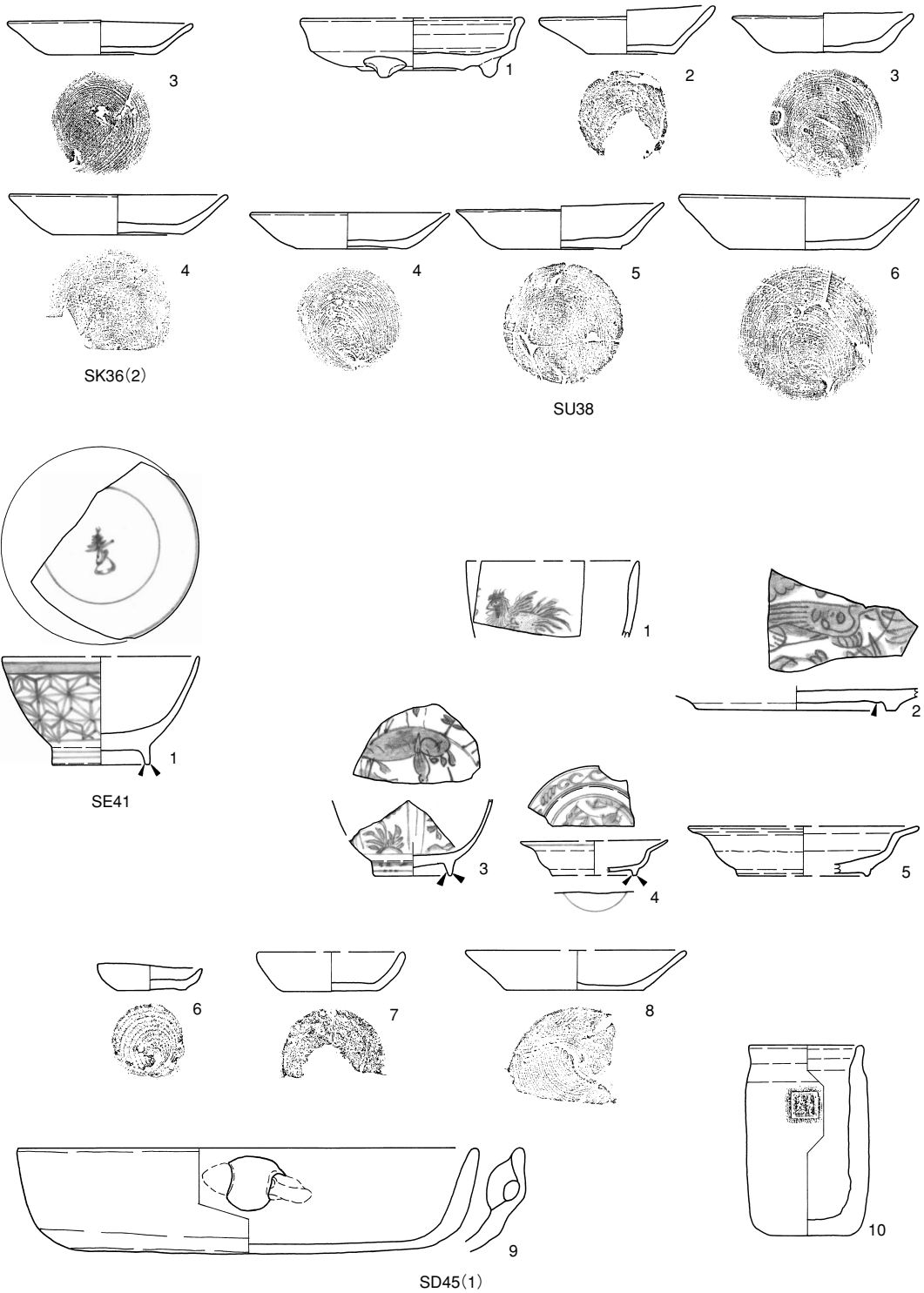
SU34(2)



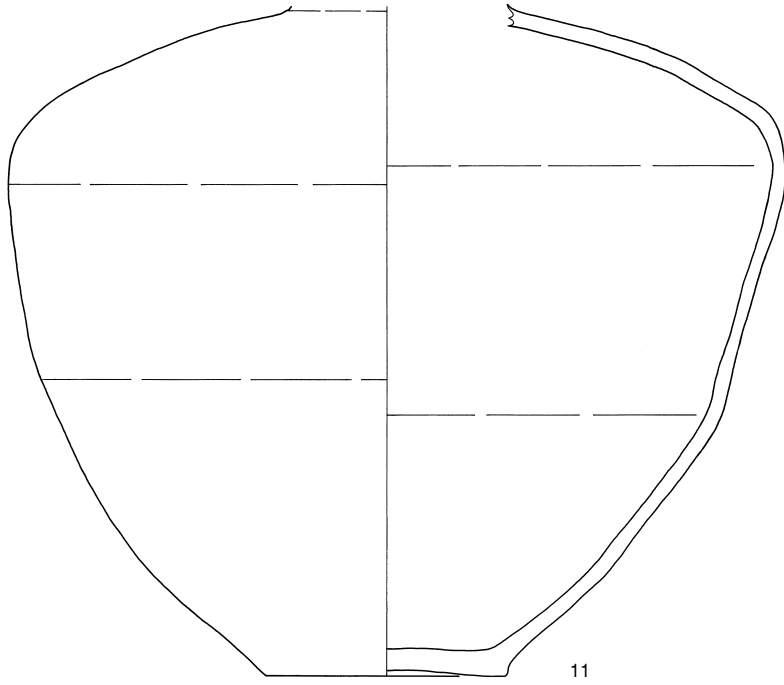
SK36(1)

IV-14 図 SU34(2)・SK36(1) 出土遺物

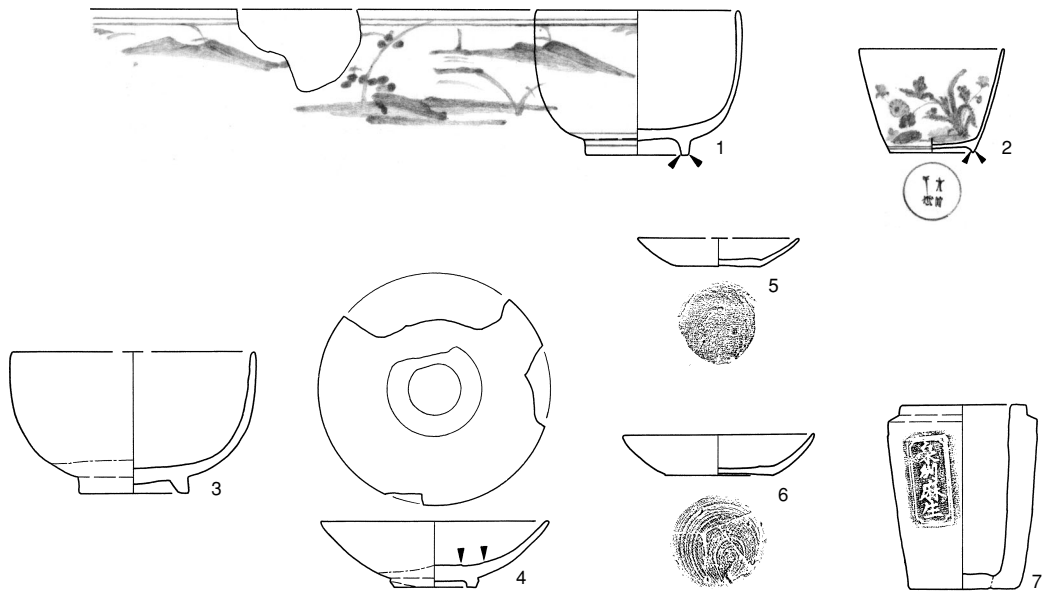
第IV章 出土した遺物



IV-15図 SK36(2)・SU38・SE41・SD45(1)出土遺物



SD45(2)



SK48

IV-16 図 SD45(2)・SK48 出土遺物

被熱し、円形に赤色化している。5も体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。底部はやや突出している。内外面ともにナデ調整されるが、体部外面にはわずかに凹凸が残る。6の体部もやや丸味をもって立ち上がり、底部と体部の境は緩やかに括れる。

SE41 (IV-15 図)

1は肥前系染付磁器のいわゆる広東碗でJB-1-mに分類される。呉須の発色は悪く、黒ずむ。見込みには目跡が2個残る。

SD45 (IV-15・16 図)

1～4は舶載磁器(JA)で、2は漳州窯系(JA2)、それ以外は全て景德鎮窯系磁器(JA1)である。1は白磁に上絵付が施された碗でJA1-1に分類される。口唇部にはいわゆる虫喰いがみられる。釉は生掛けされ、上絵付には赤・黒・緑の3色を使い、鶏が描かれる。なお上絵付の部分には指紋のようなものが1ヶ所みられる。2は草花文と鳥のようなものが描かれた青花皿でJA2-2に分類される。胎土は灰色を呈し、呉須は黒ずむ。釉は生掛けされ、畳付部分まで施釉される。畳付には砂粒が多く付着する。露胎の高台内には、ロクロの痕跡が残る。3は体部が輪花に成形された芙蓉手の青花鉢でJA1-5に分類される。高台内にはカンナ痕が放射状に残る。4は青花の小皿でJA1-2に分類される。鐔状の口縁部を有し、口唇部には虫喰いがみられる。高台脇は非常にシャープに面取りされる。

5は瀬戸・美濃系陶器の鐔皿でTC-2に分類される。胎土はやや粗く、白色を呈す。外面はヘラケズリ痕が顕著である。体部1/2くらいまで内外面ともに淡い緑釉が施釉され、鐔部分と見込みに圏線を有す。高台内のケズリ込みは浅く、目跡が1個残る。11は産地不明の陶器の甕でTZ-15に分類される。胎土は褐色で、金雲母をやや多く含む。最大径は肩部にあり、底部はそれに比して非常に小さい。輪積成形で、内面には粘土紐の繋ぎ目が残る。体部外面には斜め方向のケズリ、内面には横方向のナデ調整が認められるが、底裏には筵状のものの上に置いていた痕跡が残る。

6～10は土器である。6～8は皿である。6は底裏に目の粗い左回転糸切り痕がある皿でDZ-2-bに分類される。胎土はにぶい橙色を呈し、砂粒をやや多く含む。器高は低く、体部は内湾する。底部が突出し、体部との境に稜を成す。見込みには直径1cmほどの凹みが、口縁部には2ヶ所に灯心痕がみられる。7の胎土はやや粗い砂粒を多く含み、にぶい白色を呈す。ロクロ成形で、口縁はやや内湾する。底裏には筵状の痕跡がある。DZ-2に分類される。8は底部に右回転離し糸切り痕がある皿でDZ-2-aに分類される。胎土はにぶい橙色を呈し、わずかに雲母を含む。体部は直線的に立ち上がり、見込み中央はやや膨らむ。口縁部には灯心痕が1ヶ所ある。9は平底のほうろくでDZ-47-bに分類される。胎土は均質で、にぶい橙色を呈する。体部はほぼ垂直に立ち上がり、器高は高い。底部と体部の境は1.5cmほどの幅で削られ、やや丸みを帯びる。体部内側の相対する2ヶ所に、一方に2個、もう一方に1個、計3個の内耳を有する。なお内耳が貼り付けられている体部は大きく外側に突出する。底裏には板状のものに置かれた痕跡が残る。ススは外面全体と内面の底部中央付近にみられる。10は輪積成形で、「ミなど藤左衛門」の刻印を有す塩壺でDZ-51-aに分類される。内面にはわずかに細かい布目がみられる。底裏には筵のようなものの痕跡が認められる。

SK48 (IV-16 図)

2は肥前系磁器(JB)である。染付猪口でJB-7-bに分類される。器壁は極めて薄作りである。外

面には呉須で草花文が描かれるが、かなり滲じむ。高台内には一重圏線に「大明年製」の銘がみられる。1は高台径が大きく、腰が張る陶胎染付碗でTB-1-fに分類される。外面下半分にはロクロ目が残し、やや凹凸が目立つ。畳付にはわずかに砂粒が付着する。3は瀬戸・美濃系陶器の灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。腰が張り、体部はやや内湾気味に立ち上がる。高台は無釉である。4は肥前系陶器の青緑釉皿でTB-2-aに分類される。高台のケズリは雑で、畳付幅が均一ではない。見込み蛇ノ目釉剥ぎ部分には輪状に砂粒が付着し、また畳付にも砂粒が付着する。5、6は底裏に左回転糸切り痕がある土器皿でDZ-2-bに分類される。胎土はにぶい橙色を呈す。内面の体部との境が浅い溝状を呈す。見込み中央部はナデ、平らにされる。7は板作成形2ピースの塩壺で、大枠「泉州麻生」の刻印を有す。DZ-51-iに分類される。内面には細かい布目がみられる。

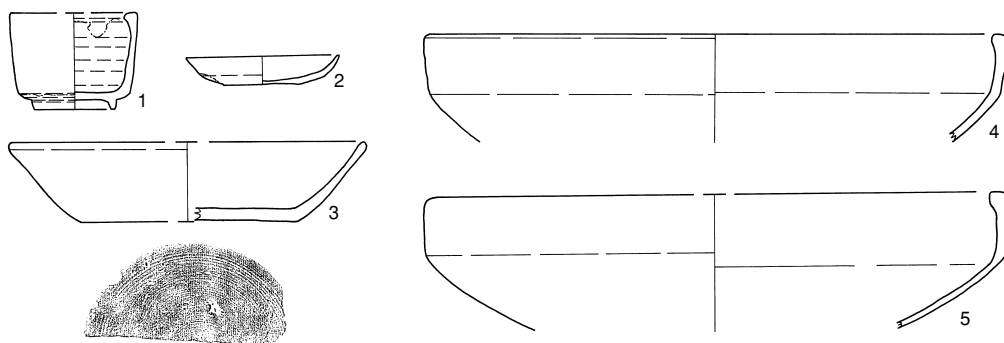
SU49 (IV-17 図)

1、2はともに被熱している。1は瀬戸・美濃系陶器の灰釉香炉・火入れでTC-9-aに分類される。高台はやや内傾している。2は志戸呂系陶器の皿でTF-2に分類される。底裏には右回転糸切り痕がみられる。口唇部には灯心痕がみられることから灯明皿として使用されたものか。3は底裏に左回転の糸切り痕がある土器皿でDZ-2-bに分類される。口径が6寸以上あり、口縁部にはわずかに稜を有す。見込みが被熱している。4、5は土師質の丸底ほうろくでDZ-47-aに分類される。体部はほぼ直立して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。内外面ともに横方向にナデ調整される。底裏は縮面状を呈す。口径が1/3程度しか残存していないためか内耳はみられない。外面全体にススが付着する。

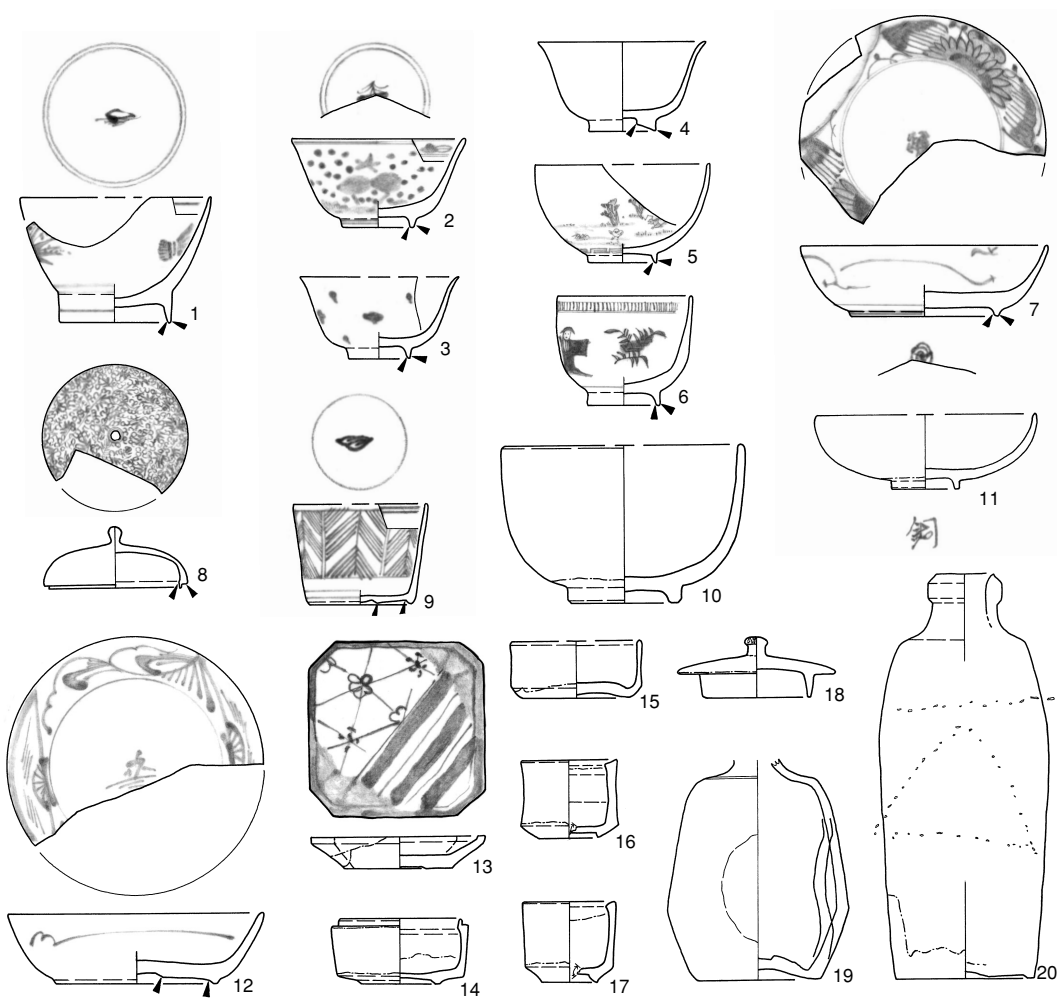
SK50 (IV-17・18 図)

1～9は磁器である。1～4は瀬戸・美濃系(JC)、5、6は肥前系(JB)の碗である。1はいわゆる広東碗でJC-1-cに分類される。体部はやや丸みを帯び、直線的に立ち上がる。器高はやや低く、高台外側は内傾する。呉須の中に細かい気泡が多くみられる。2～4は端反形碗でJC-1-dに分類される。2、3は染付、4は白磁である。2の口縁部の外反はごく弱い。高台はやや「ハ」の字に開き、その断面はU字状を呈す。高台脇の器壁は厚い。3、4は体部が垂直気味に立ち上がり、口縁は緩やかに外反する。3の高台は断面三角形を呈する非常にシャープなものである。4の高台は内側を外側より深く削り込み、畳付が内傾した蛇ノ目高台状を呈する。5は染付半球形碗でJB-1-fに分類される。器壁が薄く、絵付も細線で非常に丁寧である。6は染付湯呑形碗でJB-1-oに分類される。腰が張り、高台脇の器壁は厚い。畳付外側はシャープな面取りがなされる。7は深めの染付皿でJB-2-gに分類される。底部は厚い。見込みにはコンニャク印判による五弁花文、高台内にはかなり崩れた渦福銘がみられる。8は染付蓋物の蓋でJB-00-fに分類される。焼継痕がみられる。9は染付猪口でJB-7-aに分類される。底部は蛇ノ目凹形高台状にされ、器高はやや低い。見込みには目跡が1個残る。

10～21は陶器である。10、11は碗である。10は瀬戸・美濃系灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。高台脇は面取りされる。内面は調整があまく、また、釉ムラもある。見込みには目跡が3個残る。片口鉢の可能性もある。11は京都・信楽系灰釉平碗でTD-1-hに分類される。口縁部は内湾している。高台内に「銅」の墨書がみられる。12、13は瀬戸・美濃系の皿である。12はいわゆる太白手の蛇ノ目凹形高台皿でTC-2-tに分類される。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部外側



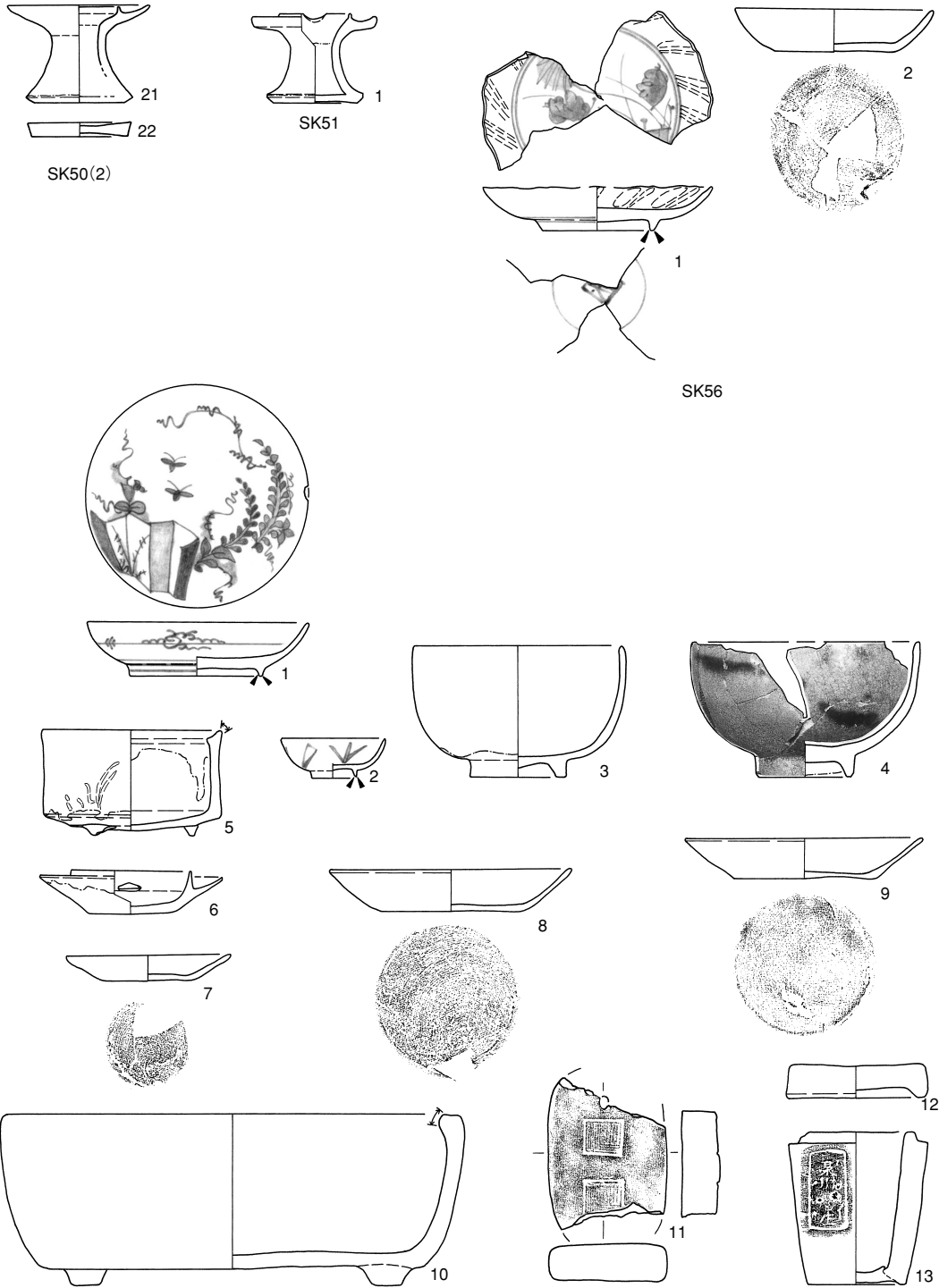
SU49



SK50(1)

IV-17図 SU49・SK50(1)出土遺物

第IV章 出土した遺物



SU58

IV-18 図 SK50 (2) ・ SK51 ・ SK56 ・ SU58 出土遺物

には稜を有す。13は再興織部の型皿である。型打成形で、見込みには成形時の粗い布目が残る。外面は内面に合わせて、方形にケズリ調整され、四隅は縦方向に幅広く面取りされる。底部も口縁部と同じくケズリ調整され、方形にされた後、中央は碁笥底状に浅く削り込まれる。内面は鉄絵と緑釉で装飾される。外面の釉は拭き取られている。TC-2に分類される。14は瀬戸・美濃系灰釉の合子でTC-18に分類される。蓋受け部分から体部内面1/3程度までススが付着する。15は瀬戸・美濃系灰釉の餌入れてTC-30に分類される。底裏には右回転糸切り痕及び輪状の溶着痕がみられる。把手の有無は口縁が欠損しており不明である。16、17は瀬戸・美濃系灰釉の香炉・火入れでTC-9-aに分類される。ともに碁笥底であるが、二次的に穿孔されていることから、植木鉢に転用されたものか。18は青土瓶の蓋でTZ-00-aに分類される。摘みは菊花状を呈す。19、20は瀬戸・美濃系の瓶である。19は錆釉が施釉されたいわゆる「べこかん」徳利でTC-10-gに分類される。胎土は比較的緻密で灰色を呈す。体部下半1/3ほどにややシャープな稜を有し、その上から2方向が窪まされる。内面全体が煤けたようになっている。20は黄色味を帯びた灰釉が浸け掛けされた二合半徳利でTC-10-cに分類される。胎土はやや粗く黄白色を呈す。胴部には点刻で「一△」の釘書きがある。21は京都・信楽系灰釉油受け皿でTD-40-aに分類される。受け部は低く、皿部分との比高差はない。底裏には溶着痕がみられる。

22は塩壺の蓋でDZ-00-dに分類される。内面には指圧痕と指紋が多数残る。

SK51 (IV-18 図)

1は京都・信楽系陶器の灰釉油受け皿でTD-40-aに分類される。受け部はわずかに内傾し、ごく低く立ち上がる。受け部には浅いU字状のスリットが1ヶ所みられる。

SK56 (IV-18 図)

1は型打成形された肥前系磁器の染付皿でJB-2-bに分類される。口縁端部には稜を有す。底部器壁は厚い。高台断面形は非常にシャープな三角形を呈するが、畳付部分には砂粒が多く付着する。高台内には銘がみられる。2は底裏に右回転糸切り痕がある土器皿でDZ-2-aに分類される。見込みはわずかに盛り上がる。口唇部には灯心痕が残る。

SU58 (IV-18 図)

1、2は肥前系磁器 (JB) である。1は染付皿でJB-2-eに分類される。高台内にはハリ支えが1個残り、畳付には白色砂粒が多く付着する。被熱している。2は染付半球形杯でJB-6-fに分類される。外面には羽子板とその羽根が描かれている。

3～6は陶器である。3、4は碗である。3は瀬戸・美濃系灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。体部は大きく外側へ張り出しながら立ち上がり、口縁部はわずかに内湾する。4は肥前系のいわゆる呉器手碗でTB-1-aに分類される。体部には青緑釉が流し掛けられる。5は瀬戸・美濃系灰釉香炉・火入れでTC-9-dに分類される。被熱しているが、体部には1ヶ所草状のしのぎがみられる。底部には足を3個有する。口縁部には敲打痕が認められる。6は志戸呂系油受け皿でTF-40に分類される。底部はケズリ調整され、円筒状の受け部分と体部との境には、相対する位置に凸レンズ状のスリットを2個有する。

7～13は土器である。7～9は底裏に左回転糸切り痕がある皿でDZ-2-bに分類される。いずれも器高が低く、また口唇部には灯心痕が認められる。7の胎土は淡橙色を呈す。底部は直線的に立

ち上がり、口縁部付近で若干括れる。8の胎土は肌色を呈す。体部はやや丸みを帯びて立ち上がる。9の胎土は肌色を呈す。体部は直線的に立ち上がり、底部との境はわずかに括れる。10は土師質丸火鉢でDZ-31-aに分類される。胎土はにぶい橙色を呈す。底部には足を3個有するが、足の周囲は強くなでられている。内面の底部と体部の境には細かな縦筋が多くみられ、見込みにはわずかにススが付着する。口縁部には敲打痕が認められる。11は平面形が小判形を呈する懐炉でDZ-54に分類される。表面には2ヶ所の刻印と、円孔を1ヶ所有す。12は塩壺蓋でDZ-00-cに分類される。胎土は淡橙色を呈し、内面には細かい布目がみられる。13は板作成形2ピースの塩壺で「サカイ 泉州磨生 御塩所」の刻印を有す。DZ-51-kに分類される。胎土は橙褐色を呈す。内面には粘土の繋ぎ目が残り、底裏には植物繊維の痕跡がみられる。

SK60 (IV-19 図)

1、2は肥前系磁器(JB)である。1は外面に呉須で秋草文が描かれた半球形碗でJB-1-fに分類される。器壁は薄く、絵付も丁寧である。2は青磁染付の碗でJB-1-eに分類される。呉須も青磁釉の発色もにぶい。口縁部内側には四方櫛、見込みには二重圈線の中に手描きの五弁花文、高台内には二重角枠の渦福銘がみられる。

3、4は陶器である。3は志戸呂系蓋物の蓋でTF-00に分類される。外面にのみ施釉される。内面には輪状の溶着痕がみられる。4は瀬戸・美濃系五合徳利でTC-10-dに分類される。黄褐色の灰釉が施釉されるが、底部付近の釉は拭き取られている。胴部外面にはベタ書きで「角」の釘書きがある。

5～14は土器である。5、6は土師質無釉のひょうそくでDZ-44-cに分類される。胎土は5が淡橙色、6がにぶい肌色を呈す。ともに底部には左回転糸切り痕があり、灯心部のみにはススが付着する。6の底部脇はわずかに括れる。7～12は皿で、胎土はいずれもにぶい肌色を呈する。7～11は底部に左回転糸切り痕のある皿でDZ-2-bに分類される。7の器高は低く、見込みにわずかに凹凸がみられる。8の体部は若干外反しつつ立ち上がる。底部と体部の境の器壁はやや厚い。9の体部はやや丸味を帯びて直線的に立ち上がる。見込みはわずかに盛り上がる。口縁部外側には比較的顕著な稜を有し、口唇部には灯心痕がみられる。10の器壁は全体的に厚い。体部は直線的に立ち上がるが、口縁部はわずかに内湾する。見込みと体部との境が浅い溝状を呈す。11は直径7寸を超える大振りな皿で、器壁も全体的にやや厚い。体部は丸味を帯びて内湾気味に立ち上がる。内外面の調整は丁寧になされ、器面はほぼ平滑にされる。被熱したためか内面は暗灰色化し、外面の一部は赤橙色化している。12は底部が平滑になでられた磨きかわらけでDZ-2-dに分類される。13は塩壺の蓋でDZ-00-cに分類される。胎土は淡橙色を呈し、少量の金雲母を含む。外面は非常に丁寧になでられているが、内面は細かい布目が残る。14は板作成形2ピースの塩壺で、「泉湊伊織」の刻印を有す。DZ-51-gに分類される。胎土は肌色を呈す。内面にはやや粗い布目痕がみられる。底部中央に押し込まれた粘土塊がわずかに外側に突出し、その周囲には指圧痕が顕著に残る。

SU61 (IV-19 図)

いずれも陶器である。1は肥前系三島手の鉢でTB-5-bに分類される。胎土は赤褐色を呈す。底部は非常に薄く、高台脇は面取りされる。見込みには胎土目が4個残る。2、3は碗である。2は瀬戸・美濃系のいわゆる御室碗でTC-1-dに分類される。畳付中央はやや窪む。体部にはかなり崩

れた山水文が呉須で描かれている。3は京都・信楽系薄手半球形碗でTD-1-bに分類される。胎土は緻密で乳白色を呈す。高台脇は面取りされる。

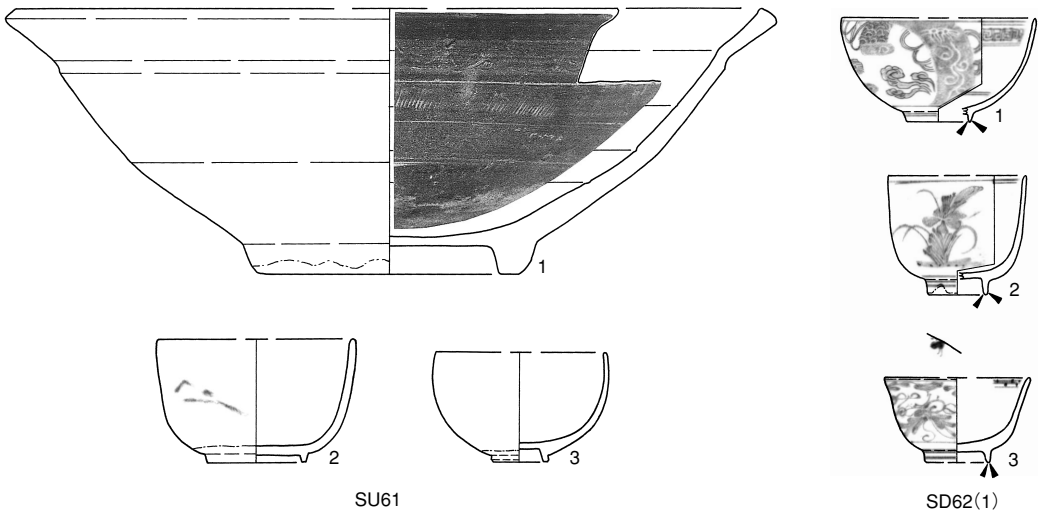
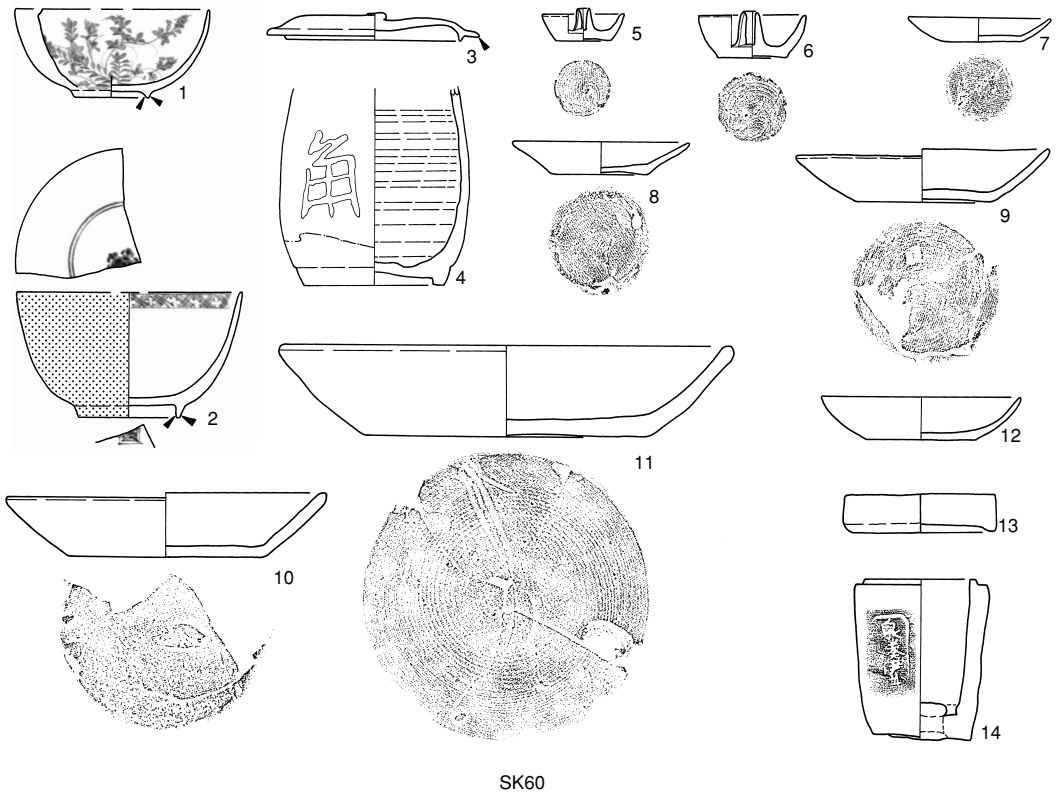
SD62 (IV-19・20 図)

1～11は磁器である。1～4は碗である。1、2は肥前系(JB)、3、4は瀬戸・美濃系(JC)の碗である。1は染付丸碗でJB-1-eに分類される。器壁は全体に薄作りである。線描き、墨弾き、ダミの濃淡を利用して絵付がなされる。見込みには環状松竹梅文がみられる。2は染付湯呑形碗でJB-1-oに分類される。呉須の発色がにぶい。3、4は染付端反形碗でJC-1-dに分類される。ともに器高が低い。3は口縁部の外反が弱く、絵付はかなり滲む。4の体部は腰張り気味に直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部はやや厚い。高台脇は面取りされる。5～7は染付磁器皿である。5はJB-2-eに分類される。体部は丸味を帯び、ほぼ垂直に立ち上がる。見込みにコンニャク印判による五弁花文、体部内面には墨弾きによる捻文がみられる。高台内にハリ支え痕が1個残る。6はJB-2-qに分類される。型打成形で見込みには蜂の巣状の模様が陽刻され、体部は輪花にされている。高台脇は面取りされる。絵付は線描きと墨弾きの手法で見込み以外に施される。高台内には「俵次」の点刻がみられる。7はいわゆるくらわんか手の染付皿でJB-2-gに分類される。胎土が灰白色で、器壁が非常に厚い。体部は直線的に立ち上がり、器高はやや高い。絵付はかなりラフなものになり、見込みの五弁花文も、高台内の銘も原形をとどめていない。畳付から高台内にまで砂粒が付着する。8、9は坏である。8は肥前系の染付丸碗形の坏でJB-6-aに分類される。呉須の発色がにぶい。畳付には砂粒が多く付着する。9は瀬戸・美濃系の白玉手の坏でJC-6-dに分類される。器壁はごく薄い。高台高は高く、口縁部はわずかに外反する。10は瀬戸・美濃系の染付端反碗の蓋でJC-00-bに分類される。11は古九谷様式青手の皿でJB-2に分類される。器壁は薄く、高台内側が「ハ」の字状に開く。文様の意匠は不明であるが、外面は緑色で塗り埋め、見込みは黒ずんだ染付線で輪郭を描いた中を、紫、緑、黄色の3色で塗り埋めている。なお、畳付は無釉であるが、高台内は黄色で塗り埋めている。

12～19は陶器である。12は瀬戸・美濃系灰釉碗でTC-1-gに分類される。体部は丸味を帯びて、外側に大きく開いて立ち上がる。高台は無釉である。この器形はいわゆる柳茶碗の器形であり、この製品の欠損部には鉄絵の柳文があった可能性もある。13は京都・信楽系の軟質施釉陶器の坏でTD-6に分類される。胎土は淡橙色を呈する。畳付を除く内外面は白化粧され、緑釉が流し掛けられる。また外面には鉄絵で茶道具と思われる文様が描かれているが、当時の茶席の様子を考える上で興味深い資料と言える。14は口縁から肩部にかけて藻掛けされた急須でTZ-16に分類される。把手部分には「梅寿」の刻印を有す。15は瀬戸・美濃系鉄釉水注の蓋でTC-00-eに分類される。蓋裏には右回転糸切り痕と溶着痕が残る。16は京都・信楽系の灰釉柄杓でTD-32に分類される。体部は内傾して立ち上がる。内面の圏線は緑釉で描かれている。見込みには目跡が3個残る。17～19は瀬戸・美濃系五合徳利でTC-10-dに分類される。いずれも頸部は短く、肩が張り、口縁部は算盤玉状を呈す。17は黄色味を帯びた灰釉が、18、19には緑色味を帯びた灰釉が施釉され、底部周辺の釉はいずれも拭き取られる。17には点刻で「一△」と「▽」、19には点刻で「久○」の釘書きがみられる。

20、21は土器である。20は透明釉が施釉された油受け皿でDZ-40-bに分類される。胎土は橙

第IV章 出土した遺物



IV-19 図 SK60・SU61・SD62(1) 出土遺物

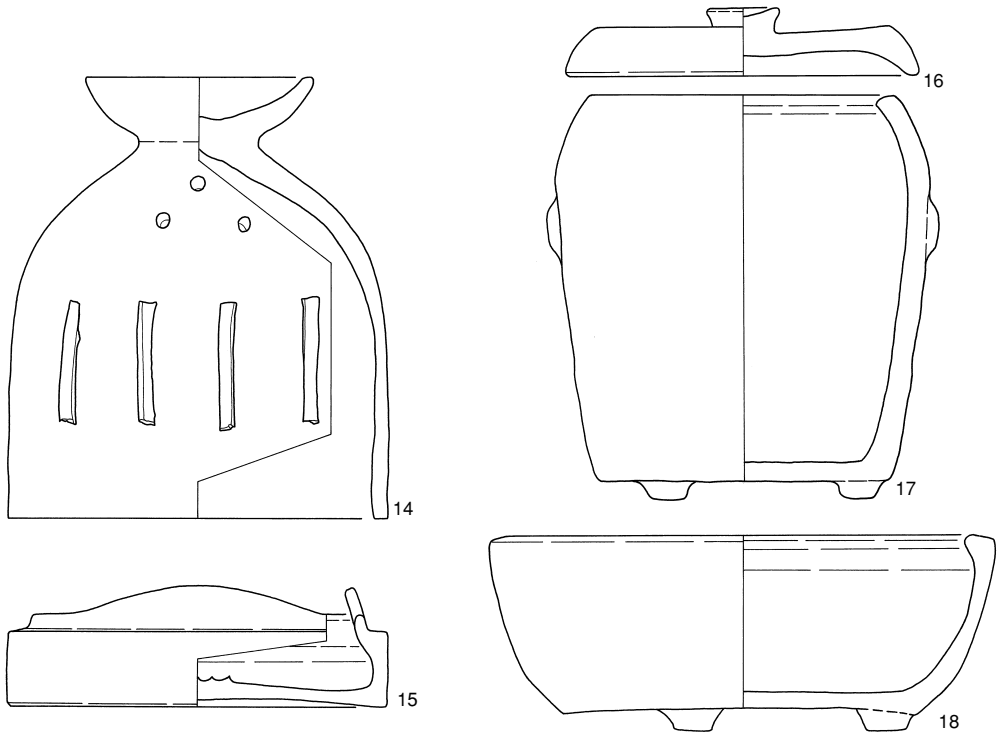


IV-20図 SD62 (2) 出土遺物

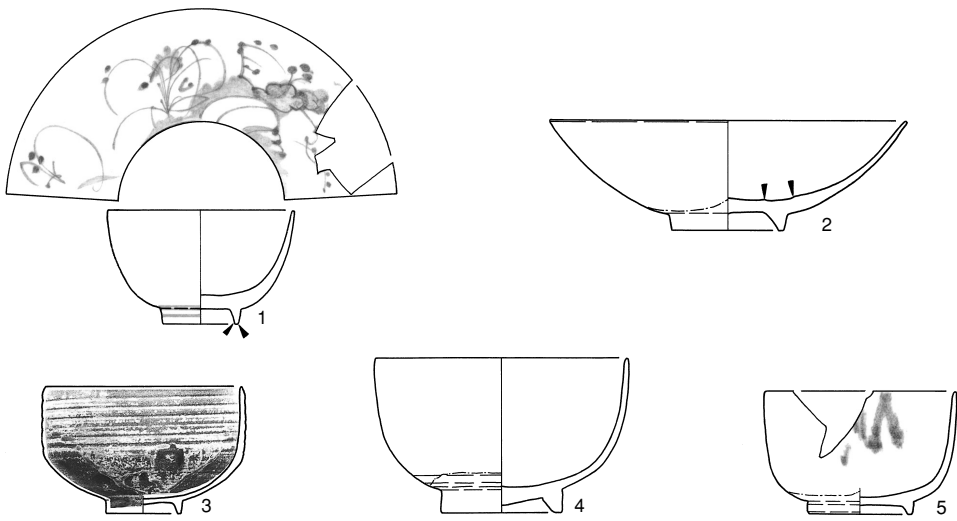
第IV章 出土した遺物



IV-21 図 SU63 (1) 出土遺物



SU63(2)



SU64(1)

IV-22 図 SU63 (2) ・ SU64 (1) 出土遺物

褐色を呈する。受け部の立ち上がりは小さく、口縁部より低い。底部はかなり摩滅しているが、左回転系切り痕が確認できる。21は塩壺の蓋でDZ-00-dに分類される。胎土は橙褐色を呈す。上面は指圧痕が著しい。

SU63 (IV-21・22 図)

1～3は肥前系磁器(JB)である。1、2は染付皿である。1はやや深目の皿でJB-2-fに分類される。口縁部がわずかに輪花に成形され、端部は外反する。見込みには手描きの五弁花文、高台内には「太明成化年製」銘がみられる。2は器高が低い皿でJB-2-eに分類される。体部の器壁に比して底部は厚い。内外面にコンニャク印判による花文様がみられる。3は染付猪口でJB-7-bに分類される。高台は低く、輪高台状を呈す。底部には銘の一部が残る。

4～13は陶器である。4～7は碗で、4、5は肥前系の碗(TB-1)、6、7は瀬戸・美濃系の碗(TC-1)である。5、6は被熱している。4はいわゆる呉器手碗でTB-1-aに分類される。5は内外面に渦状刷毛目のある碗でTB-1-dに分類される。胎土は灰色を呈する。高台外側がやや内傾し、口径に比して高台径が小さい。高台脇は面取りされる。6は瀬戸・美濃系の灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。体部は大きく外へ張り出しながら垂直に立ち上がる。7は瀬戸・美濃系のいわゆる御室碗でTC-1-dに分類される。腰が張り、体部はほぼ垂直に立ち上がる。外面には呉須で山水文が描かれるが、発色は悪く黒ずむ。高台一面にススが付着する。8は瀬戸・美濃系の灰釉香炉・火入れでTC-9-dに分類される。体部は内傾して立ち上がり、外面には半菊しのぎがみられる。底部には足を3個有す。口唇部には敲打痕が認められる。被熱している。9は瀬戸・美濃系壺・甕の蓋でTC-00-aに分類される。摘みは鉤状を呈す。蓋裏には右回転系切り痕が残る。被熱により釉の大半が飛散している。10は肥前系片口鉢でTB-23-aに分類される。胎土は赤褐色を呈し、長石粒が多く含まれる。高台脇は小さく面取りされる。外面には波状刷毛目、内面には渦刷毛目がみられるが、口唇部の釉は拭き取られる。11は堺系播鉢でTL-29に分類される。胎土は橙褐色を呈し、白い砂粒をやや多く含む。ただし被熱により部分的に胎土が暗灰褐色に変色し、さらに焼締まっている。口縁部にはごく浅いU字状の注口を1ヶ所有す。口唇部にはごく浅い凹みが全周し、内面には小さな突帯が作り出される。外面はケズリ調整されるが、縁帯下は指で強く押さえられている。播目は13条1単位で、見込みの播目はクロスパターンである。12、13は瀬戸・美濃系の瓶である。12は一升徳利でTC-10-e、13が五合徳利でTC-10-dに分類される。ともに頸部が長く、胴部が雨滴形を呈する、寸胴形になる以前のタイプである。高台の釉は拭き取られるが、底裏中央部分とともに拭き残される。肩部にはうのふ釉が流し掛けられる。胴部には同じものと考えられるベタ書きの釘書きがみられる。

14～18は土器である。14、15は土師質瓦燈の蓋と身でDZ-45に分類される。ともに二次的に被熱している。14の外面はミガキ調整後、全体に銀彩が施された痕跡がわずかに認められる。内面は横方向にナデ調整されている。体部には外側から穿たれた長方形のスリットが4個、そのスリットの上方に円孔が3個みられる。なお、円孔は相対する位置にも1個確認できる。15の口縁部には舌状の立ち上がりを有すが、かなり低いものになっている。内外面は丁寧にナデ調整されるが、底裏は雑でアバタ状を呈す。底部脇は面取りされる。16、17は土師質火消壺の蓋と身でDZ-00-hとDZ-31-iに分類される。16の内面にはススが付着する。17は内外面ともにナデ調整され

るが、内面には約5cm間隔で横方向にわずかに指圧痕がみられ、輪積みの痕跡が残る。体部には隅丸台形状の耳を2個、底部には足を2個有す。なお耳の周囲はなでられ窪んでいる。18は土師質丸火鉢でDZ-31-aに分類される。胎土は肌色を呈する。外面は磨かれるが、口縁部のみは2cm幅ほどで横方向になでられる。内面は丁寧なナデが施されるが、底部付近には縦方向の細かい筋状の沈線が多くみられる。被熱している。

SU64 (IV-22・23 図)

1は肥前系磁器の染付碗でJB-1-vに分類される。いわゆるくらわんか碗で、胎土は灰白色を呈し、底部は厚い。高台脇は小さく面取りされる。外面には梅樹文が描かれるが、呉須の発色はやや灰色味を帯びる。

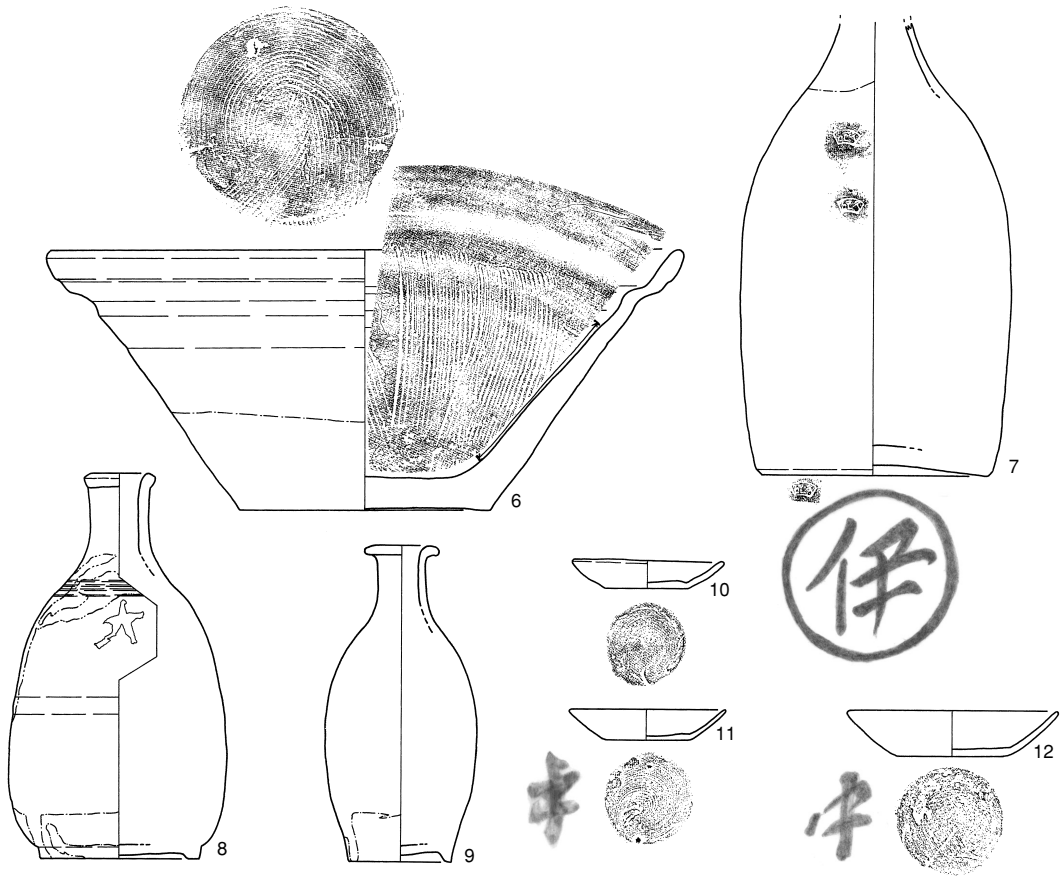
2～9は陶器である。2は肥前系の青緑釉輪剥皿でTB-2-aに分類される。高台脇や高台外面にはカンナ痕が残る。見込みの蛇ノ目釉剥ぎ部分は釉を削り取っており、施釉部分との間にわずかに段差がみられる。3～5はいずれも瀬戸・美濃系の碗である。3は半筒形を呈する碗でTC-1-qに分類される。畳付以外には錆釉が斑状に施され、口縁部から体部上半には横位の沈線が数条めぐる。4は灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。5はいわゆる御室碗でTC-1-dに分類される。外面の相対する2ヶ所に染付がみられる。6は瀬戸・美濃系播鉢でTC-29に分類される。口縁部は完全に折り返され体部に密着し、縁帯を形成している。播目は18条1単位で、見込みは放射状に3単位施された後に、半円を描いている。底部脇には焼成時についたと思われる播目の痕跡がみられる。底裏には右回転系切り痕と浅く窪んだ砂目が4個、また内面の底部と体部の間にも砂目が3個残る。見込み中央と体部内面下半は錆釉が摩滅し禿げ落ちている。7～9は瓶である。7は志戸呂系の瓶でTF-10に分類される。高台脇は7mm幅ぐらいで面取りされるが、その面取り部分に輪状の溶着痕がみられる。また最大径をもつ肩部から2cmほど上の所にも輪状の溶着痕のようなものが認められる。胴部に2ヶ所と底部に1ヶ所の計3ヶ所に、扇に「口(久カ)口」の刻印を有する。また底部には刻印の他に「○」に「伊」の墨書もみられる。8は暗黄褐色の灰釉が施釉された瀬戸・美濃系五合徳利でTC-10-dに分類される。頸部は長く、胴部は雨滴形を呈す。頸部から肩部にうのふ釉が流し掛けられる。肩部には圈線を有し、そのすぐ下にベタ書きで「大」の釘書きがある。胴部1ヶ所は凹み、いわゆるぺこかん徳利のようになっている。被熱している。9は黄色味を帯びた灰釉が施釉された瀬戸・美濃系二合半徳利でTC-10-aに分類される。胴部はラッキョウ形を呈するが、底部脇は強くなでられ括れる。口縁部は外側に水平に折り返され鏝状を呈す。底裏は輪高台状に削り込まれている。底部付近の釉は拭き取られる。被熱している。

10～12は底裏に左回転系切り痕のある土器皿でDZ-2-bに分類される。胎土は、にぶい肌色を呈す。10、11は底部が緩く盛り上がり、体部との境が浅い溝状を呈す。10の口縁部に灯心痕が残る。11と12の底裏には墨書がみられる。

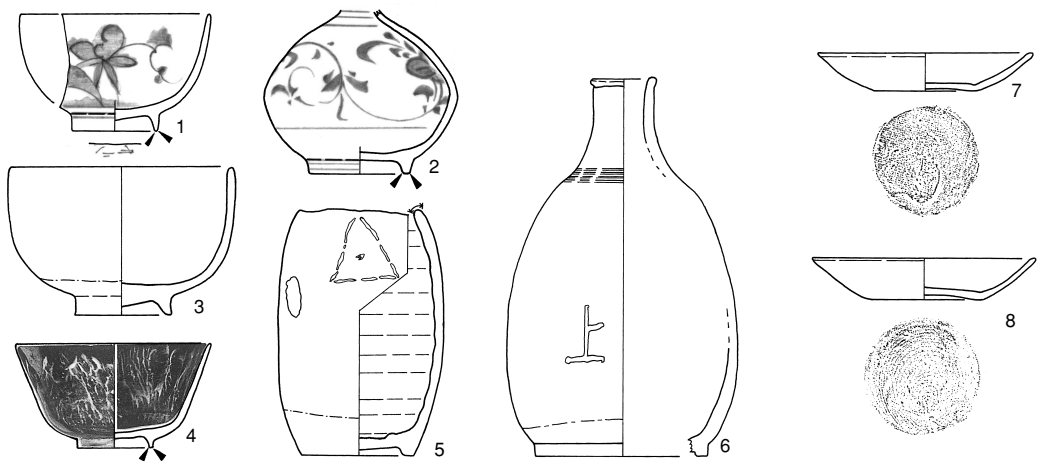
SU75 (IV-23・24 図)

1、2は肥前系磁器(JB)である。1は染付碗でJB-1-dに分類される。高台内の銘は判読できない。2は染付油壺でJB-12に分類される。胎土は灰色を呈し、呉須の発色も黒ずむ。畳付全面に砂粒が付着する。

3～6は陶器である。3、4は碗である。3は瀬戸・美濃系灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。



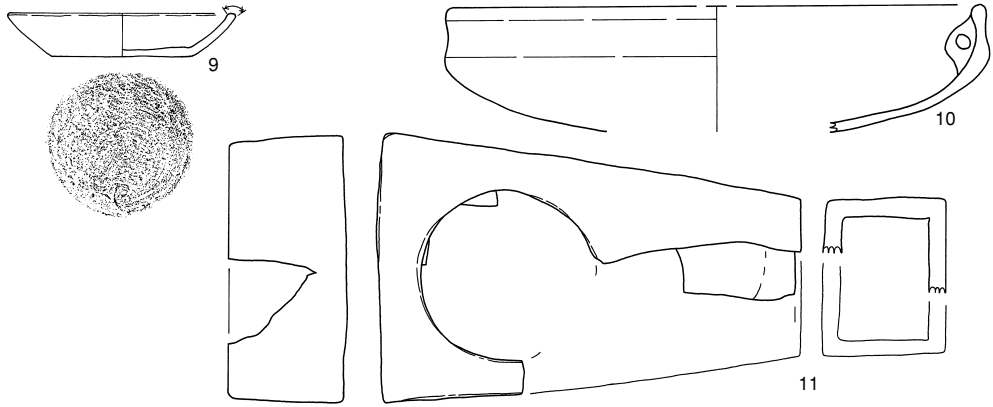
SU64(2)



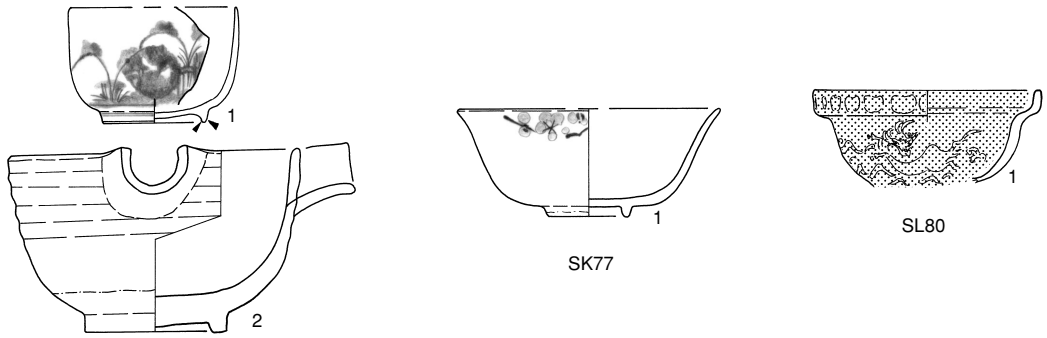
SU75(1)

IV-23 図 SU64(2)・SU75(1) 出土遺物

第IV章 出土した遺物



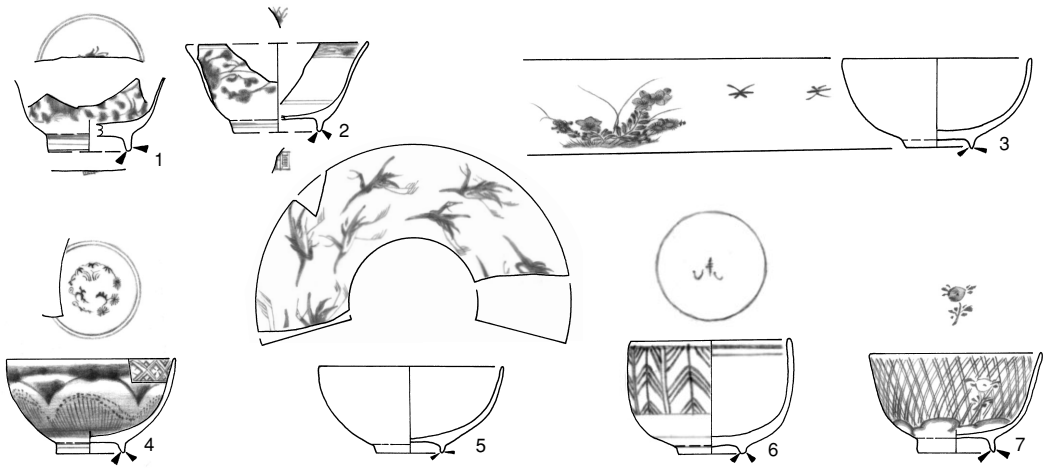
SU75(2)



SU76

SK77

SL80



SK81(1)

IV-24図 SU75(2)・SU76・SK77・SL80・SK81(1)出土遺物

高台は無釉である。4は肥前系刷毛目碗でTB-1-hに分類される。胎土は黒色を呈し、内外面ともに打ち刷毛目が施される。畳付には砂粒が付着する。5、6は瀬戸・美濃系の瓶である。5は底部の釉が拭き取られた二合半灰釉徳利でTC-10-aに分類される。底部がすぼまった紡錘形を呈す。胴部には溶着痕が2ヶ所と、点刻で「△」の釘書きがある。肩部から口縁部は欠損し、その部分には敲打痕が認められることから、火入れ等に転用された可能性もあるが、内面にススなどの付着は認められない。6は黄色味を帯びた灰釉が施釉された五合徳利でTC-10-dに分類される。頸部は長く、口唇部の折り返しは小さい。肩部には圈線を有す。口唇部から肩部には、うのふ釉が流し掛けられる。畳付には釉が残り、溶着痕がみられる。胴部下端にベタ書きで「上」の釘書きがある。

7～11は土器である。7～9は皿で、胎土はいずれも肌色を呈すが、8、9は胎土がやや粗く砂粒などを含む。7は底裏に右回転糸切り痕があるものでDZ-2-a、8、9は左回転糸切り痕があるものでDZ-2-bに分類される。9のみ口縁部に灯心痕がみられるが、その痕跡を削り落とすように口唇部が二次的に削られ、端部が平らになっている。10は土師質丸底のほうろくでDZ-47-aに分類される。胎土は淡橙色を呈す。体部の括れが顕著である。内耳は団子状のものが2ヶ所に残る。底裏は縮緬状を呈し、ススが付着する。なおススの付着は内面にもみられる。11は土師質七輪の風口でDZ-48-cに分類される。胎土は肌色を呈す。全体にナデ調整された後、円孔のある面のみが丁寧に磨かれる。なお円孔周囲は被熱により白色化している。

SU76 (IV-24 図)

1は肥前系磁器の染付腰張り碗でJB-1-wに分類される。畳付には白色砂粒が付着する。外面には線描きとダミで草花文が描かれる。高台内には一重圈線と銘と思われるものがあるが、欠損しているため判読できない。2は瀬戸・美濃系陶器の丸碗形片口鉢でTC-23-bに分類される。体部にはロクロ目が顕著に残る。高台以外は黄白色の灰釉が施釉されるが、口縁部から体部にかけて緑釉が流し掛けられる。体部外面には溶着痕が3ヶ所、内面には目跡が3個残る。

SK77 (IV-24 図)

1は瀬戸・美濃系陶器の端反形碗でTC-1-zに分類される。胎土は明るい灰色を呈す。TC-1-zは内面が白化粧されるものが多いが、1は内外面に灰釉が施釉され、内面の方を外面より透明感のある灰釉を使用し、内面を外面より白くしている。高台内まで施釉し、畳付周辺のみ釉が拭き取られる。口縁部直下に梅の枝を鉄絵で、その花を白土で描いている。

SL80 (IV-24 図)

1は磁器の鉢でJC-5に分類される。胎土は非常に緻密で、白色を呈す。内外面に透明感のある緑色の青磁釉が施釉される。型作りで、体部には陽刻で龍と波が表現されている。口縁部のヒダの大きさや間隔がやや不揃いである。三田青磁か？。

SK81 (IV-24～32 図)

東大編年VIII b期の示準一括資料である。「天保四歳」(1833)という墨書資料が含まれる。瀬戸・美濃系磁器碗(JC-1)の中でそれまで大半を占めていた端反形碗(JC-1-d)に加え、湯呑形碗(JC-1-e)がみられる。陶器では碗皿以外の器種が目立ち、特に瓶や土瓶の占める割合は大きなものとなっている。瓶では瀬戸・美濃系で二合半の灰釉徳利(TC-10-c)、土瓶では青土瓶(TZ-34-a)の多さが目立つ。土器は少なく、構成器種もかわらけが大半というのではなく、それ以外の器種が目

に付く。中でも塩壺は比較的多く、大部分が口クロ成形無印のもの(DZ-51-w)である。

磁器(1~53, 84) 1~16は碗である。1, 2は景德鎮窯系の青花碗でJA1-1に分類される。ともに胎土は非常に緻密で、灰白色を呈する。両者とも呉須の発色は良好だが、やや滲む。また全体的に青色味を帯びる。外面には花唐草文が描かれ、高台内には角椀銘がみられる。3~10は全て肥前系染付碗である。3, 5は半球形碗でJB-1-fに分類される。ともに細い線描で模様が描かれる。4はJB-1-eに分類される。体部には焼継の痕跡があり、高台内には朱書きで「・」の焼継印を有す。6はいわゆる小丸碗でJB-1-jに分類される。外面には矢羽根文がみられるが、呉須の発色は悪く暗青色を呈す。畳付には溶着痕がみられる。7~9は端反形碗でJB-1-nに分類される。いずれも高台高が高く、外面、口縁部内側、見込みに絵付が施される。7の体部は腰張り気味に直線的に立ち上がり、口縁部の外反は極弱い。高台脇がわずかに面取りされている。8の高台は「ハ」の字状に開き気味である。体部には焼継痕があり、高台内には「十一」と朱書きされている。9は高台脇にも櫛歯文が描かれている。高台内には白玉粉で「×」の焼継印がみられる。10はJB-1-pに分類される。体部は高台から「ハ」の字状に直線的に立ち上がり、高台も「ハ」の字状に開く。11~16は瀬戸・美濃系染付碗である。11~14は端反形碗でJC-1-dに分類される。いずれも胎土はガラス質で白色を呈する。11は口縁直下がわずかに外反し、高台が「ハ」の字状にやや開く。12~14は矮小化し、器高がやや低い。13のみ高台内に角椀銘がみられる。15, 16は染付湯呑碗でJC-1-eに分類される。15は高台高が高く、体部は腰張り気味に、ほぼ垂直に立ち上がる。高台脇は小さく面取りされる。外面には墨弾きとダミで絵付がなされ、口縁部内側にも幅1cm弱の呉須の帯がみられる。16は15より全体的に小振り、外面には丸文と鋸歯文がみられる。高台は四角く削り出した後、さらにその高台脇を削り出し、断面形が階段状を呈す。17, 34は坏である。17は瀬戸・美濃系端反形坏でJC-6-bに分類される。体部は腰張り気味にほぼ垂直に立ち上がり、口縁部が弱く外反する。高台高は高く、畳付は先の16と同様に、断面形が階段状を呈す。外面には瑠璃釉が施釉され、口縁内側にも帯状に瑠璃釉が施釉されるが、釉下には毛彫りの渦文様がみられる。見込みに二重圈線と「宣徳年製」銘、高台内には角椀内に変形字銘がみられる。34は肥前系染付半球形坏でJB-6-fに分類される。胎土は灰白色を呈す。底部は厚く、畳付には白色砂粒が付着する。また、畳付幅が均一ではない。18, 30~33は鉢である。18と33は瀬戸・美濃系染付鉢でJC-5に分類される。18は体部がほぼ垂直に立ち上がる。高台脇は面取りされる。体部の文様は毛彫りした中を呉須で埋めている。33は型作りで、脚部も型作りしたものが貼り付けられている。畳付の幅は均一ではない。胎土は緻密なガラス質で白色を呈す。器面全体に薄黄緑色の青磁釉が施釉され、外面には花卉状の窓枠内に波状文と梅花文の陽刻が交互にみられる。高台内は畳付部分を除き透明釉が施釉される。30~32は肥前系染付鉢でJB-5-bに分類される。30は体部が輪花に型打成形された鉢である。高台断面形はU字状を呈す。外面には山水文がみられるが、口縁部内側にも外面の山水文と一続きになるような絵付が施される。なお30は、同手のものがSK81内に最小個体数で3個体以上あることが確認されている。31, 32はともに口径に比して高台径が小さな半球碗形の鉢である。ともに線描で見込みに環状松竹梅文、また口縁部内側には四方禪文が染付される。19~29は皿である。19~28は肥前系染付皿である。19, 20は見込みに一枚絵が描かれた皿でJB-2-pに分類される。ともに見込みを白土で白化粧した上に染付が施される。19

は口縁が緩やかな輪花に成形される。高台内に目跡が3個と、点刻で「口」に「治」の釘書きがある。20は白化粧が体部外面まで及ぶ。高台内には目跡が1個残る。21は高台高の高い皿でJB-2-eに分類される。19、20と同じく、内外面ともに白化粧された上に染付が施される。高台内にはやや大きめの目跡が3個と、点刻で「ノト」?の釘書きがある。22～27は蛇ノ目凹形高台を有する皿でJB-2-iに分類される。いずれも型打成形により体部が輪花に成形される。22は体部がやや強く内湾して低く立ち上がり、器高も低い。見込みを捻子花状に区画した中を様々な幾何学文様で埋める、いわゆる祥瑞手の絵付が施される。蛇ノ目部分の釉は拭き取られるが、そこには輪状の溶着痕が残る。23は体部が緩やかな「ハ」の字状に直線的に立ち上がり、口縁部付近が弱く括れる。24は口縁が施されるが、ひどくムラがある。蛇ノ目部分に「御次 十枚之内」の墨書があることから、十枚一組であった皿のうちの1枚であったことが推測される。なお、これと同じ墨書が26にもみられるが、26も口縁が施され、内面には山水文が描かれるなど24と同様の意匠であり、同じ組みの皿であった可能性もある。なお24、26の蛇ノ目釉剥ぎ部分には、白化粧が施されている。25の体部には焼継痕がある。27の口縁部には口縁が施されるが、ムラがあり、色調も薄い茶色を呈す。28は見込みに一枚絵が描かれた小振りの染付皿でJB-2-qに分類される。体部は型打成形により輪花にされる。またごく細く口縁が施されるが、幅は均一ではない。29は瀬戸・美濃系染付皿でJC-2-bに分類される。口縁部は外反し、わずかに鏝状を呈す。内面には仙芝祝寿文がみられる。高台内には銘と、点刻で「俵次」の釘書きがみられる。35は肥前系染付猪口でJB-7-aに分類される。体部はわずかに外側に開きながら直立する。蛇ノ目凹形高台を有するが、蛇ノ目部分には砂粒が半円状に付着する。絵付は見込みに崩れた昆虫文のようなものと外面に山水文が施されるが、それらとは無関係に体部内面にまで呉須が飛散している。口縁が施される。36は肥前系染付仏飯器でJB-8-cに分類される。脚部中央付近がわずかに溝状に窪み、その直上と暈付脇に染付圏線が施される。暈付はやや幅広にされ無釉である。37は肥前系青磁の香炉・火入れでJB-9-aに分類される。底部には中央が浅く窪む円盤状の高台と、獣足を3個有す。足には体部同様に青磁釉が施されるが、円盤状の高台は露胎にされている。底部内面に円形の溶着痕がみられる。38～44、84は肥前系の蓋である。38、41、42は染付蓋物の蓋でJB-00-fに分類される。38、42の摘みは橋状、41の摘みは輪高台状を呈す。38は受け部が低く、あわせ部分には砂粒が付着する。39、40は染付碗の蓋である。39は4の蓋でJB-00-a、40は10の蓋でJB-00-dに分類される。43、44は合子の蓋でJB-00-nに分類される。84はJB-00に分類される。外面には呉須で竹と梅が描かれる。土瓶あるいは急須の蓋か? 45～48は肥前系染付蓋物である。45、46、48は丸碗形を呈するものでJB-13-aに、47は筒形を呈するものでJB-13-bに分類される。いずれも暈付及び口縁部内側は無釉である。49は肥前系白磁筒形合子でJB-18-bに分類される。底部は無釉で、高台脇は面取りされる。50は肥前系染付壺でJB-12に分類される。鳥と波をモチーフとした文様が全周している。暈付には白色砂粒が付着する。51、52は瀬戸・美濃系染付水滴でJC-19に分類される。ともに型作りである。51は平面が六角形、器高が低い壺形を呈する。底部は碁笥底にされ、その部分は無釉である。肩部には梅花文、側面には図のように2種類の文様を1単位として6面に絵付が施される。52は平面形が木の葉形を呈す。無釉の底部面には本遺構の廃棄年代を考慮する上で手掛かりとなる「天保/□□□/□月」という墨書がみられる。53は肥前系染付播鉢でJB-29に分類さ

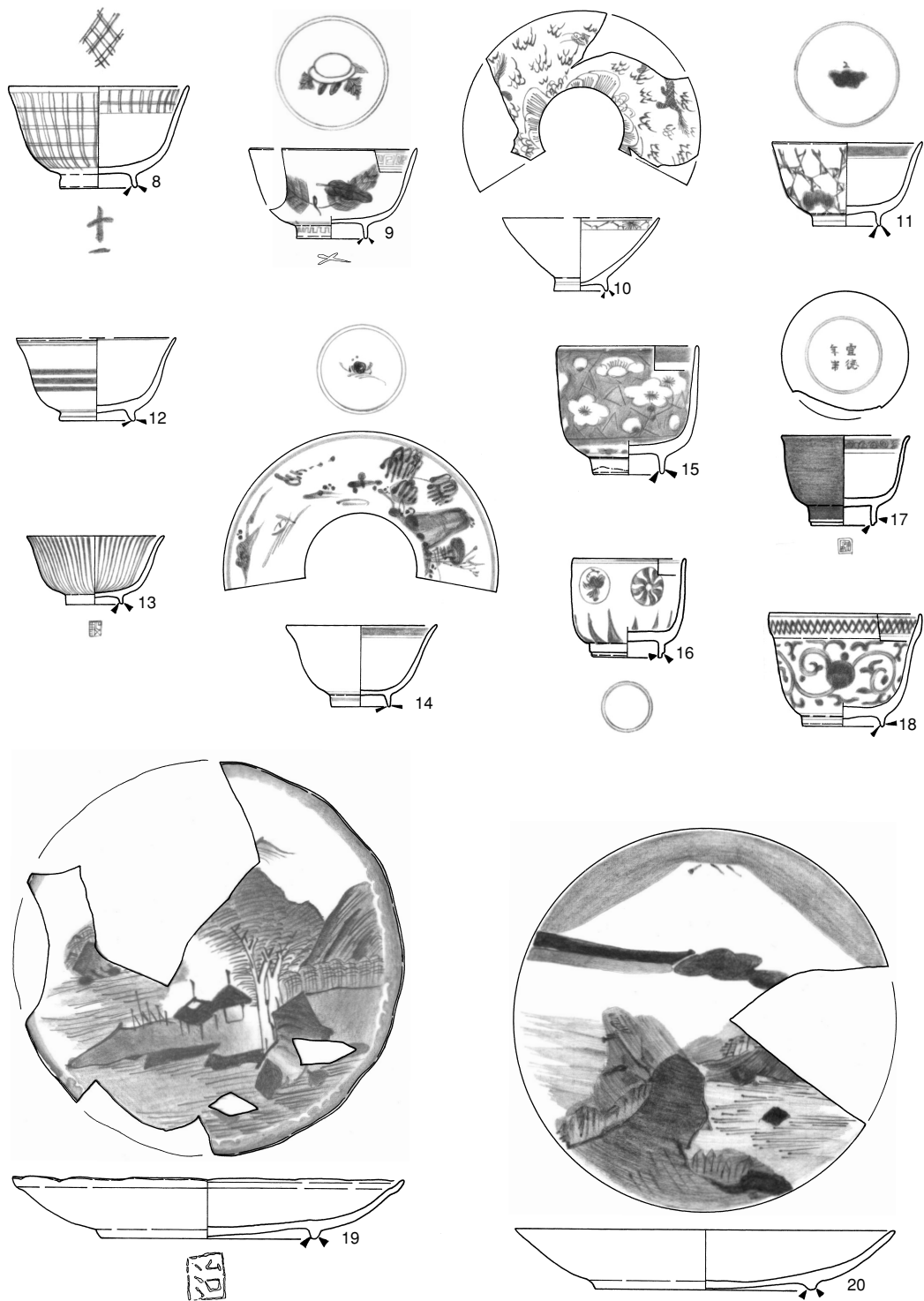
れる。体部は「ハ」の字状に開いて立ち上がり、口縁部は折り返され玉縁状を呈す。外面にはダミと墨弾きによる蓮弁文がみられ、口縁部全帯に染付が施され、その中に斑状に墨弾きがみられる。挿目は16条1単位と非常に細く、口縁部から見込みまで一気にひかれている。なお数ヶ所に鉛ガラス継ぎした痕跡がみられる。

陶器(54~83、85~108) 54~61は碗である。54は瀬戸・美濃系灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。高台は径が大きく、「ハ」の字に開き気味である。また断面はきれいな逆台形を呈するが、畳付中央がごく浅く窪む。底部無釉である。高台内には直径3cm大の輪状の溶着痕が残る。55は京都・信楽系平碗でTD-1-hに分類される。体部は内湾気味に立ち上がる。高台は外側より内側が大きく削り込まれている。また畳付は狭く、高台はやや外側に開き気味である。底部無釉である。56は瀬戸・美濃系刷毛目碗でTC-1-sに分類される。胎土は淡橙色を呈し、内外面に白土で打ち刷毛目が施される。底部は無釉であるが、一部、畳付部分に生乾きのうちに引きずったような痕跡がみられる。57、58は瀬戸・美濃系碗でTC-1に分類される。57の胎土は緻密で、薄い灰色を呈す。体部は底部から横へ大きく張り出し、ほぼ垂直に立ち上がる。高台内側の削りは浅い。高台を除き、斑状に灰釉が施釉される。58の胎土はやや粗く、にぶい肌色を呈す。畳付部分を除き施釉されるが、内面と外面2ヶ所は釉下に白化粧される。外面の白化粧された部分の一方には松、もう一方には竹の鉄絵がみられる。59はTZ-1に分類される。胎土は緻密で灰色を呈す。高台断面は逆台形を呈し、高台脇はわずかに面取りされる。内面には横方向の刷毛目、外面にはイッチンで「海」、「福」、「寿」の3文字がみられる。見込みには目跡が6個残る。60は京都・信楽系のいわゆる小杉碗でTD-1-dに分類される。底部と体部の境にはシャープな面が削り出され、高台脇もシャープに面取りされる。61は京都・信楽系灰釉の端反形碗でTD-1-gに分類される。全体的にやや大きめの貫入が認められる。62~64は瀬戸・美濃系の皿である。62はいわゆる太白手の皿でTC-2-tに分類される。高台は蛇ノ目凹形高台状を呈し、蛇ノ目部分の釉は拭き取られる。63は灰釉のヒダ皿でTC-2-nに分類される。高台内の釉は残され、畳付と高台脇の釉は拭き取られる。64はいわゆる御深井皿でTC-2-eに分類される。見込みには鉄で梅花文の摺絵がみられる。見込みにはベンガラのような赤色の付着物がある。紅皿として使用されたのか? 65~68、70は香炉・火入れである。65、70は瀬戸・美濃系香炉・火入れである。65はTC-9に分類される。胎土は緻密で、灰色を呈す。高台は碁笥底状に削り込まれ、畳付はやや幅広い。底部と体部の境から下は釉が拭き取られる。口唇部には溶着痕と敲打痕が認められる。70は灰釉が施釉された香炉・火入れでTC-9-aに分類される。66は京都・信楽系香炉・火入れでTD-9-cに分類される。胎土は緻密で肌色を呈す。高台は底裏を浅く削り込み、高台脇は小さく面取りされる。口縁部は緑釉が浸け掛けされる。表面には細かな貫入が認められる。底裏には墨書、見込みには輪状の溶着痕がみられる。67、68は産地不明の香炉・火入れでTZ-9に分類される。ともに口唇部には敲打痕が認められる。胎土はいずれも緻密で、67は灰色、68は黄白色を呈す。67は外面と口縁内側に白化粧をした上に透明釉が施釉される。底部内面には直径3cm大の輪状の溶着痕がある。68は畳付以外の内外面に白化粧した上に、外面には染付、口縁内側には透明釉が施釉される。69は瀬戸・美濃系灰釉餌入れでTC-30に分類される。口唇部は無釉で、溶着痕がみられる。底部には右回転糸切り痕と墨書がみられる。71は京都・信楽系灰釉柄杓でTD-32に分類される。体部はやや内傾して立ち上がる。

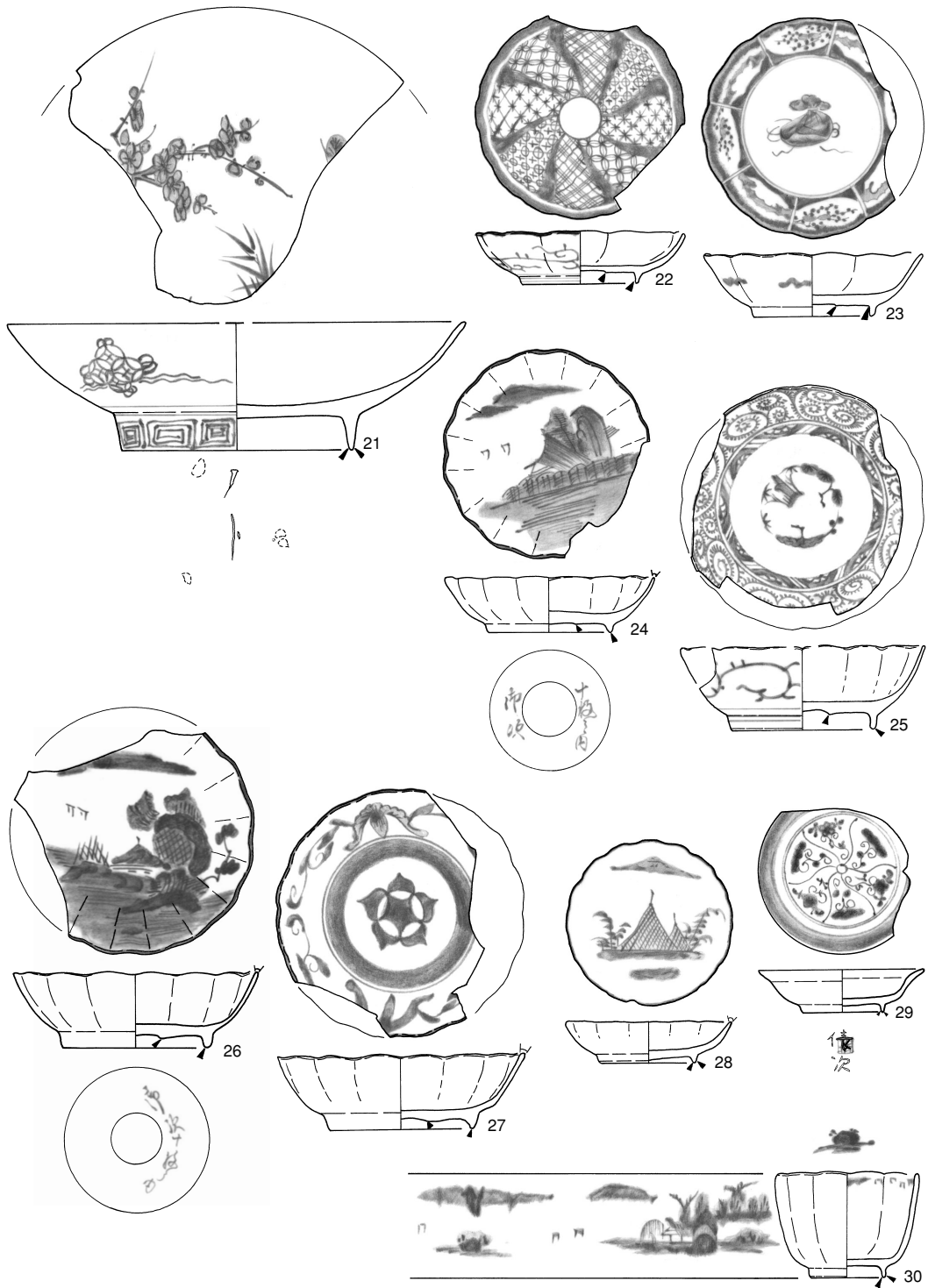
内面には鉄で圏線が1本施される。72、73は瀬戸・美濃系植木鉢でTC-21に分類される。ともに底部中央に円孔を1個有す。72の高台にはアーチ状の削り込みが2ヶ所みられる。外面には灰釉が施釉され、無釉の内面には底部から3cmほど上の部分に、胎土を上から下へ引きずったような痕跡が一周している。また他の陶磁器の釉薬らしきものが溶けて一部付着する。73は体部に足が貼り付けられている。体部は型打成形で、外面には実測図のような陽刻が2単位みられる。全面に施釉される。底部内外面に直径2cm大の目跡が6個残る。74は瀬戸・美濃系の六角形の火鉢でTC-31に分類される。体部は型打成形で外面に陽刻がみられる。内面各角には下から上に指で押さえた縦長の凹みが残るが、角を成形する際に付けられたと考えられる。その凹みと凹みの間は横方向に、底部には渦状になでた痕跡が残る。体部には獣面の外耳を2個、底部には足を3個有す。見込みには長径が1.5cmほどの楕円形の目跡が2個、底部外面には輪状の溶着痕がみられる。なお口縁部には敲打痕が全周し、底部には内側から穿孔したと思われる隅丸方形の穴が少なくとも2個みられる。留穴と思われる。75、76は柿釉に灰釉が流し掛けされた瀬戸・美濃系の甕でTC-15-bに分類される。76は底部が欠損しているため不明だが、75の底部は無釉である。また75は見込みに直径1.5～2cm大の目跡が4個残る。77は柿釉が施釉された鍋でTZ-33-aに分類される。胎土は緻密で、灰色を呈す。口縁部には紐状の把手が1個、底部には団子状の足が2個残る。78、79はいわゆる銭甕あるいは赤津半胴といわれる瀬戸・美濃系の甕でTC-15-aに分類される。胎土はやや粗く、黒い粒が多くみられ、黄白色を呈す。底部を除き内外面に鉄釉が施釉される。ともに口唇部には敲打痕が認められる。78は口唇部の釉が拭き取られる。底裏には右回転糸切り痕が残る。また外側から内側へ穿孔された円孔を1個有する。植木鉢として使用されたものか。80は蒸し器でTZ-53に分類される。胎土は比較的緻密で、薄い灰色から部分的にぶい褐色を呈す。内面は鉛釉、外面には鉄釉が施釉されるが、底部外面は釉が拭き取られている。底部には8個の円孔と足を3個有す。81～83、85～89は蓋である。81、82は鉄釉土瓶の蓋でTZ-00-eに分類される。ともに鉄釉が施釉される。83、85、86は土瓶の蓋である。83は灰釉土瓶の蓋でTZ-00-iに分類される。胎土はやや粗く肌色を呈する。絵付にはイッチンが使用される。85は絞釉土瓶の蓋でTZ-00-fに分類される。胎土は比較的緻密で黄白色を呈す。86は白土染付土瓶の蓋でTZ-00-bに分類される。胎土は緻密でぶい褐色を呈す。摘みの部分は狛犬であろうか。蓋裏には鉄で「道八」と書かれている。87は京都・信楽系ちろりの蓋でTD-00-fに分類される。ごく細い橋状の摘みを有す。無釉の蓋裏には「天保四歳 中邑 青」と墨書がある。88は爛鍋の蓋でTZ-00-nに分類される。胎土は緻密で灰褐色を呈し、外面には鉄釉が施釉される。89は後述する91行平鍋の蓋でTZ-00-jに分類される。胎土は緻密で灰色を呈し、口唇部以外には灰釉が施釉される。90は爛鍋でTZ-17に分類される。胎土は緻密で鈍い肌色を呈し、内外面には鉄釉が施釉される。無釉の受部には輪状に溶着痕がみられる。また底部内面にはわずかにススが付着する。91は行平鍋でTZ-42-aに分類される。胎土は緻密で灰色を呈し、内外面に灰釉が施釉される。把手表面には陽刻がみられるが、釉が厚いために意匠は不明である。92は瀬戸・美濃系のいわゆる汁次でTC-27-bに分類される。外面には鉄釉が、また内面には錆釉が薄く施釉される。口唇部は無釉である。93～95は土瓶である。93は白土染付土瓶でTZ-34-bに分類される。胎土は緻密で灰白色を呈す。内面も施釉されるが口縁部付近は無釉であることから、内面施釉時に釉を開口部から注ぎ入れ、余分な

釉を注口部から外に捨てたものと思われる。注口部裏の穿孔は3個ある。底部外面にはススの付着と「アセ」の墨書がみられる。94は青緑釉の施釉された青土瓶でTZ-34-aに分類される。底部内面には横方向になでられた痕跡が顕著に残る。注口部裏側の穿孔は5個ある。95はTZ-34に分類される。口縁部の大半が欠損しており意匠は不明だが、銹絵染付がわずかに残る。注口部裏側の穿孔は単孔であるが、注口部側の把手の付け根には、焼成前に穿孔されたと思われる直径3mm程度の穴が1個認められる。96、97は播鉢である。96は堺系播鉢でTL-29に分類される。底部には内外面ともに焼台の痕跡があり、環状に浅く凹む。なお内面の凹んだ部分には植物繊維状のものが付着する。播目は9条1単位で施される。97は産地不明の播鉢でTZ-29に分類される。胎土は淡橙色で、長石がやや多く含まれる。体部は「ハ」の字状に大きく開いて立ち上がる。底部はやや丸味を帯びて「ハ」の字状に開く付高台を有す。内外面に鉄釉が施釉されるが、暈付部分の釉は拭き取られる。暈付脇と見込みには粗い砂粒が輪状に付着する。播目は10条1単位で体部から見込みへとひかれる。98～104は瓶である。98～101は瀬戸・美濃系の灰釉が施釉された二合半徳利で、101がTC-10、それ以外は全てTC-10-cに分類される。いずれも頸部は短く、口縁部は完全に折り返されるタイプのものである。98～100には点刻の釘書きがみられ、101には焼成前にヘラのようなもので彫られた文字がみられる。なお98の高台裏には墨書もみられる。102は瀬戸・美濃系の灰釉が施釉された五合徳利でTC-10-dに分類される。底部の釉は拭き取られる。胴部には点刻で「十」の釘書きがある。103、104はいわゆる瀬戸・美濃系のぺこかん徳利でTC-10-gに分類される。底部の釉はともに拭き取られるが、104には溶着痕が残る。なお104の胴部下方には、二次的に直径7mmほどの穴が1つ穿孔されている。105、106は瀬戸・美濃系ひょうそくでTC-44-aに分類される。底部以外の内外面には漆黒釉が施釉される。底裏には右回転系切り痕がみられる。灯心部にはタール状の物が付着する。107、108は透明釉が施釉された京都・信楽系油受け皿である。107はTD-40-bに、108はTD-40-aに分類される。ともに底部無釉であるが、107の底部にはわずかに輪状の溶着痕がみられる。108の底部脇は幅を変えて2回面取りされる。

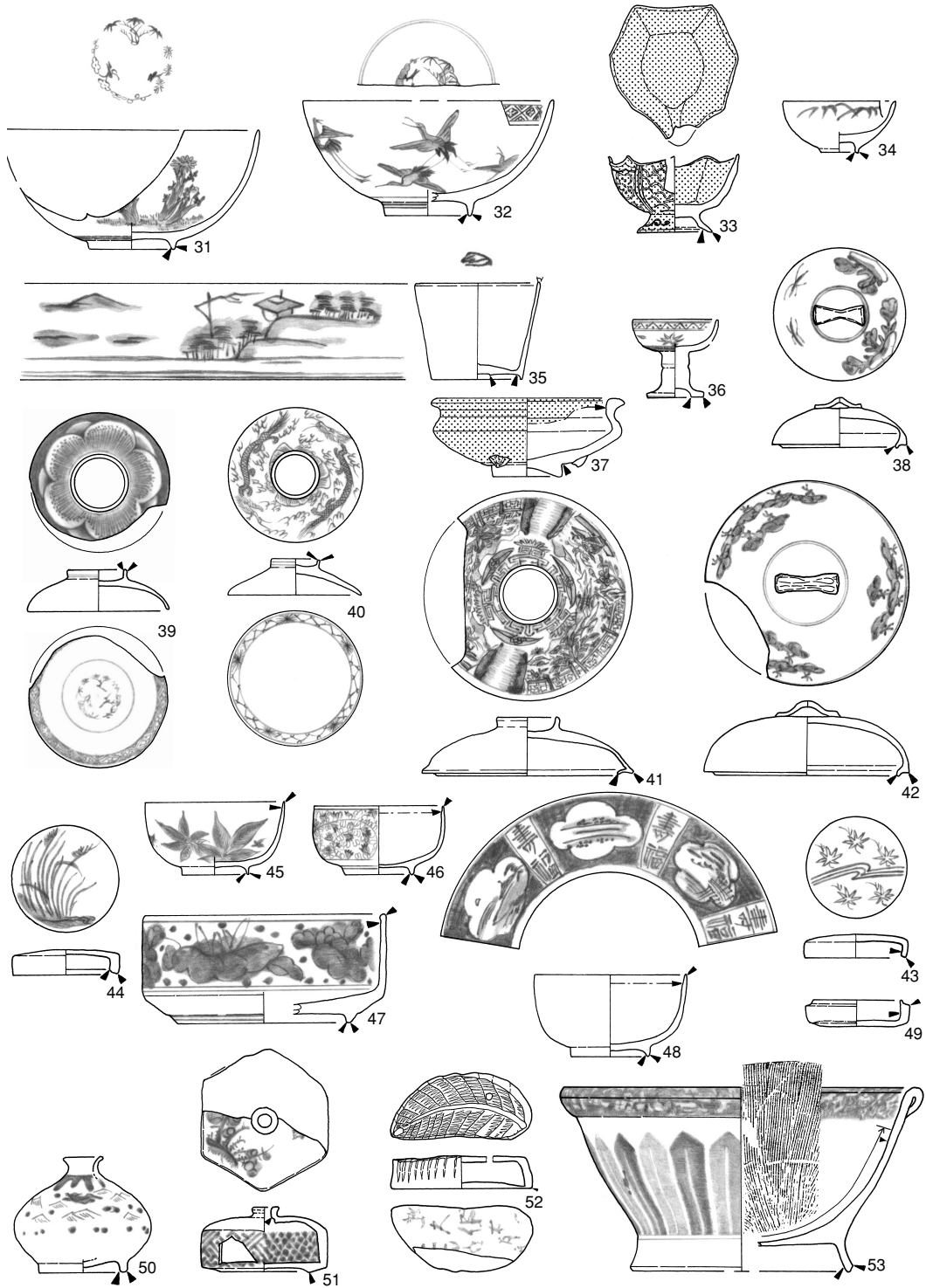
土器(109～123) 109はひょうそくでDZ-44-cに分類される。110～112は皿である。110、111は磨きかわらけでDZ-2-dに分類される。胎土はにぶい橙色を呈す。ともに体部は内湾気味に立ち上がる。外面は底部までミガキ調整され、内面はナデ調整される。112はいわゆる耳かわらけでDZ-2-eに分類される。胎土はにぶい橙色を呈す。内外面ともにナデ調整される。113は瓦質の植木鉢でDZ-21-bに分類される。外面下半分はケズリ調整後にナデ調整されるが、上半分はナデ調整後に先端の丸いもので浅い2本の沈線と、その間に波状文が施される。内面はごく粗くナデ調整される。底部には外側から穿孔した孔が1個と足を3個有する。口縁部内側には敲打痕状のものが認められる。114～116は火鉢である。114は硬質瓦質筒形火鉢でDZ-31-jに分類される。器面には体部上位に沈線を有し、以上口縁部までミガキ、以下は回転工具状のもので縦方向の条線が施される。底部には足を3個有するが、かなり低く退化したものである。115、116は土師質丸火鉢でDZ-31-aに分類される。ともに外面は丁寧になでられる。115の口唇部は水平ではなく、やや斜め上向きに成形されており、体部との境に稜を呈す。底部には足が2個残るが、足の周囲は強くなでられる。116の体部外面には二次的な線彫りが認められる。また口縁部内側はやや煤けている。粗くナデ調整された底部には足が2個残る。117は軟質瓦質の鉢でDZ-5に分類さ



IV-25図 SK81(2) 出土遺物

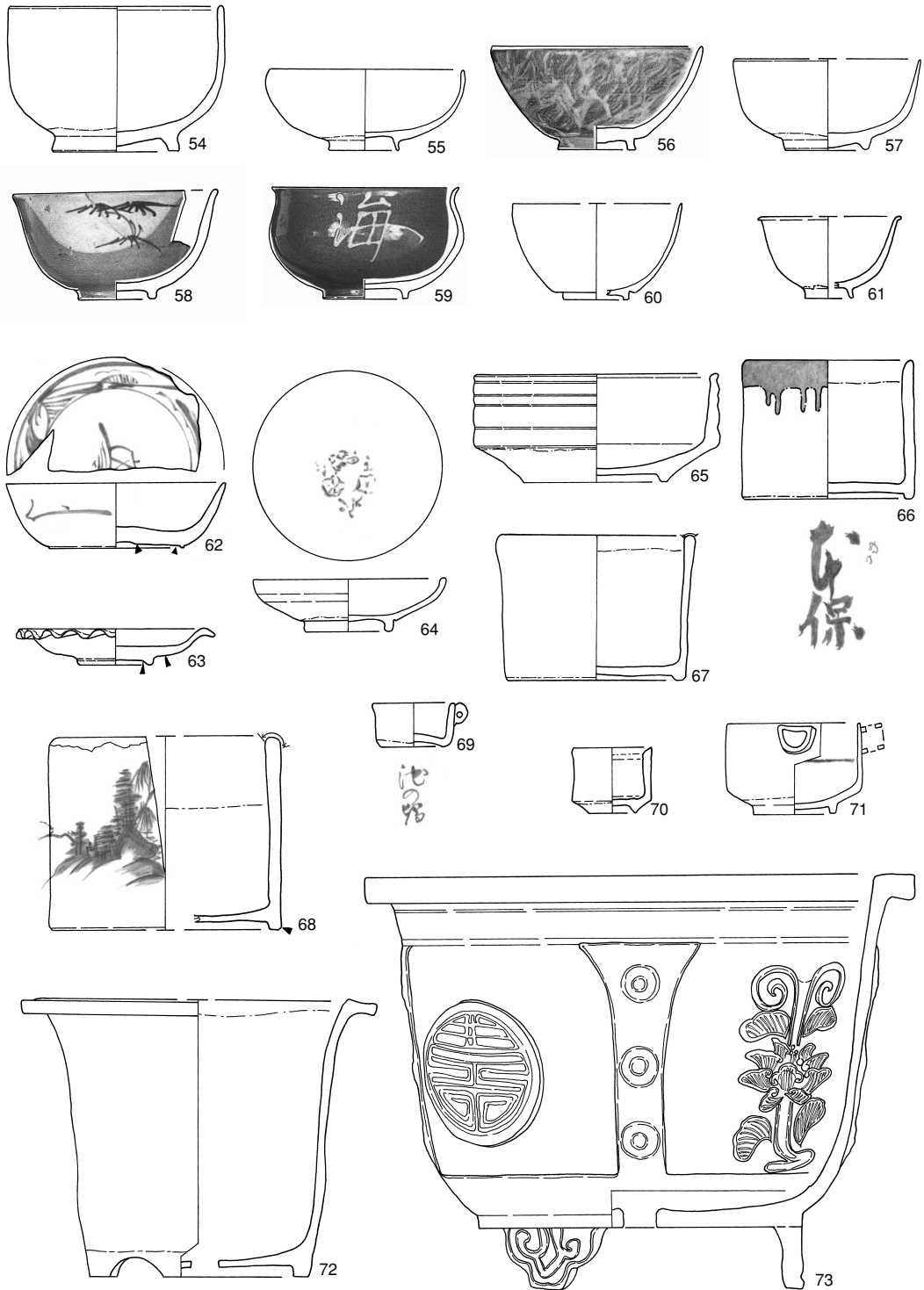


IV-26図 SK81 (3) 出土遺物

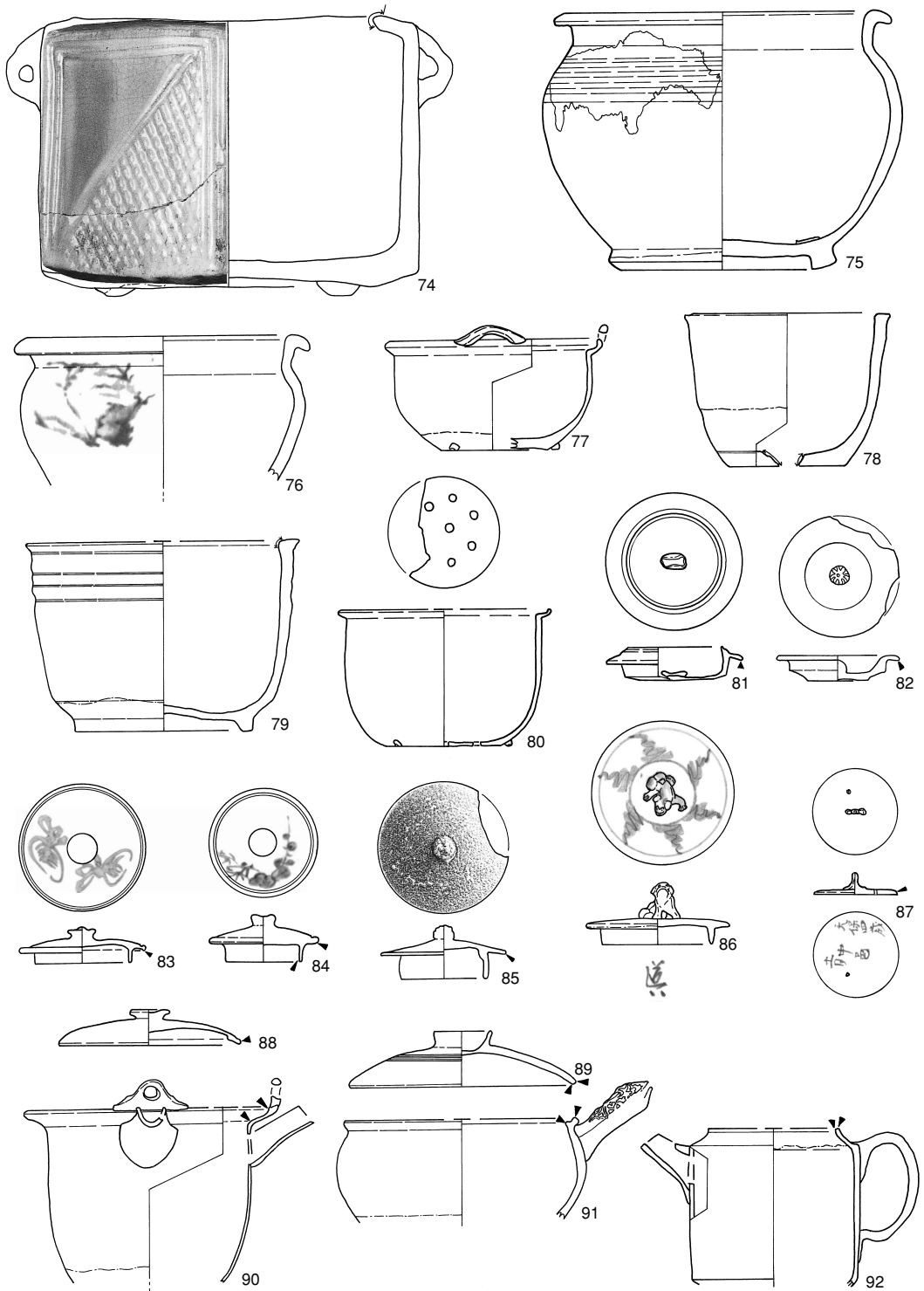


IV-27 図 SK81 (4) 出土遺物

第IV章 出土した遺物

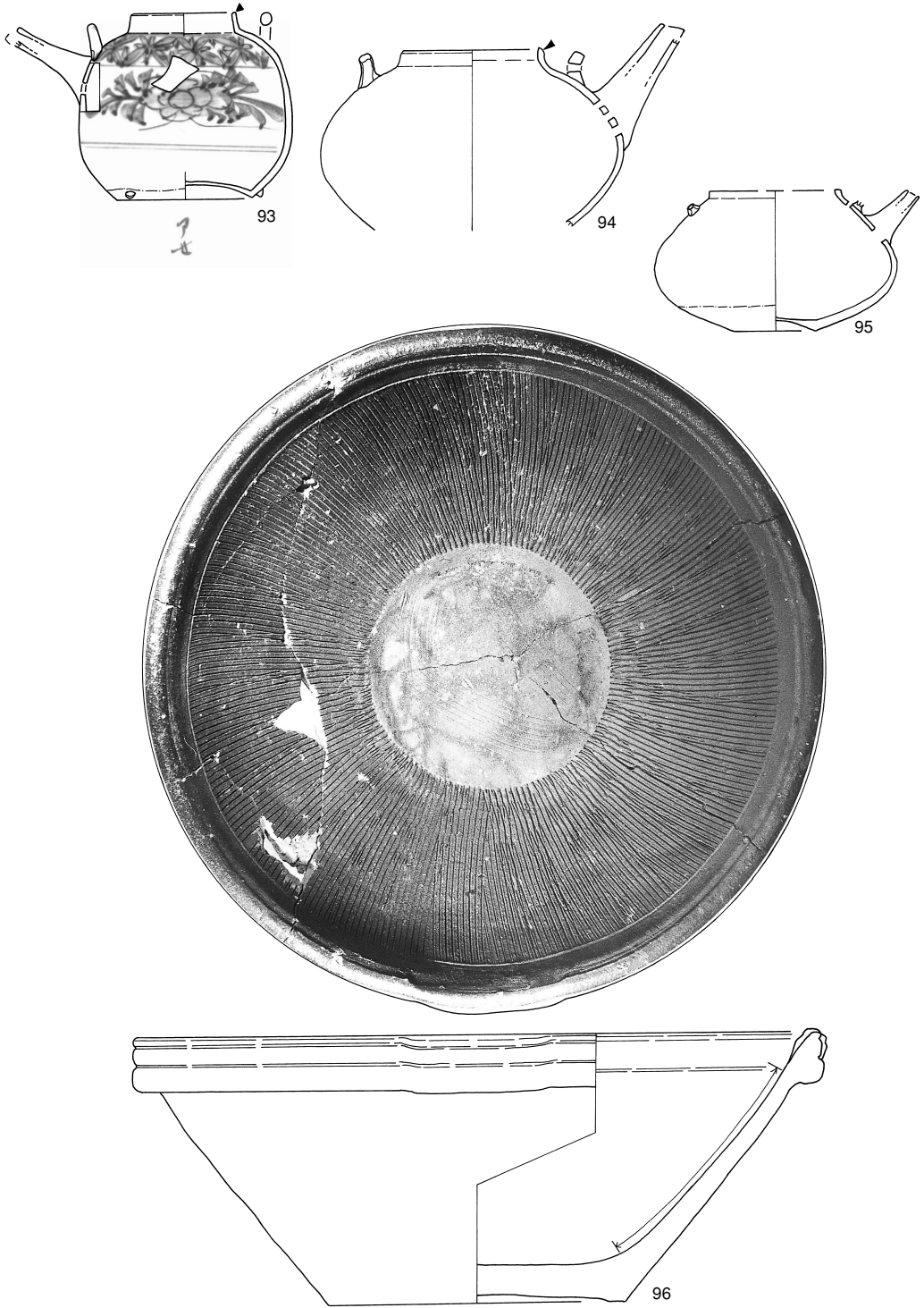


IV-28図 SK81 (5) 出土遺物

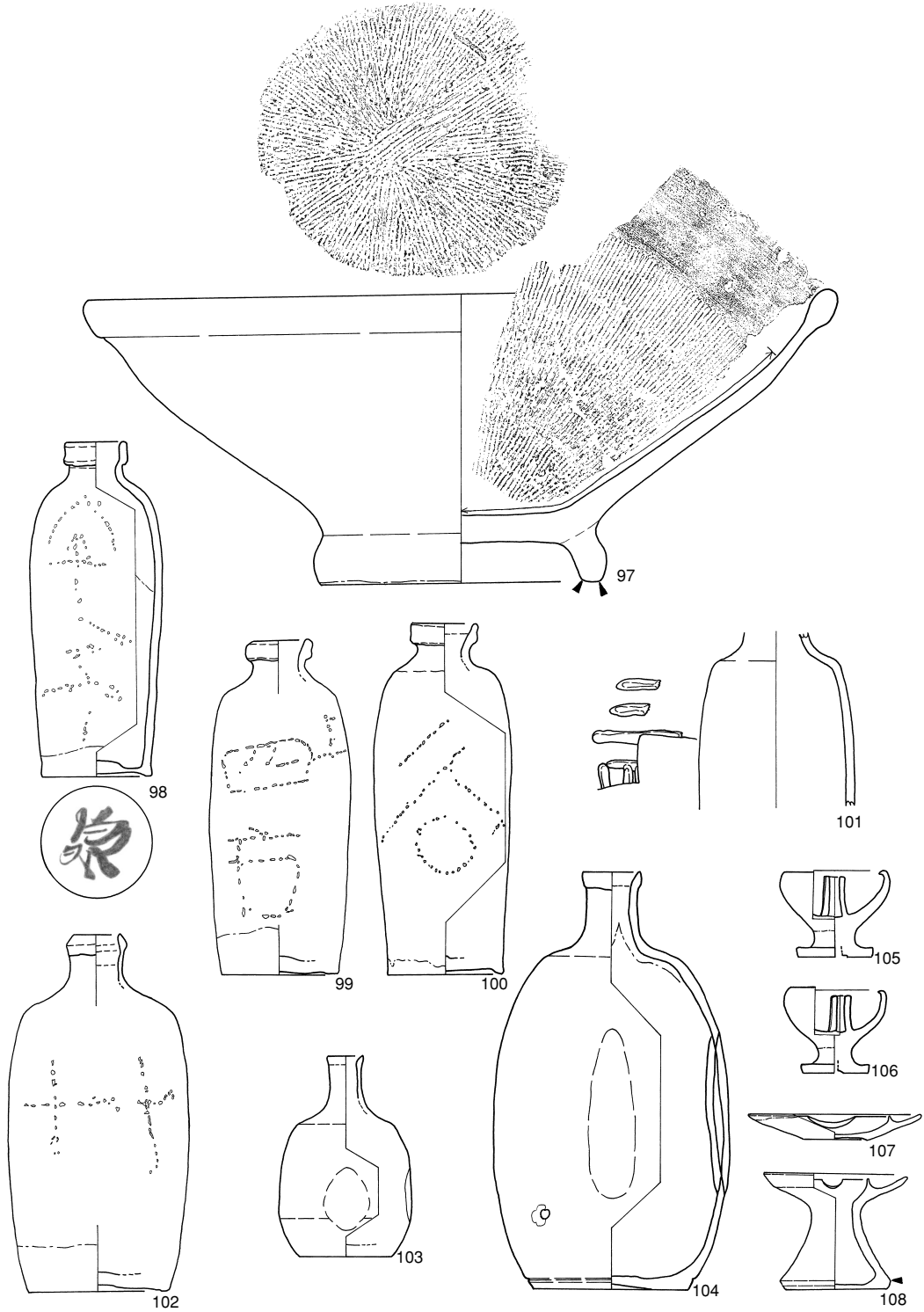


IV-29 図 SK81 (6) 出土遺物

第IV章 出土した遺物

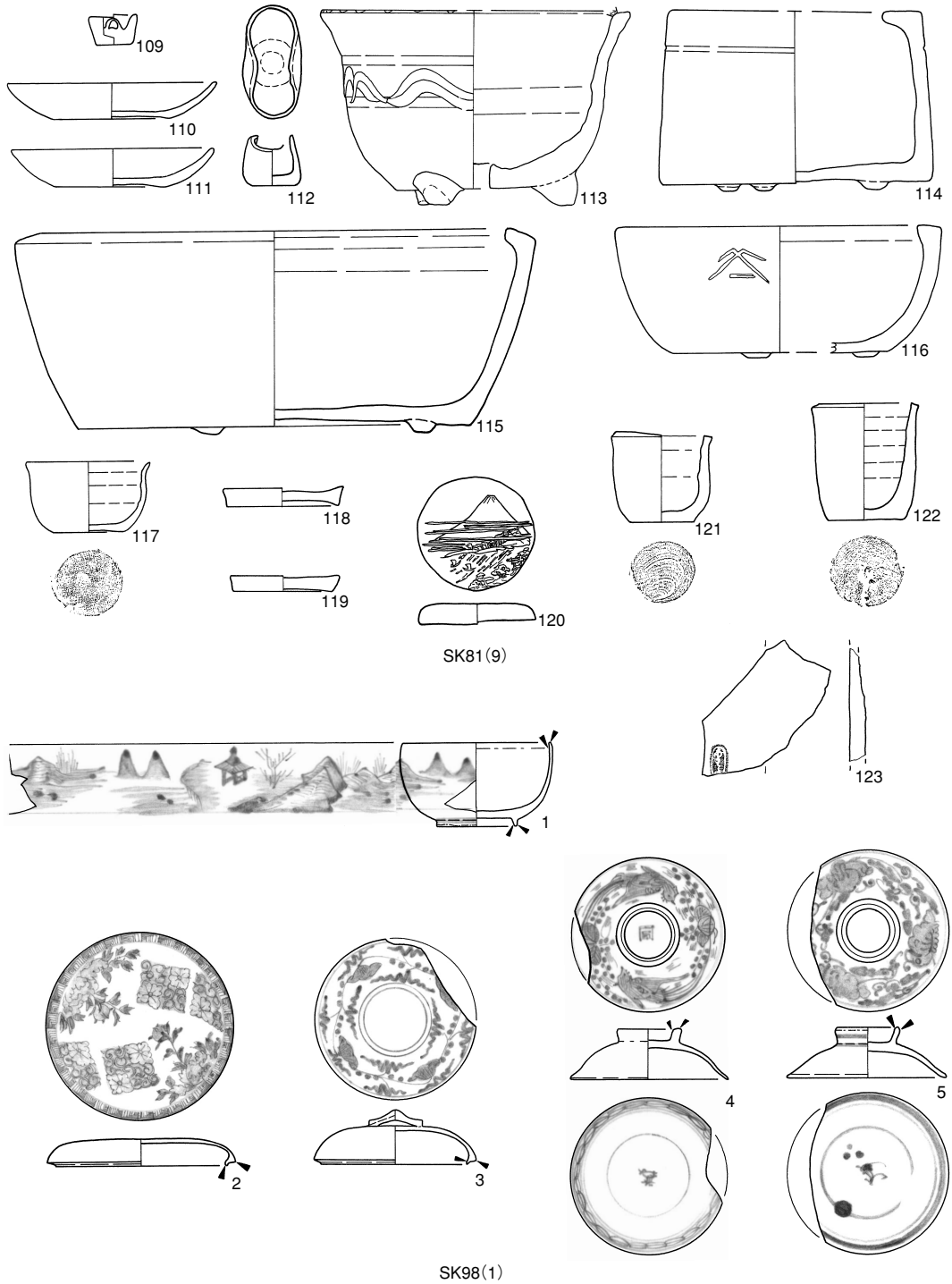


IV-30 図 SK81 (7) 出土遺物



IV-31 図 SK81 (8) 出土遺物

第IV章 出土した遺物



IV-32 図 SK81 (9) ・ SK98 (1) 出土遺物

れる。外面はナデ調整されるが、内面は凹凸が残る。また底裏には左回転糸切り痕がみられる。118～120は蓋である。118、119は塩壺蓋でDZ-00-dに、120はDZ-00に分類される。120の胎土はにぶい橙色を呈し、表側には松林と雲と富士山のモチーフが陽刻される。裏面は未調整で凹凸が著しい。121、122はロクロ成形無印塩壺でDZ-51-wに分類される。ともに受け部の退化が著しく、底裏には左回転糸切り痕が残る。胎土は121が橙褐色、122がにぶい橙色を呈す。123は刻印のある土器片である。胎土は灰白色で、やや砂粒を含む。外面はナデ調整されるが、内面はロクロ目が顕著に残る。刻印の左脇にはスリットがみられることから涼炉の破片とも考えられる。

SK98 (IV-32・33 図)

1～5は磁器で、1～3は肥前系(JB)、4、5は瀬戸・美濃系(JC)である。1は染付丸碗形の蓋物でJB-13-aに分類される。高台脇がわずかに面取りされる。呉須の発色は良いが釉ムラがある。2～5は蓋である。2、3は染付蓋物の蓋でJB-00-fに分類される。3は橋状の摘みを有す。ともに受け部のところに白色の付着物がみられる。4、5は染付端反碗の蓋でJC-00-bに分類される。4は摘み端部が幅広く平らで、摘みの中には角椀銘がみられる。

6～14は陶器である。6、7は蓋である。6は灰釉土瓶の蓋でTZ-00-gに、7は三彩土瓶の蓋でTZ-00-cに分類される。7の裏側中央は5方向が面取りされる。8～14は瀬戸・美濃系の瓶である。いずれも口縁部は完全に折り返され、頸部は短くなっている。8～10は二合半徳利でTC-10-cに分類される。灰釉が浸け掛けされる。8は口唇部の釉が拭き取られる。胴部には点刻で「ツ」「一△」の釘書きがある。9の胴部には点刻で「一△▽」の釘書きがある。また高台内には「一△」の墨書がみられる。なお、8、9の胴部には他の陶器片が溶着している。10の胴部にも点刻で「〇越」の釘書きがある。11は灰釉が施釉された五合徳利でTC-10-dに分類される。底部の釉は拭き取られるが、溶着痕がみられる。胴部には点刻で「久〇」の釘書きがある。12は灰釉が施釉された一升徳利でTC-10-eに分類される。11同様、底部の釉は拭き取られる。底部には墨書で「久〇」と書かれ、高台脇にも墨書がみられる。13、14はいわゆるぺこかん徳利でTC-10-gに分類され、胴部2ヶ所が窪んでいる。底裏の釉はいずれも拭き取られている。またどちらも肩部と頸部との境に輪状の溶着痕がみられる。

15～19は土器である。15は底部に左回転糸切り痕のある皿でDZ-2-bに分類される。胎土は橙色を呈す。見込み中央が弱く盛り上がり、底部と体部の境の断面には切れ目が観察される。16、17は硬質瓦質丸火鉢でDZ-31-dに分類される。16の口縁部外側は磨かれている。それ以下は表面が剥落しているため確認できないが、わずかに底部脇にナデ調整後に櫛目状に縦線が施されている事がわかる。ナデ調整された底裏には足を3個有すが、その先端はやや摩滅している。17の体部外面は3本の沈線により上下2段に区画され、その中は回転工具による縦方向の櫛目状模様が見られる。口縁部外側と体部沈線の間はミガキ調整される。口縁部には敲打痕とともに、施文する際に工具が接触したような凹みがみられる。底部には足を3個有す。18、19は塩壺の蓋でDZ-00-dに分類される。

SK99 (IV-34 図)

1～3は陶器である。1は爛徳利でTD-4に分類される。胎土は非常に緻密で、灰白色を呈す。底部以外は灰釉が施釉され、胴部には鉄絵がみられる。表面には非常に細かい貫入が多くみられる。



IV-33 図 SK98 (2) 出土遺物

底部外周は小さく面取りされ、底裏中央には朱書きがみられる。口縁部は二次的にケズリ調整された痕跡が認められる。2は灰釉が施釉された瀬戸・美濃系二合半徳利でTC-10-cに分類される。底部は無釉である。胴部には点刻で「久〇」の釘書きがある。被熱している。3は急須の蓋でTZ-00-sに分類される。胎土は緻密で、黄白色を呈す。外面は白化粧の上に赤色で上絵付されていたようだが、剥落のため意匠は明らかでない。

4、5は土器である。4は油受け皿でDZ-40-bに分類される。受け部はかなり退化し、口径部より低くなっている。表面の剥落が著しいが、透明釉が施釉されていた痕跡が残る。底裏には左回転糸切り痕がみられる。口縁部にはわずかに灯心痕が付着する。5は硬質瓦質丸火鉢でDZ-31-dに分類される。外面は口縁下の沈線まで磨かれ、それ以下は回転工具状のもので縦方向の櫛目状の文様が帯状に6単位みられる。底部には3足を有するが、その中央は径4cmほどの円形に内外面ともわずかに白色化している。

SE100(IV-34・35図)

本遺構の遺物の大半が被熱している。同一の器形、文様の製品が複数まとまって出土している事、積み重ねられた状態で被熱したような例が比較的多く確認された事などから、屋敷内で収納されていたものが火事で焼けたために一括して廃棄された遺物群であると推測される。なお遺物群の様相から、この火事は天和2(1682)年の「八百屋お七の火事」であろうと思われる。

磁器(1～21) 全て肥前系磁器(JB)である。1～3は碗である。1、2は高台断面が三角形を呈する染付碗でJB-1-cに分類される。1は器面が青味を帯び、暈付には砂粒が付着する。見込みに二重圏線とワンポイントという組み合わせの絵付がみられる。高台内には「大明成化年製」銘を有する。2も高台内に「大明年製」銘がみられる。3は青磁染付碗でJB-1-dに分類される。底部は1/2しか残存していないが、見込みには二重圏線の中に団龍文、高台内には二重角粹銘が確認できる。被熱している。4～12は皿である。全て被熱しているが、胎土は白く、絵付も繊細で丁寧な筆描きのものであり、有田の柿右衛門窯や南川原窯・窯ノ辻窯などの製品と思われる。また組物として揃えられたらしく、同一の物が複数個体確認されている。4～7、12はいずれも高台断面が三角形を呈するものでJB-2-cに分類される。4は柿右衛門様式の色絵皿で、呉須の上に赤、青、緑の各色を用いて上絵付がなされる。口縁部は輪花にされている。高台内には一重圏線の中に銘がみられるが、欠損しているため判読できない。また高台内にはハリ支え痕が1個残る。5の染付皿は本遺構内において、最小個体数で5個体確認されている。高台にはハリ支え痕が2個残る。6は細片のため全体的な意匠は不明であるが、内面は実測図にあるような輪郭線のみを呉須で太く描いた白抜きの花と、ダミを使用した桐の花とを交互に、しかも上下にわずかにずらした絵付がなされていたものと思われる。7は口縁部が細かい輪花状を呈する型打成形された白磁皿である。体部内面に窓絵状の陽刻がみられる。高台内にはハリ支え1個と、放射状のカンナ目が認められる。また暈付には白い砂粒がやや多く付着する。本遺構内において、最小個体数で4個体確認されている。12はかなり腰が張った白磁小皿であり、器高も低い。釉下の体部外面の調整は粗く、器面にやや凹凸がみられる。8、10、11は高台断面がシャープなU字状を呈する染付皿でJB-2-dに分類される。本遺構内において8、10が最小個体数で3個体、11が2個体確認されている。なお8、10は重ねられた状態で被熱したことを窺わせる溶着痕が外面に認められる。8は高台内に一重圏

線と「大明成化年製」銘を有する。10は口銹を有する。破片から、高台内に一重圈線と「大明成化年製」銘を有することが明らかとなっている。11も口銹を有する。破片から、見込みに手描きの四弁花文が施されていることがわかっている。9は糸切り細工貼付高台を有する染付皿でJB-2-rに分類される。平面及び高台は隅丸の菱形を呈す。やや高めの高台には雷文がみられる。本遺構内において最小個体数で2個体確認されている。13は白磁坏でJB-6-bに分類される。型打成形で内面には陽刻がみられるが、欠損しているため意匠は明らかでない。器壁は極めて薄い。外面には高台脇から体部1/2まで放射状のカンナ目が残る。14は染付水注でJB-27-aに分類される。内面にはロクロ目が顕著に残る。15～21は染付蓋物である。これらは全て被熱している。15は16と、17は18と、20は21と蓋と身の関係にある。15、17、20の蓋はJB-00-fに分類される。16の身は丸碗形を呈すると考えられるものでJB-13-a、18、19の身は筒形を呈するものでJB-13-bに分類される。18の畳付は幅広の蛇ノ目高台状を呈する。19の体部外面は窓絵状に山水文を配し、その間を唐草文で埋めている。高台脇には細い沈線が巡り、その部分に呉須で圈線を描いている。21はわずかに残存する底部の様子から段重と考えられる。JB-13-cに分類される。

陶器 (22～24) 22、23は碗で、ともに被熱している。22は肥前系のいわゆる京焼風陶器でTB-1-bに分類される。口縁部はやや外反し、高台内には直径1cmほどの円形の浅い削り込みと、行書体の「清水」の刻印を有す。23は京都・信楽系の碗でTD-1-cに分類される。胎土は緻密で灰白色を呈する。口縁から体部3/4まではロクロ目が、以下高台までは放射状のカンナ目が顕著にみられる。畳付には細かい砂粒が多く付着する。外面には鉄の摺絵の菊花文が3ヶ所に配される。高台内には直径5mm程度の浅い円形の削り込みと、「粟田口」の刻印を有す。24は丹波系の播鉢でTK-29に分類される。体部外面には指圧痕が多数みられる。播目は7条1単位で施される。

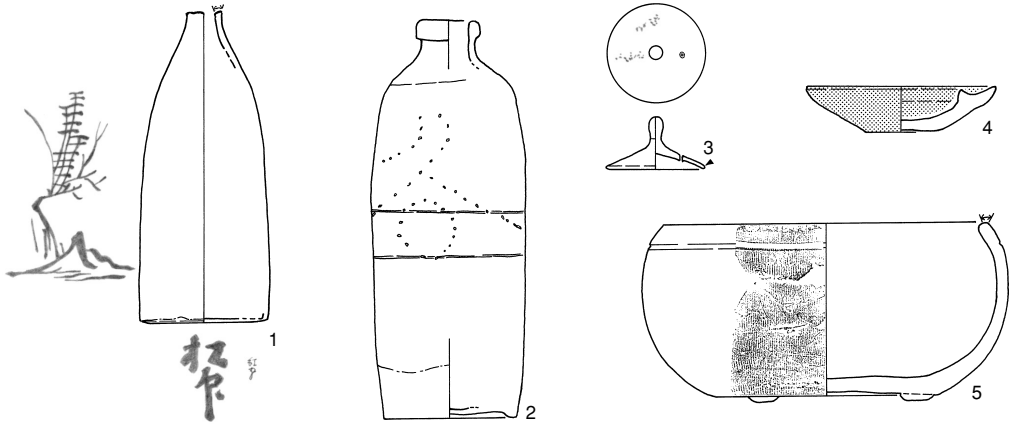
土器 (25、26) 25、26は磨きかわらけでDZ-2-dに分類される。胎土は25は橙褐色、26は肌色を呈す。ともに底部外面はケズリ調整後に平滑にミガキ調整されているが、25の底裏中央には左回転糸切り痕が残る。底部中央が内外面とも円形に黒色化している。

SK102 (IV-36 図)

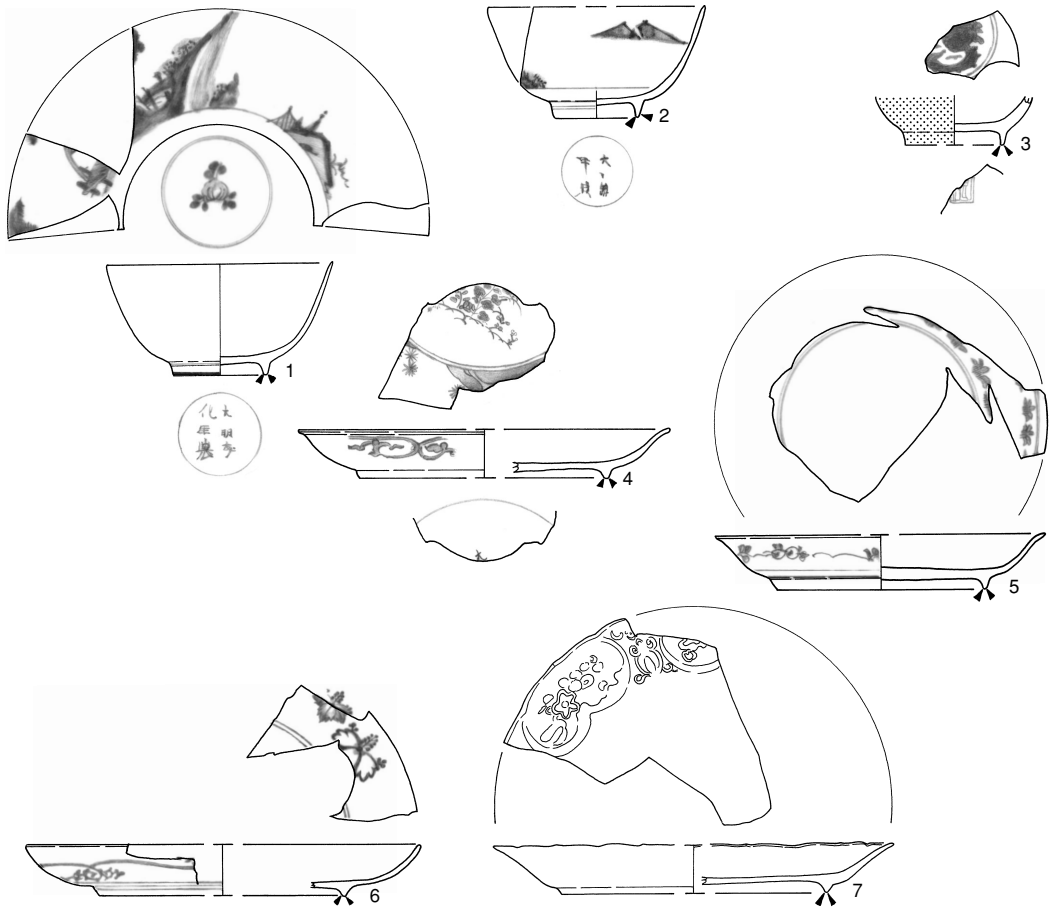
資料の大半は被熱しており、遺物の様相から元禄16(1703)年の火事により廃棄されたものと考えられる。

1～6は肥前系磁器(JB)である。1～3は肥前系染付皿でJB-2-eに分類される。いずれも高台内には目跡が1個残る。3の見込みにはコンニャク印判による五弁花文と、高台内に一重圈線と銘がみられる。また口銹を有する。4も染付皿であるが、その意匠からミニチュアであろうと思われる。型作りで、見込みにはコンニャク印判による五弁花文がみられる。JB-61に分類される。5は染付仏飯器でJB-8-cに分類される。外面にはコンニャク印判による五弁花文が巡る。6は染付筒形蓋物でJB-13-bに分類される。7はラッキョウ形を呈する瀬戸・美濃系陶器の瓶でTC-10-eに分類される。容量は1升以上あろうか。全体的に鉄釉が施釉されるが、頸部付近にはうのふ釉が流し掛けされる。なお、底部の釉は拭き取られる。8は板作成形2ピースの塩壺で大枠「泉州麻生」刻印を有する。DZ-51-iに分類される。口縁部から体部1/3のあたりまで筋状の横線がみられる。また器面には指紋がやや多く認められる。内面には粗い布目がみられるが、部分的に布目が縦方向になで消されたようになっている。外面の体部下端の一部にはススが付着する。

第IV章 出土した遺物



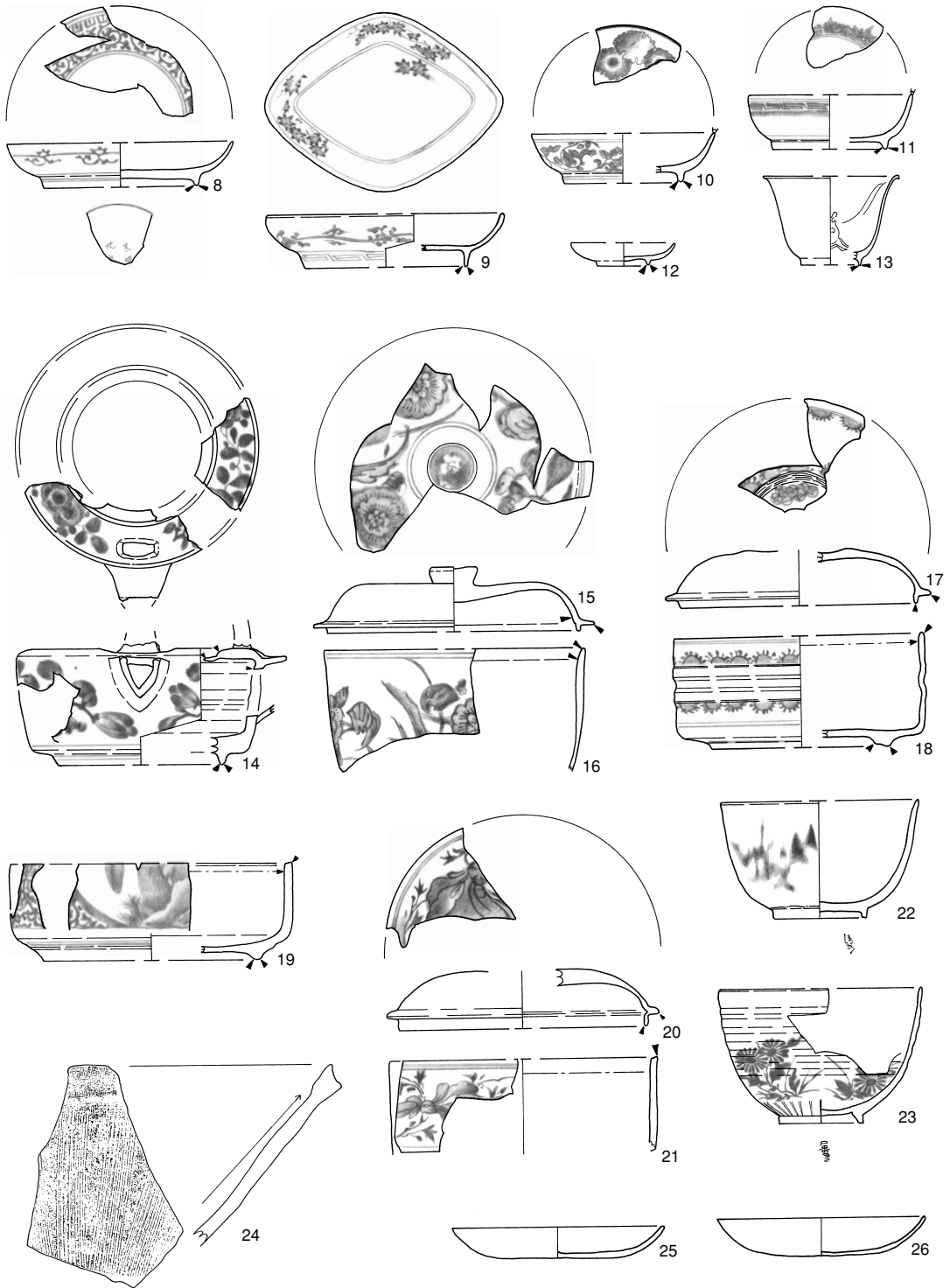
SK99



SE100(1)

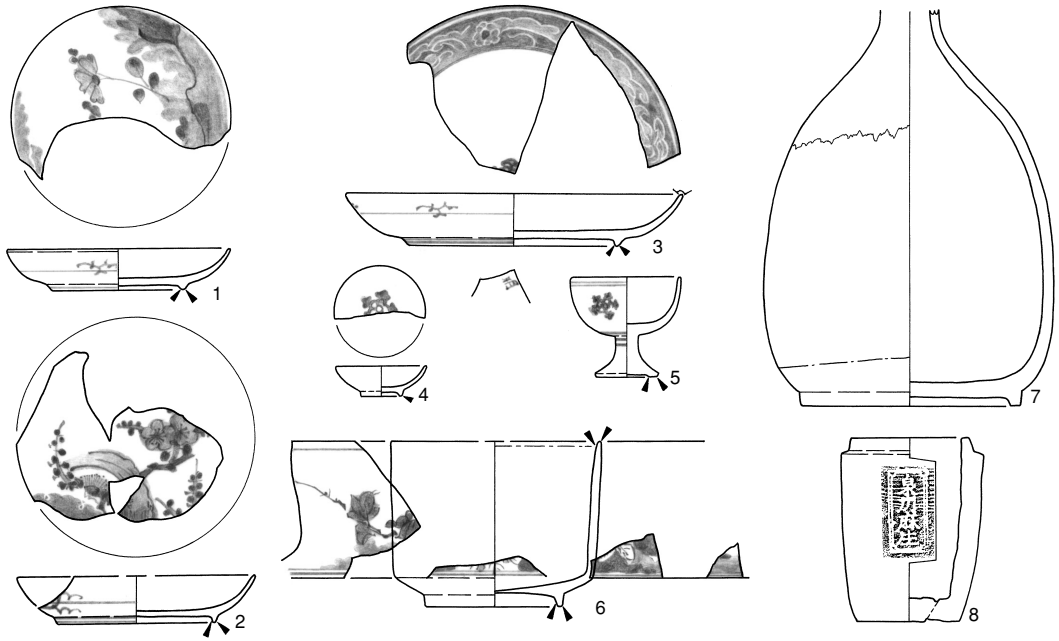
IV-34 図 SK99・SE100(1) 出土遺物

第IV章 出土した遺物

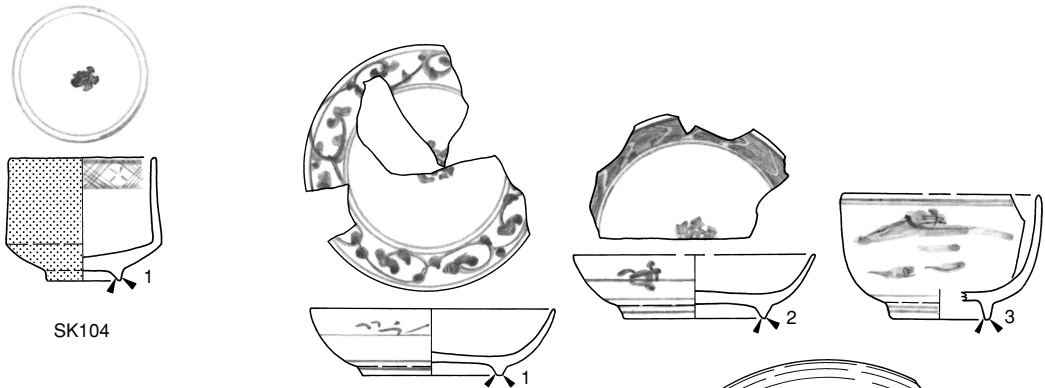


IV-35 図 SE100 (2) 出土遺物

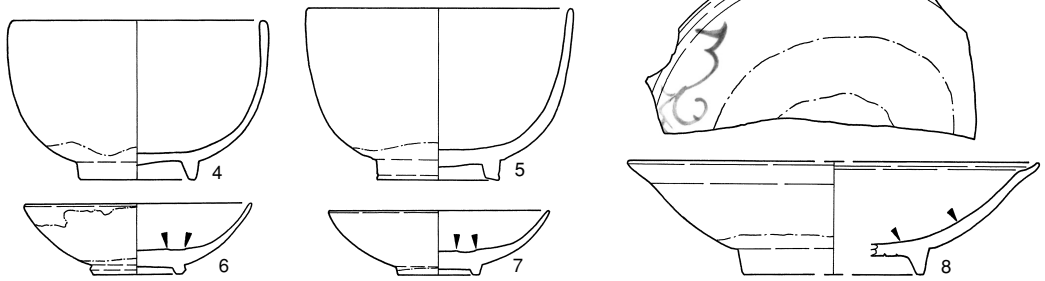
第IV章 出土した遺物



SK102



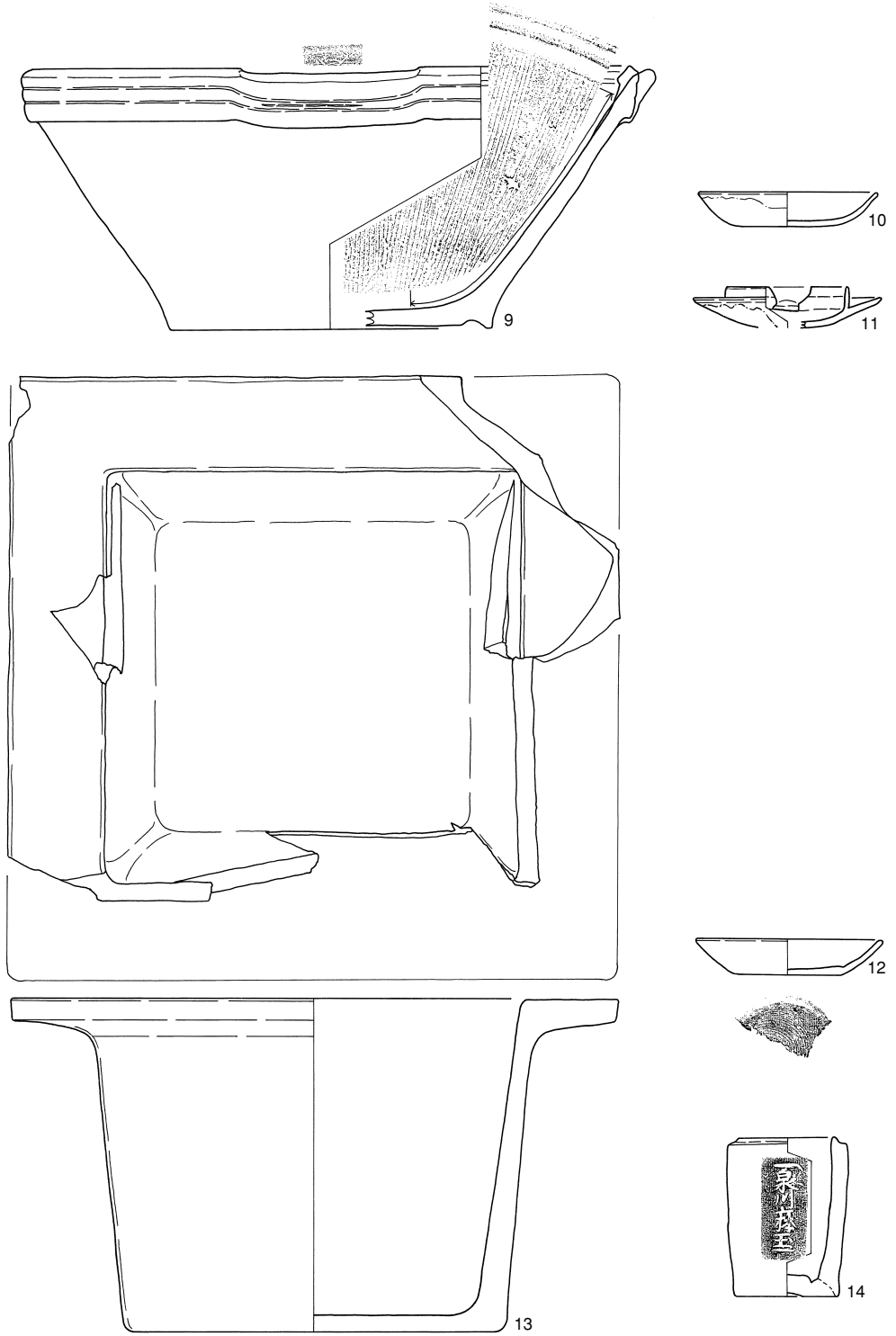
SK104



SE105(1)

IV-36図 SK102・SK104・SE105(1) 出土遺物

第IV章 出土した遺物



IV-37 図 SE105 (2) 出土遺物

SK104 (IV-36 図)

1は肥前系磁器の青磁染付筒形碗でJB-1-1に分類される。胎土は淡灰色で、呉須及び青磁釉の発色は悪い。見込みにはコンニャク印判による五弁花文、口縁部内側には四方禪文がみられる。

SE105 (IV-36・37 図)

1、2は肥前系磁器の染付皿でJB-2-eに分類される。ともに胎土が淡灰色を呈し、呉須の発色も悪く黒ずむ。また見込みにはコンニャク印判による五弁花文がみられる。1のみ被熱している。

3～11は陶器である。3～5は碗である。3は肥前系の陶胎染付碗でTB-1-fに分類される。器高がやや低い。呉須の発色は悪く黒ずみ、外面の山水文も雑である。4、5は瀬戸・美濃系灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。4の胎土は黄白色を呈する。体部は内湾気味に立ち上がり、器高がやや低い。5の胎土は淡灰色を呈する。体部は開き気味に、ほぼ垂直に立ち上がる。畳付内側が外側より若干低い。被熱している。6、7、10は皿である。6、7は肥前系青緑釉皿でTB-2-aに分類される。6の高台脇は面取りされる。10は志戸呂系の皿でTF-2に分類される。胎土は橙褐色を呈し、内面及び外面口縁部付近に鉄泥が施される。8は瀬戸・美濃系輪禿鉢でTC-5-cに分類される。口縁部はやや外反し齔状を呈する。口縁部内側には唐草状の染付がみられる。9は堺系播鉢でTL-29に分類される。高台を有し、その内側には焼台の痕跡がわずかながら認められる。注口部には扇形に「上長」の刻印を有す。播目は12条1単位で施される。11は志戸呂系油受け皿でTF-40に分類される。胎土は淡灰色を呈し、内面及び外面の口縁部付近のみに鉄泥が施される。円筒状の受け部分と体部との境には、相対する位置にレンズ状のスリットを2個有す。底部にはほぼ受け部と同径の重ね積み痕が残る。

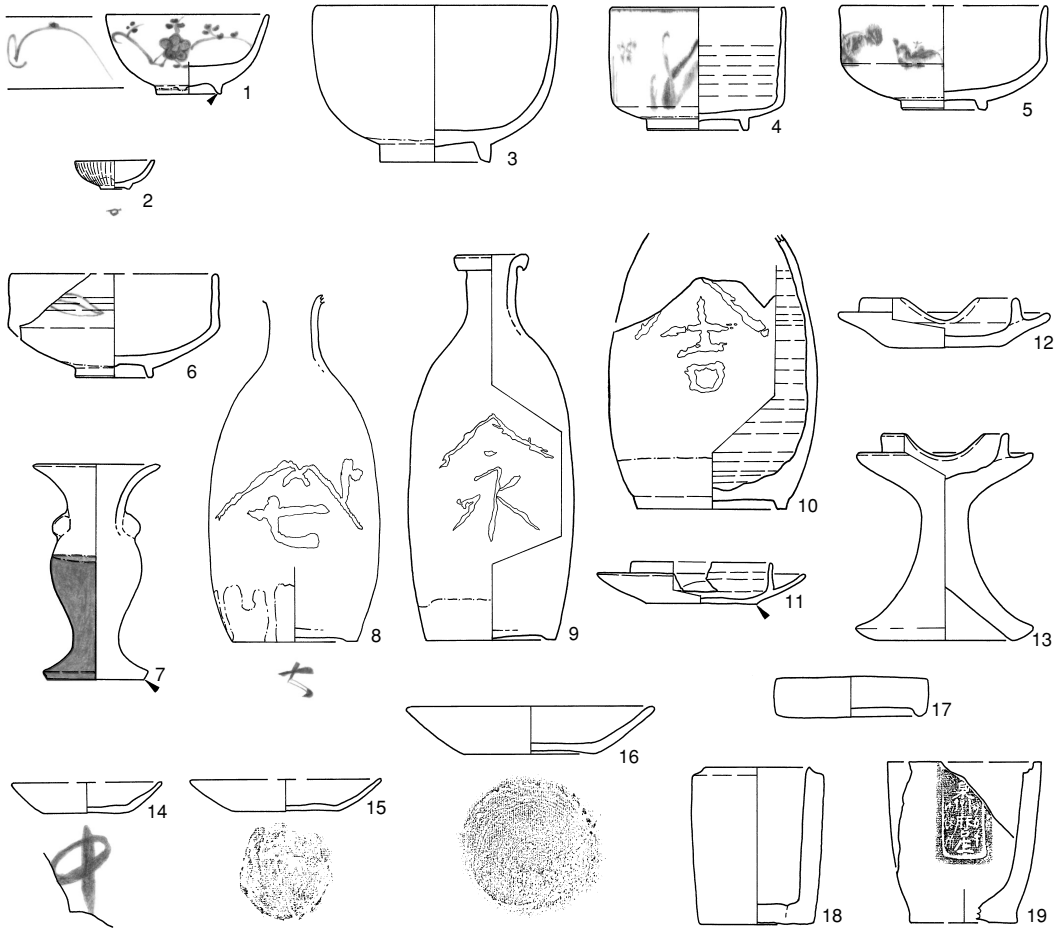
12～14は土器である。12は底部に左回転糸切り痕がある皿でDZ-2-bに分類される。胎土は橙褐色を呈し、口縁部にはススが付着する。13は土師質角火鉢でDZ-31-cに分類される。胎土はにぶい橙褐色を呈す。齔状を呈する口縁部内側は面取りされる。底部外面以外はナデ調整されるが、外面は内面より丁寧である。口縁部は被熱し、赤色化している。14は板作成形3ピースの塩壺で「泉川麻玉」の刻印を有す。DZ-51-mに分類される。胎土は橙褐色を呈す。底裏には板目状の痕跡がみられ、中央の粘土塊のまわりがやや窪んでいる。刻印付近の内外面は、ススが付着したのか黒色化している。

SU115 (IV-38 図)

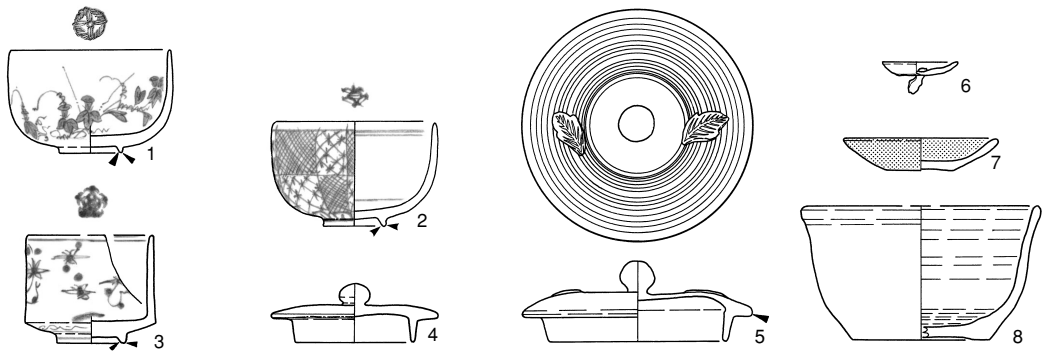
1、2は肥前系磁器 (JB) である。1はくらわんか手の染付碗でJB-1-vに分類される。胎土は淡灰色を呈し、底部は非常に厚い。口縁部から1cmほど下に、径3mmほどの焼成前のものと思われる小穴が1ヶ所確認される。2は白磁のいわゆる紅皿でJB-6-eに分類される。型作りで、外面には縦しのぎがみられる。底部付近のみ無釉である。

3～11は陶器である。3～6は碗である。3は瀬戸・美濃系の灰釉薄掛け丸碗でTC-1-cに分類される。体部は垂直に立ち上がるが、口縁部はやや内湾する。畳付内側が外側より低く成形されている。4は京都・信楽系筒形碗でTD-1-jに分類される。外面には錆絵染付と口錆がみられる。高台脇はわずかながら面取りされる。5、6は京都・信楽系の半筒形碗でTD-1-iに分類される。ともに高台脇は面取りされ、見込みには目跡が2個残る。5の外面には鉄絵、6の外面には白土による絵付がなされる。7は瀬戸・美濃系花生けでTC-22-bに分類される。上方には灰釉、下方には鉄釉が

第IV章 出土した遺物



SU115



SK131

IV-38 図 SU115・SK131 出土遺物

掛け分けられる。肩部には団子状の外耳を2個有す。底裏には左回転系切り痕がある。8～10は瓶である。8、9は灰釉が施釉された瀬戸・美濃系二合半徳利でTC-10-aに分類される。ともに胴部はラッキョウ形を呈し、頸部は長い。8は口縁部が欠損しているため定かではないが、9は口縁部が完全には折り返されておらず、水平に張り出している。ともに底部釉は拭き取られ、胴部にはベタ書きの釘書きがみられる。なお8の底裏には墨書もみられる。10は灰釉が施釉された瀬戸・美濃系五合徳利でTC-10-dに分類される。胴部はラッキョウ形を呈し、うのふ釉が流し掛けられる。胴部にはベタ書きで「山」に「吉」の釘書きがみられる。11は志戸呂系油受け皿でTF-40に分類される。底裏以外は鉄泥が施される。円筒状の受け部分と体部との境には相対する位置にレンズ状のスリットを2個有す。なお皿部分には、付随するものか定かではないが鉄塊が1つ付着する。

12～19は土器である。12、13は油受け皿で、胎土は橙褐色を呈する。ともに受け部にU字状のスリットを1個有す。12はDZ-40-dに、13はDZ-40-cに分類される。14～16は底裏に左回転系切り痕がある皿でDZ-2-bに分類される。いずれも胎土は肌色を呈す。14の見込みにはわずかに凹凸がみられ、底裏には「中」の墨書がみられる。15の体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部付近でごく弱く外反する。見込みはわずかに膨らんでいる。表面は著しく摩滅している。16の体部は「ハ」の字状に立ち上がり、口縁部は内傾しているため、体部と口縁部の境に明瞭な稜がみられる。体部外面にはナデ調整した痕跡がみられる。口縁部にはススが付着する。17は塩壺蓋でDZ-00-cに分類される。胎土は橙色を呈し、内面には細かな格子状の布目がみられる。18、19は塩壺である。胎土はともに橙色を呈す。18は板作成形2ピースの塩壺でDZ-51-abに分類される。表面の摩滅が著しく刻印の有無は定かではない。19は板作成形2ピースの塩壺で、「サカイ 泉州麻生 御塩所」の刻印を有す。DZ-51-kに分類される。底裏中央は粘土塊を入れるために調整されたものなのか、斜めに浅く削り込まれている。

SK131 (IV-38 図)

1～3は肥前系磁器の染付碗である。1、2はいわゆる小丸碗でJB-1-jに分類される。ともに外面と見込みにワンポイントの染付が施される。3は染付筒形碗でJB-1-lに分類される。見込みにはコンニャク印判による五弁花文がみられる。4、5は陶器の蓋である。4は鉄釉土瓶の蓋でTZ-00-eに分類される。胎土は赤褐色を呈する。5は灰釉が施釉された蓋でTZ-00に分類される。胎土は灰色味を帯びた黄白色を呈する。器面には比較的細かい沈線と葉形の貼付がみられる。土瓶の蓋か？。6は胎土が肌色を呈する皿形の燭台でDZ-52-bに分類される。焼成後に穿孔されたと思われる径3mmほどの底部中央の穴には、灯心として使用したと推測される鉄の塊が差し込まれている。7は内外面ともに透明釉が施釉された土器皿でDZ-2-hに分類される。胎土は橙色を呈する。口唇部にはわずかにススが付着する。8は胎土が肌色を呈する土師質の鉢でDZ-5-aに分類される。外面はナデ調整されているが、内面はロクロ目が顕著に残る。植木鉢か。

SK133 (IV-39 図)

いずれも土器である。1は土師質丸火鉢でDZ-31-aに分類される。胎土は肌色を呈す。内外面はナデ調整、口唇部は丁寧ミガキ調整される。内面の体部下端には上から下にナデたような痕跡が残る。口縁部内側には敲打痕とススやタール状のものが付着する。底裏は縮緬状を呈すが、足の周囲はなでられている。2、3は塩壺蓋でDZ-00-cに分類される。胎土はともに橙色を呈するが、3

の胎土中には金雲母が多くみられる。

SK134 (IV-39 図)

いずれも陶器である。1は鉄釉土瓶の蓋でTZ-00-eに分類される。胎土は赤褐色を呈し、黒色の粒子を多く含む。摘みは宝珠形を呈す。2は堺系挿鉢でTL-29に分類される。挿目は8条1単位で施される。

SK137 (IV-39～44 図)

遺物群の様相から東大編年V b期に該当する遺構一括資料である。磁器碗では肥前系(JB)のいわゆる半球形碗(JB-1-f)やくらわんか手の碗(JB-1-g)が中心を占め、磁器皿では肥前系の浅手の丸皿(JB-2-e)、深手の皿(JB-2-fなど)、見込み蛇ノ目釉剥ぎ皿(JB-2-m)に加えて、蛇ノ目凹形高台で高台高の低いもの(JB-2-j)が含まれている。陶器碗では、瀬戸・美濃系(TC)碗のバリエーションが豊富であり、京都・信楽系(TD)の半球形碗(TD-1-1)や半筒形碗(TD-1-i)などが目立つ。なお、京都・信楽系の製品は、碗以外の器種(花生、灰落し、土瓶など)も多くみられる。

磁器 (1～28) 1～8は染付碗である。1が景德鎮窯系(JA1)、2～8は全て肥前系磁器(JB)である。1は青花碗でJA1-1に分類される。口唇部にはいわゆる虫喰いがみられる。被熱している。2は高台断面がU字状を呈する染付碗でJB-1-eに分類される。高台はやや内傾している。外面には菊花文と氷裂文がみられる。3～7は染付半球形碗でJB-1-fに分類される。絵付はいずれも手描きで施される。4は体部が大きく張り出し、やや扁平な半球形を呈す。5の高台内には二重角枠の渦福銘がみられる。7は高台と体部の境に鋸歯状の絵付が施される。8はくらわんか手の碗でJB-1-gに分類される。外面にはコンニャク印判による桐文がみられるが、やや滲み輪郭線があまり明確でない。9、10、12～17は皿である。9は景德鎮窯系の色絵皿でJA1-2に分類される。内外面に黄釉が施釉され、高台内には染付による二重圏線と銘がみられる。被熱している。10は高台断面が三角形を呈する初期の色絵皿でJB-2-cに分類される。赤色で圏線を描き、黒色で輪郭線を描いた上を黄色や緑色で彩色している。ただし破片のため全体の意匠は不明である。被熱している。12、14、15は高台断面がU字状を呈する染付皿でJB-2-eに分類される。12はやや浅めの皿で、高台高も低い。裏文様には花唐草、見込みには一枚絵が描かれている。畳付には砂粒が多く付着する。14は深めの皿であるが、高台高は低い。見込みにコンニャク印判による五弁花文、高台内には一重圏線と銘がみられる。15は体部がやや直線的に立ち上がる。見込みにコンニャク印判による五弁花文がみられる。底部はややへたり気味で、高台内中央には砂粒が付着する。13は腰が張り、口縁部が緩やかな輪花に成形された染付皿でJB-2-fに分類される。見込みにダミと墨弾きの細線を用いて絵付が施される。裏文様には輪郭線のない太めの如意頭唐草文がみられる。高台内には目跡が1ヶ所、一重圏線とやや崩れた「大明年製」銘がみられる。16は蛇ノ目凹形高台を有する染付皿でJB-2-jに分類される。高台高は低く、高台内中央には「富貴長春」銘を有する。17は見込み蛇ノ目釉剥ぎされた染付皿でJB-2-mに分類される。高台径は小さく、やや内傾している。釉剥ぎ部分には輪状の溶着痕がみられるが、一部分釉剥ぎ部分をはみ出して窯着痕がみられる箇所もある。11、18は鉢である。11は体部が輪花に型打成形された白磁鉢でJB-5-fに分類される。見込みはわずかに円形に凹み、体部との境には段差が生じている。18は染付丸碗形の鉢でJB-5-bに分類される。外面には松竹梅が配され、見込みに手描きによる五弁花文、高台内には

二重角枠の渦福銘がみられる。19～22は坏である。21が白磁、他は全て染付である。19～21は丸碗形の坏でJB-6-a、22は半球碗形の坏でJB-6-fに分類される。23、24は染付猪口でJB-7-bに分類される。24の見込みにはコンニャク印判による文様が認められる。また高台内には二重角枠銘がみられる。25は染付長頸瓶でJB-10-aに分類される。畳付は内外から面取りされシャープな作りである。26は色絵段重と考えられるものでJB-13-cに分類される。いわゆる金襴手で、外面には染付の上に金、緑、赤色で上絵付が施される。27、28は蓋である。27は白磁壺の蓋でJB-00-gに分類される。白磁釉はやや青味を帯びる。28は染付蓋物の蓋でJB-00-fに分類される。橋状の摘みを有す。

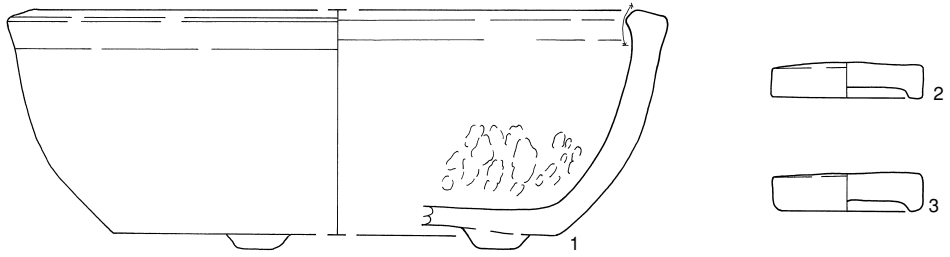
陶器(29～79) 29～43、46、47は碗である。29、46、47は肥前系の碗である。29は陶胎染付でTB-1-fに分類される。体部は腰張り気味にほぼ垂直に立ち上がる。器壁はかなり厚い。畳付には鉄釉が施される。46、47はいわゆる京焼風陶器の平碗でTB-1-cに分類され、見込みに崩れた鉄絵山水文がみられる。47は鉄絵の発色が悪く薄い。なお47の外面には施釉時の手痕と思われる円形の凹みが1ヶ所みられ、この部分は無釉である。30～34、40は瀬戸・美濃系の碗である。30は体部に段を有する灰釉碗でTC-1-fに分類される。削り出し高台で、畳付にはわずかに糸切り痕跡が残る。内外面に鉄釉が流し掛けされる。渦巻き状に削り込まれ高台内には、「万や」「町方大」の墨書がみられる。31～33は灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。いずれも器高が高い大振りの碗で、高台は「ハ」の字に開き気味である。31は高台無釉で、高台内に墨書「口(廣カ)」が1字みられる。32は口縁下がわずかに括れ、口縁部が弱く外反する。高台は無釉であるが、畳付には窯着痕が残る。33の体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部はやや内傾する。畳付以外全て施釉される。34は口縁部に染付がみられる碗でTC-1に分類される。体部中程でわずかに内傾し、いわゆるせんじ碗のように体部が屈曲する。高台内は螺旋状に削り込まれている。全体に釉を化粧掛けし、その上から再度釉が高台を除き施釉される。畳付部分の釉は拭き取られる。40はいわゆるせんじ碗でTC-1-1に分類される。外面には銹絵染付が施される。35～39、41～43は京都・信楽系の碗である。35～39は半球形碗でTD-1-bに分類される。胎土はいずれも緻密で、38は淡灰色、他は全て乳白色から黄白色を呈す。絵付は35、37は銹絵染付、36は鉄絵と白土、38、39は色絵付が施される。なお37は銹絵染付の上にさらに色絵が施される。また高台内には墨書がみられる。41、42は半筒形碗でTD-1-iに分類される。41は器高が低く、体部中程は強く屈曲し、その部分から口縁部までの立ち上がりはやや短い。畳付脇は面取りされ、高台内中央には半円形の浅い削り込みがみられる。外面には白土と鉄絵により絵付が施される。見込みには目跡が3個残る。42は41より大振りで、高台は「ハ」の字状に開き、畳付幅がやや広い。外面には鉄絵で生垣のような格子文が描かれている。見込みには径3mm大の目跡が1個残る。43は灰釉筒形碗でTD-1-jに分類される。高台内は螺旋状に削り込まれている。口銹が施される。44、45、48～50は皿である。44、45は肥前系の皿である。44の胎土は緻密で、黄白色を呈する、いわゆる卵手といわれるものである。見込みにはわずかに陰刻と砂目が1個みられる。TB-2-dに分類される。45は見込み蛇目釉剥ぎされた青緑釉皿でTB-2-aに分類される。胎土はやや粗く、淡灰色を呈す。JB-2-aに分類される皿は、内面が青緑釉、外面は透明釉というパターンが大半であるが、これは淡い青緑釉に濃い青緑釉が流し掛けされている。高台には整形時のカンナ目が残る。

48～50は瀬戸・美濃系の皿である。48、49はいわゆる御深井の皿でTC-2-eに分類される。48は底部無釉であるが、49は畳付以外全て施釉される。ともに見込みに摺絵が施されるが、48は鉄、49は呉須によるものである。なお49の口縁部欠損部分には一部ススのようなものが付着しており、灯明皿に転用された可能性もある。50はTC-2に分類される。体部は六角形に型打成形される。高台は碁笥底状に浅く削り込まれ、高台内は無釉である。51、52は鉢である。51は肥前系刷毛目鉢でTB-5-aに分類される。胎土は橙色を呈す。見込みには4個の楕円形の砂胎土目が残し、高台脇は面取りされる。高台内には墨書がわずかに残る。52は瀬戸・美濃系灰釉輪赤鉢でTC-5-cに分類される。釉剥ぎ部分には輪状の窯着痕がみられる。53は瀬戸・美濃系の鉄釉二耳壺でTC-15に分類される。肩部にはうのふ釉が流し掛けされる。底裏は全体的に煤け、内面に茶褐色の付着物がみられる。54は京都・信楽系の色絵の花生でTD-22に分類される。胎土は緻密で白色を呈す。金色で大まかな下絵を描き、その上に赤と白色(緑か?)幹や枝、松葉を描いている。内面は胴部中央あたりから底部にかけて釉が拭き取られる。底裏脇は面取りされる。なお無釉の底裏には朱で文字か記号のようなものが上絵付される。55、56は灰落しである。55は瀬戸・美濃系の長筒形灰落しでTC-24-bに分類される。底裏は蛇ノ目高台状に削り込まれている。底部以外は灰釉が施釉され、一部鉄絵が残る。56は京都・信楽系の灰落しでTD-24に分類される。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、肌色を呈す。外面には透明釉が施釉された上に金、緑、赤色の上絵付が施される。口縁部には敲打痕が認められる。57は瀬戸・美濃系の灰釉香炉・火入れでTC-9-aに分類される。底部は碁笥底状に削り込まれる。わずかに残る口縁部が緩やかに波打っていることから、平面形は円形ではない可能性もある。58は京都・信楽系の段重でTD-13-bに分類される。外面は鉄絵と白土で竹と梅が描かれている。59～68は蓋である。59、60は鉤状摘みを有する瀬戸・美濃系の壺・甕の蓋でTC-00-aに分類される。60は無釉である。ともに底部には右回転系切り痕跡が残る。61は橋状摘みを有する瀬戸・美濃系壺・甕の蓋でTC-00-bに分類される。鉄釉が施釉されるが、無釉の底裏には左回転系切り痕跡が残る。62は鉤状摘みを有する京都・信楽系蓋物の蓋でTD-00-aに分類される。外面には銹絵と白土で菊花が描かれる。63は瀬戸・美濃系水注の蓋でTC-00に分類される。底裏以外は鉄釉が施釉される。64、66は京都・信楽系の土瓶の蓋でTD-00に分類される。65は外面に銹絵染付が施された土瓶の蓋でTZ-00-rに分類される。受け部以外は内面にも透明釉が施釉される。67、68は爛鍋の蓋である。67は外面に柿釉が施釉された蓋でTZ-00-nに分類される。ドーム形の形状を呈し、浅い皿形の摘みを有する。68は灰釉が施釉された蓋でTD-00-nに分類される。扁平な形状で、浅い皿形の摘みを有する。69は爛鍋でTZ-17に分類される。内外面に灰釉が施釉される。内面には目跡が3個残る。68が蓋である可能性もある。70は京都・信楽系の灰釉土瓶でTD-34に分類される。注口部はS字状を呈し、その裏側には8個の穿孔を有す。肩部には鉄の摺絵がみられる。底部外面にススが付着する。64が蓋である。71は内外面に柿釉が施された鍋でTZ-33-aに分類される。口縁部には紐状の把手を有する。内面には目跡が2個、ススが付着した底裏には足が1個残る。72は帯状の把手を有する瀬戸・美濃系の洩瓶でTC-28に分類される。外面には黄色味を帯びた灰釉が施釉される。無釉の高台には墨書がみられる。73～75は挿鉢である。73、74は堺系挿鉢でTL-29に分類される。胎土は緻密で橙色を呈すが、白色の砂粒などが若干含まれる。ともに無釉である。73の外面縁帯下は横方向に強くなでられ、体部と

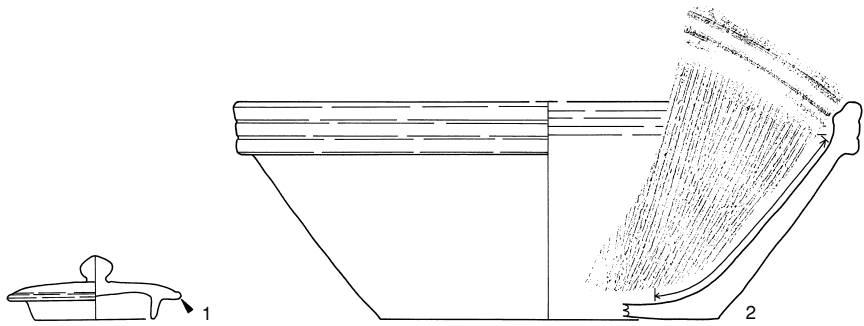
の境がやや括れる。口縁部にはごく浅い皿状の注口を有す。底裏には繊維状の痕跡が認められる。播目は13条1単位である。74の口唇端部は平らにナデ調整され、口縁部がやや内傾する。器面全体は横方向にナデ調整されるが、底部脇は横方向にケズリ調整した後にナデ調整される。底裏には細かい砂粒が付着する。播目は8条1単位である。75は瀬戸・美濃系播鉢でTC-29に分類される。全面に鉄釉が施釉され、底裏には右回転糸切り痕跡がみられる。播目は5条1単位で、2単位を交差させるような形で、やや間をあけて付けられる。見込みには同心円状の播目がみられる。76～78は瓶である。76は黄色味を帯びた灰釉が施釉された瀬戸・美濃系五合徳利でTC-10-dに分類される。肩部にはうのふ釉が流し掛けられる。底部釉は拭き取られ、胴部には線彫りの釘書きがみられる。胴部内面には赤褐色の錆のようなものが付着する。77は外面に鉄泥が施された備前系の瓶でTE-10に分類される。体部は四方から押され平らにされ、平面形が歪な隅丸方形を呈す。無釉の底裏には右回転の糸切り痕が残る。78は瀬戸・美濃系のいわゆる舟徳利でTC-10-fに分類される。底部の釉は拭き取られるが、底裏には溶着痕がみられる。79は志戸呂系油受け皿でTF-40に分類される。底部以外には鉄泥が施される。円筒状の受け部分と体部の境の相対する位置にレンズ状のスリットを2個有す。受け部端部にはわずかながらススが付着する。

土器(80～113) 80は油受け皿でDZ-40-dに分類される。胎土は肌色を呈す。内傾する受け部には緩やかなU字状のスリットを1個有する。底裏には左回転糸切り痕が残る。81～95は皿である。81～83、87、89～91は底裏に左回転糸切り痕跡がある皿でDZ-2-bに分類される。81、82は口径2～3寸と小振りで、器高も低い。体部はともに丸味を帯びて立ち上がるが、81のみ口縁部がやや外反する。83の体部は直線的に開き気味に立ち上がり、口縁部付近でわずかに外反する。見込みは全体的にわずかに膨らむ。87の器壁はやや厚く、体部は丸味を帯びて立ち上がる。89の胎土はやや粗く、白色砂粒を含む。体部中程はわずかに括れ、口縁部はやや内傾する。見込みはやや膨らみ、その中央はなでられ凹む。90は口径が5寸以上ある大振りな皿で、器壁もやや厚い。底裏に残る糸切り痕跡は粗い。見込みは弱く盛り上がる。口縁部にはススが付着する。91は口径が大きい深めの皿である。器壁は全体にやや厚いが、口唇部の器壁は体部よりさらに肥厚している。器面の所々に赤橙色の付着物が残ることから、元々は何らかの着色あるいは装飾が施されていた可能性もある。84～86、88は右回転糸切り痕跡がある皿でDZ-2-aに分類される。84の体部は直線的に立ち上がり、口唇部直下に稜を有する。見込みはやや膨らみ、底部と体部の境は溝状に浅く窪む。口縁部には灯心痕がみられる。85の体部はやや丸味を帯びて立ち上がり、底部との境には稜を有する。86も底部と体部の境に稜を有する。底部は被熱し、一部赤色化している。口縁部には灯心痕がみられる。88は口径が5寸以上ある大ぶりの皿で、体部は直線的に立ち上がる。底部は被熱し、一部赤色化している。口縁部には灯心痕がみられる。92～94は底部平滑の磨きかわらけでDZ-2-dに分類される。92の体部は丸味を帯びてほぼ垂直に立ち上がり、浅いボール状を呈する。93、94は浅い半球形を呈する。93の口縁部には灯心痕がみられる。95は手づくね成形された皿でDZ-2-gに分類される。胎土は白色を呈す。内面にはウールマーク状に水拭きされた痕跡がみられる。96は土師質の丸底ほうろくでDZ-47-aに分類される。胎土は肌色を呈する。体部の立ち上がりは低く、口縁部はわずかに内傾している。底裏以外は回転ナデ調整される。内面には「○」に「一」の刻印を有す。97は土師質の火消し壺の蓋でDZ-00-hに分類される。

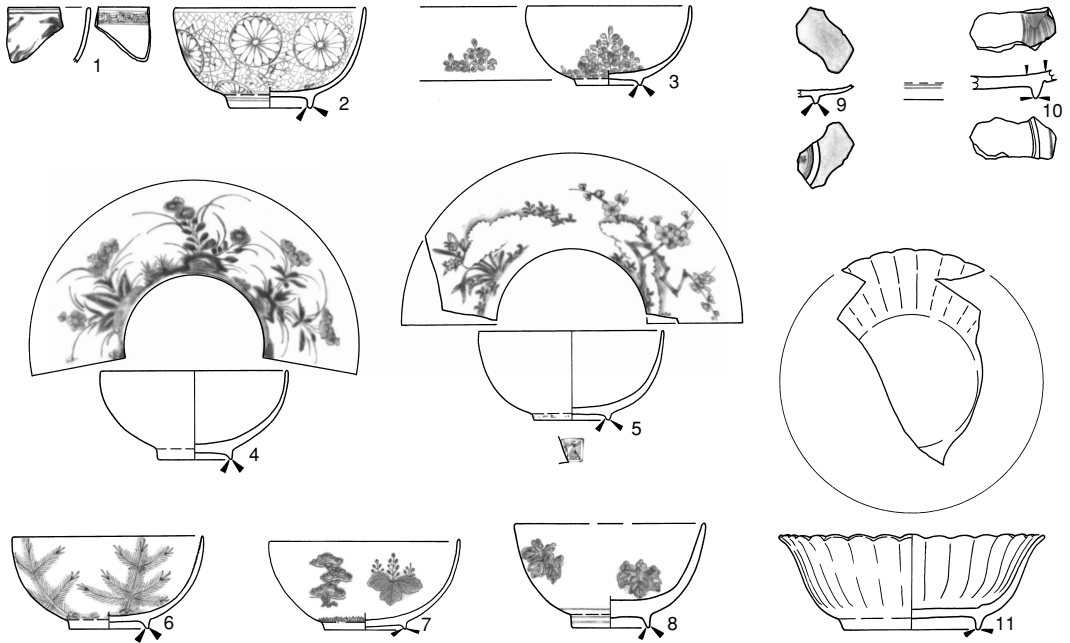
第IV章 出土した遺物



SK133

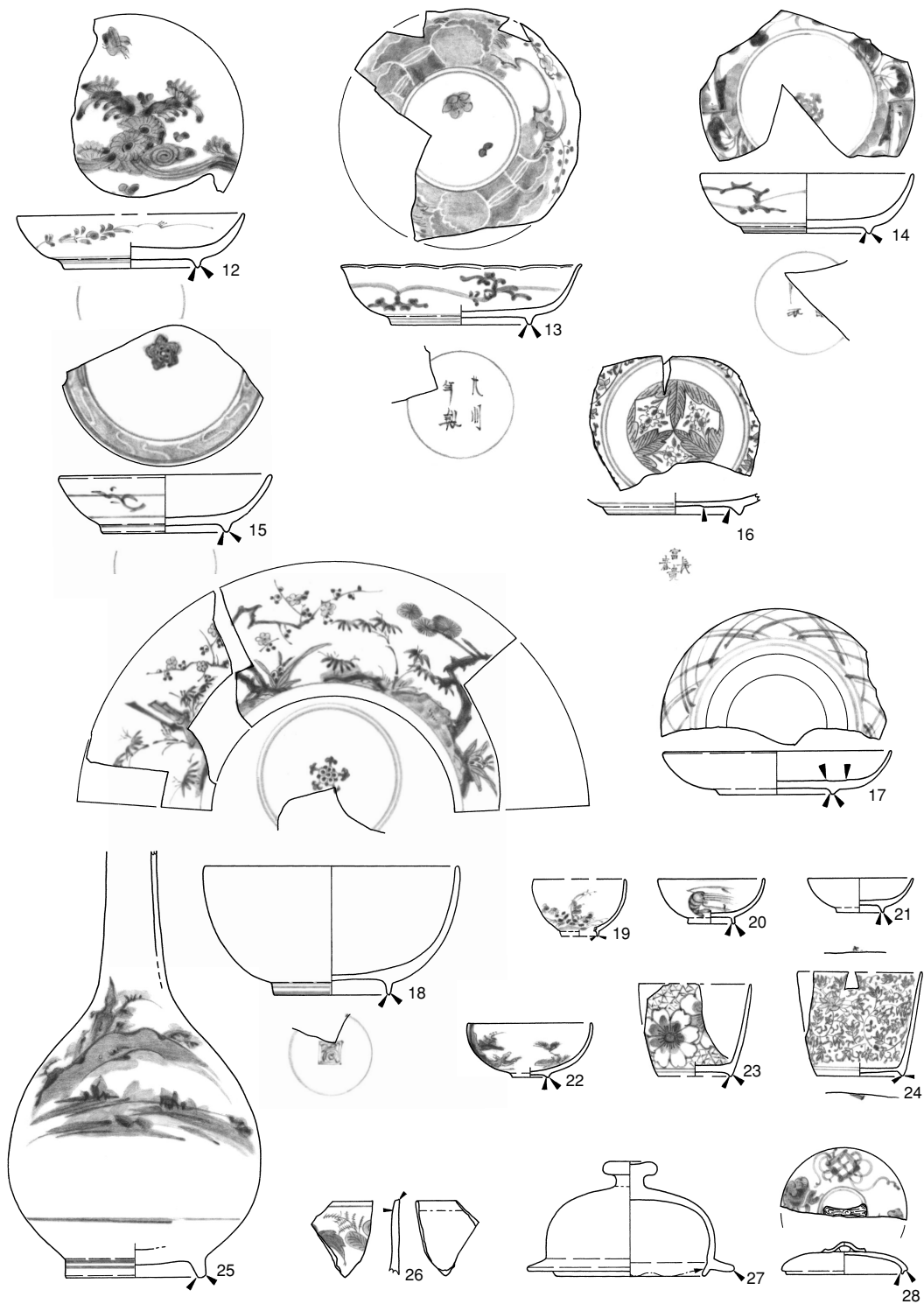


SK134

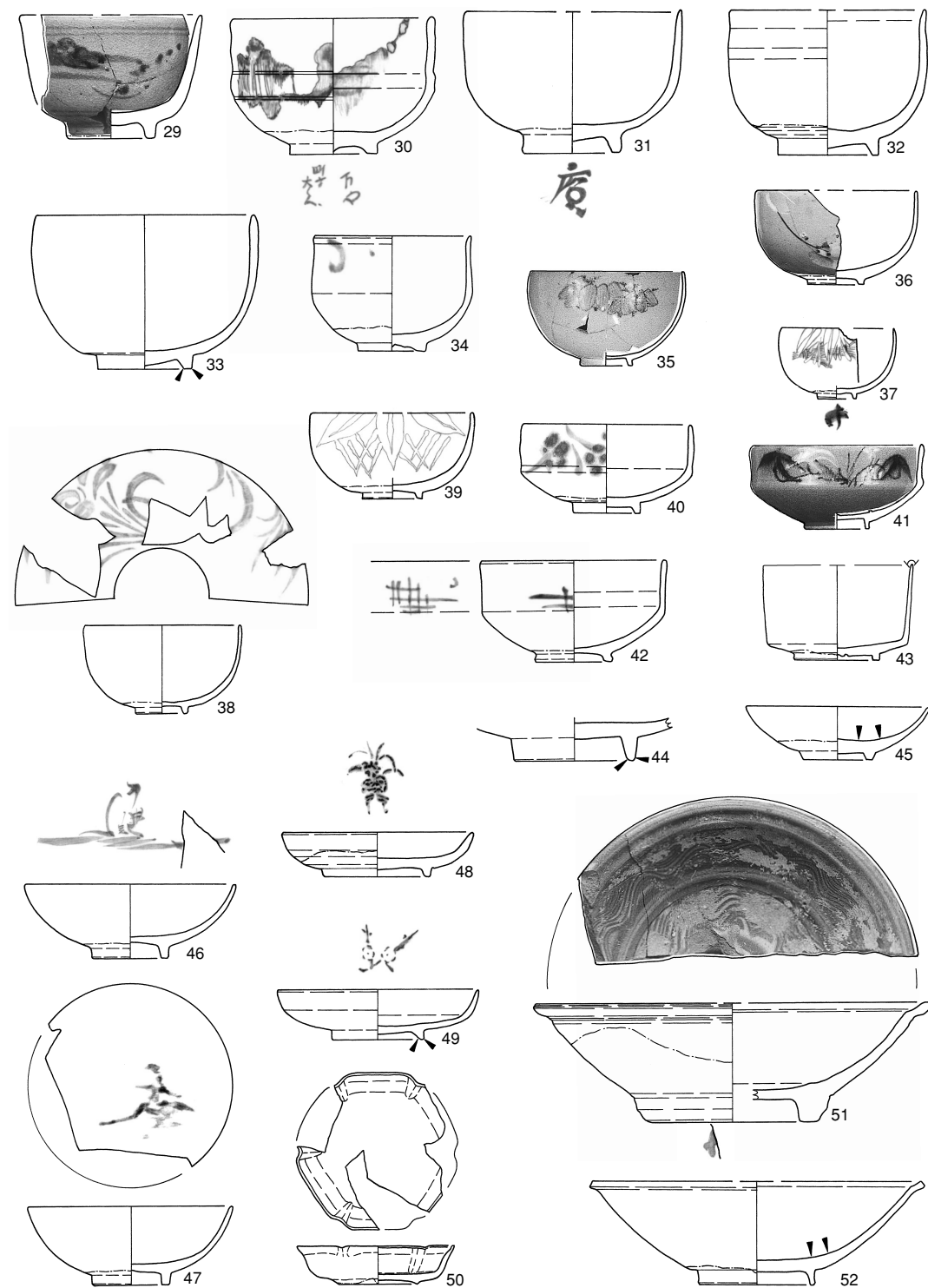


SK137(1)

IV-39 図 SK133・SK134・SK137(1) 出土遺物

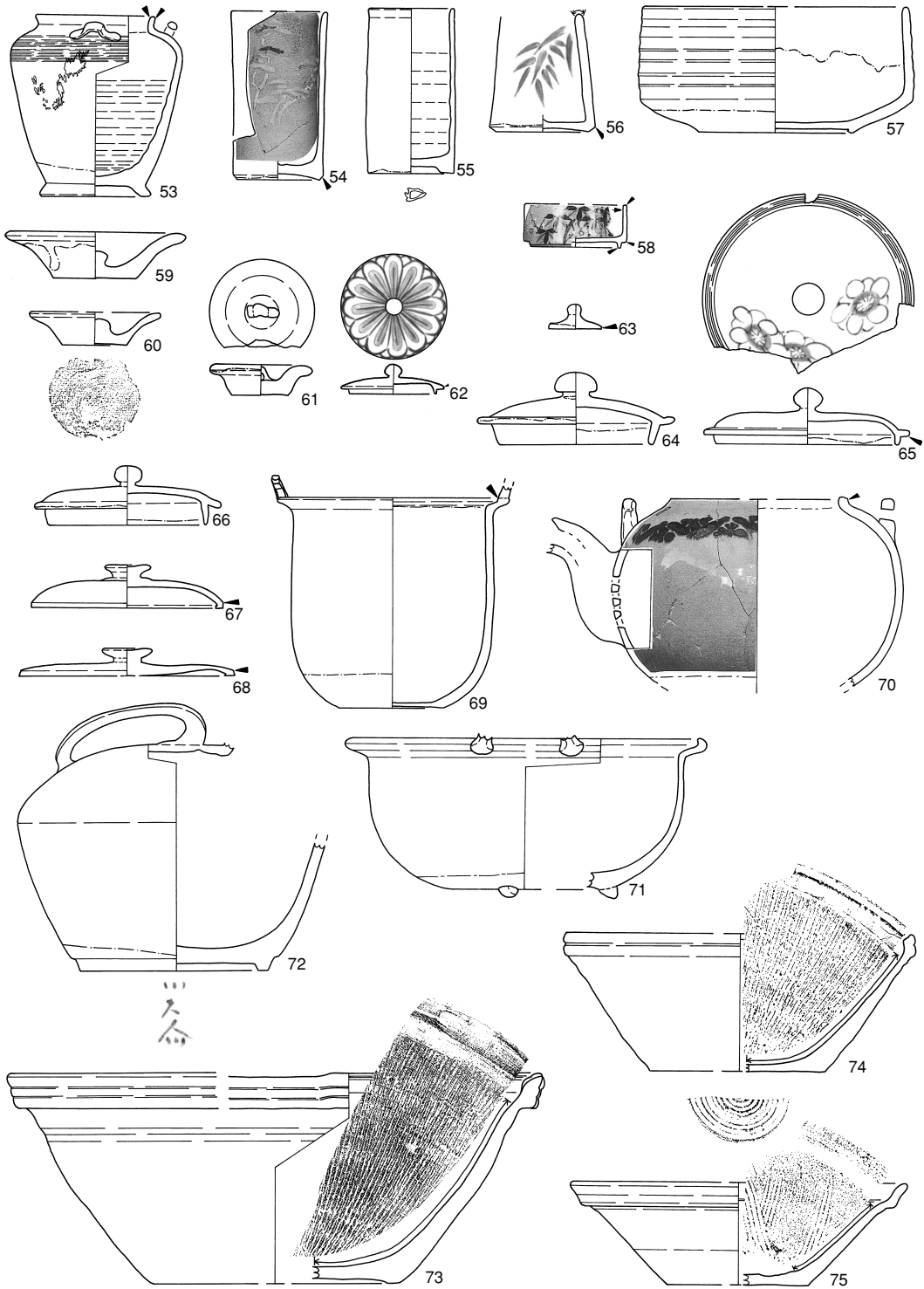


IV-40 図 SK137 (2) 出土遺物



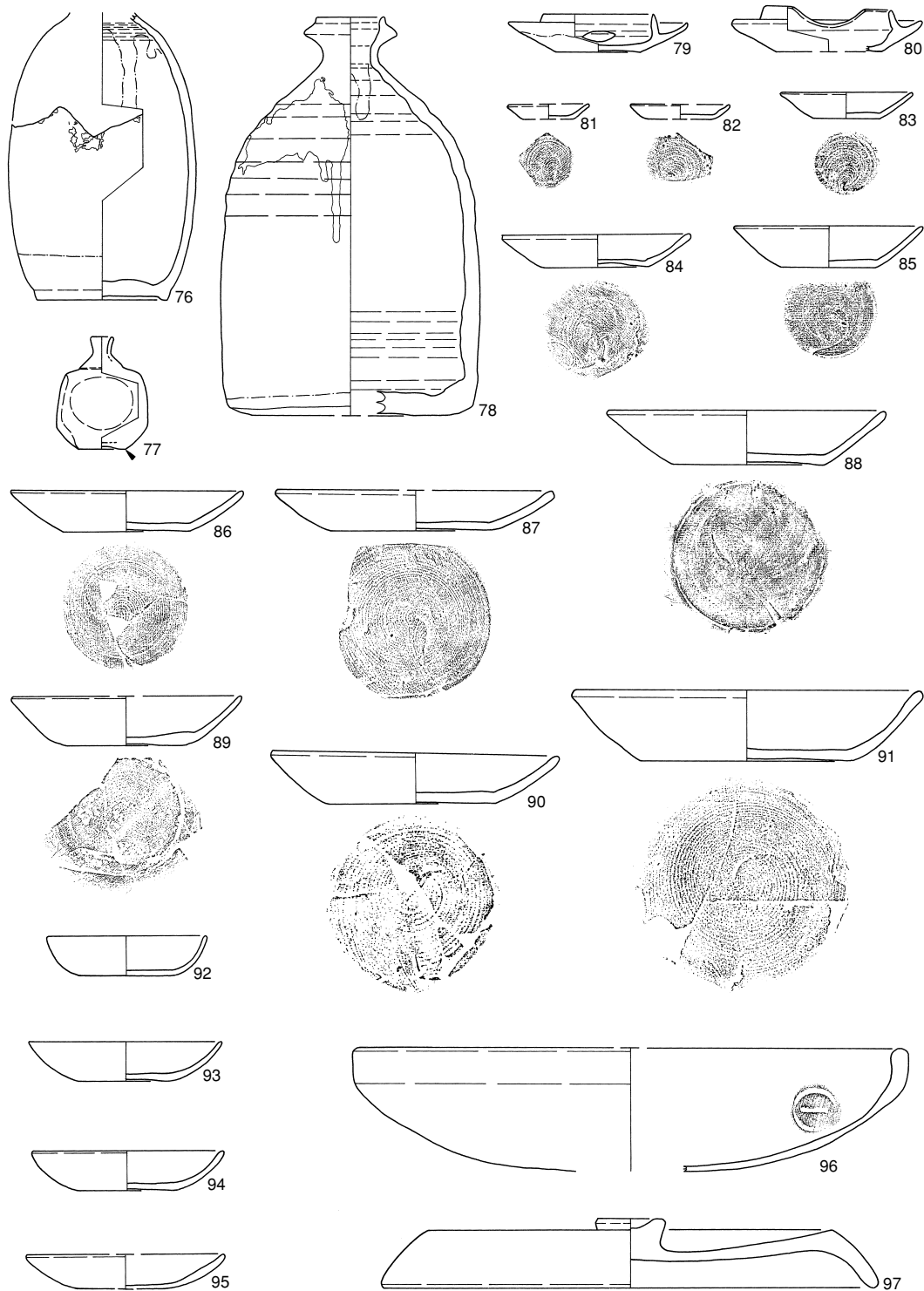
IV-41 図 SK137 (3) 出土遺物

第IV章 出土した遺物



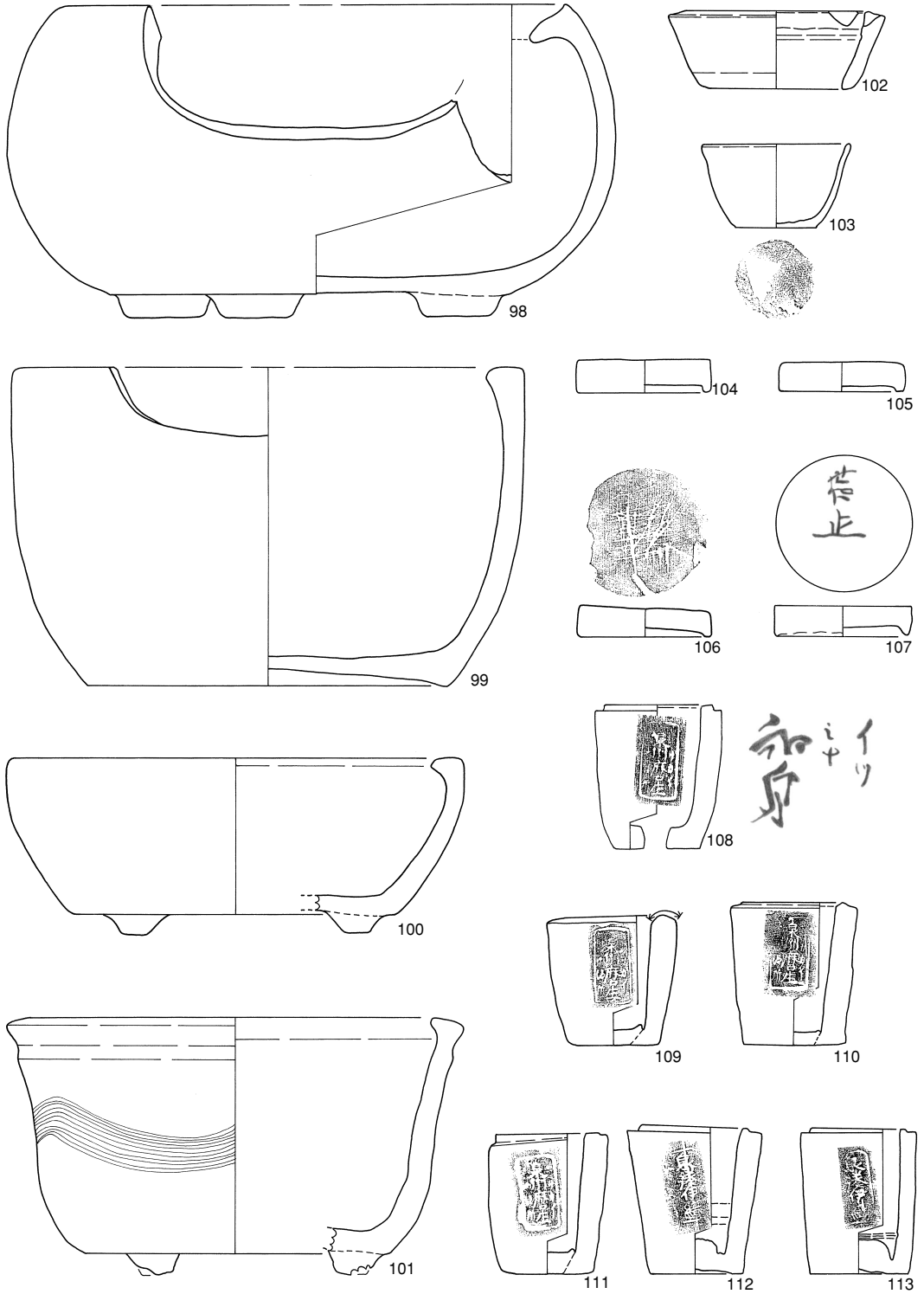
IV-42 図 SK137 (4) 出土遺物

第IV章 出土した遺物



IV-43 図 SK137 (5) 出土遺物

第IV章 出土した遺物



IV-44 図 SK137 (6) 出土遺物

皿形の摘みの端部は面取りされる。98、99は口縁部にU字状の大きなスリットを1個有する土師質の風炉でDZ-31-hに分類される。胎土はともに橙色を呈し、体部外面及び口縁部は丁寧にミガキ調整されている。98の底部には足が3個、99にも足が欠損したと思われる痕跡がみられる。100は土師質丸火鉢でDZ-31-aに分類される。体部外面及び口縁部は丁寧にミガキ調整されている。底部には足が2個残る。101は軟質瓦質丸火鉢でDZ-31-bに分類される。外面には櫛状のもので緩やかな波状文が施される。底部には足が2個残る。102は土師質七輪のさなでDZ-48-dに分類される。体部はナデ調整され、底部脇はケズリ調整後にナデ調整される。上端にはアーチ状の切り欠きを3個有する。内面は被熱し、白色化している。103は口縁部がわずかに外反する土師質の鉢である。全体的に器壁が薄い。底裏には左回転糸切り痕跡が残る。形状などから植木鉢の可能性もある。DZ-5-aに分類される。104～107は塩壺の蓋でDZ-00-cに分類される。いずれも内面には細かな布目が残る。106の表面には筋状の沈線が幾筋もみられ、また外面全体が磨かれたようになっていることから、砥石に転用された可能性がある。107の表面には墨書がみられる。108～113は塩壺である。108～111は板作成形2ピースで「サカイ 泉州磨生 御塩所」の刻印を有し、DZ-51-kに分類される。底裏の粘土塊は口縁部から底部へ向かって押さえられ、底裏は平滑にされている。108は刻印の隣に「和泉」などの墨書がみられる。109の口縁部は受け部が認められず、端部が丸味を帯びている。底部にはわずかながら繊維状の痕跡がみられる。110の底部にも繊維状の痕跡みられる。また内面には成形時の離れ砂と思われる砂粒が多く付着する。なお刻印は同じ位置で少し角度を変えて再度押し直したようで、刻印の角が2つ重なっている。111の外面には刻印がもう1ヶ所押されたような痕跡がみられる。112、113は板作成形2ピースで「泉湊伊織」の刻印を有し、DZ-51-gに分類される。ともに底裏は指圧痕などで窪み、底部内面には粘土塊が大きく突出している。

SK139 (IV-45～49図)

出土遺物の推定個体数が119点とやや少量ではあるが、その9割が被熱している。肥前系磁器碗(JB-1)には高台断面がシャープなU字状を呈し高台高が高い1-d、1-dのやや小振りの碗形を呈す1-u、高台断面がシャープなU字状を呈し高台高が低い1-eが多くみられる。また肥前系磁器皿(JB-2)には高台断面がU字状を呈する2-e、高台断面が三角形を呈する2-c、糸切細工で貼付高台を有する2-rなどが目立つ。陶器では肥前系陶器碗(TB-1)に刷毛目碗(1-d)や陶胎染付(1-f)、瀬戸・美濃系陶器碗(TC-1)に灰釉薄掛け碗(1-c)、腰鏝碗(1-u)が多くみられる。また播鉢では堺系(TL-29)が含まれている。これらの様相から、東大編年IV b期に位置付けられる、元禄16(1703)年の火災一括遺物群である。同じく東大IV b期に位置付けられる遺構に病院地点K30-1、家畜病院地点SK09などがあるが、肥前系磁器皿や肥前系陶器鉢(TB-5)の割合の多さなど、同じIV期に位置付けられる遺構群とは若干異なる点も指摘できる。

磁器(1～20) 全て肥前系磁器(JB)である。1、2は碗である。1は染付碗でJB-1-e、2は白磁碗でJB-1-dに分類される。1の外面には型紙摺の七宝繫ぎ文、高台内には一重圏線と「大明成化年製」銘がみられる。口鏝が施される。3～13は皿である。3～8は高台断面がシャープなU字状を呈する染付皿でJB-2-eに分類される。3～7は見込み側面に文様をめぐらし、その中央は五弁花文のワンポイントという構成の絵付がなされる。なお五弁花文は3、6は手描き、4、7はコ

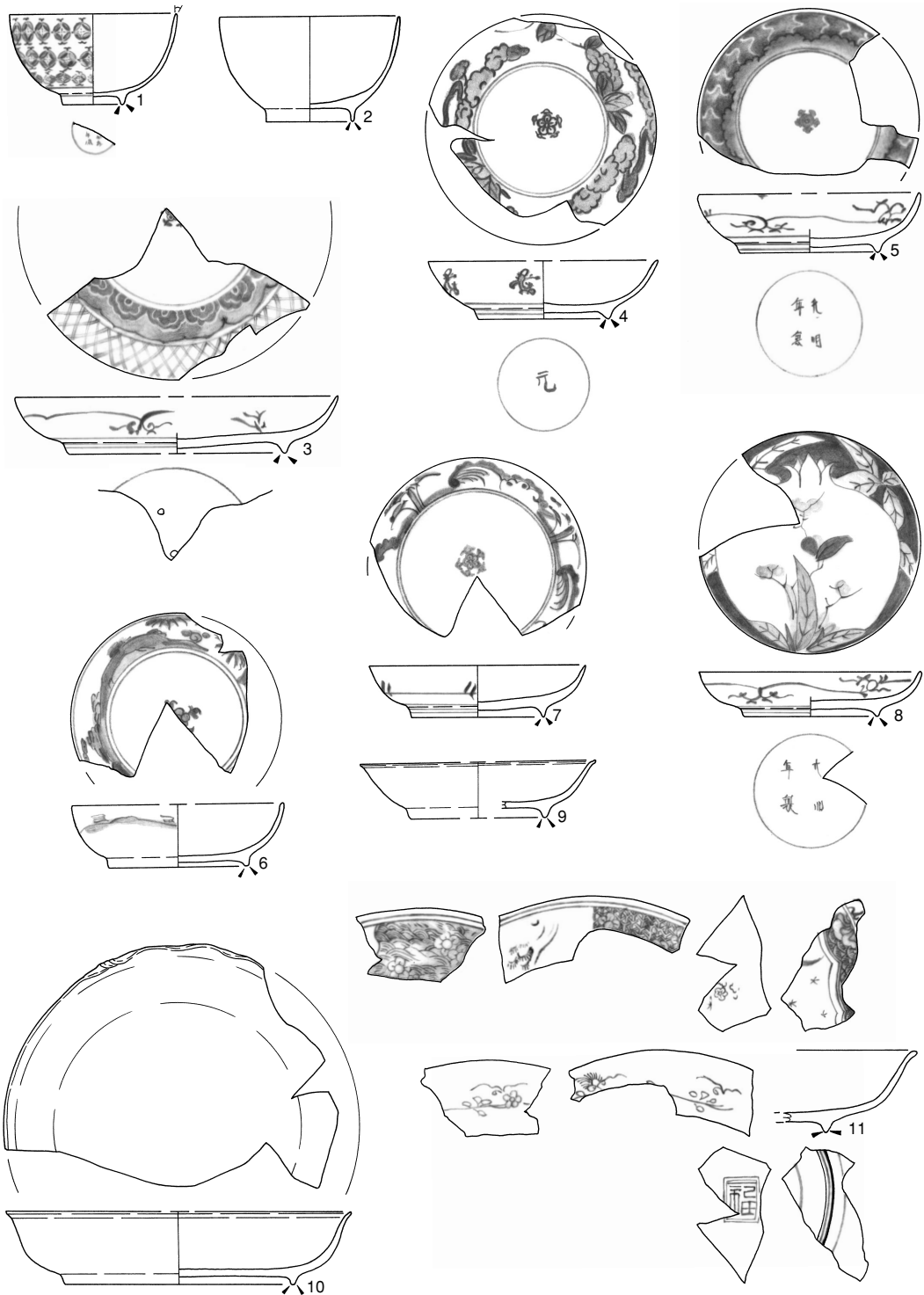
ンニャク印判によるものである。3の裏文様は簡略化された如意頭唐草文で輪郭線はみられない。高台内にはハリ支え痕が2個残る。4の裏文様は手描きで、実測図にある記号か変体字のようなものが繰り返されている。高台内には一重圏線と「元」の銘がみられる。またハリ支え痕が1個残る。5の裏文様も簡略化された如意頭唐草文である。高台内には一重圏線と「太明年製」銘がみられる。6はやや深めの皿である。裏文様は手描きで山水文が施される。8は浅めの皿で、見込みには一枚絵が描かれる。高台内には一重圏線と「太明年製」銘がみられる。またハリ支え痕が1個残る。9～11は高台断面が三角形を呈する皿でJB-2-cに分類される。9、10は白磁である。9は体部が外側に開き気味に立ち上がり、口縁部は外反する。10は腰が張ったやや深めの皿で、9と同じく口縁部が外反する。また外反する口唇部の一部が緩やかなヒダ状にされる。高台内にはハリ支え痕が5個残る。11は色絵祥瑞風の皿である。圏線は呉須によるものである。見込みの色絵には赤ないし黄色が用いられているが、高台内にみられる二重角枠の「福」字銘も、同じく赤ないし黄色で描かれている。高台内にはハリ支え痕が2個残る。12、13は糸切細工貼付高台の皿でJB-2-rに分類される。12は白磁で、平面形及び高台も楕円形を呈す。13の平面形は隅丸方形を呈し、丸味を帯びた角の中央はわずかに窪まされる。見込みには梅花、裏文様には松葉が染付される。なお13は本遺構内に、もう1個体あることが確認されている。14は染付坏でJB-6-aに分類される。口銹を有する。15、16は染付鉢でJB-5-bに分類される。15の体部は型打成形されており、口縁部は方形を呈する可能性がある。高台内には銘がみられるが、欠損しているため判読できない。17は染付磁器鉢(JB-5)の破片である。絵付はかなり精緻なものである。鍋島か。18は染付蓋物でJB-13-bに分類される。外面にはコンニャク印判による絵付がみられる。19、20は蓋である。19は白磁壺の蓋でJB-00-g、20は染付蓋物の蓋でJB-00-fに分類される。

陶器(21～49) 21～27は碗である。21、22は肥前系陶胎染付碗でTB-1-fに分類される。ともに外面には呉須で花唐草文が描かれる。23は内外面に渦刷毛目が施された肥前系丸碗でTB-1-dに分類される。胎土は灰色から灰褐色を呈す。24～26は瀬戸・美濃系のいわゆる腰鍔碗でTC-1-uに分類される。いずれも体部がやや外側に開き気味に立ち上がり、器高は高めで、腰鍔碗としては古手の特徴を有する。体部上半分は灰釉、下半分は鉄釉が掛け分けされる。畳付の釉は拭き取られる。25は高台内に楕円に「清」の刻印を有する。26は体部が一部窪まされる。高台内には刻印が認められるが、25と同じ楕円に「清」か？。27は見込みに鉄絵山水文が描かれた肥前系のいわゆる京焼風陶器の平碗でTB-1-cに分類される。無釉の高台内には浅い円圏に「清水」の刻印を有す。28～31はいずれも肥前系の鉢である。28、29は三島手の鉢でTB-5-bに分類される。胎土は緻密で暗灰色から暗褐色を呈する。ともに口縁部は緩やかな鏝状を呈す。28の見込みには7個の砂胎土目が残る。高台脇は面取りされる。29の見込みには8個の砂胎土目が残る。30は内面に刷毛目が施された鉢でTB-5-aに分類される。内外面ともに透明釉が施釉されるが、内面はその上に褐釉と青緑釉が流し掛けられる。また外面体部下半は釉が拭き取られる。見込みには6個の砂胎土目が残る。高台脇は面取りされる。31は灰釉輪剥鉢でTB-5-dに分類される。見込みの輪剥部分には鍔釉が施釉され、高台脇はわずかに面取りされる。32、33は片口鉢である。32は内外面に刷毛目が施された肥前系の片口鉢でTB-23-aに分類される。口縁部は折り返され玉縁状を呈す。高台脇は7mmほどの幅で窪まされる。外面は渦刷毛目の上に波状の刷毛目が施される。33

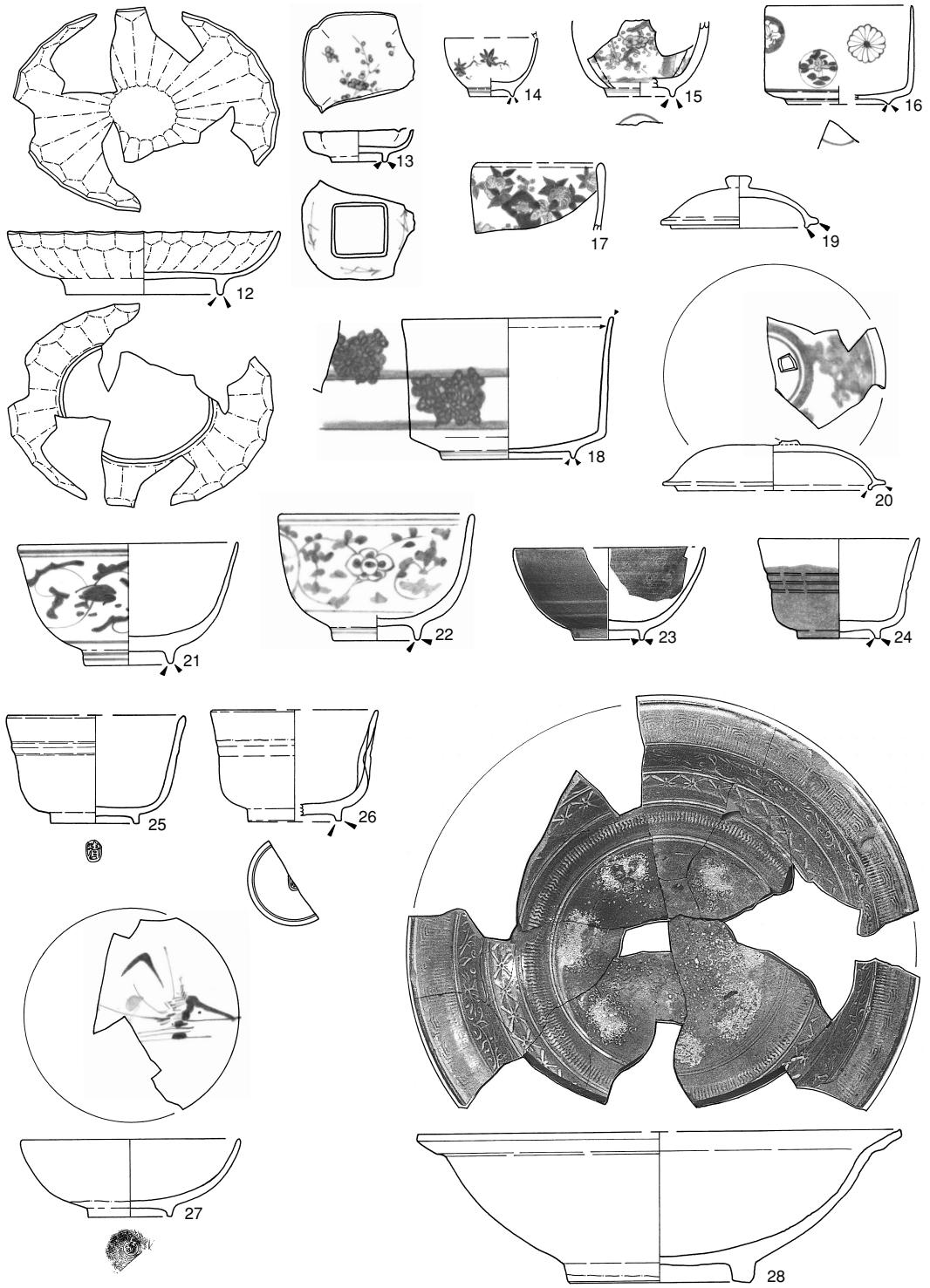
は鉄釉が施釉された瀬戸・美濃系の丸碗形片口鉢でTC-23-bに分類される。内面には目跡が1個残る。34は口縁部が盤口形を呈する瀬戸・美濃系花生でTC-22-aに分類される。外面には漆黒釉が施釉される。頸部には外耳を2個有す。35は肥前系の陶胎染付香炉・火入れでTB-9-aに分類される。体部はほぼ垂直に立ち上がり、口唇部は内側にやや肥厚している。外面には染付が施される。36は瀬戸・美濃系鬘水入れでTC-25に分類される。無釉の底部には指紋が残る。体部の相対する2ヶ所に鉄の型紙摺がみられる。37は鉄釉が施釉された瀬戸・美濃系の壺でTC-15に分類される。最大径が肩部にあり、頸部は短い。内面のロクロ目は顕著である。外面はナデ調整され、底裏はケズリ調整後、やや粗くナデ調整される。底部脇は面取りされる。口唇部には敲打痕が認められる。38、39はいずれも鉄釉が施釉された瀬戸・美濃系の蓋である。38は橋状の摘みを有する壺・甕の蓋でTC-00-bに分類される。無釉の蓋裏は高台状に削り込まれる。39は爛鍋(40)の蓋と考えられるものでTC-00に分類される。40、41は鍋である。40は瀬戸・美濃系爛鍋でTC-17に分類される。胎土はやや粗く、淡灰色を呈す。口縁部には把手部分がわずかながら確認できる。内外面には鉄釉が施釉される。また内面には、赤色顔料のようなものがほぼ全面に付着する。なお前述したこの鍋の蓋と考えられる39の裏側にも赤色顔料のようなものが付着する。41は鉄釉鍋でTZ-33に分類される。胎土はやや粗く、淡灰色を呈す。口縁部には捻られた紐状の耳が1個残る。無釉の底部には円錐形を呈する足が2個残る。42～45は播鉢である。42は無釉の丹波系播鉢でTK-29に分類される。口縁部は縁帯状を呈す。外面は粗くナデ調整され、底部下端の凹凸が著しい。内面に溶着痕が残る。播目は8条1単位で施される。43、44は鉄釉が施釉された瀬戸・美濃系播鉢でTC-29に分類される。ともに口縁部は外側に折り返され、やや丸味を帯びた縁帯状を呈す。口縁部内側には明瞭な稜を有す。また底裏には右回転系切り痕跡が残る。43の内面及び底裏には隅丸方形の砂目が2個残る。播目は43が15条1単位、44が19条1単位で施される。45は鉄泥が施された堺系播鉢でTL-29に分類される。口縁部外側下端を強く押さえて括れさせ縁帯状にし、その上に櫛状工具で沈線を2本めぐらせている。口縁部内側にも小さな突帯がめぐらされる。底裏は高台状に成形され、底裏中央には扇形に「上」の押印を有す。また底裏にはやや幅広い輪状の焼台の痕跡が残る。播目は17条1単位で施され、見込みにはクロスパターンの播目がみられる。TL-29としては初期の製品の特徴を示す。46～48は瓶である。46は灰釉が施釉された瀬戸・美濃系二合半徳利でTC-10-aに分類される。口縁部はラッパ状に外側に大きく開く。ナデ肩で胴部はラッキョウ形を呈す。胴部には溶着痕が2ヶ所に残る。47は鉄釉が施釉された瀬戸・美濃系五合徳利でTC-10-dに分類される。頸部から肩にかけて灰釉が流し掛けされる。底部釉は拭き取られる。48は容量が1升以上あると思われる志戸呂系徳利でTF-10に分類される。49は志戸呂系の油受け皿でTF-40に分類される。筒形の受け部と皿形の体部境にはアーチ形のスリットを1個有す。

土器(50～54) 50～52は皿である。50、51は底裏に左回転系切り痕がある皿でDZ-2-b、52は底裏に右回転系切り痕がある皿でDZ-2-aに分類される。50の胎土は暗灰色を呈す。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁端部はやや内傾する。51、52の胎土はにぶい橙色を呈する。口縁部にはともにススが付着する。51の体部はほぼ垂直に立ち上がり、底部との境に明瞭な稜を有する。また体部外面には緩やかな凹凸がみられる。口縁部には灯心痕がみられる。52の体部は直線的に立ち上がる。器面はナデ調整される。53は丸底のほうろくでDZ-47-aに分類される。胎土

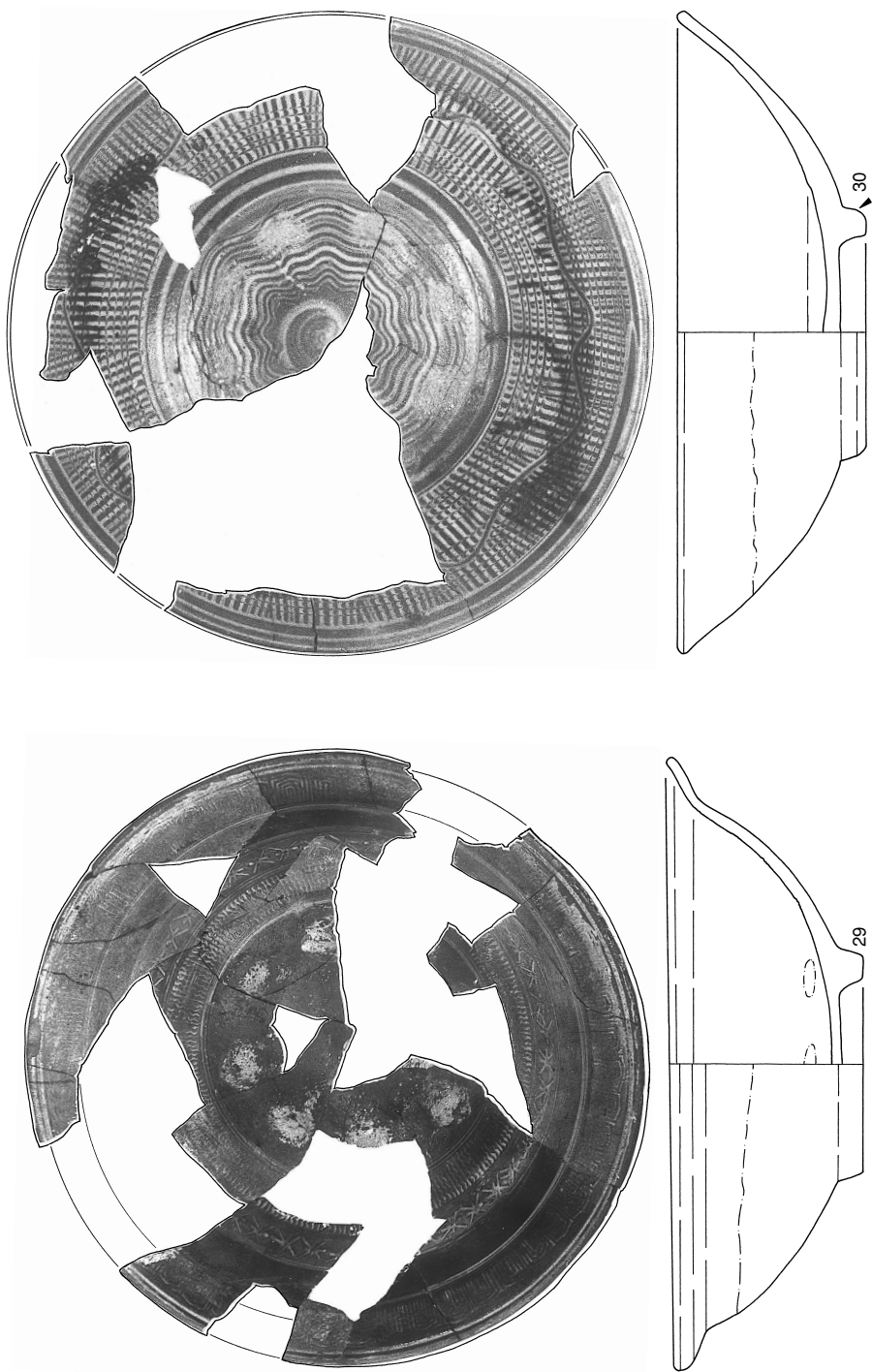
第IV章 出土した遺物



IV-45 図 SK139 (1) 出土遺物

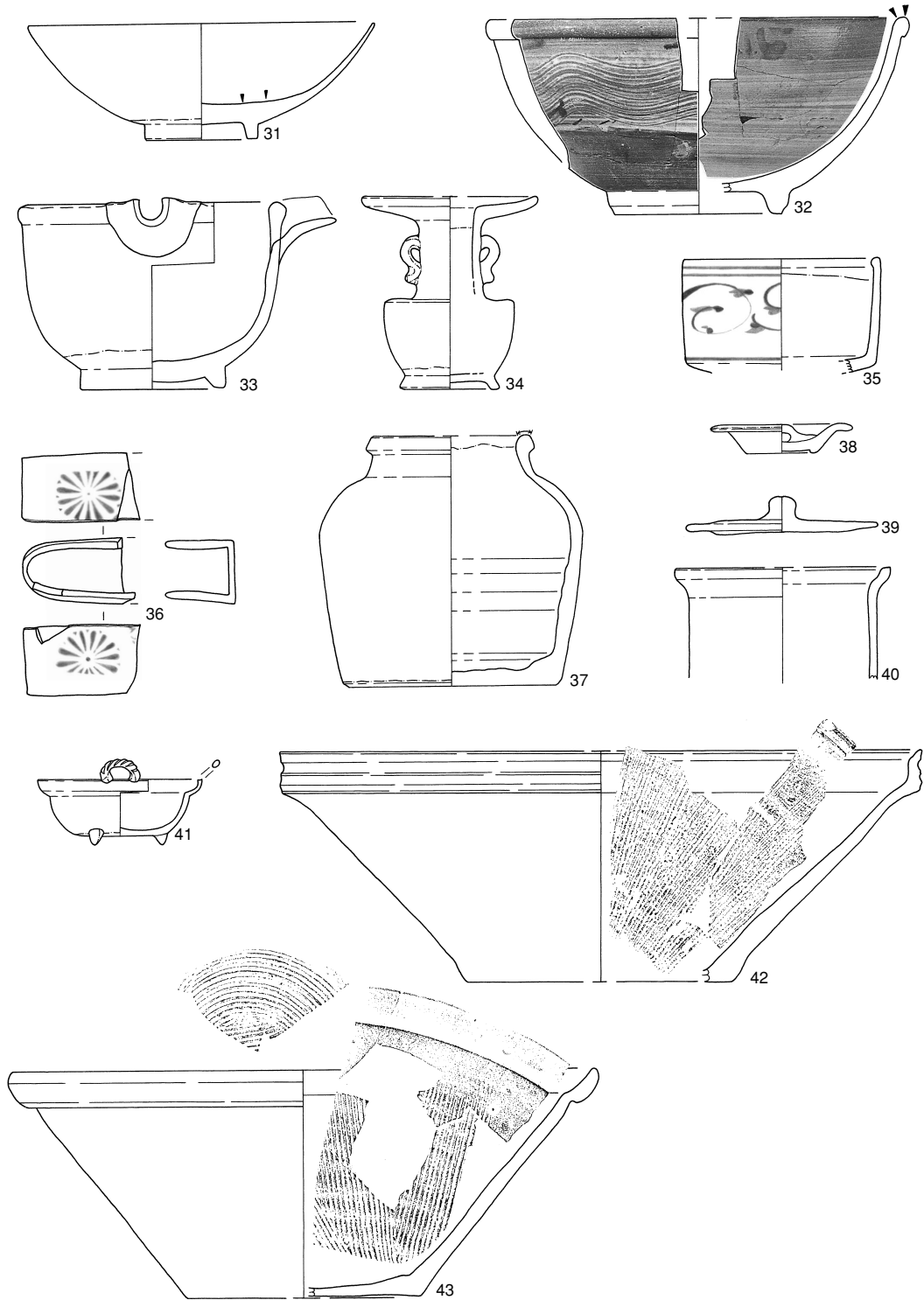


IV-46 図 SK139 (2) 出土遺物

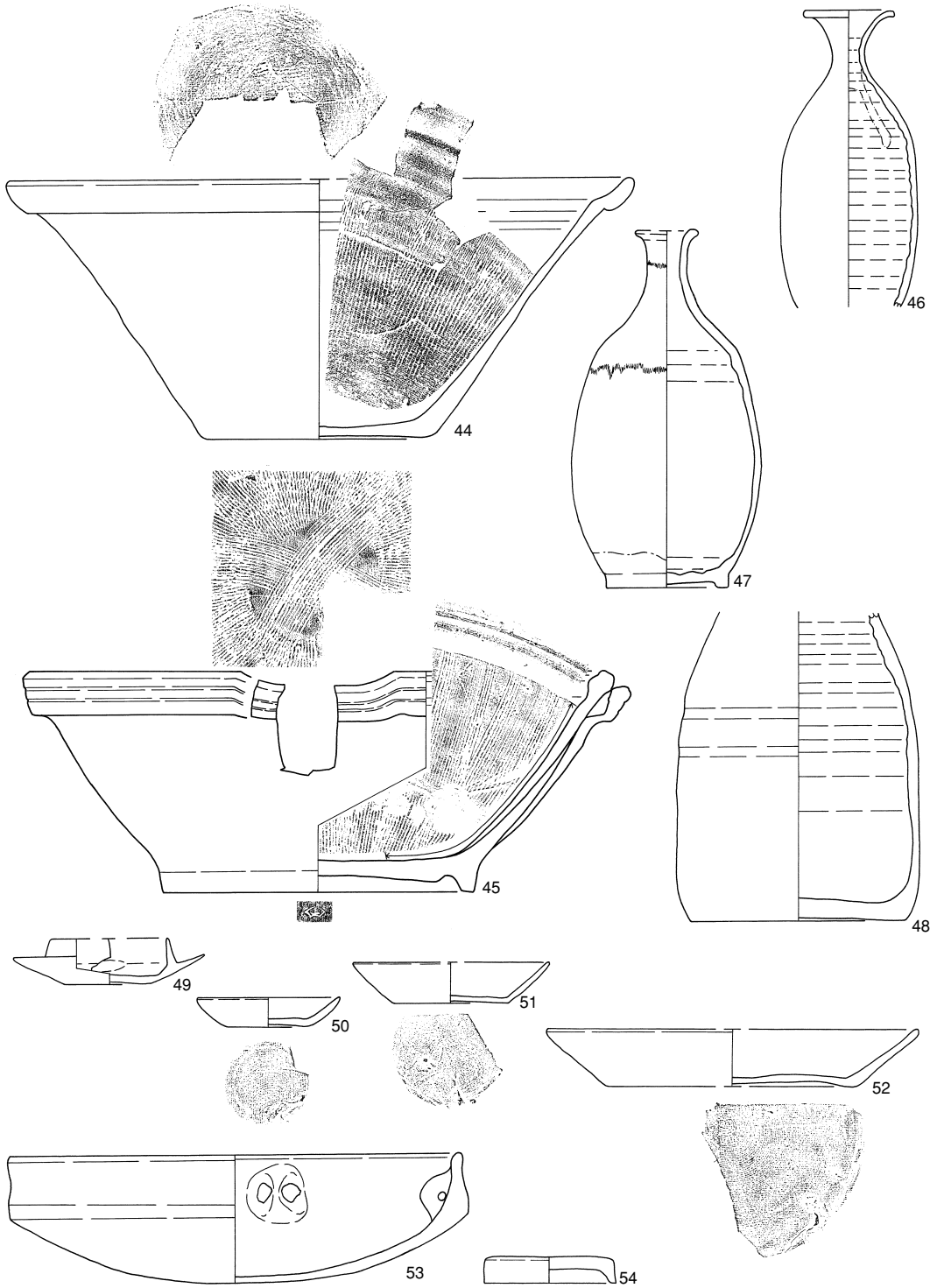


IV-47 図 SK139 (3) 出土遺物

第IV章 出土した遺物



IV-48 図 SK139 (4) 出土遺物



IV-49 図 SK139 (5) 出土遺物

は淡橙色を呈す。体部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部がわずかに括れる。体部下端は面取りされ、底部との境に明瞭な稜を有す。団子状の内耳が2個に残り、その周囲はナデ調整される。底裏は縮緬状を呈し、内外面ともにスガが付着する。54は塩壺蓋でDZ-00-cに分類される。胎土はにぶい橙色を呈す。

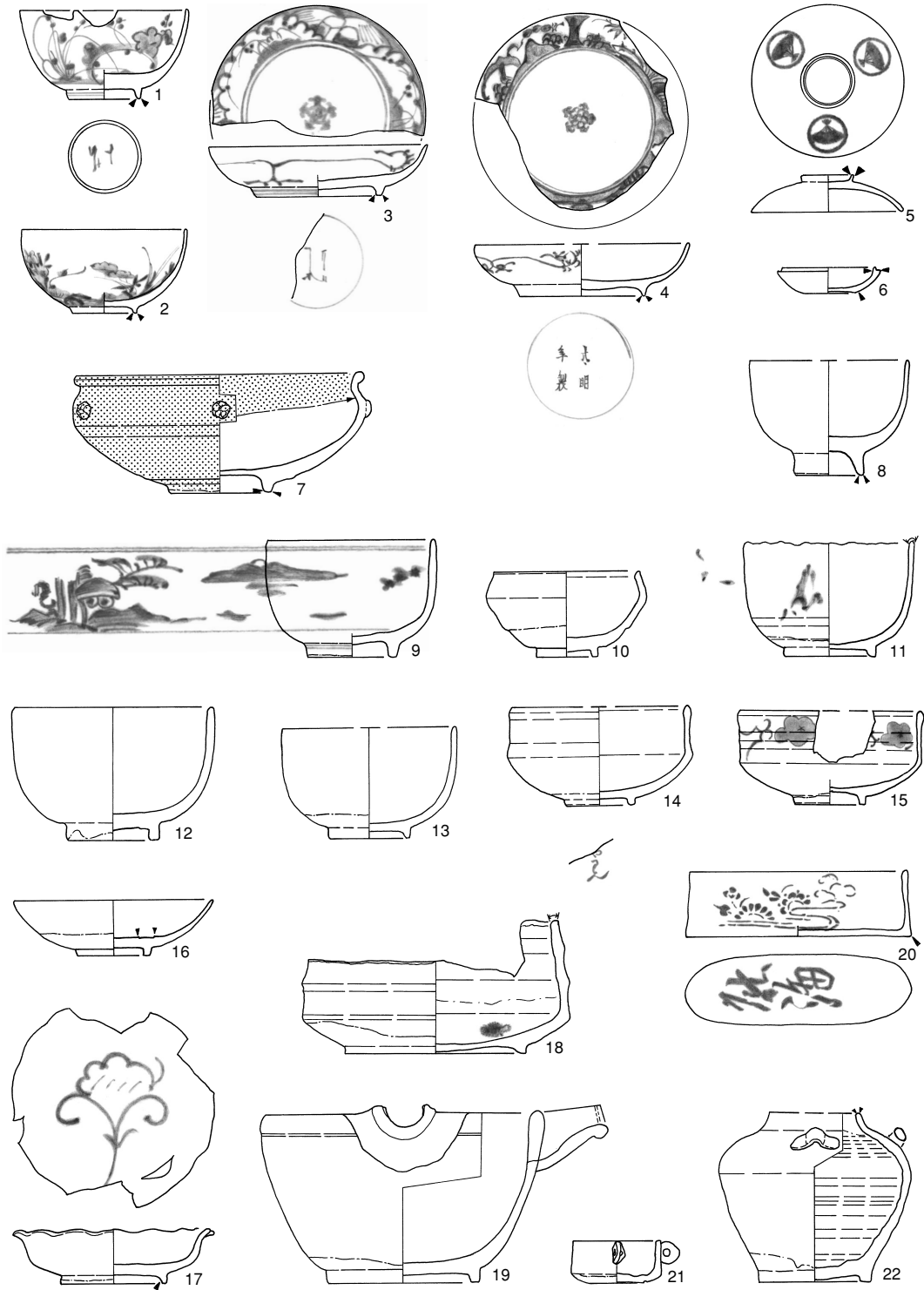
SK141 (IV-50・51 図)

肥前系磁器碗 (JB1) には、くらわんか手の碗 (JB-1-g) や半球形碗 (JB-1-f) が、肥前系磁器皿には器高がやや低い、高台断面がU字状を呈する皿 (JB-2-e) が多く見られるなど、遺物群の様相から東大編年V a 期に分類される遺構一括資料である。出土遺物の底部総破片数が127点とさほど多くないが、このうち陶器が80点で6割以上を占める。その中心は瀬戸・美濃系 (TC) や京都・信楽系 (TD) の陶器であり、TCには碗、瓶以外の器種が割合多い。TDには碗が多く、中でも半筒形碗 (TD-1-i) の割合が高い。

1～5、7は肥前系磁器 (JB) である。1、2は染付碗である。1はくらわんか手の碗でJB-1-vに分類される。胎土がやや灰色味を帯び、器壁もかなり厚い。外面に梅樹文、高台内には崩れた銘がみられる。「大明年製」銘か。2は半球形碗でJB-1-fに分類される。高台はやや外側へ開き気味である。外面には手描きの草花文がみられるが、やや雑である。3、4は染付皿でJB-2-eに分類される。ともに見込み側面と中央にはコンニャク印判による五弁花文というパターン of 絵付がなされる。3は呉須の発色が灰色味を帯び、五弁花文は滲んで潰れている。高台内には崩れた「大明年製」銘がみられる。被熱している。4は3より呉須の発色もよく、絵付も丁寧である。五弁花文も輪郭線がハッキリとしたものであり、高台内には楷書の「大明年製」銘がみられる。また高台内には目跡が1個残る。5は染付丸碗の蓋でJB-00-aに分類される。外面には手描きの丸文がみられる。7は青磁の香炉・火入れでJB-9-cに分類される。輪高台を有す。被熱している。

6、8～26は陶器である。6は黄色味を帯びた灰釉が施釉された京都・信楽系の合子でTD-18-aに分類される。無釉の底部は浅い碁笥底状を呈す。8～15は碗である。8、9は肥前系の碗である。8はいわゆる呉器手碗でTB-1-aに分類される。器高、高台高ともに高いが、小振りになっている。畳付には砂粒が付着する。9は陶胎染付碗でTB-1-fに分類される。畳付には砂粒が多く付着する。10～13は瀬戸・美濃系の碗である。10は天目碗でTC-1-aに分類されるが、かなり矮小化している。11、13はいわゆる御室碗でTC-1-dに分類される。11は外面の相対する2ヶ所に染付が施され、口縁部に敲打痕が認められる。被熱している。13は体部に染付はみられないが、11よりも黄色味を帯びた灰釉が施釉され、細かな貫入がみられる。12は灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。削り出し高台であり、外側へ開き気味である。畳付には溶着痕がみられる。14、15は京都・信楽系の半筒形碗でTD-1-iに分類される。ともに高台脇は面取りされる。14の外面にもわずかに鉄絵が見られるが意匠は不明である。見込みには目跡が2個残る。高台内には「jやわん」という墨書がみられる。15の外面には鉄と白土で梅花文が描かれる。高台内には径4mm大の浅い円形の削り込みがみられる。見込みには目跡が3個残る。16、17は皿である。16は肥前系の青緑釉輪剥皿でTB-2-aに分類される。見込みの青緑釉部分には全体に施釉される釉より、やや白濁した青緑釉が流し掛けされる。輪剥部分には輪状に砂粒が付着する。高台脇には成形時のカンナ痕跡が残る。

第IV章 出土した遺物



IV-50 図 SK141 (1) 出土遺物

17は瀬戸・美濃系の灰釉ヒダ皿でTC-2-nに分類される。見込みには花文様の染付がみられる。18は瀬戸・美濃系の灰釉香炉・火入れでTC-9-aに分類される。底部内外面の釉は拭き取られる。口縁部には敲打痕、見込みには目跡が3個残る。底部外面に黒色の付着物がみられる。ススカ。被熱している。19は黄色味を帯びた灰釉が施釉された瀬戸・美濃系の丸碗形片口鉢でTC-23-bに分類される。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや膨らむ。注口部先端の直下には沈線がめぐり、先端部が肥厚するように成形される。見込みに目跡が2個、口縁部内側には溶着痕がみられる。20は鉄の摺絵が施された瀬戸・美濃系の鬘水入れでTC-25に分類される。無釉の底部には墨書が認められる。21は灰釉が施釉された瀬戸・美濃系餌入れでTC-30に分類される。口縁部には環状の把手を1個有する。底裏には2mm幅の溝が円形に、浅く削り込まれている。また底裏にはススが付着する。22は肩部に紐状の外耳を2個有する瀬戸・美濃系の灰釉壺でTC-15に分類される。23は錆釉が施釉された瀬戸・美濃系播鉢でTC-29に分類される。小振りの播鉢である。口縁部外側をやや強くなでて括れさせ、縁帯部を形成している。口縁部内側には突帯がめぐり、播目は12条1単位で、見込みには同心円状に播目が施される。底部内外面に円形の砂目痕跡ないしは砂目と同サイズの浅い窪みが3個残る。24～26は瀬戸・美濃系の瓶である。いずれも鉄釉が施釉された五合徳利でTC-10-dに分類される。胴部には24が「九」、25が「い」、26が「太」の線彫りの釘書きがある。

27～30は土器である。27～29は皿である。27は磨きかわらけでDZ-2-d、28、29は底部に左回転糸切り痕があるものでDZ-2-bに分類される。胎土は、27はにぶい橙色、28は橙色、29は淡橙色を呈す。27は外面がミガキ調整、内面がナデ調整される。28の口縁部にはススが付着する。30は底部が基筒底状を呈する塩壺でDZ-51-zに分類される。胎土は淡橙色を呈す。外面はナデ調整され、内面には細かい布目痕跡が残る。また高台内のみナデ調整され、畳付にはケズリ調整した痕跡が残る。口縁部には敲打痕が認められる。

SU143 (IV-51 図)

1、2は肥前系磁器 (JB) である。1は見込み蛇ノ目釉剥ぎされた染付碗でJB-1-xに分類される。蛇ノ目釉剥ぎ部分には輪状の溶着痕が残る。2は染付皿でJB-2-eに分類される。体部は腰が張り、開き気味に立ち上がる。口唇部はやや強く外反する。高台高は低く、わずかに内傾する。見込みにはコンニャク印判による五弁花文が施され、高台内には「大明年製」と思われる銘がみられる。

3、4、6は陶器である。3は瀬戸・美濃系の灰釉鉢でTC-5-fに分類される。底部は基筒底にされる。口縁部の一部分を外側へつまみ注口状にし、その相対する側の体部を内側へ窪ませている。4は瀬戸・美濃系の花生でTC-22-bに分類される。肩部には外耳を2個有し、外面の上半部は灰釉、下半部は鉄釉が掛け分けられる。底裏の釉は拭き取られ、その部分には右回転糸切り痕が残る。6は京都・信楽系軟質施釉陶器の色絵筒形碗でTD-1-jに分類される。高台内以外には下地として白土を施し、その上から大の文字と縦線を赤色で、それ以外の文字が黒色で上絵付けされる。口鏽を有する。いわゆる暦手碗であり、体部には享保15 (1730) の大小月、日付、朔日の十二支と暦註が書かれている。暦註には十二月節 (小寒)、十二月中 (大寒)、二百十日、彼岸、節分、庚申、日食、月食などが記されている。なおこの暦註は、他の暦手碗と比較すると暦註の種類が少ないという指摘が稲垣正宏氏よりなされている (稲垣 2001)。

5は底裏に左回転系切り痕がある土器皿でDZ-2-bに分類される。胎土はにぶい橙色を呈す。底部脇は強くなでられ、やや括れる。見込みはわずかに膨らみ、底部と体部の境は浅い溝状に窪む。口縁部にはススが付着する。

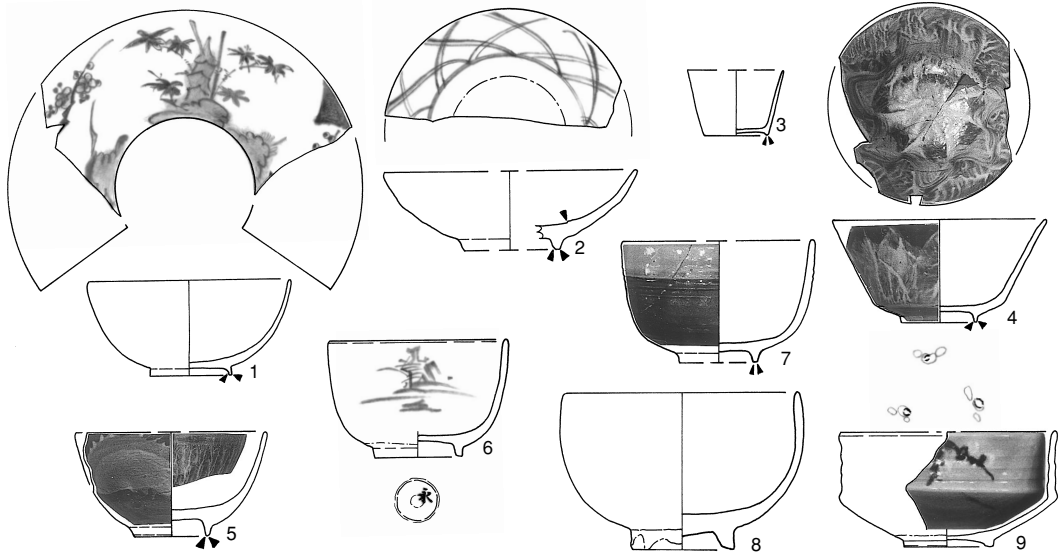
SK144 (IV-52 図)

1～3は肥前系磁器(JB)である。1は染付半球形碗でJB-1-fに分類される。高台断面形は三角形を呈し、高台はわずかに内傾している。2は見込み蛇ノ目釉剥ぎされた染付皿でJB-2-1に分類される。高台はまだ小さく、畳付には白色の砂粒が多く付着する。3は白磁の猪口でJB-7-bに分類される。体部は直線的に立ち上がる。底部は削り込まれ、輪高台状を呈す。4～9は陶器碗である。4～6は肥前系で、いずれも胎土は暗褐色を呈する。4の体部は直線的に「ハ」の字状に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する。内外面に打刷毛目が施される。TB-1-hに分類される。5も内外面に打刷毛目が施された丸碗でTB-1-gに分類される。6はいわゆる京焼風陶器の丸碗でTB-1-bに分類される。高台は内側が外側より深く削り込まれ、高台内には径2cm大の浅い円圏と「永」の刻印を有す。7、8は瀬戸・美濃系の碗である。7はいわゆる腰鍔碗でTC-1-uに分類される。高台径が小さく、高台高は低い。畳付の釉は拭き取られるが、その内側に砂目状のものが1個残る。8は灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。口縁部がやや内傾する。9は京都・信楽系の半筒形碗でTD-1-iに分類される。高台内はアーチ状に削り込まれ、底部中央の器壁は非常に薄い。高台脇は面取りされる。外面には鉄と白土の梅花文がみられる。なお見込みには目跡が3個残るが、その目跡を隠すように、その上に上絵付をした痕跡が認められる。その意匠は不明である。

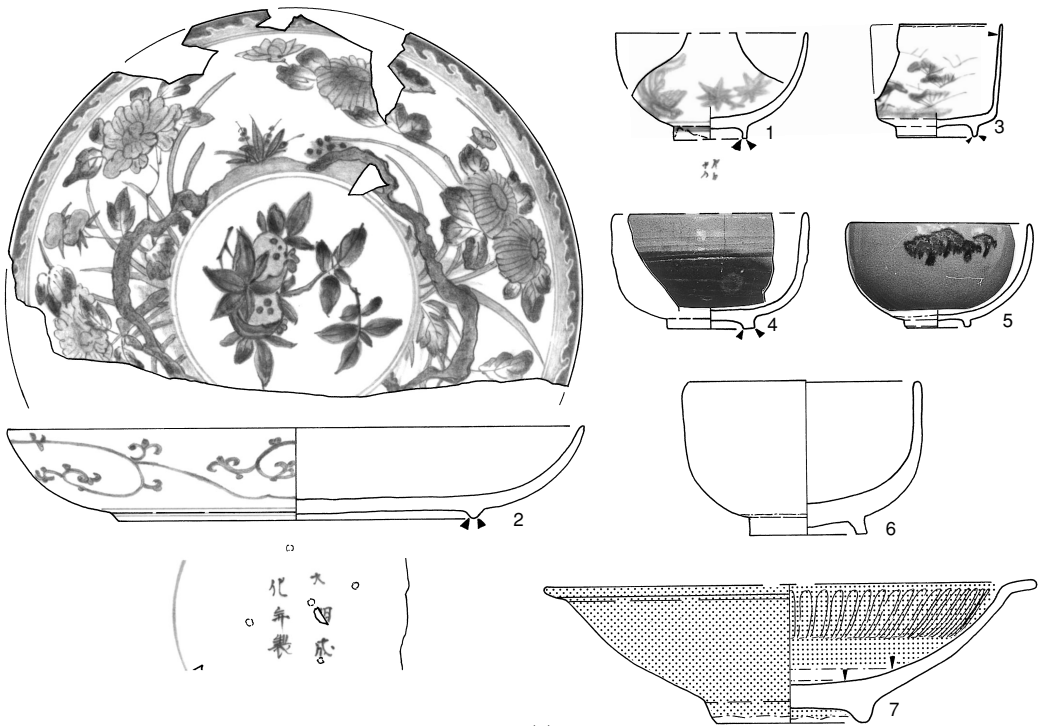
SU146 (IV-52・53 図)

1～3、7は肥前系磁器(JB)である。1は染付碗でJB-1-uに分類される。外面にはコンニャク印判による鳥と紅葉の絵付が、高台内にはかなり崩れた銘がみられる。「大明年製」か。2は染付大皿でJB-3-bに分類される。体部は丸味を帯び、低く立ち上がる。見込み、裏文様ともに丁寧な手描きで施される。高台内には目跡が5個と、「大明成化年製」銘がみられる。3は染付筒形の蓋物でJB-13-bに分類される。高台脇は面取りされる。7は青磁鉢でJB-5-aに分類される。見込みはやや幅広く蛇ノ目釉剥ぎされる。口縁部内側には形押成形による細かな蓮弁がみられる。畳付の釉はやや雑に拭き取られる。

4～6、8～13は陶器である。4～6は碗である。4は瀬戸・美濃系のいわゆる腰鍔碗でTC-1-uに分類される。やや幅広の畳付を有し、砂目状の痕跡が4個残る。5は京都・信楽系の灰釉半球形碗でTD-1-bに分類される。外面には鉄絵の松がみられる。高台脇は面取りされる。6は瀬戸・美濃系の灰釉薄掛け碗でTC-1-cに分類される。底部器壁は著しく厚い。8は瀬戸・美濃系のいわゆる笠原鉢でTC-5-aに分類される。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反し、緩やかな鰐状を呈す。内面には青緑釉が流し掛けられる。見込みと高台内それぞれに3個の目跡が残る。口縁部内側に溶着痕跡が認められる。9は瀬戸・美濃系のいわゆる御深井の水注でTC-27-cに分類される。外面に鉄の摺絵がワンポイントみられる。10～12は瓶である。10は胴部がラッキョウ形を呈し、灰釉が施釉された瀬戸・美濃系二合半徳利でTC-10-aに分類される。11は灰釉が施釉された瀬戸・美濃系五合徳利でTC-10-dに分類される。肩部辺りに線彫りで「十」の釘書きがある。12は容量が一升以上あると思われる志戸呂系徳利でTF-10に分類される。13は堺系播鉢でTL-29に分類



SK144



SU146(1)

IV-52 図 SK144・SU146(1) 出土遺物

第IV章 出土した遺物



IV-53 図 SU146 (2) 出土遺物

される。胎土は赤橙色を呈す。口縁部付近の外表面を強くなでて縁帯を形成し、その外表面には櫛状工具で沈線を2本めぐらす。底裏の外周に沿って焼台痕跡が残る。拵目は11条1単位で、見込みにはクロスパターンの拵目がみられる。

14～19は土器である。14、15は皿でDZ-2-bに分類される。胎土はともに淡橙色を呈す。14の体部は直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。見込みには緩やかな凹凸があり、底部には「大」の墨書がみられる。15の体部は丸味を帯びて立ち上がる。見込みはやや盛り上がり、底部と体部の境は浅く溝状に窪む。また見込みは被熱し、わずかに円形に赤色化している。口縁部にはススが付着する。16は土師質丸火鉢でDZ-31-aに分類される。胎土はにぶい橙色を呈す。底部には足が1個残る。口縁部には敲打痕が認められる。17は塩壺蓋でDZ-00-cに分類される。胎土は橙色を呈し、内面には細かな布目がみられる。18、19は塩壺である。18は板作成形2ピースの塩壺で「泉湊伊織」の刻印を有す。DZ-51-gに分類される。底裏には粘土塊を詰める際に押した痕跡が残り、ひどく中央が窪んでいる。内面には粗い布目痕跡が残る。19は板作成形2ピースの塩壺で「サカイ 泉州磨生 御塩所」の刻印を有す。DZ-51-kに分類される。

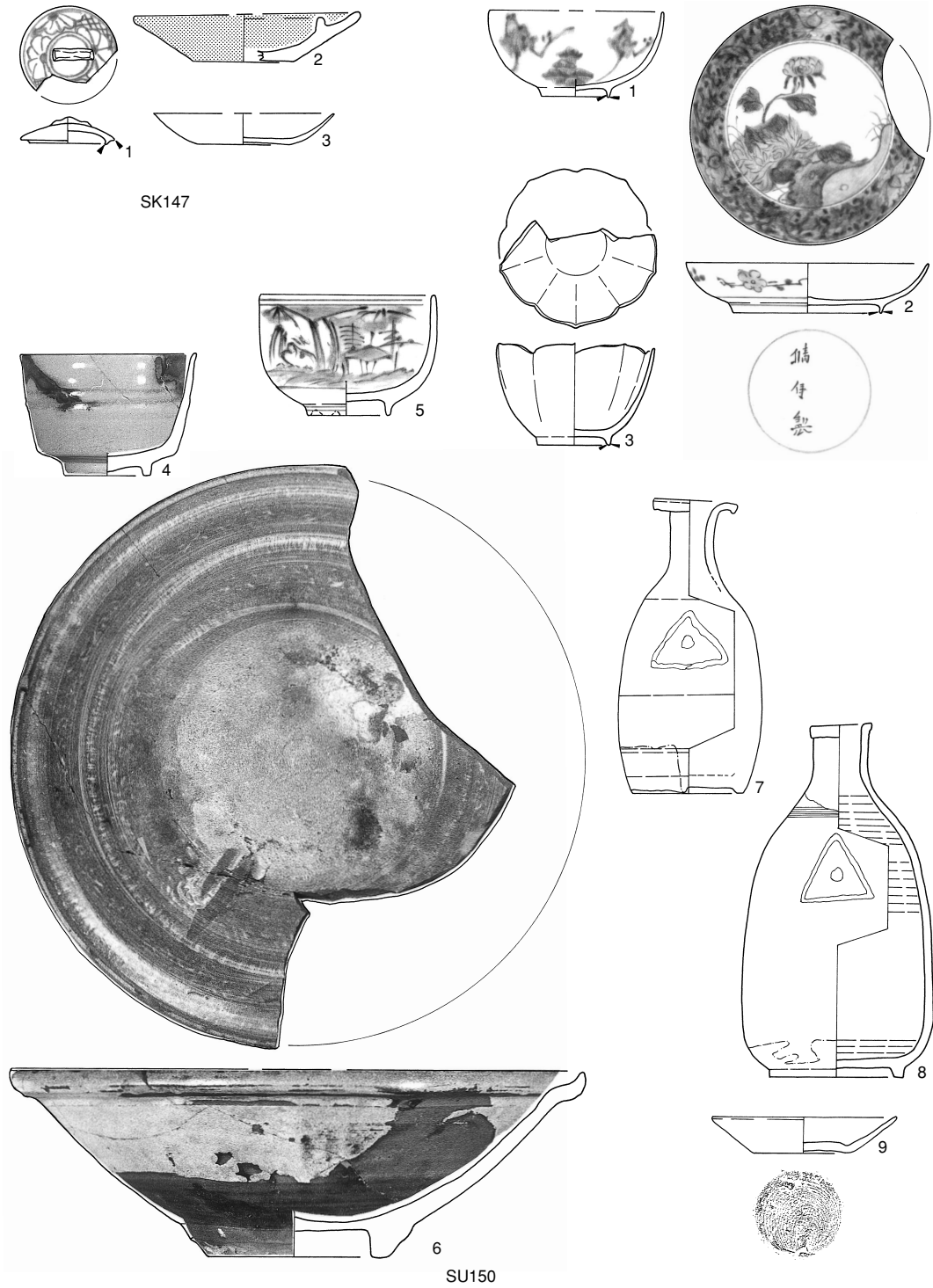
SK147 (IV-54 図)

1は肥前系染付蓋物の蓋でJB-00-fに分類される。橋状の摘みを有する。2は透明釉が内外面に施釉された油受け皿でDZ-40-bに分類される。受け部には浅いU字状のスリットの一部分が残る。3はいわゆる磨きかわらけでDZ-2-dに分類される。胎土はにぶい橙色を呈する。口縁にはわずかにススが付着する。

SU150 (IV-54 図)

1～3は肥前系磁器(JB)である。1は染付半球碗でJB-1-fに分類される。高台はわずかに内傾する。外面には手描きで松と梅が交互に描かれるが、全体的に滲む。2は高台断面が三角形を呈する染付皿でJB-2-cに分類される。体部は腰張り気味に立ち上がり、口縁部はやや外側へ開く。高台はわずかに内傾し、高台内には目跡が1個と「靖年製」の銘がみられる。「靖」は「嘉靖」の「靖」で、有田の柿右衛門窯で見られる銘である(大橋 1990)。3は白磁鉢でJB-5-fに分類される。体部は型打成形され、輪花にされる。口縁部は内側へ斜めにケズリ調整されている。

4～8は陶器である。4、5は碗である。4は瀬戸・美濃系の灰釉碗でTC-1に分類される。体部は大振りな杉形を呈し、口縁部はやや歪な円形を呈する。外面3ヶ所に鉄釉が流し掛けられ、底部釉は拭き取られる。5は肥前系陶胎染付碗でTB-1-fに分類される。体部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。呉須は青黒く発色し、絵付もやや雑である。畳付内側には白色砂粒が付着する。6は肥前系三島手の鉢でTB-5-bに分類される。胎土はにぶい褐色を呈する。口縁は鐔状を呈し、口唇部のみがさらに垂直に立ち上がる。畳付脇は強くなでられ括れを有するが、その部分には指頭痕のような凹みが数ヶ所みられる。内面及び外面上半部には灰釉が施釉され、外面下半部には鉄釉が薄く施釉される。内面の白土による象嵌は潰れ、文様の輪郭が判然としない。見込みには楕円形の砂胎土目痕跡が8個残る。7、8は瀬戸・美濃系の瓶である。7は底部の灰釉が拭き取られた二合半徳利でTC-10-aに分類される。胴部はラッキョウ形を呈し、頸部は長い。口縁部は水平に大きく張り出し、外側は平らになでられ鐔状を呈す。底部は浅く削り込まれる。胴部にはベタ書きで「△」の釘書きがみられる。8は灰釉が施釉された五合徳利でTC-10-dに分類される。



IV-54 図 SK147・SU150 出土遺物

胴部は釣鐘形を呈し、肩部には圈線が数条みられる。口縁部は小さく折り返され、頸部に密着している。高台はやや外側へ開き気味である。頸部から肩部にかけてうのふ釉が流し掛けられる。底部釉は拭き取られる。胴部には7と同じベタ書きで「△」の釘書きがみられる。

9は底裏に左回転糸切り痕がある土器皿でDZ-2-bに分類される。胎土は肌色を呈する。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外側へ開き気味である。見込みは弱く膨らみ、底部と体部の境は浅い溝状に窪む。口縁部にはススが付着する。

SU151 (IV-55 図)

1は灰釉片口鉢で、TC-23-bに分類される。内面にトチの溶着痕が3ヶ所認められる。2は柿釉搨鉢でTC-29に分類される。口縁部の折り返しは長くのびる直前の様相を呈している。3は土師質の瓦燈で、DZ-45に分類される。受部の舌状の突起は低く、中央の皿部にはタール状の付着物が確認できる。

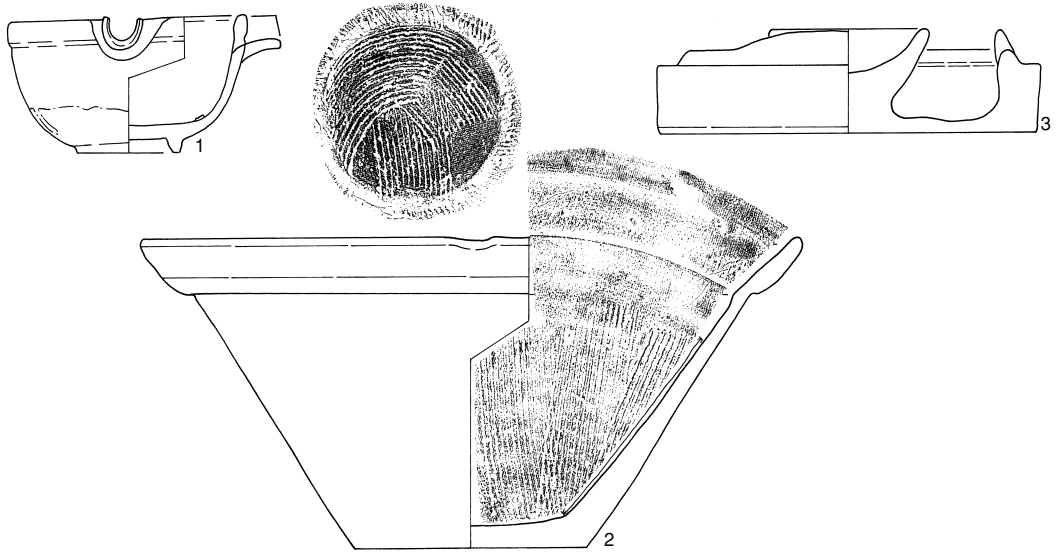
SK152 (IV-55～60・100 図)

SK152からは多量の遺物が確認されている。東大編年では、青磁染付(4)が伴う段階として設定したVI期のうち、小広東碗出現以前の段階であるVIa期の指標となる遺物群である。

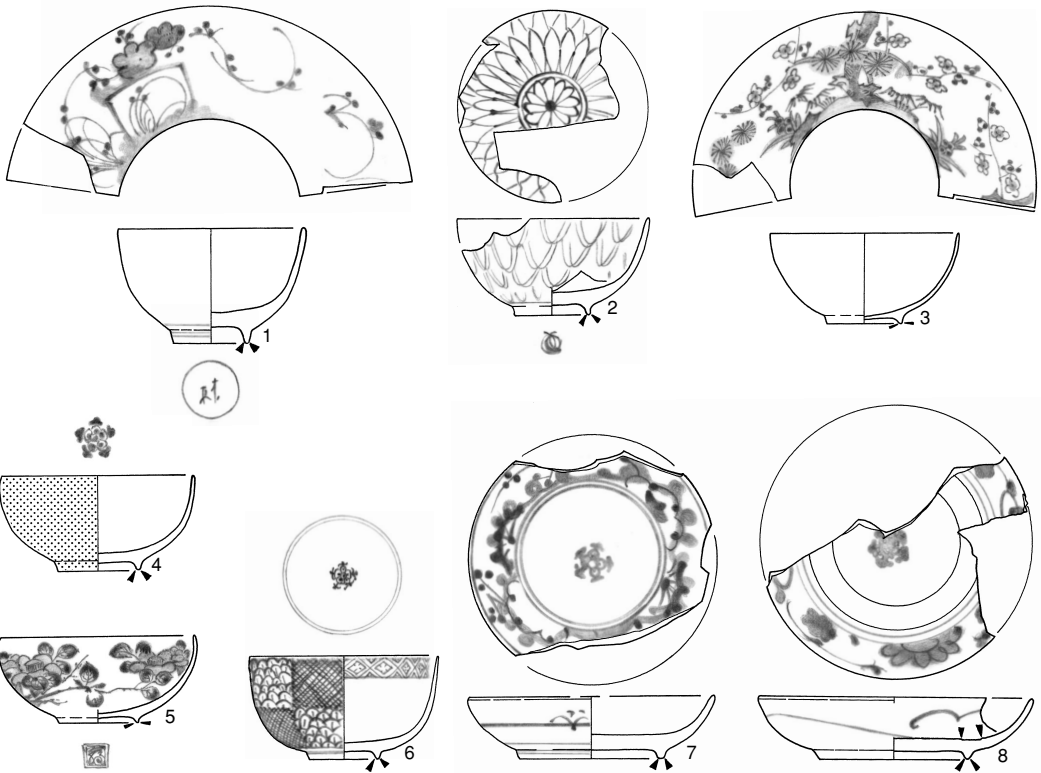
磁器(1～22) 1～6は碗で、4は青磁染付、それ以外は染付である。1はJB-1-v、2はJB-1-g、3～5はJB-1-f、6はJB-1-jに分類される。4、5は見込み手描き五弁花、5は底部二重角枠内渦福である。1、2はややくすんだ発色になっている。7～14は染付皿で、7、10、11、13、14はJB-2-e、8はJB-2-m、9はJB-2-f、12はJB-2-lにそれぞれ分類される。7、9、12は胎土、呉須の色調とも不良である。五弁花はコンニャク印判が7、8、9、13、手描きが10、11は中央がコンニャク印判、弁花が手描きである。10には1ヶ所、11には4ヶ所ハリ支え痕が確認される。15は上手の小型染付鉢で、JB-5-bに分類される。生地、呉須の発色は良好で、底部は二重角枠内渦福の銘がある。16は型打ちの白磁輪花鉢でJB-5-bに分類される。いわゆる乳白手である。17は染付坏でJB-6-aに、18は白磁坏でJB-6-bに分類される。19は白磁壺(JB-15)の蓋でJB-00-gに分類される。受部無釉部には細かい白色砂粒が多く付着している。20は染付蓋物(JB-13)の蓋で、JB-00-fに分類される。21は染付仏飯器で、JB-8-cに分類される。碗部が端反形を呈する器形の出土例は少ない。呉須はややくすんだ発色をしている。22は白磁仏飯器でJB-8-cに分類される。脚裏は無釉である。

陶器(23～79、85) 23～42は碗である。23はいわゆる呉器手の肥前系灰釉丸碗で、TB-1-aに分類される。24はいわゆる京焼風陶器の灰釉鉄絵碗で、TB-1-bに分類される。底部には「清水」の刻印が認められる。25は横位の刷毛目碗で、TB-1-dに分類される。胎土の色調はやや明るい茶褐色を呈する。26は外面下半から錆釉、外面上半及び内面が灰釉の掛け分けのいわゆる腰錆碗で、TC-1-uに分類される。底部には扇面内に「清」の刻印が認められる。27は底部しか遺存しないが、いわゆる灰釉呉須絵の御室碗と推定できるもので、TC-1-dに分類される。底部に○内に「清」の刻印が認められる。28～30は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。28、29は底部無釉で、30は底部の釉が拭き取られている。31は灰釉鉄釉流しの碗で、TC-1-fに分類される。底部は軽い左回転の渦巻高台に成形されている。32はトビガンナを用いた鎧手茶碗である。TD-1に分類される。同手の瀬戸・美濃系統の御本になった製品とも推定できる。体部の文様は鉄釉(トビ

ガンナ部のみ)→トビガンナ→全釉(灰釉)の順序で行われている。底部は浅い左回転の渦巻き状の沈線が刻まれている。高台外周は面取りされている。33は天目茶碗風の器形を呈する碗形で、全体に錆釉の化粧掛け、内外面上位に鉄釉を流し掛けている。同様の施釉法は筒形碗(TC-1-ab)によくみられる。高台は左回転の渦巻高台になっている。TC-1に分類される。34は褐釉が掛けられた碗で、生産地は不明。体部の一部にへこみがあり、あるいは鉢か?。胎土は堅緻な茶褐色を呈する。35は色絵碗で、TD-1-mに分類される。赤、青などの顔料で印や花押などの文様を描いている。高台外周は面取りされている。36、38は半球形の碗で、TD-1-bに分類される。36は黒色を呈する鉄釉、38は灰釉の上に器面及び見込み中央に色絵が施されている。37、39は瀬戸・美濃系陶器の京都・信楽系半球碗(TD-1-b)写しで、TC-1-mに分類される。文様は鉄絵で釉裏に描かれている。40は灰釉鉄釉掛け分けのいわゆるせんじ碗でTC-1-vに分類される。41、42は錆絵半筒形碗で、TD-1-iに分類される。文様は41が錆絵と白土、42は錆絵のみで描かれている。ともに見込みに3ヶ所のピン痕が認められる。43は嬉野町内野山窯の青緑釉輪剥皿で、TB-2-aに分類される。44～46は摺絵によって文様が施されている皿で、TC-2-eに分類される。全て鉄絵で、見込みには3ヶ所のピン痕が認められる。44、45の底部は無釉である。47、48は鉢で、TC-5に分類される。47は御深井風の型鉢である。底部は碁笥底を呈する。48には鉄絵で蔓草文が描かれている。49は刷毛目の片口鉢で、TB-23-aに分類される。高台脇は浅く面取りされている。口唇、底部は無釉である。50～53は褐釉の片口鉢で、TC-23-bに分類される。いずれも見込みには3ヶ所のトチ痕が認められる。50～52の釉は明るい黄褐色、53は暗い褐色を呈する。54はラッキョウ形の水注で、TC-27-aに分類される。釉は尾呂風の鉄釉ワラ灰流しである。55は山水文のつく京焼風陶器香炉・火入れで、TB-9-bに分類される。底部には「小松吉」の刻印が押印されている。56は褐釉香炉・火入れで、TC-9-bに分類される。口唇部はキセルによると思われる敲打痕が顕著に認められる。57は陶胎染付の香炉・火入れで、TB-9-aに分類される。器面には横位の染付線が書かれている。58は小型の灰釉香炉・火入れで、TC-9-aに分類される。59は上半灰釉、下半鉄釉掛け分けの花生で、TC-22-bに分類される。60は小型の色絵瓶で、TD-10に分類される。色絵は赤の他は剥落して不明である。底部に墨書が認められる。61は鉄釉の蓋で、TZ-00-eに分類される。62は灰釉水注の蓋で、TC-00に分類される。63は灰釉合子で、TD-18-bに分類される。64は摺絵の灰落しで、TC-24-bに分類される。絵は鉄で描かれている。65は錆絵の花生けで、TD-22に分類される。66は錆絵染付の灰落しで、TD-24に分類される。口唇部は敲打痕が顕著に認められる。67は摺絵の鬘水入れで、TC-25に分類される。文様は鉄絵の具で描かれている。68は内外面全釉の鉄釉播鉢で、TB-29-aに分類される。外面には格子状のタタキ痕が認められる。69は無釉の焼締め播鉢で、TL-29に分類される。見込み中央の播目はクロスパターンである。70～74はいわゆる高田徳利で、70がTC-10-a、71～73がTC-10-d、74がTC-10-eに分類される。70は灰釉、71～74は褐釉にワラ灰流しである。75～79は灯明に使用される道具で、75がTC-40-c、76がTC-2-o、77がTF-40、78、79がTF-2に分類される。75、76は柿釉、77～79は錆釉が施されている。77は2ヶ所のドーム状の穿孔が認められる。79の口縁部には灯心痕が顕著に観察される。85は焼締め壺の蓋で、TO-00に分類される。色調は明褐色を呈し、焼成はやや不良である。

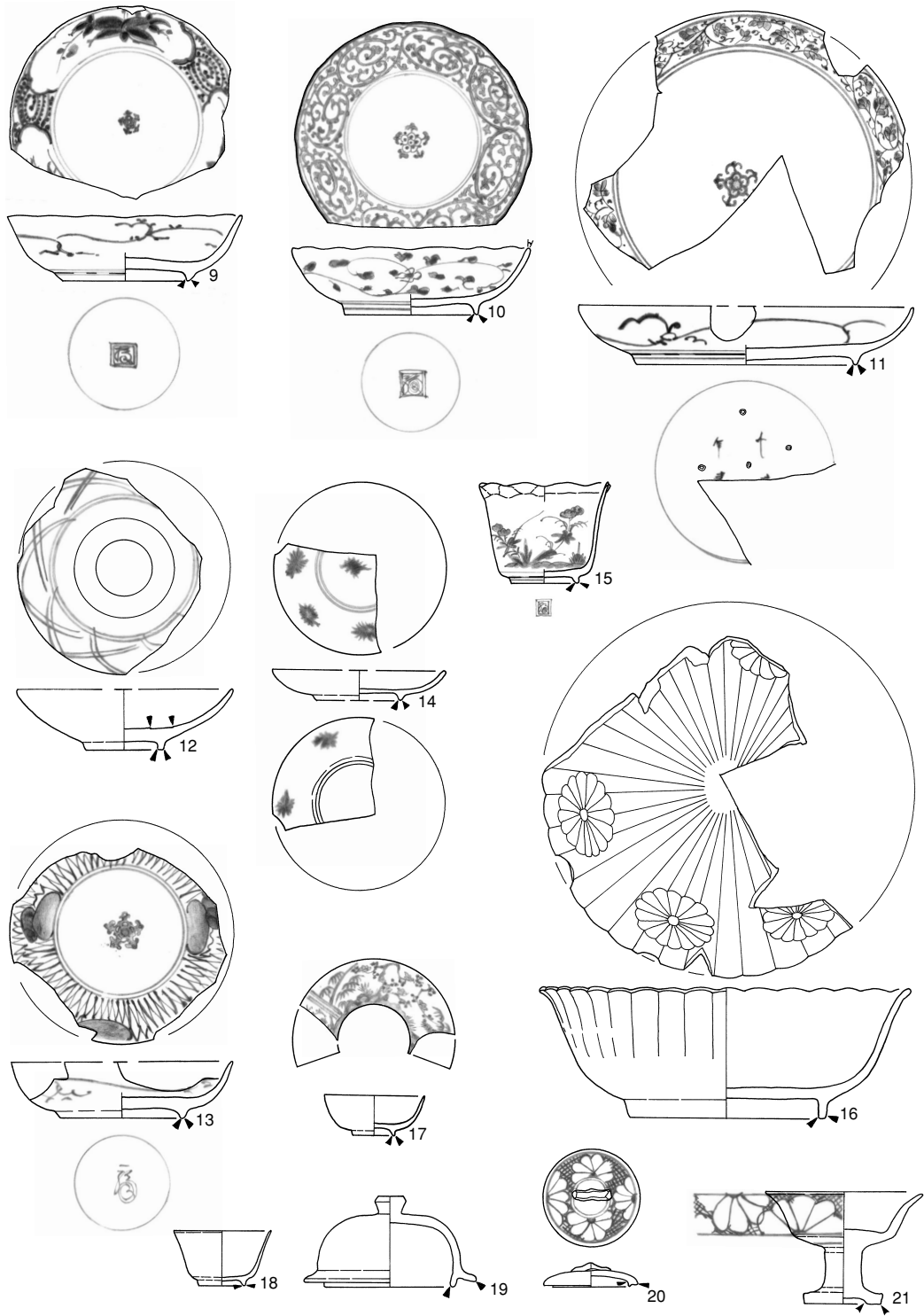


SU151



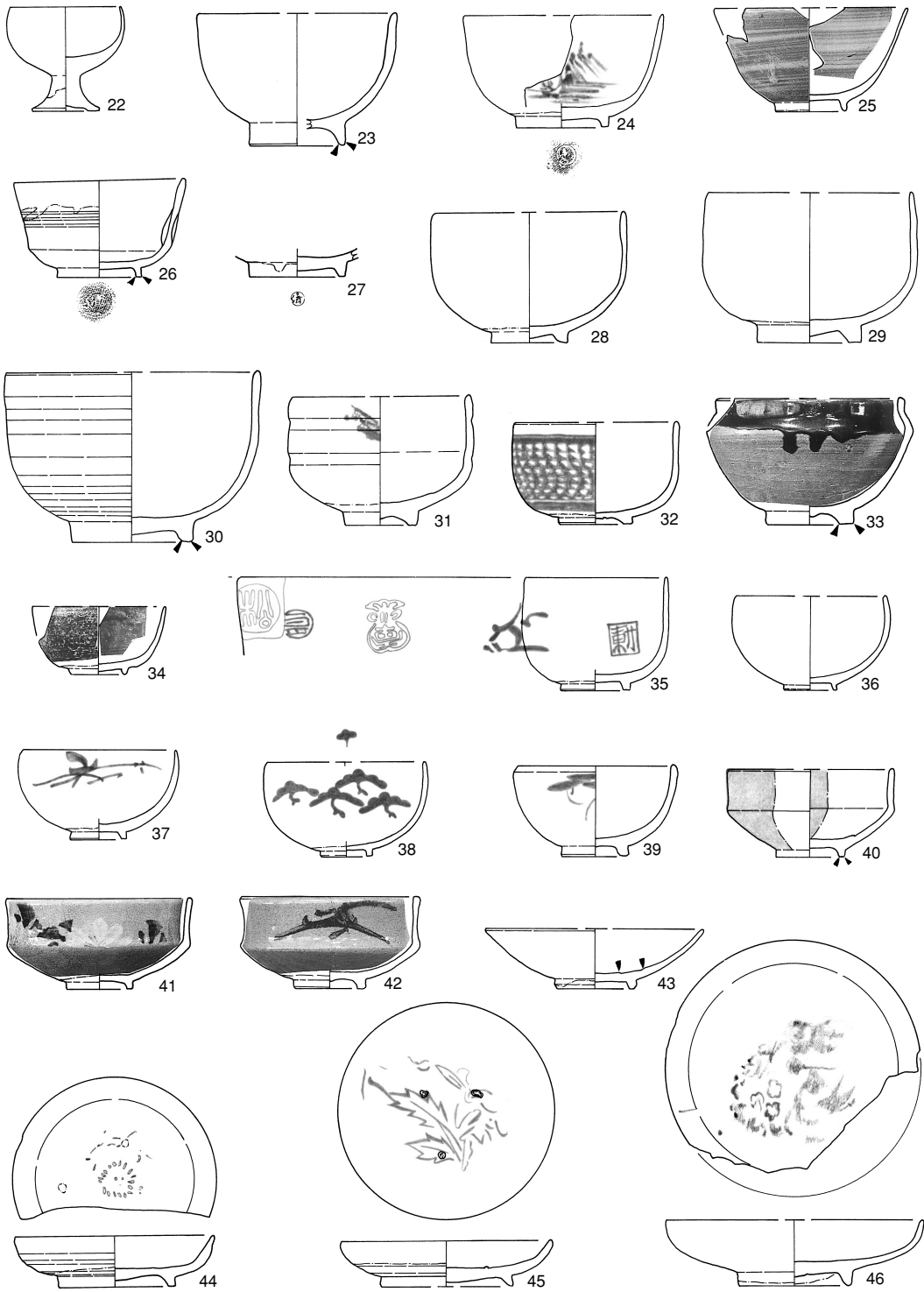
SK152(1)

IV-55 図 SU151・SK152(1) 出土遺物

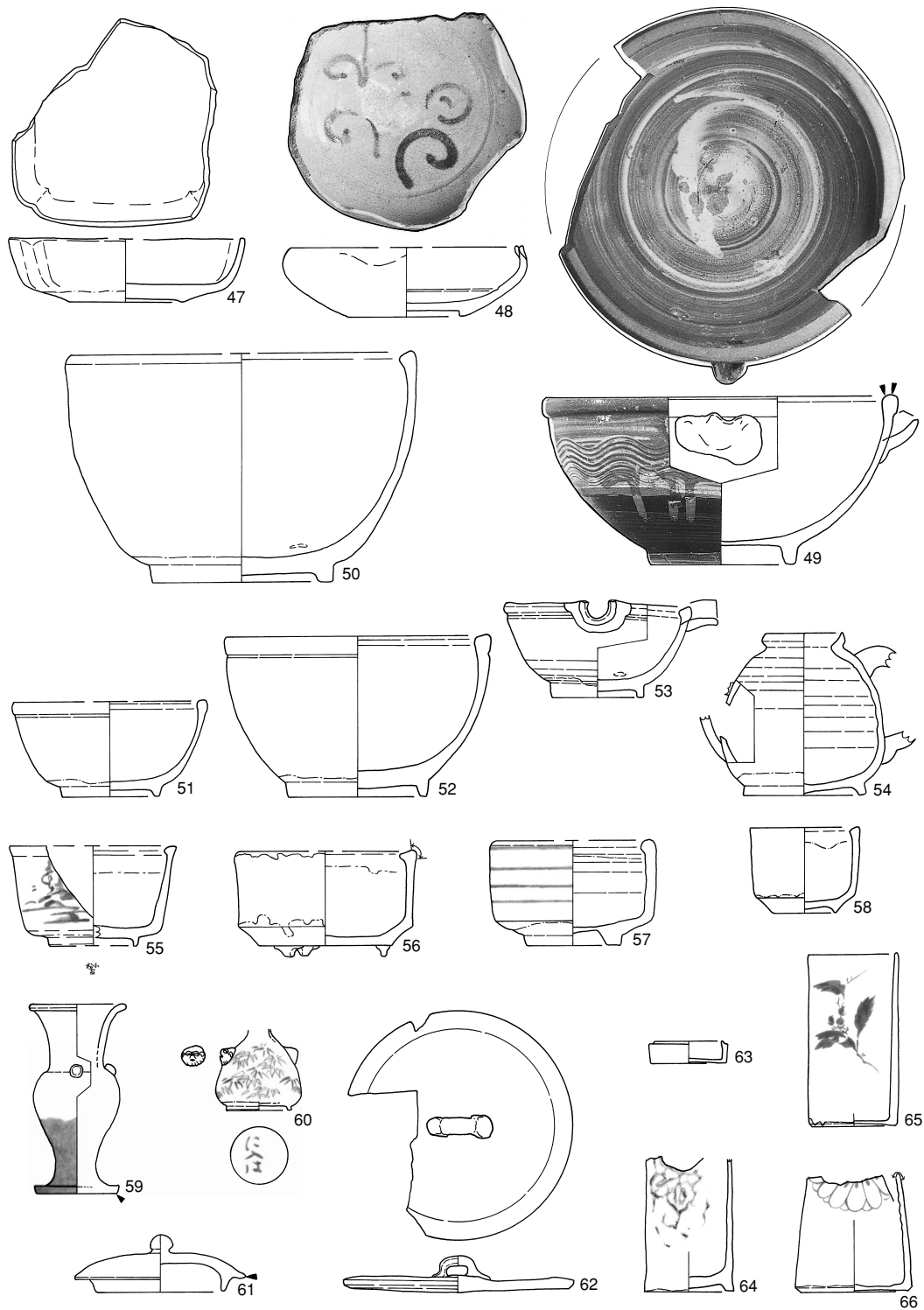


IV-56 図 SK152 (2) 出土遺物

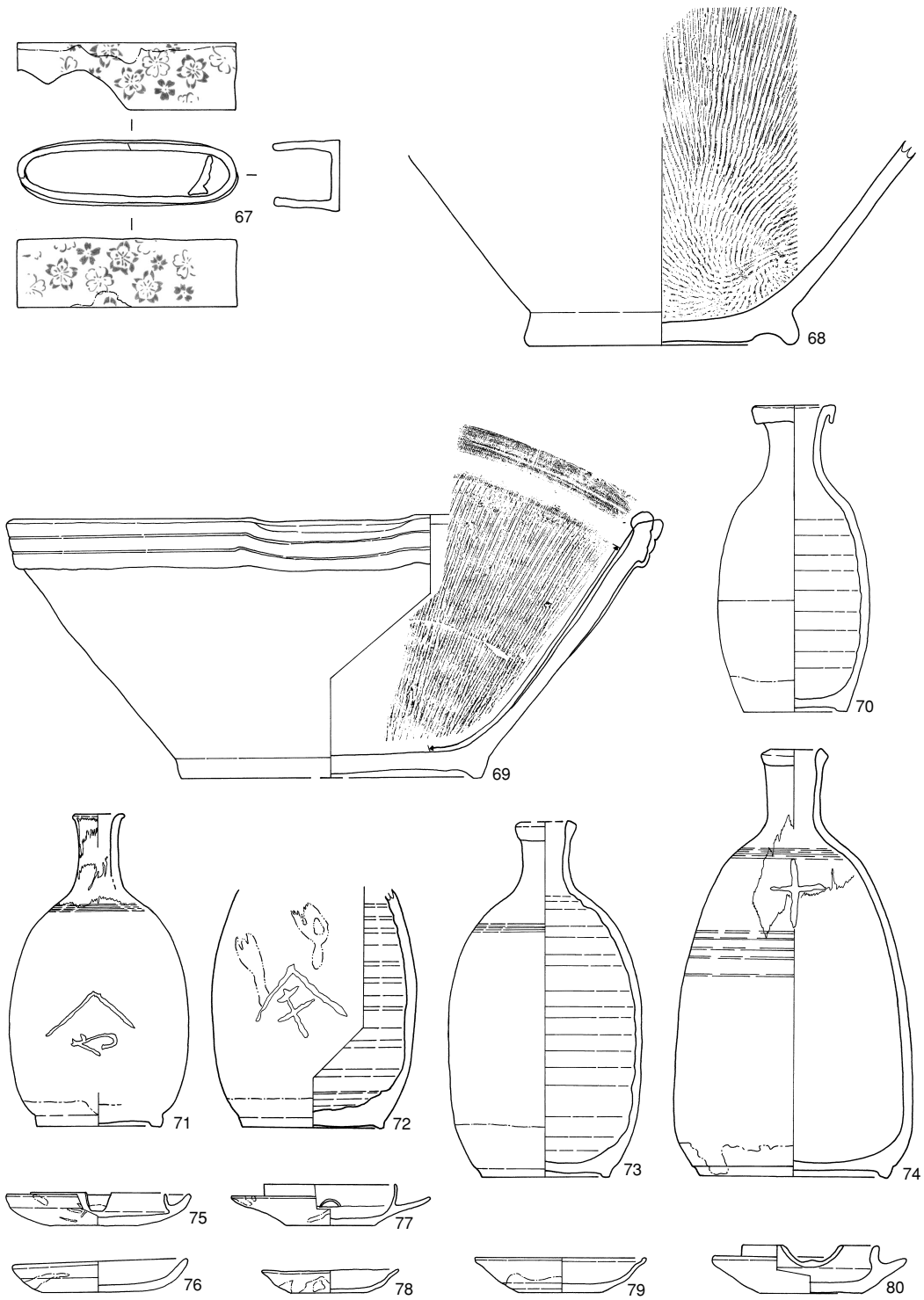
第IV章 出土した遺物



IV-57 図 SK153 (3) 出土遺物

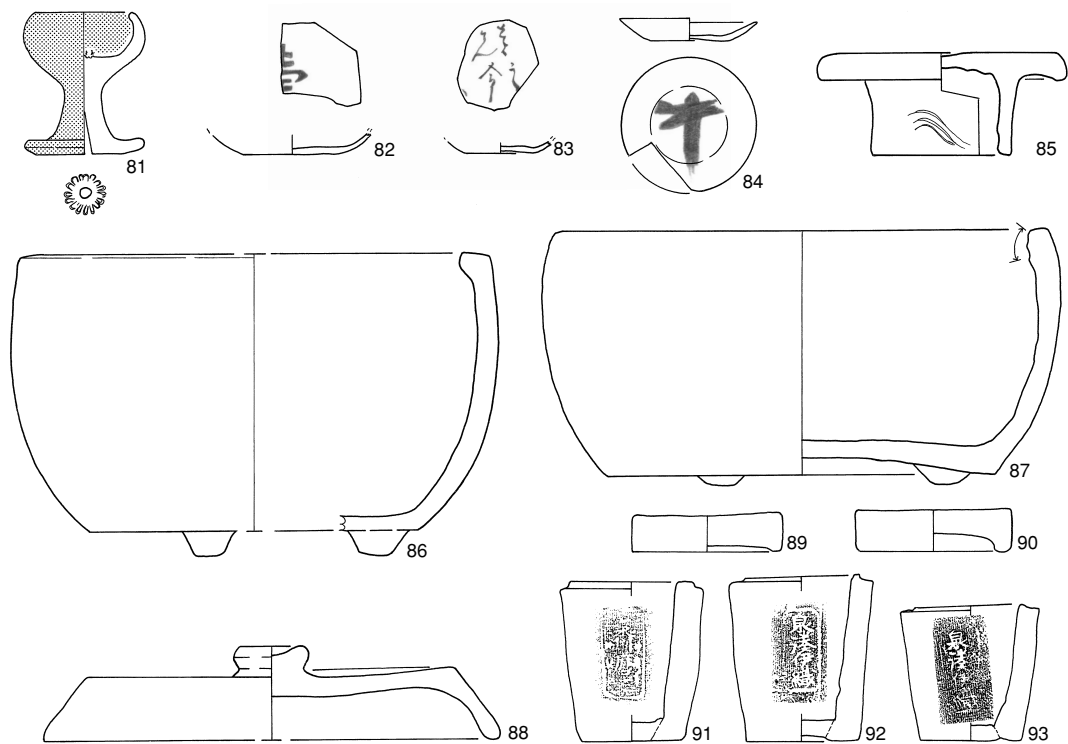


IV-58 図 SK152 (4) 出土遺物

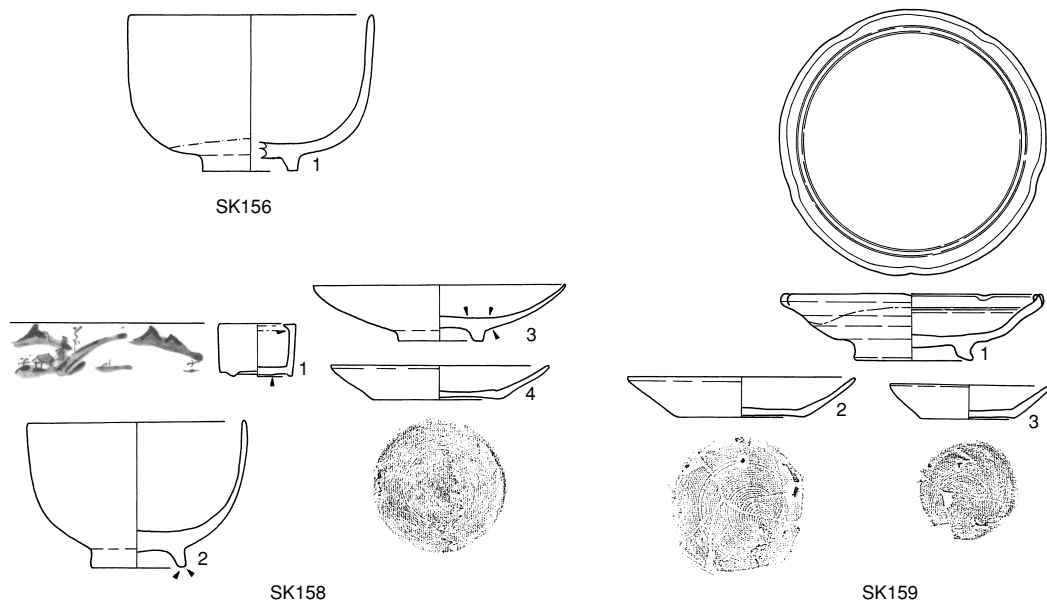


IV-59 図 SK152 (5) 出土遺物

第IV章 出土した遺物



SK152(6)



IV-60 図 SK152(6)・SK156・SK158・SK159 出土遺物

土器(80～84、86～93) 80は油受け皿で、DZ-40-dに分類される。81は透明釉の脚付きひょうそくで、DZ-44-fに分類される。内側の芯立ては欠損している。底部中央刺突の周囲には花卉状の押印が認められる。82は「寿」の浮文が施された磨きかわらけで、DZ-2-jに分類される。寿字の浮文は漆の上に金箔が施されている。83、84はDZ-2-bに分類される。83は見込みに、84は底部に墨書が施されている。86、87は土師質の丸火鉢で、DZ-31-aに分類される。86の表面には銀彩が顕著に観察される。87の口縁部は敲打痕が認められる。88は火消壺の蓋で、DZ-00-hに分類される。89、90は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。内面は布目の痕跡が観察される。91～93は板作り成形の塩壺で、91は「サカイ 泉州磨生 御塩所」、92、93は「泉湊伊織」の刻印が押されている。分類は91がDZ-51-k、92、93はDZ-51-gである。92には内面に布目痕が認められる。94～98は丸底のほうろくで、DZ-47-aに分類される。94～96は側面が短い新しいタイプで、97、98は側面が長い古手である。96には内耳を伴う。全て底部に二次的な火熱を受けた痕跡が確認できる。胎土は94が橙褐色、他は褐色を呈する。99は火消し壺の蓋でDZ-00-hに分類できる。内面・口唇部に明瞭なススの付着が認められる。100は硬質瓦質の風炉で、DZ-31-hに分類される。器面は丁寧に研磨されている。101は筒型の硬質瓦質香炉・火入れでDZ-9に分類される。口唇部は敲打痕が明瞭に観察される。器面には地紋に龍の文様が陰刻されている。102、105はかわらけでDZ-2-b、103、104は底部平滑の磨きかわらけでDZ-2-dに分類される。104は底部薄作りで、黒色化している。106は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。内面は布目が明瞭に確認され、布目の中央は継ぎ目が観察される。また、受け部外面は比較的丁寧に磨かれている。107は「播口」の刻印を持つロクロ成形の塩壺で、DZ-51-uに分類される。刻印は「播磨大極上」と推定される。108は「泉湊伊織」の刻印を持つ板作りの塩壺で、DZ-51-gに分類される。

SK156 (IV-60 図)

1は灰釉碗で、TC-1-cに分類される。底部は無釉である。

SK158 (IV-60 図)

1は小型の染付香炉・火入れで、JB-9-aに分類される。底部は円盤状の露胎部を持つ。2はいわゆる呉器手碗で、TB-1-aに分類される。3はやや透明な青磁の輪剥皿で、JB-2-kに分類される。4はかわらけで、DZ-2-aに分類される。口縁部にはほぼ全周に灯心痕が付着している。

SK159 (IV-60 図)

1は薄い緑釉が掛けられた皿で、TC-2-rに分類される。皿の形態から総織部の系譜上に位置付けられる製品であろうと推定される。2、3はかわらけでDZ-2-bに分類される。

SK160 (IV-61 図)

1は染付碗で、JB-1-eに分類される。2はいわゆる青手古九谷の色絵製品で、JB-3-aに分類される。表面の色絵は剥落が激しく、文様などは不明である。3はいわゆる京焼風陶器碗で、TB-1-bに分類される。底部には「清水」の刻印が押印されている。4、5はいわゆる呉器手碗で、TB-1-aに分類される。6は青緑釉輪剥皿で、TB-2-aに分類される。7は焼締めのいわゆる献上手徳利で、TE-10-aに分類される。体部下半はやや火当たりが悪く明褐色を呈する。8はかわらけで、DZ-2-bに分類される。

SU163 (IV-61 図)

1～3は染付磁器で、4は白磁である。それぞれJB-1-d、JB-2-f、JB-6-a、JB-61に分類される。2の見込み中央はコンニャク印判五弁花、3の花文はコンニャク印判で施文されている。また、2の裏面にはハリ支えが認められる。5は灰釉碗で、TC-1-dに分類される。釉は白濁した半透明で、長石分が混ざっていると推定される。6は色絵の碗で、TD-1-bに分類される。器面は菖蒲が上絵で描かれているが、ほとんど剥落しており色調は不明である。7は変形の鉢で、TD-5に分類される。器面には列点状に注連縄文が、染付されている。胎土は白色で、堅緻である。8は三島手の鉢で、TB-5-bに分類される。見込みの象嵌や施釉はラフで、降灰が顕著に確認できる。9は一部ゆがみがみられる灰釉碗で、TD-1に分類される。底部は右回転の渦巻状のへら彫りが認められる。10は大型の灰釉合子で、TC-18に分類される。表面は二次的な火熱を受けている。11はかわらけで、DZ-2-bに分類される。器面は被熱のため表面は剥落している。口縁部全周に灯明による油痕が認められる。

SK164 (IV-62 図)

1は染付蓋物の蓋で、JB-00-fに分類される。表面の釉は焼成不良で、白濁している。

SK165 (IV-62 図)

1は染付輪剥皿で、JB-2-mに分類される。見込み中央の五弁花はコンニャク印判による。

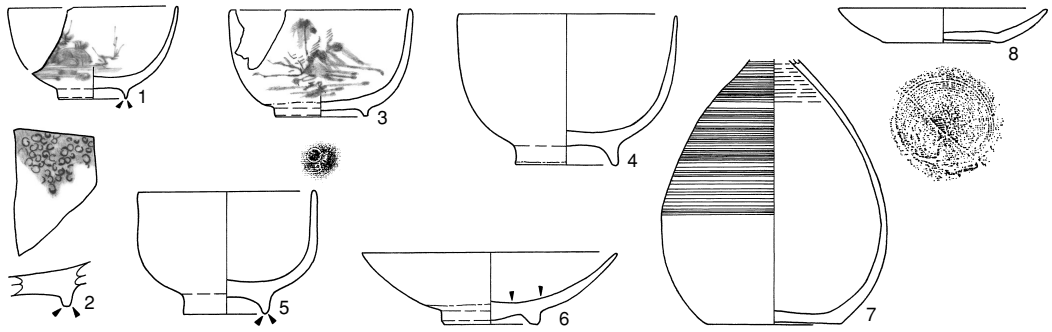
SK166 (IV-62・63 図)

本遺構からは、多くの遺物が出土している。年代は瀬戸・美濃系磁器が出土していることから東大編年のⅧ期に該当するが、JC-2-e(型皿)やJC-1-e(湯呑碗)などが出土していることから、Ⅷc期に位置付けられる。

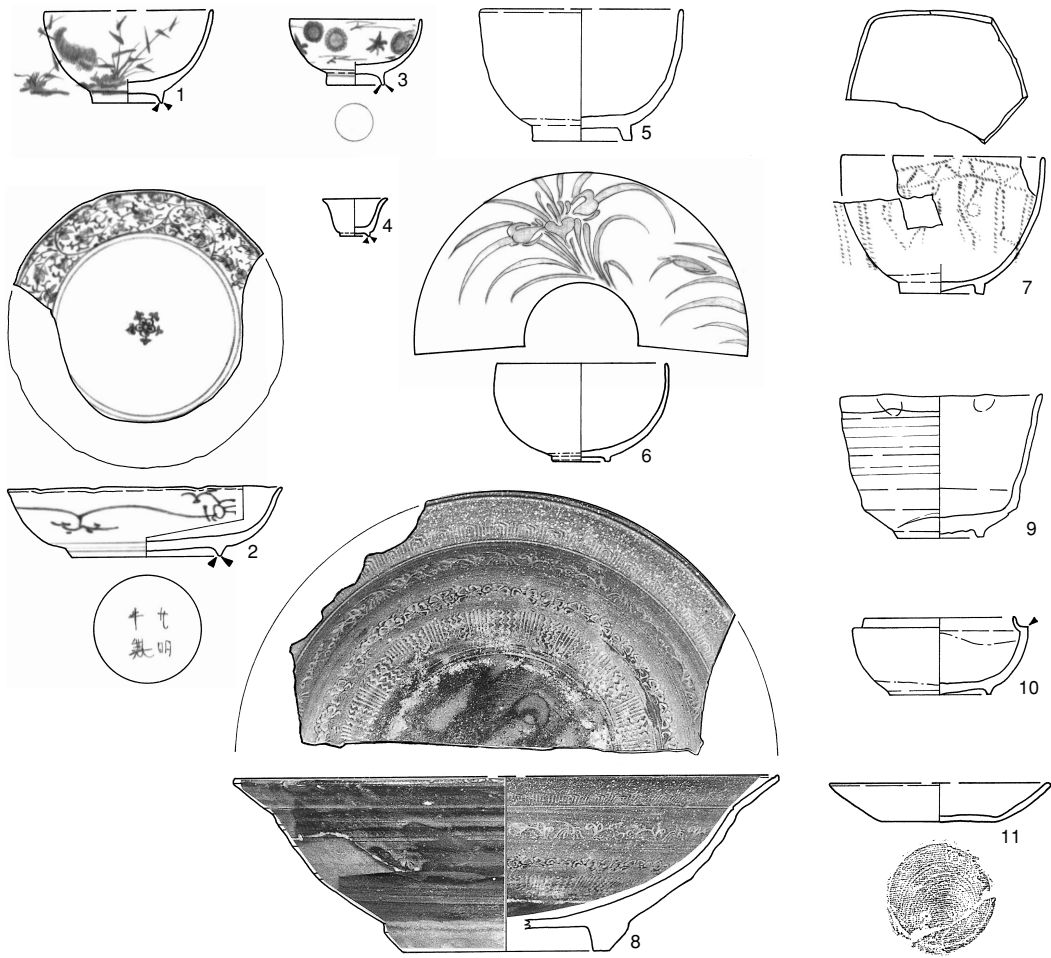
1～13は磁器である。1、2は染付碗で、JC-1-dに分類される。3は染付蓋物で、JB-13に分類される。胎土、呉須の発色ともに良好である。4は染付碗で、JC-1-eに分類される。文様は細線で描かれ、呉須は透明感のある青色に発色している。5～7は染付、8は青磁、9は白磁の皿で、5はJB-2-i、6はJB-2-q、7はJB-2-e、8はJC-2-e、9はJC-2-bに分類される。8は型で作られており、あるいは三田青磁の可能性がある。10は染付鉢で、JB-5に分類される。焼継ぎの痕跡が認められる。11、12は白磁坏で、11はJB-6-a、12はJB-7-bに分類される。13は染付碗の蓋で、JB-00-aに分類される。いわゆる素描きで文様が描かれている。

14～29、31は陶器である。14はピラ掛けの碗で、TH-1-bに分類される。高台は右回転の渦巻状に成形されている。15は内面白泥、器面に鉄と白土で梅花文を書いた碗で、TC-1-zに分類される。16は内面象嵌の皿で、TZ-2に分類される。胎土は堅緻な灰色を呈する。17はいわゆる石皿で、TC-2-fに分類される。底部を除く全面に灰釉が掛けられている。見込みには6ヶ所のピン痕がみられる。幅広高台及び底部には墨書と思われる黒色の痕跡が認められる。18は駒絵の坏で、TJ-6に分類される。底部内には陽刻の「相馬」印が認められる。19は鉄釉の香炉・火入れで、TD-9に分類される。20は急須の蓋で、TZ-00-sに分類される。器面には白泥の上に灰釉が施される。21はいわゆる柿釉糸目土瓶の蓋で、TZ-00-dに分類される。摘みは欠損している。裏には長角枠内「丸傳」の刻印が押印されている。22はいわゆる青土瓶の蓋で、TZ-00-aに分類される。23は三彩の蓋物で、TD-13-cに分類される。文様は白泥、鉄絵、緑釉、黄釉で描かれている。見込みに

第IV章 出土した遺物

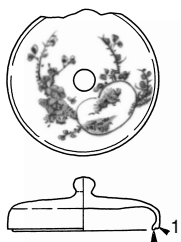


SK160

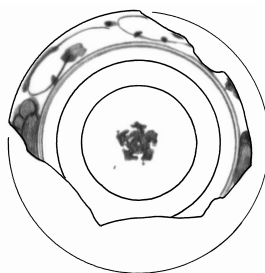


SU163

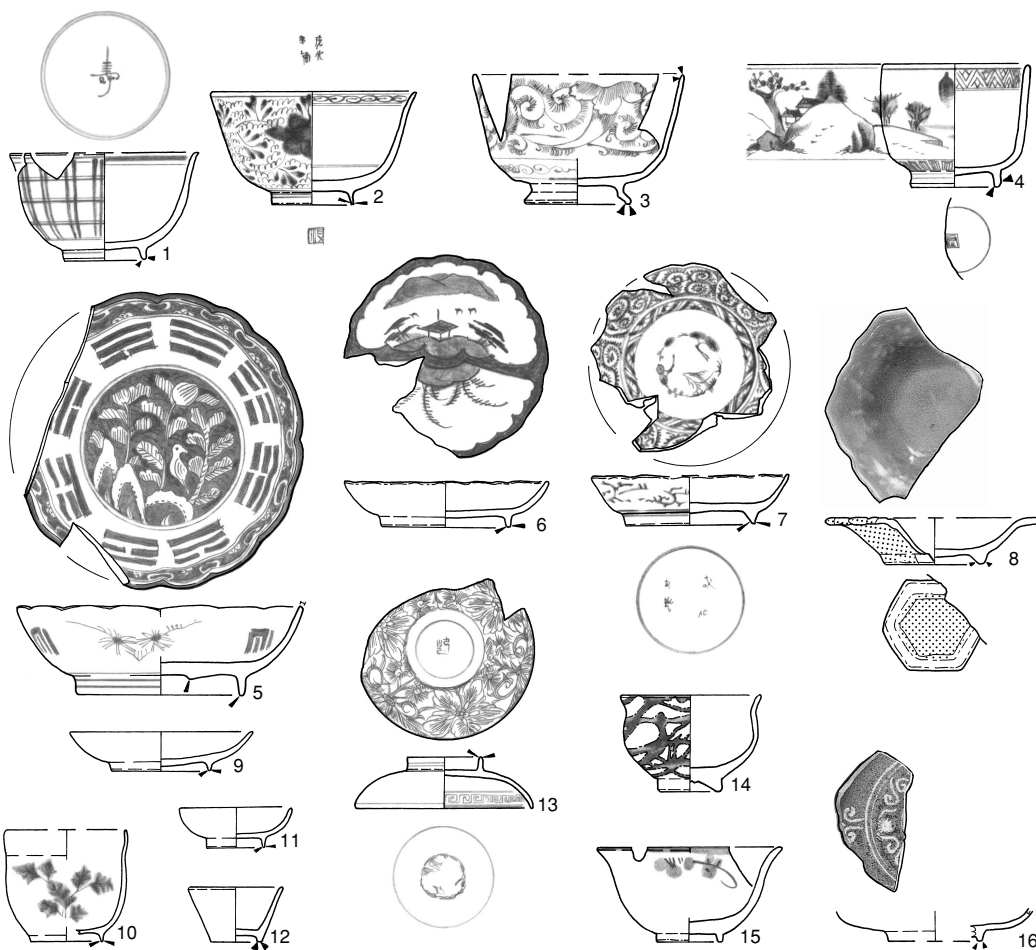
IV-61 図 SK160・SU163 出土遺物



SK164

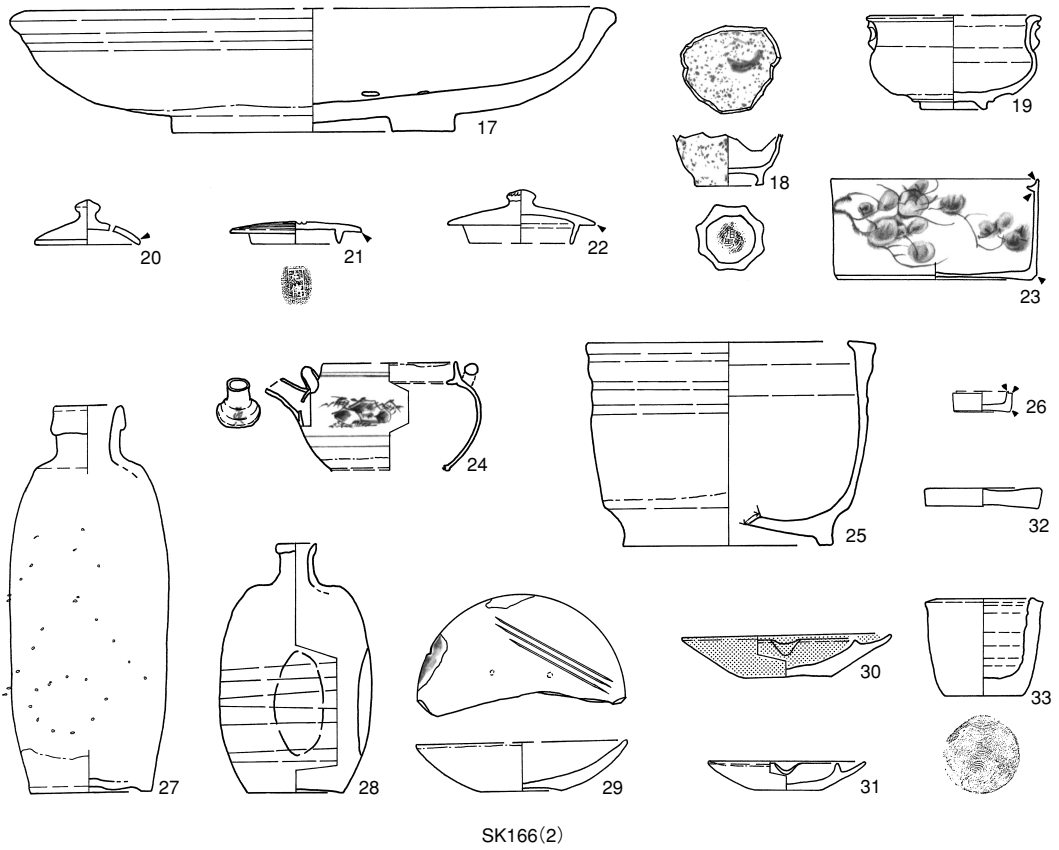


SK165

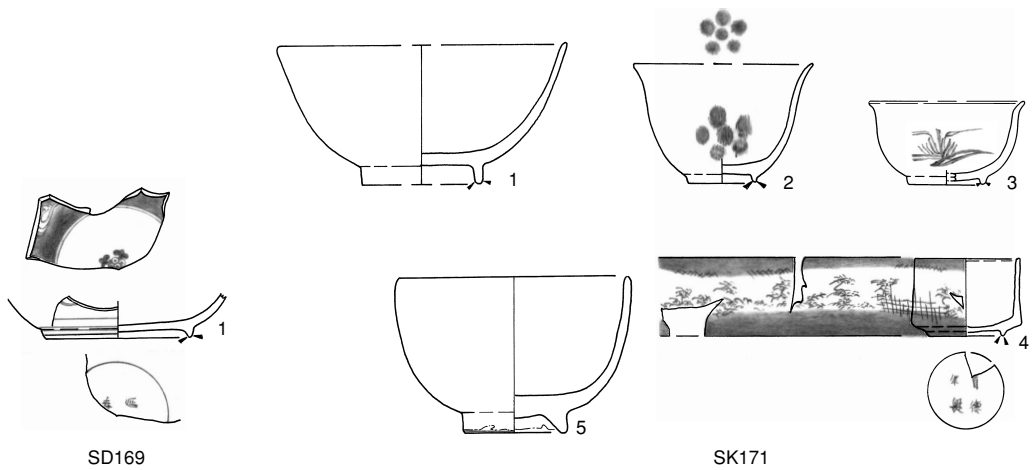


SK166(1)

IV-62 図 SK164・SK165・SK166(1) 出土遺物



SK166(2)



SD169

SK171

IV-63 図 SK166(2)・SD169・SK171 出土遺物

ピン痕が認められる。24は錆絵の土瓶で、TZ-34-hに分類される。文様は白泥を施した後に書かれており、注口部下には「道八」と記されている。内面は灰釉が化粧掛けされている。25は柿釉のいわゆる半胴甕で、TC-15-aに分類される。底部中央部は穿孔され、植木鉢として利用されていたことが看取できる。口唇部にはトチの溶着痕が確認できる。26は小型の灰釉合子で、TD-18-bに分類される。27は灰釉の二合半の徳利で、TC-10-cに分類される。器面には列点状のタガネ彫りで、「久〇」と彫られている。28は柿釉のいわゆるぺこかん徳利でTC-10-gに分類される。29は灰釉の灯明上皿で、TD-2-aに分類される。見込みには三条の櫛目が施され、2ヶ所のピン痕が認められる。また、口縁部欠損箇所には灯明時の油痕が認められ、欠損部位を利用してあるいは故意に欠損部位を作り、灯心を立てやすくしている行為が看取できる。

30は透明釉が施される油受け皿で、DZ-40-bに分類される。器面の透明釉は所々剥落している。31は灰釉の油受け皿で、TD-40-bに分類される。32、33は塩壺である。32は蓋で、DZ-00-d、33はDZ-51-wに分類される。

SD169 (IV-63 図)

1は染付皿で、JB-2-dに分類される。生地、成形、文様、呉須の発色など丁寧に作られ、いわゆる柿右衛門様式に比定できる製品である。見込み中央には欠損しているがおそらく四弁花が描かれていると思われる。また、「延〇年〇」と思われる銘款が描かれており、これはその他の特徴からおそらく「延宝年製」であろうと推定できる。延宝年間に柿右衛門様式が成立していた証拠となるものであろう。

SK171 (IV-63 図)

1は白磁の鉢でJB-5に分類される。表面には細かい貫入が認められる。2、3は染付坏で、JN-6に分類される。生地はややクリームがかった白色を呈し、やや軟質な感じを受ける。呉須は濃くやや流れている。高台にはやや粗めの砂が付着している。本例は文様・胎土・器形・釉調など肥前系磁器とやや異なる点が看取され、生産地推定のため、胎土の分析を行った。詳細は研究編降幡・村上、堀内論文を参照されたい。4はJB-6に分類される。裏には「宣徳年製」の銘が描かれている。5はいわゆる呉器手の碗で、TB-1-aに分類される。

SK174 (IV-64～66 図)

SK174からは多量の遺物が出土している。碗ではJB-1-e、f、g、l、v、皿ではJB-2-f、g、lなどが、また、少量ながらJB-1-i(小広東碗)、JB-2-j(蛇ノ目凹形高台の高台高低)が含まれている。東大編年ではVI a期に比定される。

2～13は肥前系磁器である。2～7は碗で、2～6が染付、7が青磁染付である。2、3はJB-1-v、4はJB-1-f、5～7はJB-1-lに分類される。4の葉文はコンニャク印判で描かれている。5、7は見込みコンニャク印判五弁花、6は手描き五弁花である。また、6の高台裏には二重角枠内渦福と思われる銘款が付けられている。8、9は蛇ノ目釉剥ぎの染付皿で、JB-2-lに分類される。10は染付鉢で、JB-5-bに分類される。器面には細かい貫入が全面に認められる。見込みはコンニャク印判五弁花。11、12は染付蓋物で、12はJB-13-bに分類される。比較的丁寧に作られている。13は色絵の油壺で、JB-12に分類される。表面の上絵は赤絵具の痕跡が確認できるのみで、文様の復元はできない。

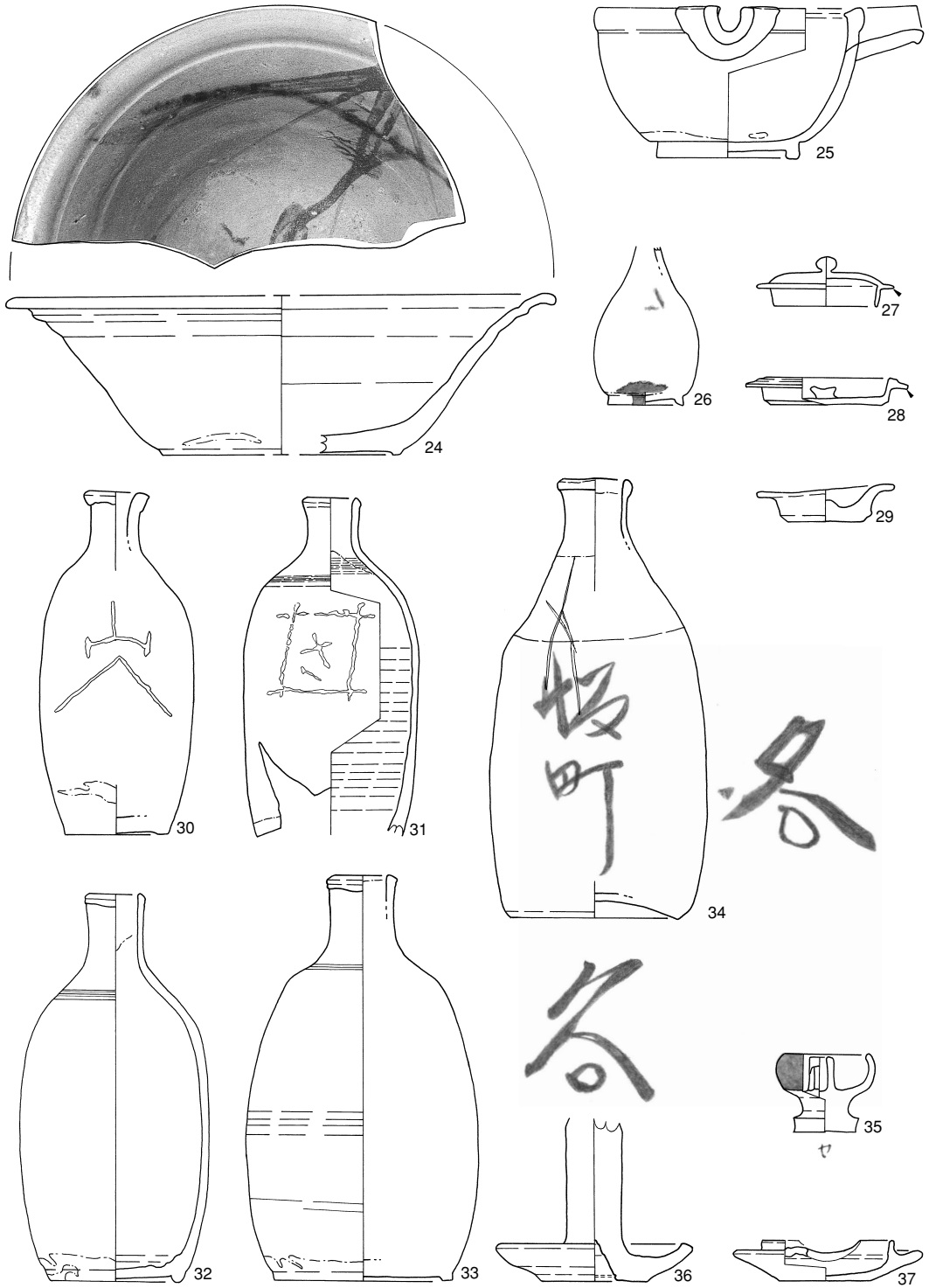
1、14～35は陶器である。1はいわゆる太白手碗で、TC-1-hに分類される。14は灰釉鉄釉流し段付碗で、TC-1-fに分類される。高台は左回転の渦巻高台に作られている。高台裏には墨書が確認できる。15はTC-1-cに分類される。底部は無釉で、裏には判読できないが墨書の痕跡が認められる。16は刷毛目碗で、TC-1-sに分類されている。高台は無釉で、高台脇はケズリが施されている。刷毛目は内外面とも打刷毛目である。17は灰釉・鉄釉流し掛けの袴腰風の碗で、TD-1に分類される。釉は高台脇までかけられ、底部は無釉である。畳付外周は面取りされており、左回転の渦巻高台に成形されている。法量、器形、高台などの類似性から、TC-1-fの御本であった可能性も考えられる。18は灰釉・鉄絵半筒碗で、TD-1-iに分類される。見込みには3ヶ所のピン痕が認められる。19は灰釉・鉄釉掛分けのいわゆるせんじ碗で、TC-1-vに分類される。20、21は鉄絵筒形碗で、TC-1に分類される。ともに畳付外周面取りされている。20は山水文、21は草花文が描かれている。22は京焼風の鉄絵平碗で、TB-1-cに分類される。高台の削りが深い点、絵付がラフである点、鉄絵が薄い点など年代的に下った製品であろうと考えられる。23は青緑釉蛇ノ目釉剥ぎ皿で、TB-2-aに分類される。青緑釉は透明感のある緑色を呈する。24はいわゆる笠原鉢で、TC-5-aに分類される。鉄絵に緑釉が流し掛けされている。漆継ぎの痕跡が認められる。25は灰釉片口鉢で、TC-23-bに分類される。見込みにはトチの痕跡が認められる。26は灰釉瓶で、TC-10に分類される。体部下半に鉄成分のハゼが認められる。27、28は土瓶の蓋で、TZ-00に分類される。27は白色の堅緻な胎土に灰釉が、28は柿釉が施されている。28の摘みは耳かわらけ風に摘み上げられている。29は壺の蓋で、TC-00-aに分類される。無釉で、蓋裏は左回転の回転糸切り離しの痕が確認できる。30～33はいわゆる貧乏徳利で、30はTC-10-a、31、32はTC-10-d、33はTC-10-eに分類される。30の器面には「山△」、31には井桁内に「さ」の釘書きが施されている。34はTF-10に分類される一升徳利である。器面と底面に墨書が認められ、器面には「坂町」、「久○」、底面には「久○」と書かれている。35は完形の鉄釉ひょうそくで、TC-44-aに分類される。底部中央には刺突穴が認められる。「セ」の墨書が認められる。

36～53は土器である。36は脚付油受け皿で、DZ-40-cに分類される。底部中央はへら状工具によって、右回転で円錐状にえぐり取られている。37は油受け皿で、DZ-40-dに分類される。38～41は左回転のかわらけで、DZ-2-bに分類される。胎土の色調は38が褐色、39～41は橙褐色を呈する。41の口唇部には灯火の痕跡が認められる。42はいわゆる磨きかわらけで、DZ-2-dに分類される。器面、底部は平滑に磨かれている。見込みには茶褐色の付着物が認められる。43、44が土師質火鉢でDZ-31-a、45が瓦質火鉢でDZ-31-jに分類される。43の体部内側上半には灰とみられる付着物が、下半にはススの痕跡が認められる。43、44共に口唇部内側は敲打痕が顕著である。45は下半のみの遺存であるが、欠損部上端を整形した痕跡が認められ、火入れなどに再利用したと推定される。46、47は七輪の風口で、DZ-48-cに分類される。46は橙褐色、47は褐色を呈する。47には刻印が認められる。48～53は塩壺である。48、49は蓋で、DZ-00-cに分類される。内面には布目痕が認められる。48の胎土の色調はやや赤みを帯びた橙褐色、49は褐色を呈する。50は板作りの塩壺、51～53はロクロ成形の塩壺で、50が「泉州麻生」、52、53が「播磨大極上」の刻印が押されている。50はDZ-51-i、51はDZ-51-w、52、53はDZ-51-uに分類される。50の内面は布目痕が観察できる。

第IV章 出土した遺物

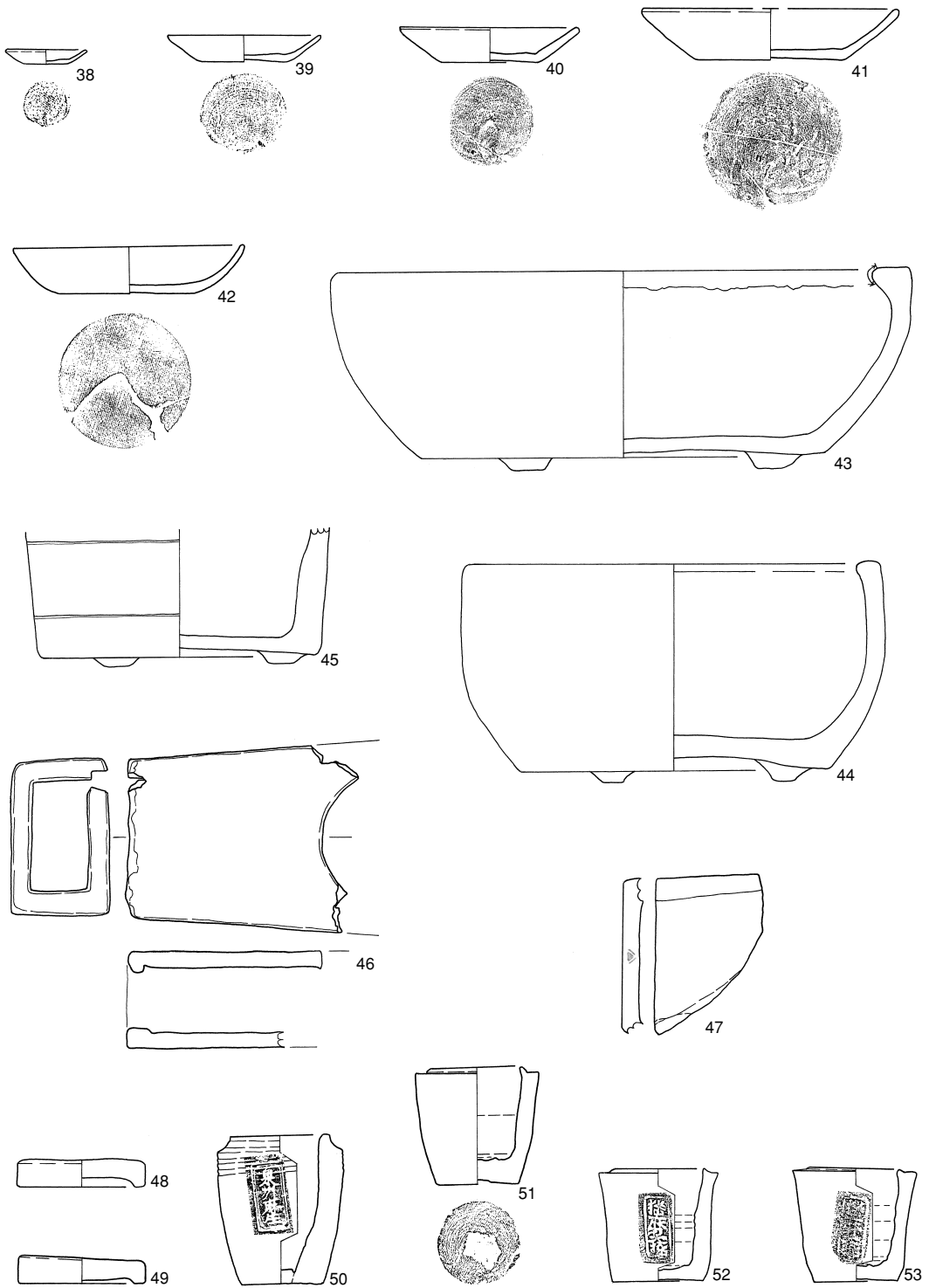


IV-64 図 SK174 (1) 出土遺物



IV-65 図 SK174 (2) 出土遺物

第IV章 出土した遺物



IV-66 図 SK174 (3) 出土遺物

SK175 (IV-67 図)

1、2は染付、3は青磁染付磁器で、1がJB-1-f、2がJB-2-g、3がJB-00-aに分類される。2、3の内面中央にはコンニャク印判五弁花が押されている。2、3はやや灰がかかった色調を呈する。4～7は陶器である。4は灰釉碗で、TC-1-cに分類される。底部は無釉である。5は鉄と呉須で梅文を描いた平碗で、TC-1-nに分類される。高台裏には墨書で「八ト」と書かれている。6はいわゆる石皿で、TC-2-fに分類される。見込みには鉄と呉須で草花文が描かれている。5ヶ所のトチ痕が観察される。7は鉄釉半胴甕でTC-15-aに分類される。口唇部には3ヶ所のトチの溶着痕が認められる。底部中央は穿孔されている。類例から植木鉢としての用途が想定できる。8～12は土器である。8は油受け皿でDZ-40-dに分類される。受けのくり部とその外側は灯心痕が顕著に認められる。9は土師質の風炉で、DZ-31-hに分類される。くりと相対する側に2ヶ所の穿孔がされている。口縁部内面はスで黒色化している。10はロクロ成形の塩壺で、DZ-51-uに分類される。「播磨大極上」の刻印が押されている。11、12は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。内面には布目痕が認められる。

SK176,SD239 (IV-67 図)

1はかわらけで、DZ-2-bに分類される。2は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。内面の布目の痕跡が顕著である。

SU185 (IV-68 図)

1、2は染付碗である。1はJB-1-dに、2はJB-1-jに分類される。1の菊及び青海波文様は型紙摺りで施文されている。3は灰釉徳利で、TC-10-cに分類される。器面には「谷川」の列点状の釘彫りが確認できる。4は塩壺の蓋で、DZ-00-dに分類される。表裏面には墨書が認められるが、薄く判読できない。5は板作りの塩壺で、DZ-51-iに分類される。内面には布目痕が認められる。底部は被熱のため白色化している。

SK186 (IV-68 図)

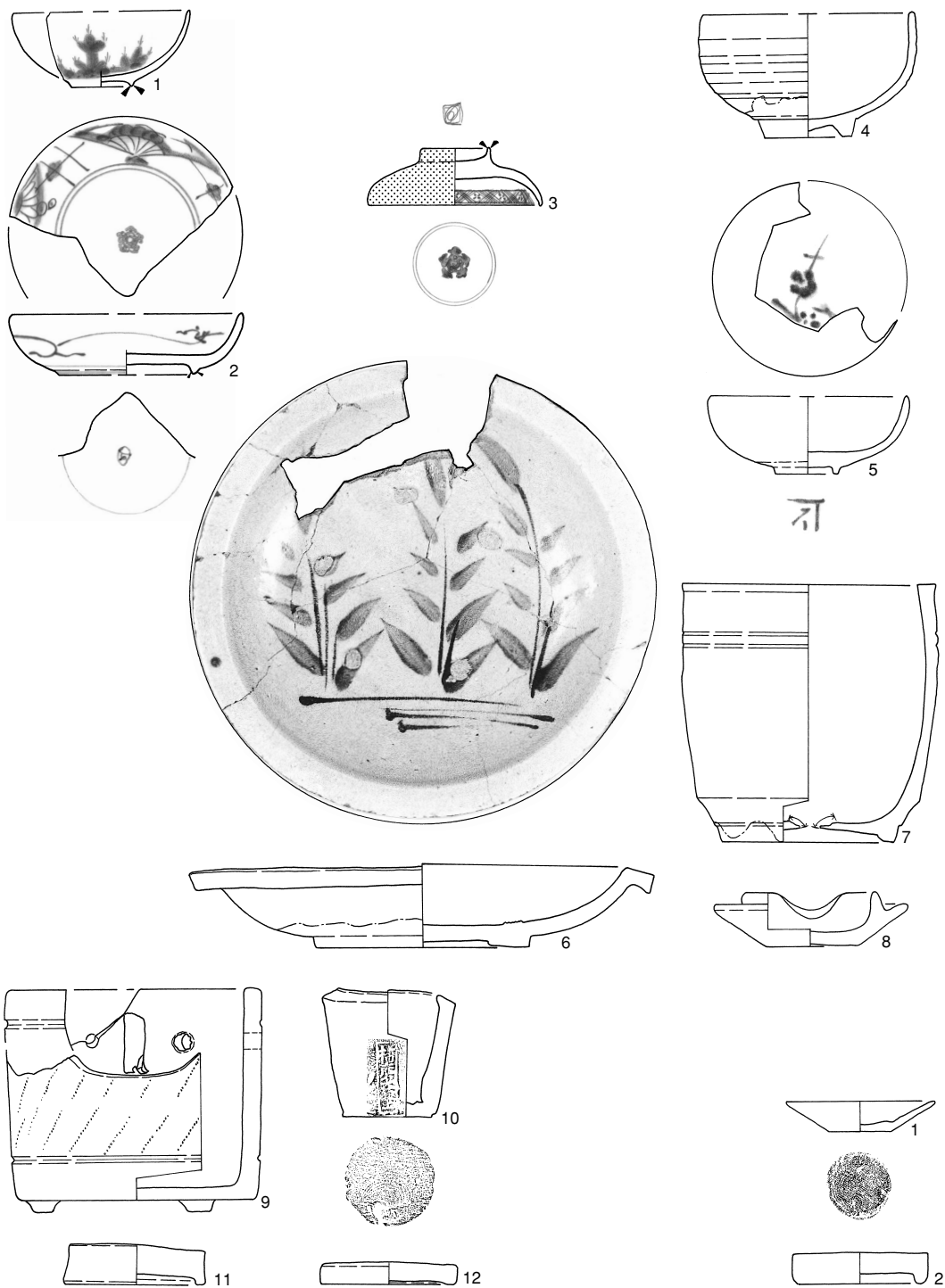
1は瀬戸・美濃の染付小坏JC-1-dに分類される。文様は銅板転写で施されている。2、3は染付碗で、2はJC-1-dに分類される。器高が低く、やや後出的な製品であると考えられる。3はJC-1-eに分類される。4は端反碗の蓋で、JB-00-cに分類される。比較的丁寧に絵付されている。5は灰釉鉄絵の小坏で、TJ-6に分類される。高台無釉で、壘付は断面台形に成形されている。見込みには駒絵が描かれている。6は鉄釉油皿で、TC-2-oに分類される。

SK198 (IV-68 図)

1は染付蓋物で、JB-13-aに分類される。断面形は三角に削られた高台と文様から17世紀後半の製品と思われる。器面は二次的な火熱を受けている。

SU211 (IV-68 図)

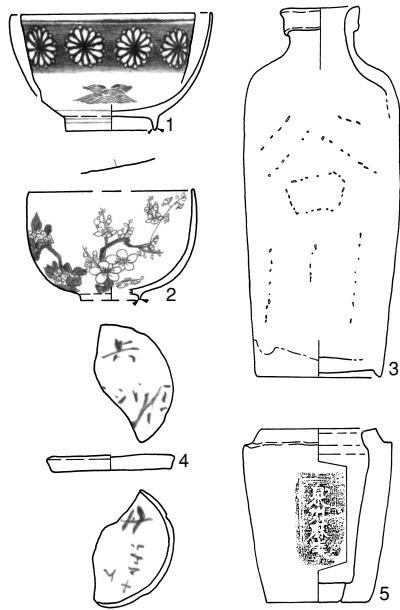
1～5は肥前系磁器で、1、3～5は染付、2青磁染付である。それぞれJB-1-v、JB-1-l、JB-2-m、JB-2-e、JB-8-bに分類される。2、3の見込み中央にはコンニャク印判五弁花が押されている。3は全体的に焼きが甘く、白色化していない。やや大きい貫入が全体に入っている。4はロクロ成形後、型打で変形皿にしている。生地や呉須の発色などは良好である。6～12は陶器である。6は灰釉・鉄釉流し碗で、TC-1-fに分類される。高台は右回転の渦巻高台に成形されている。7は錆釉



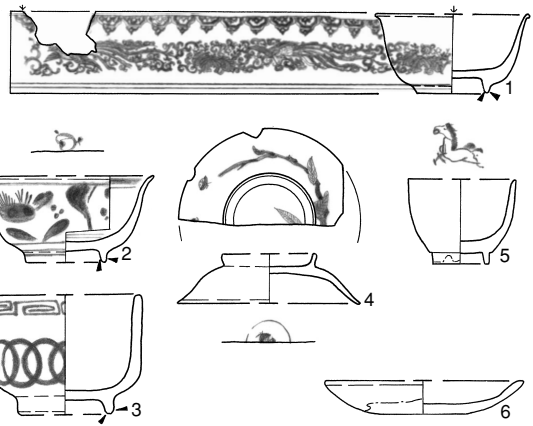
SK175

SK176, SD239

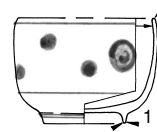
IV-67 図 SK175・SK176,SD239 出土遺物



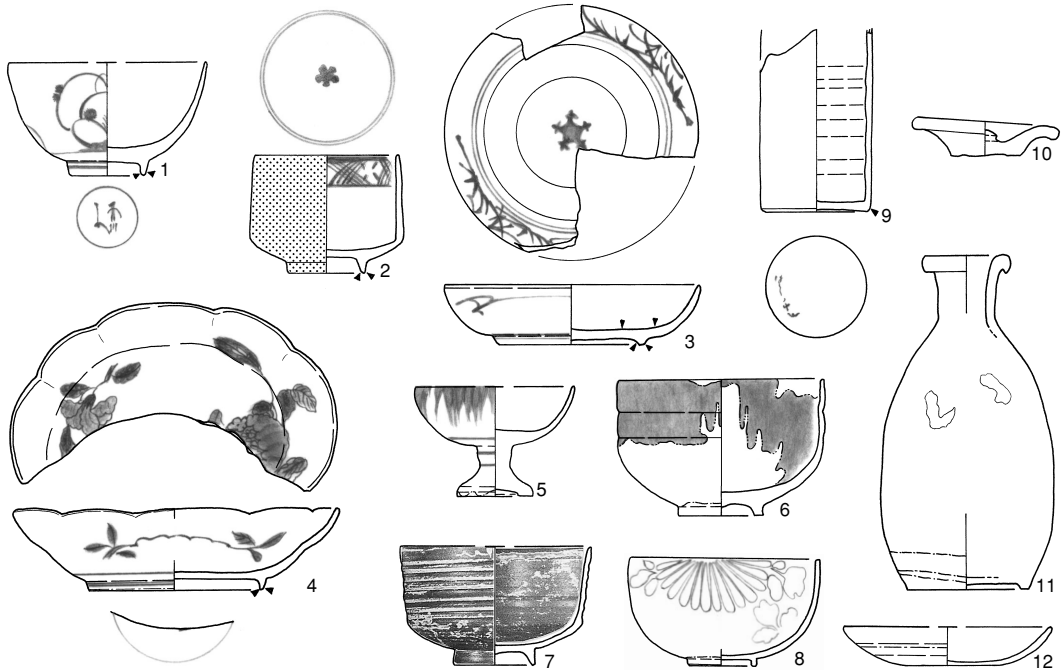
SU185



SK186

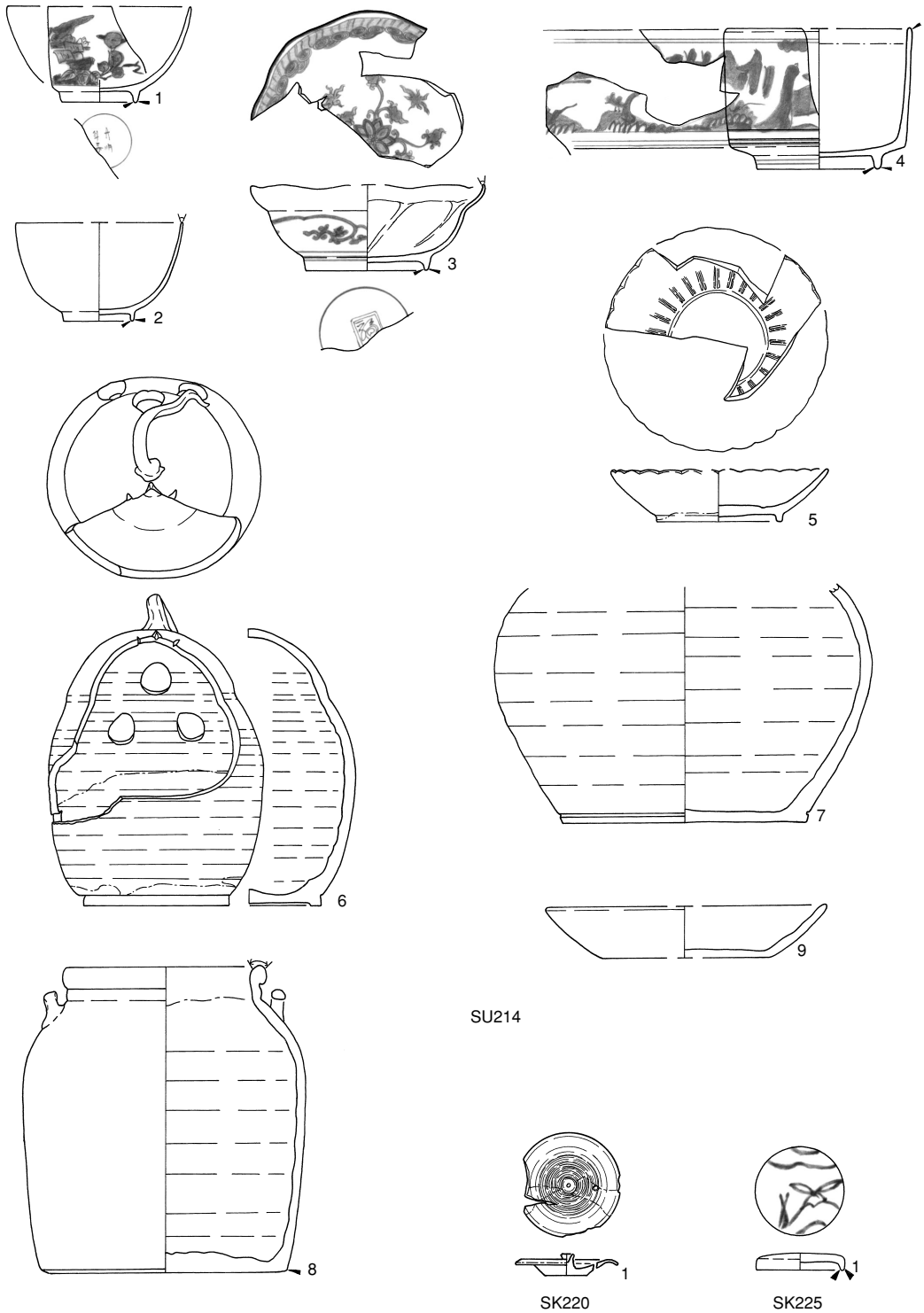


SK198



SU211

IV-68図 SU185・SK186・SK198・SU211 出土遺物



IV-69図 SU214・SK220・SK225出土遺物

碗で、TC-1-qに分類される。胎土は堅緻な茶褐色を呈する。8は灰釉色絵碗で、TD-1-bに分類される。上絵はほとんど剥落しており、色調などは不明である。9は色絵の花生けで、TD-22に分類される。緑、青、金で草花文が描かれるが、絵具はほとんど剥落している。底部に墨書が書かれているが、遺存状態が悪く判読できなかつた。10は無釉の壺の蓋で、TC-00-aに分類される。11は灰釉徳利で、TC-10-aに分類される。器面には釘書きで、「い」と彫られている。12は鉄釉油皿で、TC-2-oに分類される。見込みには輪状の窯道具の溶着痕がみられる。

SU214 (IV-69 図)

1～4は肥前系磁器で、2は白磁、それ以外は染付である。1、2はJB-1-d、3はJB-2-d、4はJB-13-bに分類される。1～3の生地は白色を呈し、高台など丁寧に成形されている。3は二次的な火熱を受けている。底部には1ヶ所ハリ支え痕が確認できる。4は1～3のものと比較してやや胎土は灰色がかり、呉須の発色が悪く、絵付もラフに作られている。本例も二次的な火熱を受けている。5～8は陶器である。5はいわゆる菊皿で、TC-2-1に分類される。内面の文様も薄く、外面のしのぎもみられない。また、緑釉の流し掛けもみられず、年代的に下った製品であろうと思われる。底部は無釉。6は鉄釉・ワラ灰流しの茄子状手焙りで、TC-38に分類される。釉調は尾呂風である。7は焼締めの壺で、おそらくTD-15であろう。器面は鉄釉が化粧掛けされている。胎土は白色の粗砂粒が少量含まれる。8は鉄釉の三耳壺で、TC-15に分類される。9はかわらけでDZ-2-bに分類される。二次的な火熱を受けている。

SK220 (IV-69 図)

1は急須の蓋で、TZ-00-sに分類される。

SK225 (IV-69 図)

1は染付磁器合子で、JB-00-nに分類される。

SD226 (IV-70 図)

1は瀬戸・美濃系磁器でJC-1-d、2は碗の蓋でJC-00-iに分類される。1は口縁部の端反が深いこと、銘款が付されていることなどから端反碗の初現的なタイプである。2は良好に呉須が発色している。

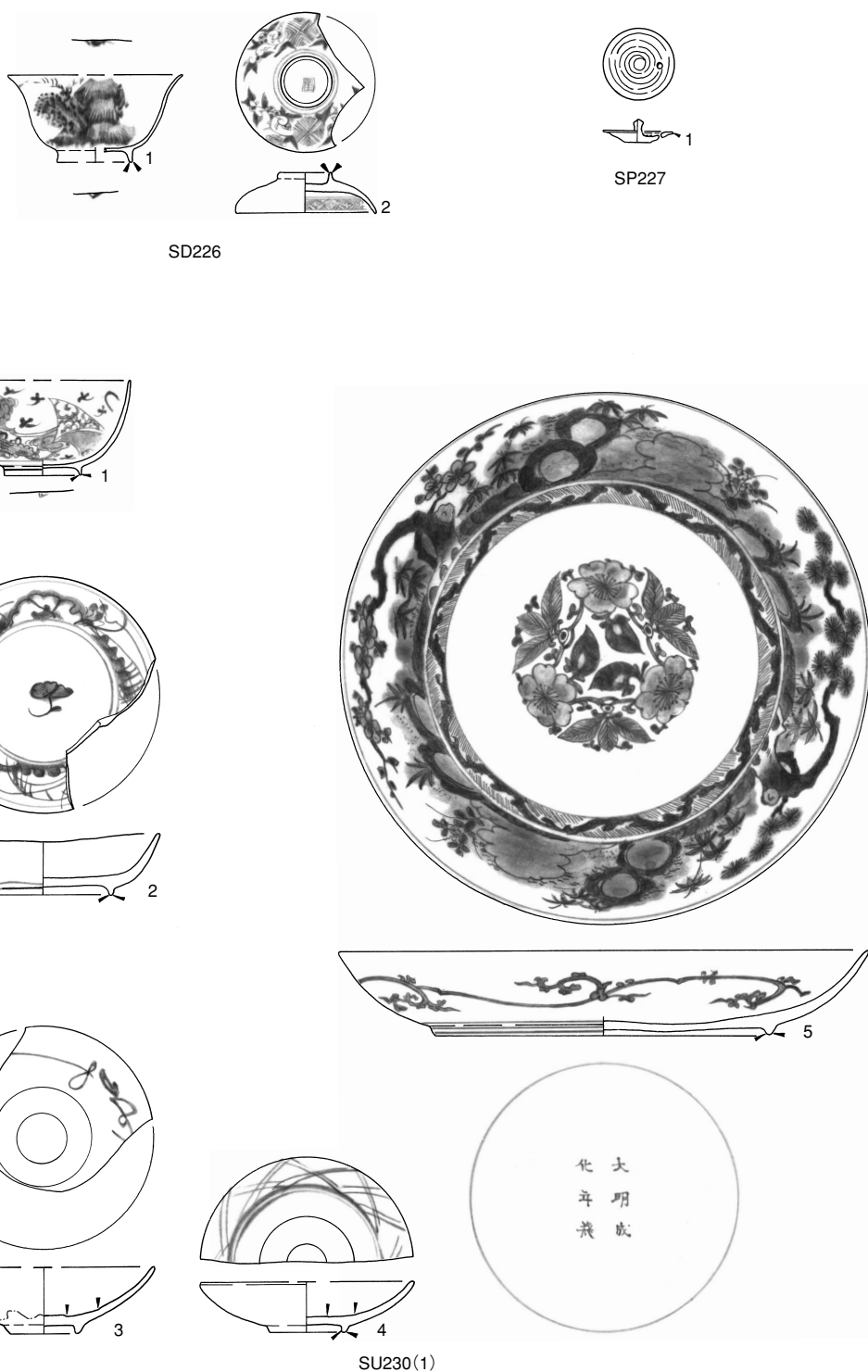
SP227 (IV-70 図)

1は藻掛けの急須の蓋で、TZ-00-sに分類される。径4mm程度の穿孔がされている。

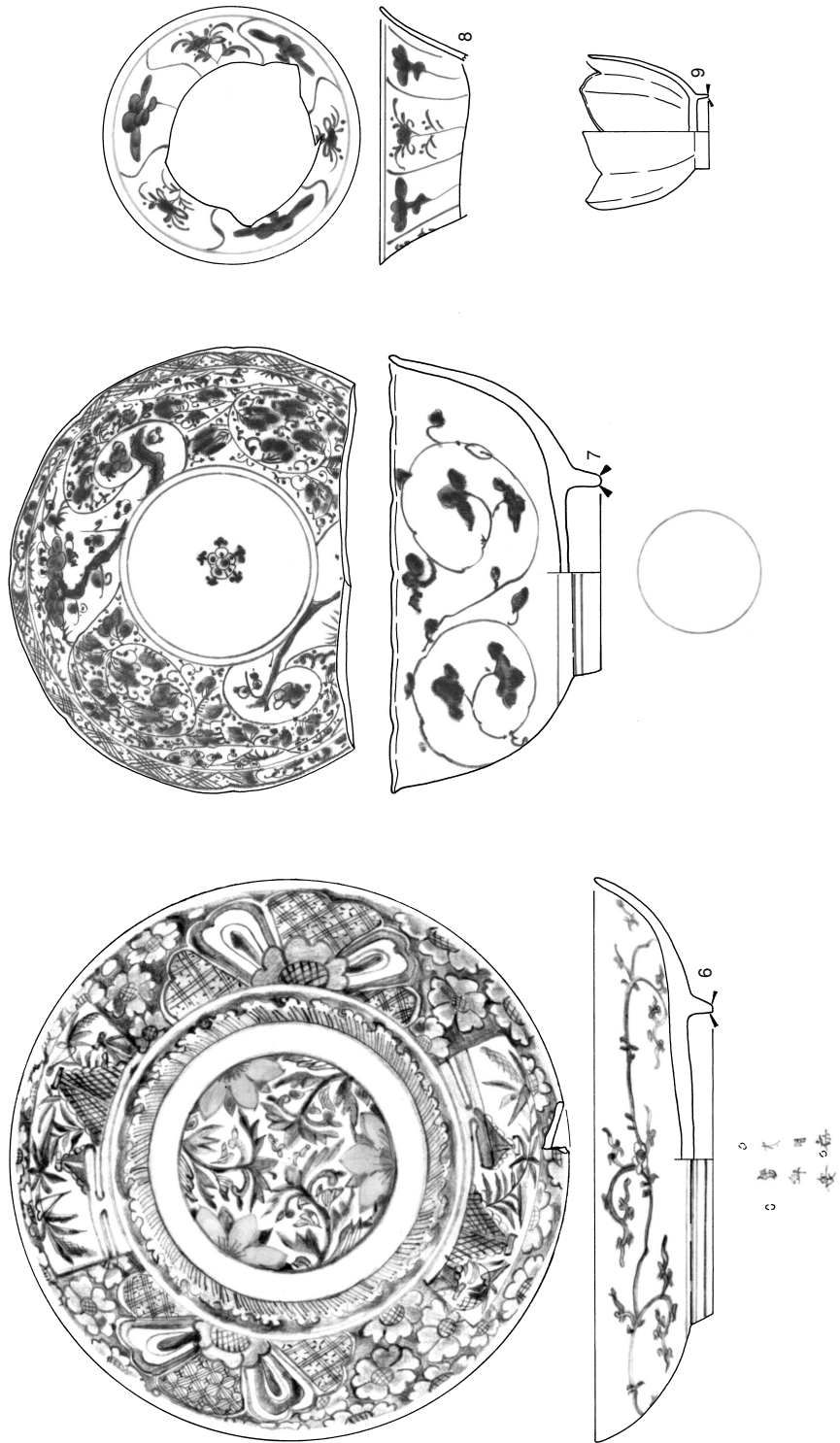
SU230 (IV-70～74 図)

1～14は肥前系磁器である。9は白磁、それ以外は染付である。1はJB-1-eに分類され、丁寧に絵付されている。2はJB-2-e、3はJB-2-k、4はJB-2-1に分類される。ともに灰がかかった生地に、ラフな絵付けがされている。5、6は染付大皿で、JB-3-bに分類される。ハリ支え痕が5には6ヶ所、6には3ヶ所観察できる。文様から18世紀中葉頃の製品と思われる。生地は白色で、呉須もきれいに発色している。7～10は鉢で、7、9、10はJB-5-bに分類される。7は見込み中央に手描き五弁花、ややラフに絵付けされている。文様から18世紀後半の製品であると推定される。8はJB-5に分類される。仙芝祝寿文が描かれている。呉須はややくすんで発色している。9はいわゆる乳白手の輪花形の鉢である。10は内外面の口縁部付近を中心に呉須の流れが観察される。高台裏には二重角枠内渦福が描かれている。ハリ支えが1ヶ所観察される。11は高台がやや高い坏

第IV章 出土した遺物



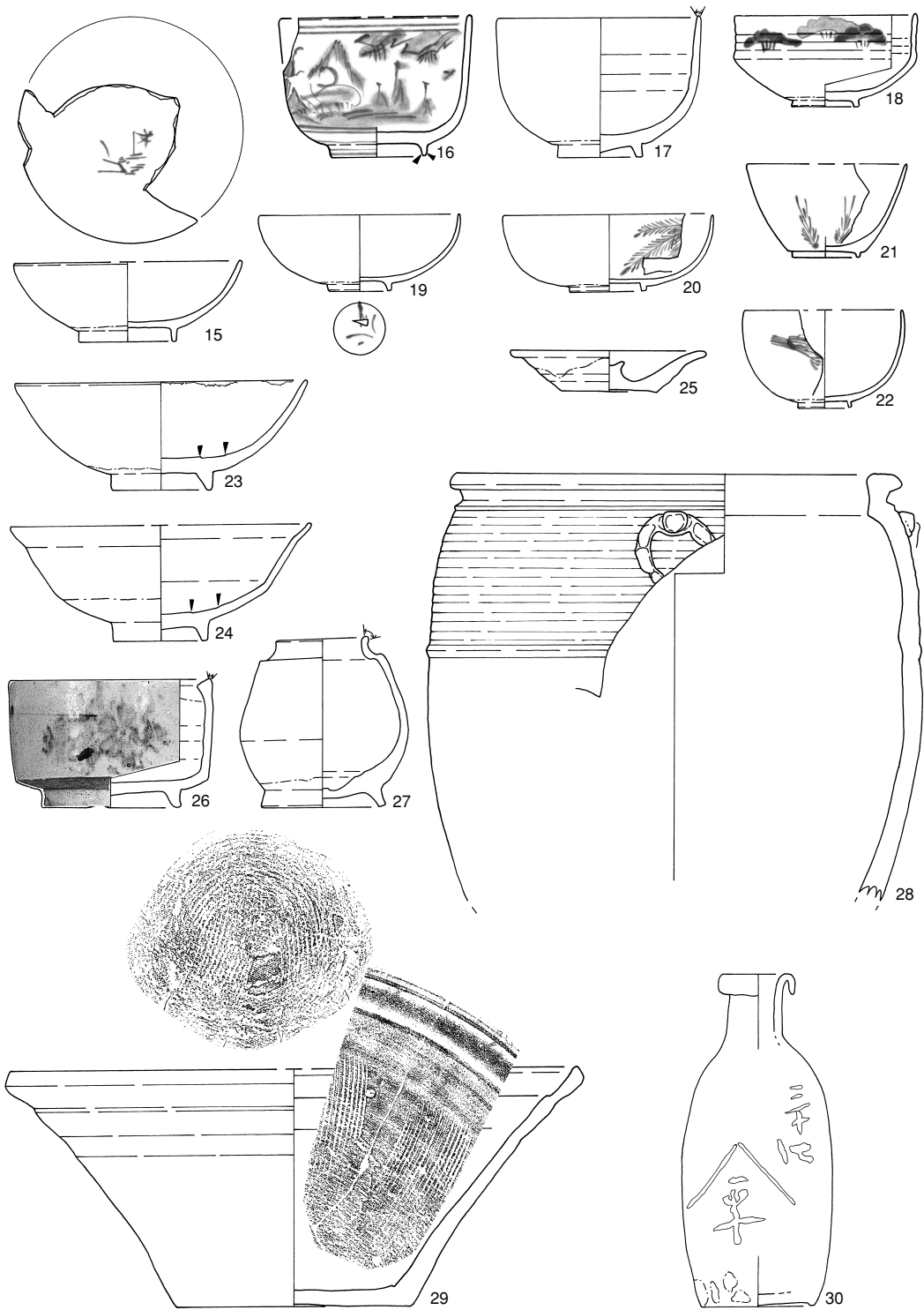
SU230(1)
IV-70 図 SD226・SP227・SU230(1) 出土遺物



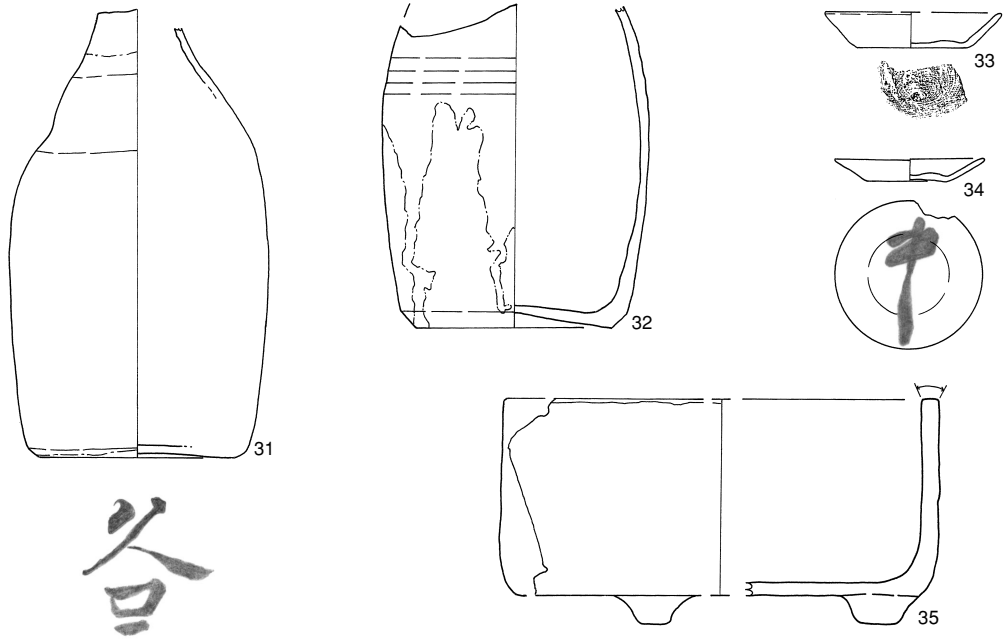
IV-71 図 SU230 (2) 出土遺物



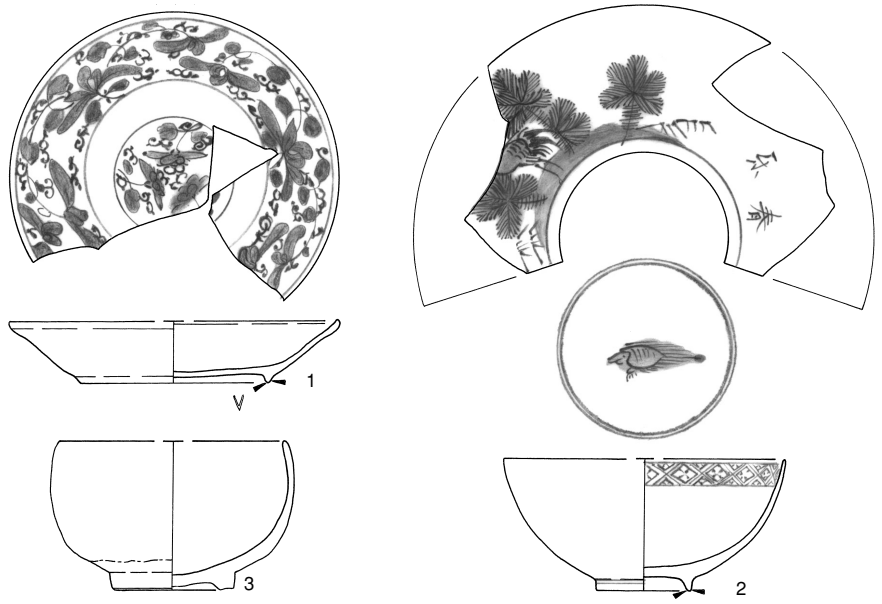
IV-72 図 SU230 (3) 出土遺物



IV-73 図 SU230 (4) 出土遺物



SU230(5)



SK264

IV-74図 SU230(5)・SK264 出土遺物

で、JB-6-aに分類される。器面の草花文はコンニャク印判で施文されている。12はJB-6-bに分類される。精緻に文様が描かれ、呉須の発色も明瞭である。見込み中央には手描き五弁花、高台裏には二重角枠内渦福が丁寧に書かれている。13はJB-8-bに分類される。文様の桐文は型紙摺りで施文されている。14は蓋物でJB-13-bに分類される。

15～32は陶器である。15はいわゆる京焼風陶器平碗で、TB-1-cに分類される。見込みは鉄でラフな山水文が描かれている。16は陶胎染付でTB-1-fに分類される。文様は比較的丁寧に描かれている。17は灰釉丸碗でTC-1-cに分類される。口唇部全周に敲打痕が認められる。底部は無釉である。18は灰釉鉄絵半筒碗で、TD-1-iに分類される。文様は三本の松が鉄絵と白土を用いて描かれている。見込みには3ヶ所のピン痕が認められる。19、20は平碗で、TD-1-hに分類される。ともに薄づくりで丁寧に成形されている。19は無文、20は鉄絵で松が描かれている。19の高台裏には墨書が認められる。21はいわゆる小杉茶碗で、TD-1-dに分類される。器面には鉄絵で若松文が描かれている。19、20と比較するとラフに作られている。22は鉄絵の半球碗で、TD-1-bに分類される。23、24は青緑釉の輪剥鉢で、TB-5-dに分類される。23は外面が青緑釉、内面が灰釉、24はその逆の掛け分けである。24の器面には二次的な火熱の痕跡が認められる。25は壺の蓋で、TC-00-aに分類される。錆釉が掛けられている。26は灰釉鉄絵の香炉・火入れで、TC-9-cに分類される。器面の草花文は摺絵で描かれている。高台は輪高台で、3ヶ所のへこみが付けられている。口唇部は敲打痕が全周にわたり顕著に認められる。火入れとしての用途が想定できる。27は鉄釉小壺で、TC-15に分類される。底部を除く内外面には鉄釉が施されている。二次的な火熱を受けている。口唇部は部分的に敲打痕が確認できる。28は焼締めの甕でTE-15に分類される。内外面には泥を塗布した様子が顕著に見られ、焼成はやや赤く甘い上がりになっている。29は錆釉の播鉢で、TC-29に分類される。胎土、表面には黒色の鉄分が多く吹き出ており、赤津の製品であろうと推定できる。播目は使用によって特に体部との境を中心に磨耗が著しい。30は灰釉徳利で、TC-10-aに分類される。胴部には「三十口 八平」の釘書きが認められる。31、32は鉄釉徳利で、TF-10に分類される。31の肩部には溶着痕が認められる。また、底部には墨書が認められる。33、34はかわらけでDZ-2-bに分類される。33の口唇部は部分的に灯火の痕跡が確認できる。34の底部には「中」の墨書が認められる。35は火消壺で、DZ-31-iに分類される。口唇部は欠損後、平縁に再調整している。器面の剥落が顕著である。

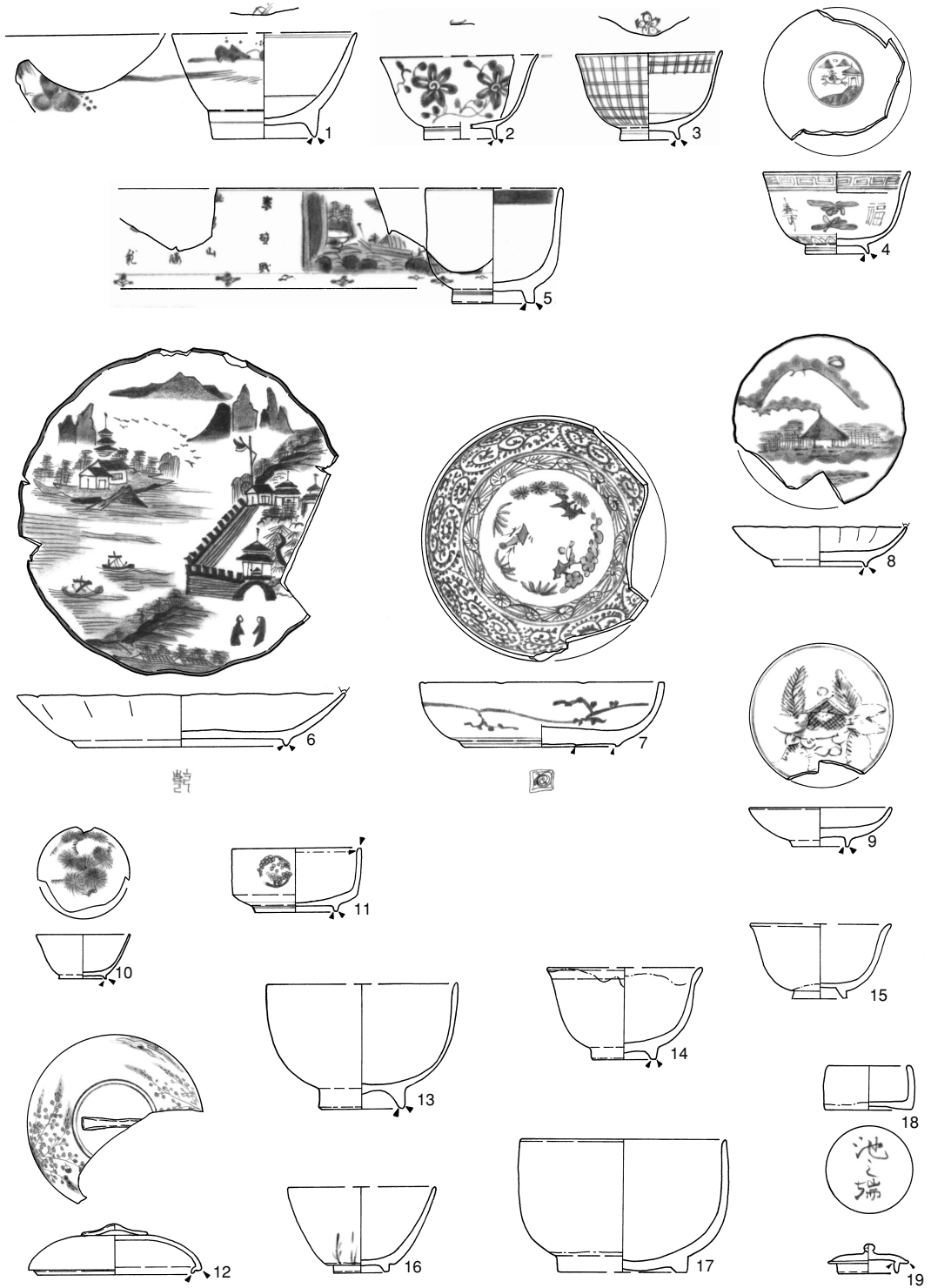
SK264 (IV-74 図)

1は染付磁器皿でJB-2-eに分類される。焼継ぎされており、高台裏には「八」のマークが確認できる。2は染付磁器鉢で、JB-5-bに分類される。3は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類できる。底部は無釉である。

SK265, 304 (IV-75～77 図)

1～12は磁器で、9は色絵、それ以外は染付である。1はJC-1-c、2はJC-1-dに分類される。呉須は地呉須を使っている。3、4は端反碗でJB-1-nに分類される。胎土、呉須の色調は良好である。5はJC-1-eに分類される。赤壁賦文様が描かれるが、海戦部分は毛彫りされている。高台は幅広に作られており、年代的に幕末頃の下る製品であろうと推定できる。6は型打で、JB-2-eに分類される。比較的丁寧に作られ、このタイプの初現的な製品であろうと思われる。口唇部には口錆

第IV章 出土した遺物

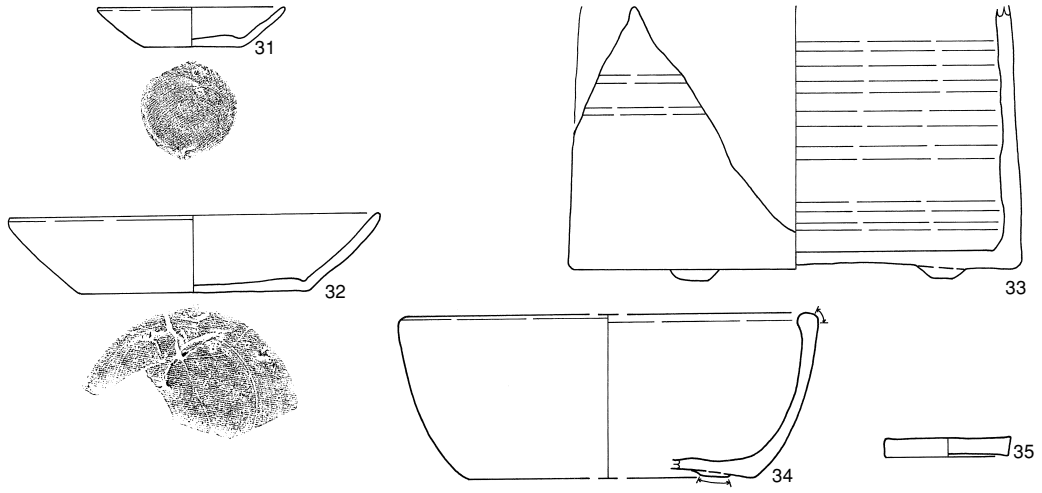


IV-75 図 SK265, 304 (1) 出土遺物

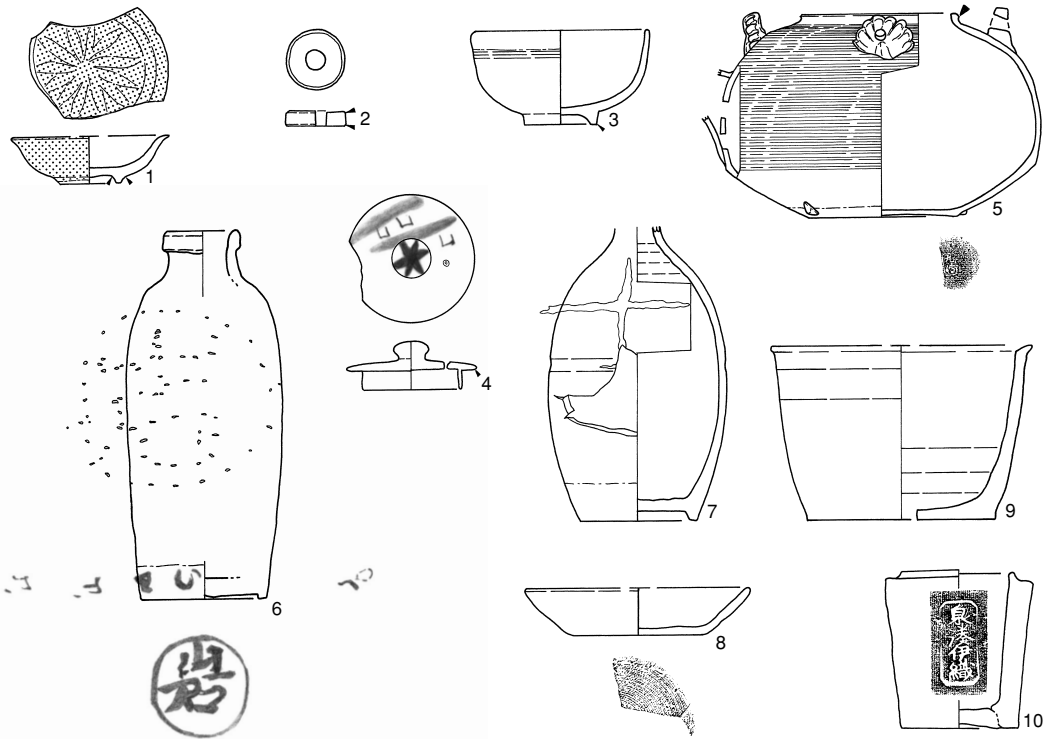
第IV章 出土した遺物



IV-76 図 SK265, 304 (2) 出土遺物



SK265,304(3)



SK269

IV-77 図 SK265, 304 (3) ・ SK269 出土遺物

が施されている。7は蛇ノ目凹形高台の皿で、JB-2-jに分類される。8、9は小皿で、8はJB-2-q、9はJC-2-bに分類される。9は色絵であるが、文様のほとんどが剥落している。10は薄手の小杯で、JB-6-cに分類される。11はJB-13-bに分類される。生地は白色で、呉須もきれいに発色している。12はJB-00-fに分類される。橋状の摘みが付けられる。

13～29は陶器である。13はいわゆる呉器手の灰釉碗で、TB-1-aに分類される。土中で鉄分が多く付着したため茶色化している。14は灰釉・瑠璃釉流し端反碗で、TC-1-aeに分類される。京都・信楽系の端反碗の模倣であろうと思われる。15は小型の灰釉端反碗で、TD-1-gに分類される。堅緻な胎土である。16はいわゆる小杉茶碗で、TD-1-dに分類される。文様の若松文はきわめてラフに描かれている。17は灰釉丸碗でTC-1-cに分類される。器厚が厚く、また、高台径もやや広く、一般的な本類とはやや器形を異にする。鉢とした方がいいのかも知れない。高台裏には細いリング状の溶着痕が認められる。18は把手部分は欠損しているが、灰釉の餌入れで、TC-30に分類される。底部には「池之端」と墨書されている。19は灰釉急須の蓋で、TZ-00-sに分類される。20は灰釉の香炉・火入れで、TC-9-aに分類される。底部は穿孔されている。21は灰釉柄杓でTD-32に分類される。内面体部中位には鉄絵具で圏線が描かれている。把手は欠損している。高台裏には朱で彩色されている。22は灰釉鉄絵鬚水入れでTC-25に分類される。器面の鉄絵は摺絵で描かれている。23は灰釉植木鉢でTC-21に分類される。24～28はいわゆる貧乏徳利で、24、25がTC-10-c、26がTC-10-a、27がTC-10-d、28がTC-10-eに分類される。26は「三」の釘書き、それ以外は列点状に彫られており、24は「九ㄨ」、25、27、28は「久〇」の字が確認できる。26～28の底部は釉が拭き取られている。29は灰釉油受け皿で、TD-40-bに分類される。

30～35は土器である。30は施釉の油受け皿で、DZ-40-bに分類される。胎土は黒褐色を呈し、表面は釉の剥落が著しい。本類としてはやや大型の製品である。31、32はかわらけでDZ-2-bに分類される。33は硬質瓦質の火鉢でDZ-31-jに分類される。器面の剥落が激しく、詳細は観察できないが、地紋が施されている。34は土師質の火鉢で、DZ-31-aに分類される。口唇部は敲打痕がほぼ全周にわたり確認できる。35は塩壺の蓋で、DZ-00-dに分類される。内側にはわずかに蓋がかりが付けられている。

SK269 (IV-77 図)

1は青磁でJB-2に分類される。見込みは花卉状にしのごが入れられている。2は白磁の戸車でJB-35に分類される。外周には擦痕が認められる。3は腰鏝碗でTC-1-uに分類される。器高が低いことから、年代的に下る製品であると思われる。4は急須の蓋でTZ-00-sに分類される。白化粧土に呉須と鉄で文様が付けられている。5は糸目土瓶でTZ-34-dに分類される。底部脇に「丸傳」の刻印が押されている。底部はススが付着している。6、7は灰釉徳利で、それぞれTC-10-c、TC-10-aに分類される。6の胴部には〇の中に「岩」列点状の釘書き、底部には〇の中に「岩」、胴部下端には「いわさき」の墨書がみられる。7は釘書きが確認できるが、欠損のため判読できなかった。8はかわらけでDZ-2-bに分類される。9は瓦質の植木鉢でDZ-21-bに分類される。10は2ピースの板作りの塩壺でDZ-51-gに分類される。

SE271 (IV-78・79・102 図)

1～6、15は磁器である。1～5、15は染付である。1、2は碗で、それぞれJC-1-d、JC-1-eに

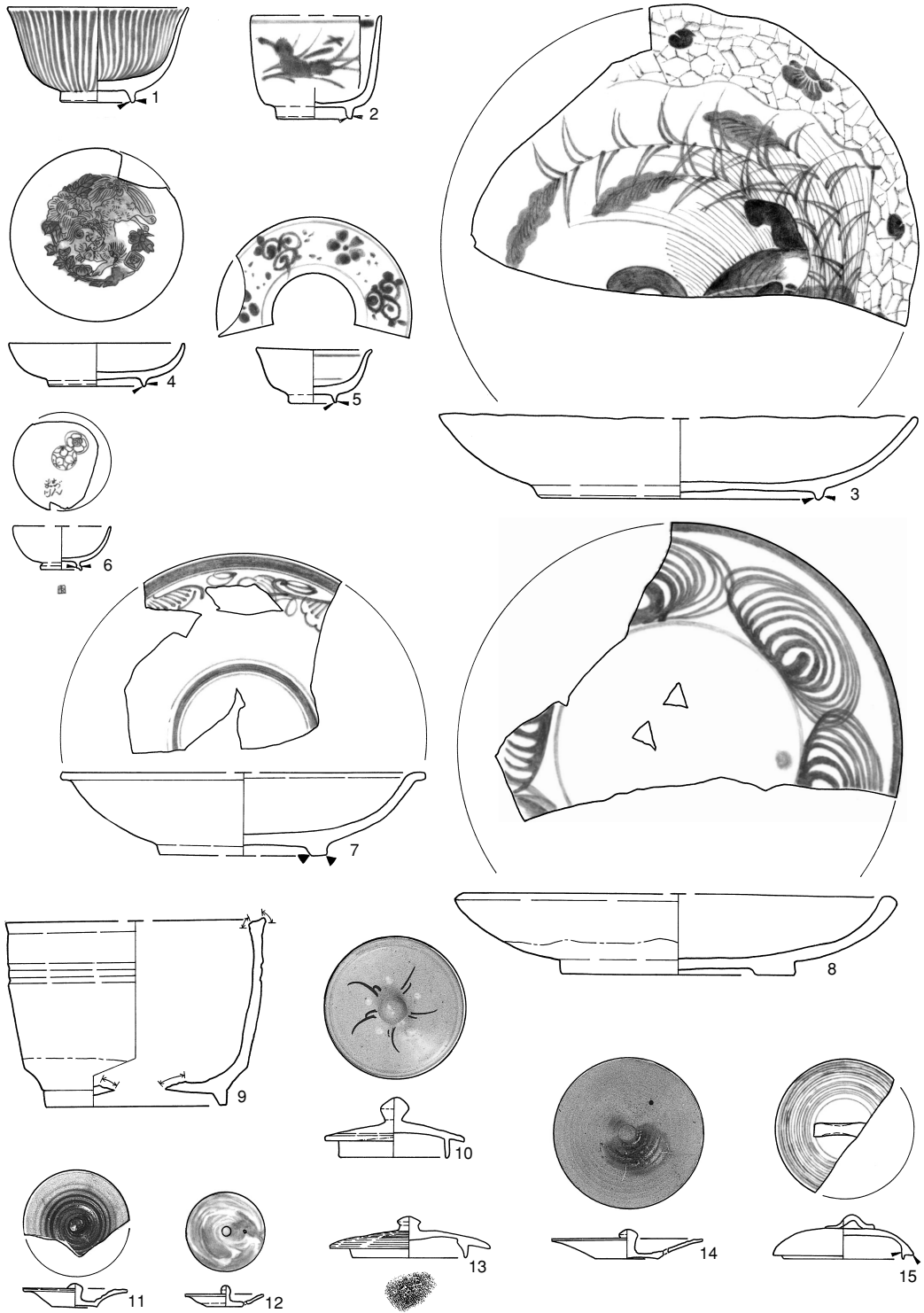
分類される。2は瀬戸・美濃の地呉須とは異なる発色の良好な呉須で文様が描かれている。3は志田窯の製品で、JB-3-eに分類される。底部には6ヶ所のハリ支えが認められる。焼継されており、底部には「×2」のマークが入っている。4は木型打込に濃淡の濃みが施された小皿で、JC-2-dに分類される。5は端反の小坏で、JC-6-bに分類される。6はいわゆる江戸絵付がされている小坏で、JC-6-dに分類される。15は蓋物の蓋で、JB-00-fに分類される。

7～14、16～19は陶器である。7は灰釉鉄絵皿で、TC-2-fに分類される。文様の入れ方は馬ノ目皿に類似している。8はいわゆる馬ノ目皿で、TC-2-gに分類される。見込みにはトチ痕が確認できる。9は柿釉の半胴甕でTC-15-aに分類される。表面、胎土に鉄分が吹き出しており、いわゆる赤津ハンドと称される製品であろう。口唇部は敲打痕が顕著に認められ、また、底部は穿孔されている。火入れ、あるいは火鉢として使用された後、植木鉢にしたものであろうか？。10、13は土瓶の蓋で、TZ-00-c、TZ-00-gに分類される。10は灰釉に鉄絵と白化粧土で施文される。13は内面に角枠内「駄」、丸枠内「木」の刻印が押されている。駄知土瓶であろう。11、12、14は急須の蓋で、TZ-00-sに分類される。11、14は無釉に藻掛け、12は灰釉に刷毛目が施されている。16は灰釉に白化粧土と鉄絵の具で文様が付けられた爛徳利で、TD-4に分類される。底部には「久〇」の墨書が認められる。17、18はいわゆる灰釉の貧乏徳利でTC-10-c、19は柿釉の徳利でTC-10-gに分類される。17、18には列点状の釘書きで「久〇」が彫られている。20は焼締め播鉢でTL-29に分類される。見込み中央の播目は三角パターン、体部は底部境から引き上げられ、上端は揃えられている。

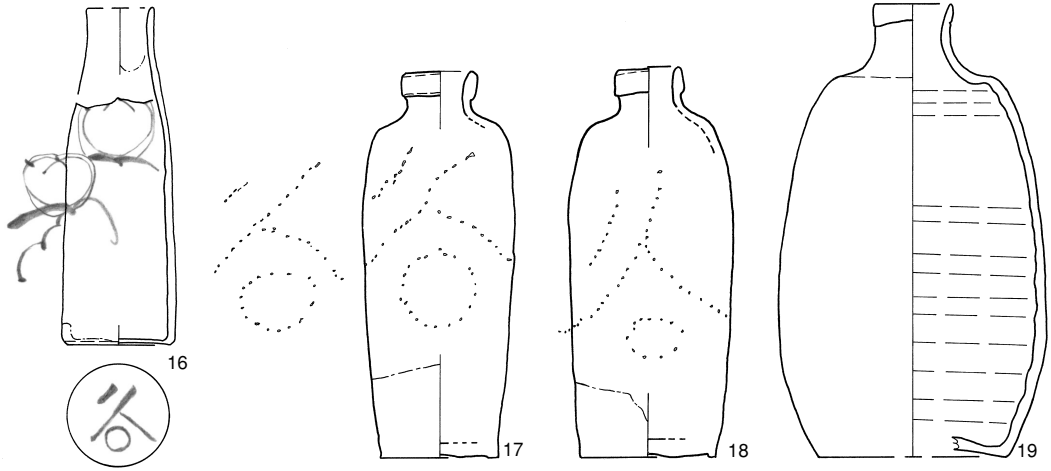
SU279 (IV-79～82図)

本遺構からは多量に遺物が出土している。肥前系磁器JB-1-e、JB-1-v、JB-2-fなどが含まれていることから、東大編年のVa期に比定できる。出土遺物は二次的火熱を受けているものが少なく、地下室の埋め戻し過程において陶磁器などを廃棄したものと思われる。

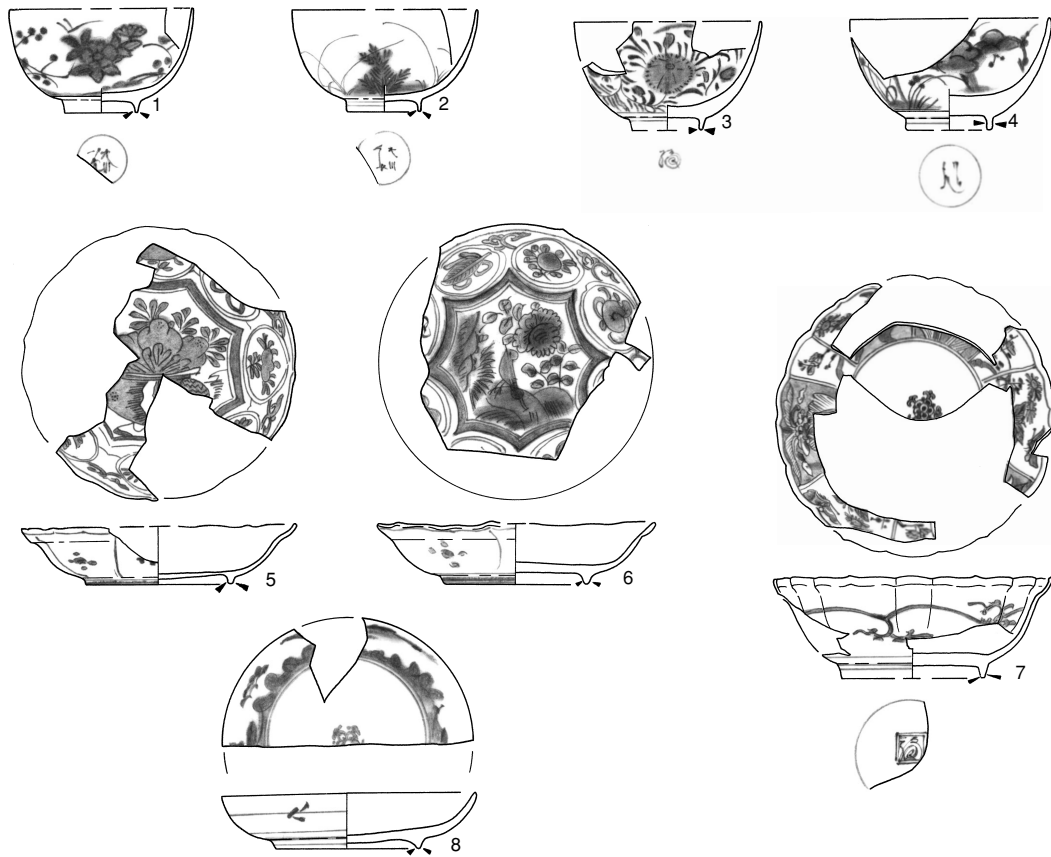
1～19は磁器である。このうち17は色絵で、その他は染付である。1～4は碗で、1、3はJB-1-g、2はJB-1-u、4はJB-1-vに分類される。1、2はコンニャク印判と手描きの併用で施文されている。1より2は成形、胎土の色調、呉須の発色が良好である。5、6は芙蓉手風の景德鎮窯系青花磁器で、JA1-2に分類される。口唇部には部分的に虫喰いがみられ、高台裏には放射状のカンナ痕が確認できる。呉須の色調は明青色を呈する。畳付には白色の粗砂粒が付着している。7は輪花皿で、JB-2-eに分類される。見込み中央には手描き五弁花が、高台裏には二重角枠内渦福が描かれている。文様は比較的丁寧に描かれ、胎土の色調も良好である。8はJB-2-eに分類される。器面の一部に二次的な火熱を受けている。見込み中央はコンニャク印判五弁花が押されている。9は紫陽花文大皿で、JB-3-bに分類される。高台裏には6ヶ所のハリ支えが確認できる。二重角枠内渦福銘が書かれている。胎土、呉須の色調、文様の筆致など丁寧に作られている。10は貼付高台の変形皿で、JB-61に分類される。文様は型紙摺りで描かれている。11は型作りの方鉢で、JB-5-bに分類される。胎土の色調は良好で、文様もきわめて精緻に描かれている。12はJB-5-bに分類される。胎土はやや灰色を呈し、呉須の発色も悪い。13は端反形の小坏でJB-6-bに分類される。見込みには手描き五弁花、底部には二重角枠内渦福銘が描かれている。胎土の色調は良好で、文様も極めて精緻に描かれている。14、15は猪口でJB-7-bに分類される。14は口唇部に口鏽が認められる。文様は丁寧に描かれている。16はJB-6-aに分類される。17は型作りの水滴で、JB-19



IV-78 図 SE271 (1) 出土遺物



SE271(2)



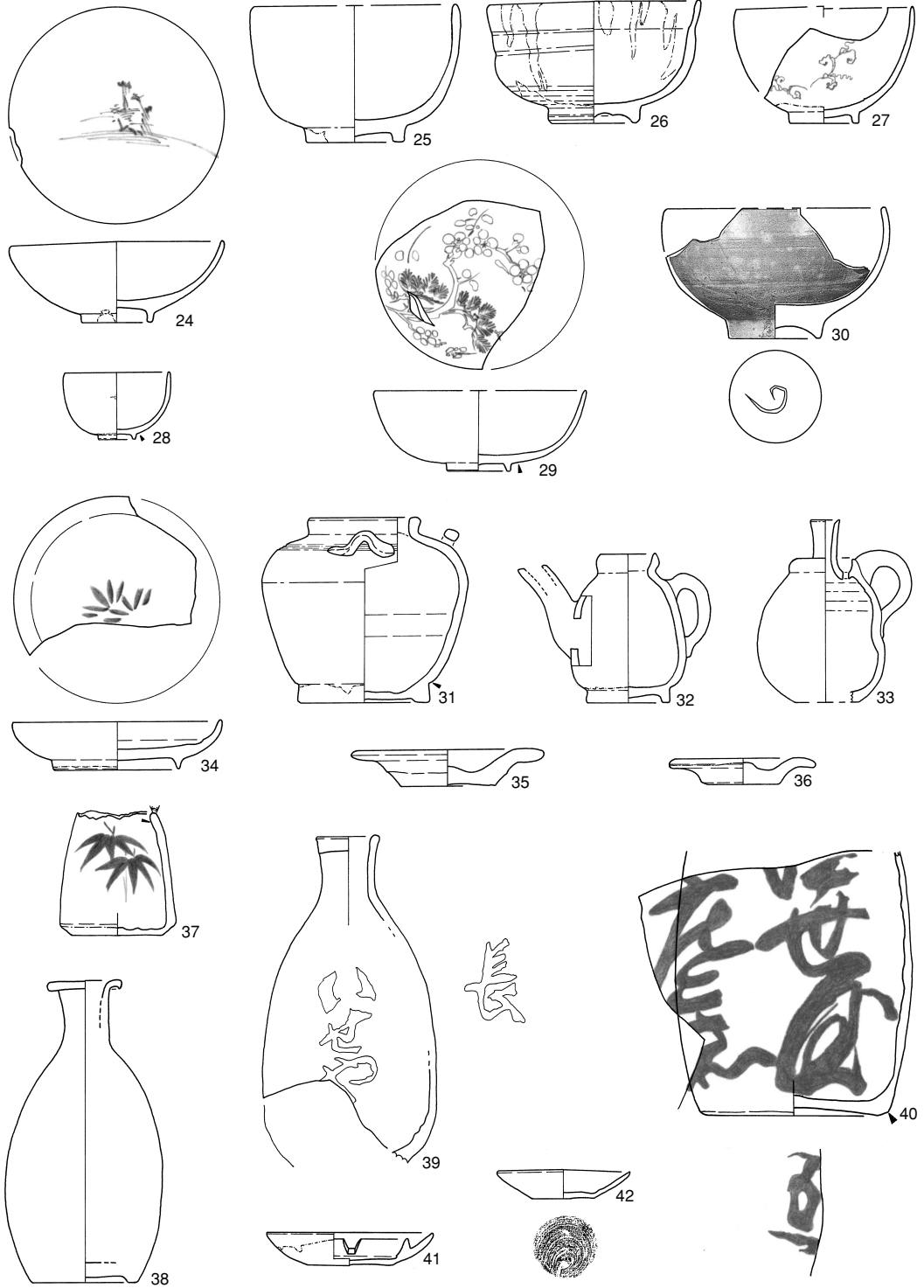
SU279(1)

IV-79 図 SE271(2)・SU279(1) 出土遺物



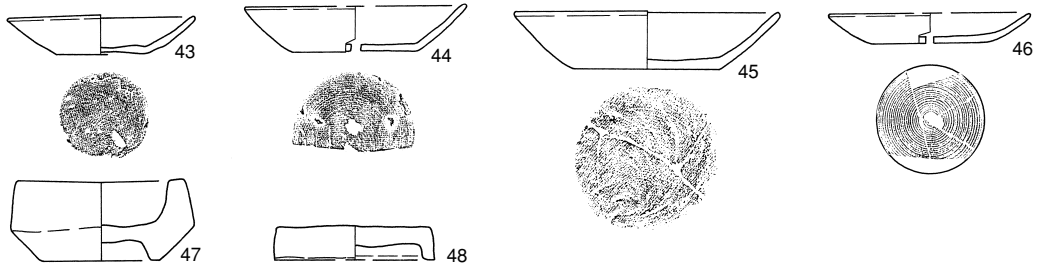
IV-80 図 SU279 (2) 出土遺物

第IV章 出土した遺物

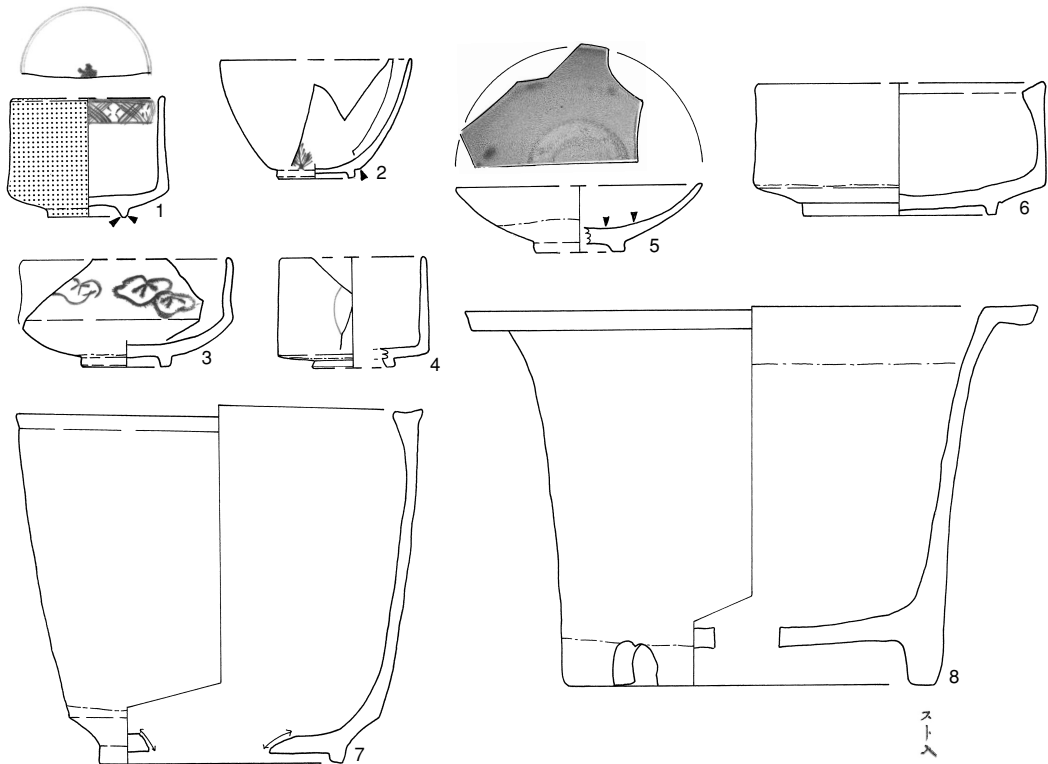


IV-81 図 SU279 (3) 出土遺物

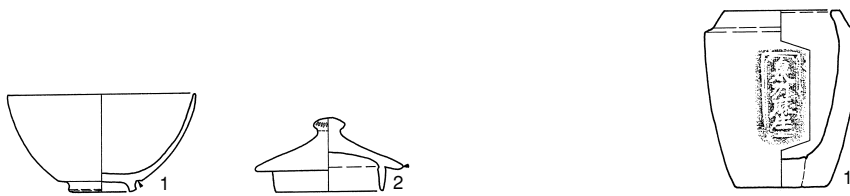
第IV章 出土した遺物



SU279(4)



SU280



SK282

SU283

IV-82 図 SU279 (4) ・ SU280 ・ SK282 ・ SU283 出土遺物

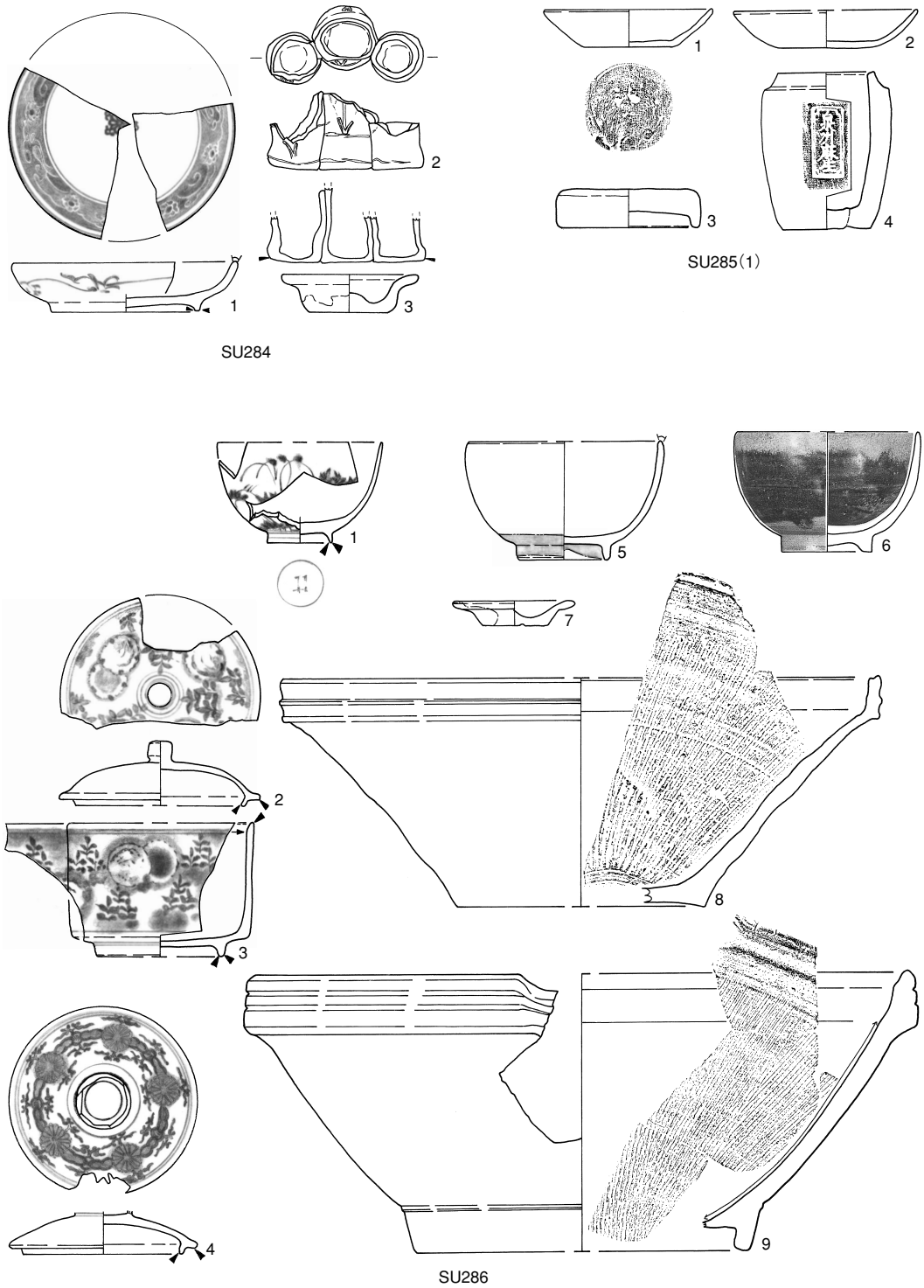
に分類される。底部内面は布目痕が明瞭に観察され、型作りされた上部がその上に乗る形で、接合されている。文様は赤、緑、呉須で上絵が描かれている。焼成は横位で行っており、一側面が無釉にしている。無釉部には上絵で文様が付けられている。18は蓋物で、JB-13-bに分類される。19は油壺でJB-12に分類される。

20～41は陶器である。20、21は陶胎染付でTB-1-fに分類される。22はTB-1-dに分類される。横方向の刷毛目が施されている。23、24はいわゆる京焼風陶器灰釉鉄絵平碗で、TB-1-cに分類される。23の高台裏には「富永」の刻印が押印されている。絵付けはラフである。24は暈付以外全釉されている。25は灰釉碗で、TC-1-cに分類される。底部は釉を拭き取っている。26はTC-1-fに分類される。灰釉に若干鉄分が入る釉を流し掛けしている。底部の釉は拭き取り。高台は左回転の渦巻高台を呈している。27は灰釉呉須絵碗で、TD-1に分類される。内面には3ヶ所の小さいピン痕が認められる。高台裏にはいわゆるちりめん皺が入り、唐津風に仕上げられている。やや歪みを持っている。28は灰釉鉄絵の坏で、TD-6に分類される。29は色絵の平碗で、TD-1-hに分類される。見込みは青、緑で、松、梅文が上絵付されている。胎土は緻密で、焼成はやや甘く、黄白色に仕上げられている。30は高麗茶碗風の碗で、器形から茶碗であろうと思われる。生産地は判断できない。TZ-1としておく。高台裏はへら状工具によって手持ちで右回転の沈線が施され、渦巻高台風に仕上げられている。31は褐釉の双耳壺でTC-15に分類される。肩部にワラ灰釉が流し掛けされている。32は鉄釉の水注でTC-27-aに分類される。33は焼締め油徳利で、TE-41に分類される。器面は泥が塗られ、いわゆる火襷が認められる。底面は欠損のため判読はできないが、刻印が認められる。34は灰釉呉須絵皿で、TC-2-eに分類される。文様は摺絵で描かれている。高台裏は施釉されている。35、36は壺の蓋で、35がTC-00-a、36がTC-00-bに分類される。35は表裏面灰釉の化粧掛け、36は鉄釉にワラ灰釉が流し掛けられている。37は鉄絵の灰落しで、TD-24に分類される。内面は灰釉の化粧掛け、外面は白化粧土の上に鉄絵が施されている。口唇部は全体に敲打痕が認められる。38は灰釉徳利でTC-10-a、39は五合のいわゆる尾呂徳利でTC-10-dに分類される。器面には釘書きで、「いせや」、「長」と書かれている。40は鉄釉徳利でTF-10に分類される。器面には「以せ屋」、判読できないが底面にも墨書されている。41は柿釉油受け皿でTC-40-cに分類される。

42～48は土器である。42～45はかわらけで、44がDZ-2-i、その他がDZ-2-bに分類される。43には部分的に、45には全周に灯火の痕跡が認められる。44には径約5mmの孔が穿たれている。46は磨きかわらけでDZ-2-cに分類される。径約5mmの孔が穿たれている。47は塩壺でDZ-51-z、48は塩壺の蓋でDZ-00-cに分類される。48の内面は布目痕が認められる。

SU280 (IV-82 図)

1は青磁染付筒形碗でJB-1-lに分類される。見込みはコンニャク印判五弁花が描かれている。2～8は陶器である。2は銹絵染付の小杉碗でTD-1-dに分類される。松の若芽部分が呉須で描かれている。3は灰釉鉄絵半筒碗でTD-1-iに分類されている。見込みにはピン痕が確認できる。4は灰釉鉄絵筒形碗で、TC-1に分類される。器形は異なるもののいわゆる柳茶碗と文様や釉調が近似している。5は蛇ノ目釉剥ぎの灰釉青緑釉散らし皿で、TB-2-aに分類される。胎土、技法から内野山窯の製品であろうと推定される。6は褐釉香炉・火入れでTC-9-bに分類される。7は柿釉半胴甕でTC-15-aに分類される。器面、胎土には鉄分が吹き出しており、赤津で生産された製品であ



IV-83 図 SU284・SU285(1)・SU286 出土遺物

ろうと思われる。口唇部には窯積みの際のトチンの痕跡が4ヶ所観察できる。底部は径5cmほど穿孔され、植木鉢として利用していたものと考えられる。8は灰釉植木鉢でTC-21に分類される。底部は3ヶ所のアーチ状のえぐりが付けられている。畳付けには「スト入」と墨書されている。

SK282 (IV-82 図)

1は灰釉の杉形の碗で、TD-1-dに分類される。遺存部には若松文は確認できないが、欠損部に描かれていた可能性はあろう。2はいわゆる青土瓶の蓋でTZ-00-aに分類される。表面は青緑釉の剥落が顕著である。

SU283 (IV-82 図)

1は3ピースの板作りの塩壺で、DZ-51-iに分類される。「泉州麻生」の刻印が押されている。

SU284 (IV-83 図)

1は染付磁器皿で、JB-2-eに分類される。見込み中央にはコンニャク印判五弁花が描かれている。二次的な火熱を受けている。2は灰釉呉須絵の筆立てでTD-14に分類される。竹を模して作られている。3は鉄釉ワラ灰流しの壺の蓋でTC-00-aに分類される。

SU285 (IV-83・102 図)

1はかわらけでDZ-2-bに分類される。二次的な火熱によって変形している。2は焼締め油皿でTE-2に分類される。器面には泥が塗られ、火嚮も認められる。口唇部には一部灯火の痕跡が確認できる。3は塩壺の蓋、4は3ピースの板作りの塩壺で、それぞれDZ-00-c、DZ-51-iに分類される。3の内面は布目痕が確認できる。4は「泉州麻生」の刻印が押されている。5は耳かわらけで、DZ-2-eに分類される。

SU286 (IV-83 図)

1～9は二次的な火熱を受けている。1や6の出現年代、2～4の型紙摺り、7、8の器形の特徴などはいずれも17世紀末から18世紀初頭に比定できる。遺構の覆土は焼土を多量に含むものではなかったが、遺構が廃棄された年代は元禄16(1703)年の火災の可能性が強いと推定される。

1～4は肥前系染付磁器である。1はJB-1-uである。2、3は同一個体の蓋物でJB-13-bに分類される。丸文部分は型紙摺りで、手描きと併用して施文されている。4はJB-00-fに分類される。文様は菊花文部分は型紙摺りで、手描きと併用して施文されている。5は灰釉碗で、TB-1に分類される。貫入の入り方や胎土の特徴は肥前京焼風陶器と近似している。高台脇から底部にかけて錆釉が掛けられている。口唇部には口錆が施される。6はいわゆる尾呂茶碗で、TC-1-oに分類される。内面から外面体部下半まで褐釉、高台脇から底部を鉄釉の化粧掛け、口縁部内外面にワラ灰釉が流し掛けられている。7は鉄釉の壺の蓋でTC-00-aに分類される。8、9は焼締め播鉢で、それぞれTK-29、TE-29に分類される。8の焼成は比較的良好である。体部下半にはススが付着している。9はいわゆる赤物で、焼きが甘い。表面には泥が塗られている。

SK290 (IV-84～89・100・101 図)

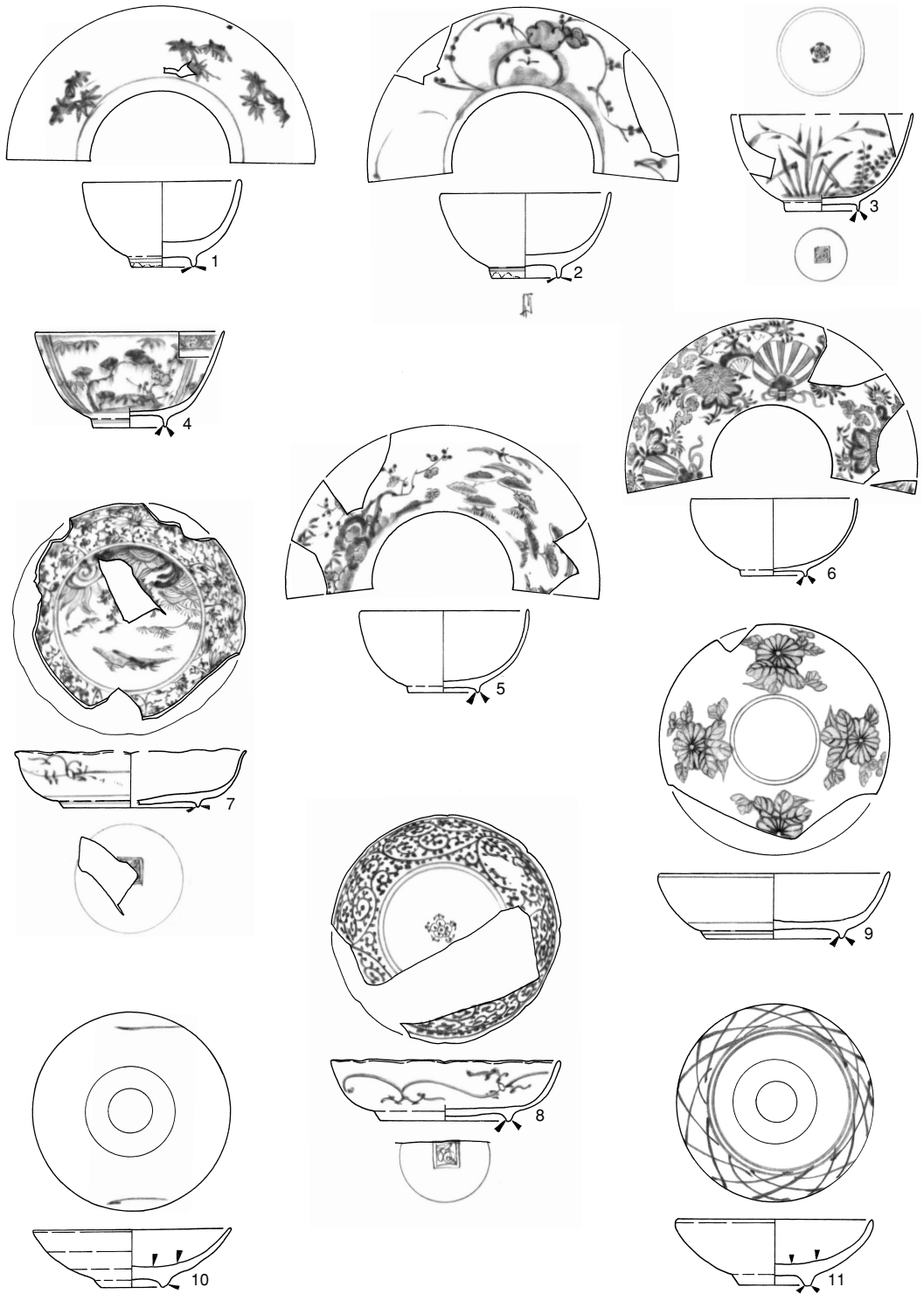
本遺構からは多量の遺物が出土している。JB-1-e、JB-1-f、JB-1-j、JB-1-v、JB-2-f、JB-2-g、JB-2-l、JB-2-mなどが確認されている。また、青磁染付の技法も認められ、東大編年のV b期に相当する器種で構成されている。

1～26は磁器である。1～6は染付磁器碗で、1からJB-1-g、JB-1-v、JB-1-e、JB-1-e、JB-1-f、

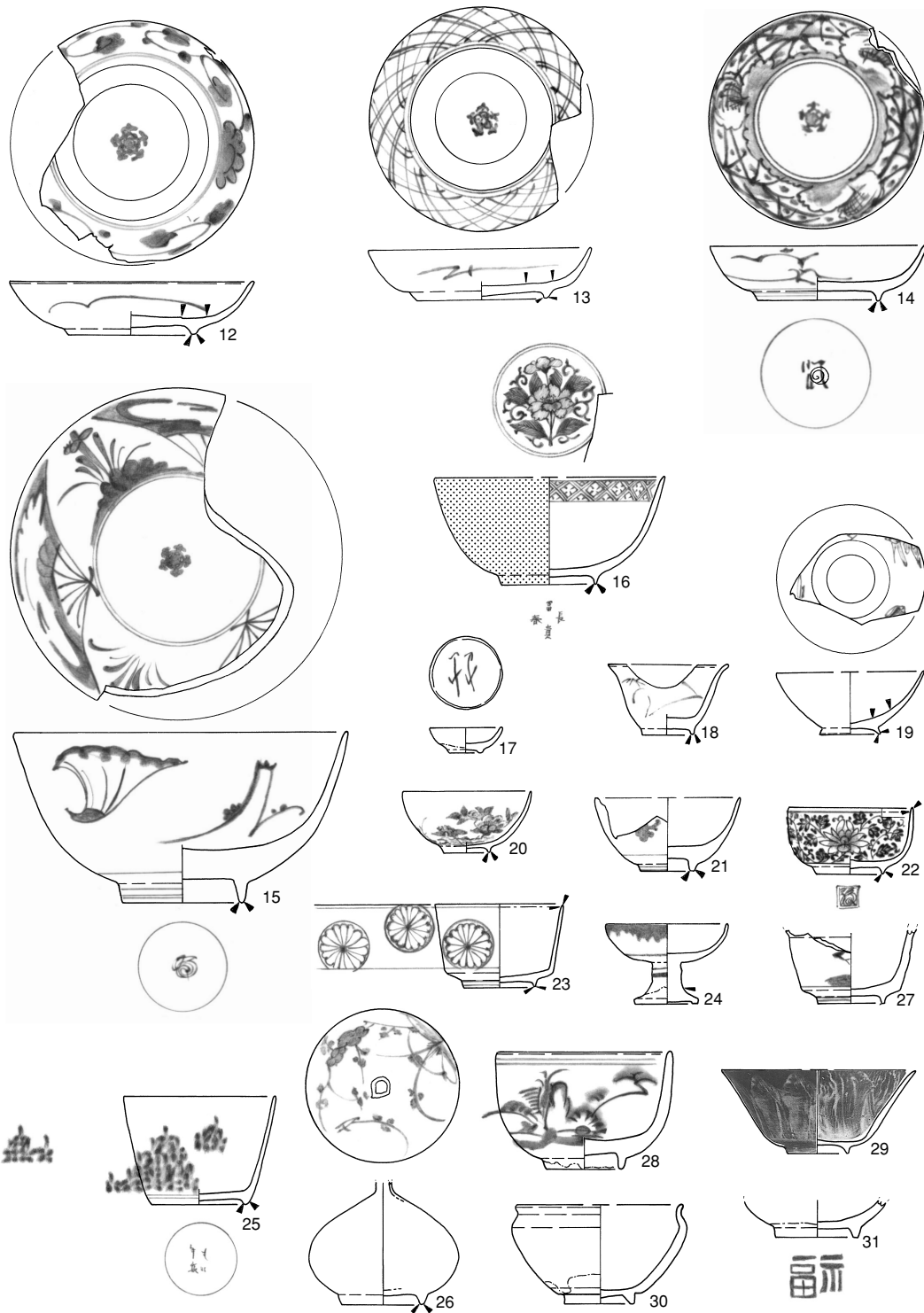
JB-1-fに分類される。1、2は胎土や呉須の色調が悪く、文様もラフに描かれている。1はコンニャク印判で施文されている。3、4は見込み手描き五弁花が描かれている。7～14は染付皿で、7からJB-2-f、JB-2-f、JB-2-e、JB-2-k、JB-2-l、JB-2-m、JB-2-m、JB-2-eに分類される。10～14は比較的ラフに作られている。7、8は口縁部輪花に成形されている。また、底部に二重角枠内渦福が描かれている。8は見込み手描き、12～14は見込みにコンニャク印判五弁花が描かれている。9はコンニャク印判で絵付されている。高台裏にはハリ支えが1ヶ所確認できる。15は染付、16は青磁染付の鉢でJB-5-bに分類される。15は見込み中央にコンニャク印判五弁花が描かれている。16は高台裏に「富貴長春」の銘が描かれている。16は丁寧に作られている。17は染付のミニチュアでJB-61に分類される。全て型で作られている。18、20、21は染付、19は色絵の坏で、18からJB-6-b、JB-6、JB-6-f、JB-6-aに分類される。19は蛇ノ目釉剥ぎの後、釉剥ぎ部には緑、それ以外は赤と緑で上絵付けされている。21はコンニャク印判で施文されている。22、23は染付蓋物で、22はJB-13-a、23はJB-13-bに分類される。22の高台裏には二重角枠内渦福銘が描かれている。ともに丁寧に作られている。24は染付仏飯器で、JB-8-cに分類される。雨降り柳文は手描き。25は染付猪口でJB-7-bに分類される。断面には漆継ぎの痕跡が確認できる。26は染付油壺でJB-12に分類される。

27～80は陶器である。27は陶胎染付の鉢で、TB-5に分類される。28は陶胎染付で、TB-1-fに分類される。29は打刷毛目碗で、TB-1-hに分類される。胎土は堅緻で、濃茶色を呈する。30は天目茶碗でTC-1-aに分類される。31は灰釉碗である。高台の作りや器形からいわゆる御室碗であろうと推定され、TC-1-dに分類できる。高台裏には左右逆の「福」の字が墨書されている。32、33は灰釉丸碗でTC-1-cに分類される。底部は無釉である。33は二次的な火熱を受けている。34は錆釉の碗で、TC-1-qに分類される。やや大振り、高台も幅広に成形されている。体部は所々拳骨茶碗風にくぼみが付けられている。35はいわゆる腰錆碗で、TC-1-uに分類される。器高が高いことから18世紀前半の製品であると推定できる。36はいわゆるせんじで、TC-1-lに分類される。器面には呉須で文様が絵付されている。37は錆絵染付に上絵が施された筒形碗で、TD-1-jに分類される。文様は白化粧土の上から施され、乾山風の漢詩が入るモチーフになっている。表面の上絵具が剥離している部分が多いが、草木、銘款部分には青、赤などで上絵が施されている。胎土はやや軟質である。38は色絵の坏で、TD-6に分類される。上絵具は赤を除き、剥落している。高台裏には判読できないが墨書が認められる。39は色絵の碗でTD-1-bに分類される。上絵は赤の他は剥落しているが、一部に金彩の痕跡が認められる。釉はやや青がかった灰色を呈する。40は錆絵半筒碗でTD-1-iに分類される。文様は錆絵と白土で施文されている。見込みは3ヶ所のピン痕が認められる。41は鉄釉の把手付きの碗で、TZ-1に分類される。胎土は茶褐色を呈し、堅緻である。白色の細砂粒が微量混入する。畳付には白土が付着している。管見の限りでは江戸時代の製品で類似したものは確認できなかった。42は青緑釉輪刹皿でTB-2-aに分類される。青緑釉はやや透明感のある緑色を呈している。43～45は灰釉摺絵皿で、TC-2-eに分類される。43は呉須、44、45は鉄で施文されている。44、45は見込みに3ヶ所のトチ痕が認められる。44、45は底部無釉である。46は灰釉呉須絵皿でTC-2に分類される。文様は手描きで草花文が施される。見込みはトチの痕跡が認められ、高台はやや幅広に作られている。釉や成形はTC-2-eに類似している。47は灰釉皿でTC-2-b

第IV章 出土した遺物

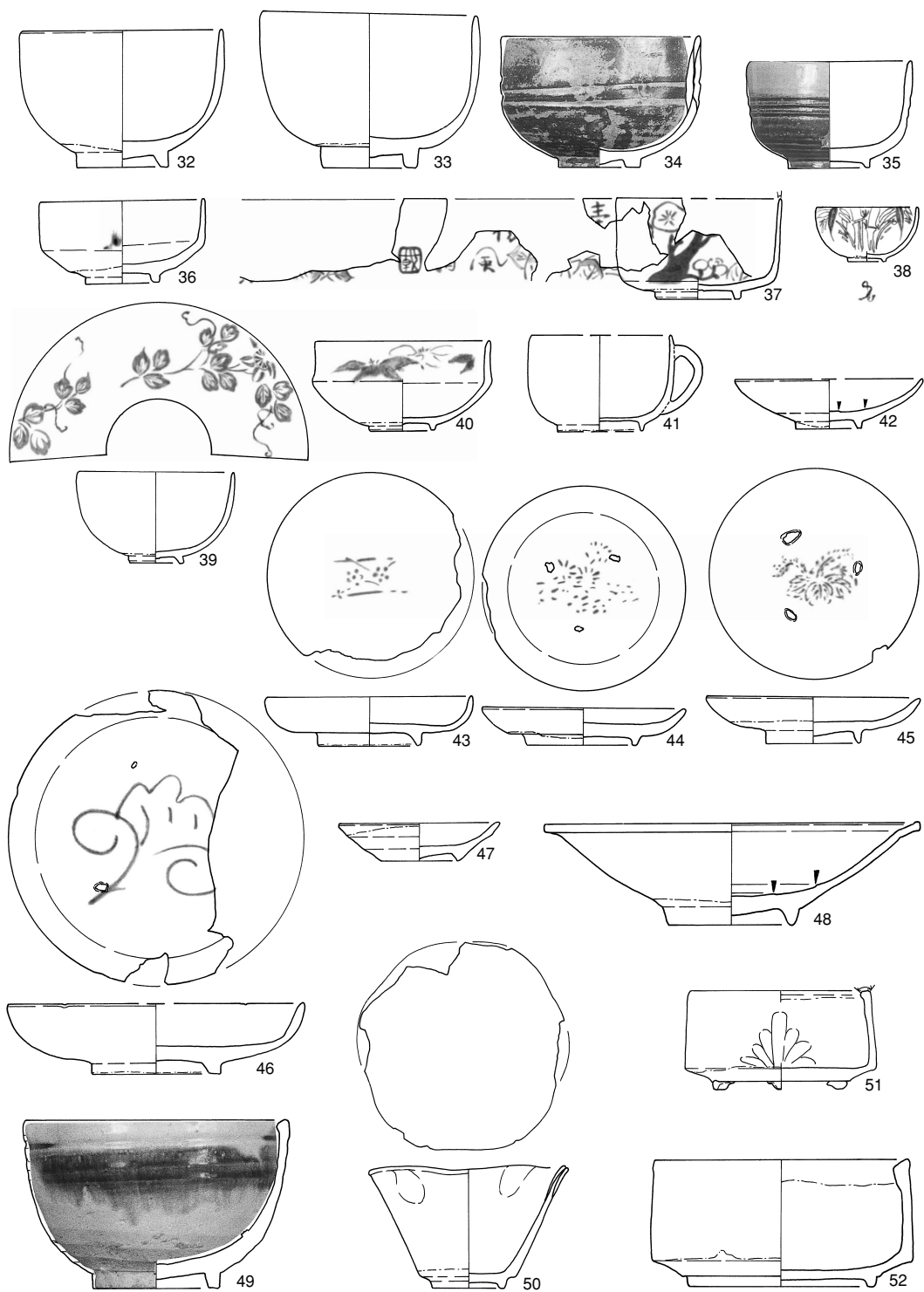


IV-84 図 SK290 (1) 出土遺物



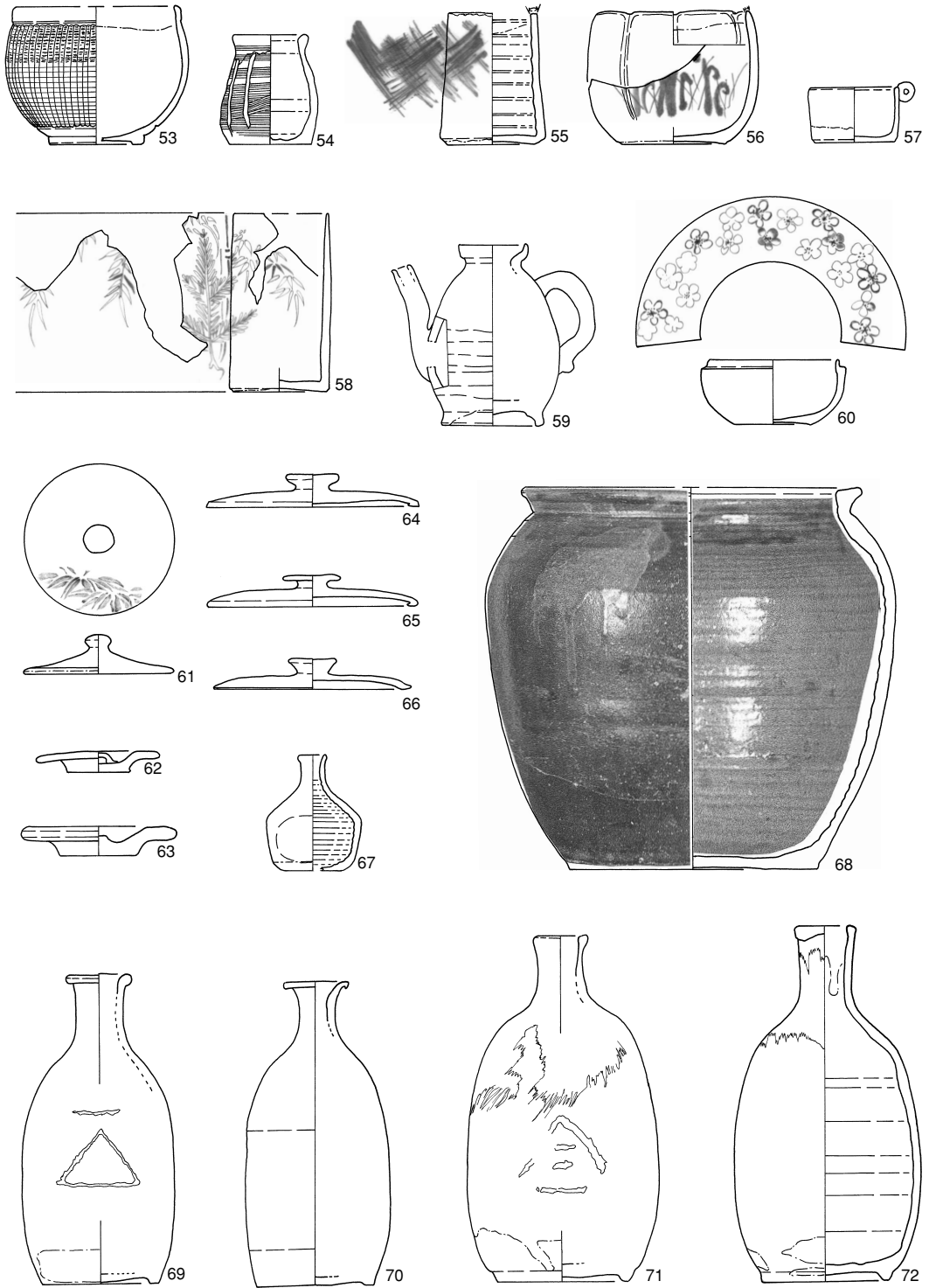
IV-85 図 SK290 (2) 出土遺物

第IV章 出土した遺物

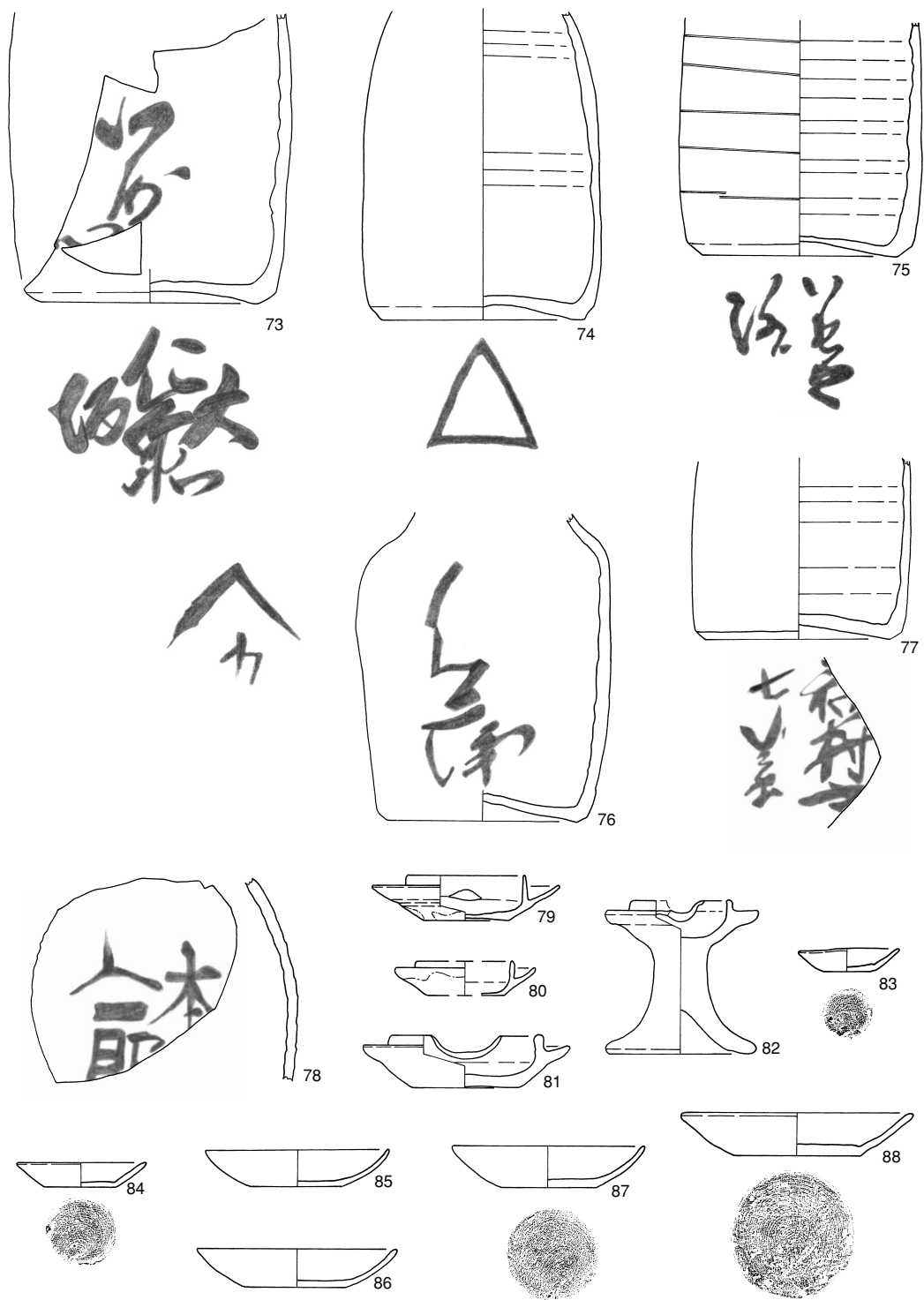


IV-86 図 SK290 (3) 出土遺物

第IV章 出土した遺物

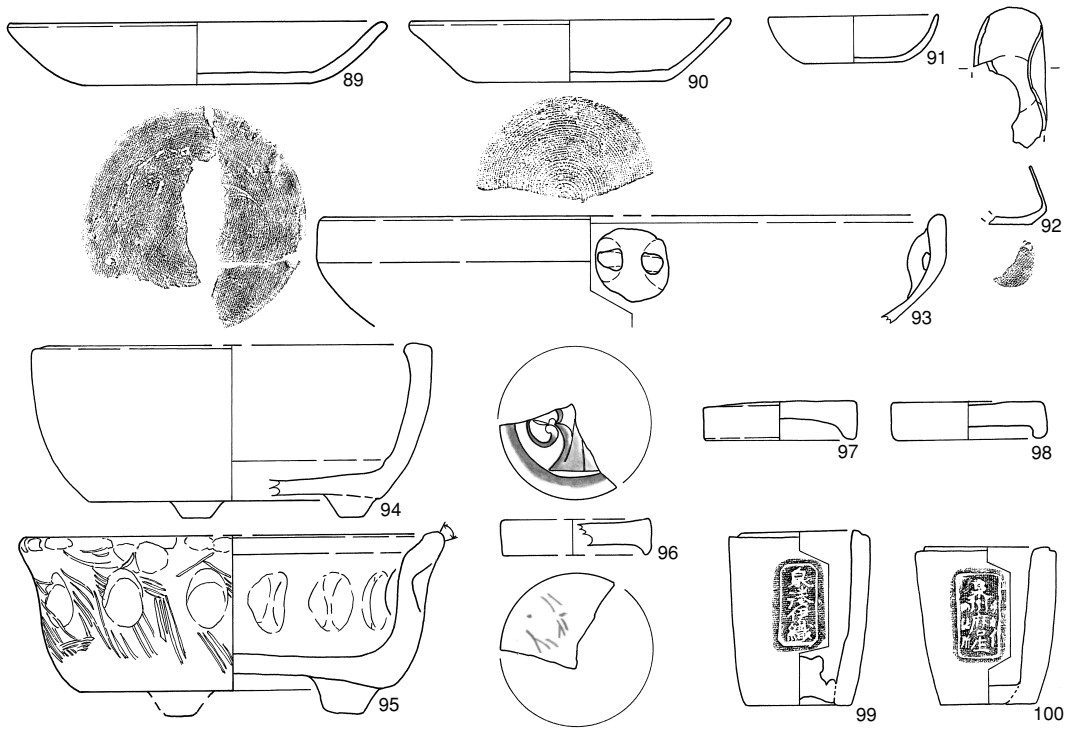


IV-87 図 SK290 (4) 出土遺物

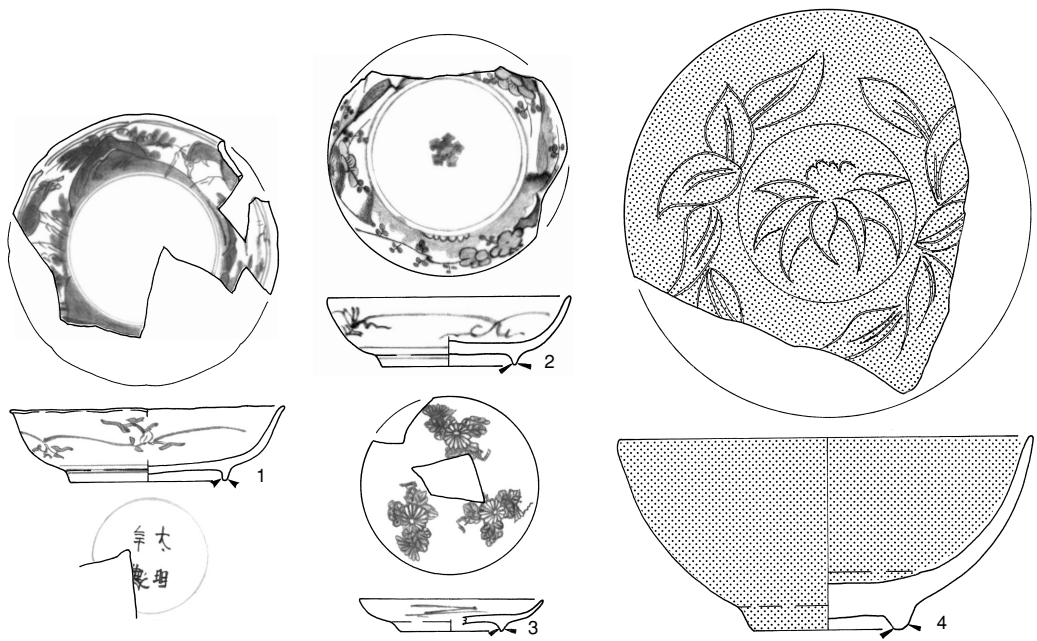


IV-88 図 SK290 (5) 出土遺物

第IV章 出土した遺物



SK290(6)



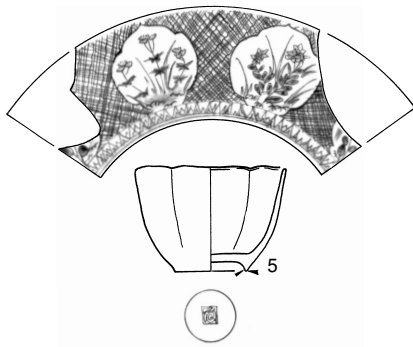
SU291(1)

IV-89 図 SK290(6)・SU291(1) 出土遺物

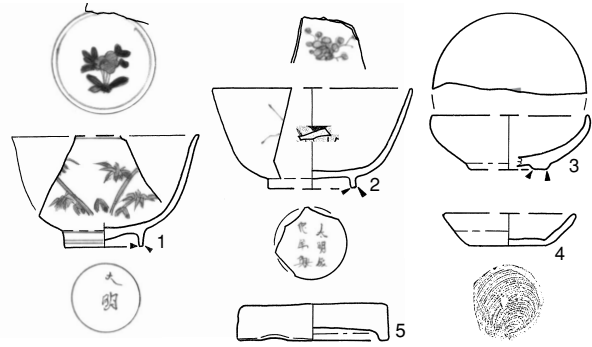
に分類されている。見込みは直重ねの痕跡が認められる。高台は退化し、碁筒底風になっている。本類の最終末の製品であろう。48は灰釉輪禿鉢でTC-5-cに分類される。口縁部はやや外反し、口唇部は外削ぎ状に成形されている。49は灰釉・緑釉流し片口鉢でTC-23-bに分類される。見込みには3ヶ所のトチの痕跡が認められる。50は灰釉の変形鉢でTC-5に分類される。やや荒い貫入が全面に認められる。口唇部の一部には敲打痕が認められる。51は褐釉香炉・火入れでTC-9-dに分類される。外面には半菊状のシノギが認められる。口唇部は全周に敲打痕が顕著に認められ、火入れ・灰落としとしての用途が想定できる。52は褐釉香炉・火入れでTC-9-bに分類される。輪高台である。口唇部の一部に敲打痕が認められる。53は柿釉の香炉・火入れで、TD-9に分類される。高台は丁寧に作られ、畳付外周は面取りされている。器面は体部上半は格子状、下半は縦縞状に沈線が施されている。内面無釉である。54は灰釉鉄釉掛け分けに斜格子状のシノギの灰落しでTC-24-aに分類される。クシ状工具で螺旋状に平行条線を横位に付けた後、棒状の工具で五本縦位にシノギを入れている。内面は無釉である。55は鉄絵の灰落しでTD-24に分類される。口唇部は全周にわたり敲打痕が顕著に認められ、一部は平滑に再調整している痕跡が認められる。胎土はやや粗く、白色の細砂粒が混入している。56は輪花に型作りされた灰釉鉄絵の香炉・火入れでTD-9-aに分類される。口唇部は全周にわたり敲打痕が認められる。胎土は55と類似している。57は灰釉の餌入れでTC-30に分類される。底面は回転ヘラケズリで糸切りを消している。58は松・竹文の色絵花生けでTD-22に分類される。赤以外の顔料は剥げ落ちているが、部分的に金彩の痕跡が認められる。胎土は堅緻な黄白色を呈し、丁寧に成形・施釉されている。内面は全釉される。59は鉄釉の水注でTC-27-aに分類される。60は色絵の合子で、TD-18-aに分類される。いわゆる軟質施釉陶器で、白色の胎土に赤、黄で花文を描いた後、鉛釉が施されている。器面の鉛釉は銀化、剥落が著しい。61は灰釉鉄絵の水注の蓋で、TC-00-eに分類される。文様は摺絵で描かれている。62、63は壺・甕の蓋で、62がTC-00-b、63がTC-00-aに分類される。62はいわゆる尾呂風の釉が施されている。64～66は爛鍋の蓋で、TZ-00-nに分類される。64は柿釉、65、66は灰釉が施される。67は小型の瓶で、TE-10に分類される。底部脇まで、泥が塗布されている。器面には火轡が認められる。68は鉄釉灰釉流しの壺で、TD-15に分類される。内面は灰釉が施されている。69～72はいわゆる貧乏徳利で、69、70はTC-10-a、71、72はTC-10-dに分類される。71、72はいわゆる尾呂徳利である。73～78は鉄釉徳利で、TF-10に分類される。裏面や器面には墨書が確認できる。79、80は鉄釉油受け皿で、TF-40に分類される。80は受け部の切り欠きが欠損している。

81～100は土器である。81、82は土師質の油受け皿で、81はDZ-40-d、82はDZ-40-cに分類される。82の口縁の一部には灯心痕が確認されている。83～91はかわらけで、83、84、87～90はDZ-2-b、85、86、91は磨きかわらけでDZ-2-dに分類される。84、87～89は口唇部に油痕が確認できる。85の底部は黒色を呈している。92は耳かわらけで、DZ-2-eに分類される。93はほうろくで、DZ-47-aに分類される。体部には耳が貼付されている。94は土師質の火鉢で、DZ-31-aに分類される。器面は赤彩された痕跡が確認できる。95はDZ-31。96～98は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。96の外面は二次的に丸に立葵の紋が彫られている。また、内面には墨書が書かれるが、判読できない。99、100は板作りの塩壺で、99はDZ-51-g、100はDZ-51-kに分類される。101～103は瓦質の火鉢である。101、103は軟質瓦質で、DZ-31に分類される。巻

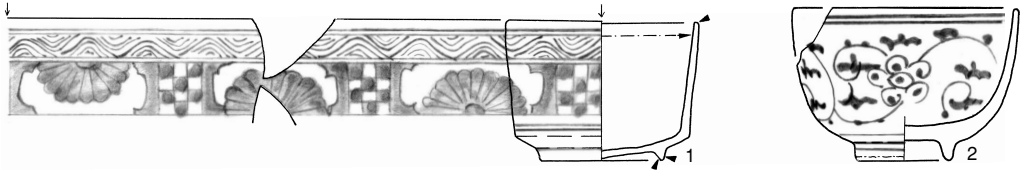
第IV章 出土した遺物



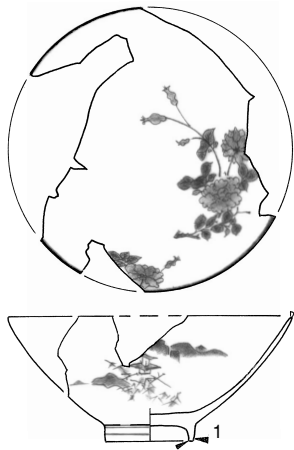
SU291(2)



SU300

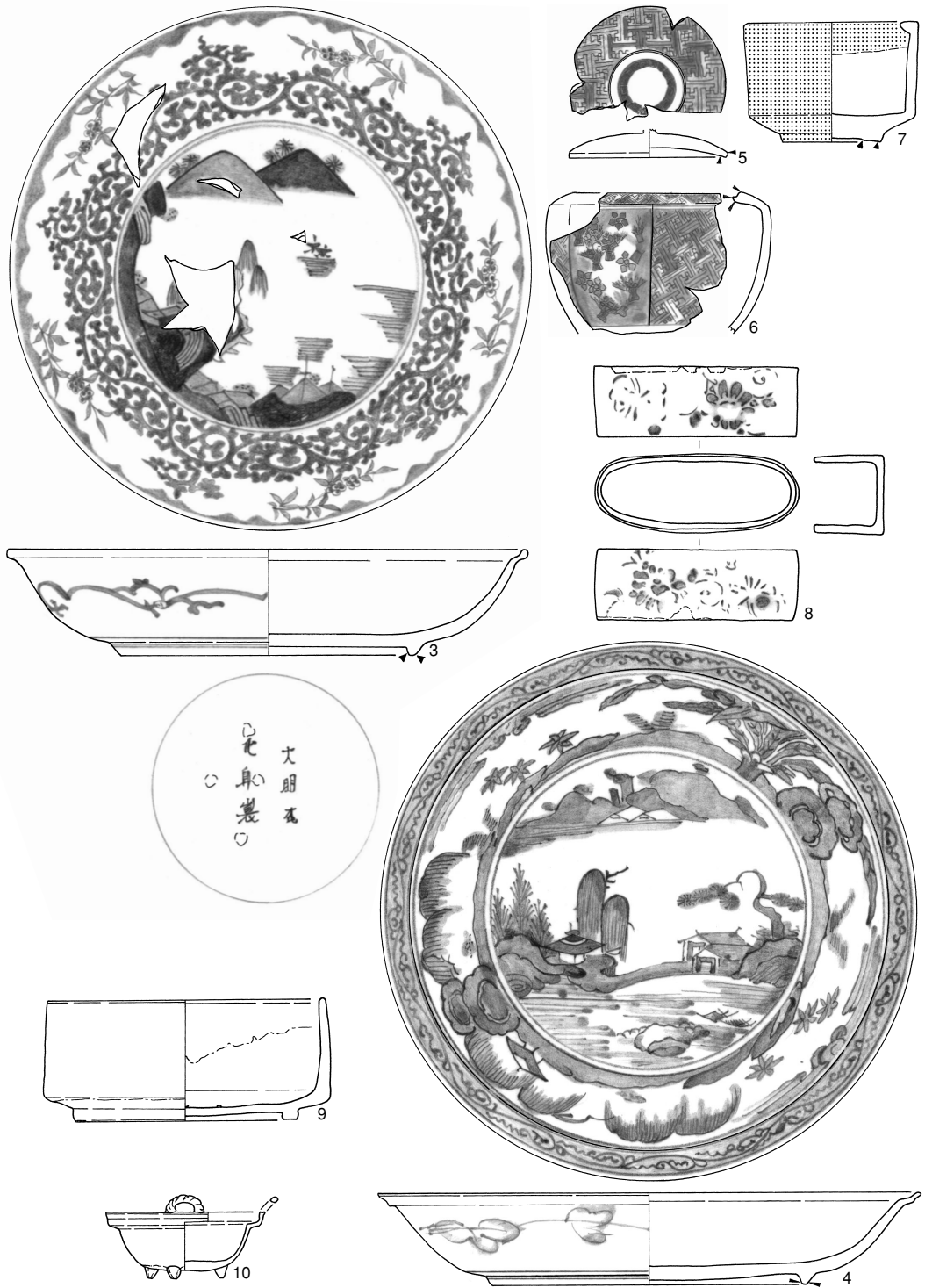


SK306

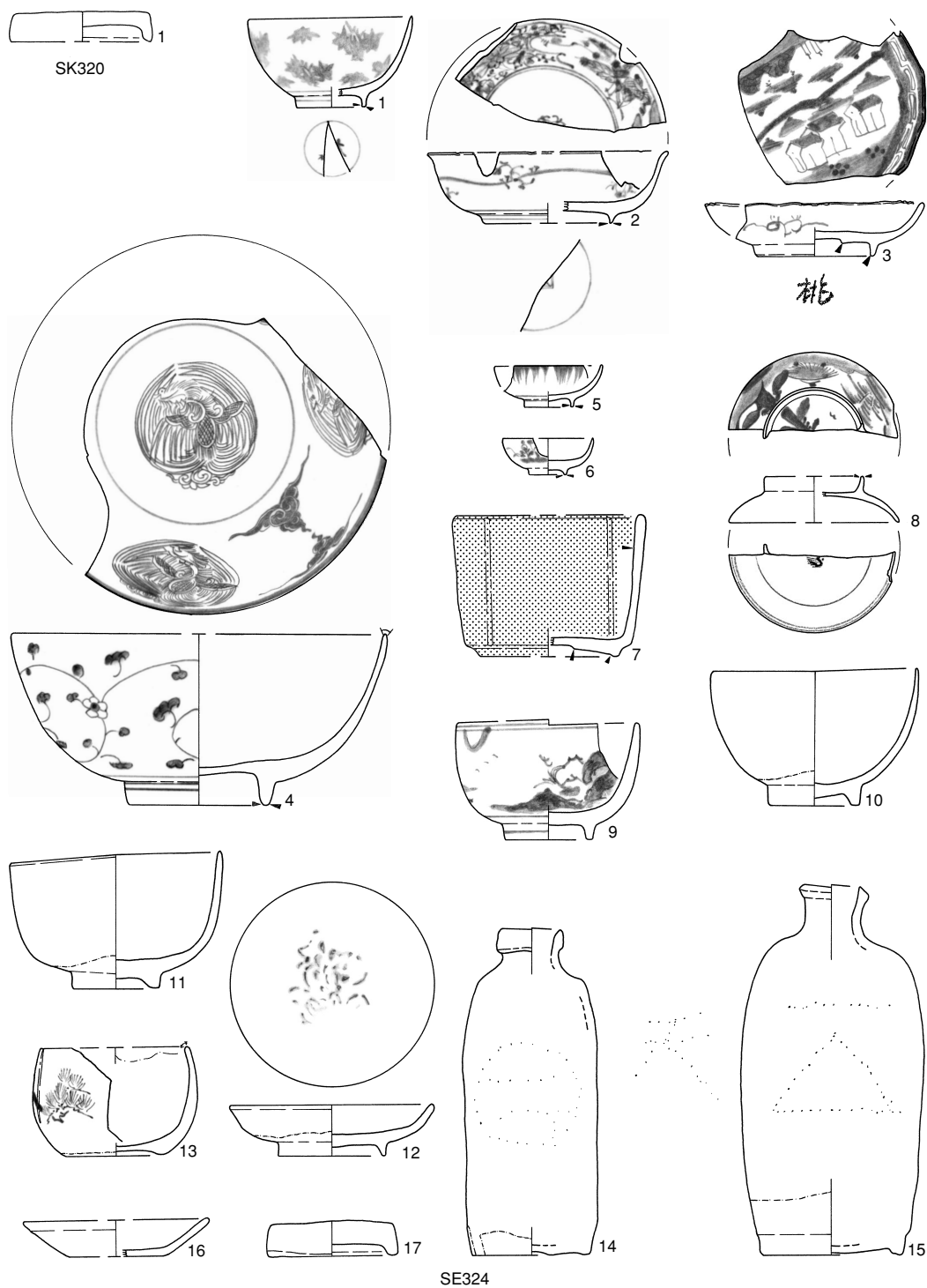


SU313(1)

IV-90 図 SU291(2)・SU300・SK306・SU313(1) 出土遺物



IV-91 図 SU313 (2) 出土遺物



IV-92 図 SK320・SE324出土遺物

き上げあるいは輪積みで作られている痕跡が認められる。表面はナデで、いわゆる銀彩が認められる。101の頸部、103の底部脇は沈線の区画の中に棒状工具による刺突文が密に施されている。101の口縁部から内面頸部までは回転を利用したナデ、以下及び103の内面は指頭痕が認められる。101の胴部上位には孔が穿たれている。103の遺存部上辺は外反するような器形を呈している。102は土師質の丸火鉢でDZ-31-aに分類される。口唇部内側の一部に敲打痕、ススの付着が認められる。104～106は土師質ほうろくで、DZ-47-aに分類される。胎土の色調は104、106が褐色、105が淡い褐色を呈している。104内面の一部、106の外面の一部にはススが付着している。105、106は内耳を有している。107はかわらけでDZ-2-bに分類される。108～114は塩壺である。108、109はかかりのある蓋でDZ-00-cに分類される。内面には細かい布目痕が観察される。110～114は板作りである。110～113は「泉湊伊織」の刻印が認められDZ-51-g、114は「堺本湊吉右衛門」の刻印が認められDZ-51-aeに分類される。111、112の蓋受部は二次的に打ち欠かれ、フラットに整形されている。

SU291 (IV-89・90 図)

1～3は肥前系染付磁器皿で、1がJB-2-f、2はJB-2-g、3はJB-2-eに分類される。3の文様はコンニャク印判で描かれている。4は青磁の鉢で、JB-5-aに分類される。見込み文様は片へら彫りで施文されている。5は染付鉢で、JB-5-bに分類される。高台裏には二重角棹内渦福が描かれている。

SU300 (IV-90 図)

1は染付小坏でJB-6-b、2は染付碗で、JB-1-cに分類される。文様はややラフに描かれており、底部には1が「大明」、2が「天明成化年製」銘が描かれている。3は染付皿で、JB-2-hに分類される。底部は蛇ノ目高台である。4はかわらけでDZ-2-bに分類される。5は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。内面は布目痕が認められる。

SK306 (IV-90 図)

1は染付蓋物でJB-13-bに分類される。文様や高台の調整から17世紀後半の製品であろうと推定される。2は陶胎染付の碗でTB-1-fに分類される。

SU313 (IV-90・91 図)

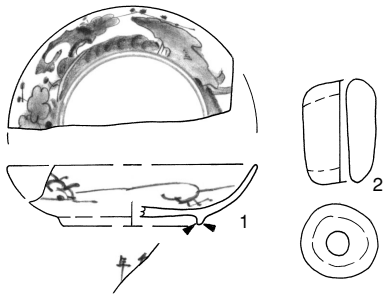
本遺構出土遺物群はいずれも二次的な火熱を受けており、火災による一括廃棄であろうと推定される。陶磁器の様相から元禄16(1703)年の火災の蓋然性が高いと推定される。

1～6は染付磁器である。1は内側に主文様の付く碗で、JB-1-tに分類される。文様は丁寧に描かれている。2～4は大皿で、JB-3-bに分類される。2の底部裏には5ヶ所、3は4ヶ所、4は5ヶ所のハリ支えが確認できる。5、6は同一個体である。八面に作り出している型作りの蓋物で、5はJB-00-f、6はJB-13に分類される。器面は紗綾形と稲束、花文を交互に型で文様を浮文させ、濃みを掛けている。7は青磁香炉・火入れで、JB-9-bに分類される。8は摺絵の鬘水入れで、TC-25に分類される。文様は鉄絵の具で描かれている。9は尾呂風の香炉・火入れで、TC-9-bに分類されている。内面は灰釉が、口唇部には鉄釉が施されている。内面中央には3ヶ所の目跡が認められる。10は小型の鉄釉鍋で、TZ-33-aに分類される。

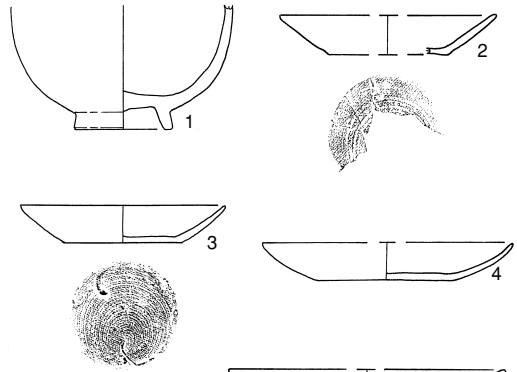
SK320 (IV-92 図)

1は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。内面には布目痕が確認される。

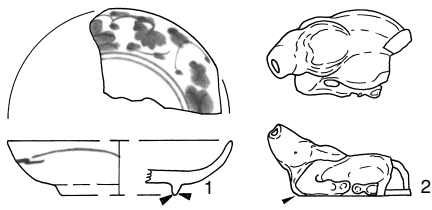
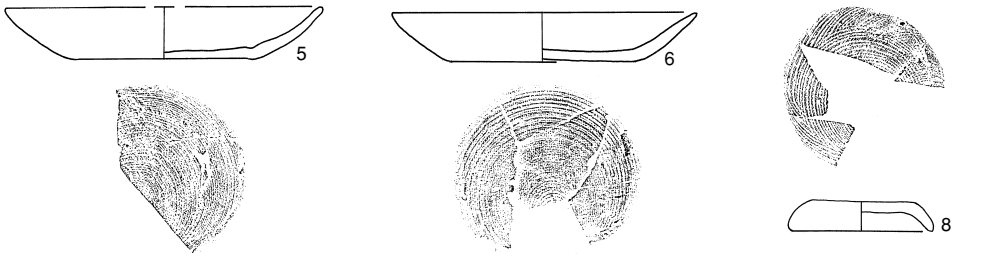
第IV章 出土した遺物



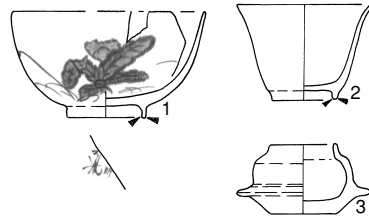
SK341



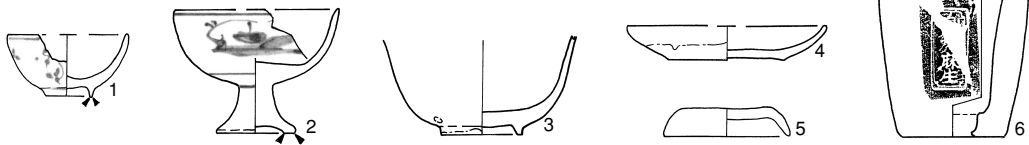
SK361



SK364



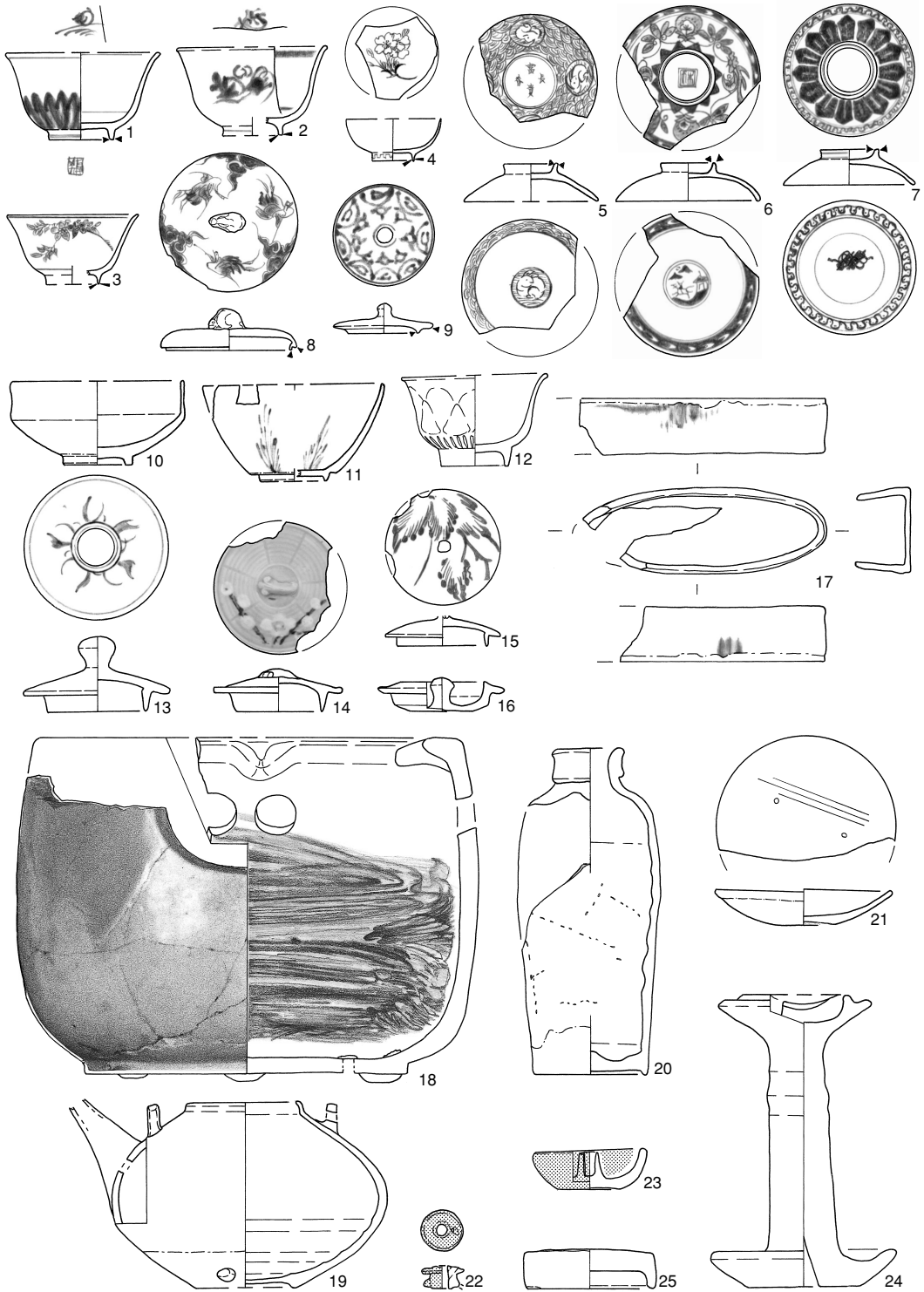
SU368



SU370

IV-93 図 SK341・SK361・SK364・SU368・SU370 出土遺物

第IV章 出土した遺物



IV-94 図 SK380 出土遺物

SE324 (IV-92 図)

1～8は磁器で、7の青磁以外は染付である。1はJB-1-uに分類できる碗で、器面はコンニャク印判によって施文されている。2はJB-2-fに分類される皿で、底部には二重角枠内渦福の銘が確認できる。見込みは手描き五弁花。3は蛇ノ目凹形高台の皿で、JB-2-iに分類される。底部裏中央には「桃」の釘彫りが確認でき、類例から「桃膳」を略したものと推定できる。4はJB-5-bに分類される鉢で、見込み文様は細線書きのいわゆる素描で施文されている。5、6は坏で、JB-6-aに分類される。7は蛇ノ目凹形高台の香炉・火入れで、JB-9-bに分類される。露胎部には鉄漿が塗られている。体部は棒状工具によってへこみが付けられ、全体に花状に成形される。8は広東碗の蓋で、JB-00-bに分類される。

9～15は陶器である。9は陶胎染付碗で、TB-1-fに分類される。10、11は灰釉碗で、TC-1-cに分類される。ともに底部は無釉である。12は灰釉鉄絵皿で、TC-2-eに分類される。見込みの文様は摺絵で描かれている。13は銹絵の香炉・火入れで、TD-9-aに分類される。口唇部には敲打痕が認められる。14、15はいわゆる貧乏徳利で、14はTC-10-c、15はTC-10-dに分類される。ともに列点状の釘書きが確認できる。

16はかわらけで、DZ-2-bに分類される。口唇部の一部には灯心痕が確認される。17は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。内面には布目の痕跡が認められる。

SK341 (IV-93 図)

1は肥前系染付磁器皿で、JB-2-eに分類される。2は円筒状の土製品である。器種不明。

SK361 (IV-93 図)

1は鉄釉の碗でTB-1-aに分類される。2～7はかわらけで、2、3、5～7はDZ-2-b、4はDZ-2-dに分類される。2、5、6の口唇部には灯心痕が確認できる。4は見込みが黒い、いわゆるうちぐもりの製品である。8は塩壺の蓋で、DZ-00-aに分類される。

SK364 (IV-93 図)

1は肥前系磁器皿で、JB-2-gに分類される。器面は二次的な火熱を受けている。2は牛をかたどった水滴で、JB-19に分類される。

SU368 (IV-93 図)

1、2は肥前系磁器である。1は染付碗でJB-1-u、2は白磁坏でJB-6-bに分類される。3は釜形土製品でDZ-5-cに分類される。4は塩壺でDZ-51-iに分類される。

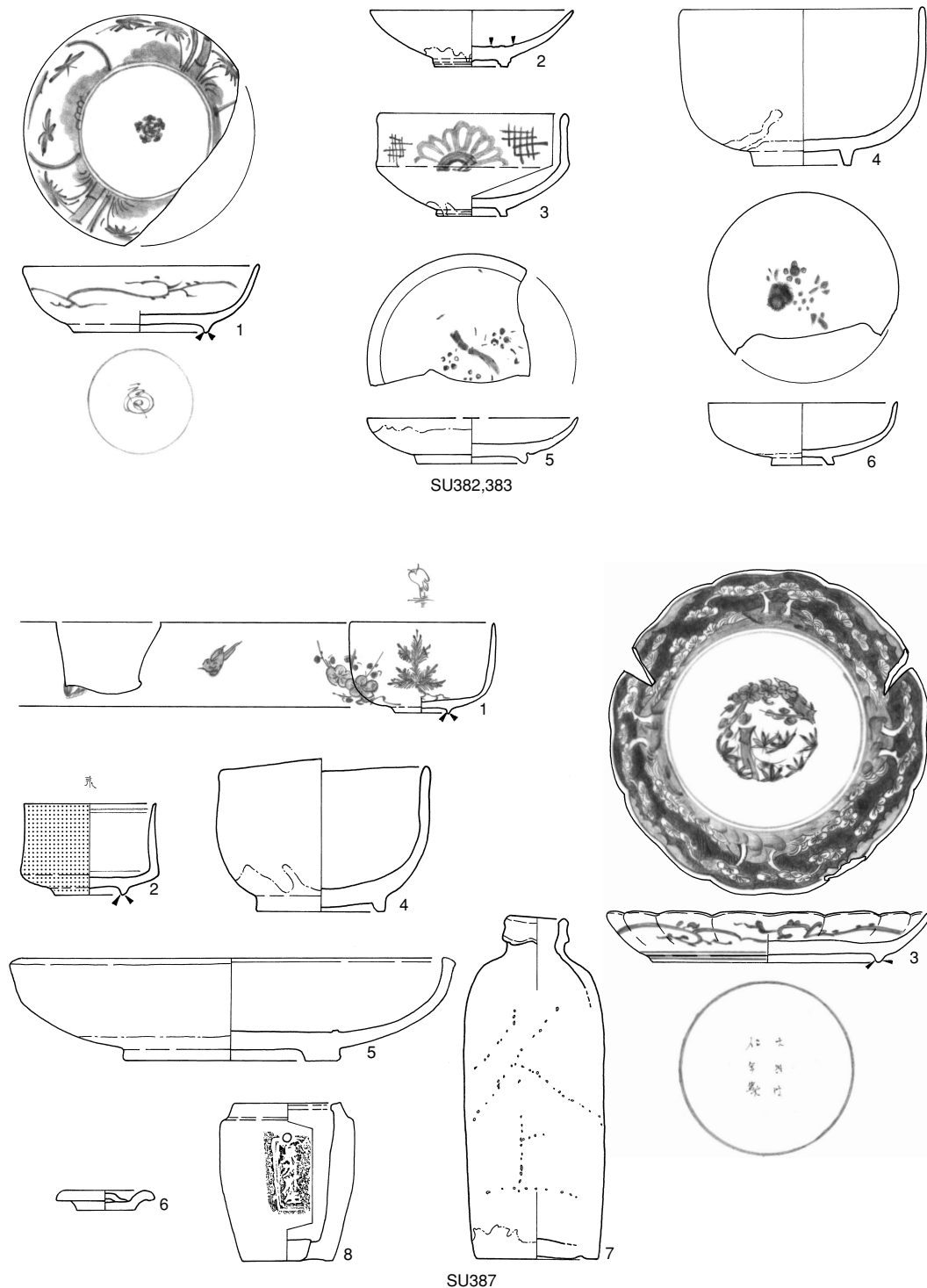
SU370 (IV-93 図)

1、2は肥前系染付磁器で、1は坏でJB-6-aに分類される。内面には鉄分が付着している。2は仏飯器でJB-8-bに分類される。3は灰釉碗でTD-1-cに分類される。底部は大きな亀裂が入っている。4は灰釉皿で、TC-2-pに分類される。見込みにはピン痕が認められる。底部は回転ヘラケズリ調整されている。5は塩壺の蓋でDZ-00-aに分類されている。6は板作りの塩壺でDZ-51-iに分類される。

SK380 (IV-94 図)

1、2、5～9は染付、3、4は色絵磁器である。1～3は瀬戸・美濃系端反碗でJC-1-dである。4はいわゆる江戸絵付の細密な文様が描かれた坏で、JC-6-dに分類される。5～7は碗の蓋で、5

第IV章 出土した遺物

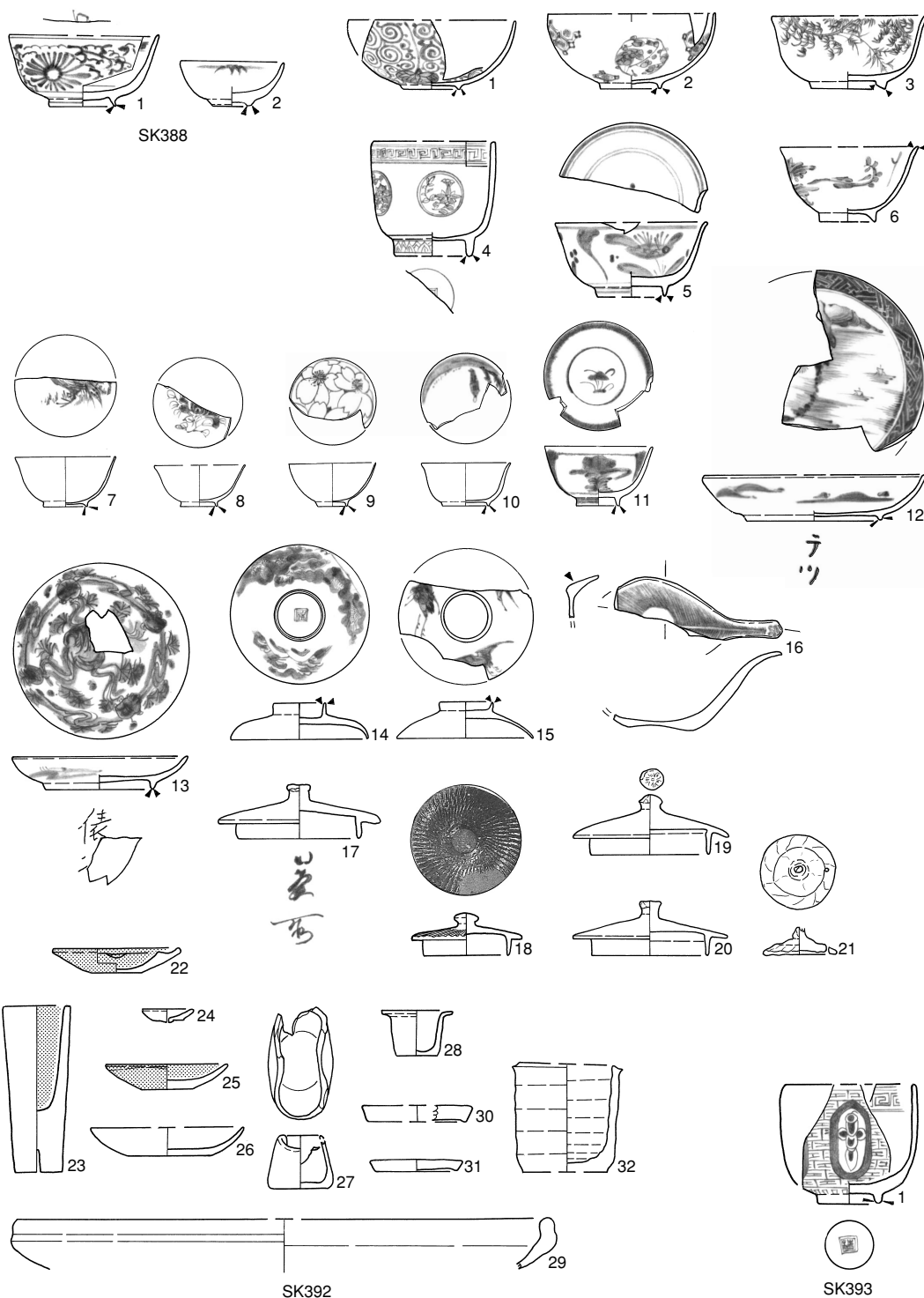


SU382,383

SU387

IV-95 図 SU382, 383 · SU387 出土遺物

第IV章 出土した遺物



IV-96 図 SK388・SK392・SK393 出土遺物

はJB-00-c、6、7はJB-00-aに分類される。8、9は蓋物の蓋でJB-00-fに分類される。

10～21は陶器である。10は灰釉碗でTD-1-iである。畳付外周は面取りされている。11は小杉茶碗でTD-1-dに分類される。若松文は銹絵染付で描かれている。畳付け外周は面取りされている。12は灰釉碗でTD-1に分類される。13は三彩土瓶の蓋で、TZ-00-cに分類される。14は格子状のシノギが入る蓋物の蓋で、TD-00-hに分類される。15は土瓶の蓋で、TZ-00に分類される。文様は上絵で描かれているが、赤の一部を除き顔料のほとんどが剥落している。16は鉄釉土瓶の落とし蓋で、TZ-00-eに分類される。17は銹絵の鬘水入れでTD-25に分類される。文様は焼成時による過火度のため流れて、識別ができない。18は不透明な白色の釉に緑色の釉を流し掛けた風炉で、TC-31-bに分類される。内面及び底部は鉄釉の化粧掛け。底部にはボタン状の足の内側に小さい孔が穿たれている。19はいわゆる青土瓶で、TZ-34-aに分類されている。注口部は3ヶ所の孔が穿たれている。20は二合半の灰釉徳利で、TC-10-cに分類される。判読できないが、列点状の釘書きが確認できる。21は灰釉の皿で、TD-2-aに分類される。口唇部には灯心の痕跡が付着している。見込みには3本の平行な沈線と2ヶ所のピン痕が認められる。

22～24は土器である。22はソロバン形のひょうそくの蓋で、DZ-00-iに分類される。透明釉が全体に掛けられている。23はひょうそくで、DZ-44-bに分類される。灯心立て上部には焼けた痕跡が確認される。24は土師質の脚付油受け皿で、DZ-40-cに分類される。25は板作りの塩壺の蓋でDZ-00-cに分類される。内面には布目痕が認められる。

SK381 (IV-101 図)

1は肥前系染付磁器皿でJB-2-oに分類される。胎土はやや灰がかり、釉の表面には細かい貫入が認められる。2は瀬戸・美濃系白磁型皿で、JC-2-eに分類される。全て型で作られている。高台は隅切りの方形を呈している。見込みは陽刻で波瀾文が浮文されている。3は瀬戸・美濃系染付磁器端反碗の蓋である。JC-00-bに分類される。主文様の花文は毛彫りが施された後に葉を、濃い花を薄い濃みで描き分けている。摘み内には判読できないが角銘が認められる。4は肥前系染付磁器蓋物の蓋で、JB-00-fに分類される。橋状の摘みが付く。内面には白色の付着物が確認される。5、6は土瓶の蓋で、5はTD-00、6はTZ-00-iに分類される。5の文様は白土・緑釉・黄釉で風景が描かれている。6の胎土は堅緻な暗茶褐色を呈し、器面にはイチンで簡略な文様が施されている。7、8は瀬戸・美濃系灰釉二合半徳利で、7がTC-10-a、8がTC-10-cに分類される。7の胴部には「久〇」の比較的密な列点状の釘書きが認められる。底部裏には輪状の溶着痕と、判読はできないが墨書が認められる。8の胴部には「〇」の中に「玉」が列点状に釘書きが施されている。また、底部脇と裏には墨書が認められ、脇は判読できないが、裏には胴部と同じ「〇」の中に「玉」が書かれている。9が肥前系染付磁器段重でJB-13-cに分類される。呉須は比較的薄く発色している。10はロクロ成形の塩壺蓋で、DZ-00-dに分類される。胎土はやや粗く、色調は赤褐色を呈する。

SU382, 383 (IV-95 図)

1は肥前系染付磁器皿で、JB-2-gに分類される。見込み中央の五弁花はコンニャク印判である。2は青緑釉蛇ノ目釉剥ぎの皿で、TB-2-aに分類される。畳付、釉剥ぎ部に砂目積みの痕跡が認められる。3はTD-1-iである。鉄と白土で文様が描かれている。高台外周は面取りされている。見込みには3ヶ所のピン痕が認められる。4は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。底部は無釉であ

る。5は灰釉鉄絵皿で、TC-2-eに分類される。文様は摺絵で描かれている。6は平碗で、TC-1-nに分類される。見込みの文様は呉須と鉄で描かれている。

SU387 (IV-95 図)

1は染付小丸碗で、JB-1-jに分類される。2は青磁染付筒形碗で、JB-1-lに分類される。3は染付輪花皿で、JB-2-eに分類される。4は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。底部は無釉である。5は灰釉皿で、TC-2-fに分類される。見込みに4ヶ所のトチの痕跡が認められる。6は灰釉壺の蓋で、TC-00-bに分類される。7はいわゆる貧乏徳利で、TC-10-cに分類される。器面には「久上」の列点状の釘書きが彫られている。ヒビもない完形である。8は板作りの塩壺で、DZ-51-iに分類される。刻印の上端部には径4mm程度の孔が穿たれている。器面は剥落が著しい。

SK388 (IV-96 図)

1、2は染付磁器で、1はJC-1-dに分類される。口径に比して器高が低く、幕末の製品であろうと推定できる。2は坏で、JB-6-aに分類される。

SK392 (IV-96 図)

本遺構からは多くの遺物が確認されている。遺物群の年代は、JC群(瀬戸・美濃系磁器)が出土していることからⅧ期に比定されるが、JB-1-o(肥前系磁器湯呑碗)、JC-1-e(瀬戸・美濃系磁器湯呑碗)、JC-2-e、f(ともに瀬戸・美濃系磁器型皿)の出土状況から東大編年Ⅷc期に比定できる。

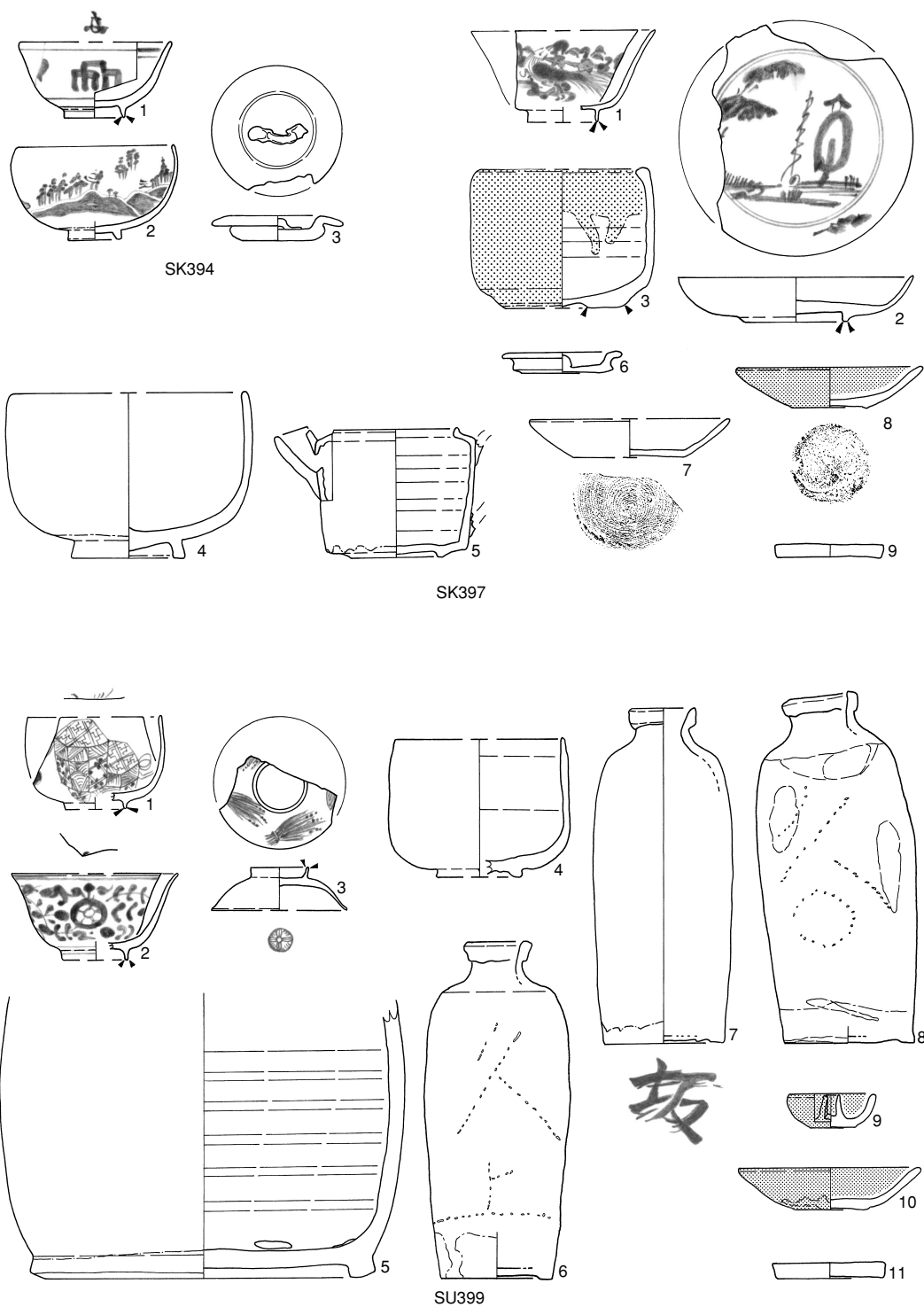
1～16は磁器で、6～9が色絵である他は染付である。1、2は薄手半球碗でJB-1-fに分類される。3はJB-1-nで、暈付を幅広に成形している。4は湯呑碗で、JB-1-oに分類される。文様は素描で施されている。5は端反碗で、JC-1-dに分類される。6は福建省徳化窯の色絵碗で、JA3-1に分類される。型作り成形で、口唇部は釉剥ぎされている。文様は呉須、青、赤で施されている。7～10は薄手の坏である。9のみJC-6-d、他はJC-6-cに分類される。7はいわゆる江戸絵付で、白玉で施文している。8、9は表面の顔料の剥落が著しいが、赤、呉須などで上絵付されている。10は焼継ぎの痕跡が確認できる。11はJC-6-bに分類される。12、13は染付皿で、JB-2-eに分類される。12には「テツ」、13には「俵次」の釘書きが確認できる。「俵次」は本郷構内の他地点でも確認されている。14、15は染付碗の蓋で、14がJC-00-i、15がJC-00-cに分類される。呉須は鮮青色に発色されている。16は蓮華で、JC-20に分類される。匙部の裏面には欠損して判読できないが、墨書が確認できる。

17～21は陶器である。17～20は土瓶の蓋で、17はTZ-00-a、18はTZ-00-eに分類される。19、20は青土瓶の蓋で、TZ-00-aに分類される。21は急須の蓋で、TZ-00-sに分類される。

22～32は土器である。22は鉛釉の油受け皿で、DZ-40-bに分類される。23は筒形の燭台で、DZ-52-aに分類される。内面には鉛釉が施されている。24はDZ-52-bに分類される。底部中央が穿孔されている。25～27はかわらけで、25はDZ-2-h、26はDZ-2-d、27はDZ-2-eに分類される。28は器種不明の土製品で、DZに分類される。29はほうろくでDZ-47-aに分類される。口縁部の立ち上がりが低く、19世紀の製品であると推定できる。30、31は塩壺の蓋で、DZ-00-dに分類される。32はロクロ成形の塩壺で、DZ-51-wに分類される。

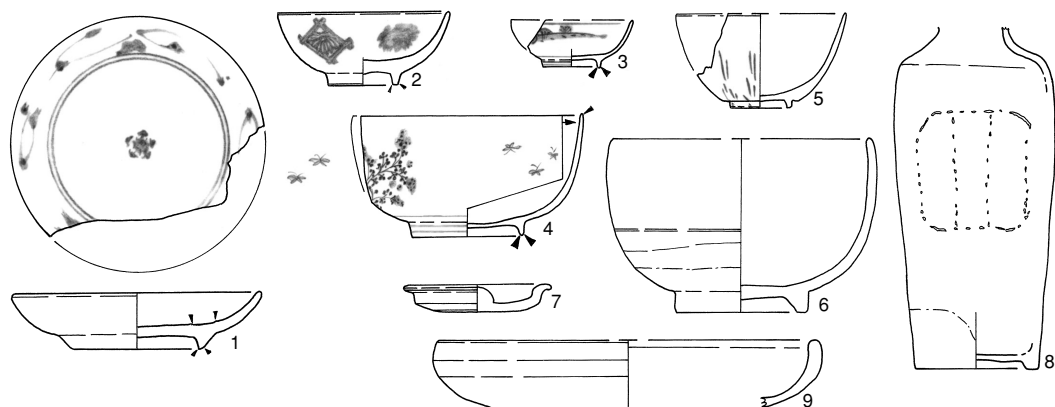
SK393 (IV-96 図)

1は肥前系染付磁器湯呑碗で、JB-1-oに分類される。

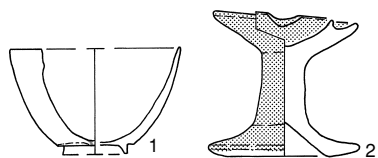


IV-97 図 SK394・SK397・SU399 出土遺物

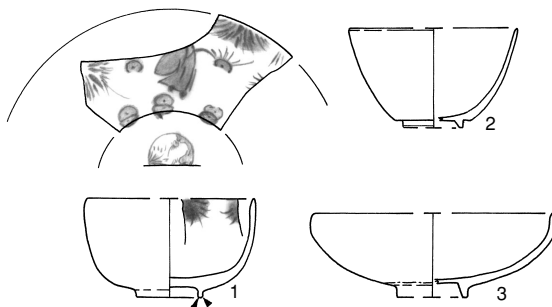
第IV章 出土した遺物



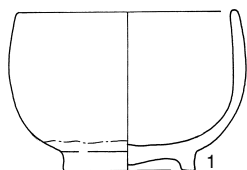
SK402



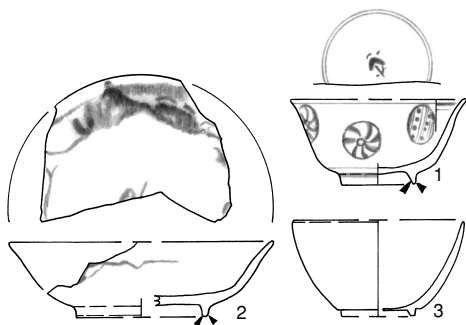
SK406



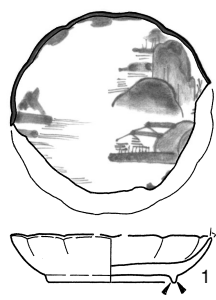
SK411



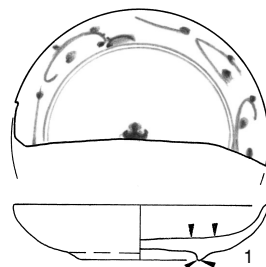
SK413



SK415

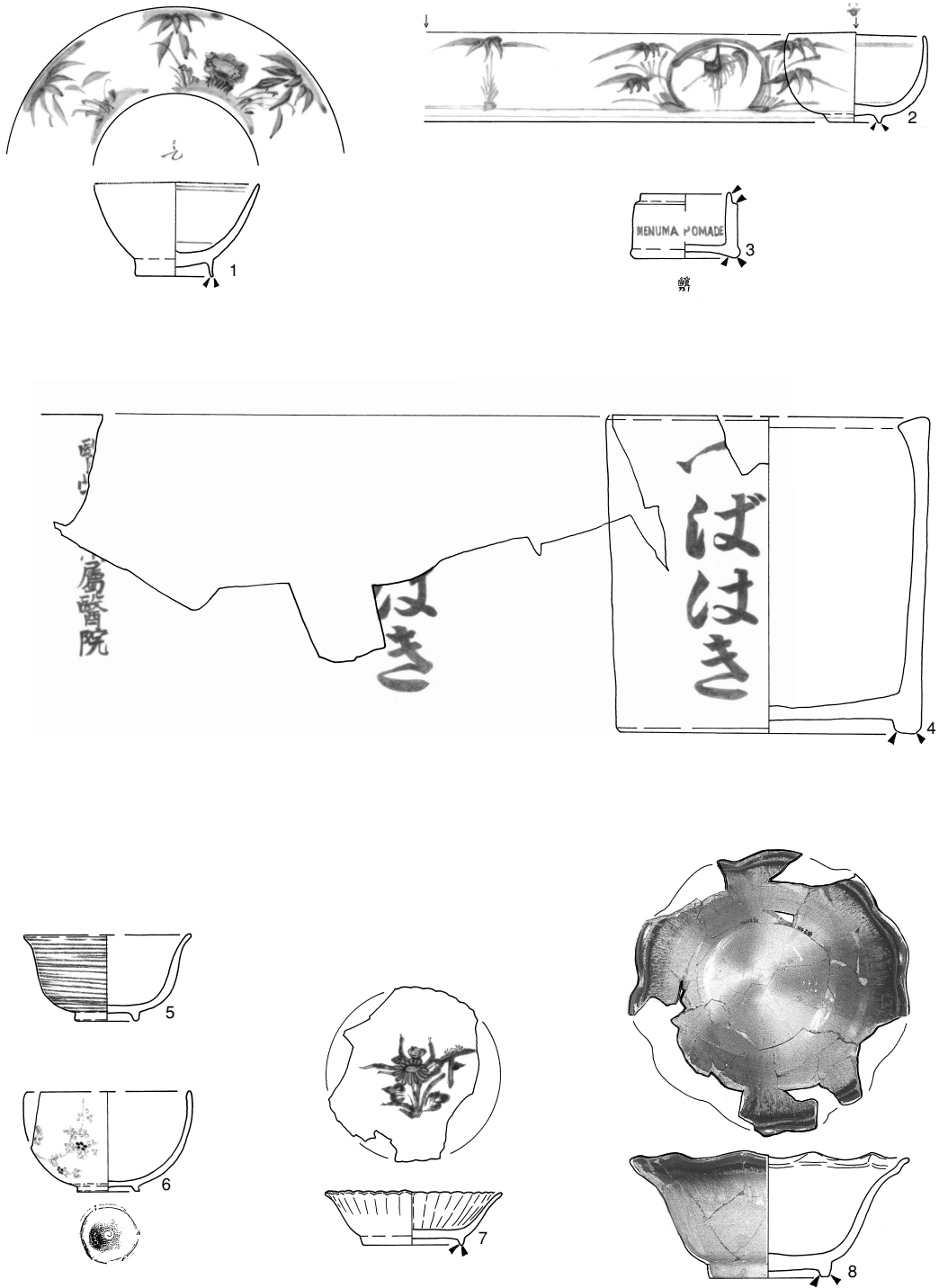


SU419

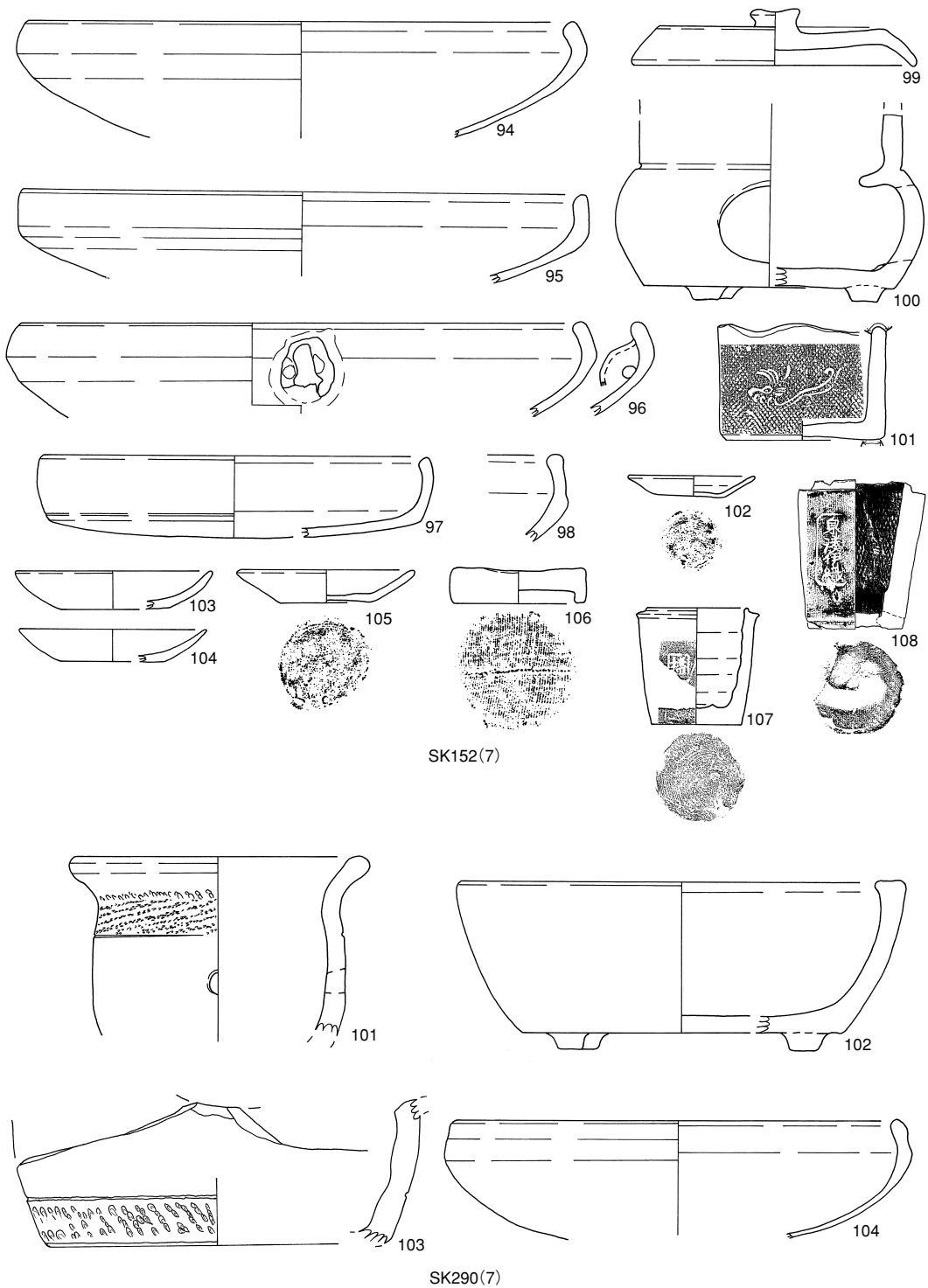


SU420

IV-98図 SK402・SK406・SK411・SK413・SK415・SU419・SU420出土遺物

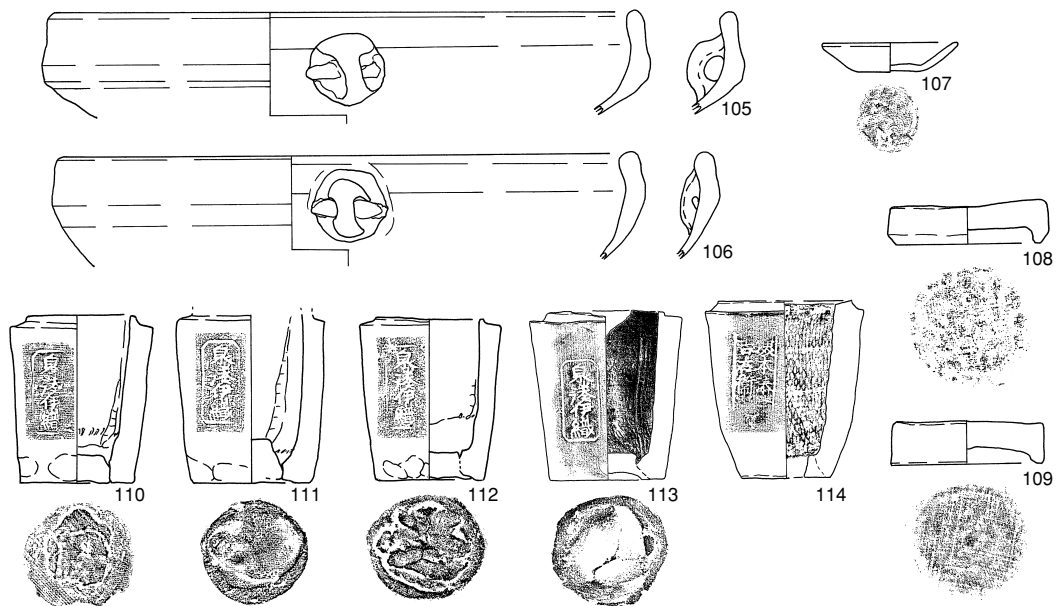


IV-99図 遺構外出土遺物

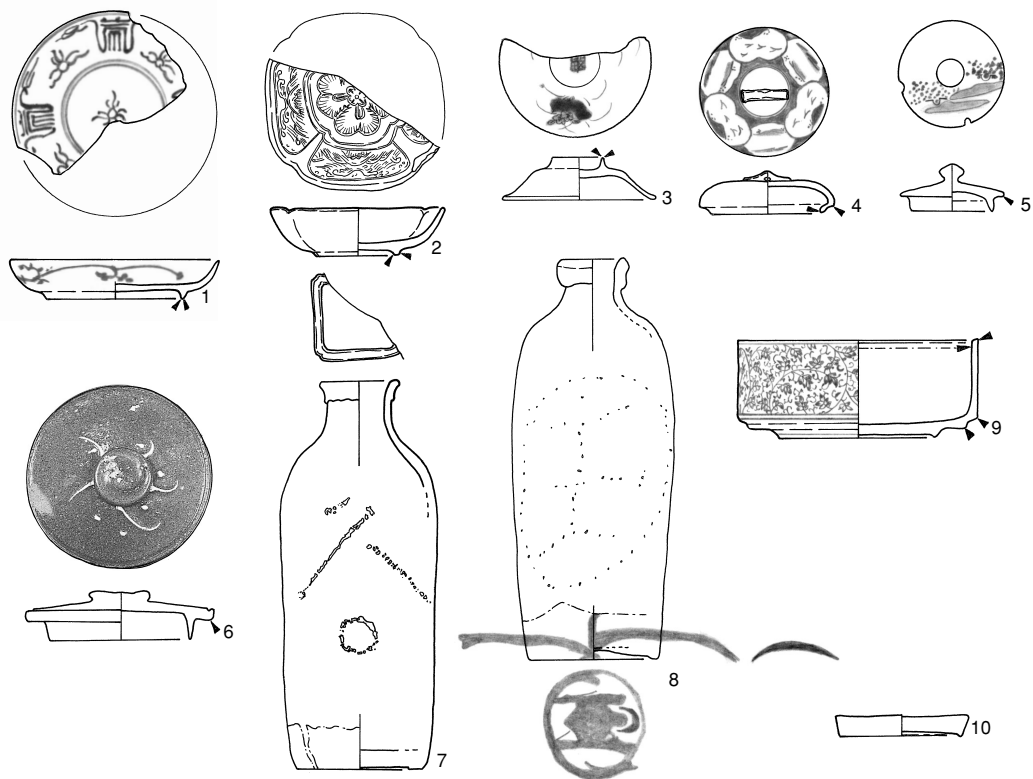


IV-100図 SK152(7)・SK290(7)出土遺物(追補)

第IV章 出土した遺物

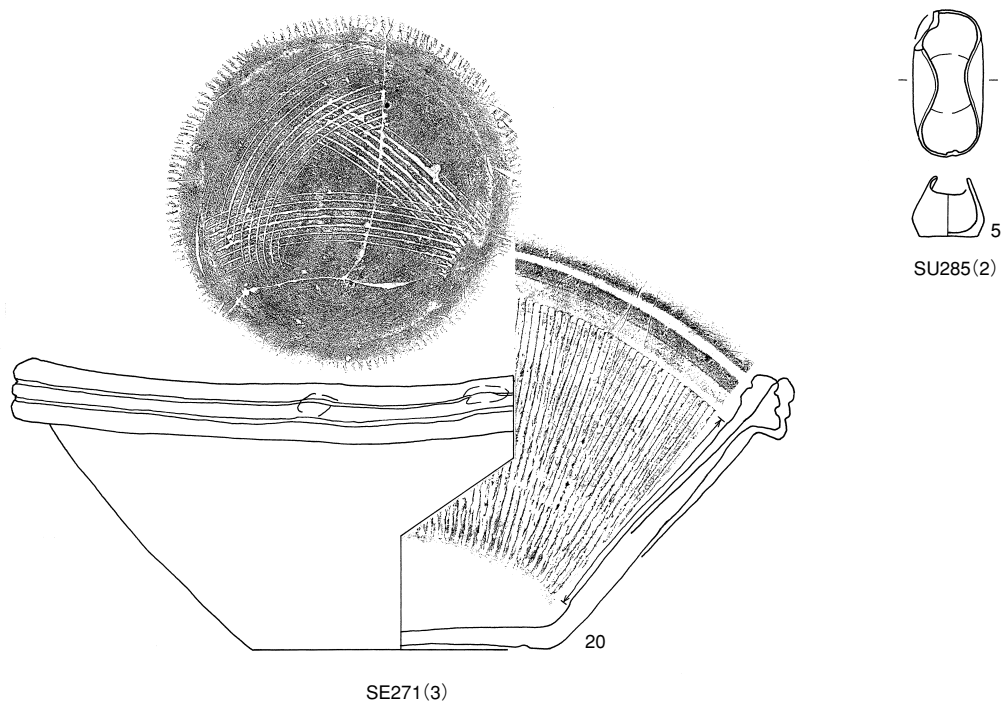


SK290(8)



SK381

IV-101 図 SK290(8)・SK381 出土遺物(追補)



IV-102 図 SE271 (3) ・ SU285 (2) 出土遺物 (追補)

SK394 (IV-97 図)

1は染付端反碗で、JC-1-dに分類される。口径に対して器高が低く、生産は幕末に近い年代が想定される。2は色絵碗で、TD-1-bに分類される。色絵具のほとんどが剥落している。3は灰釉壺の蓋で、TC-00-bに分類される。橋状の取っ手が付く。

SK397 (IV-97 図)

1は染付端反碗で、JC-1-dに分類される。高台の作り、端反の状況から新製物生産初期の製品であろうと推定できる。2はいわゆる初期伊万里の染付皿で、JB-2-aに分類される。3は青磁の香炉・火入れで、JB-9に分類される。口唇部に敲打痕はみられない。4は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。底部は無釉である。5は柿釉「汁次」で、TC-27-bに分類される。6は柿釉「汁次」の蓋で、TC-00-cに分類される。5とは異なる個体である。7はかわらけで、DZ-2-aに分類される。8は透明釉が施された土師皿で、DZ-2-hに分類される。口唇部には灯心痕が確認できる。9はロクロ成形の塩壺の蓋で、DZ-00-dに分類される。

SU399 (IV-97 図)

1～3は染付磁器で、1はJB-1-j、2はJC-1-d、3はJB-00-cに分類される。4は赤楽風の軟質施釉陶器で、TD-1-1に分類される。表面の釉は銀化している。5は柿釉甕でTC-15-bに分類される。二次的な火熱を受け、釉がやや黒ずんでいる。内面底にはトチの痕跡が5ヶ所確認できる。6～8はいわゆる貧乏徳利で、7、8がTC-10-c、6がTC-10-aに分類される。6には「久上」、8には「久〇」の列点状の釘書きが、7には「坂」の墨書が認められる。9は透明釉が施されたひょうそくで、DZ-44-bに分類される。灯心立て上部には灯明の痕跡が認められる。10は透明釉が施された皿で、DZ-2-hに分類される。11はロクロ成形の塩壺の蓋で、DZ-00-dに分類される。

SK402 (IV-98 図)

1～4は肥前系染付磁器である。1は蛇ノ目釉剥ぎ皿で、JB-2-m、2は小型碗でJB-1-g、3は坏でJB-6-a、4は丸碗形の蓋物でJB-13-aに分類される。2の文様はコンニャク印判で描かれている。5は小杉茶碗で、TD-1-dに分類される。文様はかなり単純化されており、顔料も鉄のみで描かれている。6は灰釉碗でTC-1-cに分類される。底部は無釉である。7は柿釉「汁次」の蓋で、TC-00-cに分類される。8は灰釉徳利で、TC-10-cに分類される。9は土師質のほうろくで、DZ-47-aに分類される。

SK406 (IV-98 図)

1は杉形の灰釉鉄絵碗で、TD-1-dに分類される。鉄絵で文様が施されている。2は透明釉が施された油受け皿で、DZ-40-aに分類される。

SK411 (IV-98 図)

1は瀬戸・美濃系染付磁器碗で、JC-1に分類される。肥前の小丸碗を写した製品であろうと推定できる。2は杉形の碗で、TD-1-dに分類される。3は灰釉の平碗で、TD-1-hに分類される。釉はやや白濁している。

SK413 (IV-98 図)

1は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。底部は無釉である。

SK415 (IV-98 図)

1は瀬戸・美濃系染付磁器端反碗で、JC-1-dに分類される。2は太白手皿で、TC-2-hに分類される。焼成温度の上がりすぎであろうか、呉須は流れている。3は小杉茶碗で、TD-1-dに分類される。

SU419 (IV-98 図)

1は染付磁器輪花皿で、JB-2-qに分類される。口唇部には口錆が施されている。

SU420 (IV-98 図)

1は肥前系染付磁器皿で、JB-2-mに分類される。素地、呉須とも灰がかり、ラフに作られている。

遺構外 (IV-99 図)

1は肥前系染付広東碗で、JB-1-mに分類される。2は太白手の小丸碗で、TC-1-abに分類される。3は広口の瓶で、JC-13に分類される。4は筒形の衛生陶器である。欠損している胴部に「つばはき」、「醫學口附屬醫院」と書かれている。5は刷毛目碗で、TC-1-sに分類される。6は色絵碗で、TD-1-bに分類される。文様は赤を除き顔料の剥落が著しい。底部裏には「寶山」の刻印が押されている。7は染付皿で、JB-2-eに分類される。8は変形の鉢で、TC-5に分類される。

第3節 人形・ミニチュア・遊戯具類(IV-103～105図、IV-1～5表)

本地点からは、人形、ミニチュア、遊戯具は160点出土している。人形は人や動物の形状をしたものとし、ミニチュアとして扱ったものは小型の飯事道具や橋や塔などの箱庭道具である。また、泥面子や碁石、碁石形土製品など遊戯や勝負ごとに用いるものを遊戯具とした。

遺構	総点数	人形	ミニチュア 飯事道具	ミニチュア 箱庭道具	芥子面・ 泥面子	土製碁石	碁石	釜形土製品	不明	共伴資料の年代
SU1	9	2			1	6				19c前
SU2	3	1	2							17c末(元禄16火災)
SE10	1	1								17c後
SU11	4	1					3			19c前
SK18	9	2	7							V a期
SU20	8	3	3						2	V a期
SK31	1	1								18c前(享保15or元文3火災)
SU49	2					2				18c前(享保15or元文3火災)
SK50	2					2				19c前～中
SK60	1						1			17c末～18c後
SU61	1						1			18c前
SD62	6		2			4				19c前～中
SU64	1	1								18c前
SB70	1		1							明治9年
SL80	1				1					19c
SK81	3	1	1			1				VII b期
SK98	7					7				19c
SK99	23					23				19c
SU115	1	1								18c前～中
SA120	1					1				19c
SK137	7	3	2	1		1				V b期
SK139	1						1			IV b期
SU143	2	1							1	18c前～中
SK152	5	2	3							VI a期
SK166	4			1		3				VII c期
SK168	5	2	1						2	18c後
SK174	2	1		1						VI a期
SK175	1		1							18c後
SK220	1					1				19c前
SU230	1			1						18c前
SK265・304	1	1								18c末～19c初
SU279	1		1							V a期(享保15or元文3火災)
SU280	1	1								18c中～後
SK290	2			1				1		V b期
SU291	1			1						17c末～18c前
SU300	2	1							1	17c中～18c前
SK301・302	1	1								17c後～18c
SU313	19	1					18			17c末(元禄16火災)
SU368	1							1		17c末(元禄16火災)
SU370	2	2								17c末
SK381	1	1								19c
SK392	2	1				1				VII c期
SU399	1					1				19c前
遺構外	11		2			8	1			
合計	160	32	26	6	2	64	22	2	6	

IV-1表 人形・ミニチュア・遊戯具組成表

SU1 (IV-103 図1、IV-105 図1～6)

人形2点、芥子面1点、碁石形土製品6点が出土している。

1は芥子面の鯛である。鱗やヒレの表現は丁寧で、型離れをよくするための離れ剤の雲母が顕著である。他の1点は京都系と推定される亀乗り童子の小片が出土している。IV-105 図1～6は碁石形土製品で、成形時についた掌紋痕と黒色の彩色痕が認められる。共伴した陶磁器は19世紀前半に位置付けられる。

SU2 (IV-103 図2～3)

人形1点、ミニチュア2点が出土している。

2は備前の播鉢である。播り目8本である。3は大黒様である。型合わせで中実のものである。胎土は灰白色を呈し、京都系の技法である透明釉に緑釉を流し掛けした人形である。二次的に熱を受けたためか一部にスガみられる。他の1点は京都・信楽系の土瓶片が出土している。口縁部の周辺に文様を描いている。共伴している陶磁器は17世紀末に位置付けられる。遺構には焼土が充填しており、元禄16(1703)年の火災による一括廃棄と思われる。

SE10 (IV-103 図4)

人形1点が出土している。

4は京都・信楽系の犬である。手捻りによる成形で、腹部に指頭圧痕がみられる。目と耳、鼻は鉄釉で表現している。また、腹部は無釉で黒色の彩色痕が認められる。共伴遺物は少なく17世紀後半の陶磁器と瓦が出土している。

SU11 (IV-103 図5、105 図7～9)

人形が1点、碁石形土製品が3点出土している。

5は京都・信楽系の布袋である。型合わせで中空のものである。背面首部中央と右肩部に穿孔されている。IV-105 図7～9は、碁石形土製品である。掌紋痕は認められるが、彩色の痕跡はみられなかった。8は他の2点と異なり灰褐色を呈する。共伴している陶磁器は19世紀前半に位置付けられる。

SK18 (IV-103 図6～8)

人形2点、ミニチュア7点が出土している。

6は江戸在地系と思われるロクロ成形の播鉢である。播り目4本で、内外部から底部まで施釉されている。7は大形の西行である。器壁は厚く、底部が開口する特徴を持ったものである。8は恵比寿様である。型合わせで中実のものである。胎土は灰白色を呈し、京都系の技法である透明釉に緑釉を流し掛けしたものである。SU2出土の大黒様と同様である。恵比寿、大黒は二神様として祀られることが多い。他のミニチュアは肥前の白磁の碗類と素焼きの蓋であった。共伴している陶磁器は東大編年V a期(1710～1720年代)。

SU20 (IV-103 図9、10)

人形3点、ミニチュア3点、不明2点が出土している。

9は江戸在地系と思われるロクロ成形の鉢である。内外部から底部まで施釉されている。10は京都・信楽系の鳥である。貫入がみられ、腹部は無釉で羽の先は鉄釉で装飾をしている。他の人形は底部開口型の西行とミニチュアでは肥前産の白磁の碗と内外面が彩色施釉された土製の器物であ

った。共伴している陶磁器は東大編年Ⅴa期(1710～1720年代)。

SK31 (IV-103 図11)

人形1点が出土している。

11は西行である。左足を立て腰をおろしている小形のものである。底部から首部にかけ先端が細くなっている工具で穿孔している。離れ剤の雲母がみられ、丁寧な成形である。共伴している陶磁器は18世紀前葉と推定されるもので、二次的に熱を受けている資料である。享保15年、もしくは元文3年の火災による遺構である。

SU49 (IV-105 図10、11)

基石形土製品が2点出土している。

2点とも掌紋痕と白色の彩色痕がみられる。10は一部欠損している。11は彩色痕、掌紋痕が顕著であった。共伴している陶磁器は18世紀前葉に位置付けられる。

SK50 (IV-105 図12、13)

基石形土製品2点が出土している。

2点とも掌紋痕がみられる。12は一部欠損している。13は白色の彩色痕がみとめられる。共伴している陶磁器は19世紀前～中葉に位置付けられる。

SK60 (IV-105 図36)

基石が1点出土している。黄褐色をしている。他の遺構出土の基石より粗製で石質も異なる。自然石を利用したものか、周縁部に加工痕はみられない。共伴する陶磁器は17世紀末～18世紀後半に位置付けられる。

SU61 (IV-105 図37)

基石が1点出土している。褐色をした石である。白石として使用したのであろうか。周縁部に加工時の擦痕がみられる。共伴する陶磁器は18世紀前葉に位置付けられる。

SD62 (IV-105 図14、15)

ミニチュア2点、基石形土製品が4点出土している。

いずれの4点とも掌紋痕がみられる。14は黒色の彩色痕がみられた。共伴している陶磁器は19世紀前～中葉に位置付けられる。

SL80 (IV-103 図12)

泥面子が1点出土している。

12は「いろは47組」の町火消の「は組」をモチーフとしたものである。表裏の縁部の一部は欠けている。文様の「は」の字は明瞭に表現されている。離れ剤の雲母が認められる。遺構は厠遺構で、共伴資料は朱の瑪瑙が付いた玉簪や笄、襟止め、温石、四文銭であった。錢貨の四文銭は黄みがかった色を呈したもので、明和5(1768)年に鑄造されたものである。簪などから女性の厠と推定される遺構である。19世紀に位置付けられる。

SK81 (IV-103 図13、14、IV-105 図16)

人形1点、ミニチュア1点、基石形土製品1点が出土している。

13は舞妓である。型作りあるが、裾は手捻りで表現し、帯は別作りで貼付けている。右袖に穿孔がみられる。彩色の下地とされた白色の胡粉が認められる。14は京都系と思われる灰白色胎土

の七輪の漏斗部である。漏斗部の裏面は粘土を入れ補強し、7個の空気孔を上部から穿っている。IV-105図16は碁石形土製品で、掌紋痕が顕著で白色の彩色痕が認められる。共伴している陶磁器は東大編年Ⅷb期(1820～1830年代)。

SK98(IV-105図17～23)

碁石形土製品が7点出土している。

7点とも掌紋痕がみられる。21、23は黒色の彩色痕が認められ、23は一部欠けていた。共伴している陶磁器は19世紀に位置付けられる。

SK99(IV-105図24～29)

碁石形土製品が23点出土している。

碁石形土製品が最も多く出土した遺構である。23点いずれも掌紋痕がみられる。24、25は黒色の彩色痕と掌紋痕が顕著であった。28、29は白色の彩色痕が認められる。共伴している陶磁器は19世紀に位置付けられる。

SU115(IV-103図15)

人形が1点出土している。

15は童子座像である。型作りで中空のもので底部に穿孔がみられる。底部の接合部は粗雑である。共伴している陶磁器は18世紀前葉～中葉に位置付けられる。

SA120(IV-105図30)

碁石形土製品が1点出土している。

30は掌紋痕がみられる。共伴している陶磁器は19世紀に位置付けられる。

SK137(IV-103図16、17、IV-104図18、IV-105図31)

人形3点、ミニチュア3点、碁石形土製品1点が出土している。

16は女雛である。型作りで中空で、頭部は差し込み方式である。頭部は欠損しているが差し込んだ部分は残存していた。差し込み部の径は10mmであった。底部の接合部は粗雑である。17は蛙である。型作りであるが足は別作りで貼り付けている。京都系と思われる灰白色の胎土で器壁は厚い。木目が粗い工具での調整痕が認められる。背の斑点は墨で描いている。18は型作りの内外面施釉の箱状のものである。左右側面に櫛目状の文様を施している。内面の調整は粗く指頭圧痕がみられる。共伴の人形は京焼の鳥片、京都系の施釉の飯事道具片と、江戸在地系の瓶子である。IV-105図31は碁石形土製品である。掌紋痕とわずかに黒色の彩色痕がみられる。共伴している陶磁器は東大編年Ⅴb期(1730～1740年代)。

SK139(IV-105図38)

碁石が1点出土している。

38は灰褐色をしている。火を受けているために変色し剥がれたものであろうか。周縁部に加工時の擦痕がみられる。共伴している陶磁器は東大編年Ⅳb期。元禄16(1703)年の火災を受けている。

SK152(IV-104図19～20)

人形2点、ミニチュア3点が出土している。

19は肥前の染付碗である。等間隔で枝葉を描いている。20は手捻りの猿である。播鉢を膝の上

に置き、播り粉木を抱え戯けた表情をしている。手足、播鉢などは別作りで貼付けている。共伴の人形は赤絵の鶏の一部と柚でんぼ片である。共伴している陶磁器は東大編年VI a期(1750～1760年代)。

SK166(IV-104 図21、IV-105 図32、33)

ミニチュアの箱庭道具1点、碁石形土製品3点が出土している。

21は屋根である。大きな屋根で器壁は厚く、中央部は穿孔されている。IV-105 図32、33は碁石形土製品でいずれも掌紋痕と黒色の彩色痕が認められる。共伴している陶磁器は東大編年VIII c期。

SK168(IV-104 図22、23)

人形2点、ミニチュア1点、不明2点が出土している。

22は太鼓の一部である。裏面は指頭圧痕が顕著に認められる。23は鶏である。左側面に大きな穿孔を有するものであるが、欠損しているため一部のみ確認される。共伴している陶磁器は18世紀後半に位置付けられる。

SK174(IV-104 図24)

人形1点、ミニチュアの箱庭道具1点が出土している。

24は型作りの屋根である。京都系と思われる灰白色の胎土で、透明釉に緑釉と鉄釉を流し掛けしている。内面は指頭圧痕が顕著で、ススが認められる。共伴の人形は施釉されたものである。共伴している陶磁器は東大編年VI a期。

SK220(IV-105 図34)

碁石形土製品が1点出土している。

34は掌紋痕がみられる。共伴している陶磁器は19世紀前葉に位置付けられる。

SU279(IV-104 図25)

ミニチュア1点が出土している。

25は型作りの素焼きの蓋である。梅花文が6ヶ所付けられている。歪みがみられやや粗雑に作られている。離れ剤の雲母がみられる。共伴している陶磁器は東大編年V a期(1710～1720年代)。

SK290(IV-104 図26、27)

ミニチュアの箱庭道具1点、釜形土製品1点が出土している。

26は口縁部がすぼまるものである。底部は平底で、回転糸切り痕がみられる。同様のものがSU368から出土している。27は板作りと手捻りを併用した橋である。京都系と思われる灰白色の胎土で、透明釉と緑釉で装飾されたものである。裏面に正方形を重ねた墨書がみられる。共伴している陶磁器は東大編年のV b期(1730～1740年代)。

SU291(IV-104 図28)

ミニチュアの箱庭道具が1点出土している。

28は施釉の塔である。上部は欠損しているが、同一と思われるものが理学部7号館地点の3号井戸から出土している。3号井戸出土の三重塔は高さ83mmで頭頂部は穿孔されていた。遺構は17世紀末～18世紀前葉に位置付けられる。

SU313 (IV-104 図 29、IV-105 図 39～50)

人形1点、碁石18点が出土している。

29は西行である。型作りで、笠は別作りで貼付けている。器壁が厚く底部は広がり開口するものである。二次的に熱を受けているためスがつき一部焼け爛れている。碁石の18点はいずれも火を受けており淡赤褐色に変色している。特にIV-105 図 39～43、45は変色が激しい。また、45は一部が剥落している。44は変色したことがわかる資料で黒色を残し赤褐色になっている。49は黒色を残している。18点の周縁部は加工時の擦痕がみられる。相伴している陶磁器は17世紀末葉に位置付けられる。元禄16年の火災により廃絶されたものと推定できる遺構である。

SU370 (IV-104 図 30)

人形が1点出土している。

30は手捻り成形で施釉された小形の猿である。同様の猿は都内の江戸遺跡でも比較的多く確認されるもので、そのモチーフは多種である。医学部附属病院・中央診療棟地点F34-11からも出土している。相伴している陶磁器は17世紀末に位置付けられる。

SK381 (IV-104 図 31)

人形が1点出土している。

31は型合わせ成形の人形で、胡粉が顕著に認められる。何か円形状のものを口に当てているものである。内面に指頭圧痕がみられる。下半身は欠損している。相伴している陶磁器は19世紀に位置付けられる。

SU399 (IV-105 図 35)

碁石形土製品が1点出土している。

35は掌紋痕がみられる。相伴している陶磁器は19世紀前葉に位置付けられる。

以上人形、ミニチュア、遊戯具について観察を行った。出土したものは、17世紀末～18世紀前葉に位置付けられるものが多く7割近くあった。他の相伴資料と比較して人形、ミニチュアの出土量は少なかった。しかし、碁石形土製品は64点と人形やミニチュアより多く出土している。人形は西行や恵比寿、大黒、猿などが出土しているが、いずれも民衆の呪いにされたものである。特に西行は多く、32点出土している人形の内8点であった。呪いとされた人形は本地点の中でも古いところから出土している。女雛やミニチュアの七輪や播鉢など飯事道具やミニチュアの箱庭道具が出土している。釜形土製品が2点出土しているが用途については未だ明らかでなく、ここで報告しておく。

碁石形土製品64点の観察を行ったが、全てに掌紋痕が認められ、彩色痕の黒色と白色が確認されていることから、碁石を模倣して作られていたことが窺われる。また、掌紋痕が顕著に認められることから、掌に粘土をのせ成形したことがわかる。文京区の諏訪町遺跡(石神 1996)で石神氏は成型方法には手捏ね成形と型による成形があるとしている。型成形の特徴はきれいな円形で断面は凸レンズ状を呈し、布目痕があるものとしている。本地点出土のものに認められる、掌紋痕に関しては認められるが少ないとしている。本地点からは石神氏という型によるものは確認できなかった。

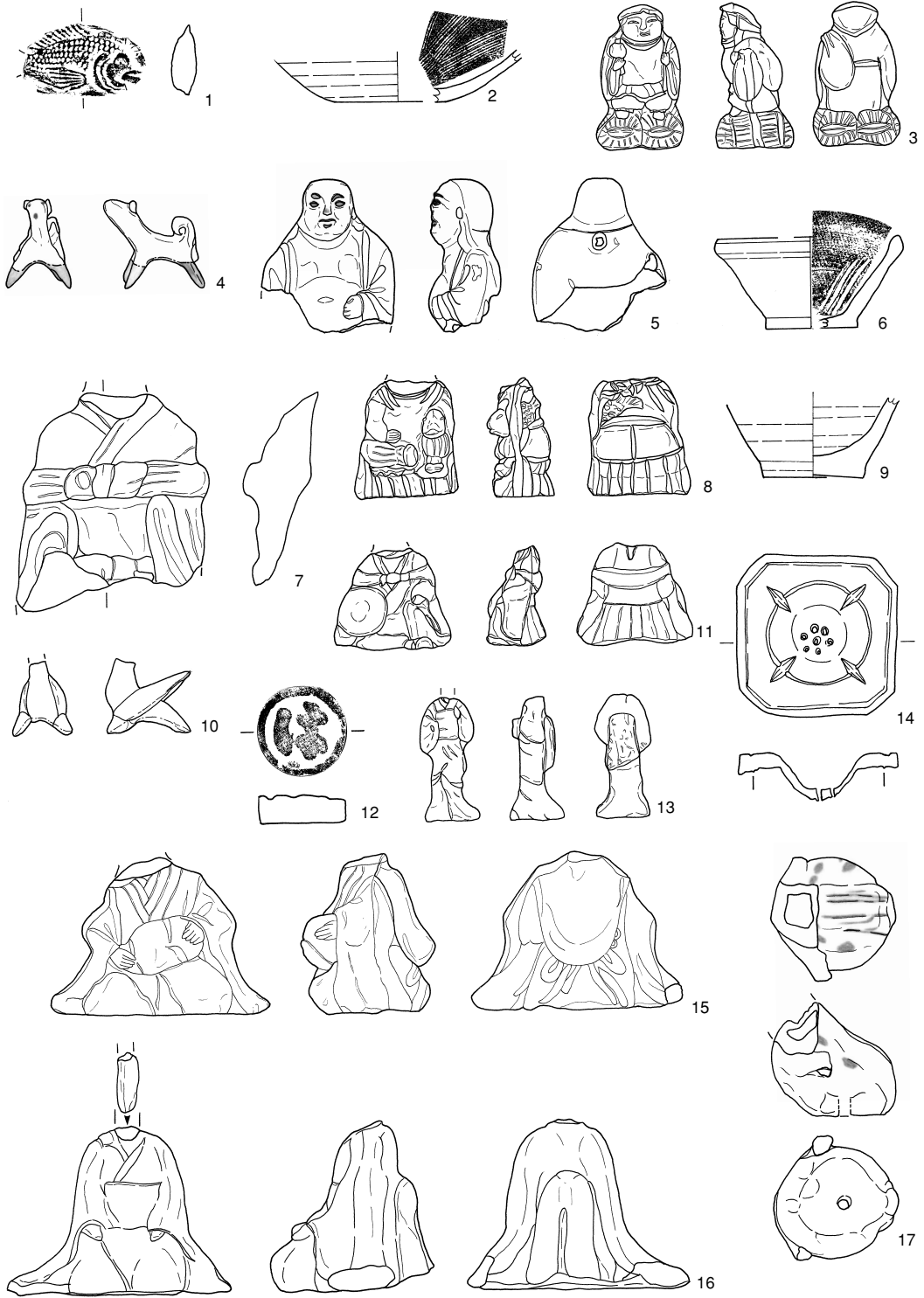
第IV章 出土した遺物

基石 22 点について観察を行ったが、SK60 から出土した 1 点 (IV-105 図 36) 以外は、周縁部に加工時の擦痕が確認された。また、SK139、SU313 出土の基石は火災による火を受け変色や剥落がみられた。

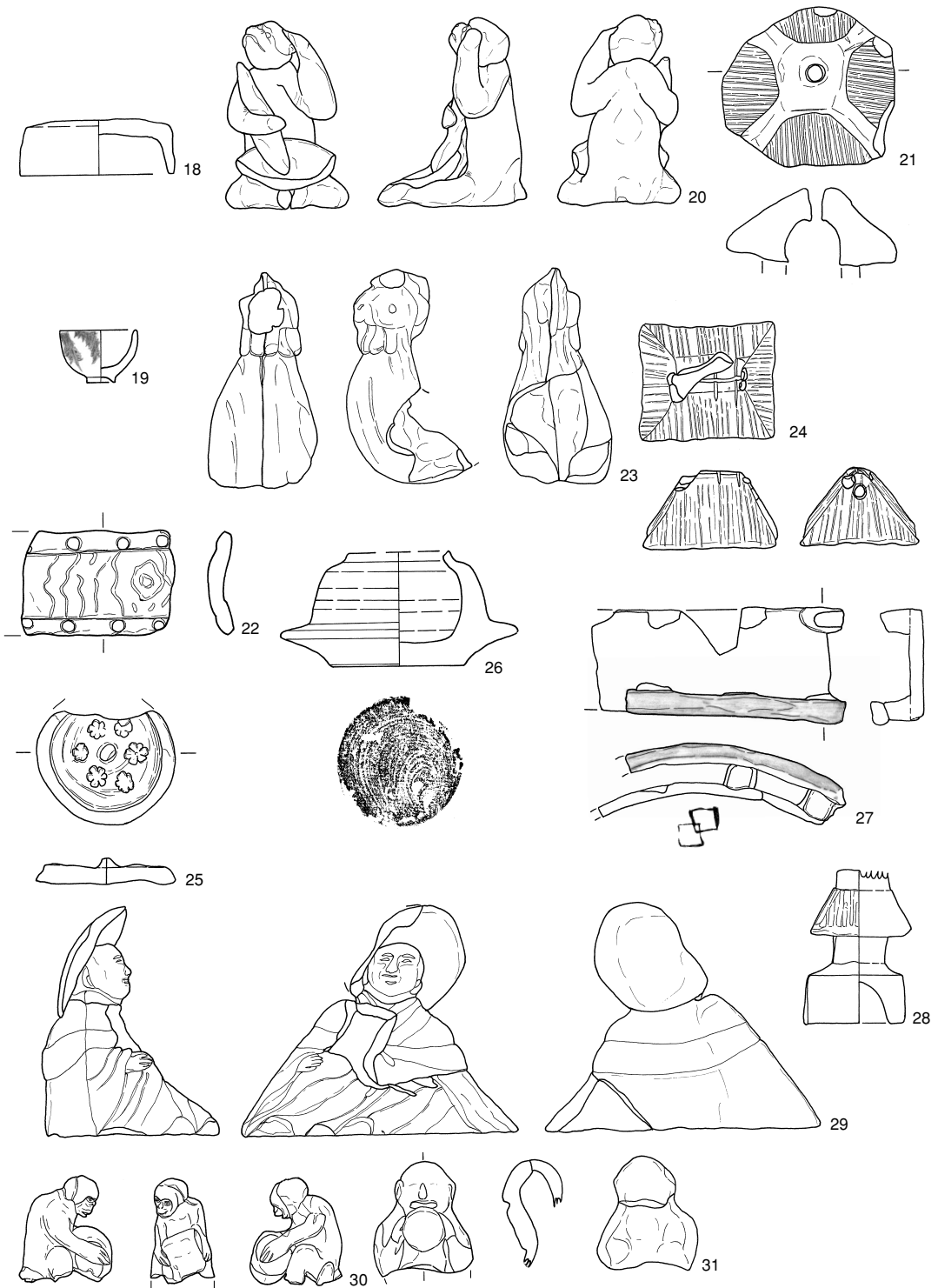
図版 No.	出土遺構	器種	分類			慣用名	胎土色調	成形技法	寸法 (mm)					共伴資料の年代
			胎質・産地	器種	小器種				高・長	幅	奥行・厚	口径	底径	
1	SU1	芥子面	DZ	55		鯛	橙	型打ち	35.0		8.0			19c 前
2	SU2	ミニチュア	TZ	61		播鉢	暗褐色	轆轤						17c 末 (元禄 16 火災)
3	SU2	人形	DZ	60	c	大黒	灰白色	型・中実	43.0	24.0	24.0			17c 末 (元禄 16 火災)
4	SE10	人形	TD	60		犬	灰色	手捻り	26.0	24.0				17c 後
5	SU11	人形	TD	60		布袋	褐色	型・中空	(45.0)					19c 前
6	SK18	ミニチュア	TZ	61		播鉢	橙	轆轤	29.0			(55.0)		V a 期
7	SK18	人形	DZ	60	a	西行	褐色	型・底部開口						V a 期
8	SK18	人形	DZ	60	c	恵比寿	灰白色	型・中実	(35.0)	30.0	22.0			V a 期
9	SU20	ミニチュア	TZ	61		鉢	橙	轆轤	(27.0)				31.0	V a 期
10	SU20	人形	TD	60		鳥	灰色	手捻り	(24.0)	28.0				V a 期
11	SK31	人形	DZ	60	a	西行	橙	型・中実	(28.0)	34.0	18.0			18c 前 (享保 15or 元文 3 火災)
12	SL80	泥面子	DZ	55		「は」	橙	型	8.0	27.0				19c
13	SK81	人形	DZ	60		舞妓象	褐色	型	(18.0)	17.0	16.0			VIII b 期
14	SK81	ミニチュア	DZ	61		七輪	淡黄	型		49.0				VIII b 期
15	SU115	人形	DZ	60		童子座像	橙	型・中空	(47.0)	66.0	41.0			18c 前～中
16	SK137	人形	DZ	60	d	女雛	橙	型・中空	(50.0)	67.0	50.0			V b 期
17	SK137	人形	DZ	60		蛙	灰白色	型・中空	(50.0)	(57.0)	57.0			V b 期
18	SK137	ミニチュア	DZ	61		不明	褐色	型	5.0	47.0				V b 期
19	SK152	ミニチュア	JC	61		碗	白	轆轤	16.0		8.0	24.0	9.0	VI a 期
20	SK152	人形	DZ	60	g	猿	橙	手捻り	56.0	37.0	46.0			VI a 期
21	SK166	ミニチュア	DZ	61		屋根	橙	型	(36.0)	(78.0)				VIII c 期
22	SK168	ミニチュア	DZ	61		太鼓	橙	型	(46.0)	(32.0)				18c 後
23	SK168	人形	DZ	60		鶏	橙	型	(15.9)					18c 後
24	SK174	ミニチュア	DZ	61		屋根	灰白色	型						VI a 期
25	SU279	ミニチュア	DZ	61		蓋	橙	型	8.0	42.0				V a 期 (享保 15or 元文 3 火災)
26	SK290	釜形土製品	DZ	5	c	釜形土製品	橙	轆轤	34.0			(30.0)	40.0	V b 期
27	SK290	ミニチュア	DZ	61		橋	灰白色	型+手捻り	(108.0)	(54.0)				V b 期
28	SU291	ミニチュア	DZ	61		塔	橙	型	(46.0)	31.0				17c 末～18c 前
29	SU313	人形	DZ	60	a	西行	橙	型	105.0	126.0	76.0			17c 末 (元禄 16 火災)
30	SU370	人形	DZ	60	g	猿	橙	型+手捻り	11.0	10.0	28.0			17c 末
31	SK381	人形	DZ	60		童子	橙	型	(34.0)	(30.0)				19c

IV-2 表 人形・ミニチュア・遊戯具観察表

第IV章 出土した遺物

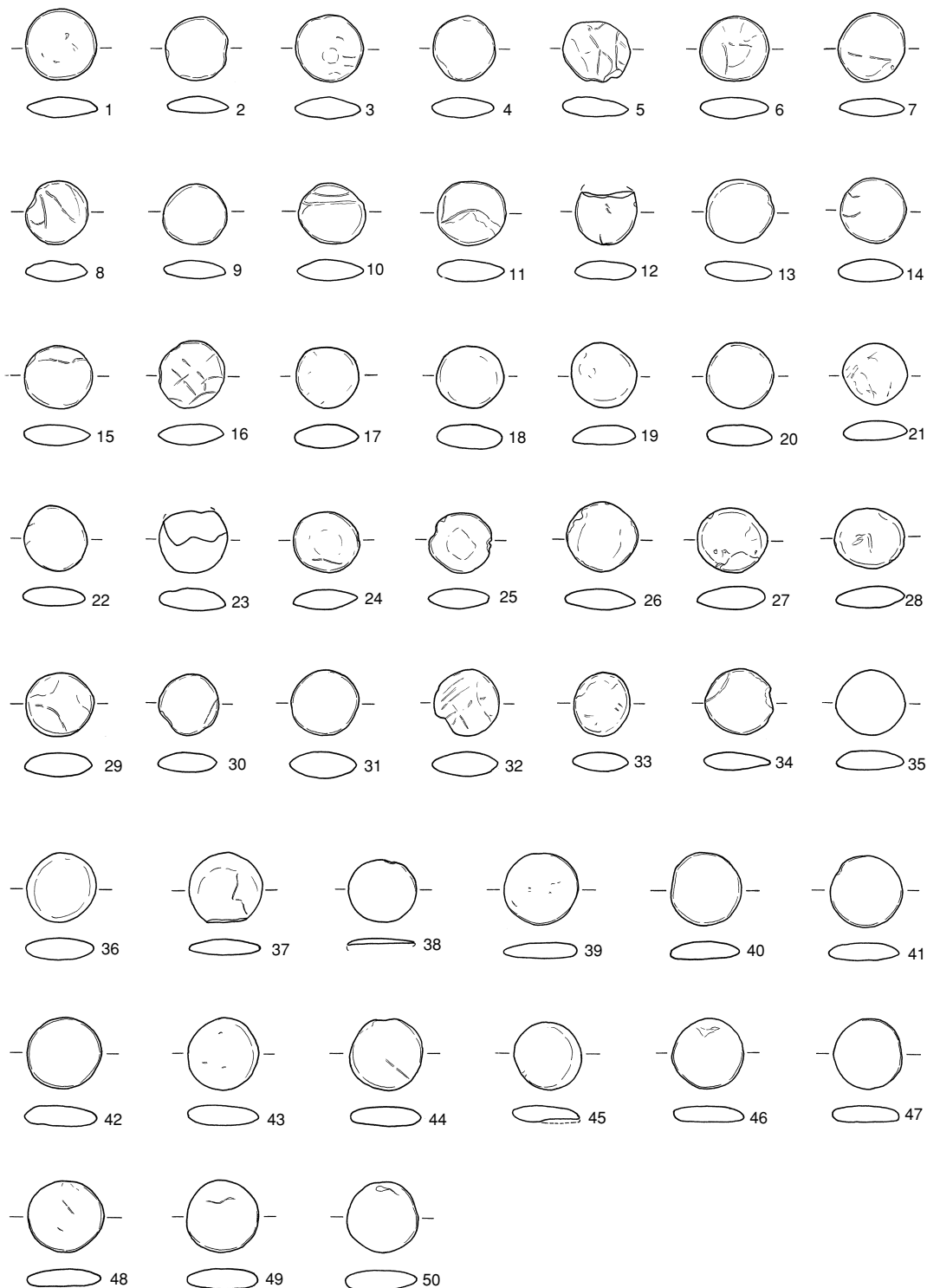


IV-103 図 人形・ミニチュア (1) S=1/2



IV-104 図 人形・ミニチュア (2) S=1/2・S=1/3 (21・24・27・29)

第IV章 出土した遺物



IV-105 図 碁石形製品（土製1～35・石製36～50） S = 1/2

第IV章 出土した遺物

土製

No.	出土遺構	寸法 (mm)		重量 (g)	胎土色調	備考	共伴資料の年代
		径	厚				
1	SU1	21.0	6.5	2.4	橙色	黒色彩色痕・掌紋痕	19c前
2	SU1	19.0	5.0	1.6	橙色	黒色彩色痕・掌紋痕	19c前
3	SU1	21.0	7.0	2.2	橙色	黒色彩色痕・掌紋痕	19c前
4	SU1	19.0	6.0	1.9	浅黄橙色	黒色彩色痕・掌紋痕	19c前
5	SU1	20.0	6.0	1.9	にぶい橙色	黒色彩色痕・掌紋痕顯著・歪	19c前
6	SU1	21.0	5.5	2.0	橙色	黒色彩色痕顯著・掌紋痕顯著・歪	19c前
7	SU11	19.0	6.5	2.4	橙色	掌紋痕	19c前
8	SU11	19.0	6.0		灰白色	掌紋痕・一部欠損	19c前
9	SU11	19.0	6.0	1.6	橙色	掌紋痕	19c前
10	SU49	19.0	7.0	2.2	橙色	白色彩色痕・掌紋痕	18c前 (享保15or元文3火災)
11	SU49	21.0	7.0	2.5	橙色	白色彩色痕顯著・掌紋痕	18c前 (享保15or元文3火災)
12	SK50	19.0	6.0		橙色	一部欠損	19c前～中
13	SK50	21.0	6.0	2.2	橙色	白色彩色痕・掌紋痕	19c前～中
14	SD62	20.0	6.5	2.3	橙色	黒色彩色痕わずか・掌紋痕	19c前～中
15	SD62	20.0	6.5	2.2	橙色	掌紋痕	19c前～中
16	SK81	20.0	6.5	2.1	橙色	白色彩色痕・掌紋痕顯著	VIIIb期
17	SK98	20.0	7.0	2.4	橙色	掌紋痕	19c
18	SK98	19.0	7.0	2.1	橙色		19c
19	SK98	20.0	7.0	2.4	橙色		19c
20	SK98	21.0	6.5	2.5	橙色	掌紋痕	19c
21	SK98	20.0	6.5	1.9	橙色	黒色彩色痕・掌紋痕・やや歪	19c
22	SK98	20.0	7.5	2.1	橙色	やや歪	19c
23	SK98	20.0	7.0		橙色	黒色彩色痕・掌紋痕・一部欠損	19c
24	SK99	20.0	7.0	2.1	橙色	黒色彩色痕・掌紋痕	19c
25	SK99	19.0	5.5	1.7	橙色	黒色彩色痕・掌紋痕・布目痕	19c
26	SK99	21.0	7.0	2.5	橙色	掌紋痕	19c
27	SK99	21.0	6.5	2.6	橙色	掌紋痕	19c
28	SK99	21.0	7.0	2.5	橙色	白色彩色痕・掌紋痕	19c
29	SK99	21.0	7.0	2.7	橙色	白色彩色痕・掌紋痕	19c
30	SA120	19.0	7.0	2.0	淡橙色・マーブル状	掌紋痕	19c
31	SK137	20.0	7.0	2.2	橙色	わずかに黒色彩色痕・掌紋痕	Vb期
32	SK166	20.0	7.0	2.2	橙色	黒色彩色痕・掌紋痕	VIIIc期
33	SK166	19.0	6.5	1.9	橙色	黒色彩色痕・掌紋痕	VIIIc期
34	SK220	20.0	6.0	2.1	橙色	掌紋痕	19c前
35	SU399	20.0	6.5	2.2	橙色	掌紋痕	19c前
平均		20.0	6.5	2.2			

石製

No.	出土遺構	寸法 (mm)		重量 (g)	石質	備考	共伴資料の年代
		径	厚				
36	SK60	21.0	5.5	4.0	不明・黄褐色	自然石を利用か、他より丸みあり	17c末～18c後
37	SU61	22.0	5.0	3.1	粘板岩・淡黄色	白石として使用か	18c前
38	SK139	20.0			粘板岩・淡赤褐色	1/2残・二次的被熱	IVb期 (元禄16火災)
39	SU313	22.0	5.0		粘板岩・淡赤褐色	二次的被熱	17c末 (元禄16火災)
40	SU313	22.0	5.5	2.7	粘板岩・淡赤褐色	縁部の一部やや丸みに欠ける	17c末 (元禄16火災)
41	SU313	21.0	5.5	2.7	粘板岩・淡赤褐色	二次的被熱	17c末 (元禄16火災)
42	SU313	22.0	5.0	2.9	粘板岩・淡赤褐色	二次的被熱	17c末 (元禄16火災)
43	SU313	22.0	5.5	2.7	粘板岩・淡赤褐色	二次的被熱	17c末 (元禄16火災)
44	SU313	22.0	6.0	3.3	粘板岩・暗赤褐色	二次的被熱	17c末 (元禄16火災)
45	SU313	21.0			粘板岩・淡赤褐色	一部欠損・二次的被熱	17c末 (元禄16火災)
46	SU313	21.0	5.0	2.6	粘板岩・灰褐色	二次的被熱	17c末 (元禄16火災)
47	SU313	21.0	5.0	2.7	粘板岩・灰黄褐色	二次的被熱	17c末 (元禄16火災)
48	SU313	22.0	4.5	3.2	粘板岩・にぶい黄褐色	二次的被熱	17c末 (元禄16火災)
49	SU313	21.0	4.5	3.1	粘板岩・灰黄褐色	二次的被熱	17c末 (元禄16火災)
50	SU313	21.0	4.5	2.9	粘板岩・にぶい黄褐色	二次的被熱	17c末 (元禄16火災)
平均		21.4	5.1	3.0			

IV-3表 碁石形製品観察表

東大構内の遺跡にみる碁石形土製品出土状況

① 医学部附属病院外来診療棟地点

15遺構から64点出土している。大半が19世紀代の遺構であったが、18世紀代からも出土している。最も古い遺構はSU49で、2点出土している。共伴した陶磁器は18世紀前葉に位置付けられる。次いでSK137で東大編年V b期1730～1740年代の遺構で1点出土している。彩色痕も黒色と白色が確認されている。

② 医学部附属病院中央診療棟地点

2号組石から262点出土している。碁石は一局用として黒が181個、白が180個ということから、262個は1個多いが丁度一局用に値するものである。2号石組に伴う溝は、大聖寺藩上屋敷と富山藩上屋敷の地境であった。50mにわたり確認されている。共伴資料は、組石の西側からは、17世紀～18世紀代の遺物も含まれるが、18世紀末～19世紀代の遺物が多く出土していることから19世紀の中頃に廃棄されたものと思われる遺構である。

③ 工学部1号館地点

SK01からは106点出土している。SK01は調査区の東側に位置する巨大土坑(東西12.5×南北6×深さ5m強)である。下層からは多くの木製品が出土し、上層から徳利を多量に含む陶磁器や土製品が出土した遺構である。出土した陶磁器や墨書資料などから、廃棄年代は東大編年VIII a期と思われる遺構である。

④ 医学部附属病院病棟地点

石製の碁石黒151点、白(貝製)1点、土製の碁石16点出土している。土製の碁石の出土は少なかった。碁石が出土した遺構の多くは天和2(1682)年の火災により廃棄された遺構群である。D面焼土層、D1、D2層、C3層、SD1603から出土したものの大半が二次的に熱を受けていたため、碁石是那智黒であったが、暗赤褐色に変色しているものも多く剥離したように欠損しているものもある。土製の碁石は発掘区域内の墓域にあたる講安寺A層とST1733から出土しているが、大半は藩邸内であった。碁石が出土した遺構の年代は17世紀後半が主流である。碁石形土製品が出土した遺構の年代は幅広く17世紀後半から幕末まで出土している。

⑤ 理学部7号館地点

65点出土している。そのうち比較的多く出土した遺構をあげると、28号土坑から10点出土している。10点とも白色に彩色されていた。6号地下式土坑から6点、106号土坑から6点出土している。65点の内黒色の彩色痕が確認されたのは、9点であった。他の遺構からは、1～2点ずつであった。遺構外からは18点出土している。年代をみると、18世紀末～19世紀前半が最も多く、最も古い遺構は、1650～1680年代廃棄の9号地下式土坑で1点出土している。次に古い遺構は、17世紀末～18世紀初頭の4号井戸で1点出土している。理学部7号館地点は江戸詰の家臣(藩主に謁見できる家臣)の居住空間であった。いわゆる単身赴任者の「八筋長屋」と呼ばれているエリアであった。このことから、碁石形土製品は碁石として大人が使用していたと思われる。

以上、東大構内の遺跡で出土した碁石及び碁石形土製品について観察を行った。出土した遺物の大半の彩色は落ちてしまっているが、白色(胡粉)や黒色(墨)が残存しているものもあることから、

本来の基石、石製(黒)と貝製(白)を模倣して作られたと考えられる。また、理学部7号館地点のように単身赴任者の居住空間から出土したことから、おそらく子供の玩具ではなく囲碁で基石として使用された可能性が高い。

東大構内で基石形土製品が出土した遺構の年代をみると、17世紀中葉～19世紀中葉まで幅広く出土している。本地点である医学部附属病院外来診療棟では、17世紀代からの出土はなく18世紀前葉の遺構から各1点ずつ出土しているが、19世紀からの出土がほとんどであった。

法量からの観察—本地点を中心に—

出土した64点について法量表を作成し、径、厚さ、重さの平均値を割り出した。また、径と厚さの組み合わせから大きさによる分布の傾向を試みた。

平均値にみる分布 (IV-4表)

基石については、本地点と医学部附属病院病棟地点の2地点のみであった。

上記した5地点の平均値はIV-4表を参照願いたい。

医学部附属病院外来診療棟地点の土製の基石の平均値は径が19.9mm、厚さ6.4mm、重さ2.3gであった。

径をみると、最大は21.5mmで最小は18.0mmであった。計測に多少の誤差はあると思われるが、ほぼ0.5mm間隔のものであった。出土点数で最も多かった径は20.0mmで19点出土していた。また、最も少なかったものは18.0mmと18.5mmのものであった。出土点数が多かった順に列記すると下記の通りである。

$$20.0\text{mm} > 19.0\text{mm} > 20.5 \cdot 21.0\text{mm} > 21.5\text{mm} > 18.0 \cdot 18.5\text{mm}$$

厚さをみると、最大厚は7.5mmで最小厚は5.0mmであった。厚さも0.5mm間隔のものであった。上記の径同様に列記すると下記のようになる。

$$7.0\text{mm} > 6.5\text{mm} > 6.0\text{mm} > 5.5\text{mm} > 5.0\text{mm} > 7.5\text{mm}$$

重さをみると最大重2.7gで最小重1.6gであった。径、厚さ同様に列記すると下記の通りになる。

$$2.2\text{g} > 2.1 \cdot 2.5\text{g} > 2.4\text{g} > 1.9\text{g} > 2.6\text{g} > 1.6\text{g} > 1.7 \cdot 2.3 \cdot 2.7\text{g}$$

IV-4表の平均値をみると、本地点の径は5地点の内最小の19.9mmであった。

石製は土製のものと比べると大きく平坦である。本地点の17点のうち計測した15点の平均値をみると径は21.4mm、厚さは5.1mm、重さは3.0gであった。医学部附属病院病棟地点151点のは径21.6mm、厚さ4.3mm、重さは3.0gであった。平均値にひらきがあるのは、少ない15点と151点の平均を比較しているためか。

径・厚 組み合わせにみる分布 (IV-5表)

径を中心に厚さとの組み合わせでみていくと下記の表のようになる。なお、ます内の数字は出土点数である。表をみるとわかるように(例)径が20.0mmの法量分布表をみると、同じ径であっても様々な厚さのものが存在する。径19.0mmと20.0mmが多くまた、厚さについてみると6.0mm～7.0mmに集中していることがわかる。以上のことから、ある程度の規格性を持ちながら、掌のなかで捏ねて成形したと思われる。基石形土製品に付いている筋状のものは掌紋痕である。

粘土を掌で転がして潰してみると同様なものができる。出土している大半に掌紋痕が認められることから、手捻りにより成形されたことがわかる。

地 点	材質	径 (mm)	厚 (mm)	重 (g)
医学部附属病院外来診療棟地点	土製	20.0	6.5	2.2
	石製	21.4	5.1	3.0
医学部附属病院中央診療棟地点	土製	20.1	6.3	2.2
	石製	—	—	—
工学部1号館地点	土製	20.5	6.0	2.2
	石製	—	—	—
医学部附属病院病棟地点	土製	20.0	6.2	2.0
	石製	21.6	4.3	3.0
理学部7号館地点	土製	20.5	6.2	2.3
	石製	—	—	—

IV-4表 各地点の平均法量

材質	径\厚	4.5	5.0	5.5	6.0	6.5	7.0	7.5	合計
土 製	18.0						1		1
	18.5						1		1
	19.0		2	1	7	4	3		17
	19.5				3	3	1		7
	20.0				6	6	7	1	20
	20.5			5			3		8
	21.0			1		3	4		8
	21.5					1	1		2
合計		2	7	16	17	21	1	64	
石 製	21.0	2	3	2					7
	21.5			1					1
	22.0	1	3	2	1				7
	合計	3	6	5	1				15

IV-5表 外来診療棟地点基石・基石形土製品の法量分布

第4節 瓦(IV-106～108図)

瓦については、当調査地点からも数多く見つかった。また、本郷構内の遺跡では「山上会館・御殿下記念館」の報告書で、加藤晃らが綿密な分析をすでに行っているため、今後良好な史料がみつかった場合に本格的に取り上げることとし、ここではごく一部の特徴的な瓦のみを紹介するに止める。

熨斗瓦(IV-106図1～3)

大棟に葺く熨斗瓦である。いずれもSK51からみつかった。

3はほぼ完形で、幅30.5cm、奥行きは13cmほどである。ただし、熨斗瓦の常として、奥行き26cmほどの平瓦状のものを半裁したもので、裁断するための深さ3mmほどの溝が凸面に切られているのが観察できる。文様は片切彫り風につくられているが、型によるものである。但し、文様

面の幅が狭いため、版木の幅はわからない。1、2は同じ範でつくられたもの。3と比較して、唐草と中心飾りが異なっている。また両方の拓本の上部に見える白線は、範の端部である。奥行きは1で14cm、2で16cmあり3より大きい。半裁のための溝は1では観察できないが、2では凹面にわずかに観察できる。

軒 瓦 (IV-106 図4)

加藤 晃のいう「江戸式」軒瓦の中心飾りの4.に相当する。二次的に火を受けたものか、全体に赤褐色になっている。SK51からみつかっている。

鬼 瓦 (IV-106 図5)

これもSK51である。剣梅鉢の文様は、別の粘土で成形して貼り付けている。側面の穴は、屋根に取り付けるための紐を通すためのもので、焼成前の穿孔である。底面に「五」のヘラ書きが認められる。

軒 丸 瓦 (IV-107 図6、7)

SU52出土。いずれも梅鉢文である。瓦当面は抜けをよくするため、範木に砂を撒いたため、ザラついている。瓦当裏面上方から、丸瓦部にかけて、補強のための粘土を少しあてている。いずれも、瓦当と丸瓦を接合したあとの調整は丁寧で瓦当裏面にはナデ、周縁部にはヘラ削り調整を行っている。

軒 平 瓦 (IV-107 図10)

SU52出土。側縁に「○」に「一」の刻印がある。

丸 瓦 (IV-107 図8)

ほぼ完形の丸瓦で、SU52からみつかっている。裏面には筵目がみえ、凸面は丁寧なナデ調整を行う。側面及び先端面は、ヘラ削り成形している。

軒 瓦 (IV-107 図9)

SK81出土。加藤のいう「江戸式」の中心飾りの分類では、1.の系列に属するものだろう。右の側縁に、右「アサクサ」、中央「瓦源」、左「イマト」と書き周囲を隅丸の方形で囲った刻印がみられる。

軒 棧 瓦 (IV-107 図11)

巴と唐草を組み合わせた軒棧瓦でSU143からみつかっている。加藤の「江戸式」の3.の系列だろう。右側縁に山形と「庄」、その左に小さく「十」と逆台形の刻印がある。逆台形の刻印の中の右上部には小さな突起が一つ認められる。

軒 丸 瓦 (IV-107 図12)

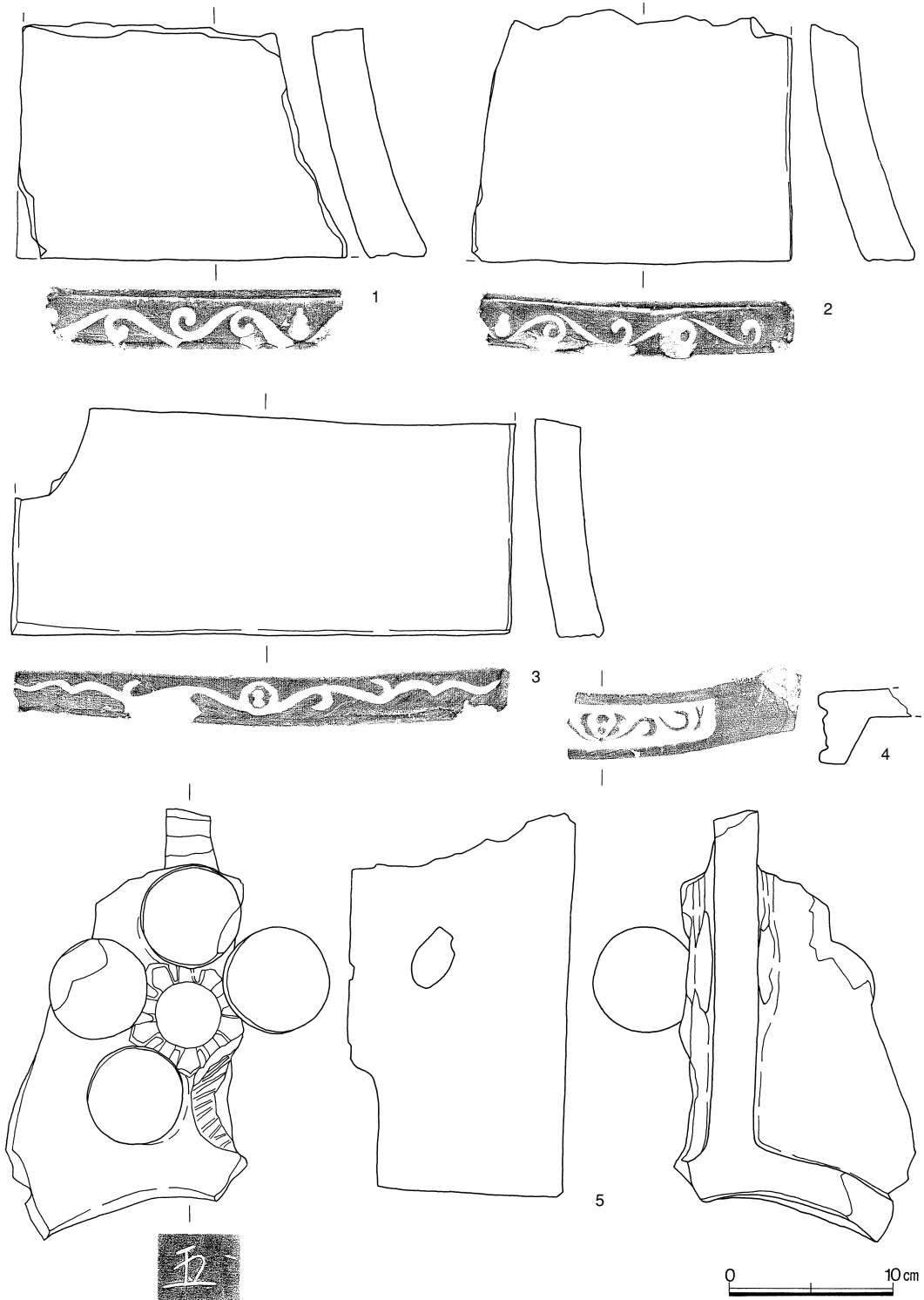
SK137出土。剣梅鉢文である。瓦当面には砂の付着がやや認められる。丸瓦と接合したあと、丁寧なヘラ削り、ナデ調整が行われている。

軒 丸 瓦 (IV-108 図13)

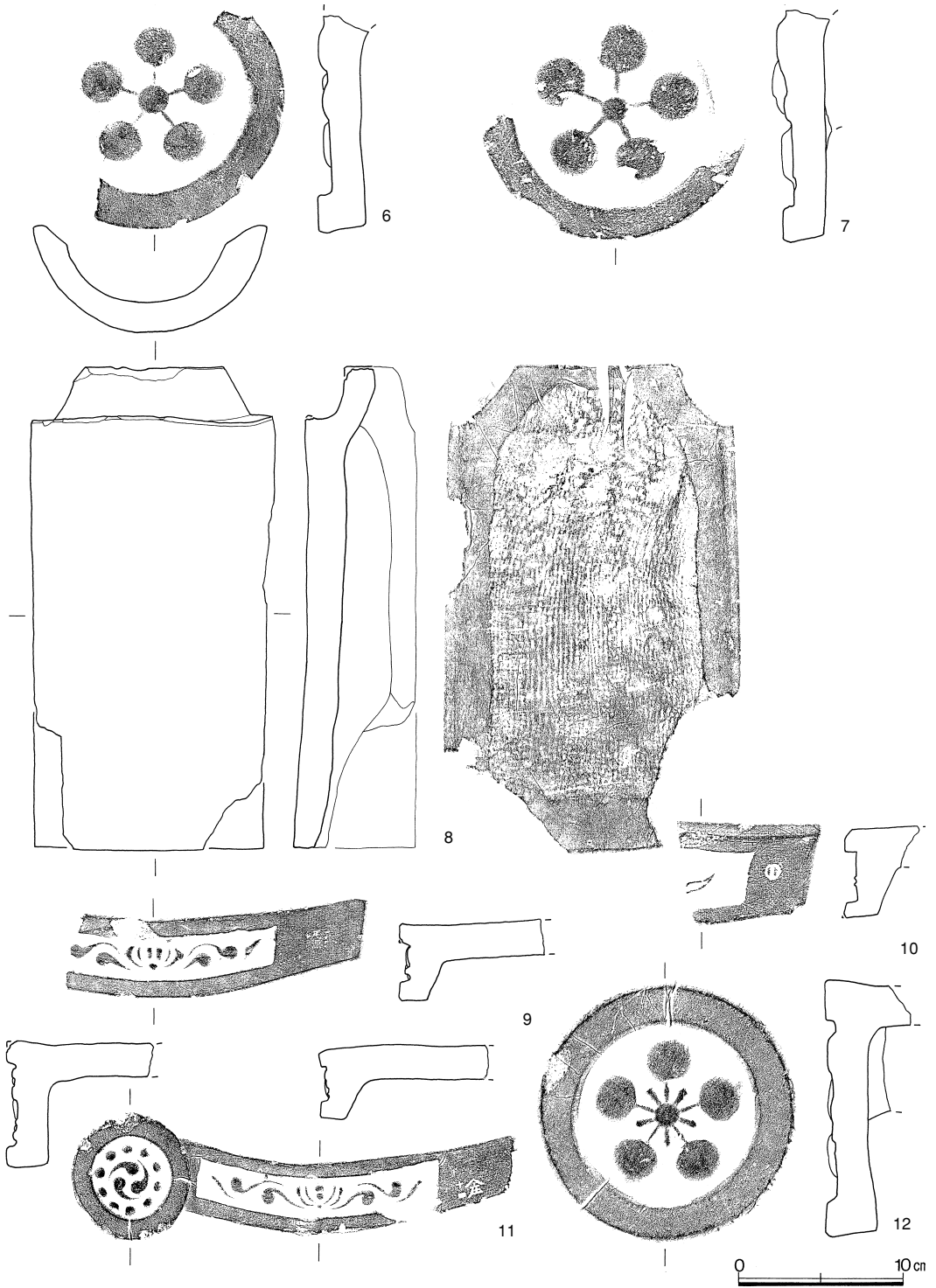
SK18出土。梅鉢文。丸瓦部裏面にはごく粗い布目跡が認められる。全体に調整は丁寧である。

金 箔 瓦 (IV-107 図14)

SD45出土の小形の瓦である。小菊など特殊な部位に用いられたものと考えられる。表面にはわずかに金箔の痕跡を認めることができる。



IV-106 図 瓦 (1)



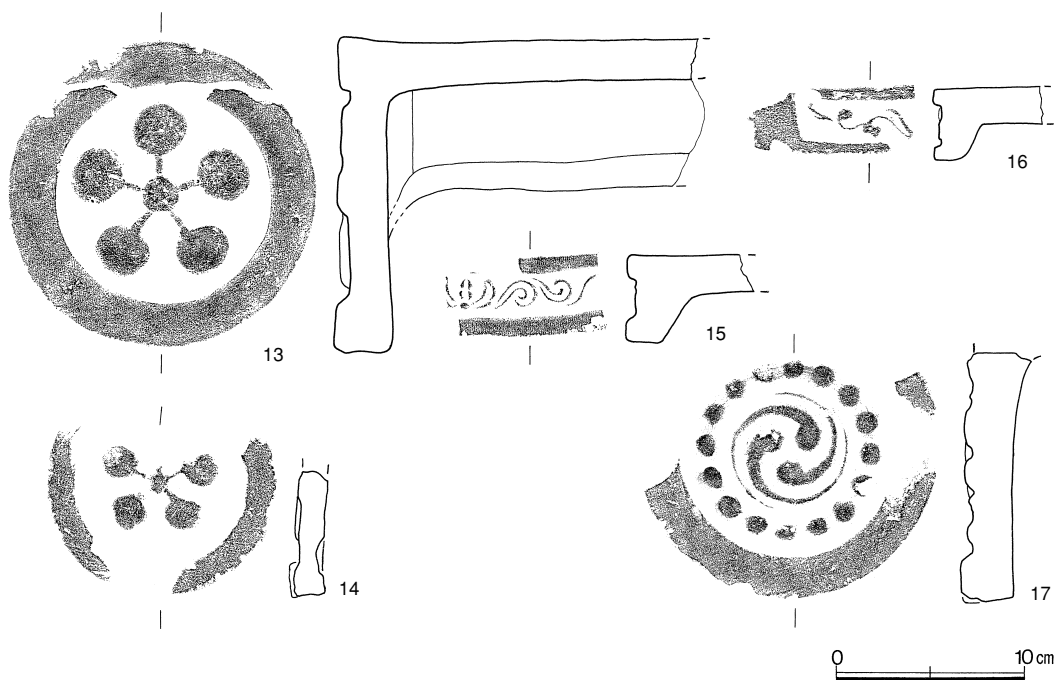
IV-107 図 瓦 (2)

軒 瓦 (IV-107図 15、16)

いずれもSK18出土。15は加藤分類の1.に属する中心飾りを持つ。16は右端部だけの破片であるが、いわゆる「江戸式」のものに比較して、唐草の文様が異なっている。

軒 丸 瓦 (IV-107図 17)

これもSK18出土。右巻きの三つ巴文で、朱文は16つけられている。型を抜きやすくするための砂が文様面に観察されるが、全体に丁寧な作りの瓦である。



IV-108図 瓦 (3)

第5節 金属製品 (IV-109～121図、IV-6～11表)

出土した金属製品を大別すると、銅製品と鉄製品からなる。金属が出土した遺構は118基を数える。118基のうち最も古いものはSD45で、キセル1点、銭貨1枚が出土している。共伴しているものは、陶磁器や土製品、本瓦で17世紀前半に比定されるものであった。興味深い遺構はSD53で、調査区の南西隅に位置する溝状遺構である。皆折釘が30～40cmの等間隔で2列で58対(112本)確認されている。また、女性が居住していたことを窺わせる厠遺構SL79、SL80、SL347がある。いずれの遺構からも高価な簪等が出土している。主に、多く検出されたものは、釘、銭貨、煙管であった。台所に関するものは、包丁やサナ、鍋などがあり、また、灯火具や火箸、調度の飾り金具や、門扉の付帯品なども確認されている。各遺構の出土点数については表を参考願いたい。いずれも腐食し原形をとどめているものは少なくそのうち良好なものについて図示した。

第IV章 出土した遺物

遺構	銭	雁首	吸口	鉄釘	銅釘	鋌	鋸	装身具	鏡	小柄	切羽	包丁	鍋	五徳	さな	火箸	灯火具	針金	飾金具	容器水滴	杓子	引手把手	建築部材	銅・鉄不明品	合計
SU1	4			92						1					1	1									99
SU2	9	2	2	48	1					1									1						64
SU3				1																					1
SK4	4			2																				1	7
SK5	1																								1
SK7	1										1	1												1	4
SU11	13			15								1							2					5	36
SE12				9																					9
SK13				2																					2
SD14	1				1																				2
SK18			1	3								1													5
SU20	4	1		9								1									1			4	20
SK21														1	1									1	3
SK22				3			1																	1	5
SK23				3																				1	4
SU24	1																							2	3
SK27				1	1																			1	3
SU28	1				1																				2
SU29	1	1																							2
SK31				3						1															4
SU34	1			4														1						5	11
SK36	1																							1	2
SU38				3								2													5
SD45	1	1																				1		1	4
SU47				1																					1
SK48	1																								1
SU49		1	1	2																				1	5
SK50	1							1											1					2	5
SK51	1			13						1								1						2	18
SU52				16	1	1																			18
SD53				112																					112
SK55	1																							1	1
SK56		1	1																						2
SU58	1			2	1													1							5
SK60				19	3	1						1					1	1							26
SU61				12			2																		14
SD62	3			10								1						1	1		1				17
SU63	2	1		4						1			2										2	2	14
SU64	3	1	1																						5
SU65	1																								1
SK69	1																								1
SB70	2	4	1	14			1																	4	26
SL71																								1	1
SK72				1															1						2
SU75	2	2						1				1													6
SU76																								1	1
SL78								2																1	3
SL79								1																	1
SL80	1							4																	5
SK81	12	2	2	47			1					2	6	1	8		2	3	2		1	3		22	114
SK83				2	2	1											1	2							8

IV-6表 金属製品組成表(1)

第IV章 出土した遺物

遺構	銭	雁首	吸口	鉄釘	銅釘	鋌	鋸	装身具	鏡	小柄	切羽	包丁	鍋	五徳	さな	火箸	灯火具	針金	飾金具	容器水滴	杓子	引手把手	建築部材	銅・鉄不明品	合計	
SK96						1		1											1						3	
SK99				1										1	1									1	4	
SE100					1															1					2	
SK101				130															1					17	148	
SK102				1																					2	
SE105	3	1	1	58																					63	
SU115				7																					7	
SK116				5																				1	6	
SU117		1	2	1																					4	
SA120				3																					3	
SK125				1																					1	
SK126				4																					4	
SE127	9			68	1							4							1					3	86	
SK131				6																				1	7	
SK133		1	3																					3	7	
SK134	1	1		10																					12	
SK137	8	2	4	88	1	6	1					1				1	2	1			1			3	119	
SK139	14	6	6	39															2					3	70	
SK141	5	1																						4	10	
SU143	2																								2	
SK144	2		1	1	1							1													9	15
SU150	6	2	1		1					1									2					2	15	
SK152		5	4	19								5							1					7	41	
SK156				2																					2	
SK157		4																							4	
SK160	1			1																					2	
SK164				1																					1	
SK166		1		6				4				1									1			4	17	
SK167	1				1																				2	
SK168				2	1																				3	
SD169				2				1																1	4	
SK171																						1			1	
SK174	3	1		32	2		1																	3	42	
SK176	7		1													1		1			1			1	12	
SK186			1	1														1						1	4	
SD197	1	1		2		3																		1	8	
SU211				5																					5	
SE213				10																					11	
SD216				1																		1			1	
SK220	3	1	1	6																				2	13	
SU230	2		3	36								3													44	
SK249				7																					7	
SK260								1		1													3		5	
SU262	1																								1	
SK265	3	1		8												1								1	14	
SE271	1	1		11								1												1	15	
SU279	14	1		24																				3	42	
SK282	1	1																							2	
SK290	4	3	1	41	1							1				1		2	3	1				2	60	
SK306		1																							1	
SU313	2	2		61			7										1		8	5		1	10	8	105	

IV-6表 金属製品組成表 (2)

第IV章 出土した遺物

遺構	銭	雁首	吸口	鉄釘	銅釘	鋌	鋸	装身具	鏡	小柄	切羽	包丁	鍋	五徳	さな	火箸	灯火具	針金	飾金具	容器水滴	杓子	引手把手	建築部材	銅・鉄不明品	合計
SK320																								1	1
SK322										1															1
SU323																		1							1
SE324																1		1							2
SK341	2																								2
SL347								1																	1
SK361				3																					3
SU368		1																4						3	8
SK380				2												1		1				1			5
SK381		1	1																					1	3
SK392			1	35				4					1				1				1			4	47
SK393																				1					1
SK394																				1					1
SK397		2	1																						3
SU399																								1	1
遺構外	14	3		32	1		7		1			1				2		2	1	1	1	1		17	84
合計	185	62	41	1226	22	12	23	19	2	8	1	29	9	3	11	9	11	15	34	10	7	10	15	171	1935

IV-6表 金属製品組成表 (3)

(1) 銭 (IV-109～113 図、IV-7 表)

銭は遺構外を含め 185 枚出土している。銭が出土した遺構は、地下室、溝、土坑、井戸、厠等性格の異なるものであった。185 枚のうち北宋銭を模したもの(模鑄銭)が 2 枚、寶永通宝 1 枚、天保通宝 6 枚(写真 113、114)、他は古寛永と新寛永通宝であった。

本項では出土数の多い遺構について特出し明記する。その他遺構については観察表を参考願いたい。なお、銭種の詳細は日本貨幣協会の小林茂之氏のご教授による。また、鑄造年代等については『新寛永通寶図会』(工藤 1998)と『古寛永泉志(改訂版)』(増尾 1976)、『季刊方泉處』を参考とした。『新寛永通寶図会』は旧年来の説に遺跡から出土した資料を照合し、以前から疑問視されていた鑄造期を見直したものである。

SU2 (IV-109 図 5～11)

9 枚出土している。5、6 は寛永 14 (1637) 年越後国高田で鑄造された古寛永である。7 は宝永期 (1704～1711) 亀戸銭とされていた丸屋銭(鑄造請負人名から)である。鑄造期については、発掘などの資料から元禄期の可能性が高くなっているものである。8 は正徳 4 (1714) 年に江戸亀戸村で鑄造されたと推定される「細字小文無背」である。文無背銭は文銭と同一面で、裏面に「文」の字がない無背銭である。9 は、元禄期 (1688～1704) 京都七条で鑄造された京都荻原銭である。10、11 は享保期 (1716～1736) 末に鑄造されたと推定される旧猿江銭「正字」である。鑄造期について現段階では元禄期の可能性が極めて高いとされているものである。発掘時の所見と共伴している陶磁器の様相から 17 世紀末に位置付けられ、元禄 16 (1703) 年の火災廃棄資料と推定される。銭の鑄造された時期は古寛永の寛永 14 年をはじめ、正徳 4 年、宝永期、享保期末のもので構成されている。陶磁器は元禄 16 年の火災廃棄資料とされていることから銭の鑄造期とズレが生じる。

しかし、8、10、11を新説の元禄期とするならばズレはなく妥当であろう。

SU11 (IV-109 図17～23、IV-110 図24～27)

13枚出土している。17は元文3(1738)年に秋田で鑄造されたものである。「大字」とは「寛」の後ろ足の跳ねが大きいものである。18、19は享保期(1716～1736)に江戸深川十万坪で鑄造された、不旧手旧十万坪銭の「小目宝」と「潤縁」である。不旧手の鑄造期については、現段階では元禄期の可能性が極めて高いとされているものである。20は宝永期(1704～1711)に鑄造された「跳永」の四ツ寶銭である。四ツ寶銭の鑄造期については以前から疑問視されてきたものである。現段階では、元禄期の可能性の極めて高いとされているものである。21は背文に「元」字があるもので、寛保元(1741)年摂津大坂高津新地で鑄造されたものである。22～26は明和期(1764～1772)に鑄造された真鍮製の四文銭である。背に「11波」の青海波の文様が鑄出されている。22は正字で「寶」字の貝が広いものである。23は「俯永」である。「永」字の頭が長いものでノ字の角にツメがつくものである。24、26は俯永、25は小字。永の字の末尾が波行するものである。ちなみに色で見分ける方法では、黄みがかっているものは明和期、赤みがかっているものは文政期、黒みがかっているものは安政期といわれている。相伴している陶磁器は19世紀前葉に位置付けられる。構成されている銭の鑄造期は宝永期と、享保期、寛保元年と、元文期と明和期である。銭の使用される期間の長いことがわかる遺構である。また18、19の不旧手旧十万坪銭と20の四ツ寶銭の鑄造期を新説の元禄期にすると、さらに長い期間のもので構成されていたことになる。

SK81 (IV-111 図52～55)

12枚出土している。52は寛文8(1668)年に鑄造された「細字背文」の文銭である。53、54は宝永期(1704～1711)に鑄造された肥字系の四ツ寶銭である。53は「跳永」、54は「勁永広寛」である。鑄造期についてはSU11でも記したように、以前は宝永期とされていたが、現段階では元禄期の可能性が極めて高いとされているものである。55は文政4(1821)年に鑄造された真鍮製の四文銭である。背に「11波」の青海波の文様が鑄出されている。相伴している陶磁器は東大編年Ⅷb期。構成されている銭の鑄造期は、寛文8年、宝永期と文政4年のもので幅の広い期間のものであった。

SE127 (添付CD-ROM 写真113、114)

9枚出土している。二次的被熱により熔着した資料が2個体出土している。写真113は天保通寶2枚、銭種不明の寛永通寶が2枚であった。写真114は天保通寶4枚、背に11波がある四文銭である。相伴している陶磁器は下限が明治初頭に位置付けられるものであった。銭貨は焼け爛れているため詳細な銭種の判読は困難であった。

SK137 (IV-111 図59～64)

8枚出土している。59は元文元(1736)年に鑄造された「含二水永」の新寛永である。60は享保13(1728)年仙台石巻で鑄造された「異書」である。61は享保13(1728)年仙台石巻で鑄造された仙台銭「重揮通無背」である。仙台銭類には背に「仙」字を配する種類のものと同様に背仙がない無背になった種類のものがある。62は享保期(1716～1736)末に鑄造された、旧江戸猿江銭の「正字」である。63は享保期(1716～1736)まで深川十万坪で鑄造された不旧手の「高寛」である。62、63の鑄造期については、前記したように現段階では元禄期の可能性が高いとされて

いるものである。64は元文4(1739)年深川十万坪で鑄造された「無印」である。共存している陶磁器は東大編年Vb期。構成されている銭の鑄造期は、享保期(新説は元禄期)と元文4年であった。

SK139(IV-111 図65～69、112 図70～77)

14枚出土している。65は発掘された鑄型から16世紀中～16世紀後半に位置付けられる北宋銭「元符通寶」の模鑄銭である。文字が潰れおり、器厚は薄いものである。66、68は寛永14(1637)年鑄造の仙台銭「跛宝」である。67は明暦2(1656)年、江戸浅草鳥越で鑄造された鳥越銭である。69は承応2(1653)年京都建仁寺で鑄造された建仁寺銭である。70～73は寛文8(1668)年に鑄造された背文に「文」字を有する文銭である。70は「細字背文」、71、73は「細字小文」、72は「中字背文」と分類される文銭である。74、76、77は宝永期(1704～1711)に鑄造された四ツ寶銭である。74は肥字系の「勁永広寛」、76、77は肥字系の「勁永」である。75は享保期(1716～1736)末に鑄造された「正小字」の旧猿江銭である。74、76、77の四ツ寶銭の鑄造期については前記しているように以前から問題視されていたもので現段階では、元禄期(1688～1704)の可能性の極めて高いとされているものである。また、75の旧猿江銭の鑄造期も四ツ寶銭と同様元禄期の可能性が極めて高いものである。共存している陶磁器は東大編年IVb期。元禄16(1703)年の火災資料とされている。四ツ寶銭、旧猿江銭の鑄造時期を元禄期にするならば陶磁器との年代にズレはなく妥当である。

SK174(IV-112 図86、87)

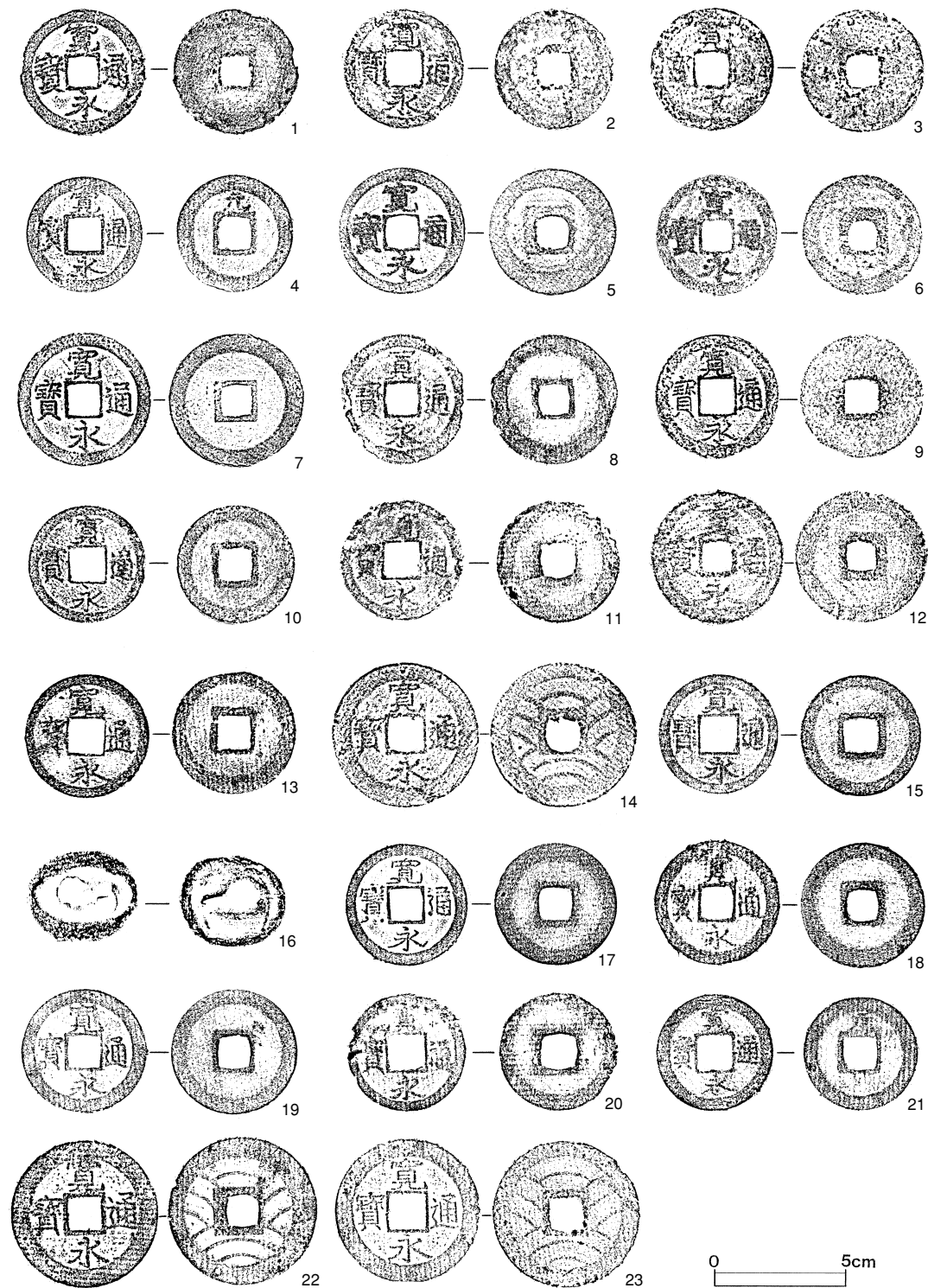
3枚出土している。86は銭種は不明。87は宝永5(1708)年京都七条で鑄造された寶永通宝である。「永久世用」「珍」と刻印されている。土取のために掘削された後、日常廃棄土坑として再利用された土坑である。共存している陶磁器は東大編年VIa期。

SK176(IV-112 図88、89、113 図90、91)

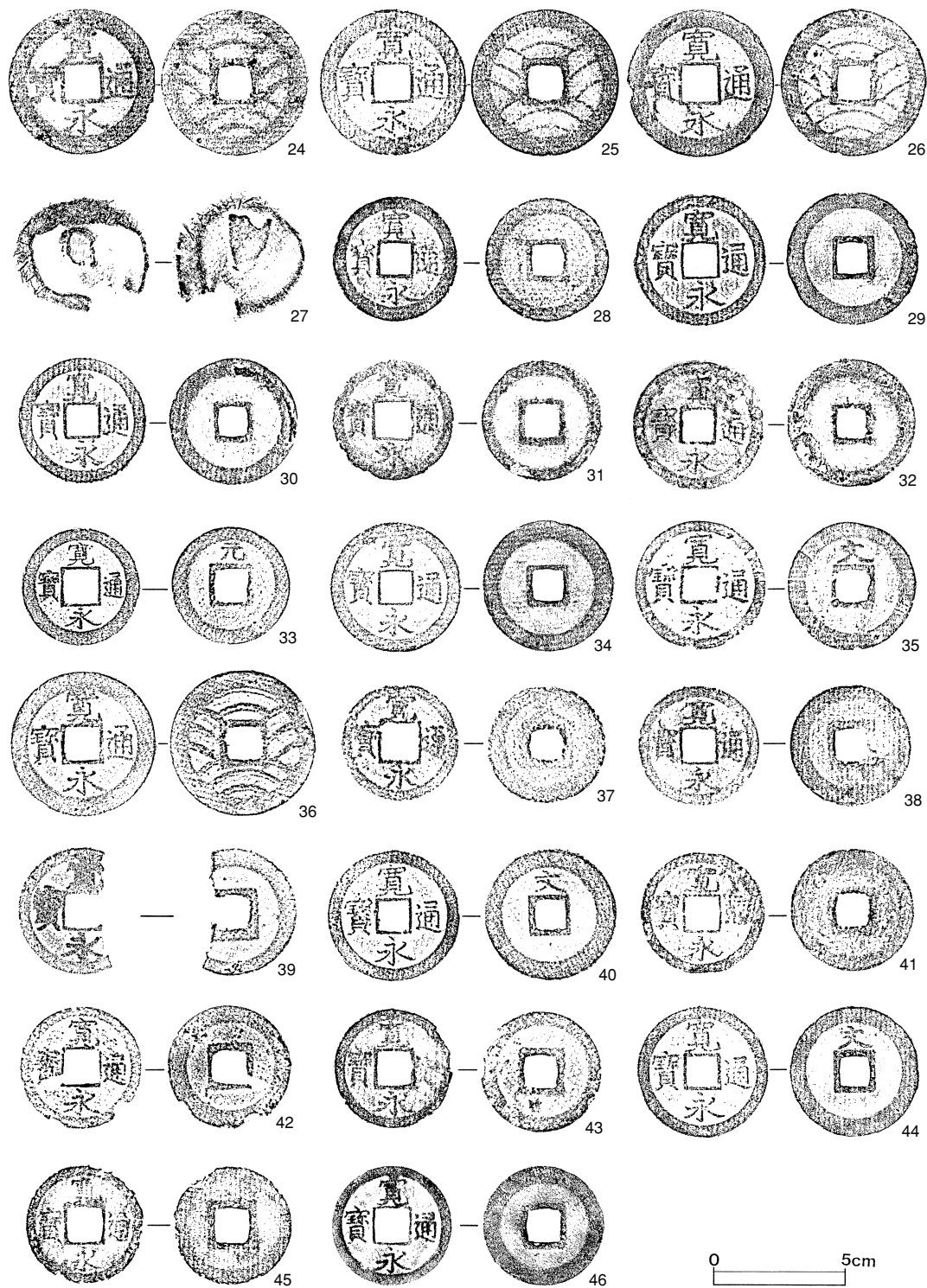
7枚出土している。88～90は背文のあるもので寛文8(1668)年に鑄造された文銭である。88は「細字背文」、89は「正字背文」、90は「細字小文」である。91は宝永期(1704～1711)に鑄造された四ツ寶銭の「勁永」である。四ツ寶銭については前記しているように、元禄期に鑄造された可能性の極めて高いとされているものである。共存している陶磁器は17世紀末に位置付けられる。構成される銭は、寛文8年の文銭と、四ツ寶銭であるが、四ツ寶銭の鑄造時期を宝永期とするならば陶磁器との年代にズレを生じる。しかし、四ツ寶銭を元禄期とするならばズレはなく妥当である。

SU279(IV-113 図99～109)

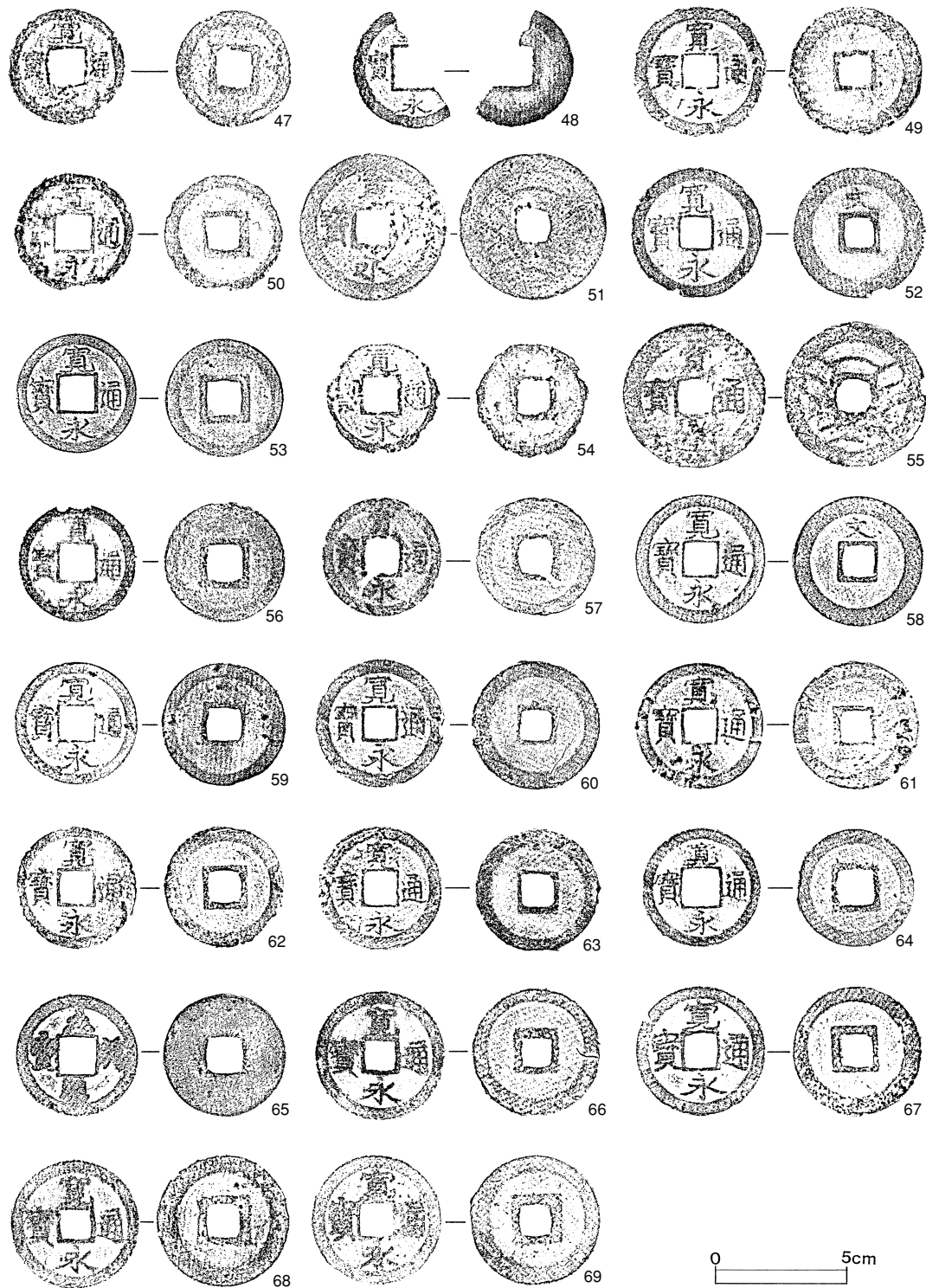
14枚出土している。ここからは腐食により貼り付いてた資料5枚と8枚、他に1枚が出土している。おそらく縉状になっていたと思われる。99、101は寛文8(1668)年に鑄造された文銭「正字背文」である。100は享保期(1716～1736)に鑄造された「不旧手」である。102、108は明暦2(1656)年に駿河有渡郡沓谷村で鑄造された沓谷銭である。103は寛文8(1668)年に鑄造された文銭の「細字小文」である。背文の「文」字が小さいものである。104は宝永期(1704～1711)に鑄造の四ツ寶銭「広永」である。105は享保期(1716～1736)末に鑄造された旧猿江銭「小字」である。106、107は宝永期(1704～1711)に鑄造された四ツ寶銭である。106は「勁永」である。「永」の字の筆の勢いが強いものである。107は「勁永広寛」である。勁永より文字が総体的に



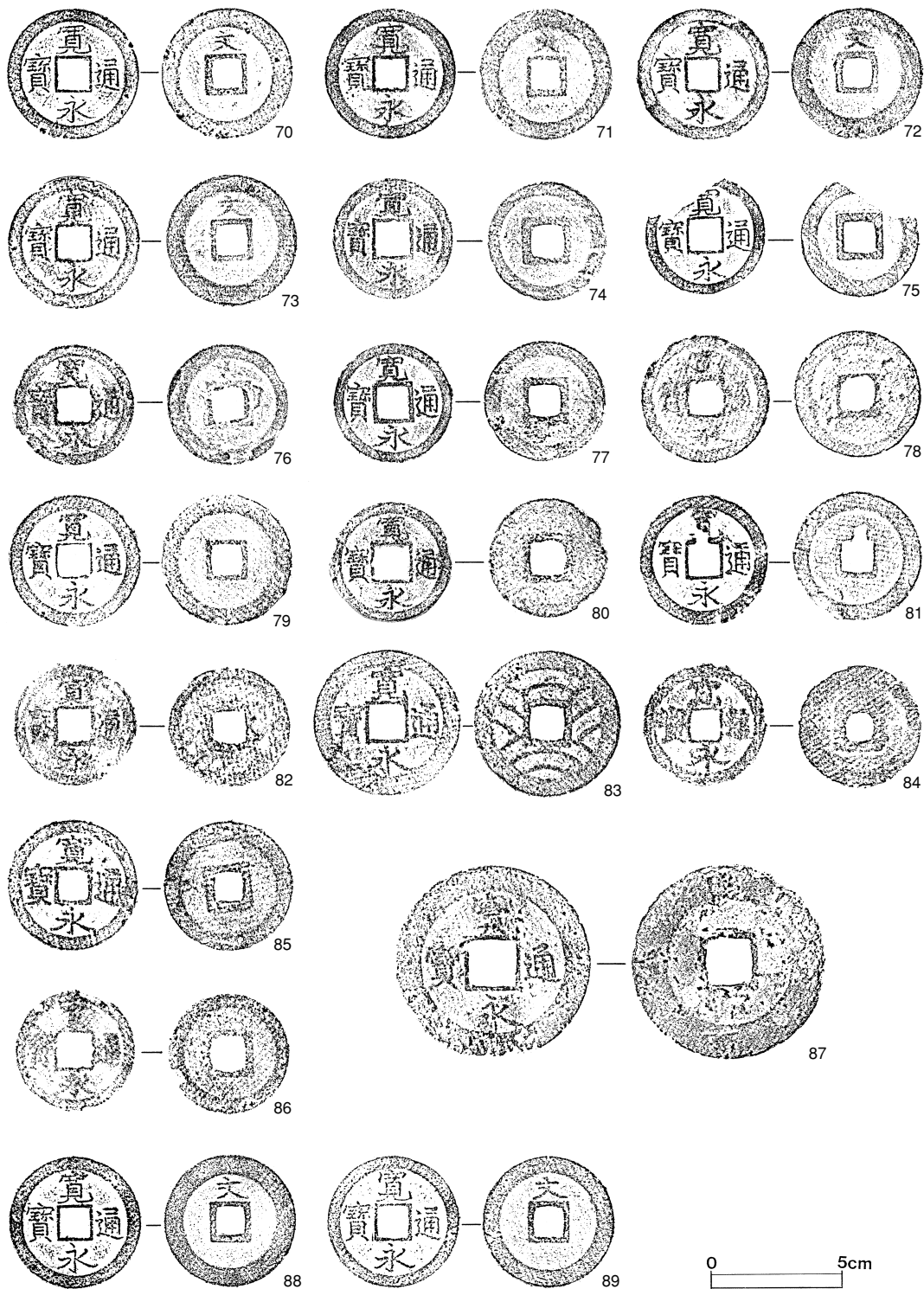
IV-109 図 錢貨 (1)



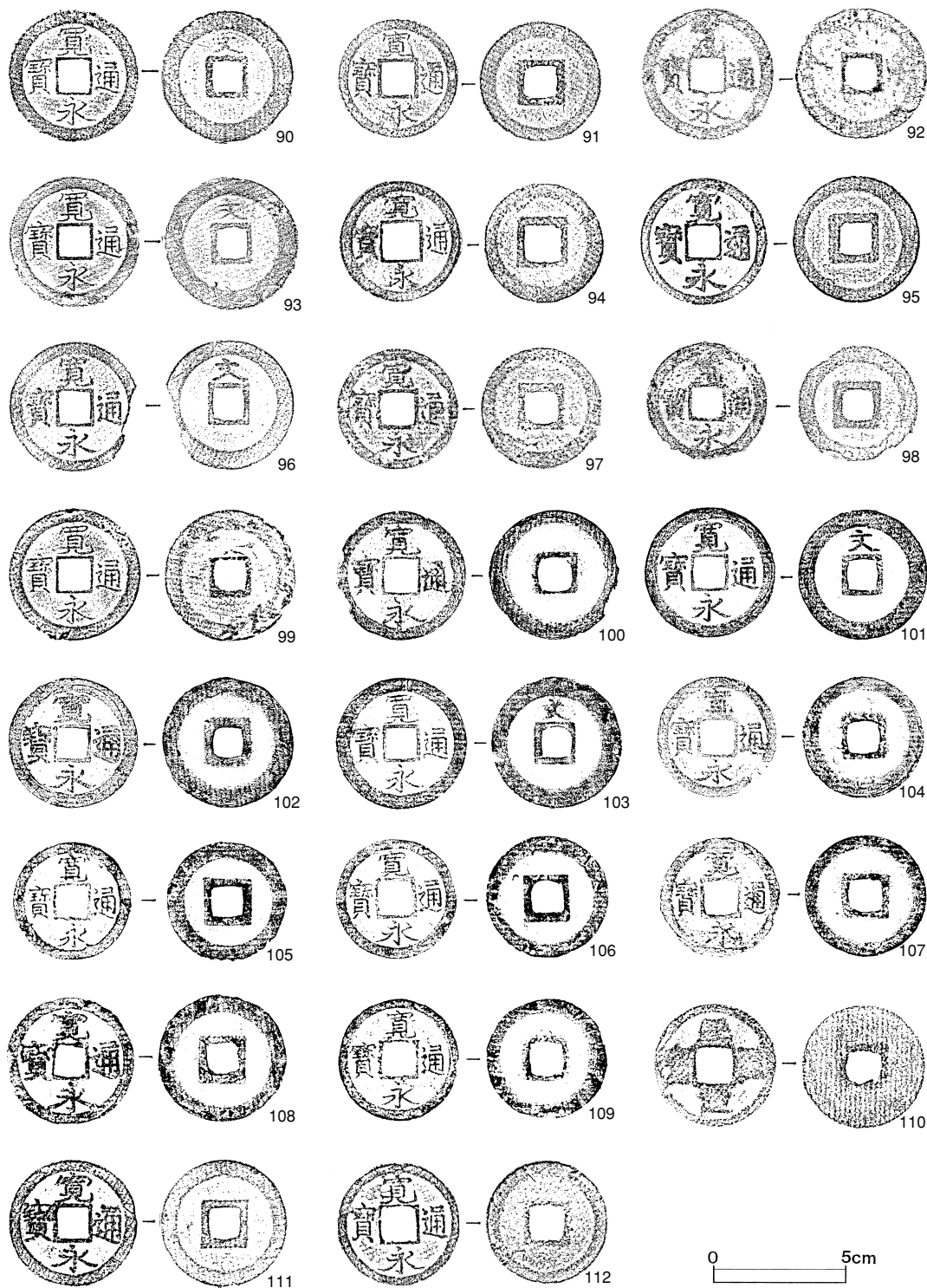
IV-110図 錢貨(2)



IV-111 図 錢貨 (3)



IV-112図 錢貨(4)



IV-113図 錢貨(5)

第IV章 出土した遺物

遺構	出土遺構	銭 銘	背文	銭 種	寸法 (mm)			共伴資料の年代
					銭径	穿径	輪厚	
1	SU1	寛永通寶 (古)		芝銭・不草点	23.5	5.5	1.5	19c 前
2	SU1	寛永通寶 (新)		四ッ寶銭・広永	22.0	6.0	1.0	19c 前
3	SU1	寛永通寶 (新)		不旧手・高寛	23.0	6.0	0.9	19c 前
4	SU1	寛永通寶 (新)	元	大坂高津銭	22.0	6.0	1.0	19c 前
5	SU2	寛永通寶 (古)		高田銭・縮通	24.0	6.0	1.0	17c 末 (元禄16火災)
6	SU2	寛永通寶 (古)		高田銭・縮通	23.0	5.5	1.3	17c 末 (元禄16火災)
7	SU2	寛永通寶 (新)		丸屋銭 (銭鋳造請負人名)	25.0	6.0	1.0	17c 末 (元禄16火災)
8	SU2	寛永通寶 (新)		細字小文無背	25.0	6.0	1.0	17c 末 (元禄16火災)
9	SU2	寛永通寶 (新)		京都・荻原銭	23.5	6.5	0.8	17c 末 (元禄16火災)
10	SU2	寛永通寶 (新)		旧猿江・正字	22.0	6.0	1.2	17c 末 (元禄16火災)
11	SU2	寛永通寶 (新)		旧猿江・正字	23.0	6.0	1.0	17c 末 (元禄16火災)
12	SK4	寛永通寶 (古)		杵谷銭	25.0	5.5	1.0	
13	SK4	寛永通寶 (新)		不旧手・退永	23.5	6.5	1.0	
14	SK4	寛永通寶 (新)	11波	文政期四文銭	27.5	6.5	1.0	
15	SK5	寛永通寶 (新)		四ッ寶銭・勤永広寛	23.0	6.5	0.8	17c 後～18c 前
16	SK7	雁首銭		通用銭でない	21.0	8.0	2.5	17c 末～18c 前
17	SU11	寛永通寶 (新)		秋田 (川尻)・大字	23.0	6.0	1.0	19c 前
18	SU11	寛永通寶 (新)		不旧手・小目宝	24.0	6.0	1.0	19c 前
19	SU11	寛永通寶 (新)		不旧手・潤縁	23.0	6.0	0.8	19c 前
20	SU11	寛永通寶 (新)		四ッ寶銭・跳永	23.0	6.5	0.8	19c 前
21	SU11	寛永通寶 (新)	元	摂津大坂高津	22.0	6.0	0.8	19c 前
22	SU11	寛永通寶 (新)	11波	明和期四文銭・正字	28.0	5.5	1.3	19c 前
23	SU11	寛永通寶 (新)	11波	明和期四文銭・俯永	28.0	6.0	1.3	19c 前
24	SU11	寛永通寶 (新)	11波	明和期四文銭・俯永	28.0	6.0	1.0	19c 前
25	SU11	寛永通寶 (新)	11波	明和期四文銭・小字	28.0	6.0	1.0	19c 前
26	SU11	寛永通寶 (新)	11波	明和期四文銭・俯永	27.5	6.0	1.0	19c 前
27	SU11	雁首銭		通用銭でない	22.0	-	2.0	19c 前
28	SD14	寛永通寶 (新)		不旧手・潤縁	23.0	6.0	1.0	
29	SU20	寛永通寶 (新)	文か	丸屋銭 (銭鋳造請負人名)	25.0	6.0	1.0	V a 期
30	SU20	寛永通寶 (新)		仙台・長通	24.5	5.5	1.0	V a 期
31	SU20	寛永通寶 (新)		四ッ寶銭・勤永	23.0	6.5	0.5	V a 期
32	SU24	寛永通寶 (新)		無背 (細字)	24.5	5.0	1.2	18c 後
33	SU28	寛永通寶 (新)	元	摂津大坂高津・小字	22.0	6.5	0.8	17c 後～18c
34	SU34	寛永通寶 (新)		縮字・潤縁文無背	25.0	6.0	1.0	18c 前 (享保15or元文3火災)
35	SK48	寛永通寶 (新)	文	背文 (正字背文)	24.5	6.0	1.3	18c 前
36	SK50	寛永通寶 (新)	11波	明和期四文銭・小字	28.0	6.0	1.0	19c 前～中
37	SK51	寛永通寶 (新)	久	鉄銭・背久	22.5	6.0	1.0	19c 前～中 (明治1火災)
38	SU58	寛永通寶 (新)		十万坪 (元文) 無印	23.0	5.5	1.0	18c 前～中 (享保15or元文3火災?)
39	SD62	寛永通寶 (古)		建仁寺銭	24.0	6.0	1.0	19c 前～中
40	SD62	寛永通寶 (新)	文	細字背文	25.0	5.5	1.0	19c 前～中
41	SD62	寛永通寶 (新)		秋田 (川尻)・大字	24.5	6.0	1.0	19c 前～中
42	SU63	寛永通寶 (新)		旧猿江・正字	23.5	6.5	1.0	18c 前 (享保15or元文3火災)
43	SU63	寛永通寶 (新)		四ッ寶銭・勤永広寛	23.5	6.5	1.0	18c 前 (享保15or元文3火災)
44	SU64	寛永通寶 (新)	文	文銭・正字背文	25.0	6.0	1.2	18c 前
45	SU64	寛永通寶 (新)		四ッ寶銭・跳永	23.0	6.5	0.9	18c 前
46	SU64	寛永通寶 (新)		四ッ寶銭・広永	23.0	6.5	1.0	18c 前
47	SU65	寛永通寶 (新)		元文/十万坪・無印	22.5	6.5	0.9	18c 前
48	SK69	寛永通寶 (新)		元文/藤沢銭・吉田島・縮字	23.5	7.5	0.8	18c 前・19c
49	SU75	寛永通寶 (新)		仙台・異書	25.0	6.0	1.0	18c 前
50	SU75	寛永通寶 (新)		四ッ寶銭・勤永広寛	23.0	6.5	1.0	18c 前
51	SL80	寛永通寶 (新)	11波	文政期四文銭・正字	28.0	6.0	1.0	19c
52	SK81	寛永通寶 (新)	文	文銭・細字背文	25.0	5.5	1.3	VII b 期
53	SK81	寛永通寶 (新)		四ッ寶銭・跳永	23.0	6.5	0.8	VII b 期
54	SK81	寛永通寶 (新)		四ッ寶銭・勤永広寛	22.0	6.0	1.0	VII b 期

IV-7 表 銭貨観察表 (1)

第IV章 出土した遺物

遺構	出土遺構	銭 銘	背文	銭 種	寸法 (mm)			共伴資料の年代
					銭径	穿径	輪厚	
55	SK81	寛永通寶 (新)	11波	文政期四文銭・判読難	28.0	6.0	1.0	VIII b 期
56	SE105	寛永通寶 (新)		四ツ寶銭・跳永	23.0	6.5	0.8	18c 前 (享保15or元文3火災)
57	SE105	寛永通寶 (新)		四ツ寶銭・跳永	23.0	6.5	0.8	18c 前 (享保15or元文3火災)
58	SK134	寛永通寶 (新)	文	文銭・細字背文	25.0	6.0	1.0	17c 後～18c 前葉
59	SK137	寛永通寶 (新)		元文期十万坪・含二水永	24.0	6.0	1.0	V b 期
60	SK137	寛永通寶 (新)		仙台・異書	25.0	6.0	1.0	V b 期
61	SK137	寛永通寶 (新)		仙台・重押通・無背	24.5	6.0	1.0	V b 期
62	SK137	寛永通寶 (新)		旧猿江銭・正字	23.5	6.0	0.9	V b 期
63	SK137	寛永通寶 (新)		不旧手・高寛	24.0	6.0	0.7	V b 期
64	SK137	寛永通寶 (新)		元文・十万坪・無印	23.0	7.0	1.0	V b 期
65	SK139	北宋銭 (模鑄銭)		元符通宝	23.5	7.0	0.8	IV b 期 (元禄16火災)
66	SK139	寛永通寶 (古)		仙台・跋宝	25.0	5.5	1.3	IV b 期 (元禄16火災)
67	SK139	寛永通寶 (古)		鳥越銭	25.0	6.0	1.0	IV b 期 (元禄16火災)
68	SK139	寛永通寶 (古)		仙台・跋宝	25.0	6.0	1.0	IV b 期 (元禄16火災)
69	SK139	寛永通寶 (古)		建仁寺銭	25.0	6.0	1.0	IV b 期 (元禄16火災)
70	SK139	寛永通寶 (新)	文	文銭・細字背文	25.0	5.5	1.3	IV b 期 (元禄16火災)
71	SK139	寛永通寶 (新)	文	文銭・細字小文	25.0	5.5	1.3	IV b 期 (元禄16火災)
72	SK139	寛永通寶 (新)	文	文銭・中字背文	25.0	5.5	1.3	IV b 期 (元禄16火災)
73	SK139	寛永通寶 (新)	文	文銭・細字・背小文	25.0	6.0	1.3	IV b 期 (元禄16火災)
74	SK139	寛永通寶 (新)		四ツ寶銭・勁永広寛	23.0	6.5	1.0	IV b 期 (元禄16火災)
75	SK139	寛永通寶 (新)		旧猿江銭・正小字	23.0	6.0	1.0	IV b 期 (元禄16火災)
76	SK139	寛永通寶 (新)		四ツ寶銭・勁永	23.5	6.0	1.0	IV b 期 (元禄16火災)
77	SK139	寛永通寶 (新)		四ツ寶銭・勁永	23.5	6.0	1.0	IV b 期 (元禄16火災)
78	SK141	寛永通寶 (新)		不旧手	24.0	6.5	0.8	V a 期 (享保15or元文3火災)
79	SU143	寛永通寶 (新)		文無背 (縮図背文無背)	25.0	6.0	1.0	18c 前～中
80	SU143	寛永通寶 (新)		四ツ寶銭・跳永	23.0	6.5	0.9	18c 前～中
81	SK144	寛永通寶 (新)		仙台銭・異書低寛	25.0	6.0	1.0	
82	SU150	寛永通寶 (新)		四ツ寶銭・勁永広寛	23.5	6.0	0.8	18c 前
83	SU150	寛永通寶 (新)	11波	明和期四文銭・小字	28.0	6.5	1.0	18c 前
84	SK160	寛永通寶 (古)		高田・縮通	23.5	5.5	1.0	17c 末 (元禄16火災)
85	SK167	寛永通寶 (古)		鳥越銭	25.0	5.5	1.0	17c～近代
86	SK174	寛永通寶 (新)			23.0	6.5	0.9	VI a 期
87	SK174	寛永通寶 (新)		「永久世用」「珍」・京七条	37.5	9.0	0.9	VI a 期
88	SK176・SD239	寛永通寶 (新)	文	細字背文	25.0	5.5	1.3	17c 末
89	SK176・SD239	寛永通寶 (新)	文	正字背文	25.0	5.5	1.3	17c 末
90	SK176・SD239	寛永通寶 (新)	文	細字小文	25.0	5.5	1.3	17c 末
91	SK176・SD239	寛永通寶 (新)		四ツ寶銭・勁永	23.0	6.0	1.0	17c 末
92	SK220	寛永通寶 (新)	文	正字背文	25.5	5.5	1.3	19c 前
93	SU230	寛永通寶 (新)	文	細字背文	25.0	6.0	1.3	18c 前
94	SU230	寛永通寶 (新)		十万坪 (元文) 無印	23.0	7.0	1.0	18c 前
95	SU262	寛永通寶 (古)		太細	24.5	6.0	1.0	17c 末～18c 初
96	SK265	寛永通寶 (新)	文	正字背文	25.0	6.0	1.0	18c 末～19c 初
97	SK265	寛永通寶 (新)		四ツ寶銭・勁永	23.5	6.5	1.0	18c 末～19c 初
98	SE271	寛永通寶 (新)		猿江銭・小字	23.0	5.5	1.0	VIII b 期
99	SU279	寛永通寶 (新)	文	正字背文	25.0	6.0	1.0	V a 期 (享保15or元文3火災)
100	SU279	寛永通寶 (新)		不旧手	24.5	6.5	1.0	V a 期 (享保15or元文3火災)
101	SU279	寛永通寶 (新)	文	正字背文	25.0	5.8	1.0	V a 期 (享保15or元文3火災)
102	SU279	寛永通寶 (古)		沓谷銭	25.0	5.5	1.0	V a 期 (享保15or元文3火災)
103	SU279	寛永通寶 (新)	文	細字小文	25.0	5.5	1.3	V a 期 (享保15or元文3火災)
104	SU279	寛永通寶 (新)		四ツ寶銭・広永	23.5	6.3	0.8	V a 期 (享保15or元文3火災)

IV-7 表 銭貨観察表 (2)

第IV章 出土した遺物

遺構	出土遺構	銭 銘	背文	銭 種	寸法 (mm)			共伴資料の年代
					銭径	穿径	輪厚	
105	SU279	寛永通寶 (新)		旧猿江銭・小字	23.0	6.0	1.0	V a 期 (享保 15or 元文 3 火災)
106	SU279	寛永通寶 (新)		四ッ寶銭・勁永	23.5	6.0	1.0	V a 期 (享保 15or 元文 3 火災)
107	SU279	寛永通寶 (新)		四ッ寶銭・勁永広寛	23.0	6.5	1.0	V a 期 (享保 15or 元文 3 火災)
108	SU279	寛永通寶 (古)		杵谷銭	24.5	5.5	1.0	V a 期 (享保 15or 元文 3 火災)
109	SU279	寛永通寶 (新)		旧猿江銭	23.0	6.5	0.8	V a 期 (享保 15or 元文 3 火災)
110	遺構外	北宋銭 (模鑄銭)		「天聖元宝」	24.0	6.5	1.0	
111	遺構外	寛永通寶 (古)		鳥越銭	24.5	6.0	1.0	
112	遺構外	寛永通寶 (新)		亀戸銭・大字	23.5	6.5	1.0	
写真 113	SE127	天保通宝		焼け爛れ熔着 2 枚				19c～明治
		寛永通寶 (新)		熔着 2 枚				19c～明治
写真 114	SE127	天保通宝		焼け爛れ熔着 4 枚				19c～明治
		寛永通寶 (新)	11 波	1 枚				19c～明治

IV-7 表 銭貨観察表 (3)

小さく、寛の冠が広いものである。109は享保期(1716～1736)末に鑄造された旧猿江銭「正字」である。共伴した他の銭(未掲載)は、寛文8年鑄造の文銭と旧猿江銭であった。本遺構から出土した銭も、前記してきたように100、104～108の鑄造期はいずれも、元禄期(1688～1704)とされる可能性が極めて高いものである。共伴している陶磁器は東大編年Va期、享保15(1730)年の火災資料とされている。構成されている銭は、明暦2年、寛文8年、100、104～108を元禄期としてみると陶磁器より若干古い時期のものであった。

遺構外 (IV-113 図 110～112)

14枚出土している。110は北宋銭「天聖元宝」の模鑄銭である。111は明暦2(1656)年に鑄造された鳥越銭である。112は元文2(1737)年江戸本所亀戸村で鑄造された亀戸銭の「大字」である。

模鑄銭については『方泉處』7号(1994)「中世の貨幣—中世都市、堺出土の模鑄銭鑄型—」嶋谷和彦氏が報告している。中世都市であった堺市環濠都市遺跡の1990年代の調査から模鑄銭鑄型が出土している。遺構の年代は16世紀中頃～後半である。銭種が判読した鑄型は147点である。本地点から出土した2枚「元符通寶」「天聖元宝」の鑄型も出土している。

(2) 煙 管 (IV-114～116 図、IV-8 表)

煙管は、41遺構から雁首62点、吸口41点、クレーパイプの一部が1点出土している。煙管は雁首と吸口とそしてその間にラウ(竹)でつないだ三位位からなるものと、雁首と吸口が一体からなる延べ煙管がある。本地点の雁首と吸口の出土点数を遺構別にみると、同数は9遺構、雁首が多い遺構は19遺構、吸口が多い遺構は8遺構であった。雁首の出土が多い理由については『真砂遺跡』(中井 1987)の報告の中に、たばこをのみ終わった後灰を落とす際に、灰落としなどに叩きつけることによる破損のための廃棄、またヤニ詰まりによる廃棄をあげている。出土している雁首には敲打痕がみられ、またヤニとおもわれる付着物も確認できるものが多い。

なお、煙管の部分名称は『させる』(田中 1988)を参考とした。

SU2 (IV-114 図1、2、3)

雁首2点、吸口2点が出土している。1は首部の短い雁首である。敲打痕が認められる。2は吸口である。中央部より緩やかに細くなる小形のものである。3は首部は太く、口付部に向かい急激に細くなる。口付部は、すぼまる。共伴の陶磁器は17世紀末葉に比定されており、二次的に熱を受けているものが多い。元禄16(1703)年の火災を受けていると推定される。

SK18 (IV-114 図4)

吸口が1点出土している。4は吸口である。口付部に向かい緩やかに細くなる。共伴している陶磁器は東大編年Va期。

SU29 (IV-114 図5)

雁首1点が出土している。5は火皿高は高く腰の張らない碗形である。補強帯を有し、脂返しは大きく湾曲している。小口は潰れている。共伴している陶磁器は17世紀後半～18世紀初頭と推定でき、二次的に熱を受けている。

SD45 (IV-114 図6)

雁首1点が出土している。6は火皿部分は欠損しているが、脂返しは大きく湾曲し、首部は他のものより長く、器壁は厚い、補強帯などから古い形態の特徴を持つものである。共伴している陶磁器は17世紀前葉に位置付けられる。

SU49 (IV-114 図7、8)

雁首、吸口が各1点出土している。7は吸口である。小口から口付部に向かい緩やかに細くなる。8は雁首である。火皿は上部が欠損しているが大きな碗形を呈すると思われる。脂返しの湾曲は小さい。羅字が残存していた。敲打痕が上面にみられるが、裏面にも凹みが認められる。共伴している陶磁器は18世紀前葉と比定される、火災の際の一括廃棄が想定できる遺構である。

SK56 (IV-114 図9)

雁首1点が出土している。9は雁首で、火皿は腰の張る碗形を呈し、脂返しの湾曲は大きく(河骨形)、補強帯が認められる。敲打痕がみられる。共伴している陶磁器は17世紀後半に位置付けられる。

SU63 (IV-114 図10)

雁首1点が出土している。10は雁首である。火皿は器高の低い碗形を呈し、脂返しの湾曲はない。頭部が長いものである。共伴した陶磁器は18世紀前葉に位置付けられる。

SU64 (IV-114 図11)

雁首1点、吸口1点が出土している。11の形態は他のものと異なり、金属を包み込むように羅字を差し込んでおり、さらに羅字の上に金属を被せている肩付きの吸口と思われる。おそらく古泉氏が『地下からあらわれた江戸』(古泉 2002)の中で報告している伊達政宗の墓に埋葬されていた煙管と同様の構造を持つものと思われる。記述しておくとして「ラウは直接雁首と吸口に差し込むのではなく、雄型と雌型のソケットを両端に挿入し、それぞれ雁首と吸口に嵌め込む構造となっている」。共伴した他の吸口は小形のものであった。共伴した陶磁器は18世紀前葉に位置付けられる。

SB70 (IV-114 図12～14)

雁首4点、吸口1点が出土している。12は吸口で、小口から口付部にかけて緩やかに細くなる小

形のものである。13は雁首で、火皿の器高は低く脂返しのないもので、接合部は太い。敲打痕が認められる。14は雁首で、火皿高は高いもので接合部は細いものであった。敲打痕が認められるが先は欠損している。共伴した陶磁器は明治9年に位置付けられる。

SU75 (IV-114 図15、16)

雁首2点、不明1点が出土している。15、16とも火皿高の低い碗形を呈し、脂返しのないものである。共伴した金属では小形の柄鏡が出土している。共伴した陶磁器は18世紀前葉に位置付けられる。

SK81 (IV-114 図17、18)

雁首2点、吸口2点が出土している。17は肩付きの雁首である。火皿高が低い碗形を呈し、脂返しの湾曲は大きく(河骨形)補強帯を有する。敲打痕が認められる。共伴した他の雁首は、火皿高の高い大きな碗形で脂返しの湾曲はないものである。首部を欠損しているため正確な形はわからない。18は吸口である。線彫りで唐草文様を施している。羅字付きである。共伴した陶磁器は東大編年のⅧb期(1820～1830年代)。

SE105 (IV-114 図19、20)

雁首1点、吸口1点が出土している。19は吸口で小口から口付部にかけ緩やかに細くなる。20は雁首で、火皿高の高い碗形を呈し、脂返しは小さいもので補強帯を有する。共伴している陶磁器は18世紀前葉に比定でき、享保15(1730)年もしくは、元文3(1738)年の火災の一括廃棄であろうと想定される。

SU117 (IV-114 図21～23)

雁首1点、吸口2点が出土している。21は雁首で、火皿高は低く碗形を呈し、脂返しの湾曲はないものである。敲打痕が認められる。22は吸口で、中央部より急激に細くなる小形のものである。23は吸口で、小口から口付部まで緩やかに細くなるものである。共伴している陶磁器は18世紀前葉と推定される。

SK133 (IV-115 図24～26)

雁首1点、吸口3点が出土している。24は雁首で、火皿は大きい碗形を呈し、脂返しの湾曲はないもので、火皿との接合部は太い。25は吸口で、中央部より急激に細くなり、口付部は、すぼまるものである。26は吸口で、太いものである。残存している羅字には赤漆が認められる。共伴している陶磁器は18世紀後葉に位置付けられる。

SK134 (IV-115 図27)

雁首1点が出土している。27は雁首で、火皿高の高い碗形を呈し、脂返しの湾曲は大きく(河骨形)、接合部の細いものである。火皿の口縁部の厚さは不均一である。共伴している陶磁器は17世紀後半～18世紀前半に位置付けられる。

SK137 (IV-115 図28～30)

雁首2点、吸口4点出土している。28は雁首で、火皿高が低く、脂返しのないものである。火皿は変形している。29は肩付きの吸口で、口付部はわずかにすぼまる、小形のものである。30は全体的に細身の吸口である。口付部は、すぼまるタイプである。共伴している他の雁首は28と類似している。また吸口は短いものであった。共伴している陶磁器は東大編年Ⅴb期(1730～1740

年代)である。

SK139 (IV-115 図31～39)

本地点で最も多く煙管が出土した遺構である。雁首、吸口各6点であった。各6点であるためセット関係をみたが明らかにできなかった。31は雁首で、火皿高は高く腰の張らない碗形を呈し、脂返しは大きい(河骨形)ものである。32は雁首で、火皿高は高く腰の張らない碗形である。脂返しは31より小さいが認められる。33は雁首で、火皿が欠損している。脂返しは31と同様で小さいものである。34は雁首で、火皿高は他のものより高く、脂返しは大きく(河骨形)、補強帯を有するもので、接合部は細いものであった。35は短い吸口で、口付部付近で細くなる。口付部は、すぼまるものである。36は吸口で急激に細くなり、口付け部は、すぼまるものである。37は肩付きの吸口で小口径は大きく、口付部は、すぼまるものである。38は緩やかに細くなる吸口である。39は細く長い吸口で緩やかに細くなる。共伴している陶磁器は東大編年のIVb期(1690～1700年代)である。

SK152 (IV-115 図40～43)

雁首5点、吸口4点である。40は雁首で、火皿は碗形を呈し器高は低く、口径は大きいもので、脂返しの湾曲はない。41は吸口で、小口径は広く、口付部付近で急激に細くなるものである。42は緩やかに細くなる吸口である。43は短く緩やかに細くなる吸口で、口付部はすぼまる。共伴している陶磁器は東大編年VIa期。

SK157 (IV-115 図44～46)

雁首3点、吸口1点出土している。44は雁首で、火皿は碗形で大きく、脂返しが無いもので、火皿の接合部は太い。45は雁首で、火皿は碗形を呈し器高が低い、脂返しが無いものである。敲打痕が認められる。46は雁首で、火皿高が低く碗は腰の張る小さいものである。共伴した吸口は、肩付きのものであったと思われ、肩の部分のみの出土である。遺構の年代は不明であるが、近代のSB70に切られている遺構である。

SK174 (IV-116 図47)

雁首1点出土している。47は雁首で、火皿は碗形で大きく、脂返しは無いもので、火皿との接合部は細い。敲打痕が認められる。共伴している陶磁器は東大編年VIa期(1750～1760年代)である。

SK176 (IV-116 図48)

吸口1点が出土している。48は吸口で、緩やかに細くなるものである。共伴している陶磁器は17世紀末に位置付けられる。

SK186 (IV-116 図49)

吸口1点が出土している。49は吸口で、緩やかに細くなり、口付部はわずかに脹らむものである。共伴している陶磁器は近代に位置付けられる。

SD197 (IV-116 図50)

雁首1点が出土している。50は肩付きの雁首である。火皿は欠損している。脂返しの湾曲はないもので、火皿との接合部は太い。

SK220 (IV-116 図 51、52)

雁首1点、吸口1点が出土している。51は雁首で、小さく細いもので脂返しは認められる。52は小口径の大きな吸口である。口付部のやや上で急激に細くなる。口付部は、すぼまるものである。共伴している陶磁器は19世紀前葉に位置付けられる。

SU230 (IV-116 図 53)

吸口3点が出土している。53は吸口で、線彫りで唐草文様を施している。口付部はやや張ってわずかにすぼまる。共伴した吸口は細かい線条の筋文様(小松筋)が施されているものであった。共伴している陶磁器は18世紀前葉に位置付けられる。

SK265・304 (IV-116 図 54)

雁首が1点出土している。54はやや角の丸い四角形であるが、小口は円形を呈する。羅宇が残存している。硬質感のあるものである。共伴している陶磁器は18世紀末～19世紀初頭に位置付けられる。

SU279 (IV-116 図 55)

雁首1点が出土している。55は雁首で、火皿は欠損している。共伴している陶磁器は東大編年V a期。

SK282 (IV-116 図 56)

雁首1点が出土している。56は雁首で、火皿高は低く小さいものである。六角形を呈し脂返しの湾曲のないものである。共伴している陶磁器は19世紀～明治に位置付けられる。

SK290 (IV-116 図 57～59、67)

雁首3点、吸口1点、クレイパイプが出土している。57は雁首で、火皿は大き碗形を呈し、脂返しは大きく(河骨形)、補強帯を有する。器壁は厚く重量感がある。火皿の口縁部の厚さは均一でない。首部は長いものである。58は雁首で、火皿は低い大きな碗形で器高が低いもので、脂返しの湾曲はない。共伴している雁首も58と同様の形態を呈している。59の吸口は肩付きで細いものである。67は金属ではないが喫煙具のためここで取り上げた。クレイパイプの首部である。古泉編年の脂返しの湾曲から57、58、59をみると、57は古泉編年のⅢ期(17世紀後葉)にあたる。58、59はⅥ期(19世紀)になる。Ⅵ期の火皿は小型で逆台形を呈するとあるが、58、59は大きな碗形である。共伴している陶磁器は東大編年V b期(1730～1750年代)である。

SK306 (IV-116 図 60)

60の雁首1点が出土している。火皿は碗形で器高は高く、脂返し湾曲は大きく(河骨形)、首部が長いもので、補強帯を有する。火皿は変形している。上下に敲打痕が認められる。共伴している陶磁器は17世紀末～18世紀初頭に位置付けられる。

SU313 (IV-116 図 61)

雁首2点出土している。61は雁首で火皿はやや小さい。脂返しの湾曲は小さいもので、首部は短い。首部には肩を思わせる稜線がみられる。共伴した雁首も同様な形態をしているが首部は細いものである。共伴している陶磁器は17世紀末であり、二次的に熱を受けている遺物が多く、火災の後の一括廃棄遺構と推定される。

SU368 (IV-116 図 62)

62の雁首1点が出土している。火皿は欠損している。脂返しの湾曲は大きいものである。共伴した陶磁器は17世紀末に位置付けられ、元禄16(1703)年の火災資料とされている。

SK381 (IV-116 図63、64)

雁首1点、吸口1点が出土している。63は肩付きの吸口である。64は雁首で、火皿部分は欠損している。接合部は上であるが、特殊な帯状である。共伴している陶磁器は19世紀に位置付けられる。

SK392 (IV-116 図65)

吸口1点が出土している。65は細く長いものである。共伴している陶磁器は東大編年Ⅷc期。

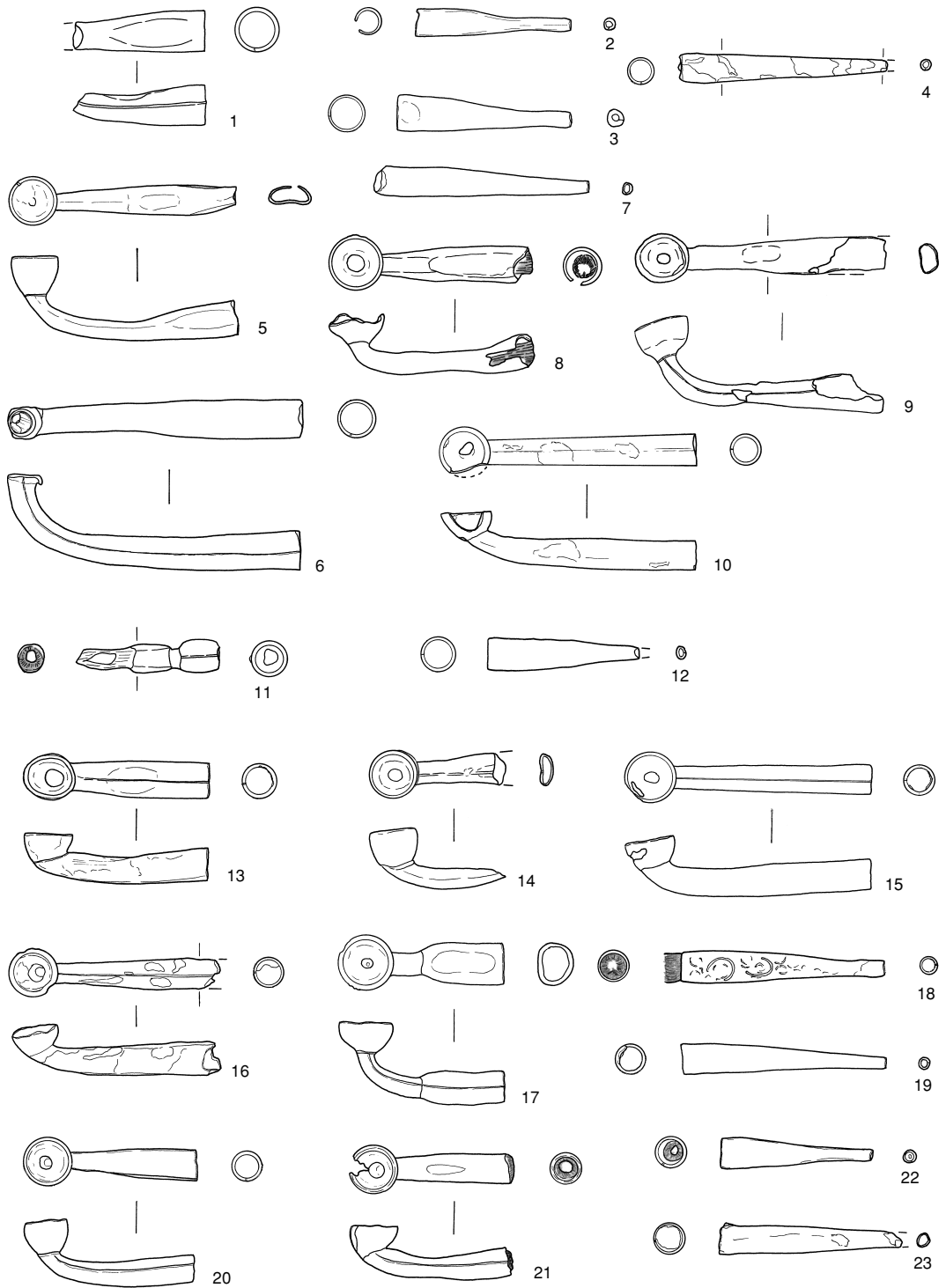
SK397 (IV-116 図66)

雁首2点、吸口1点が出土している。66の火皿は大きな碗形を呈し、器高は低いタイプである。脂返しの湾曲は消失した形態である。器壁は厚いものである。共伴した雁首は火皿は欠損しているが、脂返しの湾曲は小さいものである。共伴した陶磁器は19世紀前葉に位置付けられる。

雁首の製作過程の継ぎ目の蠟付けについてみると、左、右、上部の3種類ある。本地点の62点のうち継ぎ目が確認できた50点(掲載図にないものも含まれる)についてみると、左が31点(61%)、右1点(2%)、上18点(35%)であった。本地点以外の遺跡ものについてみると、増上寺子院群の煙管131点(報告書上134点)のうち、左90点(67%)、右11点(10%)、上10点(7%)、不明20点(15%)であった。尾張藩上屋敷遺跡Ⅵの煙管は135点のうち左90点(67%)、右14点(10%)、上10点(7%)、不明21点(16%)であった。溜池遺跡では101点のうち、左63点(62%)、左上16点(16%)、左下1点(1%)、右2点(2%)、上19点(18%)であった。

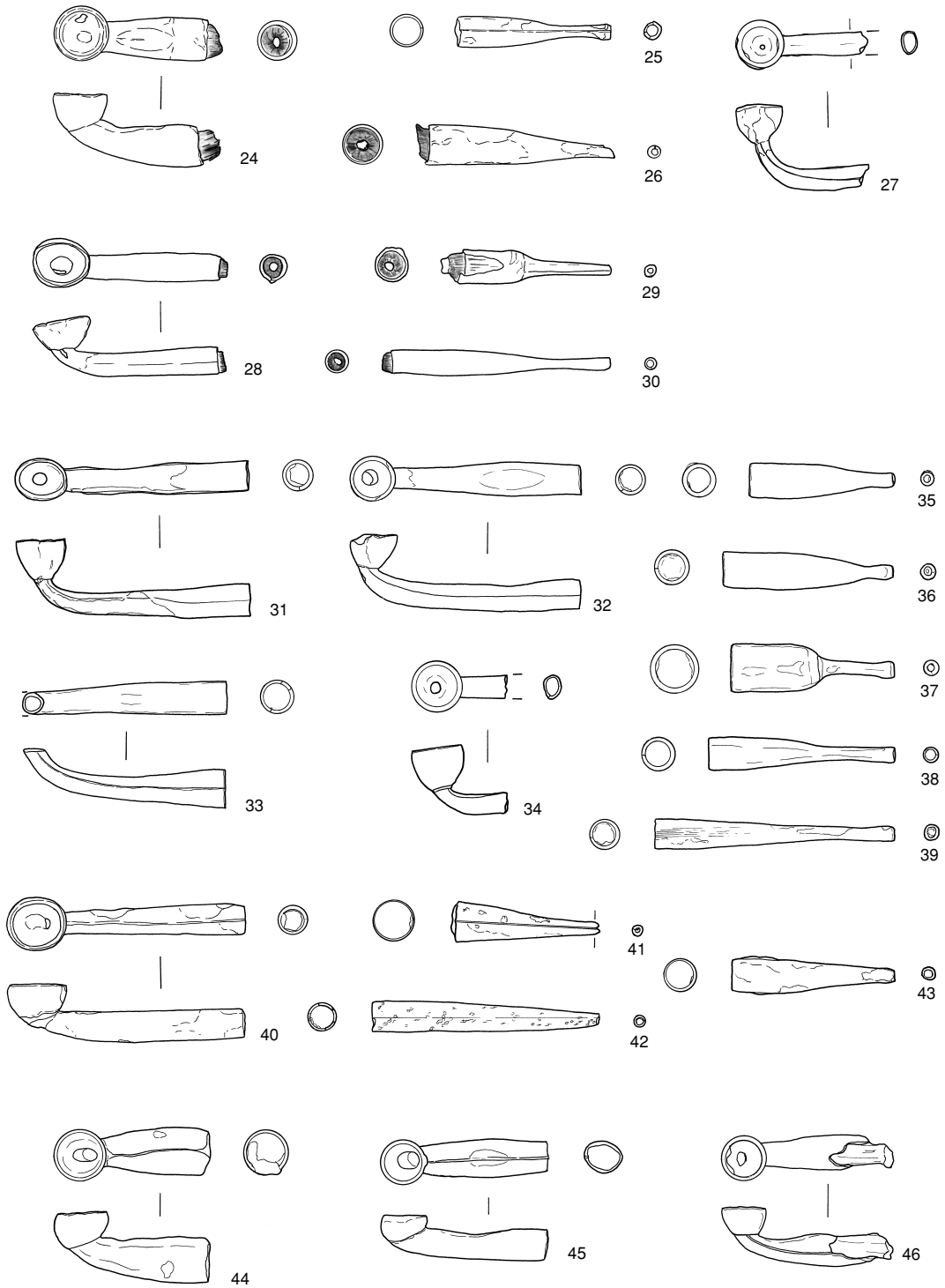
以上の4遺跡を比較してみると、本地点のものは上に蠟付けがあるものが他の遺跡より多く35%で、上記遺跡の増上寺子院群と尾張藩上屋敷遺跡Ⅵは7%、溜池遺跡は18%であった。蠟付けが右にあるものは増上寺子院群と尾張藩上屋敷遺跡Ⅵで10%、本地点と溜池遺跡は2%であった。左に蠟付けがあるものは4遺跡とも60%代であった。このように継ぎ目が異なるのはどんな理由であるのか明らかではないが、五十嵐氏は、継ぎ目が右にあるか、上にあるかは、首部の湾曲に関連するのではないだろうかと報告している(五十嵐 1988)。

第IV章 出土した遺物



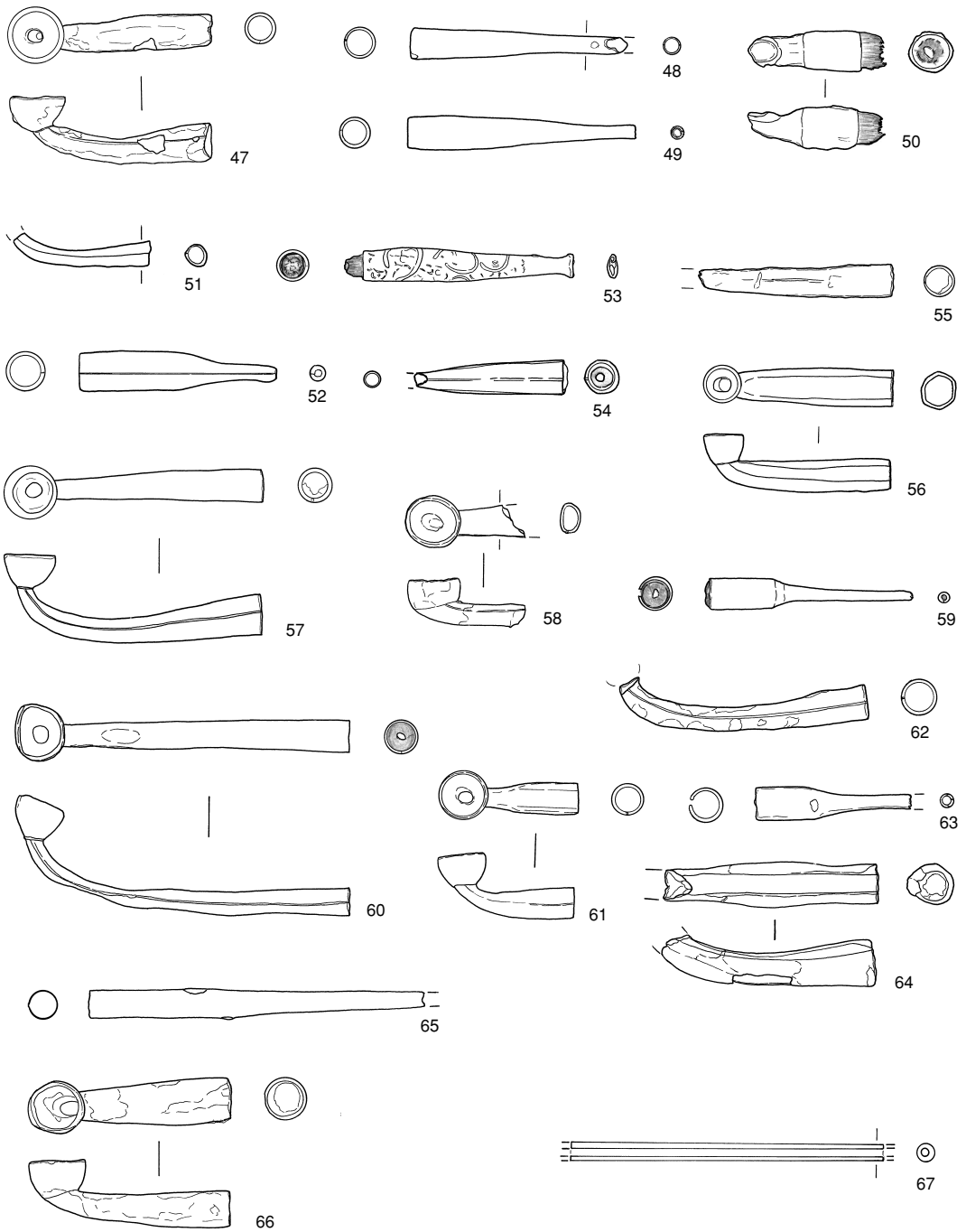
IV-114図 煙管 (1) S = 1/3

第IV章 出土した遺物



IV-115図 煙管 (2) S = 1/3

第IV章 出土した遺物



IV-116図 煙管 (3) S = 1/3

第IV章 出土した遺物

図版	出土遺構	部位	寸法 (mm)			蠟付け	脂返し湾曲	共伴資料の年代	古泉 編年
			長さ	火皿径	小口径				
1	SU2	雁首	(40.0)	—	12.0	左	—	17c末(元禄16火災)	IV期
2	SU2	吸口	46.0	—	8.0			17c末(元禄16火災)	IV期
3	SU2	吸口	52.0		11.0			17c末(元禄16火災)	IV期
4	SK18	吸口	62.0		8.0			V a期	
5	SU29	雁首	68.0	15.0	—	右	大	17c後~18c初	III期
6	SD45	雁首	88.0	—	12.0	左	大	17c前	III期
7	SU49	吸口	(60.0)	—	—	左	無	18c前	V期
8	SU49	雁首	(64.0)		—			18c前	V期
9	SK56	雁首	(75.0)	16.0	—	左	大	17c後	III期
10	SU63	雁首	78.0	15.0	9.0	中	無	18c前(享保15or元文3火災)	V期
11	SU64	吸口	(44.0)		11.0			18c前	
12	SB70	吸口	(46.0)		10.0			明治9年	
13	SB70	雁首	55.0	15.0	10.0	中	無	明治9年	VI期
14	SB70	雁首	(40.0)	15.0	—	中	小	明治9年	V期
15	SU75	雁首	74.0	15.0	8.0	中	無	18c前	V期
16	SU75	雁首	(64.0)	(14.0)		中	無	18c前	V期
17	SK81	雁首	50.0	16.0	(10.0)	左	大	VIII b期	II期
18	SK81	吸口	62.0		9.0			VIII b期	
19	SE105	吸口	62.0		9.0			18c前(享保15or元文3火災)	
20	SE105	雁首	52.0	14.0	9.0	左	大	18c前(享保15or元文3火災)	III期
21	SU117	雁首	50.0	(14.0)	(8.0)	左	無	18c前	V期
22	SU117	吸口	46.0		9.0			18c前	
23	SU117	吸口	(56.0)		(9.0)			18c前	
24	SK133	雁首	46.0	16.0	14.0	中	無	18c後	V期
25	SK133	吸口	47.0		(9.0)			18c後	
26	SK133	吸口	(46.0)		12.0			18c後	
27	SK134	雁首	(40.0)	14.0	—	左	大	17c後~18c前	III期
28	SK137	雁首	56.0	16.0	8.0	左	小	V b期	V期
29	SK137	吸口	46.0		(10.0)			V b期	
30	SK137	吸口	66.0		7.0			V b期	
31	SK139	雁首	70.0	16.0	9.0	左	大	IV b期(元禄16火災)	III期
32	SK139	雁首	70.0	(16.0)	9.0	左	大	IV b期(元禄16火災)	III期
33	SK139	雁首	(62.0)	—	10.0	左	大	IV b期(元禄16火災)	III期
34	SK139	雁首	(62.0)	16.0	—	左	大	IV b期(元禄16火災)	III期
35	SK139	吸口	44.0		10.0			IV b期(元禄16火災)	
36	SK139	吸口	52.0		10.0			IV b期(元禄16火災)	
37	SK139	吸口	48.0		14.0			IV b期(元禄16火災)	
38	SK139	吸口	56.0		10.0			IV b期(元禄16火災)	
39	SK139	吸口	72.0		9.0			IV b期(元禄16火災)	
40	SK152	雁首	71.0	18.0	8.0	中	無	VI a期	V期
41	SK152	吸口	49.0		12.0			VI a期	
42	SK152	吸口	68.0		9.0			VI a期	
43	SK152	吸口	68.0		9.0			VI a期	
44	SK157	雁首	46.0	14.0	14.0	中	無		VI期
45	SK157	雁首	52.0	14.0	14.0	中	無		
46	SK157	雁首	(52.0)	14.0	—	左	小		V期
47	SK174	雁首	60.0	17.0	10.0	左	小	VI a期	V期
48	SK176・SD239	吸口	(64.0)		9.0			17c末	
49	SK186	吸口	67.0		9.0			近代	
50	SD197	雁首	(40.0)	—	12.0		無		
51	SK220	雁首	(40.0)	—	—	左	大	19c前	IV期
52	SK220	吸口	58.0		11.0			19c前	
53	SU230	吸口	62.0		9.0			18c前	
54	SK265・SK304	雁首	(44.0)	—	10.0	中	—	18c末~19c初	

IV-8表 煙管観察表(1)

第IV章 出土した遺物

図版	出土遺構	部位	寸法 (mm)			蠟付け	脂返し湾曲	共伴資料の年代	古泉 編年
			長さ	火皿径	小口径				
55	SU279	雁首	(58.0)	—	10.0	中	—	V a期 (享保15or元文3火災)	
56	SK282	雁首	56.0	11.0	11.0		無	19c~明治	
57	SK290	雁首	76.0	15.0	10.0	左	大	V b期	Ⅲ期
58	SK290	雁首	(35.0)	14.0	—	左	無	V b期	
59	SK290	吸口	62.0		9.0			V b期	
60	SK306	雁首	98.0	15.0	9.0	左	大	17c末~18c初	Ⅲ期
61	SU313	雁首	42.0	13.0	9.0	左	小	17c末 (元禄16火災)	
62	SU368	雁首	(72.0)	—	10.0	左	大	17c末 (元禄16火災)	Ⅲ期
63	SK381	吸口	56.0		10.0			19c	
64	SK381	雁首	(62.0)		14.0	中	—	19c	
65	SK392	吸口	(98.0)		7.0	有		VIII c期	
66	SK397	雁首	60.0	16.0	11.0	左	無	19c前	V期
67	SK290	吸口	(92.0)	—	(5.0)	中	—	V b期	V期

IV-8表 煙管観察表 (2)

(3) 銀製品・銅製品・鉄製品 (IV-117~119 図、IV-9・10 表)

ここでは、銭貨・煙管・釘以外の銅製品・鉄製品について遺構ごとに明記する。共伴資料の年代は陶磁器によるものである。なお、実測図はIV-117、118 図は銅製品でIV-119 図は鉄製品である。

SU1 (IV-117 図1、IV-119 図1)

IV-117 図1 は火箸である。頭頂部は球状に作出し、球下部に沈線、上部に文様を施す。細く小形のものである。

鉄製品IV-119 図1 は包丁である。共伴している陶磁器は19世紀前半に位置付けられる。

SU2 (IV-117 図2)

2 は小柄の柄である。無文である。共伴している陶磁器は17世紀末葉と推定される。元禄16 (1703) 年の火災の資料と推定される。

SK7 (IV-117 図3)

3 は切羽である。凹凸が顕著である。刀身を鞘に収める際に、鞘口が当たるところの金具である。陶磁器は二次的に熱を受けており、17世紀末~18世紀前半と推定される。

SK21 (IV-119 図2)

2 は鉄製のサナである。断面が逆台形を呈し、格子状になっている。焜炉に付帯するものである。「サナ」、「目皿」、「箕子(すのこ)」、「灰落とし」等呼称されているもので、土製と鉄製がある。焜炉研究の中で小林謙一氏が「多孔皿」、「円盤型土製品盤」と分類したものである(小林 2003)。また、小林氏は土製のものについては「サナは多孔皿→多孔盤→スノコ状の盤の順で出現する」としている。本地点からは鉄製のサナが複数出土している。東京大学附属病院地点のⅧ期(1800~1860)に比定されているH21-2から焜炉(涼炉)に鉄製のサナが錆び、附着した状態で出土している。本遺構から出土している陶磁器は19世紀前~中葉に位置付けられるもので、H21-2と同時期である。

SK22 (IV-119 図3)

3 は鏝(かすがい)である。断面は長方形を呈し、細身のもので爪が長い。ものを繋ぐためのものである。共伴している陶磁器は18世紀後半~19世紀初頭に位置付けられる。

SU52 (IV-117 図4)

4は燭台の蝸受けの皿である。底部は凸凹している。中央の穿孔の直径は10mmである。覆土に焼土と炭化物が含まれており、遺物は二次的に熱を受けた本瓦で陶磁器は出土していない。本瓦から18世紀以降のものと思われるが、詳細な年代の位置付けは不明である。

SU61 (IV-119 図4)

4は小型の錠(かすがい)で、断面は円形を呈する。他の金属は釘のみである。共伴している陶磁器は18世紀前葉に位置付けられる。

SU63 (IV-117 図5、IV-119 図5、6)

IV-117 図5は小柄である。「福口寿」?の文字が線彫りしてある。

鉄製品のIV-119 図5、6は器種は不明である。5の頭部は輪になっている。紐等を通して繋ぐ金具であろうか。6は角金具であろうか。鉾が5ヶ所付いている。共伴している陶磁器は18世紀前葉に位置付けられる。享保15(1730)年もしくは元文3(1738)年の火災一括資料である。

SB70 (IV-117 図6)

6は不明。重量感のある銅製品で表裏に成形時の型痕あり。表面に印が線彫りされている。共伴の陶磁器から明治9年に位置付けられる。

SU75 (IV-117 図7、IV-119 図7)

IV-117 図7は「藤原吉重」と銘のある懐中柄鏡である。砂目地向かい合う亀が施されている。藤原吉重については、近世京都の鋳鏡師の居住地一覧表に見ることができ、京都烏丸三条に居住していたことがわかる。また、工房の存続期間は寛文年間～享保年間(1667～1726)となっている(久保 1999)。

鉄製品IV-119 図の7は菜切り包丁である。共伴している陶磁器は18世紀前葉に位置付けられる。

SL78 (IV-117 図8、9)

8は耳搔きが付いた銀製の簪である。9は肩に半菊花文が施された真鍮製の簪である。

SL79 (IV-117 図10)

10は家紋の目結紋「陰丸輪に四つ目」が線彫りされた銀製の柄である。中空であるが貫通はしていない。紅筆等の柄であろうか。

SL80 (IV-117 図11～14)

11は耳搔き付きの銀製の簪である。12は朱色の瑪瑙がついた銀製の玉簪である。頭部は欠損しているが、耳搔きが付いていたと思われる。13は真鍮製の筭である。空洞で太いものである。差し込み式になっていたものか。14は真鍮製の襟止めである。襟止めは着物の下に着る肌襦袢などの中襟を整えるためのものである。この厠遺構からは他に石製の温石と四文銭、泥メンコが出土している。遺物は遺構の周縁に集中して出土した。

SK81 (IV-117 図15～23、IV-119 図8～10)

IV-117 図15は火箸である。頭部は別作りで付けている。太さにむらがある。IV-117 図16は5mm角の角柱である、重量感あり。器種不明。IV-117 図17、18は引出しの引き手か。IV-117 図19は襖の引き手である。IV-117 図20は釣金具、灯明具に使用されたものであろうか。IV-117 図21は硬質な鉸(つる)である。器種不明。提灯の上輪に装着するものであろうか。IV-117 図22

は飾り金具、鋏を打ち込むための孔が6ヶ所に穿たれている。IV-117図23は器種不明。図の右端を中心に360度回転する、また上部の爪状も同様である。

鉄製品IV-119図8は菜切り包丁であると思われる。IV-119図9は鋏(かすがい)である。左右の爪の広がり異なるのは、使用された後のためであると思われる。IV-119図10は鋏前である。本体の中は中空である。他の金属製品は銭貨、煙管が出土しており、また焜炉に用いるサナ片が多数、大きめの五徳や卸し金の柄等が出土している。割れた一升徳利に鍋の小片6個が入った状態で出土している。意図的に入れたものなのか偶然なのか判断し難い資料である。共伴資料の中にガラス製の簪類が複数出土している。共伴している陶磁器は東大編年Ⅷb期。

SK99 (IV-119図11)

11は鉄製のサナ状製品である。格子は十文字にあるだけで径の小さいものである。小さな焜炉に使用したものであろうか。遺物は17世紀後半と19世紀陶磁器、土器が混在している。共伴資料に基石形土製品があり23点出土している。

SK101 (IV-117図24、25、IV-119図12)

IV-117図24は角金具である。地模様は魚々子(ななこ)、線彫りで七宝紋を施している。IV-117図25は引出しなどに用いる座金である。2点出土している。

鉄製品IV-119図12は吊り金具である。図の下方部は左右に差し込んであり、可動する。大きな船竿筥や長持ちなどの側面にある金具か。移動時に竿を差し入れて担ぐためのものか。共伴資料には、带状金具15片が出土している。金具は穿孔されている。共伴している陶磁器は17世紀後葉のもの。

SK137 (IV-117図26、27)

26は灯心押さえである。27は吊り手状金具。左右2ヶ所に鋏孔を有する。吊り灯台の一部か。共伴している陶磁器は東大編年のⅤb期(1730～1740年代)。

SK139 (IV-117図28～31、IV-119図13)

IV-117図28は飾り金具。地模様は魚々子(ななこ)、線彫りで草花文を施している。鋏孔は3ヶ所。IV-117図29は鍵隠し。上下に可動する。IV-117図30は引き手金具か。IV-117図31は目貫もしくはたばこ入れの前金具か。蕉葉に木瓜を象っているものか。鉄製品IV-119図13は器種不明。共伴の陶磁器、土器は東大編年Ⅳb期、元禄16(1703)年の火災一括資料である。

SK144 (IV-117図32)

32は器種不明。薄い板状のものである。

SU150 (IV-118図33)

33は小柄、無文である。共伴資料は銭貨、煙管、飾り金具が出土している。共伴している陶磁器は18世紀前葉に位置付けられる。

SK152 (IV-118図34)

34は器種不明。図の下方部は銅製で先に向かい細くなる。籠状の上部は金鍍金を施し、表面は縞状に施されている。共伴している陶磁器は東大編年Ⅵa期(1750～1760年代)。

SK166 (IV-118図35、36)

35は銅製の簪と思われる。図上部の肩は、足3本を編み込んで作っている。頭頂部は欠損。同

様のものが他に2点出土しているが、大きさは3種類で図にしたものが最も大きい。36は不明。胴部を撚っている。撚りは均一性がないものであった。共伴資料に骨角製、硝子製の簪がある。共伴している陶磁器は東大編年Ⅷc期。

SK176・SD239 (IV-118 図37、38)

37は芯切り鋏か。38は襖の引き手である。共伴している陶磁器は17世紀末に位置付けられる。

SK220 (IV-118 図39、40)

39は釣り状金具。40は管状製品で上部は貫通していない。2点とも器種不明。共伴している陶磁器は19世紀前葉に位置付けられる。

SK260 (IV-118 図41、42)

41は小柄である。地模様は魚々子(ななこ)、蛤や結び紐等を高肉彫りし、ケシメツキを施している。42は銀製の耳搔きか。小柄と出土している事を考えると耳搔き(筭)として男性が使用したものであろうか。竹状を呈した小形のものである。共伴資料は門扉の金具と思われる大型の帯状金具が3点出土している。金具は等間隔で穿孔されている。

SE271 (IV-119 図14)

14は小刀である。共伴している陶磁器は東大編年Ⅷb期。

SK290 (IV-118 図43、44)

43は火箸である。頭頂部は球状に作りだし、下に沈線を巡らす。44は水滴である。注口部は角に設けている。共伴している陶磁器は東大編年Ⅴb期(1730～1750年代)。

SU313 (IV-118 図45～49、IV-119 図15～17)

IV-118 図45は蝶番(ちょうつがい)である。IV-118 図46、47は火入れと思われる。内面器壁に灰褐色の残留物付着、灰の焼けたものであろうか。本遺構から3点出土している。たばこ盆用の火入れか。IV-118 図48は灯火具。蠟燭を立てる燭台か。IV-118 図49は輪花形の襖の引き手である。底面は側面と別作りである。縁は細かい刻みを施している。

鉄製品IV-119 図15は鋸(かすがい)である。断面は長方形を呈している。鋸は7点出土している。IV-119 図16は器種は不明である。IV-119 図17は鋏(やつとこ)である。工作物をつまむのに用いるものである。遺物の多くは二次的に熱を受けている。共伴している陶磁器は17世紀末に位置付けられ、元禄16(1703)年の火災により廃棄されたと推定される。

SK322 (IV-118 図50)

50は無紋の小柄である。共伴資料なしの遺構である。

SE324 (IV-118 図51)

51は鍵隠しである。引出しの鍵穴を隠すための飾りである。上下に可動する。共伴している陶磁器は18世紀前葉と19世紀前葉に位置付けられる。

SL347 (IV-118 図52)

52は銀製で金鍍金された簪である。撥形の大きな耳搔きと福良雀が付いている。福良雀の下には笹文が彫り込まれた変わり簪である。撥形の耳については、『守貞謄稿』に記述があり、京坂地方では専ら使用され、この形を撥耳というところある。また、円形の耳搔きについては京坂の者は江戸耳というところある。出土する簪の多くは円形の耳搔きである。

SU368 (IV-118 図 53)

53は漆塗り木片付きの座金である。出土資料の多くは二次的に熱を受けており、火災の際に廃棄された可能性もある。共伴している陶磁器は17世紀末に位置付けられる。

SK392 (IV-118 図 54～57、IV-119 図 18)

IV-118 図 54～56は真鍮製の簪である。54は五弁の花形に作られた変わり簪である。頭頂部は欠損している。55は小形の耳搔きが付いた細身の簪である。56は頭部が「μ」字形に作られている。一本足の簪である。IV-118 図 57は文様が施された掛金具である。共伴資料には骨角製、ガラス製の簪類が複数出土している。

鉄製品IV-119 図 18は小刀である。共伴している陶磁器は東大編年Ⅷc期(1830～1840年代)。

SK394 (IV-118 図 58)

58は底部がわずかに凹んだ銅製の碗である。共伴している陶磁器は19世紀前葉～中葉に位置付けられる。

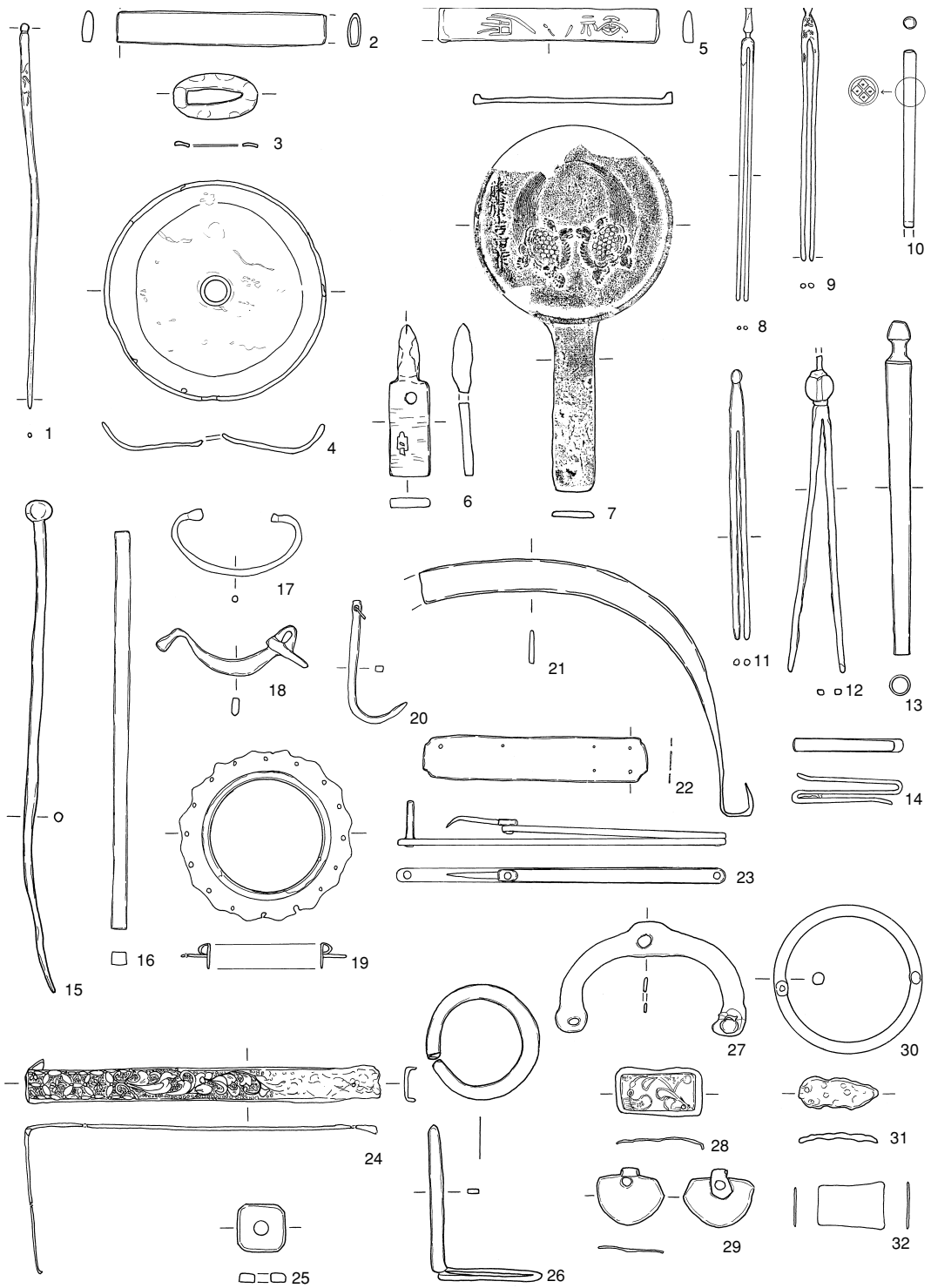
SU399 (IV-118 図 59)

59は煙管と同様に蝋付けされているもので、器種は不明。共伴している陶磁器は19世紀前半に位置付けられる。

遺構外 (IV-118 図 60～62)

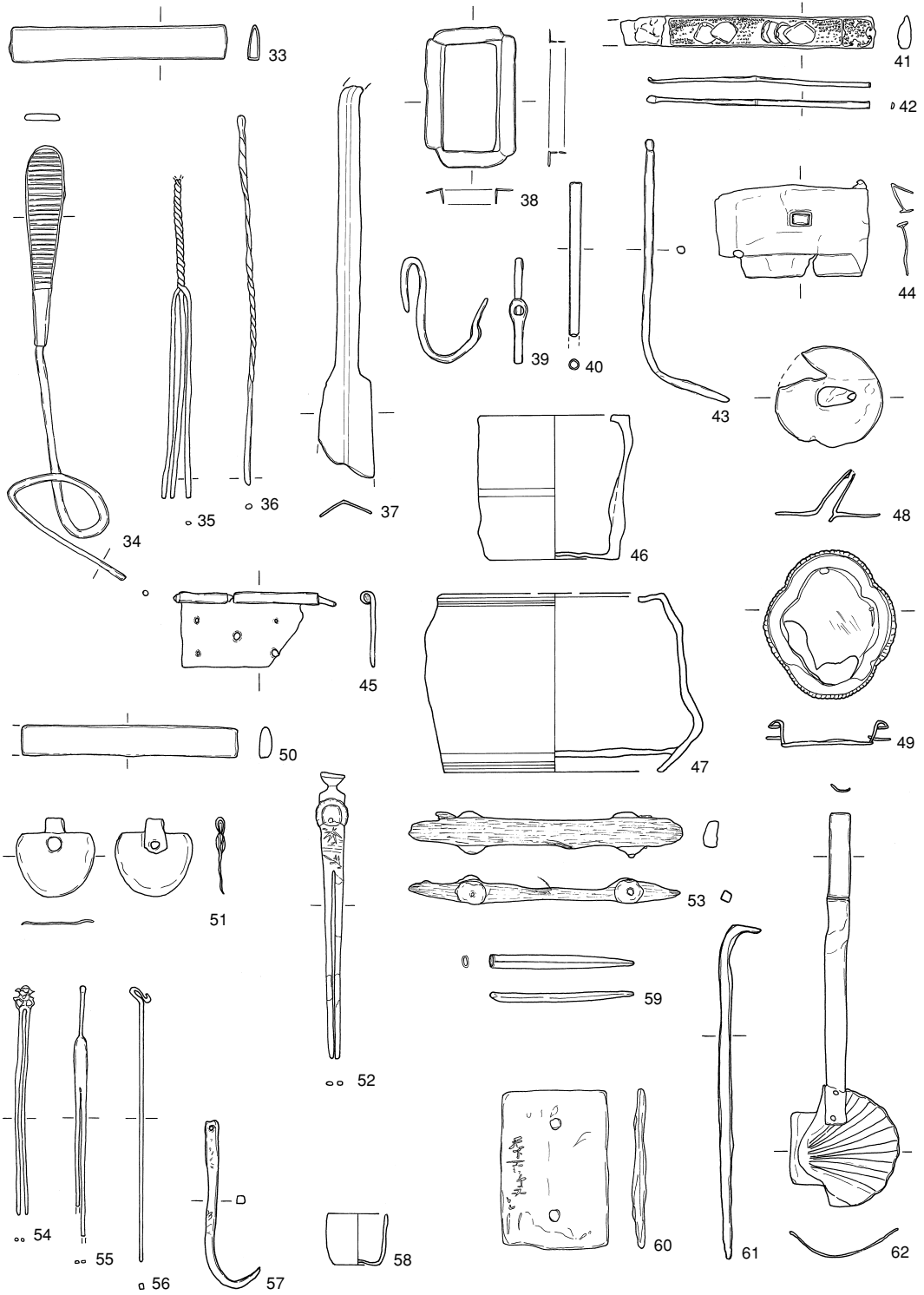
60は「天下一…」と刻印のある紐付きの懐中鏡で、地紋は霰地であった。天下一のみ判読できたが、腐食が激しいため作家銘は確認できなかった。61は銅製の瓦釘か。62は真鍮製の柄杓である。貝柄杓を模倣して作られている。

第IV章 出土した遺物



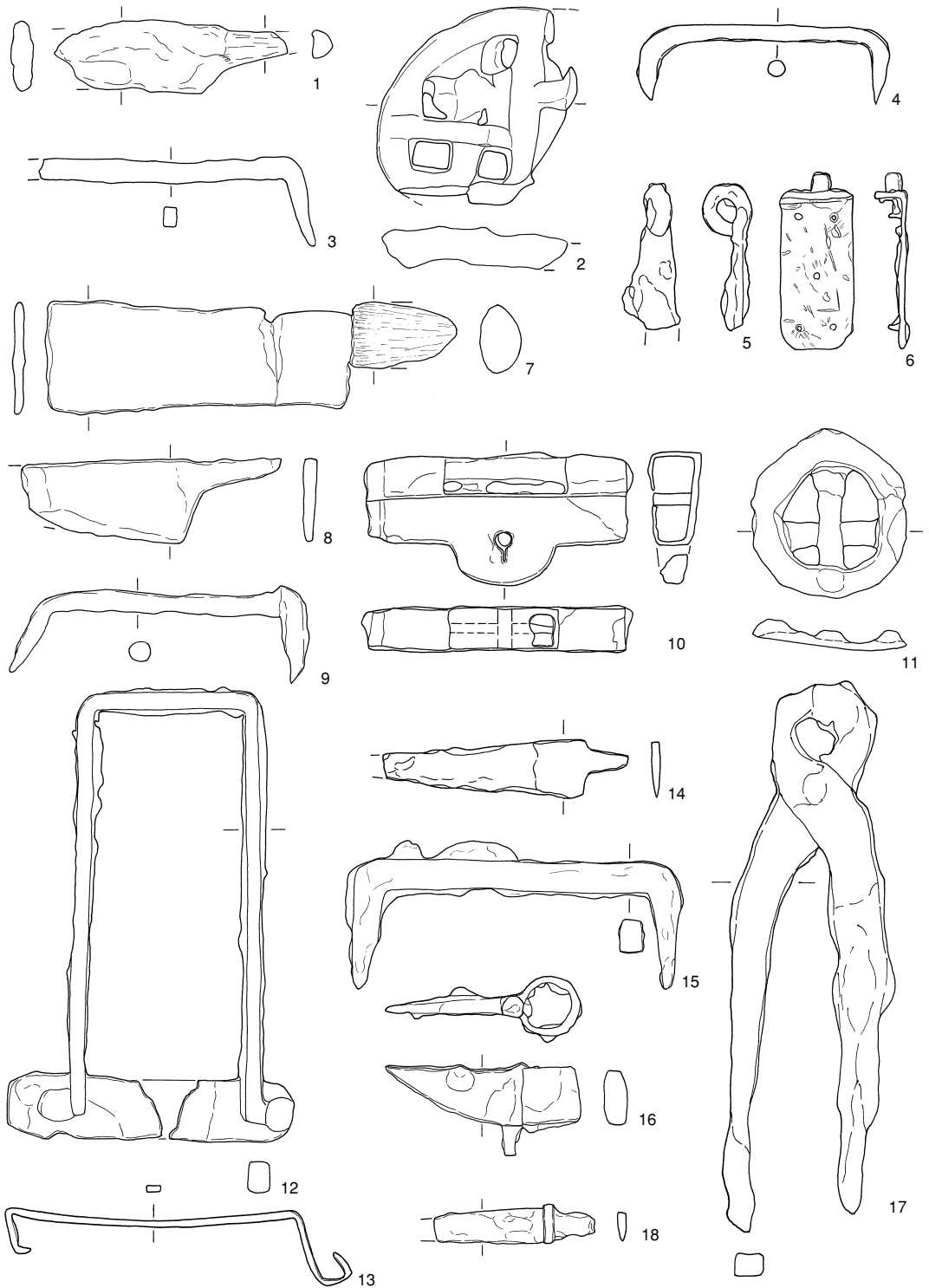
IV-117図 銅製品(1) S=1/3

第IV章 出土した遺物



IV-118図 銅製品(2) S=1/3

第IV章 出土した遺物



IV-119図 鉄製品 S = 1/3

第IV章 出土した遺物

図版	出土遺構	材質	器種	寸法(mm)		備 考	相伴資料の年代
				残存長	幅		
1	SU1	真鍮	火箸	73.0		上端部は小さな球状に作出し、上部に線彫りの模様を施す	19c 前
2	SU2	銅	小刀柄	94.0	14.0	無文である	17c 末 (元禄16火災)
3	SK7	銅	切羽	37.0	21.0	凸凹状態	17c 末～18C 前
4	SU52	銅	灯明具蠟受け	10.0		底部中央部はやや窪んでいる	
5	SU63	銅	小柄	10.0	14.0	文字毛彫り	18c 前 (享保15or元文3火災)
6	SB70	銅	不明	69.0	18.0	柄・穿孔・刻印付き	明治9
7	SU75	銅	鏡・懐中鏡	90.0		亀文様・鋳型・「藤原吉重作」銘	18c 前
8	SL78	銀	簪	137.0		耳掻き簪・松葉形・無文	
9	SL78	真鍮	簪	117.0		耳掻き簪・松葉形・二の肩部に菊花紋	
10	SL79	銀	紅筆等の柄か	80.0		「陰丸輪に四ツ目」紋・脚部を差込式・縦目有	
11	SL80	銀	簪	123.0		耳掻き簪・松葉形	19c
12	SL80	銀	簪	120.0		耳掻き玉簪(瑪瑙)・松葉形・耳掻欠損	19c
13	SL80	真鍮	筭	151.0		空洞、足先に何か差し込むためか	19c
14	SL80	真鍮	襟止め	50.0		着物の中襟を止める金具(胸元を整える為)	19c
15	SK81	真鍮	火箸	225.0		上端部は球状を別造りで取り付けている	VIII b 期
16	SK81	真鍮	角柱状製品	180.0		何かの支柱か	VIII b 期
17	SK81	銅	引き手	60.0		抽斗の引き手	VIII b 期
18	SK81	銅	引き手	46.0		抽斗等の引き手か	VIII b 期
19	SK81	銅	襖引き	81.0		襖の引き手・縁は輪花で、取り付けようの孔が16穿たれている	VIII b 期
20	SK81	銅	掛金具	57.0		下端部は鋭く尖っている	VIII b 期
21	SK81	銅	把手	82.0	104.0	薬缶や鍋等の把手か	VIII b 期
22	SK81	銅	裝飾金具	102.0		穿孔有り	VIII b 期
23	SK81	銅	灯火具か	150.0		伸縮自在の携帯用灯火具か	VIII b 期
24	SK101	銅	角金具	162.0		魚子地に線彫りで七宝文、唐草文を施す・二次的被熱	17c 後 (天和2火災)
25	SK101	銅	座金	21.0		抽斗などの座金	17c 後 (天和2火災)
26	SK137	銅	灯火具	70.0	51.0	灯心押さえ	V b 期
27	SK137	銅	吊手状金具	84.0		吊灯台の一部か	V b 期
28	SK139	銅	飾り金具	39.0	20.0	魚子地に線彫りで唐草文	IV b 期 (元禄16火災)
29	SK139	銅	鍵隠し金具	30.0		肩一部欠損	IV b 期 (元禄16火災)
30	SK139	銅	引手金具か	69.0		2ヶ所固定金具付	IV b 期 (元禄16火災)
31	SK139	銅	目貫 or 前金具	35.0		目貫 or 煙草入れの前金具。意匠は草花文か	IV b 期 (元禄16火災)
32	SK144	真鍮	不明	29.0		薄い板状	
33	SU150	銅	小柄	98.0	15.0	無文	18c 前
34	SK152	銅	火箸か	206.0		舌状面の片面のみ縞状・舌状は金鍍金、棒先は銅製である	VI a 期
35	SK166	銅	簪	143.0		足3本	VIII c 期
36	SK166	銅	不明	170.0		胴部を捻っている	VIII c 期
37	SK176・SD239	銅	鉢	178.0		蠟燭の芯鉢	17c 末
38	SK176・SD239	真鍮	引き手	66.0		襖用	17c 末
39	SK220	真鍮	鉤	47.0	39.0	用途不明	19c 前
40	SK220	真鍮	管状製品	69.0	4.0	頭頂部は貫通していない・柄であろうか	19c 前
41	SK260	銅	小柄	113.0	15.0	赤銅魚子地に蛤、鮑等を高彫している	
42	SK260	銅	耳掻きか	101.0	3.0	竹を表現した耳掻きか	
43	SK290	真鍮	火箸	85.0		上端部は小さな球状に作出	V b 期
44	SK290	銅	水滴	69.0		長方形を呈し、注口は隅に設ける	V b 期
45	SU313	真鍮	蝶番	75.0		固定用の釘装着・二次的被熱	17c 末 (元禄16火災)
46	SU313	真鍮	火入れ	66.0		堅緻な作り、内面に灰褐色の残留物・たばこ盆用か	17c 末 (元禄16火災)
47	SU313	真鍮	火入れ			内面に灰と思われる灰褐色の残留物・たばこ盆用か	17c 末 (元禄16火災)
48	SU313	真鍮	灯火具	23.0		燭台の一部	17c 末 (元禄16火災)
49	SU313	真鍮	引手	66.0		襖の引手	17c 末 (元禄16火災)
50	SK322	銅	小柄	98.0		無文	
51	SE324	真鍮	鍵隠し金具	36.0	34.0	抽斗等の鍵穴を隠すための飾り	18c 前と19c 前
52	SL347	銀	簪	130.0		簪・箔鍍金法を施し草花紋が彫られ、福良雀を付ける・平打簪	19c 前

IV-9表 銀・銅製品観察表(1)

第IV章 出土した遺物

図版	出土遺構	材質	器種	寸法(mm)		備 考	共伴資料の年代
				残存長	幅		
53	SU368	銅	座金	103.0		漆製抽斗の側板に取り付けた座金	17c末(元禄16火災)
54	SK392	真鍮	簪	114.0		玉簪・頭部に花びら(五弁)が細工・松葉形	VIIIc期
55	SK392	真鍮	簪	113.0		耳搔き簪・松葉形・平打ち・箔鍍金・足先欠損	VIIIc期
56	SK392	真鍮	簪	124.0		平打ち簪・頭部はみずら状・足先は欠損	VIIIc期
57	SK392	銅	掛金具	76.0		灯火具の一部か・箔鍍金	VIIIc期
58	SK394	銅	鉢	径24.0	24.0	底部はやや窪んでいる	19c前～中
59	SU399	真鍮	柄か	65.0		蠟付けが中央にある	19c前
60	遺構外	銅(合金)	懐中鏡	71.0	48.0	鍔物・「天下—〇〇」・2ヶ所組付	
61	遺構外	銅	瓦釘か	150.0		瓦を留める為の釘か	
62	遺構外	真鍮	柄杓	180.0	49.0	貝製の物を模倣したもの・鍔型による	

IV-9表 銀・銅製品観察表(2)

図版	出土遺構	胎質	種別	寸法(mm)		備 考	共伴資料の年代
				残存長	残存幅		
1	SU1	鉄	包丁	108.0	33.0	柄(木製部)を残す	19c前
2	SK21	鉄	サナ	90.0		焔炉の付帯品	19c前～中
3	SK22	鉄	鋸	126.0	12.0		18c後～19c初
4	SU61	鉄	鋸	114.0	8.0		18c前
5	SU63	鉄	不明	69.0			18c前(享保15or元文3火災)
6	SU63	鉄	不明	83.0	33.0	角金具のようなものか、固定用の金具5ヶ所	18c前(享保15or元文3火災)
7	SU75	鉄	包丁	190.0	50.0	菜刀・柄付	18c前
8	SK81	鉄	包丁	120.0	39.0		VIIIb期
9	SK81	鉄	鋸	140.0	9.0		VIIIb期
10	SK81	鉄	鋸前	138.0	60.0		VIIIb期
11	SK99	鉄	サナ	78.0	72.0		19c
12	SK101	鉄	吊り金具	188.0	132.0	船箆筒等を移動する時の吊り金具か	17c後(天和2火災)
13	SK139	鉄	不明	156.0			IVb期(元禄16火災)
14	SE271	鉄	小刀	111.0			VIIIb期
15	SU313	鉄	鋸	150.0	15.0		17c末(元禄16火災)
16	SU313	鉄	不明	90.0		建築用金具か	17c末(元禄16火災)
17	SU313	鉄	鋏	255.0	78.0		17c末(元禄16火災)
18	SK392	鉄	小刀	74.0	12.0		VIIIc期

IV-10表 鉄製品観察表

(4) 釘(IV-120～121図、IV-11表)

本調査区からは鉄釘1226点、銅製の釘は22点、鋸は12点出土している。そのうち残りのよいものの77点を図示した。

出土したものの大半が錆びて原形を留めているものは少ない。しかし、本地点のSK51、SU52、SE127、SK139から出土した鉄釘は錆がなく良好なものであった。釘を大別すると和釘(角釘)と洋釘(丸釘)である。洋釘が出土した遺構はSE127で2点のみであった。SE127は共伴資料の陶磁器から19世紀～明治期に位置付けられる。和釘と洋釘の交代期は明治の初めといわれている。釘をみると、長さや太さの他に頭部の形態が異なる。本項では、多種ある釘を種類別に報告する。なお、種類が明確でないものは、その他不明とした。また銅製の釘については種別分類が出来ないため最後に「銅製の釘」として報告しておく。

なお、釘の名称、制作方法等についての記述は安田善三郎『釘』を参考とした。

頭巻釘 (IV-120 図4～6、9～17、21、22、25、26、29～33、35～40、IV-121 図48～60、62、67、68、72～77)

本遺跡で頭巻の様相が良好であったのはSK51 (IV-120 図4～6)、SU52 (120 図9～17)、SE127 (IV-120 図29～33、35～40)、SK139 (IV-121 図48～60) であった。4遺構の年代をみると最も古い遺構はSK139で東大編年のIVb期にあたり、元禄16 (1703) 年の火災を受けている。釘は39点出土しており、そのうち13点を図とした。13点のうち3点は合釘である。SK51は19世紀前～中葉の土坑で、SE127は19世紀～明治までのものを含む井戸である。ここからは洋釘2点が出土している。SU52からは頭巻釘が14点出土している。

出土した釘の多くは大半が頭巻釘で長さも1寸～2寸の小形のものが多く、一番大きいものは約4寸である。頭巻釘は角釘の頭を平らにして巻いたものである。本地点のものは、頭を一回折ったものと、一回折りさらに巻き込むものがあつた。折ったものを正面から見た形状については半円形、舌状、逆台形、隅丸長方形を呈するものであつた。『和漢三才図会』の釘の項には、「…頭巻釘は扉の板に打ちて、頭を頭さざらしむ也…」とある。この頭部の巻き方については、金箱氏が分類を行っている (金箱 1984)。氏は釘をa～p類に分類を行い、頭巻きはm類とし頭部の巻き方でm類をm1～m3に細分化している。m1：頂上部がカーブをなすもの、m2：頂上部が水平な逆半円を呈するもの、m3：頂上部が平らな逆台形を呈するものとしている。頭の巻き方には多種あり分類を明確にするには困難であり、また出土した多くは一回頭を敲かれたものであるため使用前の状態と異なるのではないだろうか。

徳川幕府の建築上の釘、鋸等の見積もりが記録された『吹塵録』には、「2寸釘は敷板、羽目板、裏板」とあり、「一坪に付き120本。朱書きで下部屋向御役屋敷大番所等床板一坪90本」とある (安田 1916)。使用本数が多いものは敷板や羽目板であることからこれらの短い頭巻釘は建築用の壁板や天井板、床板に使用されていたと考えられる。

皆折釘 (IV-120 図23、24)

本遺跡から出土した皆折釘はSD53上水道の木樋に使用した釘である。発掘区域の南西角に位置する遺構である。木樋は残っていなかったが皆折釘が立った状態で残っていた。釘のみの出土の為木樋の形状が「刳貫式」か「寄木式」か不明である。残存していた釘は112本で、多くは木片の一部が付着していた。そのうち2本を図示した。

皆折釘は、基部の上部を真直に曲げたものを頭部にしたもので基部は幅の広い平釘である。長さが三寸ないし一尺のものがある。本地点SD53から出土した皆折釘の長さは150mmと156mmであるから5寸釘の範疇である。

頭巻釘であげた『吹塵録』には、「軒箱樋一軒26本朱書き4寸」(約120mm)とある。ちなみに汐留遺跡の脇坂家の木樋に使用された皆折釘の長さは80～154mmであつた。計測で若干の違いが生じる可能性はあるが、木樋の大きさにより使用する釘の大きさが異なるのであろうか。

野崎氏は、胴木に使用した釘 (皆折釘) の分類を行っている (野崎 1991)。分類はA、B、C類の3分類になっている。

- A類：頭部を扁平に叩き潰して、ほぼ直角に折り曲げ、基部の断面がほぼ正方形を呈するもの
- B類：A類と同様の頭部であるが、基部の断面形が長方形を呈する

C類：頭部を扁平に叩き潰さずにそのまま折り曲げたもので基部の断面形が長方形を呈する。皆折釘の長さは約120～170mmの範疇に収まる。大半5寸で、4寸釘も含まれている。おもしろいことは4寸釘は胴木の下まで突き抜けず、5寸釘は突き抜け、付き抜けた部分は折り曲げている。因みに、本地点の釘は野崎分類のB類にあたるものである。

木樋に使用されている釘について後藤氏は、木樋、継手、井戸板に使用された釘の変遷を行っている。釘は頭巻釘、皆折釘、合釘の3種で各期での釘の使用頻度について書いている(後藤 1996)。

S1期 1636～1661年：木樋の大半が頭巻釘を使用。井戸板の接合は竹製B(断面が三角形を呈し、長さ58～87mm、幅5～10mm)と鉄製の合釘が大半を占める。

S2期 1661～18世紀前半：木樋の6割は皆折釘で2割は頭巻釘。井戸板の接合は竹製の合釘で鉄製の釘は少ない。鋸がこの時期から使用される。

S3期 18世紀前半～1824年：木樋の大半が皆折釘で頭巻釘は2系統のみで使用。井戸板の接合の8割は竹製の釘が占める。竹製の釘はS2期より若干大きくなる。

S4期 1824～1870年：S3期と同様で木樋の大半が皆折釘である。井戸板の接合は全て竹製の合釘である。

上記の結果として、頭巻釘も皆折釘も時期が新しくなるにつれ寸法のばらつきは小さくなる傾向があり、皆折釘はS2期に頭巻釘と入れ替わるように使われ始めた様相が窺われると後藤氏は考察している。

合 釘 (IV-121 図45、46、47)

両端が尖った真っ直ぐな釘で板を継ぐために用いる。大きさ一分角で長さ二寸一分～二寸二分、八厘角で長さ一寸七分ある。『和漢三才図会』に「…鑽(あはいのくぎ)は両頭尖りて、板二枚を以って縫ひて一枚と為る釘也…」とある。

SK139から3本出土しているが長さは3種類であった。

蟹 目 釘 (IV-120 図19、28、43、44)

蟹目釘は小釘で、頭径が一分くらいの半球形をした釘である。頭の径が三分から七分、長さが二寸位の場合のものは、太鼓鋌又は甲鋌(くわんがふびょう)というところある(安田)。

本遺跡から出土した釘のなかで頭が半球状を呈するものは、SK60から出土している19である。この釘は銅製で長さは50mm、頭部径約20mm弱と大きい。蟹目釘ではなく、むしろ太鼓鋌に近い形態をしている。

そ の 他 (IV-120 図7)

種類が明確でないものである。SU52から出土している(7)。釘の頭部は円形に近く径は9mmで、長さ23mmのものである、頭部が浅い傘状に広がった角釘である。本地点で出土した銅製の釘に多く見られる形態である。

銅 製 の 釘 (IV-120 図1～3、8、18、20、27、28、34、43、44、IV-121 図61、63)

銅製の釘は堅牢性に欠けるため建築用には不向きとされており、引出等の飾り金具や留め金具などに使用されたと思われる。出土した資料の中には飾り金具を留めた状態のものもことから、銅製の釘や鋌は装飾性を付加されたものであったと思われる。

釘の頭部から分類を試みた。

第IV章 出土した遺物

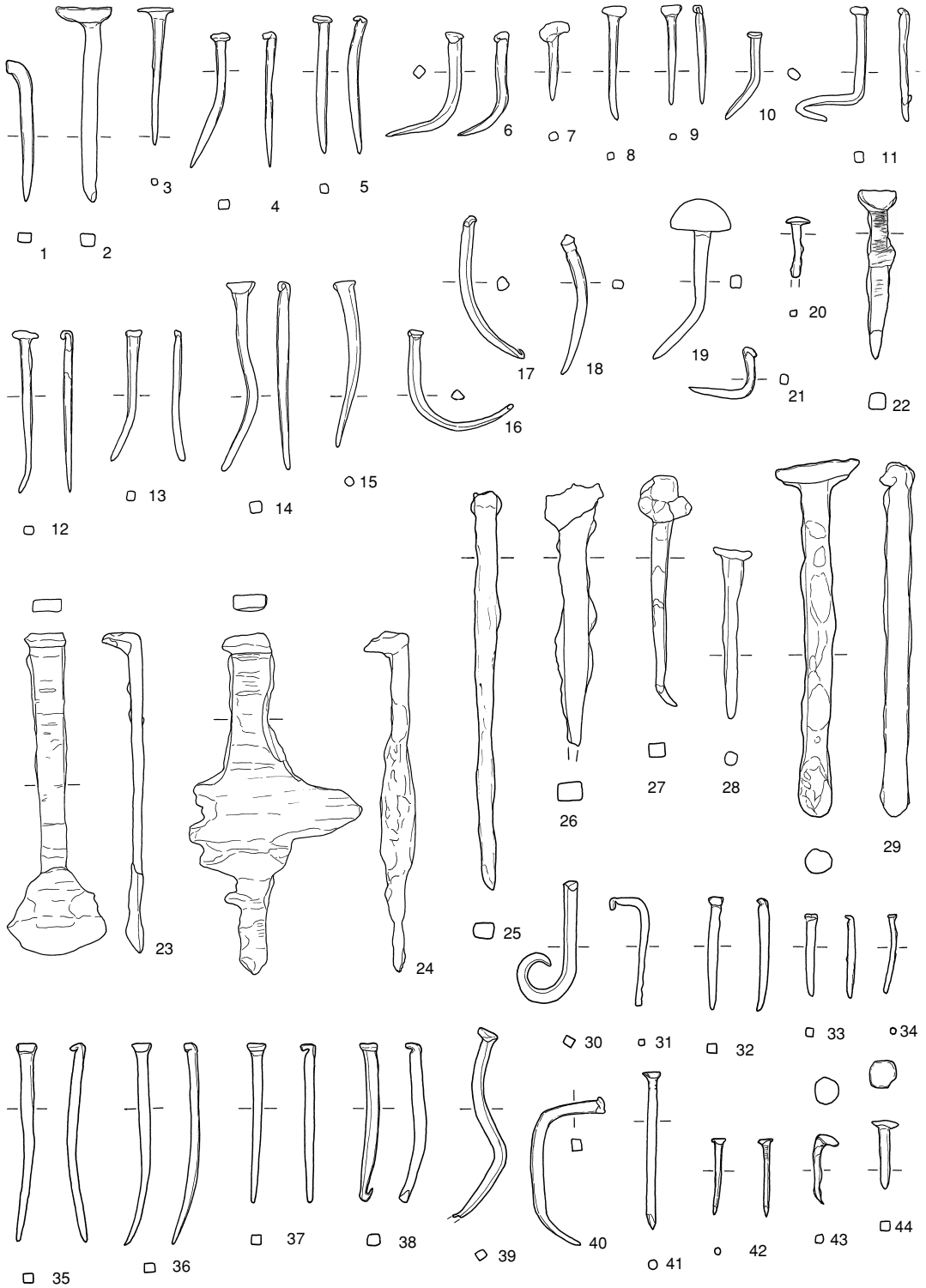
A類：不整形で平坦な円形を呈し、径が大きい(3、20、28、44、63)

B類：頭は小さくぼつてりとした丸形(8、34、43、61)

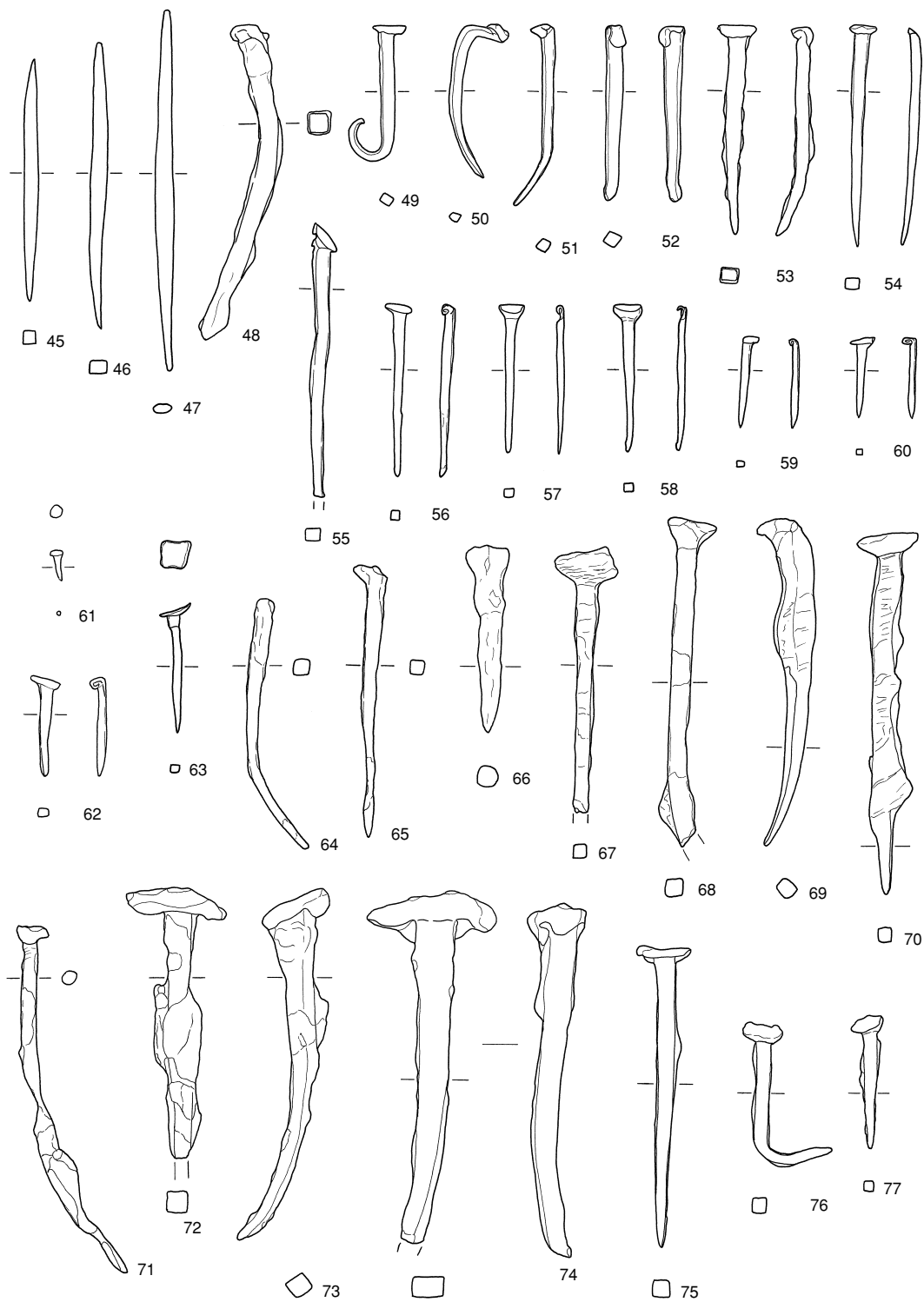
C類：半球状で径が大きい(19)

以上の3種類に分類したが、あくまでも本地点から出土した資料での分類である。

第IV章 出土した遺物



IV-120図 釘 (1) S = 1/2 · S = 1/3 (23 · 24)



IV-121 図 釘 (2) S = 1/2

第IV章 出土した遺物

※「火災」欄の(天)は天和2(1682)年、(元)は元禄16(1703)年、(享)は享保15(1730)年もしくは元文3(1738)年、(明)は明治元(1868)年を指す。

図版	出土遺構	材質	名称	種類	寸法(mm)		備考	火災	共存資料の年代
					残存長	幅			
1	SU2	銅	角釘	角皆折	43.0	3.3	頭先欠損	○(元)	17c末
2	SD14	銅	角釘	—	60.0	4.7	脚先欠損・頭部隅丸方形で径は15.5mm		
3	SK27	銅	角釘	—	42.0	2.8	頭部隅丸方形・頂上部10mm		17c
4	SK51	鉄	角釘	頭巻	42.0	2.6	一折り	○(明)	19c前～中
5	SK51	鉄	角釘	頭巻	41.0	2.5	二折り	○(明)	19c前～中
6	SK51	鉄	角釘	頭巻	30.0	4.2	一折りで左端部も折り込んでいる	○(明)	19c前～中
7	SU52	鉄	角釘	その他	23.0	2.3	卷ナシ・頭部は円形状に広がる。頂上部径10mm		
8	SU52	銅	角釘	頭丸	33.0	4.1	卷ナシ・頭部円形・頂上部径7mm		
9	SU52	鉄	角釘	頭巻	30.0	2.1	二折り		
10	SU52	鉄	角釘	頭巻	27.0	1.9	一折り		
11	SU52	鉄	角釘	頭巻	52.0	2.5	一折り・残存長は伸ばした状態を想定したもの		
12	SU52	鉄	角釘	頭巻	49.0	2.6	二折り		
13	SU52	鉄	角釘	頭巻	40.0	2.9	一折り・脚先欠損		
14	SU52	鉄	角釘	頭巻	59.0	3.1	二折り		
15	SU52	鉄	角釘	頭巻	51.0	3.5	一折り		
16	SU52	鉄	角釘	頭巻	49.0	3.0	一折り		
17	SU52	鉄	角釘	頭巻	45.0	2.6	一折り		
18	SU58	銅	角釘	—	43.0	3.0	頭部・脚先欠損	○(享?)	18c前～中
19	SK60	銅	角釘	—	50.0	5.2	頭部は大きい		17c末～18c後
20	SK60	銅	角釘	頭丸	19.0	2.8	脚先欠損・頭部隅丸方形		17c末～18c後
21	SK60	鉄	角釘	頭巻	33.0	2.0	一折り		17c末～18c後
22	SU61	鉄	角釘	頭巻	52.0	5.2	一折り・木片付き		18c前
23	SD53	鉄	角釘	皆折	150.0	15.0	箱樋の木片付着・上水道・対で58列112本出土		19c前～中
24	SD53	鉄	角釘	皆折	156.0	15.0	箱樋の木片付着・上水道・対で58列112本出土		19c前～中
25	SU63	鉄	角釘	頭巻	122.0	6.1	一折り・足先欠損	○(享)	18c前
26	SU63	鉄	角釘	頭巻	81.0	7.0	脚部先欠損	○(享)	18c前
27	SE100	銅	角釘	—	72.0	5.0	頭部二次的被熱で熔け固まっている	○(天)	17c後
28	SE105	銅	角釘	—	54.0	4.5	頭部・脚部先欠損	○(享)	18c前
29	SE105	鉄	角釘	頭巻	110.0	8.0	脚部先欠損	○(享)	18c前
30	SE127	鉄	角釘	頭巻	39.0	3.1	一折り・脚部先丸まっている		19c～明治
31	SE127	鉄	角釘	頭巻	34.0	1.9	一折り・脚先欠損		19c～明治
32	SE127	鉄	角釘	頭巻	34.0	1.8	一折り・脚先欠損		19c～明治
33	SE127	鉄	角釘	頭巻	34.0	1.8	一折り・脚先欠損		19c～明治
34	SE127	銅	角釘	—	24.0	1.4	脚先欠損		19c～明治
35	SE127	鉄	角釘	頭巻	61.0	2.9	一折り		19c～明治
36	SE127	鉄	角釘	頭巻	62.0	2.8	二折り		19c～明治
37	SE127	鉄	角釘	頭巻	48.0	2.9	一折り		19c～明治
38	SE127	鉄	角釘	頭巻	48.0	3.1	一折り・脚先欠損		19c～明治
39	SE127	鉄	角釘	頭巻	58.0	2.4	一折り・脚先欠損		19c～明治
40	SE127	鉄	角釘	頭巻	46.0	2.9	一折り		19c～明治
41	SE127	鉄	丸釘	洋釘	48.0	2.3			19c～明治
42	SE127	鉄	丸釘	洋釘	24.0	1.3			19c～明治
43	SK137	銅	角釘	—	21.0	2.6	同様の物が3点出土		Vb期
44	SK137	銅	角釘	—	22.0	2.7			Vb期
45	SK139	鉄	角釘	合釘	72.0	4.0		○(元)	IVb期
46	SK139	鉄	角釘	合釘	87.0	4.4		○(元)	IVb期
47	SK139	鉄	角釘	合釘	108.0	5.5		○(元)	IVb期
48	SK139	鉄	角釘	頭巻	97.0	6.0		○(元)	IVb期
49	SK139	鉄	角釘	頭巻	40.0	3.6	一折り・脚先丸まっている	○(元)	IVb期
50	SK139	鉄	角釘	頭巻	46.0	3.2	一折り	○(元)	IVb期
51	SK139	鉄	角釘	頭巻	76.0	3.8	一折り	○(元)	IVb期
52	SK139	鉄	角釘	頭巻	53.0	3.7	一折り	○(元)	IVb期
53	SK139	鉄	角釘	頭巻	64.0	5.2	二折り	○(元)	IVb期
54	SK139	鉄	角釘	頭巻	66.0	4.3	一折り・頭部小さい	○(元)	IVb期

IV-11表 釘観察表(1)

第IV章 出土した遺物

図版	出土遺構	材質	名称	種類	残存長		備考	火災	共伴資料の年代
					残存長	幅			
55	SK139	鉄	角釘	頭巻	82.0	4.0	一折り・脚先欠損	○(元)	IV b期
56	SK139	鉄	角釘	頭巻	52.0	3.0	二折り	○(元)	IV b期
57	SK139	鉄	角釘	頭巻	45.0	3.0	一折り	○(元)	IV b期
58	SK139	鉄	角釘	頭巻	44.0	3.0	一折り	○(元)	IV b期
59	SK139	鉄	角釘	頭巻	27.0	2.3	一折り	○(元)	IV b期
60	SK139	鉄	角釘	頭巻	24.0	2.0	二折り	○(元)	IV b期
61	SK144	銅	丸釘	—	9.0	2.0	脚先欠損・極小		
62	SK144	鉄	角釘	頭巻	30.0	3.0	二折り		
63	SU150	銅	角釘	—	38.0	3.0			18c前
64	SE271	鉄	角釘	不明	83.0	5.0	頭部欠損		VIII b期
65	SE271	鉄	角釘	不明	76.0	4.0	頭部・脚先欠損		VIII b期
66	SU279	鉄	角釘	不明	57.0	6.0	木片付	○(享)	V a期
67	SU279	鉄	角釘	頭巻	80.0	4.0	木片付・脚先欠損	○(享)	V a期
68	SU279	鉄	角釘	頭巻	100.0	5.8	脚先欠損	○(享)	V a期
69	SU279	鉄	角釘	不明	99.0	6.7	木片付・頭部欠損	○(享)	V a期
70	SU279	鉄	角釘	不明	110.0	5.5	木片付	○(享)	V a期
71	SK290	鉄	角釘	不明	106.0	6.7	錆のため頭部形態不明		V b期
72	SU313	鉄	角釘	頭巻	80.0	6.0	頭先欠損	○(元)	17c末
73	SU313	鉄	角釘	頭巻	107.0	6.0	錆多い	○(元)	17c末
74	SU313	鉄	角釘	頭巻	106.0	9.4	頭先欠損	○(元)	17c末
75	SU313	鉄	角釘	頭巻	92.0	4.6	一折り	○(元)	17c末
76	SU313	鉄	角釘	頭巻	41.0	4.2	一折り	○(元)	17c末
77	SU313	鉄	角釘	頭巻	42.0	4.0	一折り	○(元)	17c末

IV-11表 釘観察表(2)

第6節 木製品(IV-122～125図、IV-12、13表)

これまで、本郷構内では医学部附属病院外来診療棟地点(以下「外来地点」と略す)、工学部1号館地点、医学部附属病院病棟地点(整理中)、薬学部総合研究棟地点(整理中)等で木製品が出土しており、医学部附属病院病棟地点、薬学部総合研究棟地点では、現在、木製品の分類、図化に加えて、樹種同定、漆器の塗構造、使用顔料といった自然科学分析から、用材選択、製造技術といった問題の検討を行っており、合わせて木製品のデータベース化を進めている(註1)。本報告の分類、観察表は現在整理中の病棟地点で得られた成果に基づくものである。

木製品はSK18、SD97、SE127、SK139、SK168、SK174から出土した。出土した木製品は、漆椀、下駄、樽、桶、曲物、柄杓、栓、膳、箸、篋状製品等である。木製品を図化、観察表を作成した遺構は、陶磁器類から東大編年VI a期に比定されるSK174である。器種が明確なものを中心に図化し観察表を作成した。

観察表の表面装飾は、漆や顔料の塗布の有無に関する項目である。表面装飾と文様の色調は肉眼観察によるもので「～色」と記載した。「朱色」など、使用顔料を示す記載は行っていない。

法量の項目のabcは、以下の計測値である。

漆 椀、栓：a口径、b底径、c器高。

下 駄：a台部の長さ、b台部の幅、c高さ。

樽・桶・曲物：a直径、b高さ。

箸、棒状製品：a長さ、b直径。

その他の木製品：a長さ、b幅、c高さ。

本遺跡の木製品の法量は、漆が塗布された木製品以外は、自然乾燥されているため、出土時の状態をとどめていない。そのため、参考値である。

漆椀、下駄、材については観察表に最小個体数を示した。下駄は台部の前眼があるものを一個体とした。下駄、漆椀、木札、箸の分類は、病棟地点で得られた成果に基づくが、近世遺跡で行われているような詳細な分類は行っていない。これらの遺物以外は実測図、観察表を参照していただきたい。なお、実測図に表現されている木目は、木取り方向を反映していない。

(1) 漆 椀 類 (IV-125 図1～7、IV-12表)

漆椀類は、木地を轆轤挽き等によって加工し、漆等を塗布して仕上げた製品である。これまで報告された近世遺跡の成果から、飯椀、汁椀、壺椀、平椀、杯、腰高、蓋、その他に分類した。腰部の形状等による細分類は行っていない。SK174から飯椀、汁椀、平椀、椀蓋、杯が14個体出土した。これらの資料について、北野信彦氏(くらしき作陽大学)に樹種、用材選択、塗構造、使用顔料等の分析をお願いした。分析結果は考察に掲載した。観察表の「表面色調」「紋様色調等」は、「赤色」「黒色」等と記載している。これは肉眼観察によるもので、使用顔料を示さない。「居尻」は陶磁器でいう高台である。

(2) その他の木製品 (IV-122～124 図1～36、IV-13表)

下 駄 (IV-122 図1～6、IV-123 図7～13)

下駄の分類は、古泉弘が行った分類をもとに行なった(古泉 1979)。

下駄の構造から

- 一木下駄 ○構造下駄 ○無眼下駄 ○その他の下駄
- ・連歯下駄 ・露卯下駄 ・草履下駄
- ・削り下駄 ・陰卯下駄

に分類し、台部の平面形の形状特徴から、

- ・角形 ・丸形 ・その他

に細分した。眼の位置や、歯の形状、材の加工による装飾等からの細分は行っていない。

下駄台部の法量を寸に直した法量分布では長さ七寸～八寸、幅二寸～三寸の範囲に収まる。同様に工学部1号館地点は、若干分布域は広がるが、外来地点の分布域に重なる。旧芝離宮庭園遺跡出土下駄は(註2)、長さ六寸以下の小型の下駄を除き、おおむね2遺跡の法量分布域に重なる事が指摘できる。一方、1683年頃の遺構である、病棟地点SK03の分布域は、小型の下駄を除き、概ね長さ六寸～七寸、幅二寸～三寸の分布となり、前出の3遺跡に比べて長さが短くなっている。SK03より新しい年代の3遺跡では下駄の寸法が大きくなっていることが指摘できる。

樽・桶・曲物 (IV-123 図14～IV-124 図17、25、26)

樽・桶・曲物は、おおむね底板、蓋板、側板から成る。これらの区別は、材の厚みだけでは判断できないため、品名が明確なもののみ記載し、分類、部位を示した。

栓 (IV-124 図 27、28、30)

栓は、樽・桶・曲物の栓、徳利の栓と考えられるが、詳細は不明である。

箸 (IV-124 図 18～23)

箸は、両端の加工と断面形から以下に分類した。

- ・ 端部加工 (棒状、両口、片口)
- ・ 断面形 (四角形、円形、丸形、不定形)

64 個体が出土した。

木札 (IV-124 図 32)

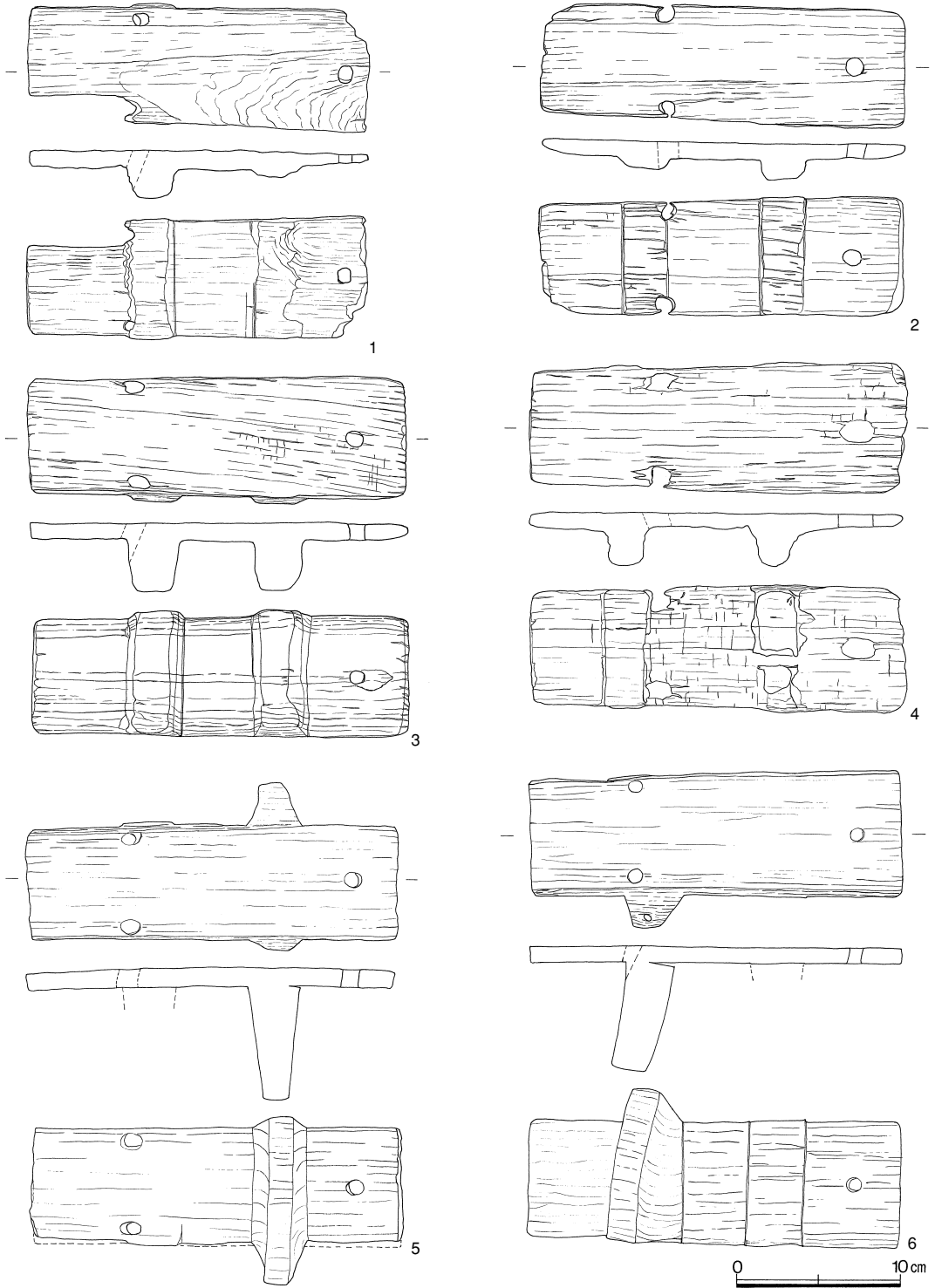
木札としたのは、札状で文字が書かれている遺物である。形状が類似するものは文字がない場合も、木札とした。分類は『奈良文化財研究所木簡データベース』の分類(註3)を参考にして、以下に分類した。

1. 長方形の材のもの。
2. 長方形の材の上部に穿孔したもの。
3. 隅丸方形の材のもの。
4. 隅丸方形材の上に穿孔したもの。
5. 長方形の材の上端を圭頭にしたもの。
6. 長方形の材の下端を圭頭にしたもの。
7. 長方形の材の上部に左右に切り込みを入れたもの。
8. 長方形の材の上部に左右に切り込みを入れ、下端を尖らせたもの。
9. 長方形の材の一端を尖らせたもの。
10. 長方形の材の下端を斜めに切ったもの。
11. 凸形の材のもの。
12. その他。

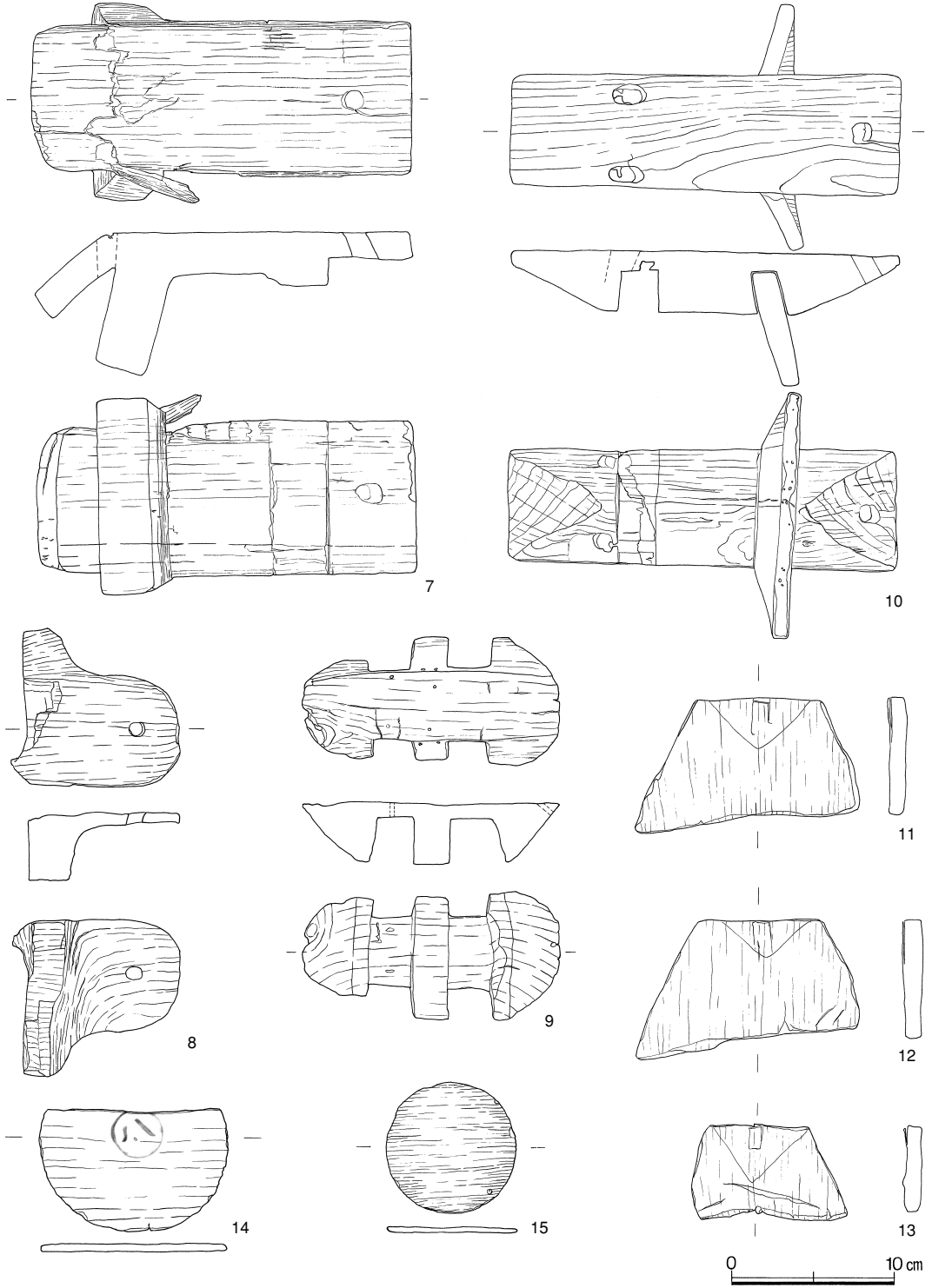
出土した木札は、「木札 6 長方形の材の下端を圭頭にしたもの」で墨書は認められない。

【註】

1. 樹種同定は森林文化研究所 能代修一氏、漆器の製作技法は昭和女子大学 武田昭子氏との共同研究である
2. 原 祐一 2001 「江戸時代の遺跡から 4 下駄」柏書房『辞典 しらべる江戸時代』P.91
3. 奈良文化財研究所ホームページ『奈良文化財研究所木簡データベース』
<http://www.nabunken.go.jp/database/index.html>

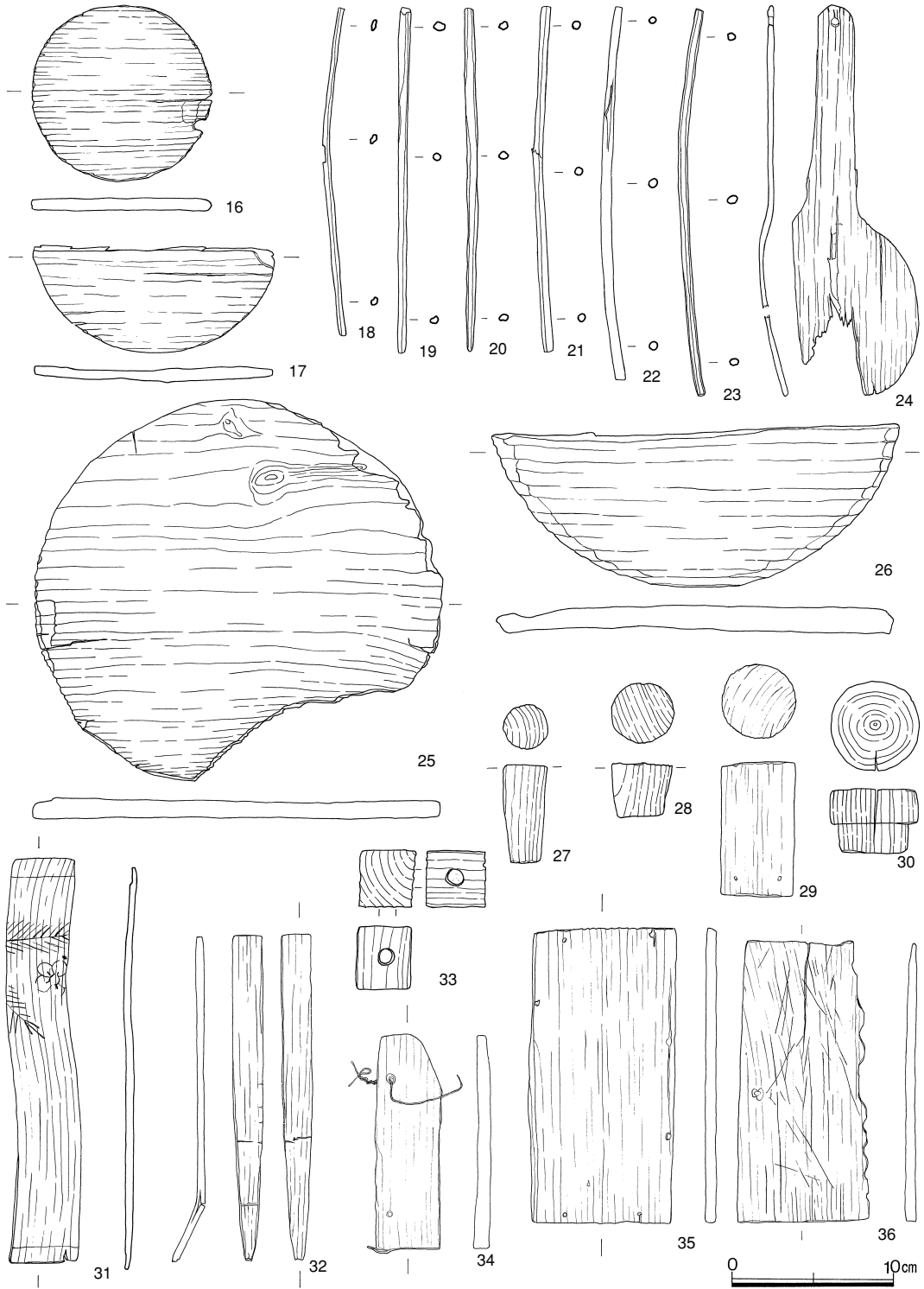


IV-122図 木製品 (1)

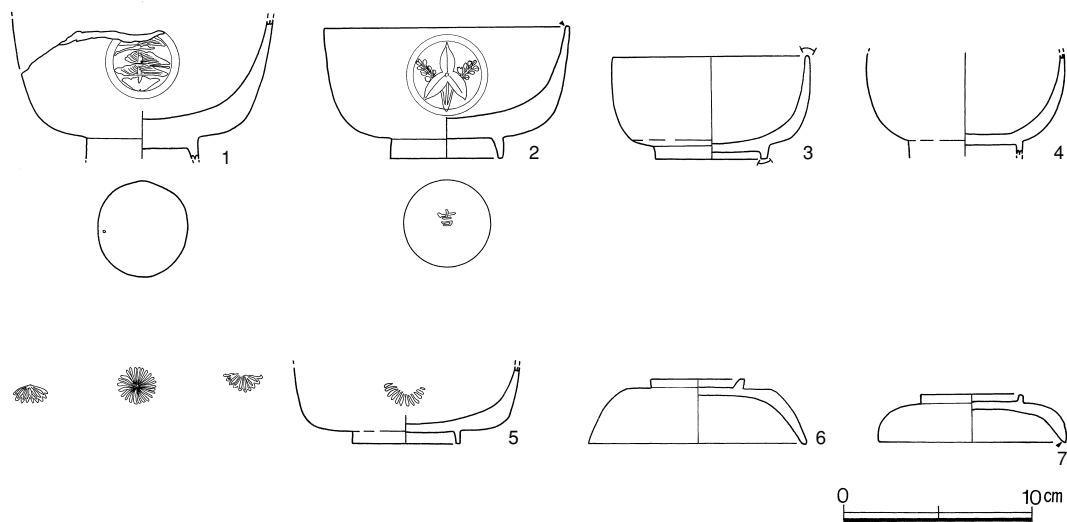


IV-123図 木製品(2)

第IV章 出土した遺物



IV-124図 木製品 (3)



IV-125 図 木製品(漆器碗)(4)

図版 No.	分析 No. ※1	出土 遺構	器種	寸法 (mm)			含水率 (%)	表面色調	加飾	文 様			備 考
				口径	底径	器高				モチーフ	色調	位置	
1	5	SK174	飯碗	-	-	-	440.7	外：黒色 内：赤色	蒔絵	丸に松	茶色、緑色	胴部3単位	高台内：「●」赤色、文様径：1寸3分、ぶん回し痕
2	6	SK174	飯碗	130	60	70	522.2	外：黒色 内：赤色	蒔絵	丸に立ち沢瀉	茶色	胴部3単位	高台内：「吉」赤色、文様径：1寸4分
3	3	SK174	汁碗	105	60	55	408.3	外内：赤色 口唇・疊付：黒色					
4	2	SK174	汁碗	-	-	-	583.3	外：黒色 内：赤色					
5	1	SK174	平碗	-	58	-	400.0	外：黒色 内：黒色	蒔絵	菊	金色2、茶色3	胴部5単位	
6	4	SK174	碗蓋	116	51	35	466.7	外内：黒色					
7	7	SK174	碗蓋	102	55	26	366.7	外：黒色 内：赤色					
※2	8	池	碗蓋	122	60	24		外：黒色 内：黒色					寛永6(1629)年墨書木札出土

※1 研究編 北野論文分析資料No.

※2 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』 1990

IV-12表 木製品(漆器碗)観察表

第IV章 出土した遺物

図版No.	出土遺構	器種	分類・形状・部位	表面色調	文 様			文字	寸法 (cm)			個体数	備考
					色調	位置	モチーフ		a	b	c		
1	SK174	下駄	連歯下駄・角形						22.6	7.2	2.8	1	
2	SK174	下駄	連歯下駄・角形						22.0	7.2	2.5	1	
3	SK174	下駄	連歯下駄・角形						22.2	7.3	4.4	1	
4	SK174	下駄	連歯下駄・角形						22.7	7.4	3.9	1	
5	SK174	下駄	連歯下駄・角形						22.5	6.8	7.6	1	
6	SK174	下駄	連歯下駄・角形						22.6	7.2	7.5	1	
7	SK174	下駄	連歯下駄・角形						23.8	9.0	8.5	1	
8	SK174	下駄	連歯下駄・丸形						—	—	—	1	
9	SK174	下駄	無眼下駄	漆塗り (黒色、下地有り)					15.4	4.1	3.9	1	上面に鉄釘
10	SK174	下駄	陰卯下駄・角形						23.2	7.2	8.0	1	
11	SK174	下駄	陰卯下駄・歯						—	—	—	1	
12	SK174	下駄	陰卯下駄・歯						—	—	—	1	
13	SK174	下駄	陰卯下駄・歯						—	—	—	1	
14	SK174	樽・桶・曲物	曲物蓋				丸に八(焼印)		11.3	0.4	—	1	
15	SK174	樽・桶・曲物							7.8	0.4	—	1	
16	SK174	樽・桶・曲物							10.9	1.0	—	1	
17	SK174	樽・桶・曲物							—	0.8	—	1	
18	SK174	箸	棒状・断面多角形						20.0	0.5	—	1	
19	SK174	箸	片口・断面丸						21.1	0.6	0.4	1	
20	SK174	箸	棒状・断面四角						21.0	0.5	—	1	
21	SK174	箸	棒状・断面丸						21.1	0.5	—	1	
22	SK174	箸	片口・断面丸						22.9	0.5	0.4	1	
23	SK174	箸	棒状・断面丸						23.8	0.5	—	1	
24	SK174	籠状製品	杓文字						—	—	—	—	
25	SK174	樽・桶・曲物							24.8	1.2	—	1	
26	SK174	樽・桶・曲物							—	1.6	—	1	
27	SK174	栓							2.6	6.0	1.8	1	
28	SK174	栓							3.7	3.0	2.9	1	
29	SK174	材	円柱状						8.0	4.6	—	1	
30	SK174	栓							5.9	3.7	4.0	1	
31	SK174	盆・膳	底板	漆絵(赤)	内面	梅・松			24.8	0.5	—	1	側板接合跡
32	SK174	木札	木札6						20.3	1.6	0.4	1	
33	SK174	材	直方体						3.1	3.7	3.3	1	
34	SK174	材	板材						—	0.8	—	1	
35	SK174	箱	板材						3.1	3.7	3.3	1	
36	SK174	材	板材						17.2	8.0	—	1	

IV-13表 木製品観察表

第7節 石製品(IV-126～130図、IV-14表)

1～17は硯である。出土した硯は約40点を数える。石材は、ほとんどが粘板岩製で1割ほど他の石材が含まれている。実測した17点のうち15点が粘板岩製で、凝灰岩製のもの1点、チャートが1点である。ほとんどの硯の出土遺構が異なるため、年代にも幅がある。規格性のあるものは寸で表示した。高島硯には見本簿もあり規格がわかるが、他の産地の状況が不明であるため、今の状況では規格などから産地を考えることは難しい。

1はSU11出土。凝灰岩。硯背に「□□□八代目(?)」の文字が刻まれている。2はSK18出土。粘板岩。四隅が丸く削り出されている。他の硯と比較して、海が大変浅い。四寸×二寸。3は

SB70 出土。緑色粘板岩。陸の部分が大きく磨り減っている。海部欠損。4はSK139 出土。粘板岩。四隅の角が落とされている。5はSU143 出土。緑色粘板岩。硯背に「□六才□□」の文字が刻まれている。6はSU143 出土。粘板岩。内側の四隅が丸く削り込まれている。7～9はSK152 出土。粘板岩。8はむこう縁欠損。9は縁欠損。硯背に「江山□」の墨書きが見られる。10はSK166 出土。粘板岩。むこう縁欠損。硯背に「大杓一□」の文字が刻まれている。五寸五分×二寸。11はSK265・304 出土。粘板岩。むこう縁欠損。五寸五分×二寸。12はSU279 出土。粘板岩。大型の硯を小さく作り直している。海部分を上下左右から鋸でひいて中央部分を残し、折り取っている。古い陸の面を縁として他の縁も削っており、縁の一部に古い陸と縁の痕跡が残る。その内側に新たな面を作り陸と海を削り出している。そのためか、ほとんど陸と海の区別がない。硯背に「中村」の文字が刻まれている。13はSK290 出土。粘板岩。硯背が窪んでおりそこに「此木田 久兵衛」の文字が刻まれている。四寸×二寸。14はSK290 出土。粘板岩。硯背に「上」の文字が刻まれている。15はSK361 出土。粘板岩。異型硯。縁と一面が欠けている。16はSK392 出土。粘板岩。硯背に文字が刻まれている。17はSU419 出土。粘板岩。硯背が窪んでいる。

18～23は温石である。本地点で出土している温石の中には、石製品で長方形を呈し円孔が端に穿たれているものと、土製品で方形に近い形を呈し円孔が中央に穿たれているものがある。これらの土製品は、温石を目的として作られた土製品ではなく、再利用品として作られたものであることから、便宜的にここに掲載した。

18～20は長方形で円孔が端に穿たれているものである。石製品の温石はある程度規格化されている。18はSK18 出土。四寸×二寸の大型。19はSL80 出土。二寸五分×一寸五分の小型に属する。銀製瑪瑙玉装簪、丸鬚用真鍮製筭等の遺物と一緒に、便所遺構の中から検出されたものである。20はSK81 出土。片麻岩である。表面は被熱により白変、劣化している。同様の材質のものが東京大学本郷構内の遺跡工学部1号館地点でも4個体検出されている。SK81は、東大編年Ⅷb期に比定されているが、工学部1号館地点もほぼ同時期のⅧa期に比定されている遺構から検出されている。

21～23は方形に近い形で円孔が中央に穿たれているものである。21、22はSK139 出土。21は被熱により一部分赤化している。瓦質素材を研磨したもので、大変きれいに成形されている。東京大学本郷構内の遺跡理学部7号館地点3号地下式土坑、4号地下式土坑でも同様のものが検出されている。理学部のもはやや小型である。22は土師質で二次利用されたものであろう。円孔もやや雑な作りで、大きい。表面にススのようなものが付着している。23はSK152 出土。瓦質素材を研磨した物ではかなり小型のものに属する。縁を面取りしており、わずかに丸みを帯びている。温石としては小さく、また、二次被熱も確認できないことから、垢擦りなど他の用途に使われていた可能性もある。石製品以外の瓦質や土師質の転用品は中央に穿孔されるものが多い。やはり、加工しやすい分、端に穿孔して破壊してしまうことを考えて中央に穿孔しているのではないだろうか。そのため、形態的には同じような形になっているのだろう。

24～38は砥石である。24～31までは比較的定型化した砥石か、その一部分が折れたものである。中央部分だけが大きく磨耗しているものはなく比較的均一に磨耗している。32～38は硯や定型的な砥石を二次的に持ち砥などに再加工して使われているものである。定型的な砥石の幅は

5cm前後のものが多く、1寸5分の幅を意識したものであろう。

24はSU2出土。側面には4面とも鑿痕が付く。25はSU61出土。側面には4面とも鑿痕が付く。右手前から左奥に向かって使用痕が残る。26はSB70出土。折れており、裏面には幅1.5cmほどの鑿痕が多数残されている。使い込まれたのであろうか。他の製品に比べて大変薄い。27はSK139出土。裏面と側面に工具痕が残る。使用面はかなり平坦である。28はSK139出土。手前側と中央部に横方向の摩耗が見られる。どのような使い方をされたのかは不明。29はSU146出土。折れており、残り3面の側面には工具痕が残る。中央部分には貫入が見られ、それを削り取ったような細い溝が残されている。使用痕は残されているが、砥石の石材としてはあまり良いものではなかったのであろう。30はSK175出土。小型の砥石である。石の摂理面があり、表面が一部分剥離している。裏面には名前と思われる「井吉?」の字が刻まれている。個人が持ち歩いたものであろうか。31はSE324出土。折れている。残りの3側面には工具痕が残されているが、1つの側面は縦方向に使用痕が認められる。被熱して表面が黒変し、剥離している。名前と思われる「谷」の字が刻まれている。個人が持ち歩いたものであろうか。32はSU2出土。硯からの転用。持ち砥。上部中央に穴を開けて使用したような痕跡があるが、それもまた割れてしまっている。33はSK22出土。持ち砥。上下以外の四面に右手前から左奥にかけて使用痕が見られる。34はSK116出土。持ち砥。横方向に使用痕が見られる。35はSK137出土。持ち砥。一面のみ使用。36はSK174出土。側面直角に使用痕あり。37はSU230出土。持ち砥。横方向に使用痕が見られる。38はSU230出土。表面が大変粗い砥石である。右側面に2本の切れ込みが見られる。

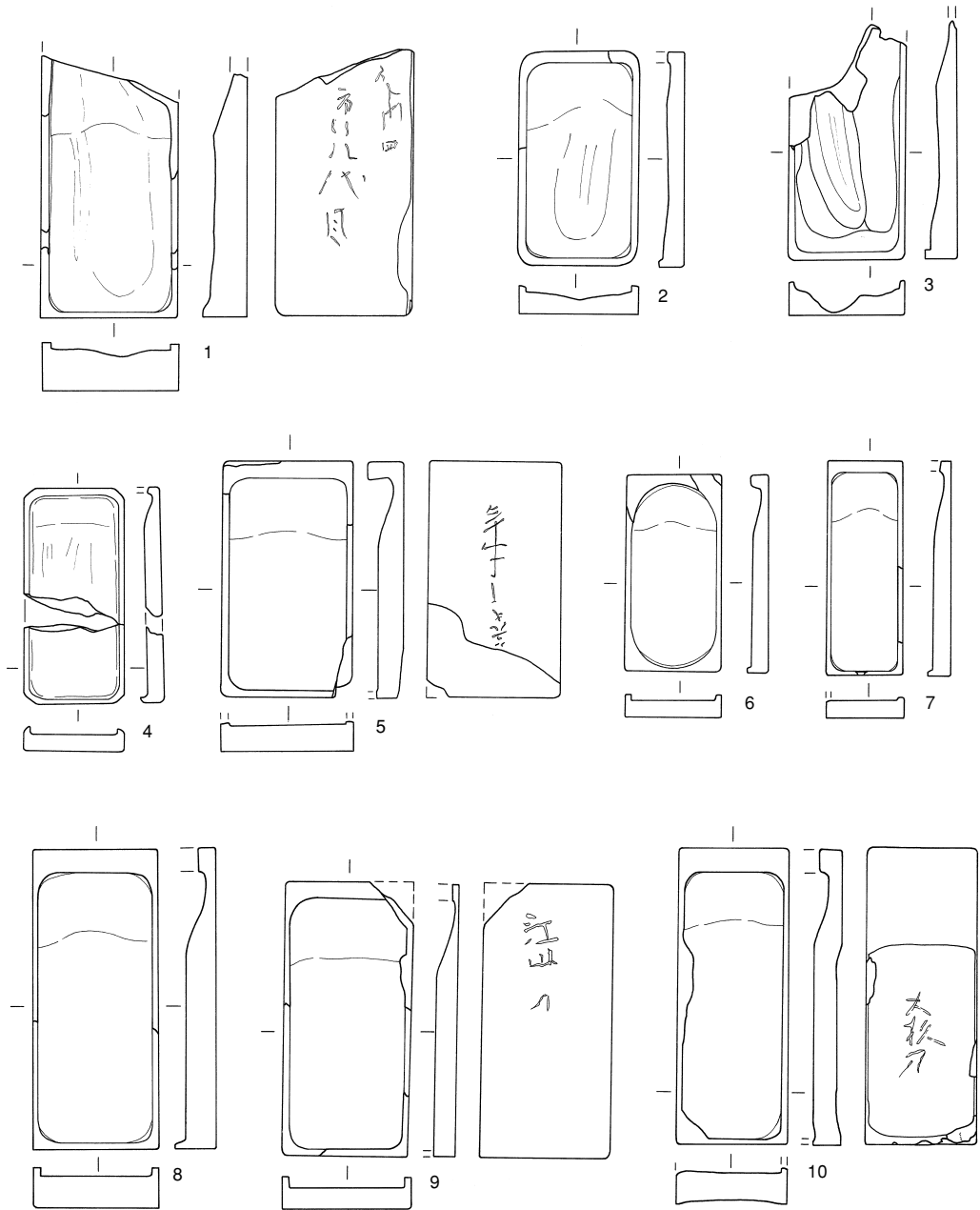
ここに取り上げられていない本地点から出土した砥石は粗砥約1割、中砥約3割、仕上げ砥約6割となる。中砥と仕上げ砥の境をどのあたりと考えるかで、この割合は大きく変わってきてしまうことも考えられるが、実際にどのようなものに使用するかを考えてみた。本地点の金属製品の出土状況とみると、砥石を必要とするものとしては包丁類約29本、小柄約8本が検出されている。砥石が比較的均一に磨耗していることや大名屋敷であることなどを考えると、包丁や小刀、剃刀などを中砥や仕上げ砥を用いて研いだと考えられよう。屋敷地全体では、鎌のような大振りの道具類も使用されたと考えられるが当地点では検出されなかった。大振りの道具類については、金属製品の再利用などの観点からも考えなければいけないだろうが、それらを研いだと考えられるような、湾曲の大きい砥石も検出されなかった。小型の砥石には名前が書かれているものも2点確認され、個人の持ち物として区別されていたことがわかる。

39、40は軽石。表面に若干の擦痕が見られる、垢擦り等として使用されたのであろうか。39はSU64出土。40はSK139出土。上端中央部に穿孔が見られる。紐などを通して使用したものであろう。

41はSU64出土。水晶の玉で中央部に約4mmほどの穴が開けられている。表面はざらざらになっている。袋・巾着・印籠・煙草入れなどの緒を通して口を束ねて締める緒締めであろう。珊瑚・瑪瑙・木・象牙・金属・陶磁器などで作られたものがあり、多くは球形であるが、意匠を凝らしたものも多い。

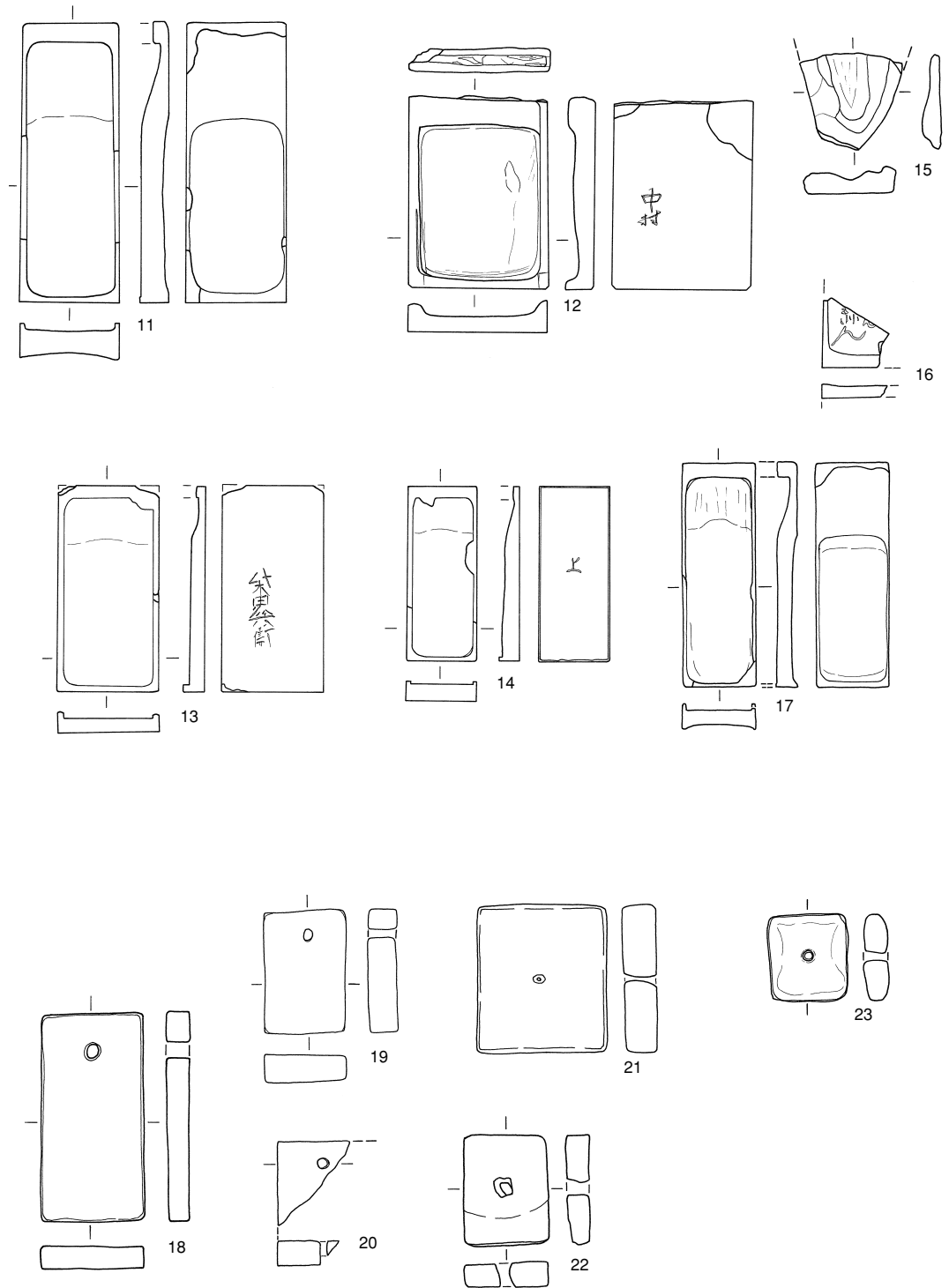
42、43はSK101出土の茶臼である。上臼と下臼であるが、ともに安山岩質で面の径もちかく上下対の物と思われる。かなり細かく割れている。割れ口を見ると外面に近い部分が赤変しており、

火災に伴う熱で割れたものと考えられるが、茶臼などを廃棄する時に意図的に破壊するとの説もあり、その可能性もある。42は上臼である。上縁は欠損している。面の径は約26cmである。挽き目は八分画で1分画の中に溝が10本から13本あり、臼の周縁にまでは達していない。挽き手孔は菱形で、対になる位置に2ヶ穿たれている。台座文様は表面が剥離しており明瞭ではないが、菱形が一重に確認できた。43は下臼である。挽き目は八分画で上臼に比べてかなり目が磨滅している。1分画の中に溝が10本から12本あり、臼の周縁にまでは達していない。同一個体と思われる受け皿部分の破片が検出されている。上臼、下臼ともに面にはほとんどふくみが見られず、扁平である。17世紀の火災により二次焼成を受けている腰白茶壺(TD-15-a)と共伴しており、興味深い。この腰白茶壺は破片のため遺物図版には取り上げられていない。

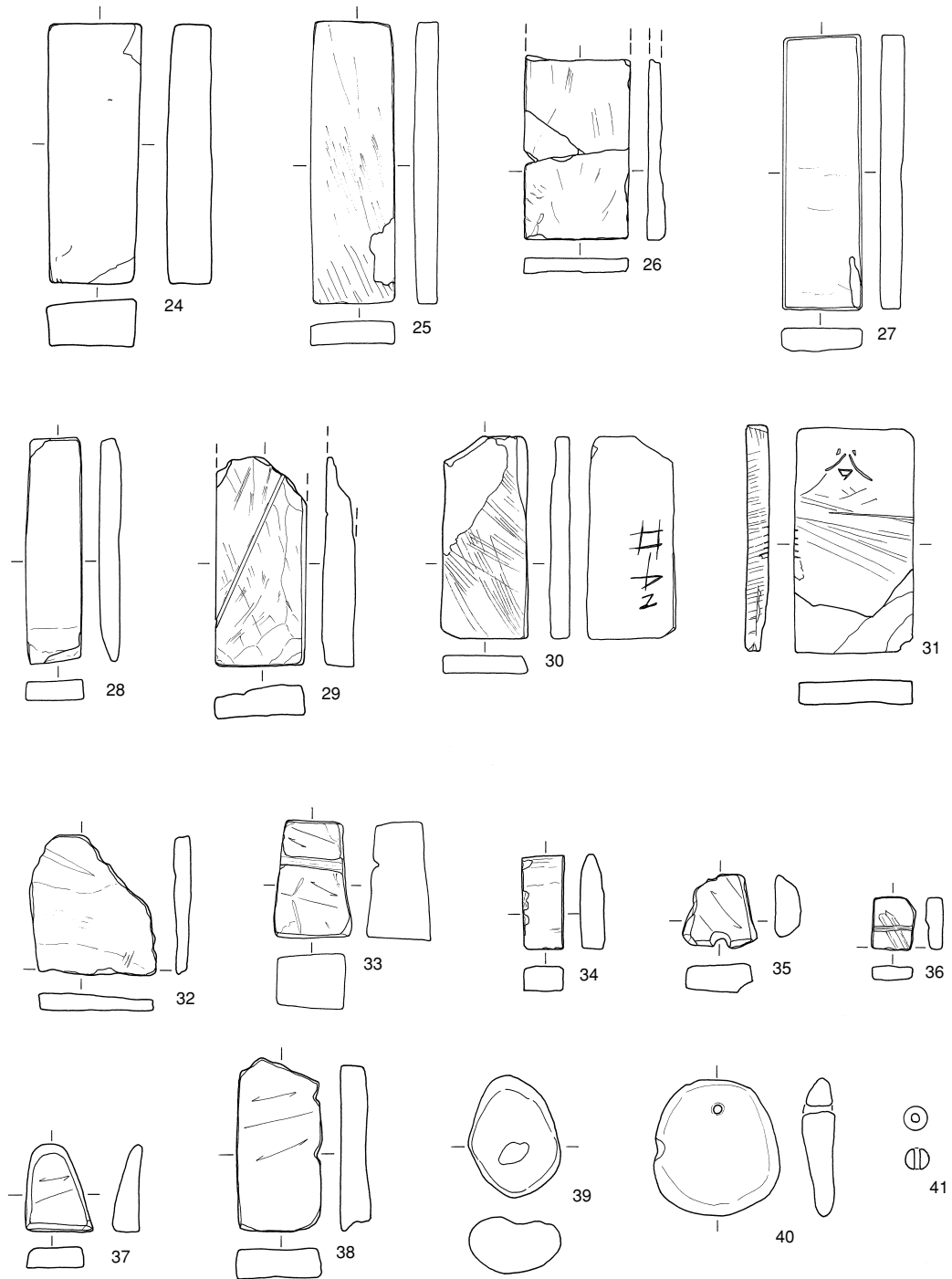


IV-126図 石製品(1) S=1/4

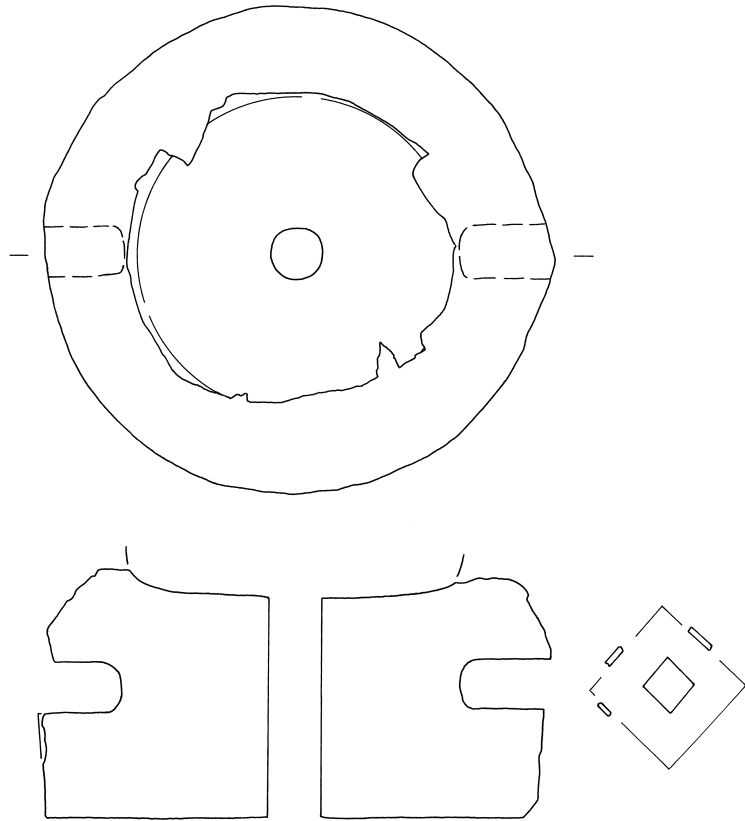
第IV章 出土した遺物



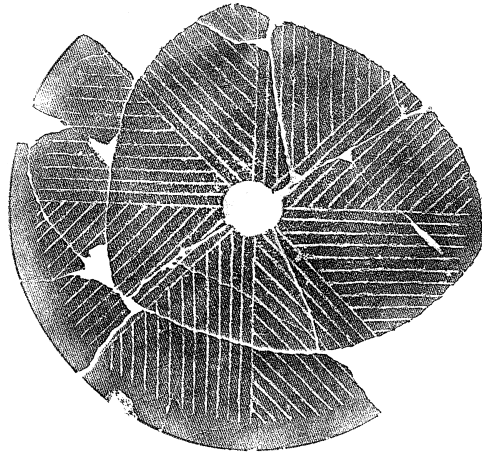
IV-127 図 石製品 (2) S = 1/4



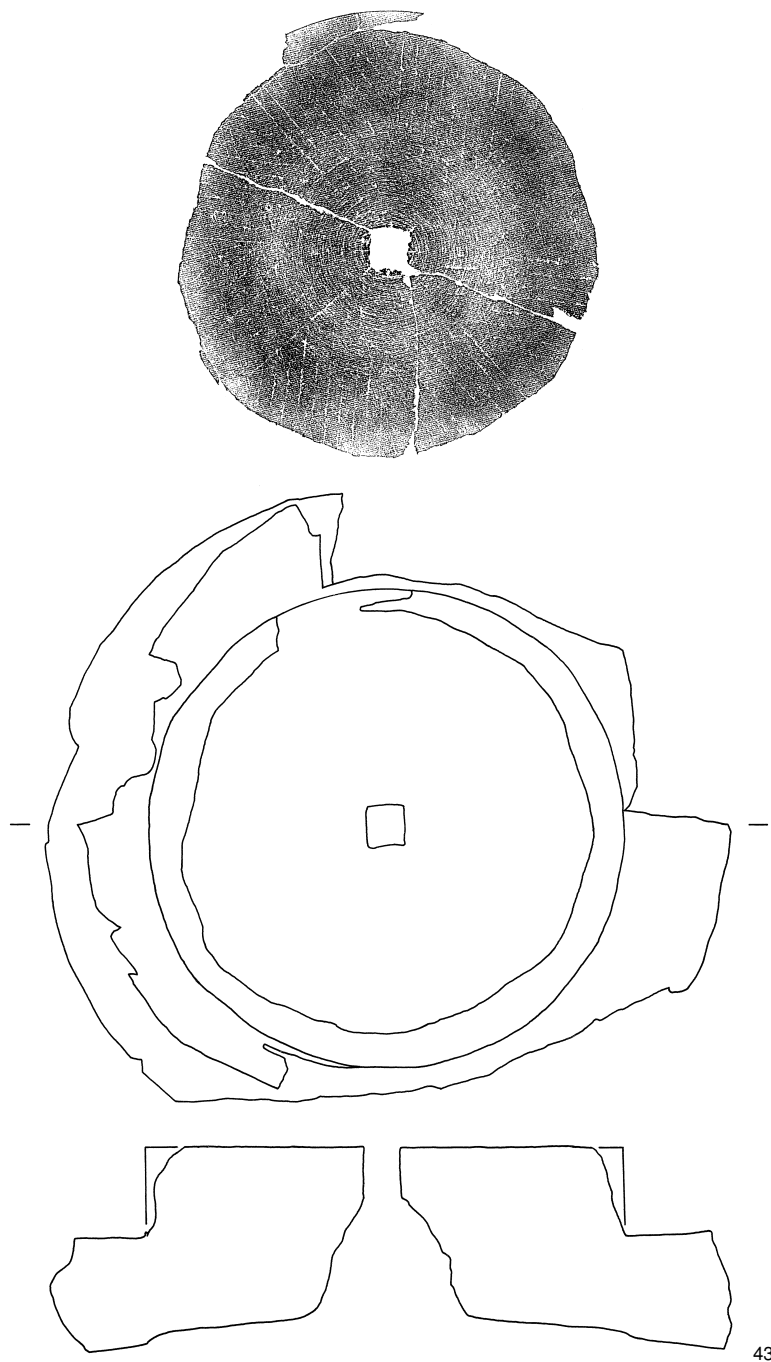
IV-128図 石製品 (3) S = 1/4



42



IV-129 図 石製品 (4) S = 1/40



IV-130 図 石製品 (5) S = 1/4

43

第IV章 出土した遺物

図版No.	出土 遺構	種類	石質	寸法 (cm)			規格	備考	共伴資料の年代	
				長さ	幅	厚さ				
IV-126 図	1	SU11	硯	凝灰岩	(14.6)	7.6	2.6		19c 前	
	2	SK18	硯	粘板岩	12.1	6.1	1.5		V a 期	
	3	SB70	硯	粘板岩	(13.0)	6.5	2.0	四寸×二寸	明治9年	
	4	SK139	硯	粘板岩	11.8	5.4	1.3		IV b 期 (元禄 16 火災)	
	5	SU143	硯	粘板岩	12.9	7.1	1.8		18c 前～中	
	6	SU143	硯	粘板岩	11.0	5.3	1.1		18c 前～中	
	7	SK152	硯	粘板岩	12.1	4.3	1.2	四寸×一寸五分	VI a 期	
	8	SK152	硯	粘板岩	16.3	7.1	2.2		VI a 期	
	9	SK152	硯	粘板岩	15.0	7.1	1.9		江山口 VI a 期	
	10	SK166	硯	粘板岩	16.5	6.1	1.8	五寸五分×二寸	大萩一口 VIII c 期	
IV-127 図	11	SK265・304	硯	粘板岩	16.8	6.0	2.1	五寸五分×二寸		18c 末～19c 初
	12	SU279	硯	粘板岩	11.7	7.4	1.5		中村	V a 期
	13	SK290	硯	粘板岩	12.2	6.1	1.3	四寸×二寸	此木田 久兵衛	V b 期
	14	SK290	硯	粘板岩	10.4	4.2	1.3		上	V b 期
	15	SK361	硯	チャート	(6.0)	(6.2)	(0.9)			17c 中～後
	16	SK392	硯	粘板岩	(3.7)	(4.2)	(0.9)			VIII c 期
	17	SU419	硯	粘板岩	13.4	4.4	1.5	四寸五分×一寸五分		18c 末～19c 前
	18	SK18	温石	砂岩	12.5	6.2	1.2	四寸×二寸	175g	V a 期
	19	SL80	温石	砂岩	7.4	4.9	1.6	二寸五分×一寸五分	130g	19c
	20	SK81	温石	片麻岩	(5.0)	(4.5)	1.4			VIII b 期
	21	SK139	温石	瓦質	8.7	7.4	1.7	三寸×二寸五分	200g	IV b 期 (元禄 16 火災)
	22	SK139	温石	土師質	6.7	5.1	1.5	二寸×一寸五分	65g	IV b 期 (元禄 16 火災)
	23	SK152	温石(?)	瓦質	5.2	4.8	1.7	一寸五分×一寸五分	50g	VI a 期

図版No.	出土 遺構	種類	石質	寸法 (cm)			重量 (g)	備考	共伴資料の年代	
				長さ	幅	厚さ				
IV-128 図	24	SU2	砥石 中砥	チャート	15.0	5.2	2.8	454		17c 末 (元禄 16 火災)
	25	SU61	砥石 中砥	粘板岩	16.3	4.5	1.4	221		18c 前
	26	SB70	砥石 仕上砥	粘板岩	(10.6)	6.0	1.0	98		明治9年
	27	SK139	砥石 仕上砥	泥岩	15.9	4.8	1.3	205		IV b 期 (元禄 16 火災)
	28	SK139	砥石 仕上砥	泥岩	13.2	3.3	1.2	100		IV b 期 (元禄 16 火災)
	29	SU146	砥石 中砥	泥岩	(12.3)	5.2	2.0	200		18c 前
	30	SK175	砥石 仕上砥	泥岩	8.6	3.7	0.8	54	井吉?	18c 後
	31	SE324	砥石 中砥	チャート	9.7	5.1	1.0	115	谷	18c 前と 19c 前
	32	SU2	砥石	粘板岩	(7.9)	6.8	1.0	90		17c 末 (元禄 16 火災)
	33	SK22	砥石	泥岩	6.9	4.5	3.6	183		18c 後～19c 初
	34	SK116	砥石	粘板岩	5.3	2.5	1.5	34		19c
	35	SK137	砥石	泥岩	4.4	4.2	1.6	35		V b 期
	36	SK174	砥石	泥岩	3.1	2.5	1.0	15		VI a 期
	37	SU230	砥石	砂岩	5.1	3.9	1.7	36		18c 前
	38	SU230	砥石	泥岩	10.0	5.0	1.8	130		18c 前
	39	SU64	擦石	軽石	7.3	5.2	3.3	40		18c 前
	40	SK139	擦石	軽石	8.0	7.0	1.9	32		IV b 期 (元禄 16 火災)
	41	SU64	飾り玉	水晶		1.35	1.09			18c 前

図版No.	遺構	種類	石質	面径(cm)	芯穴径(cm)	高さ(cm)	分画/溝	備考	共伴資料の年代	
IV-129 図	42	SK101	茶白 上白	安山岩質	26.0	3.0	(13.0)	8/10～13	芯穴は丸	17c 後 (天和 2 火災)
IV-130 図	43	SK101	茶白 下白	安山岩質	26.0	2.0	10.6	8/10～12	芯穴は四角	17c 後 (天和 2 火災)

IV-14表 石製品観察表

第8節 骨角・ガラス製品(IV-131図、IV-15表)

本遺跡から出土した骨角製品は32点である。多くは筭や簪と櫛払いなどの装飾品と、箸と思われるものである。また製品ではないが、鹿の角が3点出土している(写真図版31～33)。ガラス製品は52点出土している。多くは装飾品であったが、近代の薬瓶やインク瓶等も出土している。

SU1 (IV-131図1～3)

骨角製品4点、ガラス製品1点が出土している。

1～3は骨角製品である。1は、断面が円形を呈しているものである。先端は鋭く尖り、中央部から反っている。他にも同様のものが出土している。箸と同様の形態であるが、簪と報告されている例が多い。2は筭である。中央部から上端にかけ扁平に広がる。中央部の断面は楕円形を呈する。尖端部は鋭く尖っており断面は丸みのある三角形を呈する。丁寧に磨き調整している。鎌倉市長谷小路南遺跡(職業集団の集団住居)から同様の筭が出土しており、鹿の下肢骨を加工したものと報告している。また、草戸千軒遺跡からも鹿の下肢骨の筭が出土している。3は筭か。上端部は丸く加工している。同外面に無数の傷が認められる。ガラス製品には、断面が薄い楕円形を呈する簪と思われるものが出土している。共伴している陶磁器は19世紀前半に位置付けられるものである。

SK21 (IV-131図4～6)

ガラス製の簪3点が出土している。

4は大きな耳搔きがついた肩を持つ簪で、無色で不透明である。5は断面がやや丸みのある方形を呈する筭で、無色で不透明である。6は管状になっている楕円形の製品である。無色不透明なガラスである。ガラス製の簪で中に水を入れた変わり簪もあることから、簪の可能性もある。共伴している陶磁器は19世紀前～中葉に位置付けられるものである。

SU24 (IV-131図7)

骨角製品1点が出土している。

7は断面が円形を呈し、下方部に向かい若干細くなっているものである。1と同様である。共伴している陶磁器は18世紀後半に位置付けられるものである。

SU29 (IV-131図8)

骨角製品1点出土している。

8は骨角製の櫛払いである。植毛孔は3列で孔の深さは4～5mm程である。柄の端は薄い篋状である。植毛付近は淡緑色である。変色によるものか、意図的なものであるか判断し難い。しかし本地点から5点出土しているが、いずれも孔付近は淡緑色をしていることから意図的な可能性が高い。共伴資料の陶磁器は二次的に熱を受けたもので17世紀後半～18世紀初頭に位置付けられる。

SD62 (IV-131図9～11)

骨角製品2点、ガラス製品は6点出土している。

9は大きな耳搔きがついた肩を持つ骨角製の簪である。胴上部に径2mmの孔が穿たれている。孔は貫通していないものである。飾りを挿した孔であろうか。耳搔きについて、『守貞謄稿』に「耳搔きの円なるなものは京阪にて江戸耳と云う。京阪は撥形をしたものは撥耳と云う」とあることか

ら、9は江戸耳であろう。共伴している他の骨角製品は、断面が6mm角の正方形を呈する製品が出土している。10は三日月形をした不透明なガラス製品である。簪の飾りの一部か。11は褐色で透明な不定形な製品である。両端が欠損しているため原形は不明である。他のガラス製品5点は無色透明で、楕円形を呈するもの、2本をはり合わせたもの、5本を撚ったもの、細い棒状のものが出土している。共伴している陶磁器は19世紀前～中葉に位置付けられるものである。

SK81 (IV-131 図12～15)

ガラス製の簪が11点出土している。

12は透明な中に黄色と緑を螺旋状に施した、アルカリガラス製の簪である。同様のものが都内の溜池遺跡のB-9から出土している。また、長崎市の桜町遺跡からも出土しており、比重測定の結果ソーダ石灰ガラスで中国産と報告している。本地点のガラス製簪類については、東京大学総合研究博物館の吉田邦夫氏、新潟県立歴史博物館の西田泰民氏に依頼し分析を行っているため結果を待ちたい。13は耳搔きと肩を持つ透明な簪で、中には青紫色の2本線で文様を施している。肩部は甘く捻っている。14は青白色の透明の簪である。上部はやや「く」の字に折り茜色した飾りを貼り付けている、変わり簪である。断面は円形を呈する。15は細い棒状のものを2本貼り合わせた青色の簪である。他のガラス製品は、断面が6.0×4.0mmの長方形を呈し、黄褐色をした簪、同色で断面が3.0×2.5mm角の細いものや、断面が7.0×4.0mmの長方形を呈する筭2本、5本を捻ったもの、また透明の瓶が出土している。共伴している陶磁器は東大編年Ⅷb期である。

SE127 (IV-131 図16)

骨角製品3点が出土している。

16は四隅を面取りをしたように成形された筭である。上部と下部の幅は異なり、表面は黒褐色、裏面は褐色を呈している。他のものには、小型の櫛払い片や棒状の製品が出土している。共伴した磁器製品は輸入コバルトを使用したものが含まれている、19世紀～明治初頭に位置付けられるものである。

SK137 (IV-131 図17)

骨角製品2点が出土している。

17は筭で、先述したSU1遺構の3と同様のものである。3より器厚は薄い。共伴している陶磁器は東大編年Ⅴb期である。

SK144 (IV-131 図18)

骨角製品2点が出土している。

18は小秤量の千木秤である。目盛りは三形態のものが彫られている。共伴した他のものは、細かい歯を持った櫛片であった。

SK152 (写真31)

骨角製品4点、ガラス製品1点が出土している。

鹿の角は長さ285.0mm×最大幅50.0mmである。角の分岐部まで切断されたものである。角の切断面は2本の角部で各1ヶ所、角冠部の脇を3ヶ所、切断面は計5ヶ所であった。他の骨角製品は、断面が円形を呈するものが3点出土している。ガラス製品は透明な瓶の底部である。共伴している陶磁器は東大編年Ⅵa期。

SK166 (IV-131 図19～21)

骨角製品3点、ガラス製品3点が出土している。

19は骨角製品で、下方部に向かい細くなる。20は骨角製品で、残存している上端部は「∩」形を呈する細い簪と思われる。象牙色をしたもので断面は楕円形を呈する。他の骨角製品は、櫛払いである。21はガラス製の玉簪で無色透明である。22は円形を呈した扁平のガラス製品である。中央部がやや厚くなっている。レンズとしての加工はない。同様のものが東大構内の御殿下記念館地点の136号遺構と包含層から出土している。136号遺構は18世紀前～中葉の遺構である。他のものは、断面が円形を呈するガラスの小片である。共伴している陶磁器は東大編年のⅧc期である。

SK167 (IV-131 図23)

ガラス製品が1点出土している。

23は透明で目盛りのない薬瓶である。胴下部に「醫科大學模範藥局」と陽刻されている。蓋は栓方式である。明治7年の東京医学校時代のものであろうか。共伴している陶磁器は17世紀～近代のものを含んでいる。木の移植穴である。

SK265・304 (IV-131 図24)

骨角製品が1点、ガラス製瓶片が2点出土している。

24は筭と思われる。断面は方形を呈し、図の上端部裏面は舳先状に成形している。共伴しているものは、黄褐色と無色の透明の瓶の小片である。共伴している陶磁器は18世紀末～19世紀初頭に位置付けられるものである。

SK290 (IV-131 図25、26)

骨角製品が2点出土している。

2点とも櫛払いである。25は、植毛孔が3列である。孔付近は表裏淡緑色である。26は植毛孔が4列である。孔は表裏淡緑色である。柄は平坦な筭状である。本地点以外の江戸遺跡から多く出土するもので、大小様々なものがあり、植毛孔が1列～4列のものが確認されている。共伴している陶磁器は東大編年Ⅴb期である。

SK361 (写真32)

鹿の角が1点出土している。

角座部を残した鹿の角である。長さは210.0mm×最大幅62.0mmである。切断面は分岐した2本の角部である。上部の角の切断面中央に孔を穿っている。未調整の孔である。

SK392 (IV-131 図27～30)

骨角製品3点、ガラス製品13点が出土している。

27は江戸耳の耳搔きが付いた骨角製の簪である。肩部に三ツ柏が彫られている。柏紋の中央は孔が穿たれている。足先欠損。28は細身の骨角製の簪である。他の骨角製品には、上端部に孔が穿たれている針状のものが出土している。29はガラス製の角柱状の製品で筭と思われる。30は大きな玉をつけた玉簪である。他のガラス製品には、褐色で細い管状を呈するもの、黄褐色で断面は扁平な楕円形を呈する筭、断面が正方形を呈するもの、2本を撚ったものや、透明で棒状のものが複数出土している。共伴している陶磁器は東大編年Ⅷc期である。

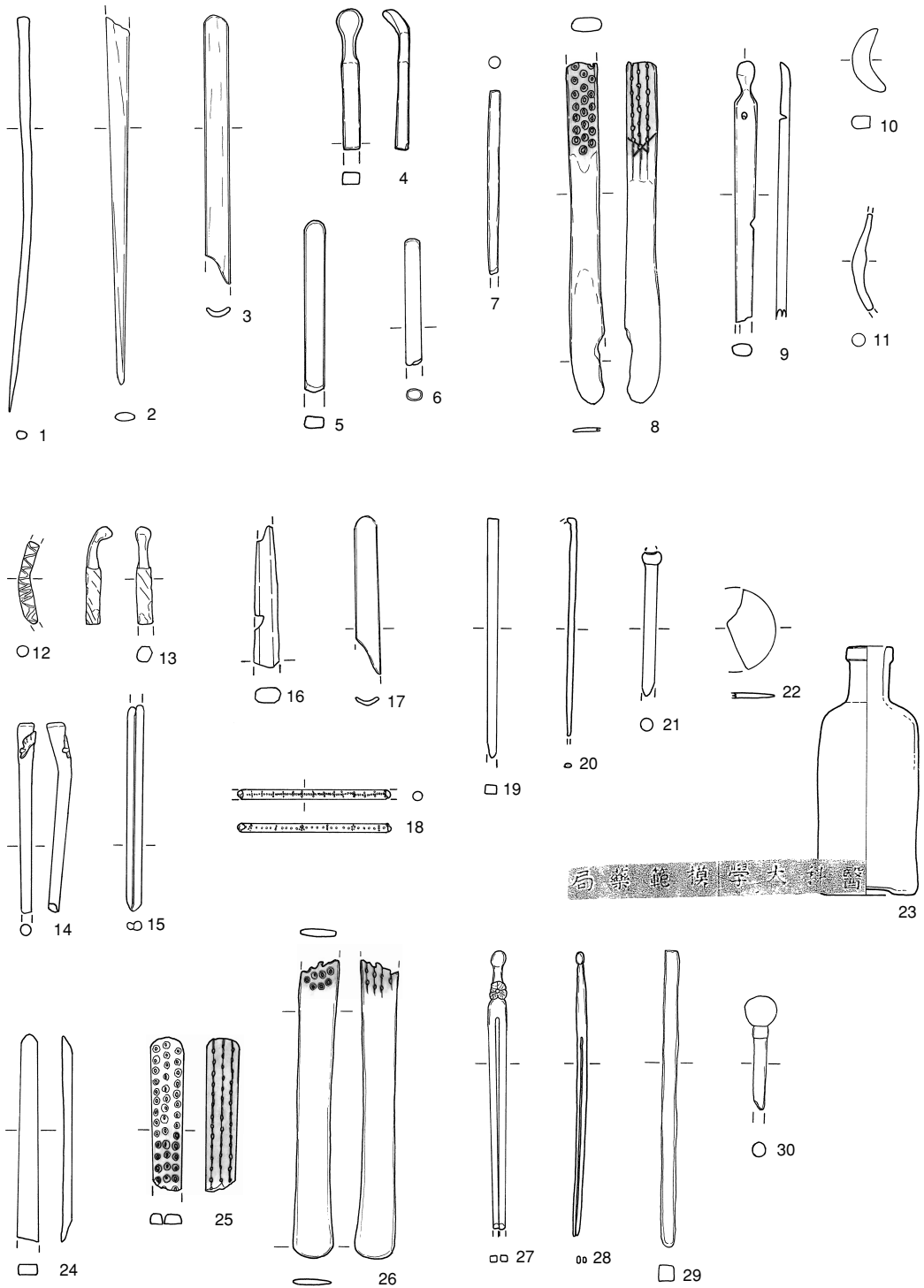
遺構外(写真33)

骨角製品2点、ガラス製品8点が出土している。

鹿の角は、長さ11.5×最大幅5.0cmのもので、断面は楕円形を呈し切断面は2ヶ所である。骨角製品は断面が楕円形を呈する筍と思われるものである。先端は削り痕と擦痕がみられる。ガラス製品は薬瓶で「東京醫科大學藥局」と陽刻されているものである。また、「君の代／登録商標」と囟柄が陽刻された頭髮染料剤瓶、赤い固形物が入った小形のインク瓶、おそらく赤インク瓶であろう。他には青色の透明瓶、乳白色の栓、焼け爛れた容器が出土している。瓶の総てに多数の気泡が認められる。

図版 No.	出土 遺構	材質	器種	寸法 (mm)			特 徴	共伴資料の年代
				長さ	幅	径		
1	SU1	骨角	筍	176.0	5.0		反りながら細くなる。足先鋭い	19c 前
2	SU1	骨角	筍か	(161.0)	(9.0)		頭部平坦	19c 前
3	SU1	骨角	筍か	(119.0)	10.0		断面U字形	19c 前
4	SK21	鉛ガラス	簪	(62.0)	7.0		不透明・耳掻き形	19c 前～中
5	SK21	鉛ガラス	筍か	(75.0)	8.0		不透明	19c 前～中
6	SK21	鉛ガラス	不明	(56.0)	5.0		管状・鉛ガラス・不透明	19c 前～中
7	SU24	骨角	筍	(80.0)	4.0		残部中央部やや膨らみ下方部に向かい細くなる	18c 後
8	SU29	骨角	櫛払	(152.0)	13.0		植毛孔3列・孔付近淡緑色	17c 後～18c 初
9	SD62	骨角	簪	(117.0)	(10.5)		耳掻き簪	19c 前～中
10	SD62	鉛ガラス	不明	(29.0)	(8.0)		不透明	19c 前～中
11	SD62	アルカリガラス	不明	(44.0)	(6.0)		茶色透明	19c 前～中
12	SK81	アルカリガラス	簪	(37.0)	(7.0)		螺旋状に2色で文様/透明	VII b 期
13	SK81	鉛ガラス	簪	(42.0)	(7.0)		耳掻き簪/透明	VII b 期
14	SK81	アルカリガラス	簪	(84.0)	(7.0)		青白色/上部は茜色で文様を貼付	VII b 期
15	SK81	鉛ガラス	簪	(91.0)	(6.0)		2本の青色ガラスを合わせている/半透明	VII b 期
16	SE127	骨角	筍か	(62.0)	(12.0)		黒褐色	19c～明治
17	SK137	骨角	筍か	(70.0)	10.0		内湾している	V b 期
18	SK144	骨角	竿秤	(70.0)	(4.5)		3種類の目盛りを付す/小秤量の千木秤か	
19	SK166	骨角	筍?	(98.0)	(2.0)		角形の筍か下方部に向かい細くなる	VII c 期
20	SK166	骨角	簪	(108.0)	(5.0)		頭部、足先欠損	VII c 期
21	SK166	鉛ガラス	簪	(65.0)	(5.0)		頭部は玉状である	VII c 期
22	SK166	鉛ガラス	不明		(22.5)		円状	VII c 期
23	SK167	ガラス	薬瓶	111.0	口径22.0		胴下部に陽刻「醫科大學模範藥局」/透明	17c～近代
24	SK265・304	骨角	筍か	(93.0)	(9.0)		先端部は削りを入れ調整	18c 末～19c 初
25	SK290	骨角	櫛払い	(69.0)	(14.0)		植毛孔3列・孔付近淡緑色	V b 期
26	SK290	骨角	櫛払い	(133.0)	(17.0)		植毛孔4列・孔付近淡緑色	V b 期
27	SK392	骨角	簪	(125.0)	7.5		耳掻き簪・足先欠損	VII c 期
28	SK392	骨角	簪	(126.0)	5.4		耳掻き簪・松葉状足先欠損	VII c 期
29	SK392	鉛ガラス	筍か	132.0	7.0		半透明	VII c 期
30	SK392	鉛ガラス	簪	(48.0)	6.0		玉簪	VII c 期
写真31	SK152	角	鹿	(285.0)	(50.0)		カット面5ヶ所・断面は右細楕円形	VI a 期
写真32	SK361	角	鹿	(210.0)	(52.0)		カット面2ヶ所・断面隅丸三角形・頂部、深8mmの孔	17c 中～後
写真33	遺構外	角	鹿	(115.0)	(50.0)		カット2ヶ所	

IV-15表 骨角・ガラス製品観察表



IV-131 図 骨角・ガラス製品 S = 1/3

第IV章 出土した遺物

おわりに

外来診療棟の調査が行われたのは、今からもう15年も前の平成2～3年になる。調査時に誕生した新生児がもう高校受験を迎えると思うと、あらためて多くの月日が流れたことを実感し、ここまで刊行を遅延させてきた自分たちの緩行に弁解の余地もない。

その間、本書冒頭でも触れたように、病院地区の再開発は進み、看護師宿舎地点、病棟地点、第2中央診療棟地点と調査が相次いだ。病院地区以外でもバブル後の不況対策に投じられた公共事業費により、キャンパス内で発掘調査が行われない日がほとんどないと言っても過言ではなかった。駒場リサーチキャンパスで行っている整理作業が進み、いざ原稿をと遺物、遺構図面に向かうたびに、新たな発掘調査が始まり、執筆作業が棚上げになったこともしばしばあった。だが、その調査に忙殺されている現状を盾にして、報告書刊行の遅れを笑ってごまかしていたのも事実である。

自分たちの怠慢を逆手にとって開き直るわけではないが、刊行までに時間を要したことによって、本地点を取り巻く状況も大きく変わってきた。本文でも触れているが、本地点を南北に延びるSA155は、天和3年から文政12年までの加賀藩邸と大聖寺藩邸の境界施設である。本遺構が境界施設に対比されるであろうことは、中央診療棟地点の調査成果より、本郷邸東南角に対比されるたんぼぼ保育園東南角からの計測で推測されたが、病棟地点の調査によって大聖寺藩邸東境界(SD1)とそれに続く道状遺構(富山藩邸表門に続く道)が検出されたことにより、病棟地点SD1と本地点SA155間の距離が、記録に認められる距離とほぼ一致することが明らかになった。このように隣接調査地点からの情報を活用することができ、本地点を再構成するにあたって、多くの有機的な情報を得ることができた。いいかえれば、よく逃げ言葉として用いられる「資料増加に期待したい」の一言を利用できない状況に追い込まれたということであり、執筆者にもかなり厳しい気持ちで取り組む姿勢が求められた。

本地点は本郷邸にほぼすっぽりと収まっている本郷キャンパスの調査のなかにあつて珍しく藩邸の境界域の調査となった。調査地点のほぼ中央を南北に延びるSA155がその施設に該当する。SA155の西側は加賀藩邸の東縁部分で、ほぼ一貫して「御作事所」が設置されていた場所にあたる。該所は病院建物の攪乱により遺存状況は悪く、遺構・遺物からそれに関わるものを特定することはできなかった。しかし、SX200という生産活動を窺わせる遺構の存在が「御作事所」を彷彿させる唯一の手掛かりであった。

18世紀後半には「御作事所」の南側が「明地」表記になり、実際には土採りと遺物廃棄の繰り返しの採土坑群が形成された場所であったことは、藩邸内で他の空閑地や、土地利用のあり方を推考する上で重要な位置付けになるものと評価される。

文政12年以降の構築と推定されるSD62は、その構造特徴から御殿空間と詰人空間の境界施設であると推定される。文化年間の江戸藩邸を書き表した絵図では、SD62が位置する区域は詰人空間の中に該当することから、文政12年の新広式建設に伴い御殿空間が西側へ拡張され、SD62が構築されたものと推定される。よって、SD62東側に広がる遺構群は御殿空間に属する遺構として

考えられる。SD62 東側には溝状遺構、厠遺構などが検出されたが、厠遺構 SL79、SL80 からの出土遺物に笄、簪など女性装身具が含まれていたことが本遺構周辺の居住者を推定する手がかりとなり、新広式建設に伴い奥御殿域が拡張され、それに伴い文化年間の絵図に観られる詰人空間域の一部が御殿空間に取り込まれたことが明らかになった。

本地点は、加賀藩邸、大聖寺藩邸の境界部分にあり、両藩邸ともにその奥部分に該当する区域で、遺構としては役所関連遺構、詰人長屋関連遺構、空闲地利用としての採土坑などの施設が検出され、日常的な、あるいは火災などの災害時に伴う廃棄行為が廃絶された遺構を利用して連綿と行われていた。SK152、SK290 で検出された多量の焼塩壺廃棄事例のように、明らかに詰人空間以外で使用されたものが大形土坑に運ばれ廃棄されたケースもあるが、地下室や小形土坑から検出された遺物は、他の調査地点での成果との比較から、詰人空間で居住する勤番武士の日常生活品が主体を占めていることが明らかになった。これは陶磁器に限らず、唯一木製品が比較的良好な状態で出土した SK174 の漆器についても同様であることが北野氏の論考で明らかになっている。

一方で、本地点内で土採り行為が繰り返されたことによる副産物でもある大形土坑に対して盛んな廃棄行為が行われており、先述したように焼塩壺の多量廃棄など、本地点近隣生活者からの廃棄行為以外にも、藩邸内におけるゴミ集積・廃棄場として位置付けられていたことも考えられ、藩邸内における日常的ゴミ処理システムを考える上でも良好な資料の一つと位置付けられよう。

大聖寺藩邸の調査といえば、本地点以前に中央診療棟地点がある（以下、中診と略す）。中診の調査は、大名藩邸の大規模面積での本格調査のなか、遺物組成、土地利用、基準尺度など多くの成果を公にした。そのなかに古九谷問題もあった。天和 2（1682）年の火災による一括廃棄資料が検出された L32-1。その組成はハレの場での道具を彷彿させる該期の最上質肥前磁器と舶載磁器が主体を占めていた。国産磁器のなかにいわゆる「古九谷」の色絵磁器が含まれており、出土地点が大聖寺藩邸であったことも重なり、「古九谷論争」に火を付けた。同時期の火災廃棄資料である F27-1、H29-1 からは L32-1 とは明らかに様相が異なる色絵磁器が 1 点検出された。さらにその色絵磁器と質感、素地が共通する染付製品が 18 世紀前葉の廃棄遺構である F33-3 から検出され、その産地同定のため、生産地出土資料とともに、化学分析を行った。その結果、L32-1 より出土した色絵磁器は全て肥前産であることが判明し、いわゆる「古九谷」様式の製品が肥前産であることの証左となった。しかし、F27-1、H29-1 から出土した色絵磁器と F33-3 から出土した染付は山中の九谷古窯の素地と共通することが判明し、九谷産の色絵磁器の解明に大きな一歩を提供した資料である。

本地点においても大聖寺藩邸が含まれていることから九谷古窯製品出土の期待がもたれた。結果、色絵磁器こそ検出されなかったが、染付小坏が 3 点（うち 2 点は同一意匠で揃いの可能性がある）が出土し、化学分析を奈良文化財研究所へ依頼した結果、九谷産の可能性が極めて高い結果が得られた。その後調査された病棟地点では中診 F33-3 資料と同一個体が 1 点のみ、第 2 中央診療棟地点は未整理なので断言できないが、調査段階では確認していない。このように大聖寺藩邸の約 8 割を調査したにもかかわらず、九谷産磁器はわずか 5 点しか検出されなかった。もちろん加賀藩邸、

富山藩邸の大聖寺藩邸以外では再興九谷を除き、全く出土していない。他の江戸遺跡ではもつてのほかである。山中の九谷古窯跡の規模からも大量生産は望めず、国元を中心にごく限られた分布圏を有していたにすぎないことが理解される。

SK18から出土した徳利内容物についてはパリノ・サーヴェイから興味深い結果が報告された。この徳利は瀬戸・美濃産の五合徳利で大聖寺藩邸北西隅に位置するSK18の覆土中より出土した。口縁にはしっかりと木栓が差し込まれており、徳利内は密閉状態にちかかった。取り上げ、ゆすってみると内容物が鈍く動く音と感触が手に伝わった。その段階で栓を抜き取り、中を確認すると素人目にも油脂と判断できる半固形状の物質が確認された。この物質の成分分析をパリノ・サーヴェイに依頼した。その結果、金属石鹼に近い物質であると分析された。徳利に入っていることより本来は液体であった可能性が高い。そのため照明用の魚油や植物油を想定していたので期待を裏切られた。あいにく大聖寺藩邸には該期の絵図は存在しない。また共伴する出土遺物の組成からも用途を推定できるものはなく、現段階ではこの物質の用途・使用者を復元することは困難であり、江戸時代の油脂工業技術の研究も含めて、今後の課題としたい。

大名藩邸における出土遺物は、同一要因によって廃棄された一括資料でも、廃棄された場所が異なる一括資料は、所有(使用)者が異なることによって、組成が大きく変容するケースがある。使用者の身分による質の差や、ハレの場と、ケの場の用途差による法量差、質差などがそこに含まれる。堀内論考で述べられている磁器対陶器の組成比、食膳具、調理具などにみる器種組成比に現れている。さらに、それが廃棄された場所が使用者の居住区に近接する場合と、何らかの要因によって運び込まれてきた場合が存在する。よって、近接する廃棄土坑出土一括資料といえども、全くそこに含まれる様相が異なる場合がある。このように広範囲の大名藩邸の調査では、一遺構からの出土資料が、その藩邸の様相を物語っているとは到底言い難く、「群盲像を撫でる」の喩えそのものであり、慎重な扱いに留意しなければならない。下屋敷など遺物量の少ない大名藩邸では特に注意が必要である。

文末であるが、実際に調査に携わった株式会社三浦工業の方々、長期にわたった整理作業を支えて下さった当調査室事務補佐員をはじめ、各方面から支援いただいた方々に感謝の意を表したい。

参考文献

【参考文献】

- 足立順司 1994 「消費地出土の初山・志戸呂焼」『地域と考古学』 向坂綱二先生遷暦記念論集
- 有田町史編纂委員会 1988 『有田町史 古窯編』
- 石川県図書館協会 1972 『景周先生小著集』
- 五十嵐彰 1988 「煙管」『芝公園一丁目増上寺子院群』 港区教育委員会
- 稲垣正宏 2001 「曆茶碗研究事始」『みしま』 東海道400年祭特別展図録
- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房
- 江戸陶磁土器研究グループ 1992 『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ』
- 江戸陶磁土器研究グループ 1996 『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』
- 大成可乃 2000 「やきもの考」東京大学コレクションX『加賀殿再訪』 東京大学出版会
- 小川貴司 1979 「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』26-1
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社
- 大橋康二 1990 「柿右衛門古窯と17世紀後半の銘款」『盛期伊万里の美』古伊万里シリーズⅠ
- 大橋康二 1994 『古伊万里の文様』理工学社
- 勝 海舟 1868 『吹塵録』（『勝海舟全集第3、4巻』原書房所収）
- 加藤唐九郎編 1972 『原色陶器大辞典』淡光社
- 金箱文夫 1984 「近世の釘」『物質文化』43
- 喜田川守貞 1853 『守貞謄稿』（朝倉治彦・柏川修一編 1992『守貞謄稿』東京堂出版、所収）
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- 九州近世陶磁学会 2001 『国内出土の肥前陶磁 東日本の流通をさぐる』第11回九州近世陶磁学会資料
- 九州近世陶磁学会 2002 『国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる』第12回九州近世陶磁学会資料
- 久保智康 1999 「近世・中世の鏡」『日本の美術』3
- 古泉 弘 1979 「江戸の出土下駄」『物質文化』32
- 古泉 弘 2002 『地下から現れた江戸』教育出版
- 後藤順一 1996 「上水施設の釘に関する一考察」『汐留遺跡』汐留遺跡調査会
- 小林謙一 1994 「江戸在地系土器生産の成立に関する予察」『考古学研究』41-2
- 小林謙一 2003 「近世瓦質土師質火鉢・焔炉類の生産・流通と使用—東日本を中心に—」『四国と周辺の土器Ⅱ』第5回四国城下町研究会
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1998 『柴田コレクションⅥ』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 2003 『柴田コレクション総目録』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1999 『柿右衛門—その様式の全容』
- 嶋谷和彦 1994 「「中世の貨幣」—中世都市・堺出土の模鑄銭鑄型—」『方泉處』7号
- 白神典之 1992 「堺播鉢考」『東洋陶磁』第19号
- 新宿区厚生部遺跡調査会 1992 「細工町遺跡別冊2 細工町遺跡の木製品分類（兼凡例）」『細工町遺跡』
- 鈴木本章 1989 「遺跡の層序と地質学的調査・分析」『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』
- 瀬戸市教育委員会 1990 『尾呂』
- 瀬戸市教育委員会・(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 1993 『経塚山西窯跡』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第5集
- 瀬戸市教育委員会 1992 『東本町A窯跡』
- 瀬戸市史編纂委員会 1998 『瀬戸市史』陶磁史篇6
- 大聖寺藩史編纂委員会編 1938 『大聖寺藩史』
- 多治見市教育委員会 1993 『平野西窯』多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第40号

参考文献

- 多治見市・(財)岐阜県陶磁資料館 1994 『江戸・明治・大正期の美濃の上絵展』
- 寺島良安 1712 『和漢三才図会』1991(谷川健一編 1980『日本庶民生活史料集成』第28巻 三一書房所収)
- 東京大学遺跡調査室 1989 『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』 東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1
- 東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』 東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2
- 東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』 東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3
- 東京大学総合研究資料館 1988 『東京大学本郷キャンパスの百年』
- 「東京大学の百年」編集委員会 1977 『東京大学の百年 1877-1977』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』 東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997 『東京大学本郷構内遺跡調査研究年報』1
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学本郷構内遺跡調査研究年報』2
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2002 『東京大学本郷構内遺跡調査研究年報』3
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 『東京大学本郷構内遺跡調査研究年報』4
- 東京都埋蔵文化財調査センター 2001 『尾張藩上屋敷跡遺跡VI』
- 東京都港区教育委員会 1988 『増上寺子院群』
- 都内遺跡調査会 1996 『溜池遺跡』
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 2000 『桜町遺跡』
- 長佐古真也 1993 「『受付き灯明皿』にみる生産と流通」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』12
- 仲野泰裕 1989 「江戸時代の信楽焼」『愛知県陶磁資料館研究紀要』8
- 成瀬晃司 1994 「江戸藩邸の地下空間－東京大学本郷構内の遺跡を例に－」『武家屋敷－空間と社会』山川出版社
- 野崎 進 1991 「(2)和釘」『神田上水石垣遺構発掘調査報告書』 文京区神田上水遺跡調査会
- 長谷小路南遺跡発掘調査団 1992 『鎌倉市長谷小路南遺跡』
- 服部 郁 1994 「近世瀬戸窯における磁器生産の開始と展開」『研究紀要』第2輯 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 原 祐一 1999 「東京大学本郷構内の遺跡出土木製品1 工学部1号館地点出土の漆椀」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
- 原 祐一 2001 「江戸時代の遺跡から4 下駄」『事典 しらべる江戸時代』 柏書房
- 藤沢良祐 1988 「本業焼の研究(2)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VII
- 藤沢良祐 1989 「本業焼の研究(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VIII
- 藤沢良祐 1998 「近世瀬戸磁器編年の再検討」『榑崎彰一先生古稀記念論文集』 真陽社
- 藤本 強 1990 『埋もれた江戸－東大の地下の大名屋敷』 平凡社
- 星 梓 1991 「江戸遺跡における丹波播鉢覚書」『貝塚』45
- 細川 義 1990 「加賀藩本郷邸の全体図について」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』 東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4
- 堀内秀樹 1992 「『備前系統縮め播鉢』の系譜」『東京考古』10
- 堀内秀樹・坂野貞子 1996 「江戸遺跡出土の18・19世紀の輸入陶磁器」『東京考古』14
- 瑞浪陶磁資料館 1994 『研究紀要』第6号

参 考 文 献

- 両角まり 1996 「内耳鍋から焙烙へ」『考古学研究』42-4
安田善三郎 1916 『釘』
矢部良明編 2002 『角川 日本陶磁大辞典』 角川書店